

# 上信越自動車道

## 埋蔵文化財発掘調査報告書21

—上田市内・坂城町内—

おひのき ななつづかこふんぐん そめやだいじょうり じんばづかこふん  
大日ノ木 七ツ塚古墳群 染屋台条里 陣馬塚古墳  
みやだいら うえはらこふんぐん やまざきこふんぐん やまざき やまざききた  
宮平 上原古墳群 山崎古墳群 山崎 山崎北  
ひがしつづかこふんぐん どいのいりようせき かのんだいらきょうづか こやませいてつ  
東平古墳群 土井ノ入窯跡 観音平経塚 小山製鉄

1999

日本道路公団  
長野県教育委員会  
長野県埋蔵文化財センター

# 上信越自動車道

## 埋蔵文化財発掘調査報告書21

—上田市内・坂城町内—

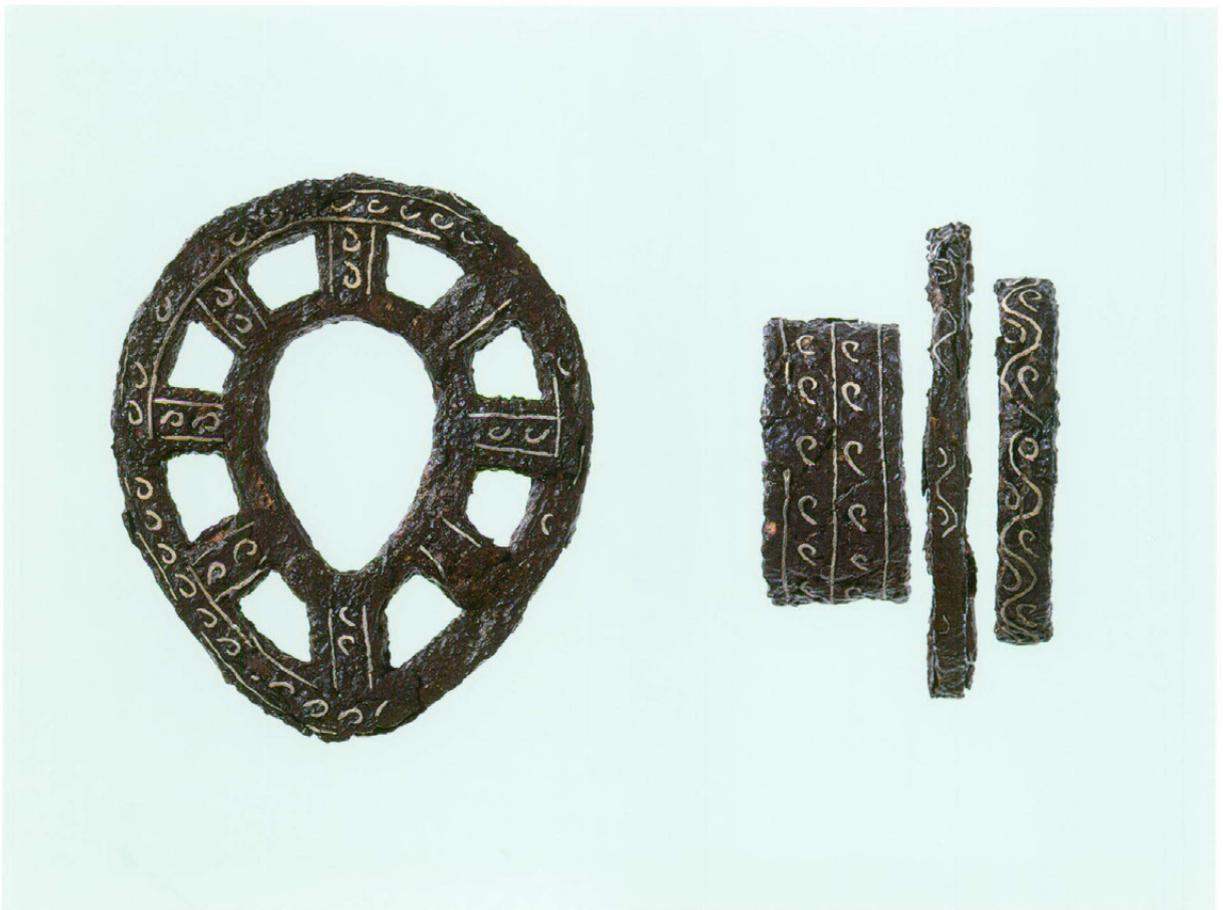
おひのき ななつづか こふんぐん そめ やだいじょうり じんばづか こふん  
大日ノ木 七ツ塚古墳群 染屋台条里 陣馬塚古墳  
みやだいら うえはら こふんぐん やまざき こふんぐん やまざき やまざききた  
宮平 上原古墳群 山崎古墳群 山崎 山崎北  
ひがしつづか こふんぐん どい のいりようせき かのんだいらきょうづか こやませいてつ  
東平古墳群 土井ノ入窠跡 観音平経塚 小山製鉄

1999

日本道路公団  
長野県教育委員会  
長野県埋蔵文化財センター



觀音平經塚出土 四耳壺



陣馬塚古墳出土 銀象嵌刀装具

# 序

東北信を貫いて建設が進められた上信越自動車道は、長野県域においてはすでに全線が開通し、信州と首都圏を結ぶ重要な高速交通手段として機能しております。

(財)長野県埋蔵文化財センターは、上信越自動車道の建設に先立ち、各地で埋蔵文化財の調査を実施してきました。上田市および坂城町内の遺跡については、平成4年に発掘調査を始め、総面積70,510㎡に及ぶ調査に足かけ4年、整理作業を合わせると6年の歳月を要して、ここに報告書を刊行しました。

上田市内では、縄文時代晩期の多量の遺物と古墳時代前期集落を中心とする大日ノ木遺跡、横穴式石室をもつ古墳時代後期の陣馬塚古墳、7世紀から9世紀にかけて営まれた集落の宮平遺跡、坂城町内では、中期古墳としては坂城町で初めての調査例となった東平古墳群、中世の五輪塔を伴う墓域と経塚が調査された観音平経塚、平安時代の鍛冶集落である小山製鉄遺跡など、多彩な内容の遺跡の発掘調査成果が、本報告書に収められています。

本書は、地理的にも、また歴史的な位置や性格も異なる遺跡を各論的にまとめましたが、この地域の歴史を解明する上で、重要な資料を提供できると確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました日本道路公団東京第二建設局、同上田工事事務所、長野県高速道局、上田市および同教育委員会、坂城町および同教育委員会、地元対策委員会などの関係諸機関、地域の住民の皆さん、並びに、ご指導とご助言をいただいた長野県教育委員会の方々、研究者の皆さん、そして発掘作業や整理作業に従事された多くの皆さんに対して、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成11年3月31日

(財)長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター

所 長 佐久間 鉄四郎

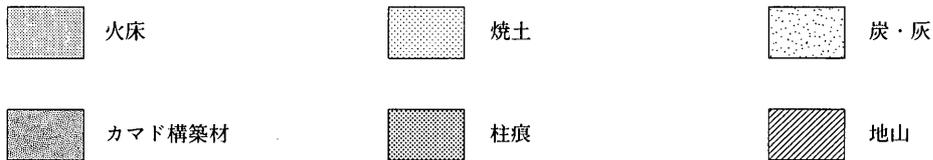
# 例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設に係る長野県上田市・坂城町所在の以下 13 遺跡の発掘調査報告書である。  
上田市 大日ノ木遺跡、七ツ塚古墳群、染屋台条里遺跡、陣馬塚古墳、宮平遺跡  
坂城町 上原古墳群、山崎古墳群、山崎遺跡、山崎北遺跡、東平古墳群  
土井ノ入窯跡、観音平経塚、小山製鉄遺跡
- 2 上記遺跡の調査概要は、『長野県埋蔵文化財センター年報』9～13 他で紹介しているが、内容において本書と相違する場合は、本書の記述をもって訂正する。
- 3 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1000）、上田市発行の上田市基本図（1：2500）・全図（1：10000）・文化財分布図（1：20000）、坂城町発行の坂城町都市計画図（1：2500）・全図（1：10000）・遺跡分布図（1：10000）、および建設省国土地理院発行の地形図（1：25000、1：50000）をもとに作成した。
- 4 人骨と獣骨の同定記述に関しては、京都大学霊長類研究所 茂原信生教授に依頼し、玉稿を賜った（付章第 1～5 節）。  
鍛冶関連遺物に関しては、穴澤義功氏に分類を依頼した。石材鑑定については、輿水太伸氏の手を煩わした。
- 5 空中写真・測量は、株式会社アイシー、株式会社こうそく、株式会社写真測図研究所、自然科学分析は株式会社パリノ・サーヴェイ、鍛冶関連遺物の化学分析は、株式会社川鉄テクノロジーサーチ分析・評価センターに依頼した。
- 6 本書の執筆分担は以下の通りである。  
第 3 章第 2 節 6 (1) 川崎保  
第 3 章第 2 節 6 (5) 宮島義和  
第 6 章第 1 節・第 2 節 1～4 廣瀬昭弘・若林卓  
上記以外 若林卓  
遺物写真撮影 田村彬  
なお、若林執筆分について、以下の同僚諸氏の援助・協力を得た。  
川崎保（縄文時代遺物）、柳澤亮（鍛冶関連遺物および遺構）、市川隆之（中世遺物）、市川桂子（石材）、
- 7 本書の編集は若林卓が担当し、廣瀬昭弘が全体を校閲した。
- 8 遺物観察表・計測表類は巻末に一括掲載した。
- 9 発掘調査および本書の作成にあたり、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力を賜った。お名前を記して感謝申し上げる。  
五十嵐幹雄、石野博信、岩崎卓也、大坪聖子、大道和人、小野紀男、尾見智志、風間栄一、川上元、倉沢正幸、甲田三男、小山丈夫、近藤義郎、坂詰秀一、桜井秀雄、白沢勝彦、助川朋広、千葉 豊、手塚直樹、松原典明、宮入 恵、茂木雅博、矢島宏雄、山岸猪久馬  
上田市教育委員会、上田市立信濃国分寺資料館、坂城町教育委員会、長野県立歴史館
- 10 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

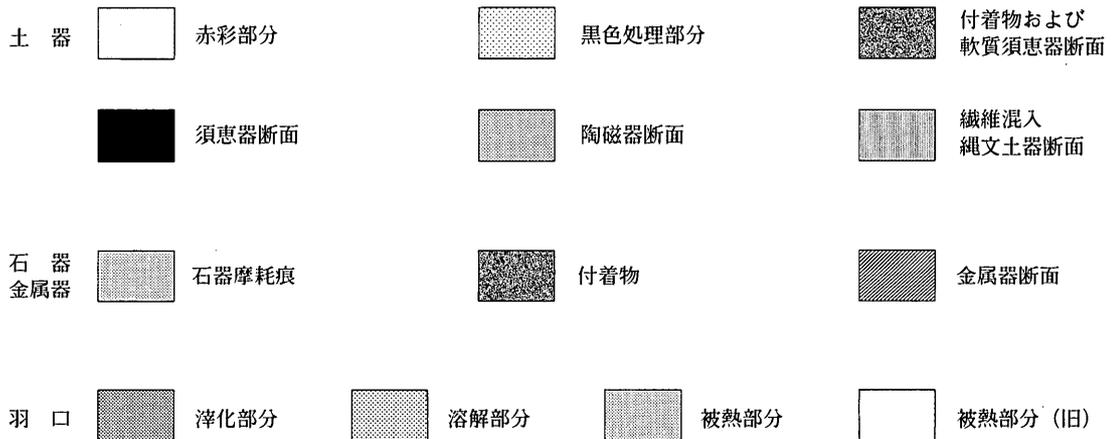
# 凡 例

- 1 遺構番号は遺跡別に遺構種ごとに付してあるが、原則として発掘調査時の番号を変更しなかったため欠番がある。  
遺物番号は内容に応じ、遺構（出土地点）ごとの、または、主に材質に基づく分類による遺物種類ごとの通し番号になっている。したがって、同一図版に同じ番号がある場合がある。
- 2 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は原則として下記の通りである。
  - (1)主な遺構実測図  
 竪穴住居・掘立柱建物 1:60、1:80 住居内施設（カマド など） 1:30、1:40  
 土坑 1:20～1:60 土墳墓 1:20、1:30 溝・自然流路 1:400
  - (2)主な遺物実測図  
 土器 1:4 大形土器・瓦 1:6、1:8 石器 2:3～1:3 大形石器 1:6、1:8  
 玉類 1:1 金属製品 1:1～1:3 刀剣 1:4、1:5 銭貨拓影 2:3  
 竪櫛・漆製品 2:3 鍛冶関連遺物 1:2～1:3
  - (3)遺物写真  
 土器坏・皿・碗類、その他小形土器 1:3 土器甕・壺類 1:4  
 その他は原則として実測図と同縮尺
- 3 重複遺構については、原則として上端のみを実線で表示している。
- 4 遺物（土器）観察表の法量は、（ ）が復元値、〈 〉が残存値、括弧なしは完存値を示している。
- 5 実測図中のスクリーントーンは以下の事項を表している。これら以外の場合は、当該項目中で説明するか、図中に凡例を示した。

## 1) 遺構図



## 2) 遺物図



# 本文目次

巻頭写真

序

例言

凡例

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経緯	
2 調査・整理体制	
第2節 調査の方法	2
1 発掘調査の方法	
2 整理方針と報告書の構成	
第2章 環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 大日ノ木遺跡	11
第1節 遺跡と調査の概要	11
1 遺跡の位置	
2 調査の経過	
3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	13
1 竪穴住居跡・竪穴状遺構	13
(1) 弥生時代後期末～古墳時代前期	13
(2) 古墳時代後期～平安時代	29
2 掘立柱建物跡・柱穴列	
3 土坑・ピット群	
4 SF	
5 自然流路跡	
6 遺物	51
(1) 縄文時代の土器	
(2) 遺構外出土の古墳時代前期の土器	
(3) 土製品	
(4) 金属製品	
(5) 木製品	
(6) 石器・石製品	
第3節 小結	64
第4章 七ツ塚古墳群・染屋台条里遺跡	98
第1節 遺跡の概観	98
第2節 調査の概要	98
第3節 小結	99
第5章 陣馬塚古墳	100
第1節 遺跡と調査	100
1 遺跡の位置	
2 調査の方法と経過	
第2節 墳丘と周溝	101

第3節 石室	105
第4節 出土遺物	109
1 出土状況    2 遺物	
第5節 小結	121
1 陣馬塚古墳の年代    2 築造工程と企画	
<b>第6章 宮平遺跡</b>	<b>126</b>
第1節 遺跡と調査の概要	126
1 遺跡の位置    2 調査の経過	
第2節 遺構と遺物	127
1 竪穴住居跡・竪穴状遺構	129
2 掘立柱建物跡・柱穴列	190
3 土坑    4 土壙墓    5 溝跡    6 遺構外出土土器	
7 土器以外の遺物	216
(1) 瓦    (2) 土製品    (3) 石器・石製品    (4) 金属器・金属製品	
第3節 小結	258
1 古墳時代後期後半から平安時代の土器    2 集落の変遷	
<b>第7章 上原古墳群</b>	<b>266</b>
第1節 遺跡と調査の概要	266
1 遺跡の位置    2 調査の経過    3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	268
1 平安時代の遺構と遺物    2 遺構外出土遺物	
第3節 小結	281
<b>第8章 山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡</b>	<b>282</b>
第1節 遺跡と調査の概要	282
1 遺跡の位置    2 調査の経過    3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	284
1 山崎古墳群・山崎遺跡	284
(1) 平安時代以降の遺構と遺物    (2) 遺構外出土遺物	
2 山崎北遺跡	289
(1) 古墳時代後期の遺構と遺物    (2) 平安時代以降の遺構と遺物	
(3) 遺構外出土遺物	
第3節 小結	302
<b>第9章 東平古墳群</b>	<b>304</b>
第1節 遺跡と調査の概要	304
1 遺跡の位置    2 試掘調査    3 発掘調査の方法と経過	
第2節 東平2号墳	309

1 墳丘	309
(1) 築成    (2) 墳丘施設    (3) 遺物の出土状況	
2 主体部	318
(1) 墓壇    (2) 棺と立石    (3) 副葬品の出土状況	
3 出土遺物	323
(1) 埴輪    (2) 土器    (3) 玉類    (4) 竪櫛	
第3節 東平1号墳	328
1 墳丘	328
(1) 築成    (2) 墳丘施設    (3) 遺物の出土状況	
2 主体部	330
(1) 墓壇    (2) 棺と立石    (3) 副葬品の出土状況	
3 出土遺物	333
(1) 埴輪    (2) 土器    (3) 刀剣	
(4) 竪櫛    (5) 古墳以外の出土遺物	
第4節 墳丘外遺物集中地点	339
1 位置と形態    2 遺物の出土状況    3 出土遺物	
第5節 砥沢古墳	342
1 墳丘	342
(1) 築成    (2) 墳丘施設    (3) 遺物の出土状況	
2 主体部	349
3 出土遺物	349
(1) 土器    (2) 鉄器	
4 古墳以外の遺構と遺物	350
(1) 炭焼窯    (2) 遺物	
第6節 小結	353
第10章 土井ノ入窯跡	356
第1節 遺跡と調査の概要	356
第2節 遺構	358
第3節 小結	358
第11章 観音平経塚	359
第1節 遺跡と調査の概要	359
1 遺跡の位置    2 調査の経過	
第2節 遺構と遺物	361
1 経塚	361
(1) 経石集積    (2) 1号墓壇    (3) 2号墓壇	
2 五輪塔群	365
(1) B群    (2) D群    (3) E群    (4) F群	
(5) G群    (6) H群    (7) I群	

3 炭焼窯	374
4 出土遺物	374
第3節 小結	390
1 経塚    2 五輪塔群	
<b>第12章 小山製鉄遺跡</b>	<b>396</b>
第1節 遺跡と調査の概要	396
1 遺跡の位置    2 調査の経過    3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	399
1 平安時代以降の遺構と遺物	399
(1) 竪穴住居跡    (2) 鍛冶炉    (3) 土坑    (4) 柱穴列	
(5) その他	
2 出土遺物	418
(1) 土器    (2) 石器・石製品    (3) 金属器・金属製品	
(4) 鍛冶関連遺物	
第3節 小結	432
1 鍛冶関連遺物の構成と鍛冶業の形態    2 鍛冶関連遺構の構成	
<b>付章 分析と鑑定</b>	
第1節 大日ノ木遺跡出土の骨片	435
第2節 陣馬塚古墳出土の人骨	436
第3節 宮平遺跡出土の人骨と獣骨	439
第4節 山崎北遺跡出土の人骨	444
第5節 観音平経塚出土の焼骨	447
第6節 小山製鉄遺跡出土の鍛冶関連遺物の分析・調査	449
<b>遺物観察表・計測表類</b>	<b>475</b>
<b>報告書抄録</b>	

## 写真図版目次

1 大日ノ木遺跡	PL 1 ~ 20	6 山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡	PL 56 ~ 58
2 七ツ塚古墳群・染屋台条里遺跡	PL 21	7 東平古墳群	PL 59 ~ 69
3 陣馬塚古墳	PL 22 ~ 31	8 土井ノ入窯跡	PL 70
4 宮平遺跡	PL 32 ~ 52	9 観音平経塚	PL 70 ~ 82
5 上原古墳群	PL 53 ~ 55	10 小山製鉄遺跡	PL 83 ~ 89

# 第1章 序説

## 第1節 調査の経過

### 1 発掘調査に至る経緯

本書収録遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による上田市内および坂城町内における上信越自動車道の建設に伴って、消滅する遺跡の記録保存を目的として行われたものである。

従来より、長野県における高速道にかかわる埋蔵文化財保護は、広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。また、その発掘調査は(財)長野県埋蔵文化財センター（以下、旧センター）が実施してきた。

上田市・坂城町の高速道用地内では、周知の遺跡として、大日ノ木・下樋口・石坪・セツ塚古墳群・染屋台条里・熱泰寺古墳・陣馬塚古墳・谷川古墳群上原支群（上原古墳群）・山崎・山崎北・御堂川古墳群山崎支群（山崎古墳群）・同山田支群（山田古墳群）・同東平支群（東平古墳群）・砥沢古墳・土井ノ入窯跡・観音平経塚の各遺跡が知られていた。これら周知の遺跡の内容および範囲を把握するための試掘調査・現地踏査は、旧センターによって前年度および本調査と並行して実施され、未周知遺跡の存否を確認するための試掘調査は県教委を主体に旧センターも参加して行われた。その結果、下樋口遺跡・石坪遺跡・熱泰寺古墳・山田古墳群が本調査の対象から除外される一方、新発見の遺跡として宮平遺跡・小山製鉄遺跡が調査対象に加わった。下樋口遺跡・石坪遺跡は水田造成等による地形改変のため遺物包含層が残存せず遺構も存在しないと判断された。熱泰寺古墳は『上田市の原始・古代文化』（上田市教委1977）によると全壊状態となっており、現地踏査を徹底したが、その存在を確認するに至らなかった。山田古墳群については、用地内に確認できるマウンドは一基のみで、試掘調査および聞き取り調査の結果、数十年前に寄せ集められた土石の山に過ぎないことが判明した。宮平遺跡は、地元居住者が遺物を拾得したとの情報を得て旧センター職員が現地踏査に赴き、土器片等を採集したことがきっかけとなって、試掘調査に至り、古墳時代後期から平安時代の集落遺跡の存在が明らかになった。小山製鉄遺跡も、地権者が土器発見の届け出を坂城町教育委員会に提出したことを発端として、試掘調査が実施され、平安時代の製鉄ないし鍛冶に関係した遺跡の存在が明確になった。なお、東平古墳群では、予想された後期古墳は認められなかったものの、新たに中期古墳二基が確認された。

旧センターは、上信越自動車道佐久～更埴間の本格的調査の開始や、北陸新幹線上田・坂城地区の調査に対応するために、平成4年4月に上田調査事務所を開設した。上田調査事務所は、平成4年度から9年度までの上田市・小県郡・埴科郡における上信越自動車道および北陸新幹線関連の発掘調査・整理作業を主に担当したが、平成9年度末をもって閉所され、平成10年度の整理作業と報告書の刊行は(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（以下、新センター）に引き継がれた。

各遺跡の発掘および整理は、年度ごとに公団が県教委に委託し、県教委が旧センターおよび新センターに再委託して実施された。発掘調査の年度別契約面積は表1の通りである。

## 2 調査・整理体制

調査・整理体制は以下の通りである。なお、平成9年度は担当調査研究員が外部派遣となったため、作業を中断している。

### 平成4～8年度

理事長	宮崎和順(4～5年度)	上田調査事務所長	堀内規矩雄(4～5年度)
	佐藤善處(5～7年度)		青沼博之(6年度)
	戸田正明(8年度)		小林秀夫(兼、7～8年度)
副理事長	伊藤万寿雄(4～5年度)	庶務課長	越 清登(4～6年度)
	田村治夫(6～7年度)		山口栄一(7～8年度)
	佐久間鉄四郎(8年度)	調査課長	廣瀬昭弘(4～6年度)
事務局長	峯村忠司(4～7年度)	調査第二課長	廣瀬昭弘(7～8年度)
	青木 久(8年度)	調査研究員	川崎 保 柳澤 亮 若林 卓
総務部長	神林幹生(4～6年度)		田村 彬 寺澤政俊 豊田義幸
	西尾紀雄(7～8年度)		西村政和 井口 章 甲田圭吾
調査部長	小林秀夫(4～9年度)		町田勝則 相澤秀樹 松岡忠一郎
			藤森俊彦 柳澤秀一 五十嵐敏秀
			和田 進

### 平成10年度

所 長	佐久間鉄四郎	調査部長	小林秀夫
副 所 長	山崎悦男	調査第三課長	廣瀬昭弘
管 理 部 長	山崎悦男(兼)	調査研究員	若林 卓 田村 彬
管理部長補佐	宮島孝明		(以上、当該整理担当)

### 整理作業従事者(平成7・8年度および10年度)

赤塚高子 赤羽利治 上野久香 大井まき枝 大塚正枝 大原はるえ 尾沢正江 鹿島すみ江  
片桐信子 金子幸雄 川上淳子 工藤和美 小松みつ子 坂田昭二 佐久本真樹子 佐藤昭子  
佐藤美枝子 菅原千賀子 高野浩美 滝沢織江 滝沢富士太郎 竹花けい子 田中ひさ子  
塚原和子 中沢由美子 中嶋啓子 中島松子 馬場玲子 原沢令子 原田京子 半田公子  
半田正美 半田美由紀 菱田よしえ 堀内通子 堀内幸伊 三崎信好 緑川うめ子 宮下容子  
森角雅子 柳沢孝子 藪 一義 横井順子 横尾一恵 渡辺けさ子 渡辺基子

## 第2節 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

調査に当たっては、(財)長野県埋蔵文化財センターが作成した内部資料「遺跡調査の方法と手順」に基づき、各遺跡の性格と状況に応じて、具体的な計画を立て、発掘調査を行った。

#### (1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るた

めに、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を用いた。各種の記録類や遺物の注記はこの記号を使用している。

大日ノ木遺跡 (おひのきいせき)	COH
七ツ塚古墳群 (ななつづかこふんぐん)	CNK
染屋台条里遺跡 (そめやだいじょうりいせき)	CSY
陣馬塚古墳 (じんばづかこふん)	CJB
宮平遺跡 (みやだいらいせき)	CMD
上原古墳群 (うえはらこふんぐん)	BUH
山崎古墳群 (やまざきこふんぐん)	BYM
山崎遺跡 (やまざきいせき)	BYZ
山崎北遺跡 (やまざききたいせき)	BYK
東平古墳群 (ひがしっぴらこふんぐん)	BHD
土井ノ入窯跡 (どいのいりようせき)	BDI
観音平経塚 (かんのんだいらきょうづか)	BKK
小山製鉄遺跡 (こやませいてついでいせき)	BKY

## (2) 遺構名称と遺構記号

遺構名称は検出時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合がある。そのため遺構は、主として平面形状および遺物の分布状況等を指標として区分し、遺跡記号と同様に記録の便宜を図るため、記録類・注記に次の記号を用いた。

ただし、本報告書では、原則として記号を使わずに、記述は「1号竪穴住居跡」、挿図中は「1住」のように略して遺構名称を表記した。略称には、「住」竪穴住居跡、「竪」竪穴建物・竪穴状遺構、「建」掘立柱建物、「坑」土坑、「墓」土墳墓・火葬墓、「流路」自然流路跡、「列」柱穴列、などを用いている。

SB	竪穴住居跡・竪穴建物・竪穴状遺構
ST	掘立柱建物跡
SD	溝跡、自然流路跡
SK	土坑 (廃棄坑・貯蔵穴など)・墓墳
SA	柱穴列
SF	単独で存在する火を焚いた跡・炉跡 (屋内炉とは別扱い)・焼土集中
SM	マウンド (石で構築されたものを含める)
SH	集石、配石
SQ	遺物集中
SY	窯跡
SX	その他、性格不明遺構

## (3) 調査グリッドの設定

ア 調査グリッドは、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系 (X=0.0000, Y=0.0000) を基点に、200 mの倍数値で200×200 mの区画を設定し、「大々地区」とする。大々地区は調査範囲をカバーする最小限におさえ、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

イ 大々地区を40×40 mの25区画に分割し、これを「大地区」とした。大地区は北西から南東へA～Y

のアルファベット番号を与えた。

ウ 大地区を8×8mの25区画に分割し、これを「中地区」とした。中地区は北西から南東へ1～25の算用数字番号を与えた。調査区内にはこの中地区単位の測量杭を打設し、遺構測量の基準とした。

なお、東平古墳群の調査では、以上の原則によらず、任意方角の4×4m区画のグリッドを設定した。また、七ツ塚古墳群・染屋台条里・陣馬塚古墳・土井ノ入窯跡・観音平経塚の各遺跡では、調査グリッドの設定は行っていない。

現場における調査グリッドの設定すなわち測量基準杭の打設は、業者委託により実施したが、一部は調査研究員が測量し設定した。標高は公団の工事用水準点もしくは公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。遺構測量は、主として調査研究員と作業員による簡易遣り方測量を行ったが、一部、業者委託の写真測量を採用した。

## 2 整理方針と報告書の構成

調査結果については、報告書への掲載不掲載にかかわらず、遺物の実測・接合・復元と遺構の計測などできるだけ資料化に努めたが、諸種の制約からこれらすべてを報告書に掲載することはできなかった。資料化されながらも、記述や図示することができなかった遺構や遺物については、観察表や計測表を示して事実記載に代えた場合もある。

調査報告については、上田市内・坂城町内の対象遺跡を、位置的に東から西の順番に羅列して収録することとし、遺跡の時期と性格、地域性は考慮しないこととした。

表1 年度別発掘調査契約面積（単位：㎡）

所 在	遺 跡 名	総 面 積	4 年 度	5 年 度	6 年 度	7 年 度
上 田 市	大日ノ木遺跡	6800		3000	2900	900
	七ツ塚古墳群	1500		1500		
	染屋台条里遺跡	3700		2900	800	
	陣馬塚古墳	2200		2200		
	宮平遺跡	16100		2700	13000	400
坂 城 町	上原古墳群	12000	12000			
	山崎古墳群・山崎遺跡	7960	1200	3000	650	1500
			1610(試掘扱い)			
	山崎北遺跡	2800		2800		
	東平古墳群	2500		1500	1000	
	土井ノ入窯跡	4000	4000			
	観音平経塚	3600	3600			
	小山製鉄遺跡	1000		1000		
合計	64160					

## 第2章 環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 地形の概観

本報告書が対象とする上信越自動車道建設に伴う発掘調査遺跡は、上田市域では上田盆地の東北部、坂城町域では千曲川右岸の山麓部に位置している(図1)。上田盆地と坂城地域は、南東から北西に流れる千曲川右岸に突き出した塩尻の岩鼻と左岸の半過の岩鼻によって画され、独立した空間を成している。

上田盆地は、千曲川左岸の地域と右岸の地域とに二分され、本書で扱う遺跡群が展開するのは後者である。千曲川右岸地域は西南を千曲川、北方を第三系の太郎山山地、東方を第四系の烏帽子岳火山西南麓に囲まれた、およそ三角形を呈する地域で、東縁付近を神川が西北方向に流下している。

この地域の主な平坦面は、高位から虚空蔵山面、染屋面、上田城面(上田面)があり、さらに低位には千曲川および神川によって形成された段丘面がある。虚空蔵山面を形成する虚空蔵山層は烏帽子火山噴出の溶岩、火砕流堆積物と礫層が構成し、太郎山の麓にあたる斜面をつくっている。染屋面を形成する染屋層は砂層を挟む礫層から成り、上部を砂状浮石層(水中堆積の火山灰層)に覆われる。染屋面は、神川右岸に広大な染屋台地(神科台地)を形成し、また、神川左岸では吉田面とも呼ばれ、その東縁部には烏帽子岳西南山麓を流下する行沢川・瀬沢川などの河川による扇状地が発達している。上田城面は火山性泥流堆積物である上田泥流堆積物の上面で、上田中心市街地はこの面に広がっている。なお、染屋面を千曲川第一段丘面、上田城面を同第二段丘面、吉田面を神川第一段丘面と呼ぶ場合もある。

千曲川は、岩鼻の狭隘部を抜けると、坂城広谷と呼ばれる幅広い貫通谷をつくりだす。坂城広谷は東西および南北を第三系の山地に囲まれた盆地状の地形を成している。東は太郎山から鏡台山へ伸びる山脈、西は大林山を主峰とする連続した山稜が東西を限り、この東西両山脈から分岐した支脈が坂城広谷の南限および北限を画す障壁となっている。

坂城広谷の谷底には千曲川の氾濫原が広がり、その両側の山麓部には東西の山地から流下する幾つかの小河川が山麓扇状地をつくりだしている。ことに右岸地域の山麓扇状地は、日名沢川・名沢川・谷川・御堂川などの小河川や沢が形成した扇状地が南北に接続して、広大な面積を占めている。扇状地の末端は千曲川の側浸食を受けて一連の河成段丘崖を成すが、谷川・御堂川などは旧段丘崖下の新扇状地とその末端の新段丘崖の形成が繰り返されている。集落・街道は扇状地端部および千曲川氾濫原の自然堤防上に発達し、特に、千曲川右岸の岩鼻の陰にあたる位置に形成された南条地区の自然堤防は、弥生時代以来の居住域として選地され続けたことが発掘調査により明らかになってきている。

#### 2 遺跡の立地

上信越自動車道ルート内に所在する遺跡の立地を地形区分で分類すると、山脚部、丘陵、平坦地に大別され、平坦地はさらに山麓扇状地、台地、河岸段丘に区分できる。

山脚部に立地する遺跡は東平古墳群・土井ノ入窯跡・観音平経塚・小山製鉄遺跡(坂城町)で、墓域や経塚、生産遺跡といった内容の遺跡群である。小山製鉄遺跡は住居を伴うが、一定期間集中的な鍛冶業を営んだ小規模集落で、通常の集落遺跡とは性格が異なる。丘陵に立地する遺跡は陣馬塚古墳(上田市)であり、虚空蔵山層によって構成される横山丘陵の稜線上に位置している。

山麓扇状地に立地する遺跡は大日ノ木遺跡(上田市)、山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡(坂城町)であ

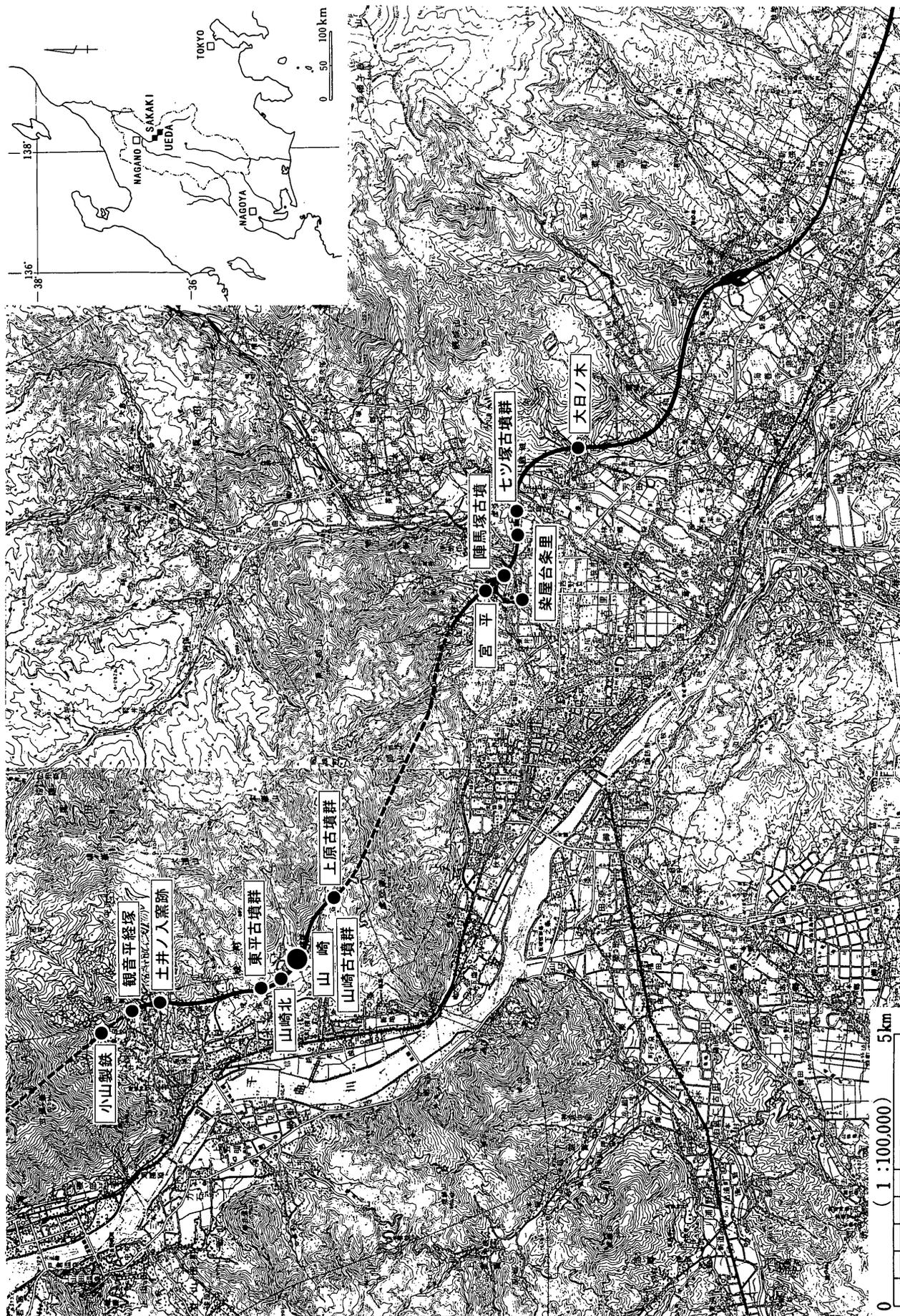


図1 上信越自動車道と調査遺跡の位置

る。居住域・生活域としての集落が主体的な内容を成す遺跡群である。大日ノ木遺跡は染屋面東縁に行沢川・瀬沢川が形成した扇状地の扇頂部に、山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡は御堂川扇状地の扇頂から扇中央部にかけて営まれている。河岸段丘上に立地する遺跡には、太郎山東南麓を流下する矢出沢川右岸段丘の宮平遺跡（上田市）、太郎山北西面に発する谷川左岸段丘の上原古墳群（坂城町）がある。前者は古墳時代後期から平安時代の比較的大規模な集落であり、後者には古墳は存在せず、山間の平坦地に営まれた小集落である。台地上に立地する遺跡は染屋台条里遺跡・七ツ塚古墳群（上田市）がある。後者は染屋台地の東北部、虚空蔵山南麓の裾部から神川右岸段丘崖寄りに分布する。前者の範囲は染屋台地上に広く及び、生産遺跡、集落遺跡など多様な内容を含むことは間違いなく、初期信濃国府の存在が推定される遺跡でもある。

## 第2節 歴史的環境

本書で報告する遺跡群が分布する地域は、上田市の千曲川右岸地域（以下、上田地域）、坂城町の千曲川右岸地域（以下、坂城地域）である。ここでは両地域について、各時代の遺跡の動向を中心に、歴史的環境を概観したい。

### 1 上田地域

**縄文時代** 現在までのところ、旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡は発見されていない。早期の遺跡は大日ノ木遺跡があり、早期中葉～末葉の土器が出土している（本書第3章）。前期の遺跡も稀薄であり、城山遺跡、茅御堂遺跡で若干の散布をみた程度である。中期から後期の遺跡は、神川左岸山麓線沿いに、托田・大日ノ木・井戸田遺跡等が点在するが、神川左岸第二段丘面の八千原遺跡では、早期中葉～後期中葉の拠点集落が調査された。また、太郎山南麓の黄金沢扇状地の西南扇端部に立地する八幡遺跡（思川遺跡）では中期後葉末から後期中葉の集落が確認された。後期後葉になると遺跡数は激減し、以降、遺跡の様相は判然としないが、大日ノ木遺跡では多量の晩期後半の土器と石器類が出土している。

**弥生時代** 上田地域の前期から後期前半にかけての様相は殆どわかっていない。黄金沢扇状地末端に位置する八幡遺跡で中期栗林式土器・太型蛤刃石斧が採集された程度である。しかし、後期後半の箱清水式期に至って各地で遺跡が急激に増加する。烏帽子岳西南山麓の扇状地に中吉田遺跡群、井戸田遺跡、日向遺跡等多くの遺跡が分布し、神川左岸第二段丘面の自然堤防上には林之郷遺跡・神林遺跡が存在する。また、上田盆地中央部の上田城面（千曲川第二段丘面）には、八幡遺跡、常入遺跡群、国分遺跡群といった大規模な遺跡群が展開しており、一段下位の八日堂面には国分寺周辺遺跡群がある。こうした平地部に立地する集落遺跡の他に、太郎山南麓の山腹テラス状台地の上平遺跡では、竪穴住居跡と、低墳丘を伴う土墳墓と考えられる遺構が確認されている。

**古墳時代** 神川左岸域では、大日ノ木遺跡において古墳時代初頭～前期の集落が確認され、東海系・北陸系土器が出土した。林之郷遺跡E地区（茅御堂遺跡）では前期から後期にかけての集落の調査が行われ、同じく第二段丘面に位置する太田遺跡・神林遺跡でも後期の住居が検出された。神川右岸域では、常入遺跡群や国分寺周辺遺跡群があり、特に後者の北陸新幹線建設に伴う調査では中期～後期の大規模な集落が明らかになった。断片的ながら染屋台（千曲川第1段丘面）でも後期の遺構がみつかり、染屋台の開拓が進行し始めたことが窺える。また、矢出沢川の段丘上に営まれた宮平遺跡は古墳時代後期から平安時代にかけての比較的大規模な集落である（本書第6章）。

現在、上田盆地最古の古墳と考えられるのは秋和八幡大蔵京古墳（方墳、4世紀後半～末葉）である。次の

で風呂川古墳（方墳、5世紀半ば）、東部町曾根の中曾根親王塚古墳（方墳、5世紀半ば～後半）が築かれ、さらに上田市新町の王子塚古墳（帆立貝形古墳、5世紀後葉～6世紀前葉）が続き、後期に入って二子塚古墳（前方後円墳、6世紀前半）が築造された。大蔵京・中曾根親王塚・王子塚・二子塚の4基は規模・墳形の点で卓越した存在であり、上田盆地における前期から後期にかけての継起的な首長墳の築造を把握することができる。6世紀後半から7世紀には各地で横穴式石室をもつ中小の円墳が築かれるようになる。神川右岸の山麓・段丘面には氷沢古墳群・下郷古墳群、赤坂將軍塚古墳等が、神川左岸の染屋台地北縁部には七ツ塚古墳群・塚田塚古墳が分布する。太郎山南麓部には陣馬塚古墳（本書第5章）・豊原古墳、弥勒堂古墳等が築かれている。

**古代** 古代は、上田小県地方において、信濃国分寺の造営、東山道の整備といった国家的な事業が展開された時期である。信濃国分寺跡は発掘調査により、僧寺・尼寺の伽藍のほぼ全貌が確認された。また、上田市常磐城の唐臼地籍から瓦塔片が発見され、塔心礎らしき巨石もあることから、日理駅が推定されているが、確定するまでには至っていない。信濃国府については、延喜式や和名抄などの文献記録には筑摩郡に在ったという記録のみで、小県郡に在ったという記録はない。しかし、国分寺の存在と関連づけて、当初の国府は小県郡に設置され、後に筑摩郡に移ったという考え方が大勢的である。国府所在地の比定については諸説あり、その有力な比定地のひとつ染屋台（神科台）は条里的地割を残す地として知られ、幾度か発掘調査が行われたが、国府や条里制に直接係る遺構・遺物は確認されていない。

この時代の集落遺跡は千曲川とその支流の段丘上の微高地に多く立地する。神川左岸の第二段丘面には太田遺跡・林之郷・堂下・神林遺跡などの遺跡が展開し、近年の大規模調査により具体相が明らかになりつつある。また、国分寺周辺遺跡群の北陸新幹線建設に伴う調査では、8世紀から9世紀の集落動向が信濃国分寺の建立に連動した可能性が示されている。生産遺跡では、信濃国分寺の寺域の北側に平安時代初期の瓦窯跡が確認された他、太郎山南麓の上平遺跡で、奈良時代の須恵器窯1基が調査されている。

**中世** 中世の遺跡は、戸石城・米山城をはじめ、太郎山山系の山頂あるいは中腹に、数多くの山城が築かれている。一方、中世の集落については、発掘資料が殆どないため、その実態が明らかではない。天正11年（1583）の真田昌幸による上田城築城、それに続く城下町の整備により、太郎山山麓や千曲川沿いに古くから在った集落は、上田城周辺と北国街道沿いに移住され、それまでの千曲川右岸地域の村落構成は一変した。

## 2 坂城地域

坂城町における旧石器時代の遺跡としては、谷川扇状地上の保地遺跡で上ケ屋型彫器・小形の尖頭器・石核が採集されている。これらは、1万4・5千年前の所産と推定されており、その時期には扇状地が形成され、人間活動が営まれたことを示す資料といえよう。

**縄文時代** 金井遺跡群から早期と考えられる特殊磨石が出土し、込山A遺跡からは茅山式土器が採集されている。前期は込山A・B遺跡で諸磯式土器が確認され、中期は込山A・C遺跡、山崎遺跡で加曾利E式、寺浦遺跡・金井遺跡で勝坂式土器が出土している。後・晩期は、保地遺跡で発掘調査により堀之内式・加曾利B式土器、大洞C～A式土器が出土した。晩期の遺物は込山B・E遺跡でも採集されており、特に後者は遮光器土偶の頭部を出土した遺跡として古くから知られている。これらは千曲川の開析による段丘地形上に位置する遺跡だが、近年、千曲川の沖積地に立地する東裏遺跡、青木下遺跡、塚田遺跡でも前期～晩期の遺物が発掘されている。沖積地への進出ないし利用が早い段階から始まっていることを示す資料であろう。

**弥生時代** 中期以前の遺跡については、発掘資料がなく、様相は不明という外ない。後期後半（箱清水

期)の遺跡は、南条地区の千曲川沖積地の自然堤防ないし微高地上に、中町遺跡、百々目利遺跡、田町遺跡、塚田遺跡等が集中し、特に塚田遺跡は、発掘調査により箱清水期の住居群が密集する状況が明らかになった。東に広がる後背低地に安定した生産域をもつことが、濃密な集落分布を生み出す条件になったと考えられる。一方、千曲川段丘上にも保地遺跡等の遺跡があり、宮上遺跡・寺浦遺跡では該期の住居跡が確認された。また、和平B遺跡のように標高1000mを越える高地に営まれた遺跡も存在する。

**古墳時代** 前期遺跡の発掘調査例はないが、寺浦遺跡でS字状口縁台付甕・小型器台が出土した他、田町遺跡、込山E遺跡などで前期の土器が採集されている。千曲川自然堤防上に位置し、かつて手捏土器や石製模造品を出土した東裏遺跡は、近年、中期後葉～後期後半の集落が調査され、中期末の滑石製玉類製作工房跡が確認された。さらに、隣接する青木下遺跡では、環状土器列をはじめとした、6～7世紀にかけての多くの祭祀遺構が検出され、両遺跡が一体となって、非常に祭祀色の濃いエリアを構成することが明らかになった。中之条地区の千曲川段丘上に位置する宮上遺跡、北浦遺跡、寺浦遺跡、上町遺跡でも後期の集落が調査されている。古墳については、近年まで前・中期古墳は知られていなかったが、5世紀代築造の東平古墳群が確認され、上信越自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた(本書第9章)。この地域の古墳の主体を占める後期～終末期の円墳は谷川、御堂川の河川沿いに集中し、谷川古墳群・御堂川古墳群などが形成されている。

**古代** 奈良時代の集落遺跡は、東裏遺跡、寺浦遺跡、宮上遺跡で調査が行われている。生産遺跡は、土井ノ入窯跡の須恵器窯がある。平安時代の集落遺跡は、寺浦遺跡、上町遺跡、豊饒堂(山崎北)遺跡、宮上遺跡の調査が行われており、東裏遺跡では礎石建物跡が検出された。生産遺跡では、青木下遺跡、塚田遺跡で9世紀後半の洪水砂層に覆われた水田跡が検出されたほか、土井ノ入窯跡の瓦窯、鍛冶集落の小山製鉄遺跡(本書第12章)がある。寺院跡では、9世紀初頭の込山廃寺があり、土井ノ入瓦窯はここと上田市信濃国分寺・更埴市正法廃寺に差し瓦として製品を供給したことが指摘されている。また、北日名経塚からは保元2年(1157)銘の銅製経筒、和鏡、白磁輪花小皿等が出土している。

**中世** 中世は、国人領主村上氏が坂城を本拠地として成長し、15世紀末には東北信地方に広く勢威を及ぼすに至った。その村上氏の主城が葛尾山頂に位置する葛尾城であり、その下方、現在満泉寺の在る一帯が居館跡に比定されている。葛尾城は天文22年(1553)、武田晴信の攻略により落城し、村上氏は没落した。中世の生産遺跡としては、村上氏末期の操業年代が考えられる製錬炉2基が検出された開畝製鉄遺跡がある。また、経塚は社宮寺経塚、蓬平経塚、観音平経塚(本書第11章)があり、蓬平経塚と観音平経塚は多字一石形式の礫石経とともに多数の五輪塔を出土している。

#### 引用・参考文献

- 五十嵐幹雄・川上元ほか 1983 『東之手・西之手遺跡 創置の信濃国府跡推定地第一次発掘調査概報』 上田市教育委員会
- 五十嵐幹雄・川上元ほか 1984 『創置の信濃国府跡推定地確認調査概報Ⅱ』 上田市教育委員会
- 五十嵐幹雄・川上元ほか 1985 『染屋台条里水田跡遺跡調査概報 創置の信濃国府跡推定地確認調査概報Ⅲ』 上田市教育委員会
- 五十嵐幹雄・川上元ほか 1986 『創置の信濃国府跡推定地確認調査概報Ⅳ』 上田市教育委員会
- 五十嵐幹雄・川上元ほか 1987 『創置の信濃国府跡推定地確認調査概報Ⅴ』 上田市教育委員会
- 五十嵐幹雄ほか 1995 『上田小県誌』第六巻 歴史篇上(一) 考古
- 上田市教育委員会 1992 『神林遺跡・下郷古墳群』
- 川上元 1968 『上田市上平遺跡緊急発掘調査報告』 上田市教育委員会
- 川上元ほか 1986 『染屋台条里水田跡遺跡・金井裏遺跡・殿田遺跡』 上田市教育委員会
- 川上元ほか 1989 『林之郷』 上田市教育委員会

## 第2章 環境

- 川上元ほか 1992 『郷土の歴史 発掘された原始・古代』上田市立博物館
- 久保田敦子・中沢徳士 1991 『林之郷・八千原』上田市教育委員会
- 黒坂周平ほか 1980 『上田小県誌』第1巻 歴史篇上(二) 古代・中世
- 小平光一 1996 『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』坂城町教育委員会
- 小林秀夫 1997 「千曲川流域における古墳の動向」『長野県考古学会誌』82号
- 小林幹男ほか 1975 『太田遺跡・茅御堂遺跡緊急発掘調査報告書』上田市教育委員会
- 塩野入忠雄ほか 1979 『坂城町誌』上巻 自然編・民俗編
- 助川朋広 1993 『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 助川朋広・郡山雅友 1993 『南条遺跡群 塚田遺跡』坂城町教育委員会
- 助川朋広・森嶋稔 1994 『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』坂城町教育委員会
- 助川朋広・森嶋稔 1995 『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 助川朋広 1996 『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 助川朋広 1996 『上五明条里水田址』坂城町教育委員会
- 助川朋広 1997 「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』第8号
- 高野豊文ほか 1976 『条里遺構分布調査概報一神川東部地区・浦野川地区一』上田市教育委員会
- 田中裕・吉沢悟 1993 「上田市新町王子塚古墳の測量調査」『千曲』第76号
- 常木晃・望月保宏 1986 「上田市秋和八幡大蔵京古墳の実測調査」『信濃』第38巻 第4号
- 森嶋稔・米山一政ほか 1981 『坂城町誌』中巻 歴史編(一)
- 柳澤亮ほか 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 山岸猪久馬・宮坂晃 1988 「第4章 第四系 4.3(3)上田盆地」『日本の地質4 中部地方Ⅰ』共立出版
- 山岸猪久馬 1998 「第2章 環境 第1節 地形と地質」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』(財)長野県埋蔵文化財センター

## 第3章 大日ノ木遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

大日ノ木遺跡は上田市域の東部、神川左岸地域に在り、殿城山西南麓を流下する行沢川と瀬沢川が形成した扇状地の扇頂部斜面に立地している。上田市文化財分布図では、縄文・弥生・平安の埋蔵文化財包蔵地となっているが、いままで発掘調査が行われた経歴はない。

今回の発掘調査地は、長野県上田市芳田字山田 853 ほかに所在し、遺跡範囲の東北端に位置する。現大日ノ木集落から 300 m 程上流に離れ、畑地・水田として利用されていた。標高は 637 ~ 647 m を測る。

周辺の主な遺跡を概観すると、行沢川のやや谷奥には縄文～平安時代の氷沢遺跡が存在する。神川段丘面に目を転ずれば、縄文時代の遺跡は第二段丘面の漆戸地区に所在する八千原遺跡があげられる。縄文中期中葉～後期中葉の拠点的な集落で、70 軒余りの住居跡が調査された。当地の晩期遺跡の様相は未だ明らかになっていない。弥生時代から古墳時代は林之郷遺跡が知られている。林之郷遺跡は漆土地区南端から林之郷地区にかけての、第二段丘面中央を南北に走る微高地上に立地する。長さ 1km におよぶ長大な範囲を有し、いくつかの遺跡が接続する遺跡群として把握される状況にある。北端に位置する E 地区（茅御堂遺跡）は弥生後期末から古墳前・中・後期の住居跡約 30 軒の調査が行われた。古墳時代後期の遺跡としては他に神林遺跡も調査されている。古墳は、氷沢遺跡のさらに谷奥に氷沢古墳群、大日ノ木遺跡からやや下った扇状地上に大日ノ木古墳・柴崎古墳が位置し、第二段丘面には下郷古墳群がある。いずれも後期～終末期と考えられる。古代の遺跡は第二段丘面に多く、神林遺跡と太田遺跡は平安時代後期、林之郷遺跡（A・B・C地区）は奈良～平安時代の集落が調査されている。

#### 2 調査の経過

遺跡の概況を把握し調査範囲を明確にするために、平成 4 年 12 月 12 日～12 月 21 日に試掘調査を行った。その結果、現耕作土の下に遺物包含層が広がっていること、水田区域となっている南西の低位部には、遺物を包含する埋没した自然流路が走っており、地形的に高まる北西の畑地部分では、基盤のローム質土に落ち込む縦穴住居らしき遺構が集中することを確かめた。

本調査は平成 5 年から 7 年にかけて、4 次にわたる調査となった。調査面積は延べ 6800 m<sup>2</sup> である。

第一次調査は平成 5 年 4 月 5 日～7 月 16 日に実施し、遺構群の北側の一部と、二筋に大別される自然流路の大部分を調査した。住居跡は古墳時代前期と古代の住居が確認され、自然流路跡からは、多量の縄文時代晩期後半氷 I 式土器、石器、剥片、古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土器が混在して出土するなど、遺跡内容の概略が把握された。

第二次調査は平成 6 年 4 月 7 日～8 月 25 日、第三次調査は同年 11 月 1 日～11 月 25 日に実施し、前回把握された居住域の南側に隣接する部分と自然流路の下流側の部分を調査した。新たに古墳時代後期の住居跡を検出し、古墳時代前期の遺構では、ベッド状高まりをもち多量の一括土器を出土した焼失住居（23 号住居）が目立った。自然流路からは引き続き縄文晩期土器、石器が出土し、特に石鏃の多さが目立った。また早期の押型文土器や貝殻沈線文土器、絡条体圧痕文土器も出土した。さらに、東側の流路（流路 2）の一角では、古墳時代前期の様々な器種の土器が、ほぼ原形を保つ状態で多量に検出された。

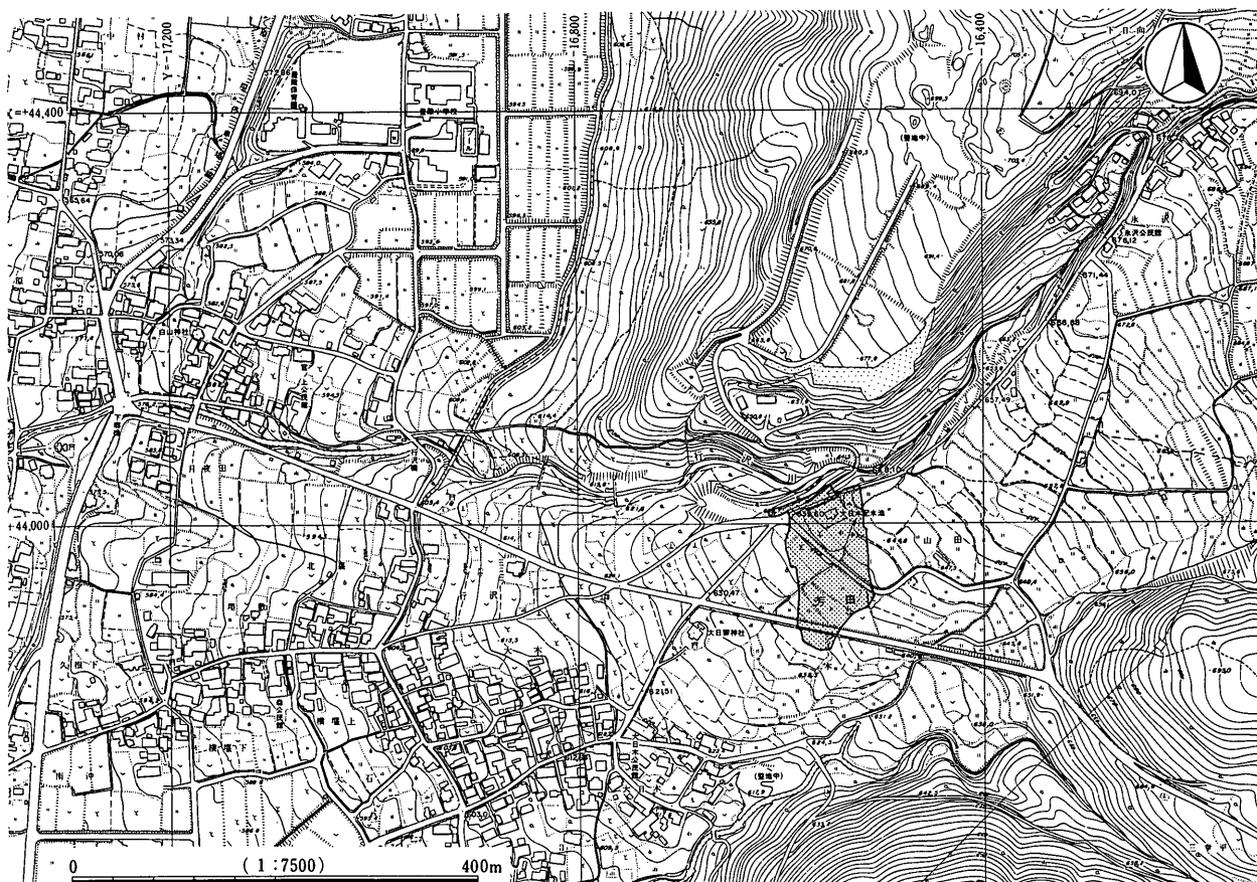


図2 調査範囲

第四次調査は、平成7年4月4日～5月26日に、居住域北西部の調査を行った。結果は前回までの内容をトレースするものであった。

### 3 基本層序

I層は現耕作土である。II層は黒褐色～暗褐色粘質土で遺物包含層である。縄文時代～古代の遺物を包含し、水田や配水池等の造成で削平された部分を除いておよそ全域に広がっている。ところによりIII層との区別が難しい。III層は発掘区中央～南東の谷状低地部分をつくる自然流路を埋積する黒色土層である。南東側の流路2部分と北西側の流路1部分に二大別され、縄文時代～古墳時代後期の遺物を包含する。IV層は黄褐色シルト質の再堆積ローム層で遺跡の基盤をなす。遺構は本層中に黒褐色土が落ち込む状況で検出された。南東の低地部に比べ、相対的に高燥地の北西部は、断続的ではあるが古墳時代初頭から平安時代にかけての遺構が密集しており、居住域の安定した地盤を成していたと思われる。

- 参考文献 小林幹男ほか 1975 『太田遺跡・茅御堂遺跡緊急発掘調査報告書』上田市教育委員会  
久保田敦子ほか 1991 『林之郷・八千原』上田市教育委員会  
上田市教育委員会 1992 『神林遺跡・下郷古墳群』  
塩入秀敏ほか 1995 『上田小県誌』第六巻 歴史篇上(一) 考古

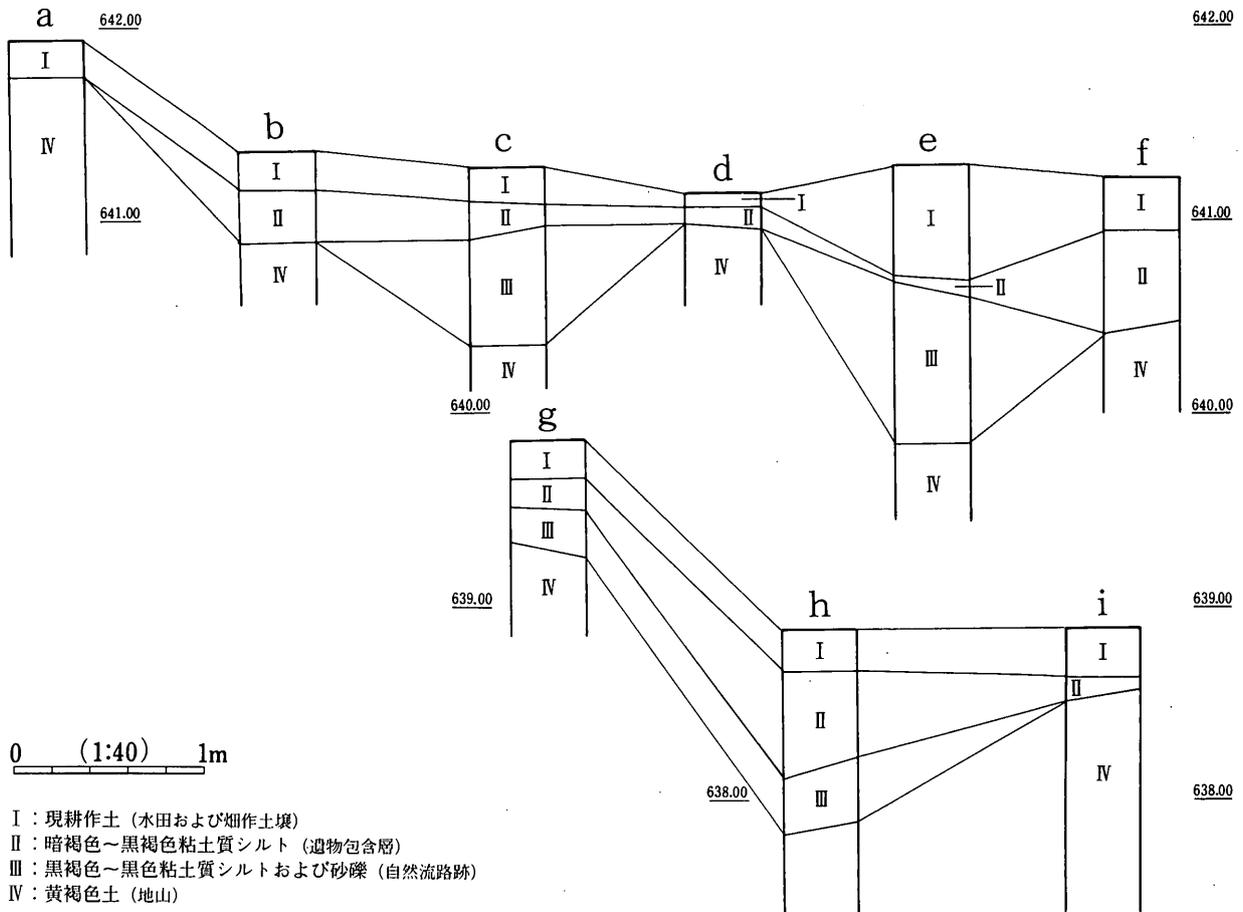


図3 基本層序

## 第2節 遺構と遺物

検出した遺構は、竪穴住居 36 軒、掘立柱建物 2 棟、土坑およびピット 55 基である (図4)。他に自然流路跡 2 条を調査した。遺構は調査区北東の高位部に集中している。

なお、遺構の時期を決定する鍵となる、出土土器の編年的位置付けは、古墳時代前期については宇賀神誠司の編年 (宇賀神 1988) に対比させ、古墳時代後期から平安時代については上田市国分寺周辺遺跡群の編年 (柳澤 1998) を軸に、西山克己の善光寺平および佐久平の編年 (西山ほか 1995)、佐久市栗毛坂遺跡群の編年 (寺島 1991) を主に規範とした。

### 1 竪穴住居跡・竪穴状遺構

#### (1) 弥生時代後期末～古墳時代前期

##### 1号竪穴住居跡 (図5・41) 位置 III G-1・6

**検出** IV層上面で検出した。住居廃絶後、覆土があまり堆積しないうちに自然流路1に切られ、その際にもたらされた土砂で埋没する。さらに水田の暗渠に攪乱され、東隅を含む一部を残すのみである。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模一辺3m以上。軸方向はN-45°-W。貼床はないが、床面は硬く締まっている。柱穴は1基認められた。残存する壁沿いには周溝が巡る。また、東隅 (P1) と東南壁脇 (P2) にはピットが各1基存在する。貯蔵穴であろうか。

**遺物** 床直上から、壺の口頸部2点 (1・2) とP2から完形に復元できる高杯(3)が出土した。1は外反さ

I-U

X = +44000  
III-A

X = +43960  
F

X = +43920  
K

V  
Y = -16560

W  
Y = -16520

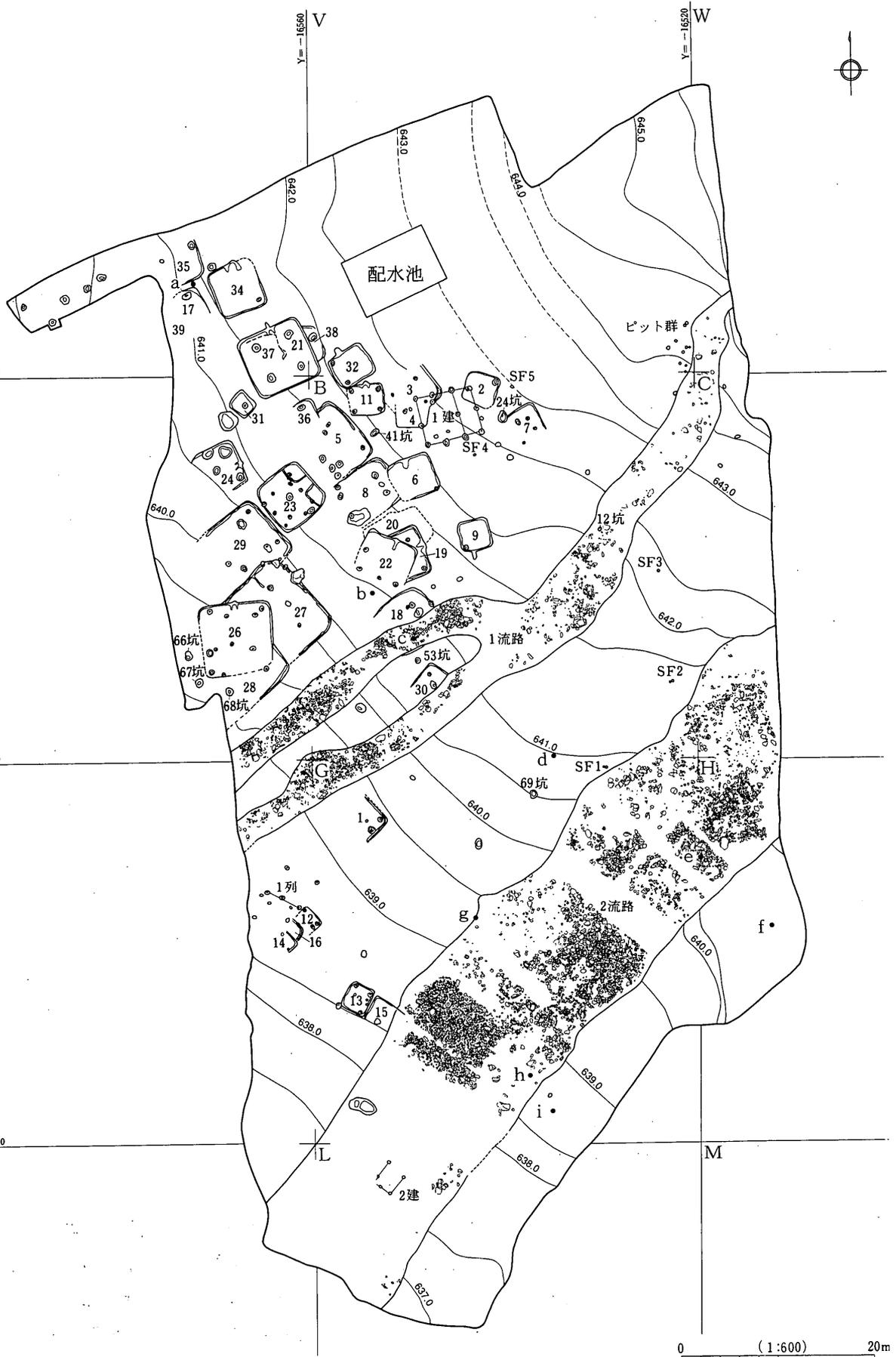
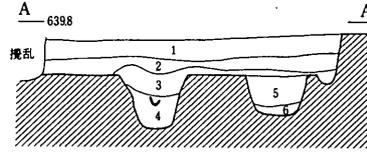
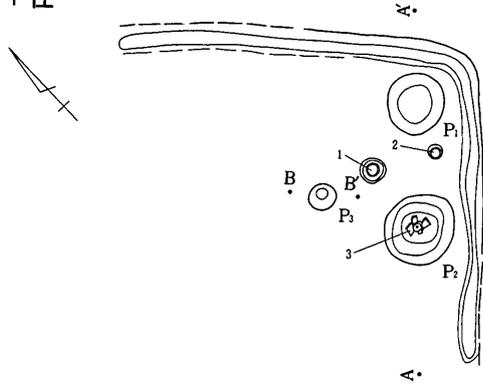


図4 遺構全体図

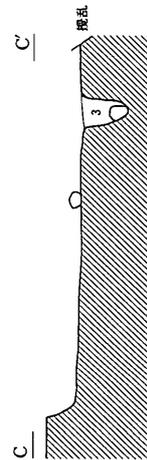
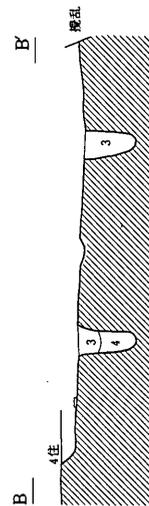
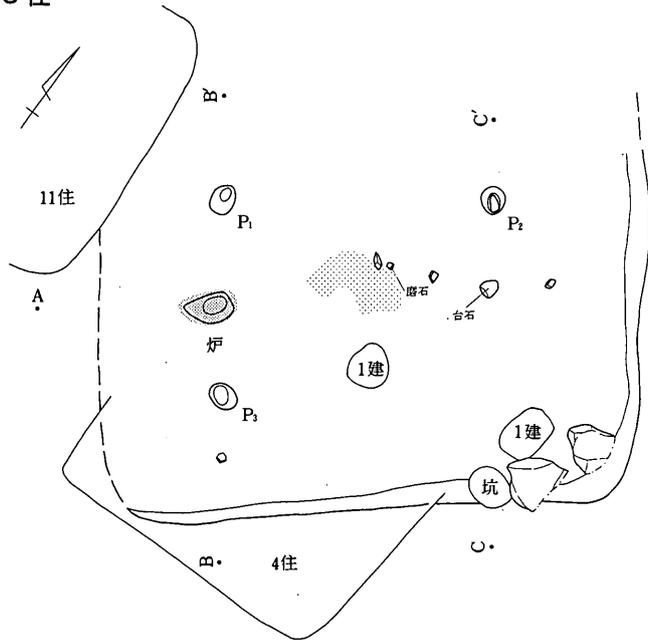
1住



- 1: 黒褐色土 (流路1覆土。砂質シルト。小礫・砂混じる)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (流路1覆土。中粒砂)
- 3: 黒褐色土 (覆土。シルト。炭化物、焼土粒少し混じる)
- 4: 黒褐色土 (ピット2覆土。粘性強、焼土粒僅か混じる)
- 5: にぶい黄褐色土 (ピット1覆土。シルト。ローム土・砂混じる)
- 6: 黄褐色土 (ピット1覆土。シルト。ローム土多く混じる)
- 7: 黒褐色土 (ピット3覆土。シルト。粘性強、炭粒混じる)

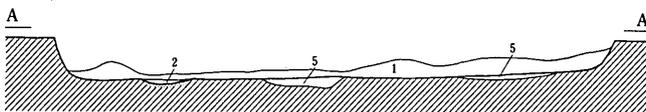
0 (1:80) 2m

3住



L-642.5

- 1: 黒褐色土 (覆土。シルト質。ローム粒多い)
- 2: 黒褐色土 (炉覆土。シルト質。粘性少なくもろい。炭片・焼土粒混)
- 3: 暗褐色土 (ピット覆土。砂質シルト。粘性弱い。ローム粒含む)
- 4: 黒褐色土 (ピット3覆土。きめ細かい砂質シルト。やや粘性あり、ローム粒含む)
- 5: 暗褐色土 (掘り方。ローム粒多い)



0 (1:80) 2m

図5 1号・3号竪穴住居跡

せた口縁一段目端部の外側に粘土帯を貼り付けて、口縁二段目をつくりだす二重口縁壺で、有段部は下方に突出する。

時期 古墳時代前期後半、宇賀神編年Ⅱ期古段階に位置付ける。

3号竪穴住居跡 (図5・41) 位置 III B-2

検出 IV層上面で検出した。4号・10号・11号住居および1号掘立柱建物に切られる。

構造 平面形状は方形を呈し、床面規模は5.6×4.5m程度であろう。軸方向N-126°-W。床は掘方の凹部を埋め戻し敲击締めて構築している。柱穴3基は細く深い。方形配列であろうが、他の1基は検出できなかった。炉は柱穴間に築かれた地床炉である。

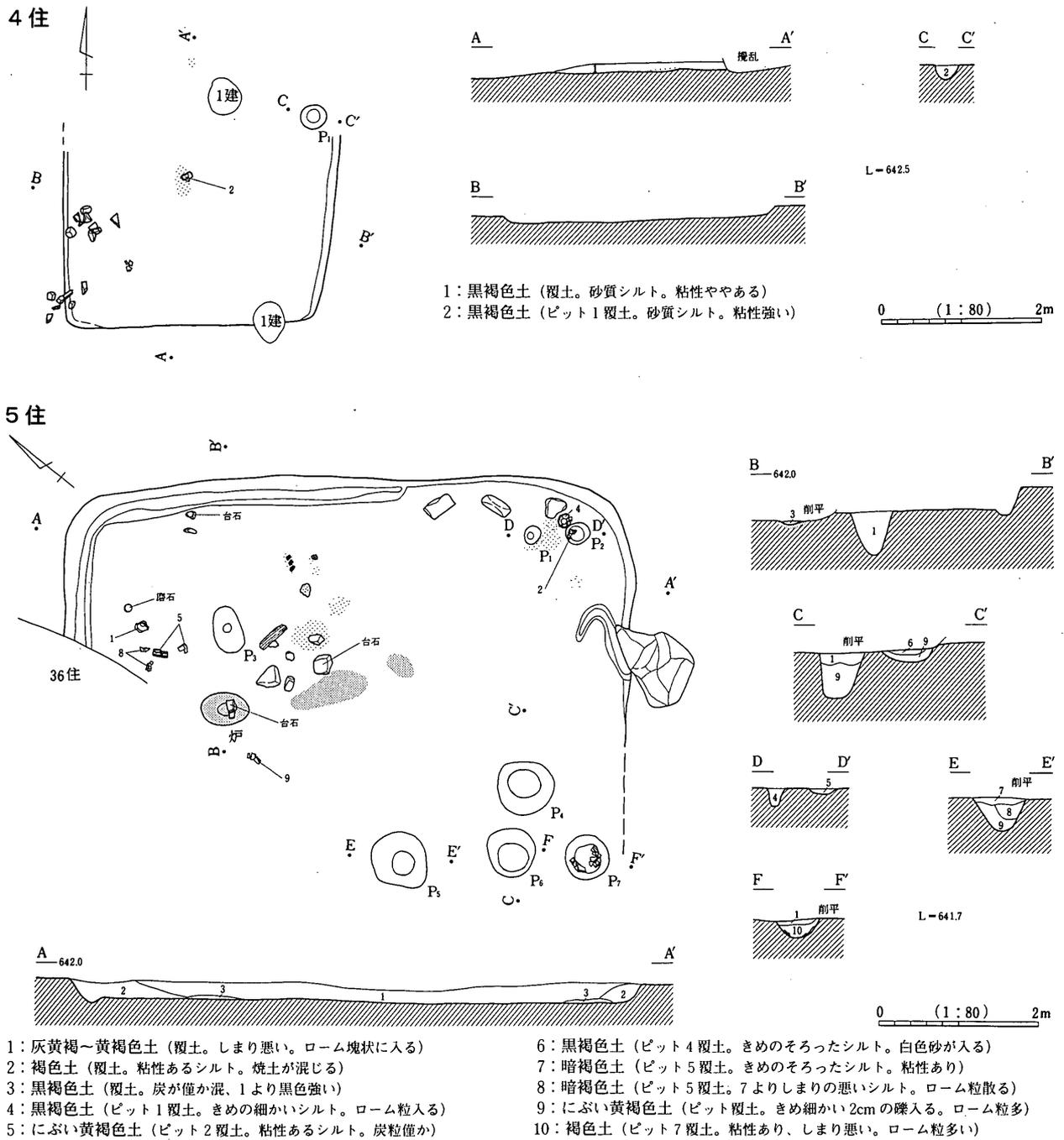


図6 4号・5号竪穴住居跡

遺物 図示できた土器は、折返し口縁をもつ櫛描波状文甕(1)のみである。その他、磨石(227)、台石(241)、砥石(255)が出土している。

時期 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭とする。

4号竪穴住居跡 (図6・41) 位置 III B-2

検出 IV層上面で検出した。3号住居を切り、1号掘立柱建物に切られる。

構造 平面形状は方形を呈し、床面規模は南辺約3m。軸方向はN-90°-W。貼床はないが、床は硬化している。焼土分布が認められるが、炉跡とは思われない。

遺物 覆土中から、口縁端部をつまみあげて僅かな口縁帯をつくりだす壺(1)、甕(2)、底部穿孔の有孔鉢(3)、脚部が大きく開く赤彩高坏(4)が出土した。その他、台石(243)、砥石(253)がある。

時期 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期新段階と考える。

#### 5号竪穴住居跡(図6・41) 位置 III B-1

検出 IV層上面で検出した。36号住居に切られる。

構造 平面形は方形を呈し、床面規模は、炉を中軸上にとると6.9×5.5m程度に復元されるか。軸方向はN-40°-W。貼床はないが、床は硬化している。東南寄りに地床炉がある。形状的に柱穴と見做し得るピットは4基検出したものの、配置バランスが良くない。北西から北東壁の半ば辺りまで周溝が巡る。

遺物 土器は床面で小形甕(4)、覆土中から蓋(1)、櫛描波状文の小形甕(2)・甕(5・6)、外反する「く」字状口縁の甕(3)、口縁部が屈折して外反する赤色塗彩の高坏(7・8・9)が出土した。また、炉床からやや浮いて磨り面をもつ長方形の台石(244)が認められた。他にも台石(234・247)、磨石(3)、全面研磨の小円礫(215)、軽石製品(249)が検出された。土製品は土器片板(10・12)がある。

時期 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期新段階に位置付ける。

#### 7号竪穴住居跡(図7・41・42) 位置 III B-3

検出 IV層上面で検出した。24号土坑に切られる。

構造 平面形状は方形を呈し、床面規模は一辺3.8m以上。軸方向はN-35°-W。貼床は中央辺りに施され、外周部には認められない。柱穴は2基が確認された。P3は床下の検出である。炉は縁石を伴うが、炉壁にしっかり固定した状態ではない。また、火床の被熱面は縁石下を潜って外側に及んでいる。これに類似した状況が8・15・23・35号住居にも認められる。いったん炉石を抜き取ったうえで改めて炉床上に置き直すという行為が、一種の炉廃絶儀礼として行われていたのかもしれない。

遺物 赤彩直口壺(1)、壺(2)、小形甕(3)、小形台付甕(4)、口唇刻目をもつ甕(5)、甕(6)、片口鉢(7)、口縁部が屈折して外反する赤色塗彩の高坏(8)、やや内彎する鉢状の坏部をもつ赤色塗彩の高坏(9)が出土した。甕は櫛描波状文を施す。5・7は床直上、他は覆土検出である。また、覆土中で、流れ込みの石剣ないし石棒(263)、磨製石斧が検出された。

時期 古墳時代前期初頭、宇賀神編年Ⅰ期古段階と考える。

#### 8号竪穴住居跡(図7・42) 位置 III B-6・7

検出 IV層上面で検出した。6号・20号住居に切られる。

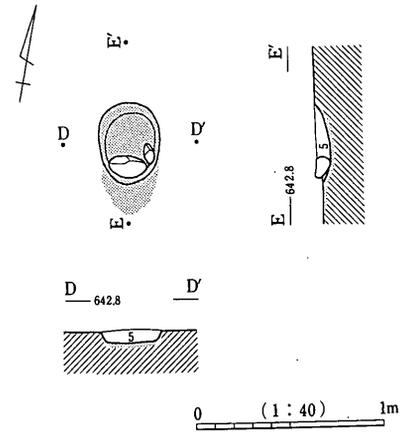
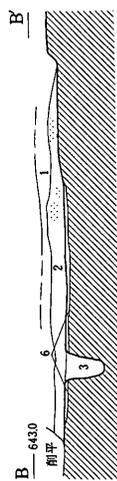
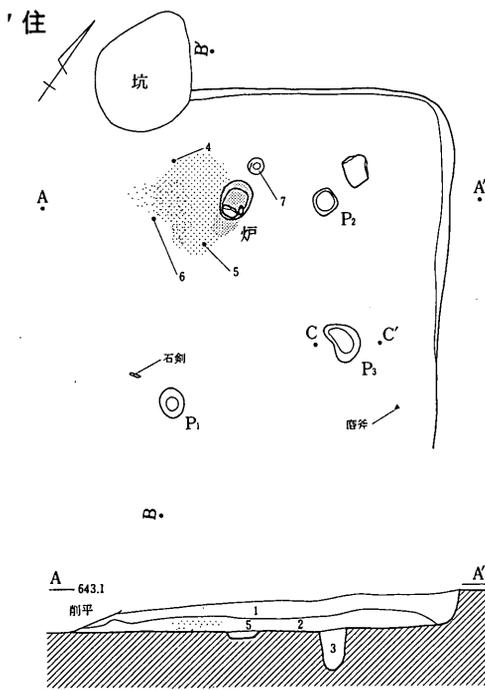
構造 平面形状は長方形で、床面規模は6.1以上×5.1m。軸方向はN-60°-E。貼床はないが、床面全体が硬化している。炉は数cmの厚さに敷土を施して炉床をつくっている。縁石を手前に置くが、7号住居同様に、しっかり固定した状態にはない。柱穴はほぼ方形配列の4基である。南東側の2基が浅い。

遺物 すべて覆土からの出土。T字文を施す壺(1)、甕(2)、赤色塗彩の高坏(3・4・5)がある。

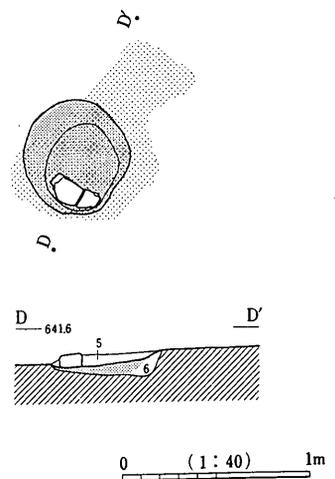
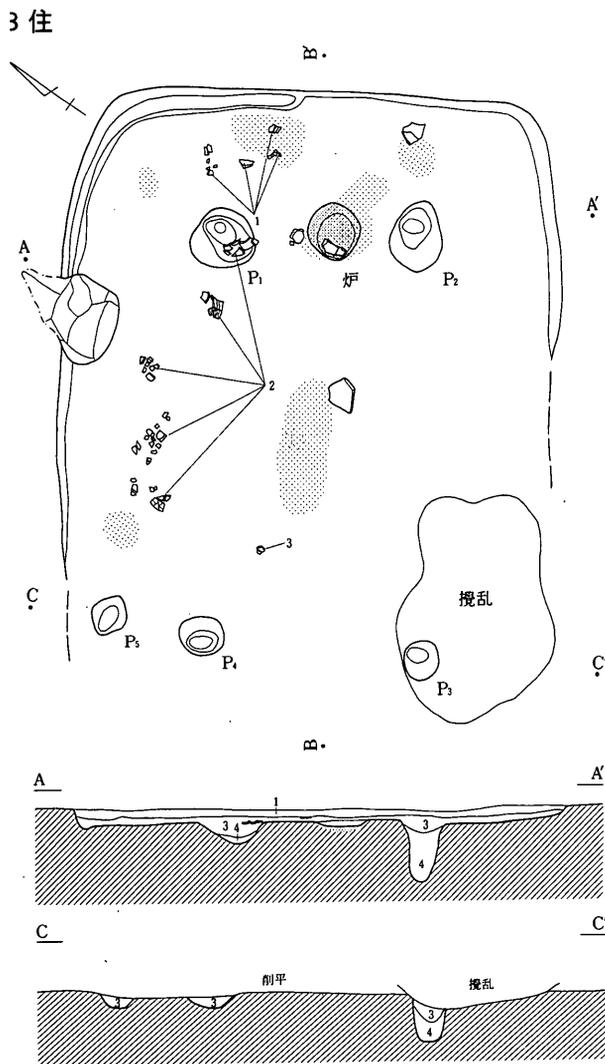
他には磨石(213・223)が検出されている。

分析 床面直上の焼土層(2層)から赤色顔料の小塊が検出され、X線回折分析を行った結果、この赤色顔料の素材はベンガラと判断された。なお、本住居および1・7・23・27号住居出土の赤彩土器片に塗布されていた赤色物質を同様に分析してみたところ、やはり顔料としてベンガラが使用されていたことが示唆された。遺跡内で土器製作が行われていた可能性が考えられよう。

時期 古墳時代前期初頭、宇賀神編年Ⅰ期古段階と考える。



- 1: 暗褐色土 (覆土。粘性少なく、しまり良いシルト。細礫僅か)
- 2: 黒褐色土 (覆土。ローム粒含む。炭化物・焼土多・5~6cm 礫僅か)
- 3: 暗褐色土 (ピット1・2覆土。粘性ありしまり良くないシルト。砂粒、5mmの礫・ローム粒僅か)
- 4: 黒褐色土 (ピット3覆土。ローム粒・炭化物を含む)
- 5: 暗褐色土 (炉覆土。粘性あるシルト。砂・礫・ローム粒僅か含む)
- 6: 黒褐色土 (貼床。シルト質。砂粒、ローム粒の混成)



- 1: にぶい黄褐色土 (覆土。粘性弱いシルト。ローム細粒含)
- 2: 焼土層
- 3: にぶい黄褐色土 (覆土、ローム粒ブロックが多い)
- 4: 褐色土 (ピット覆土、粘性弱く堅いシルト。ローム粒細かく入る)
- 5: 褐色土 (炉覆土。炭・灰層)
- 6: 暗褐色土 (掘り方。粘性なく、しまり悪いシルト)

図7 7号・8号竪穴住居跡

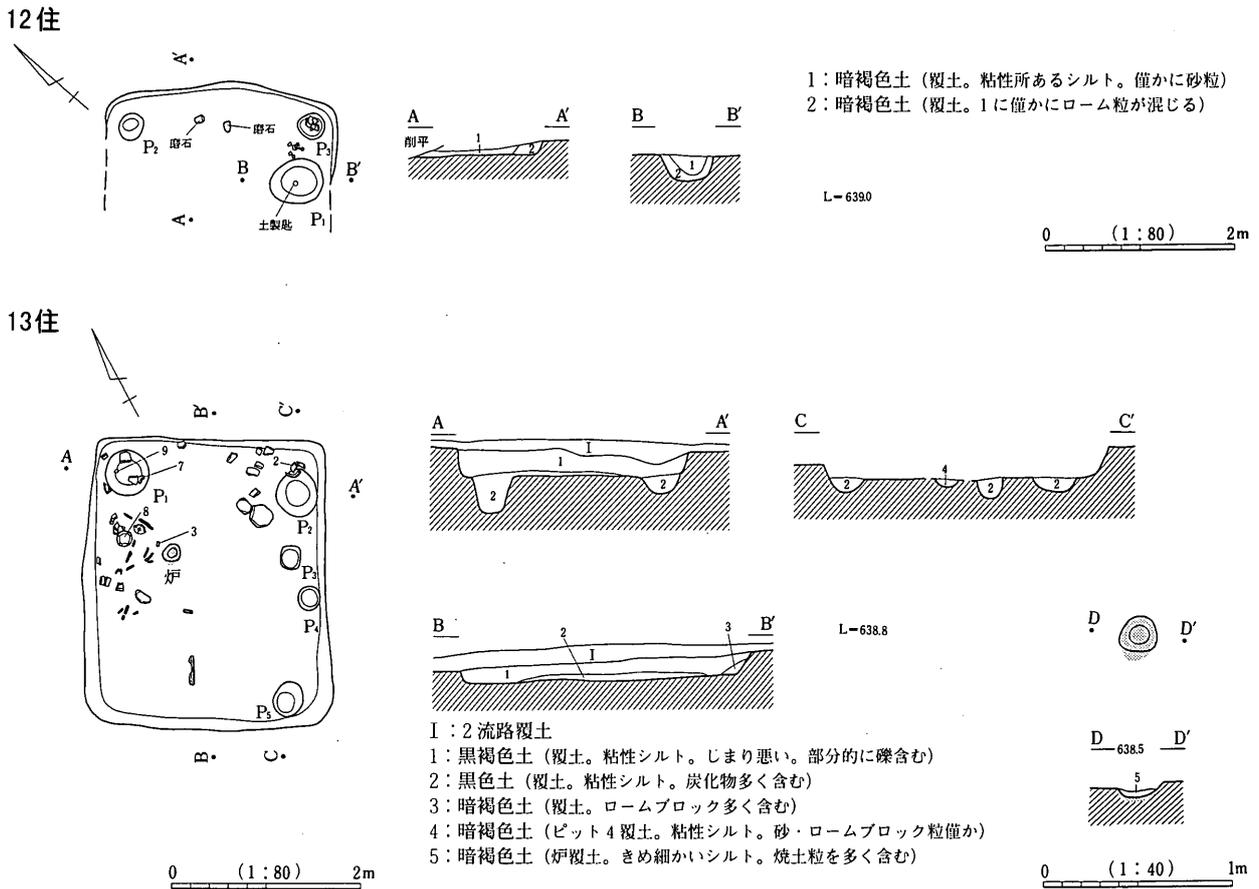


図8 12号・13号竪穴住居跡

12号竪穴住居跡 (図8・42) 位置 III G-5

検出 IV層上面で検出した。削平のため覆土の残りは悪い。16・14号住居を切る。

構造 平面形は方形を呈し、床面規模は残存する北東壁付近で2.4 m。軸方向はN-50°-E。貼床はないが、床面は硬化している。柱穴は北および東隅に各1基検出された。

遺物 覆土から、やや内彎する「く」字状口縁の甕(1)が出土した。土器以外の遺物は、匙形土製品の柄部分(6)、磨石、が検出されている。

時期 古墳時代前期末葉か。

13号竪穴住居跡 (図8・42) 位置 III G-16

検出 IV層上面の検出となる。自然流路2旧の埋積層を切って構築され、廃絶後、同2新に切られる。

構造 平面方形で、床面規模は2.9×2.3 m。軸方向はN-28°-E。貼床はないが壁際を除く床面は硬化している。柱穴は住居隅に配置される。ただし、西隅では検出されなかった。南西壁脇に小形の柱穴があり、入口に関係するか。炉は中央西南寄りに築かれた地床炉である。

遺物 外反する「く」字状口縁の甕(1・2・3)、S字状口縁台付甕(4)、若干の脚柱状部をもつが屈折せずに裾が開く高杯(5)、小型器台(6)、坏形の小型鉢(7)、折り返し口縁の鉢(8)、ミニチュア土器(9)。1・2・8は床直上、他は覆土検出である。4のS字甕は口縁部の外反度は弱い、廻間Ⅲ式3段階(赤塚1990)に相当するものであろう。他は土器片板(11)がある。

分析 床面に残されていた炭化材のうち、1点の樹種同定を行ったところ、クヌギ節であった。

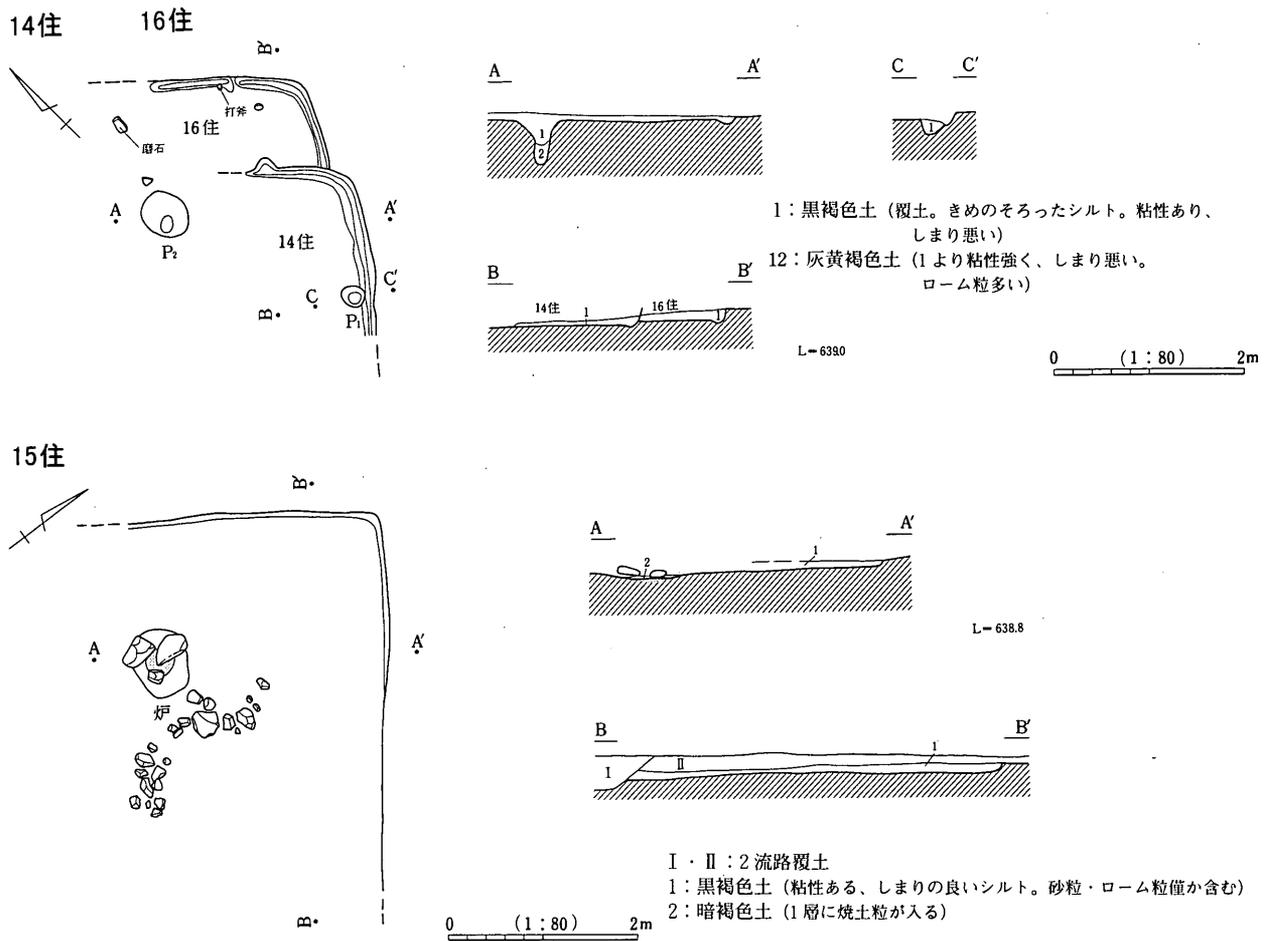


図9 14号・16号・15号竪穴住居跡

時期 古墳時代前期後半、宇賀神編年Ⅱ期古段階と考える。

14号竪穴住居跡 (図9) 位置 ⅢG-10

検出 IV層上面で検出した。12号住居の構築と削平で覆土は殆ど残っていない。16号住居を切る。

構造 平面方形だが、東隅の一部を残すのみであるため、規模は不明。軸方向はおよそN-40°-E。

貼床はないが、床面は硬化している。壁残存部下には周溝が巡る。柱穴は東南壁際に小形で浅いピットを1基検出した。

遺物 古墳時代前期土器片が出土している。

時期 古墳時代前期と思われる。

16号竪穴住居跡 (図9) 位置 ⅢG-10

検出 IV層上面で検出した。14号・12号住居に切られ、さらに削平され、覆土は殆ど残っていない。

構造 平面方形だが、東隅の一部を残すだけのため、規模は不明。軸方向はおよそN-40°-E。貼床はないが、床面は硬化している。壁残存部下には周溝が廻る。14号住居床面の検出だが、P2は本住居の柱穴であろう。

遺物 古墳時代前期土器片が出土している。土器以外では、磨石、打製石斧が検出された。

時期 古墳時代前期と思われる。

## 15号竪穴住居跡 (図9・42) 位置 III G-16・17

**検出** IV層上面で検出した。自然流路2旧を切り同2新に切られる。

**構造** 東部を残すのみだが、平面方形で、一辺4.0 m以上あることは確実であろう。隅部の形状はシャープで、丸みを帯びていない。軸方向はN-55°-W。貼床はないが、炉周辺の床面が硬化している。炉は西北壁寄りに築かれた地床炉である。2個の炉縁石を伴うが、位置は動いているようである。

**遺物** 小型器台(1)がある。

**時期** 古墳時代前期半ば、宇賀神編年I期新段階～II期古段階と思われる。

## 18号竪穴住居跡 (図10・42) 位置 III B-11・12・16・17

**検出** IV層上面で検出した。覆土は淘汰された黒褐色土であり、自然埋没と思われる。自然流路1旧を切り、同1新に東南半部を破壊される。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模は6.0以上×5.6 m。軸方向はN-52°-E。貼床は黒褐色土を貼って敲き締めた堅緻なもので、切られ残った北半部では全面に施されている。柱穴P1は柱痕が残り、埋戻し土(柱固定土)上面は床面と同じく敲き締められている。炉は中軸上の柱穴間に位置する。床を楕円形に掘り窪めた後、敷土を施して炉床を構築するとともに、掘り方の中央寄りに長方形の石を据え付けて炉縁石とする。床面には炭と焼土が広がっていた。特に壁際に多く、一部炭化材は壁から内側へ倒れ込むように焼け落ちた様子が窺え、焼失住居と考えられる。

**遺物** 土器は赤彩の片口鉢(1)、有孔鉢(2)、ミニチュア土器(3)がある。2・3は床直上、1は覆土中の検出である。また、床面に広がった炭化材に混じって、炭化した木製の紡輪(1)と、柿の支え木の端部(2)が出土した。本住居内で行われていた生業の一端を示す遺物であろう。その他の遺物としては、磨石(231)、用途不明の鉄製品(10)が覆土中の検出である。

**分析** 建築材と思われる炭化材4点の樹種同定結果は、すべてコナラ節であった。炉内検出の燃料材らしき炭化材はウツギ属であった。

**時期** 古墳時代前期前半、宇賀神編年I期に位置付ける。

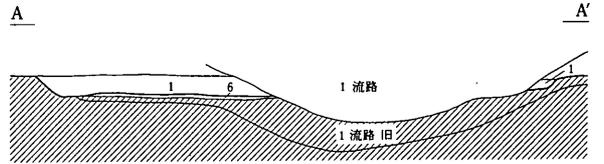
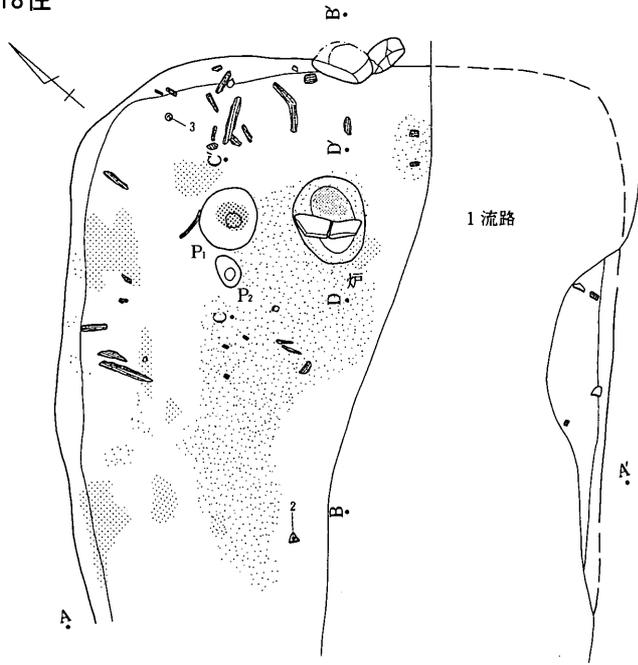
## 23号竪穴住居跡 (図10・11・42～45) 位置 III A-10、B-6

**検出** IV層上面で検出した。覆土は3層に大別される。床面(第2次)直上に広がった炭化材・炭化物層の上に、きめの揃った粒子の焼土層がのり、さらに炭・焼土を含む褐色土層が堆積している。

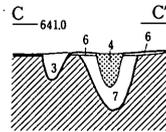
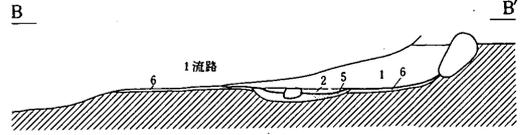
**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模は5.5×5.5 m。軸方向はN-50°-E。一度改築が行われている。改築前の第一次住居は、中央に炉をもつ段階である。竪穴掘り方の凹部を埋め戻して平坦にし、さらにきめの揃った褐色土を貼って敲き締めた堅緻な床を構築している。貼床はほぼ全面に施される。主柱穴は炉を取り囲む方形配列で、北東側の2基は副柱かと思われる浅い柱穴ないし段状部を伴う(P2・P4・P5・P7・P11)。炉は住居中央に位置する地床炉で、炉床の中央寄りに長方形の石を置いている。抜き取った炉縁石を炉床上に再置する廃絶儀礼を示す可能性がある。

第二次住居は、炉を埋め、ベッド状高まりを付設した段階である。改築前とは異なる機能が付与されたと考えられよう。ベッド状高まりは北東壁の両隅に1基ずつ付設され、これにより、柱穴P2・P4と北東壁の間の床面は3分された形になっている。構築は床面上に暗褐色土を敷き、さらに黄褐色土を貼って敲き締めている。炉は貼床土に似た黄褐色土を貼って、炉石ごと床面下に封じ込められる。主柱穴は前段階のものを踏襲したと考えられるが、その他の柱穴は改築に伴って新たに掘り込んだものもあるかもしれない。P6はベッドの構築により覆われ、P12は床下で確認されたので、これも封じられた可能性が高い。

18住

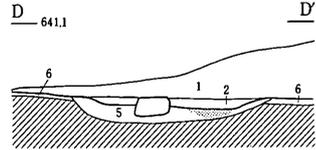


L-641.4



C-641.0

0 (1:80) 2m

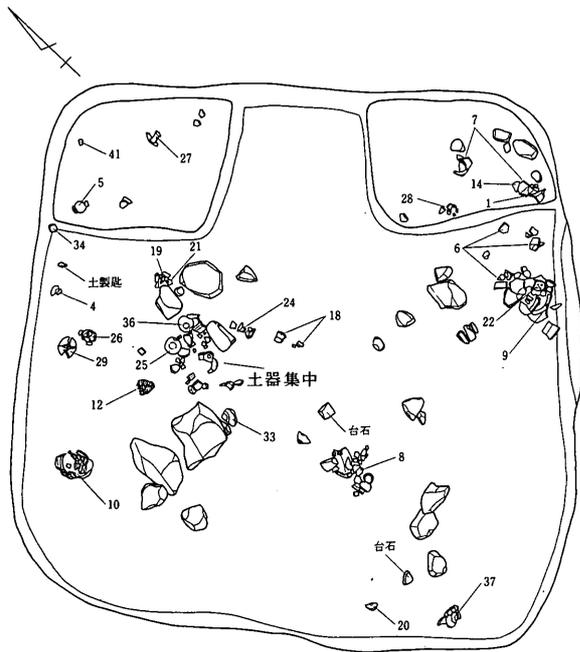


D-641.1

0 (1:40) 1m

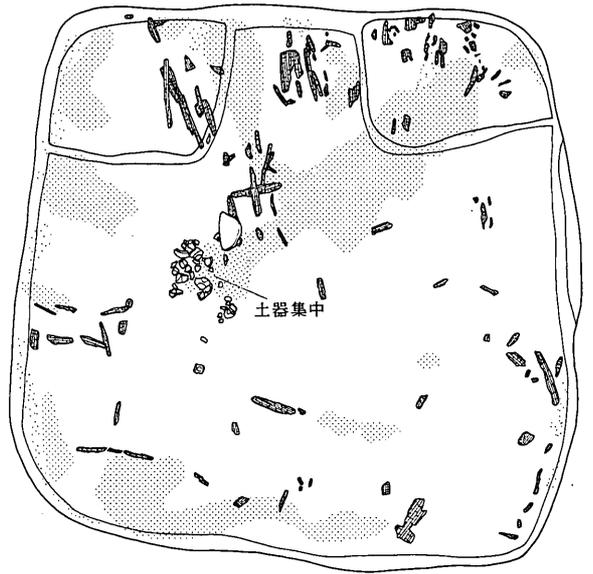
- 1: 暗褐色土 (覆土。粘性弱いシルト。炭化材・焼土粒混)
- 2: 暗褐色土 (炉覆土。粘性あるシルト。焼土・炭混)
- 3: 黒褐色土 (ピット2覆土。しまり・粘性ないシルト)
- 4: 黒褐色土 (柱痕。しまりないシルト。炭粒散在)
- 5: にぶい黄褐色土 (炉掘り方。ローム多い、焼土の下)
- 6: 灰黄褐色土 (貼り床)
- 7: 暗褐色土 (ピット1覆土。礫・ローム粒混)

23住



土器集中 2・11・15・16・17・23  
30・31・35・38・39・40

遺物出土状況



炭化材・焼土出土状況

0 (1:80) 2m

図10 18号・23号竪穴住居跡

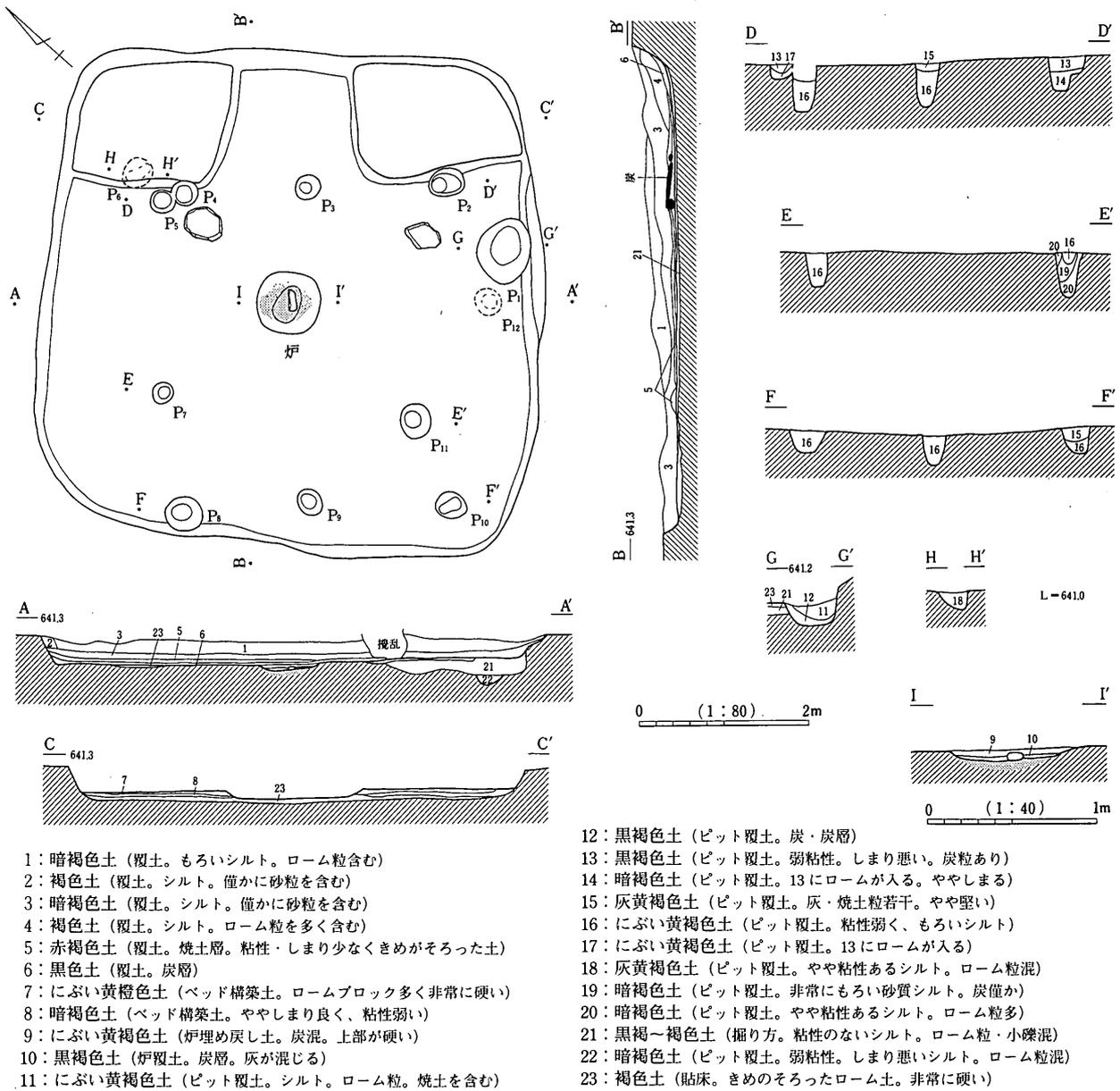


図 11 23号竪穴住居跡

P 1は大形の甕が入っており、貯蔵穴としての役割が考えられるだろう。なお、P 1およびP 2の斜め中央寄りに平石が各1個置いてあった。何かの台石であろうか。

第二次住居の床面からは多量の炭化材・炭化物が検出された。炭化材は燃焼前の形状をとどめるものが多く、一定方向に横たわる様相も看取される。さらにそれらを覆う多量の焼土が存在する。こうした状況から、これら炭化材が住居の上屋構造材であり、何らかの事由により埋没以前に焼け落ちた考えられる。やや根拠に乏しいが、炭化材を覆う焼土は土壁の可能性を示唆しようか。

遺物 床面から多量の土器が出土した。完形ないし完形に復元可能な土器も多い。幾つかの出土集中箇所があり、特にP 1とP 2の間は、小形甕・高坏・鉢ないし片口鉢が集中する箇所、それぞれ、7個体・6個体・6個体が密集して検出された。匙形土製品(?)もこの付近から出土した。

1は頸～肩部に櫛描T字文を施す大形の壺、2・3はヒサゴ壺である。2は口唇部に刻み目を有する。甕は、胴部が球形化し、頸部の屈曲・屈折は強い。文様は6～8が胴上半部に櫛描羽状文を施し、9は口縁

立上がり部の外面に櫛描波状文を廻らせる。波状文をもつ10は焼成前に底部が切り取られているため、機能的には甕でない。11～19は小形甕、4・5は小形台付甕である。前者は波状文を施すものが殆どで、11は折返して肥厚させた口縁部に指圧痕を連ねる。高杯は、伝統的な形態を残す一方、外来的要素の模倣・影響もみられる。坏部形態は、20が屈折して外反する坏部、21～24および26～28は内彎ないし直線的に立ち上がる鉢状の坏部、25は若干ながら外面に底部を有する。脚部は、ハ字状に開く形態のみで、柱状部を有するものはないが、端部を屈曲させる(20～22、24)、端部が直線的に終わる(23・27)、高さの割りに長い裾が大きく開く形態(26・29)がみられる。円形透孔をもつものも多い。30の小形器台は内彎する受部と直線的に開いて終わる脚部を有する。31の蓋は小形甕と組合うものであろう。32は底部穿孔の有孔鉢、33・34は体部が斜め上方に立ち上がり口縁をやや内彎させた鉢、35～39はそれとほぼ同じプロポーションで片口形の鉢、40は体部上半が強く内彎する片口鉢である。赤彩土器はごく少なく、図示したものなかでは1点のみである。その他、台石(245・248)、砥石(254)が検出されている。

**分析** 建築部材と考えられる炭化材14点の樹種同定を行ったところ、クリとニレ属を主とし、コナラ節とカバノキ節が少数認められた。樹種構成はやや豊富といえる。

**時期** 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期新段階に位置付けられる。

**27号竪穴住居跡** (図12・45)                      位置ⅢA-15・20、B-11・16

**検出** Ⅳ層上面で検出した。覆土は床面上に炭と焼土が入る層が薄く堆積し、その上に淘汰された黒褐色土が堆積しており、自然埋没と思われる。29号住居を切り、26号住居に切られる。

**構造** 平面方形を呈し、床面規模6.0以上×9.6mを測る大形の住居である。軸方向はN-48°-E。床はローム質土を貼って敲き締めた堅緻なもので、残存部では周溝際まで全面に認められる。周溝は部分的に途切れるが、ほぼ壁の直下を全周する。北西壁から直角に伸びる溝があり、間仕切り溝であろう。主柱穴は2基確認され、さらに、ほぼ等間隔で壁を切るように掘り込まれた柱穴4基がある。炉は中軸上の柱穴間に位置する。床を円形に掘り窪めた地床炉で、炉縁石を据え付けてある。床面の、主に壁際で炭化材が検出された。

**遺物** 土器は床面直上には少なく、図示したものは覆土中の出土である。1は櫛描波状文の甕である。肩が張り、屈折気味に立上がって外反する口縁部をもつ。2は櫛描波状文を施す小形甕。3は斜めに立ち上がる体部の鉢である。他に磨石(202・228・233)が検出されている。

**分析** 建築材かと思われる炭化材6点の樹種同定結果は、すべてコナラ節であった。

**時期** 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期新段階と思われる。

**28号竪穴住居跡** (図13・45)                      位置ⅢA-5

**検出** Ⅳ層上面で検出した。覆土は黒褐色土の単層である。26号住居に切られる。

**構造** 平面方形の、南東辺が8m以上ある大形の住居である。軸方向はN-49°-E。貼床はないが、堅固な床面である。周溝は南東壁際に長さ4m程検出された。主柱穴と見做し得るP1を除いて柱穴はあまり明確でない。炉は検出されなかった。

**遺物** 床面直上で壺(1)、肩が張る櫛描波状文の甕(2)、小形甕(3)が出土した。

**時期** 古墳時代前期前半に位置付けられよう。宇賀神編年Ⅰ期新段階であろう。

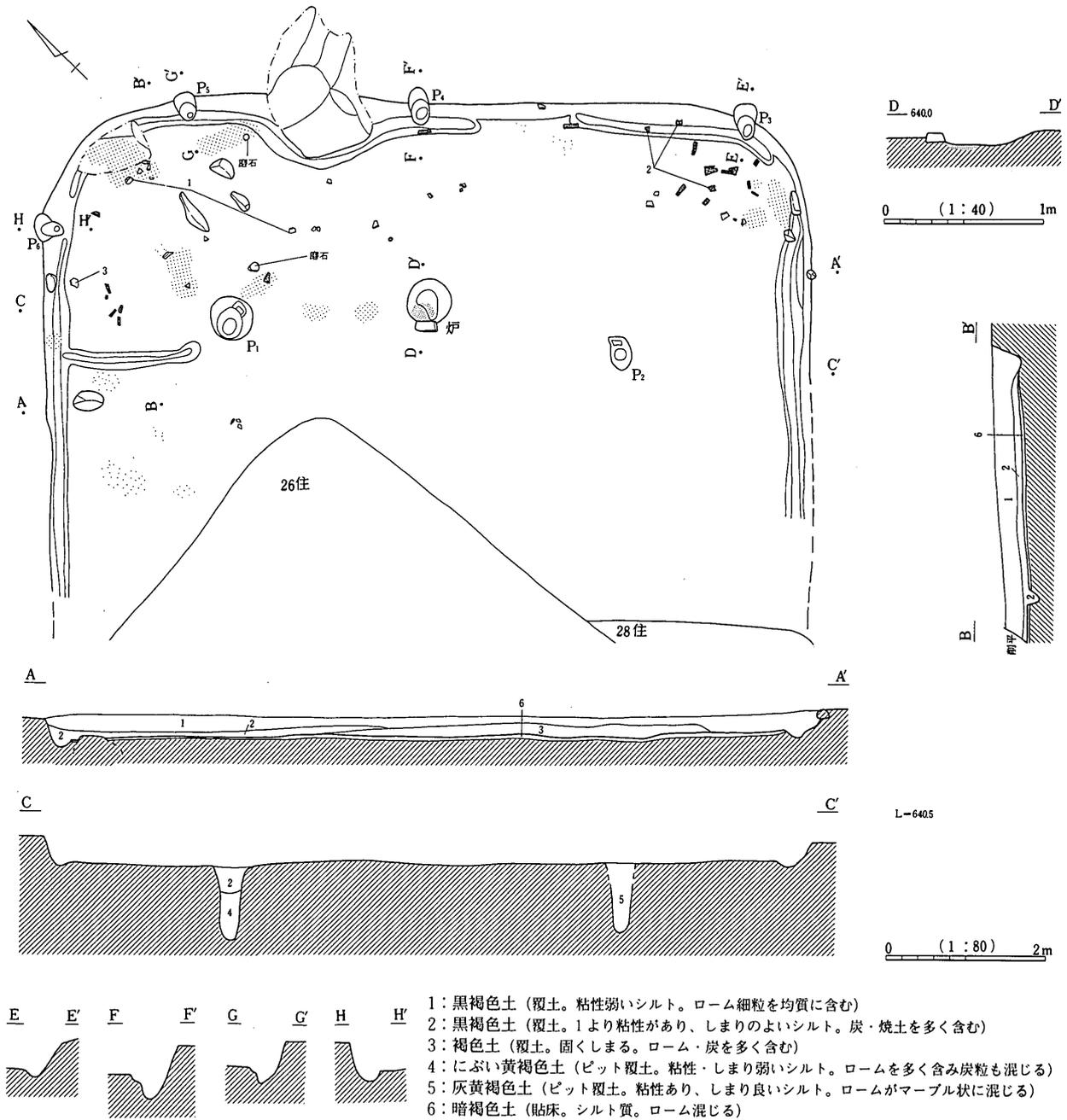


図12 27号竪穴住居跡

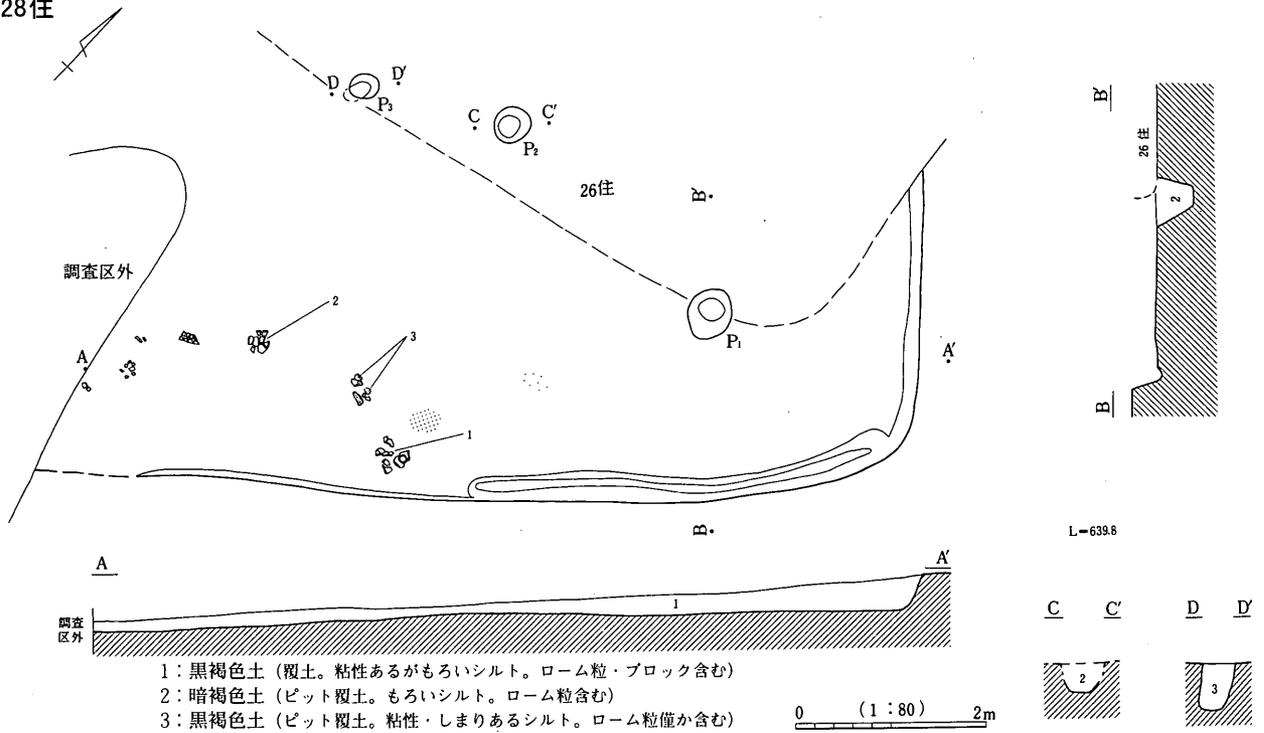
29号竪穴住居跡 (図13) 位置 III A-9・10・14・15

検出 IV層上面で検出した。覆土は暗褐色土の単層である。27号住居に切られる。

構造 平面方形を呈し、床面規模6.6以上×7.0m。軸方向はN-43°-E。貼床はないが、硬化した床面である。周溝は壁残存部の直下を全周する。ただし、南東壁に一箇所途切れ部がある。P4・P5は支柱穴であろう。形態が大きく異なるのは住居廃絶時の柱の抜取りによるものか。炉は確認されなかったが、削平された南西部にあったと思われる。

遺物 床面および覆土から櫛描波状文甕・高坏・赤彩鉢等の破片を検出した。しかし、全て小片で図示できるものはなく、量も多くはない。なお、二重の圏線を伴う円形透かしをもつ土製品(3)が出土したが、縄文時代に属するものであろう。

28住



29住

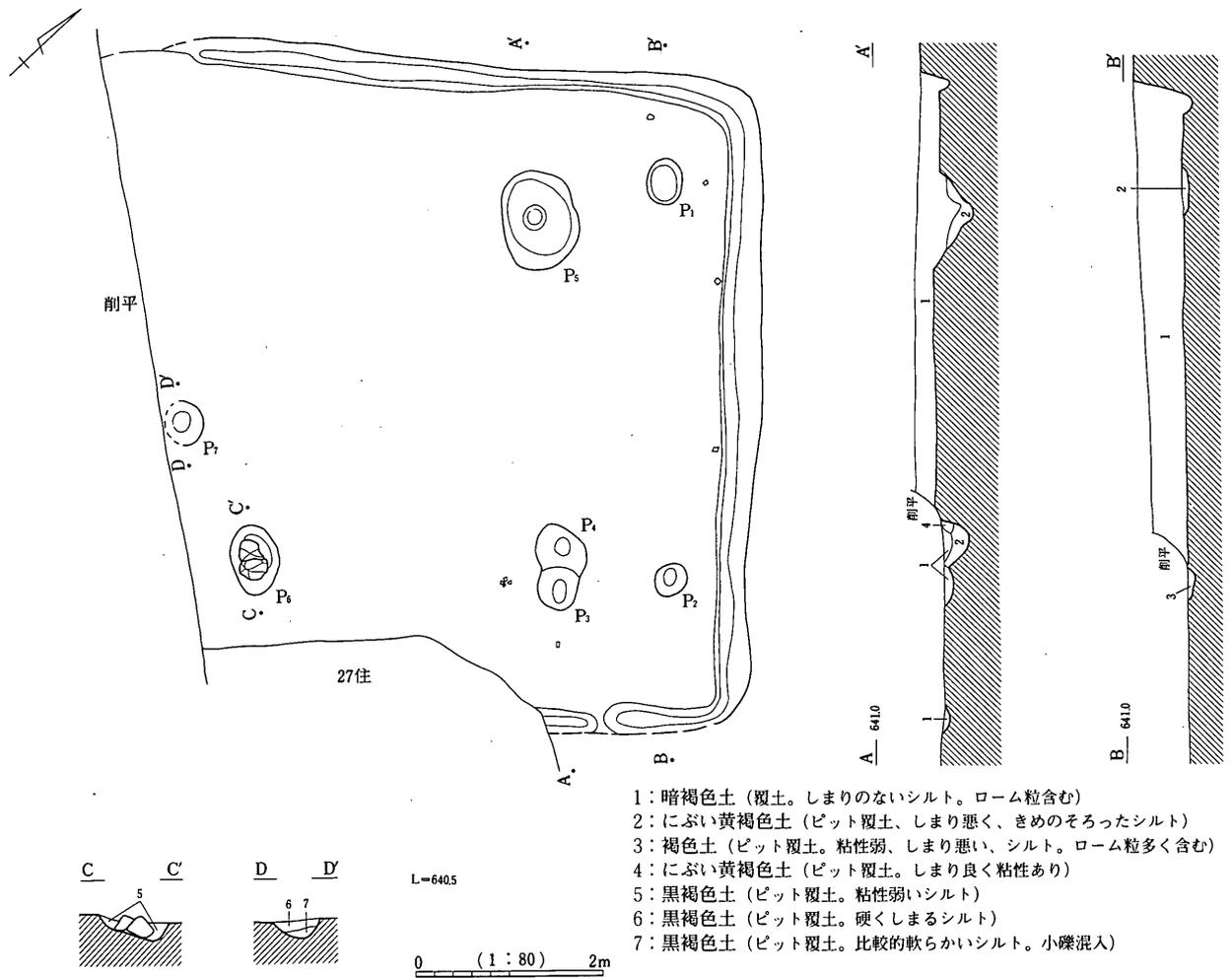


図13 28号・29号竪穴住居跡

**時期** 土器の様相と27号住居との切り合いから古墳時代前期初頭(宇賀神編年Ⅰ期古段階)とする。

**30号竪穴住居跡** (図14・45) 位置ⅢB-17・22

**検出** Ⅳ層上面で検出した。自然流路1に切られ、さらに耕作と道路によって壊されている。

**構造** 平面方形だが、北隅の一角を残すのみで、規模は不明。軸方向はN-50°-E。貼床はないが、硬化した床面である。ピット2基を検出したが、柱穴であるか明確でない。炉は確認されなかった。

**遺物** 床面直上で完形の片口鉢(1)、覆土から土器片版(14)が出土した。

**時期** 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期と思われる。

**35号竪穴住居跡** (図14・45) 位置ⅠU-18・19

**検出** Ⅳ層上面で検出した。現代の建造物と畑作に攪乱され、住居北部と南西部を失っている。

**構造** 平面方形を呈し、床面規模5.4×5.0m以上、軸方向はN-110°-E。床はきめの揃ったローム質土を貼って敲き締めた堅緻なもので、残存部では壁際を除く全面に施してある。明確な柱穴は認められなかった。炉は住居中央と目される位置にある、楕円形のごく浅い地床炉で、火床赤変部の端に石を一個置くが、据え付けた状況ではない。火床面は東隅近くにもう1基検出された。ある時期に火を使用した痕跡だが、灰黄褐色土を貼って封じ込めている。なお、覆土3層の上面に焼土の堆積と形状を残す炭化材が認められた。その事由は不明であるが、竪穴住居廃絶後の窪地を利用して木材を燃やした跡であろう。

**遺物** 図示した6点の土器はすべて床面直上の出土である。1は直立した長い口縁部に櫛描波状文を施した小形甕。2は蓋。3は有段口縁の器台。4は口縁端部を直立気味に内彎させる小形器台。5は口縁端部に4つの山形突起を付した高坏。6は赤彩の片口鉢。3の口縁は北陸系の要素か。土製品としては床直上出土の碁石形土製品(8)がある。他には台石(242)と磨石が検出されている。

**時期** 古墳時代前期前半、宇賀神編年Ⅰ期新段階と思われる。

**38号竪穴住居跡** (図14・45) 位置ⅠU-25、V-21

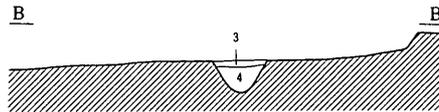
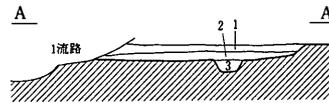
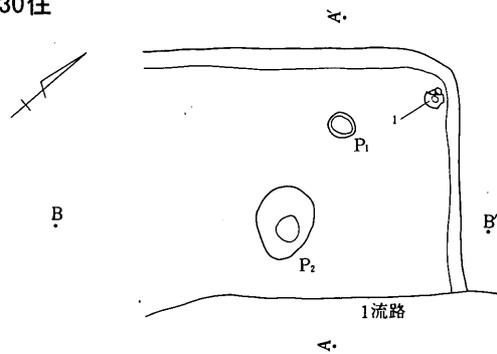
**検出** Ⅳ層上面で検出した。21号住居に切られ、さらに配水施設の攪乱を受ける。

**構造** 東北の一部を残すのみだが、南北4.0m強の隅丸方形と思われる。軸方向はN-84°-E程度であろう。貼床はないが、硬化した床面である。炉は東壁よりに位置する。床を楕円形に掘り窪め、暗褐色土を貼って構築している。柱穴は検出されなかった。

**遺物** 炉内からほぼ完形のいわゆる小型丸底埴(1)が出土した。小さく扁平な胴部から屈曲して長い口縁部が内彎気味に開く形態で、底部はむしろ平底であるが、バリエーションの一樣態として理解する。

**時期** 1の土器から古墳時代前期後半と考える。宇賀神編年Ⅱ期古段階か。

30住

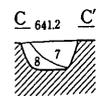
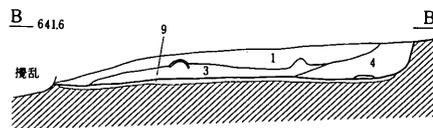
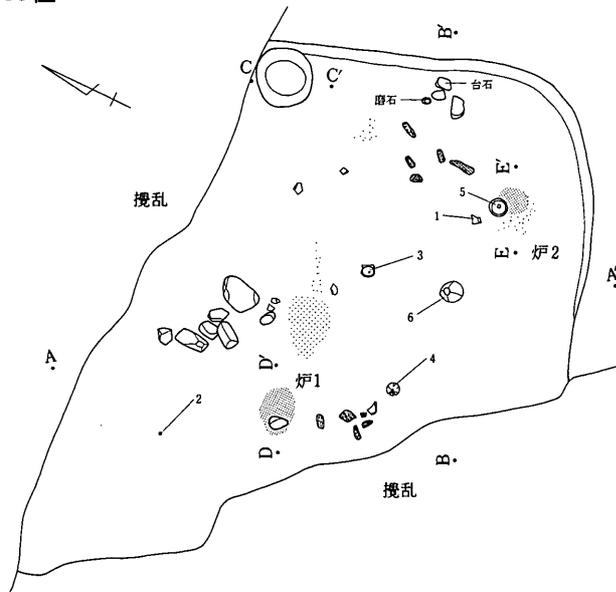


L-6410

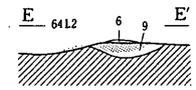
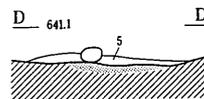
0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。堅くしまった弱粘性シルト。極小礫混入)
- 2: にぶい黄褐色土 (覆土。堅くしまるシルト。ローム混じる)
- 3: 暗褐色土 (ピット覆土。粘性・しまり良いシルト。粘土粒混)
- 4: 黒褐色土 (ピット覆土。きめのそろったシルト)

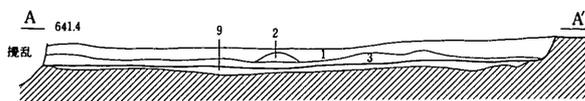
35住



0 (1:80) 2m

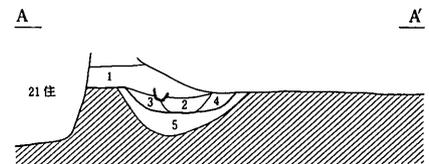
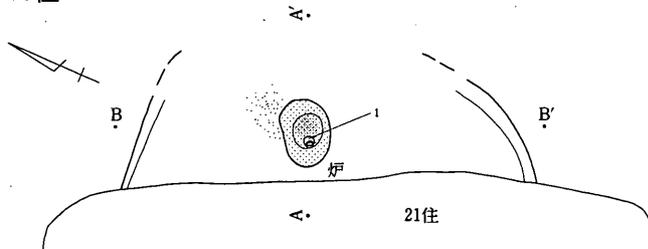


0 (1:40) 1m



- 1: 灰黄褐色土 (覆土。粘性ある砂質シルト。ローム粒少々混じる)
- 2: 明赤褐色土 (覆土・焼土堆積)
- 3: 褐灰色土 (覆土。炭が混じる。しまり良い。ローム粒散る)
- 4: 暗褐色土 (覆土。粘性やや有る砂質シルト。ローム粒散る)
- 5: 褐灰色土 (炉1覆土。砂質シルト。炭混じる)
- 6: 灰黄褐色土 (炉2覆土。砂質シルト。床を形成する)
- 7: にぶい黄褐色土 (ピット覆土。粘性弱い砂質シルト。5cm礫混)
- 8: 灰黄褐色土 (ピット覆土。7より粘性あるシルト)
- 9: 暗黄褐色土 (貼床。硬くしまる)

38住



0 (1:40) 1m



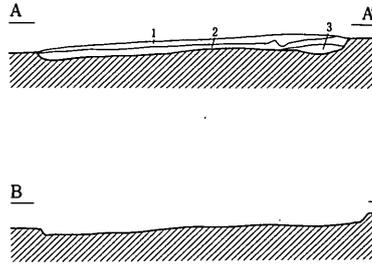
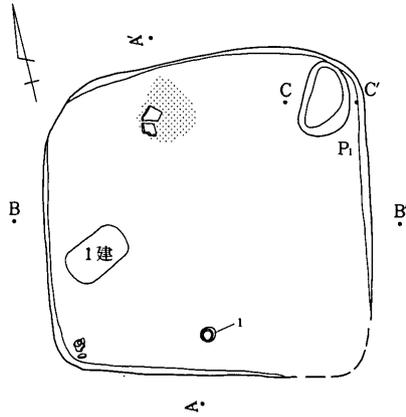
L-6420

0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。粘性あり、しまり良いシルト。僅か炭含む)
- 2: 褐色土 (炉覆土。焼土粒・炭粒の混入土)
- 3: 黒褐色土 (炉覆土。粘性あるシルト)
- 4: 暗褐色土 (炉覆土。焼土層)
- 5: 暗褐色土 (炉掘り方。粘性弱)

図14 35号・38号竪穴住居跡

2住

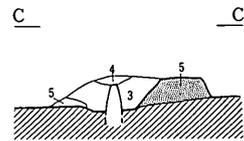
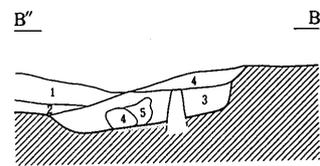
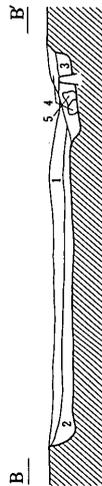
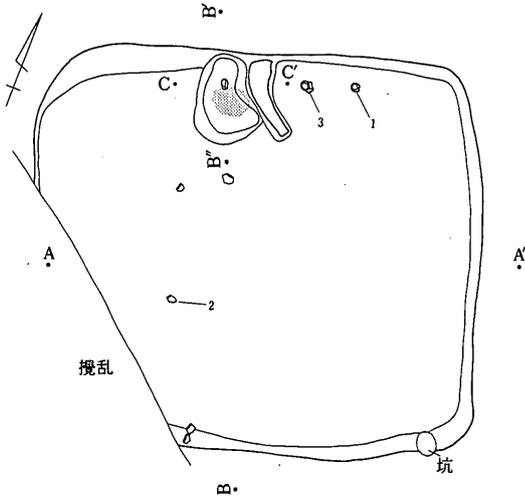


L-6430

- 1: にぶい黄褐色土 (覆土。シルト質粘性少、炭僅か混じる)
- 2: にぶい黄褐色土 (覆土。シルト質。ローム粒混じる)
- 3: 赤褐色土 (焼土にローム粒とシルトが混じる)
- 4: 黒褐色土 (ピット1覆土。砂粒とローム粒が混じる)

0 (1:80) 2m

6住



0 (1:40) 1m



L-6422

0 (1:80) 2m

- 1: 暗褐色土 (覆土。粘性弱くしまりの良いシルト。2~5cmの礫散る)
- 2: にぶい黄褐色土 (覆土。1とロームが混じる)
- 3: 暗褐色土 (カマド覆土。1に焼土が散る)
- 4: 明赤褐色土 (カマド覆土。焼土ブロック)
- 5: 灰赤色土 (袖構築粘土。3に崩壊ブロック入る)

図15 2号・6号竪穴住居跡

(2) 古墳時代後期~平安時代

2号竪穴住居跡 (図15・48)

位置 III B-2

検出 IV層上面で検出した。1号掘立柱建物に切られる。

構造 床面で2.9/3.3×3.3mを測る台形を呈する。軸方向はN-12°-E。貼床はないが、部分的に硬化した床面である。明確な柱穴は認められなかった。北東隅のピットは柱穴とは別の機能をもつものであろう。北壁寄りに焼土溜まりがみられた。火床面として遺存するものではないが、カマドの痕跡と捉えてよいであろう。

遺物 覆土から土器が出土している。1は完形の須恵器高台付坏である。高台は、低く、断面三角形に近い形状を呈し、底面外縁に付けられている。

時期 7世紀末～8世紀前葉と考える。

6号竪穴住居跡 (図15・48) 位置 III B-7

検出 IV層上面で検出した。8号住居を切る。

構造 平面方形で、床面規模3.9×4.5 m。軸方向はN-21°-W。貼床ではなく、竪穴掘り方底を整形し平坦にした床面で、硬化していない。柱穴は認められなかった。カマドは北壁中央に付設されており、粘土で構築した右袖が残る。内部には支脚石を立てている。支脚の前面は良く焼けていた。

遺物 覆土から土器が出土している。1・2は須恵器坏である。3は須恵器鉢で、植木鉢形の体部をもち、底部側面が突出する。土器以外は磨石が検出された。

時期 8世紀前半と考える。

9号竪穴住居跡 (図16・48) 位置 III B-6・7

検出 IV層上面で検出した。

構造 平面方形で、床面規模2.9×2.9 m。軸方向N-170°-E。貼床ではなく、竪穴掘り方底を整形し平坦にした床面で、硬化していない。柱穴は南西隅に1基検出した。カマドは南壁やや西寄りに付設されるが、おそらく廃絶後の解体により、形状をとどめていない。ただし、1 m程延びる煙道が残る。

遺物 カマドおよび覆土から土器が出土しているが、図示できたのは1のハケ調整長胴甕のみである。

時期 6世紀後葉か。

11号竪穴住居跡 (図16・48) 位置 III B-1

検出 IV層上面で検出した。3号住居を切る。東壁を削平されたが、床はほぼ完存している。

構造 平面形状は北辺より南辺がやや短い台形を呈する。床面規模3.1×3.7 / 3.3 mを測る。軸方向はN-6°-W。床は竪穴掘り方凹部を埋め戻すように暗褐色土を貼って構築したもので、上面が硬化している。柱穴は四隅に1基づつ配される。カマドは北壁中央に取り付き、燃烧部が住居壁を三角形に掘り込む。袖は褐色土で形作り、先端に石を据え付けていたらしく、その抜き取り痕が認められる。内部には支脚石を立てている。火床は、燃烧部の範囲を掘り窪め、暗褐色土を敷き固めて構築するとともに支脚の根本を固定している。

遺物 床面直上から、須恵器坏(1・2)、小形の須恵器短頸壺(3)、土師器甕、台石(240)等が出土した。覆土を含めても、出土量は少ない。1の底部にはヘラ記号が施されている。

時期 7世紀前半と考える。

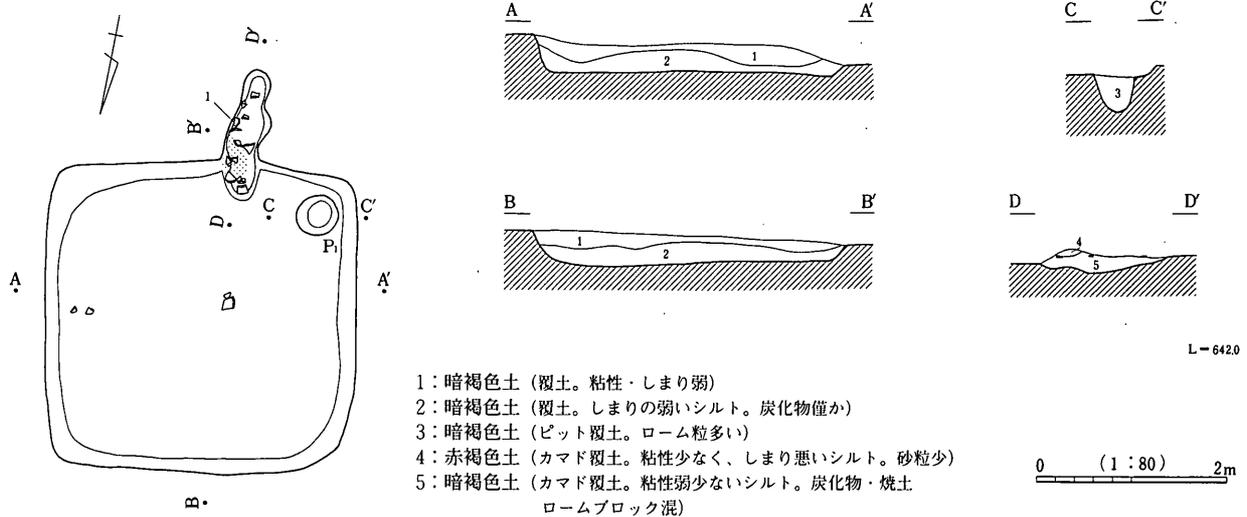
17号竪穴住居跡 (図17・48) 位置 IU-24

検出 IV層上面で検出した。39号住居を切る。西部は調査区外に及び、また、北東隅の一部を除いて、削平と攪乱により壁の大部分が失われたものの、床はある程度の広がりをもって残存する。

構造 やや不明確ながら、床面規模5.0×6.3 m以上あることは間違いない。軸方向はN-68°-Wくらいであろう。床は竪穴掘り方凹部を埋め戻し、さらに黄褐色土を貼り敲き締めている。明らかな柱穴は確認されなかった。P1は貼床の下に位置し、本住居の柱穴ではなからう。南西部の床面上に白色粘土の堆積がみられた。カマド構築土由来と思われる。

遺物 床面直上から、須恵器盤(1)、輪状ないし弧状のプロポーションが推定される異形土製品(1)が出土した。また、全面を研磨してある小円礫(216)が検出されている。

9住



11住

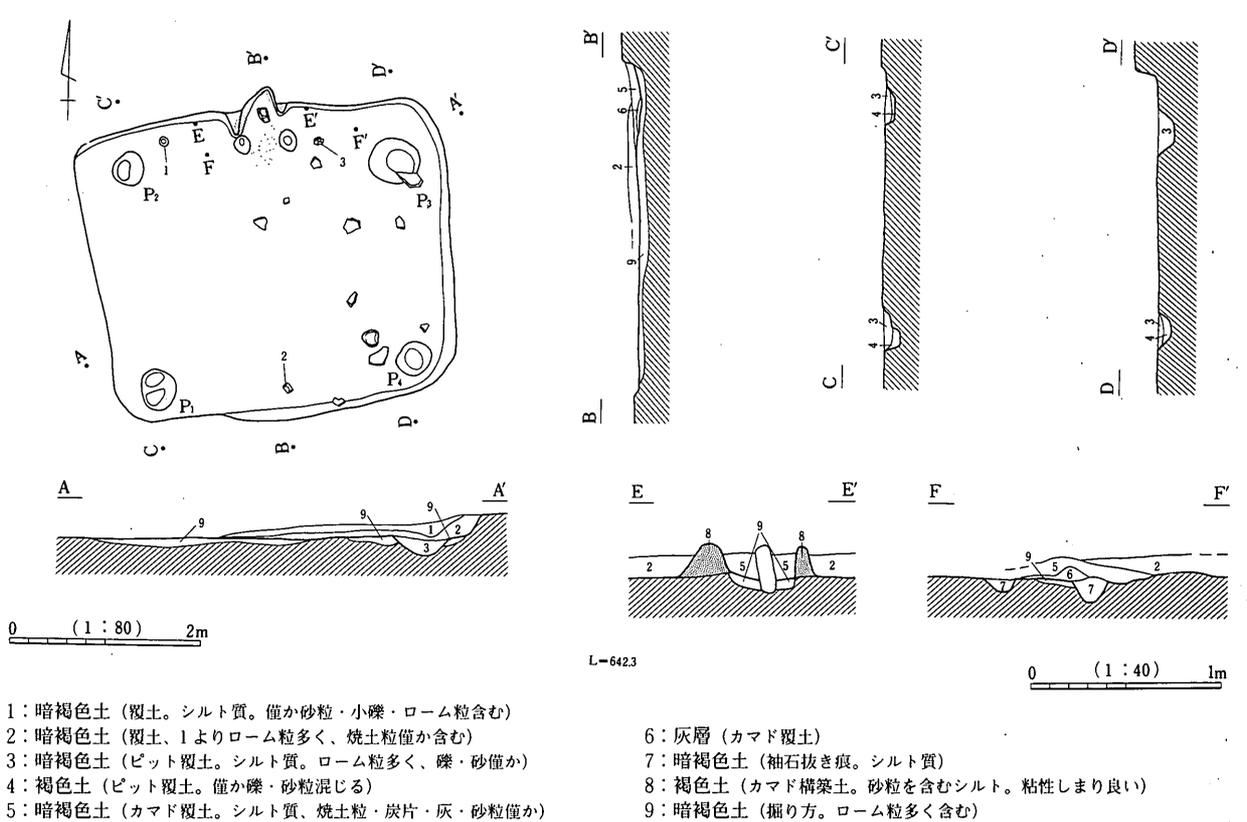


図16 9号・11号竪穴住居跡

時期 8世紀代と考えておきたい。

19号竪穴住居跡 (図18・48) 位置 III B-12

検出 IV層上面で検出した。20号・22号住居に切られる。

構造 平面方形を呈し、床面規模4.5×4.8mを測る。軸方向はN-72°-W。貼床はないが、ほぼ全面が堅固な床面である。周溝は壁の直下をほぼ全周する。ただし、カマドの両脇、北西隅および南西隅、西壁の一箇所に途切れ部がある。四隅に配されたP1~P3・P5は主柱穴と思われるが、非常に浅い。

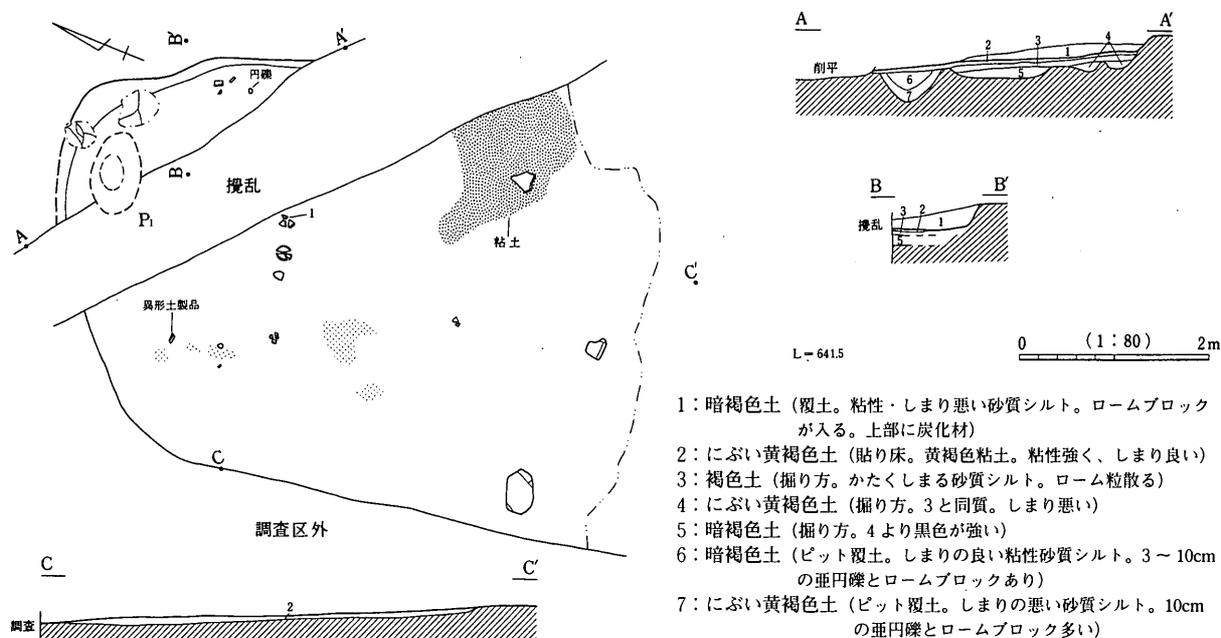


図17 17号竪穴住居跡

東壁中央に付設されたカマドは、扁平な角礫を芯材にし、粘土で固めて左袖をつくっている。右袖はほとんど残っていない。燃烧部奥壁は20cm程立ち上がったところから傾斜が緩くなり、煙道に移行する形勢を示している。なお、火床前部に小形の浅いピットが認められる。支脚の抜き取り痕であろうか。

**遺物** 床面直上から、坏(1・2)、甕(3・4)、小形甕(5)、小形底部多孔甕(6)が出土している。1はTK 43以降の須恵器坏身模倣を原形としたものである。2は扁平な丸底の内黒坏で、底部外面と体部立ち上がりの境は沈線様の鈍い段を成し、内面底はしっかりした平坦面を成す。3はヘラミガキ調整の球胴甕、4は胴部中央に最大径をもつ長胴甕である。土器以外は、カマド覆土最下層から1点(267)、左脇から1点(268)、計2点の滑石製白玉が出土している。

**時期** 6世紀末～7世紀前葉に位置付ける。

20号竪穴住居跡 (図49) 位置 III B-12

**検出** IV層上面で検出した。19・22号住居を切る。削平が著しく、壁は失われたものの、床はある程度の広がりを残す。

**構造** 床は6.0 / 2.5 × 4.5 mの台形状に残存し、そのほぼ全面が硬化している。19・22号住居の覆土部分に限って黄褐色土の貼床を施し、その他の部分は整形のみである。柱穴、カマドは確認されなかった。

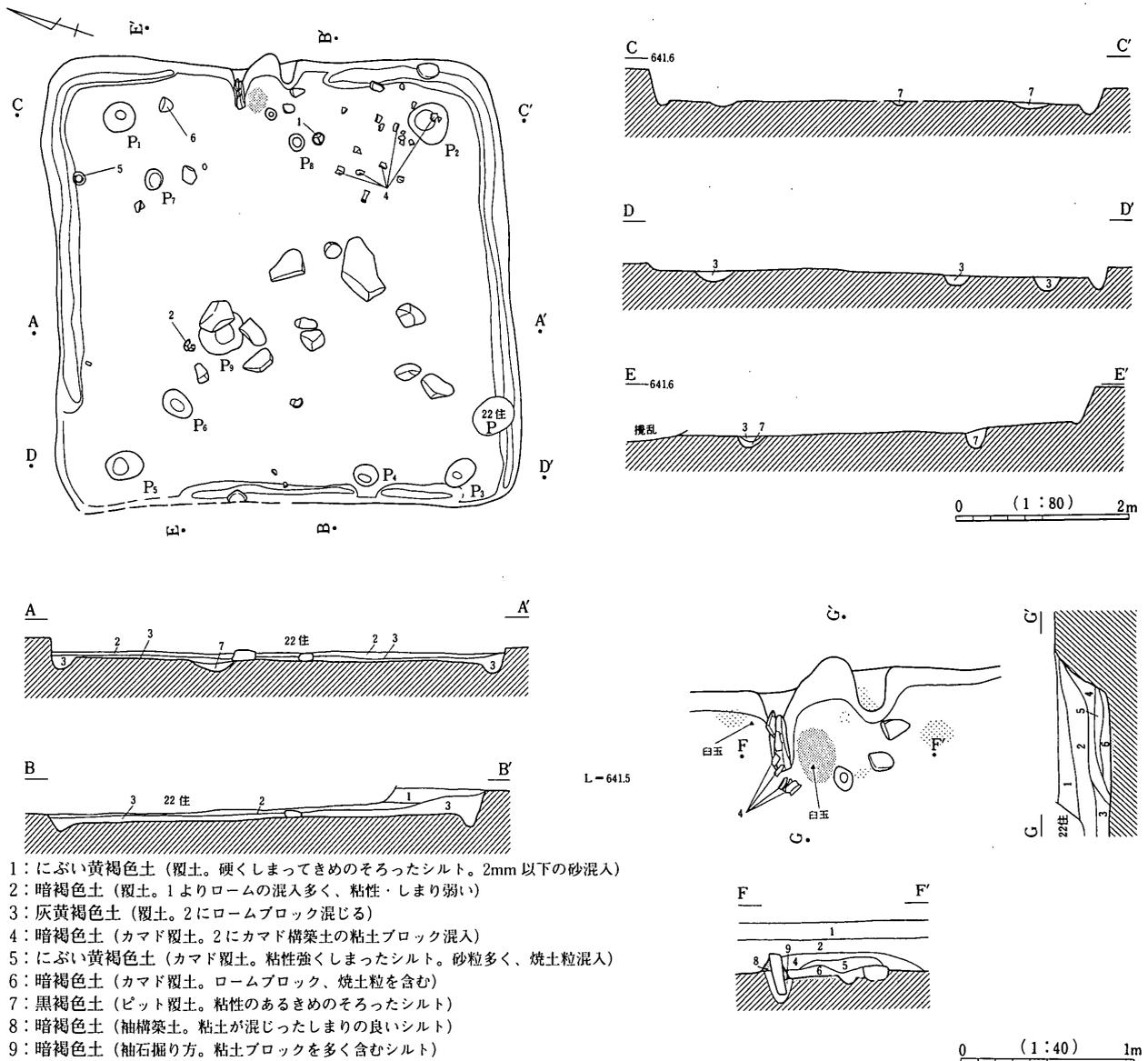
**遺物** 床面および覆土から須恵器坏、土師器坏・埴・甕などの破片が出土した。いずれも小片で、接合率が非常に悪い。底部回転糸切りの両面黒色処理埴(1)のみ図示した。

**時期** 22号住居を切ることから、9世紀中葉以降といえる。

21号竪穴住居跡 (図19・49・50) 位置 IU-25・V-22、III A-5・B-1

**検出** IV層上面で検出した。37号・38号住居を切る。

**構造** 平面方形で、床面規模6.4 × 6.7 mを測る。軸方向はN-24°-W。床は、全面ではないが、黄褐色土を薄く貼って敲き締めた貼り床である。ピットは5基検出された。支柱穴のP1～P4は方形配列

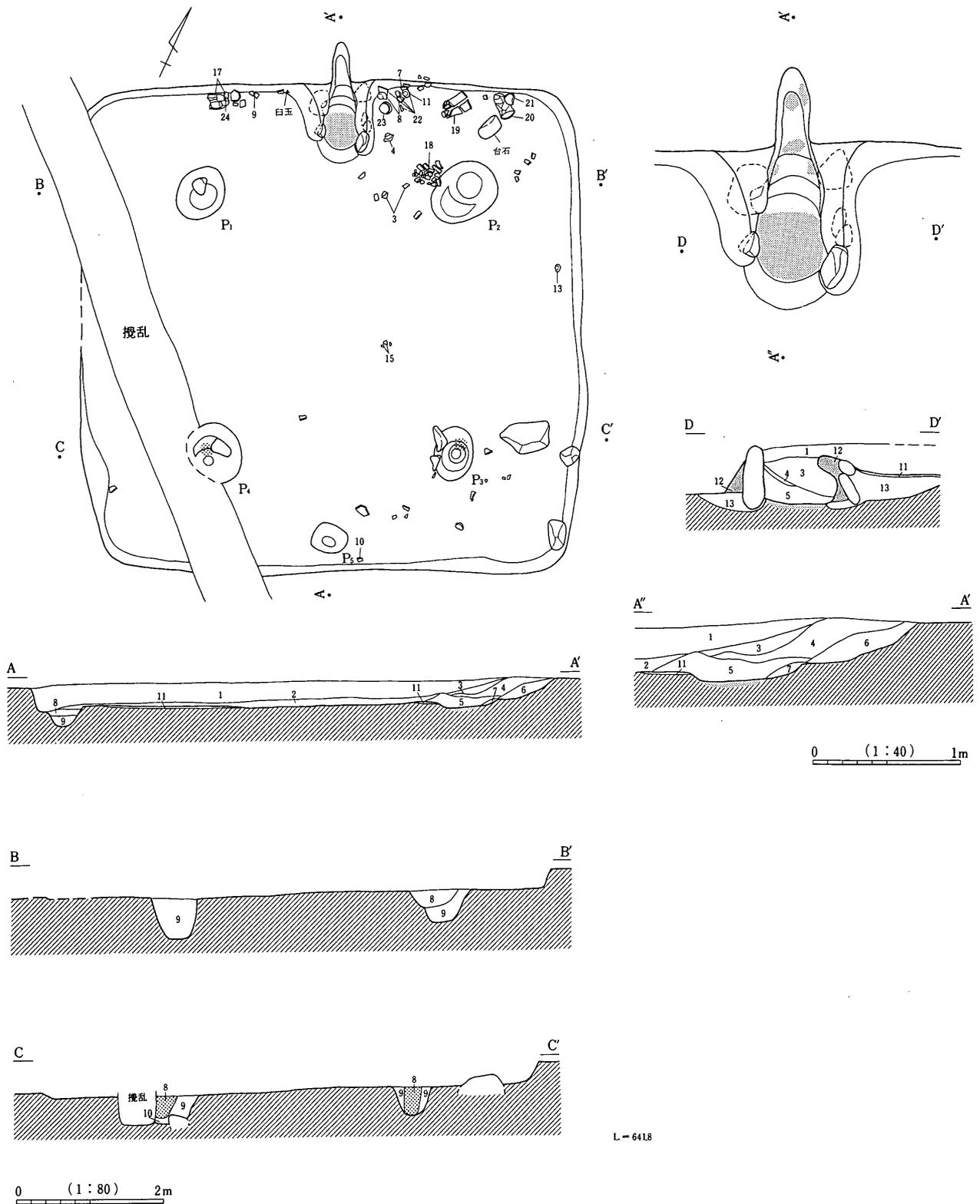


- 1: にぶい黄褐色土 (覆土。硬くしまつてきめのそろったシルト。2mm以下の砂混入)
- 2: 暗褐色土 (覆土。1よりロームの混入多く、粘性・しまり弱い)
- 3: 灰黄褐色土 (覆土。2にロームブロック混じる)
- 4: 暗褐色土 (カマド覆土。2にカマド構築土の粘土ブロック混入)
- 5: にぶい黄褐色土 (カマド覆土。粘性強くしまったシルト。砂粒多く、焼土粒混入)
- 6: 暗褐色土 (カマド覆土。ロームブロック、焼土粒を含む)
- 7: 黒褐色土 (ピット覆土。粘性のあるきめのそろったシルト)
- 8: 暗褐色土 (袖構築土。粘土が混じったしまりの良いシルト)
- 9: 暗褐色土 (袖掘り方。粘土ブロックを多く含むシルト)

図18 19号竪穴住居跡

を呈し、P3・4には柱痕が認められた。P5は入口施設に関係するものか。カマドは北壁中央に付設される。芯材となる細長い礫を数個立て並べて暗褐色土で固定し、さらに灰黄褐色粘質土で固めて袖を構築している。支脚を据え付けた痕跡はない。焚出部前面の床面より10cm程低くなった火床には赤く酸化した被熱面が明瞭に認められる。煙道口は明確ではないが、火床奥側が段を成して高まった後、煙道に移行する。長さ60cm程残る煙道壁・底は部分的に酸化し、覆土には酸化および還元した焼土粒が散っている。

**遺物** 4個体の長胴甕をはじめ、カマド周辺～北壁際に集中する。特にカマド右脇から坏・鉢類がまとまって出土した。図示したものは、4・14を除き床面検出である。器種は、須恵器坏(1～4)、内黒土師器坏(5～11)、高坏(12)、小形鉢(13)、須恵器鉢・長頸壺(14～16)、長胴甕(17～20)、小形甕ないし鉢(21～24)がみられる。1は受部を有する古墳時代タイプの蓋坏だが、口縁立ち上がりが極端に短く、最終末の形態といえる。土師器坏は、扁平な丸底を呈する底部と体部立ち上がりの境が、痕跡的なものを含めて、沈線状の鈍い段を成し、内面底に屈曲線が巡る器形(5・6・7)、屈曲線はないが内面底はしっかりした平坦面をもつもの(8・9・10)、平底に近い底部から稜をもって体部が立ち上がり、内面に屈曲線をもつもの(11)がある。長胴甕は、胴部に張りを残し、最大径位置が胴部にあるもの(17)、胴部径と口縁部径が等しいもの(18・19)、



- |                                 |                                 |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1: 暗褐色土 (覆土。粘性弱い砂質シルト。大中の礫が混入)  | 8: 黒褐色土 (ピット覆土。柱痕。きめのそろった粘性シルト) |
| 2: 暗褐色土 (覆土。しまりの弱い砂質シルト。炭・焼土僅か) | 9: 暗褐色土 (ピット覆土。ロームブロック混)        |
| 3: 褐色土 (カマド覆土。粘性の弱い砂質シルト)       | 10: 褐色土 (ピット覆土。ローム質土)           |
| 4: 褐灰色土 (カマド覆土。袖構築土の崩落)         | 11: 明黄褐色土 (貼床。硬くしまる)            |
| 5: にぶい褐色土 (カマド覆土。焼土混じるシルト)      | 12: 灰黄褐色土 (袖構築土。硬くしまる粘土質シルト)    |
| 6: 褐色土 (カマド覆土。焼土混)              | 13: 暗褐色土 (袖石掘り方。粘性の弱いシルト)       |
| 7: 灰層 (カマド覆土。骨片あり)              |                                 |

図19 21号竪穴住居跡

口縁部に最大径をもつもの(20)がみられる。土器以外としては、カマド左脇から滑石製白玉1点(269)が出土した。19号住居に類似した状況である。また、匙形土製品(5)、台石(237)、砥石(257)が検出されている。

時期 7世紀前葉に位置付ける。

22号竪穴住居跡(図20・50) 位置 III B-12

検出 IV層上面で検出した。19号住居を切り、20号住居に切られる。削平により南側部分を失う。

構造 北辺部は残存し、平面方形で、床面規模4.4以上×5.7mを測る。軸方向はN-24°-E。貼床ではないが、ほぼ全面硬化した床である。ピットは4基確認された。P1・P3は支柱穴であろうか。北壁中央に付設されたカマドは、赤く酸化した火床と、灰黄褐色土で構築した左袖のみ残存する。

遺物 床面および覆土から土器が出土しているが、量的には少ない。4点を図示した。1・2は底部ヘラケズリのロクロ整形内面黒色処理坏、4は北信型のいわゆる砲弾甕で、体部ロクロ整形ののち胴下部をヘラケズりする。3も同様であろう。3・4とも口縁端部は面取りされている。いずれも床面直上の出土である。他には、打製石斧が検出されているが、流れ込みであろう。

時期 9世紀中葉に位置付ける。

24号竪穴住居跡(図20・50) 位置 III A-9

検出 IV層上面で検出した。削平と攪乱により南東～南西部を失う。

構造 平面方形で、床面規模4.6m以上×4.5m前後と推定できる。軸方向はN-70°-E。床は部分的に硬化している。貼床はない。ピットは4基確認されたが、いずれも柱穴とは見做し難い。カマドは北東壁中央に取り付く。深さ30cm程の掘り方を暗褐色土で埋め戻した上に、褐色粘土を使用した袖が構築される。煙道口の高さは20数cmで、煙道はそこから少し水平に伸びたあと、斜めに立ち上がる形勢を示す。

遺物 1・2は体下部～底部に回転ヘラケズリを施す須恵器坏で、カマド出土。ほぼ完形の2は火床直上に堆積した灰層上面に伏せてあった。カマド廃絶儀礼の一形態と考えられる。3は平瓶の天井部。4は縦長の透かしをもつ小形鉢形の須恵器である。透かしの幅・数は不明。5はやや肩が張る球胴甕。6は須恵器高坏で、坏部は2の坏を横長にしたような器形である。3・4は床、5・6は覆土～床出土。他は磨石(229)が検出されている。

時期 8世紀中葉に位置付ける。

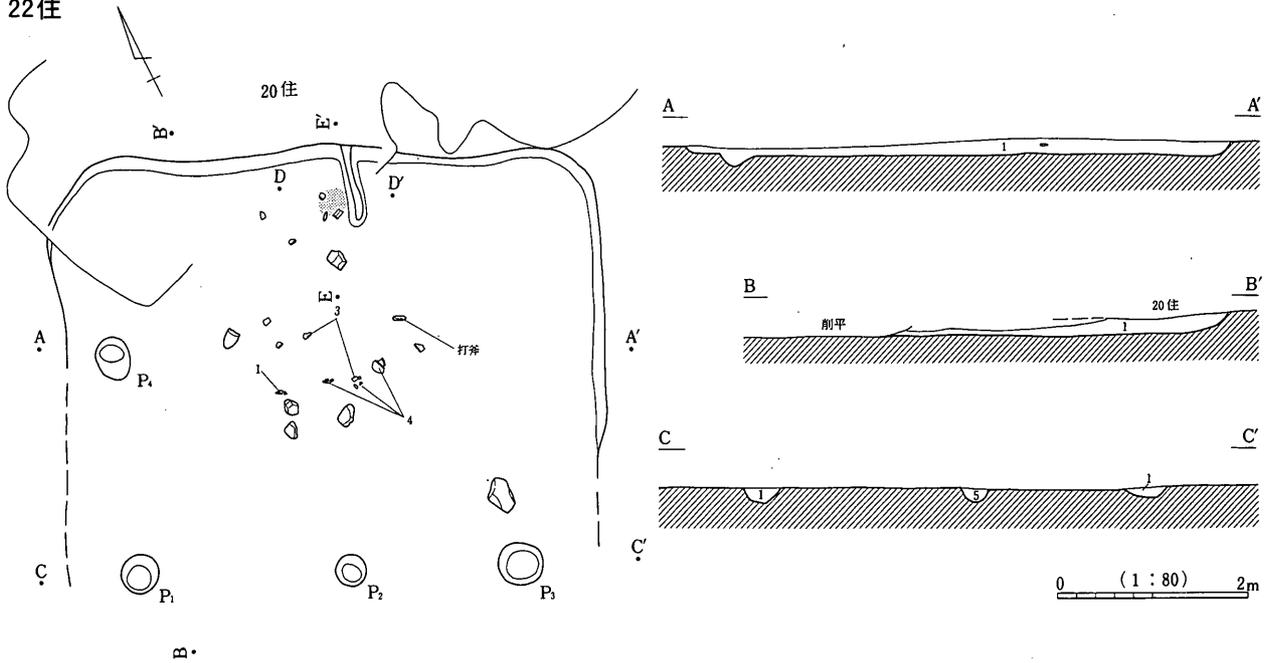
26号竪穴住居跡(図21・50・51) 位置 III A-20

検出 IV層上面で検出した。27・28号住居を切る。削平により、南壁～西壁を失っているが、床および掘り方が遺存していたため、規模・形状をおさえることができた。

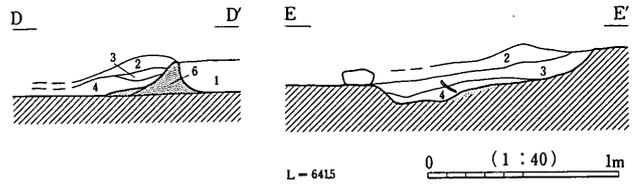
構造 平面形状は方形を呈し、方形床面規模7.3×7.2mを測る。軸方向はN-3°-W。床は、竪穴掘り方底に暗褐色土を厚さ10～20cmに敷いて上面を敲き締めている。ピットは12基検出された。P1・3・4は支柱穴痕であろう。北壁中央に付設されたカマドは、深い掘り方をもち、芯材として扁平な角礫を数個立て並べ、粘質土で固めて袖を構築している。燃烧部中央に支脚抜き取り痕と思われる小形のピットがある。焚出部前面には天井石と思われる平石があり、その上によく焼けた細長い礫が乗っていた。支脚石の可能性が高い。カマド廃絶儀礼の一形態を示す状況であろう。

遺物 1は須恵器坏蓋、2は坏身でTK 209併行と思われる。3～7は土師器坏である。3は浅い半球形の体部をもつ。4は平底気味の丸底を呈し、体下部外面はヘラケズリ。5は扁平な丸底を呈する底部と体部

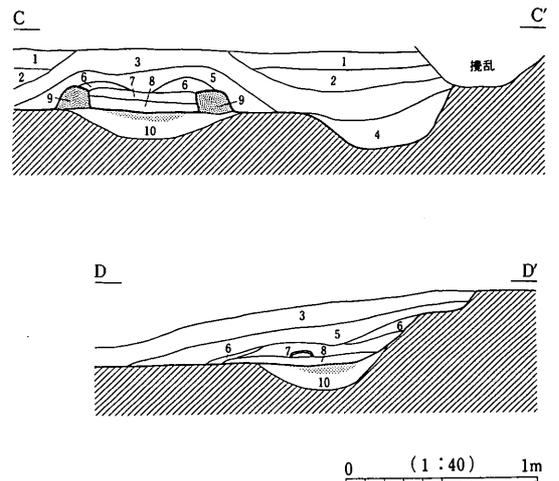
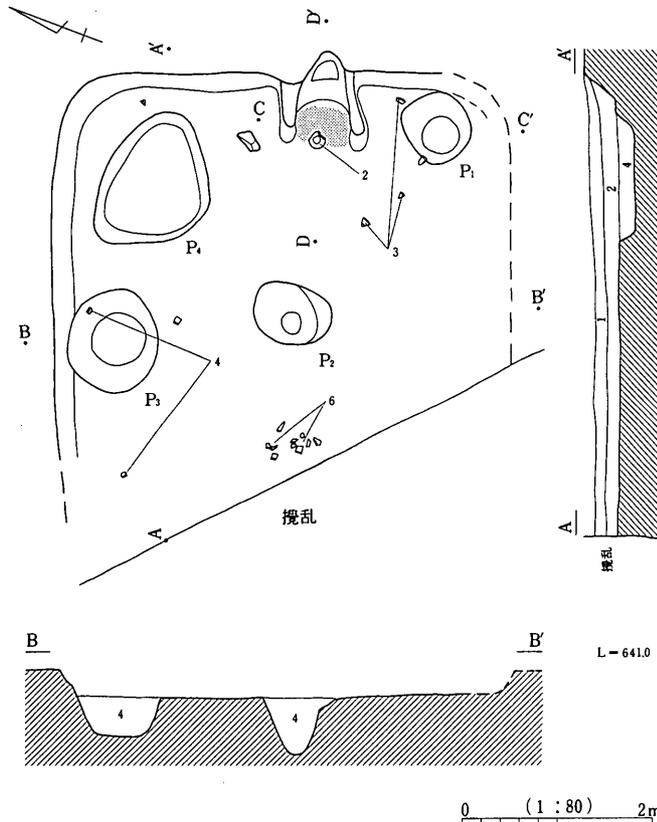
22住



- 1: 暗褐色土 (覆土。粘性弱く、ややしまりある)
- 2: 浅黄橙色土 (カマド覆土。カマド構築粘土崩落。きめがそろっている)
- 3: 明赤褐色土 (カマド覆土。天井の焼土崩落。しまりのないシルト)
- 4: にぶい黄褐色土 (カマド覆土。比較的しまり良いシルト)
- 5: 灰黄褐色土 (ピット覆土。硬くしまったシルト。2~3cmの礫多い)
- 6: 灰黄褐色土 (袖構築土。良くしまり、2~3cmの礫を含む)

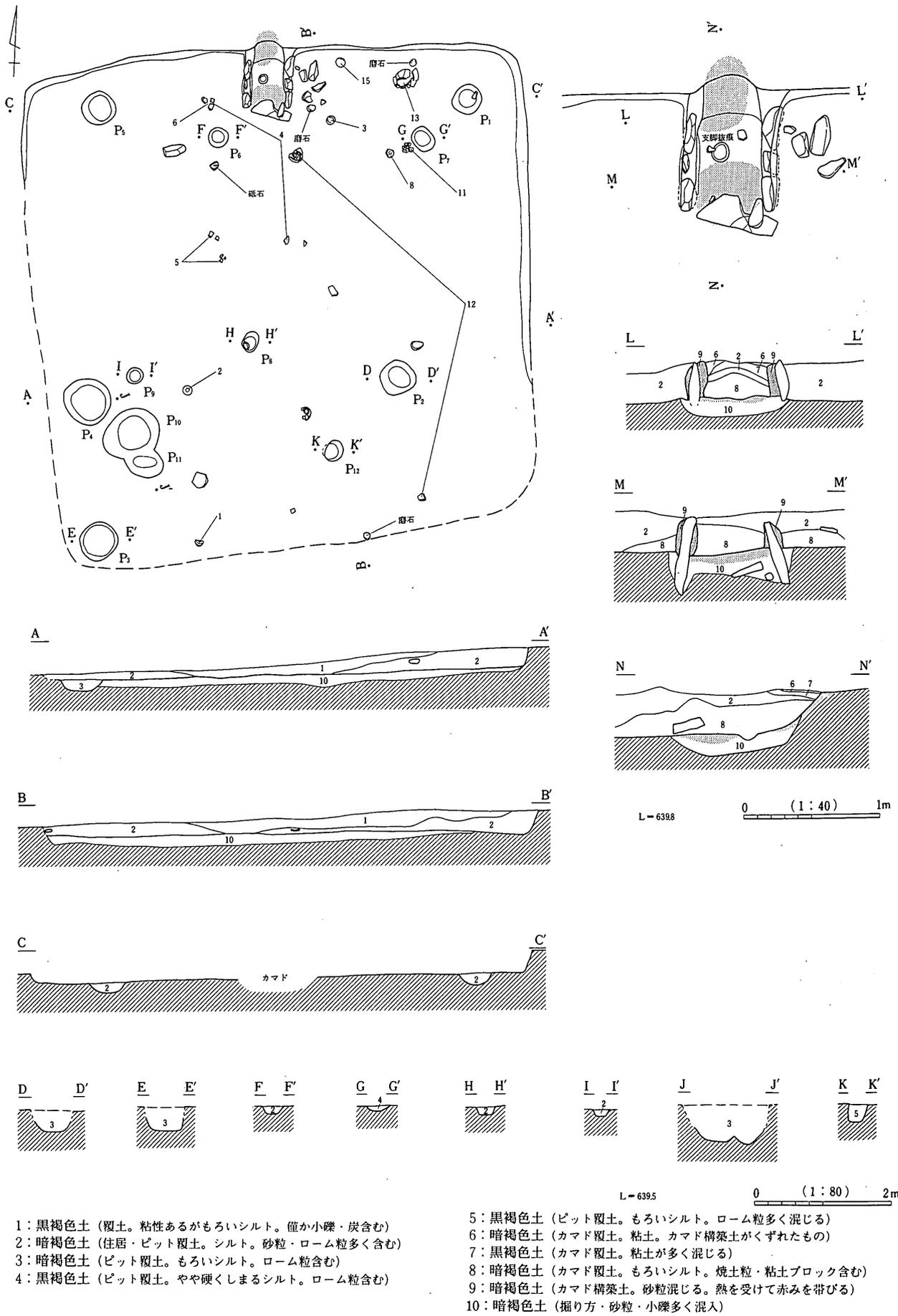


24住



- 1: 黒褐色土 (覆土。粘性・しまり弱いシルト)
- 2: にぶい黄褐色土 (覆土。1より粘性あるシルト)
- 3: 褐色土 (覆土。しまりの少ないシルト。ローム多く含む)
- 4: 暗褐色土 (ピット覆土。もろいシルト。砂礫・小礫混)
- 5: 褐色土 (カマド覆土。しまり少ないシルト。粘土混じる)
- 6: 褐色土 (カマド覆土。粘土含む。しまり良い)
- 7: にぶい赤褐色土 (カマド覆土。砂礫が焼けた層)
- 8: 灰黄褐色土 (カマド覆土。灰層。粘り強く炭も混じる)
- 9: 褐色土 (カマド構築土。粘土が多く、しまり良い。焼土粒多)
- 10: 暗褐色土 (カマド掘り方。粘性弱、もろいシルト)

図20 22号・24号竪穴住居跡

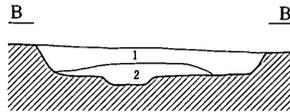
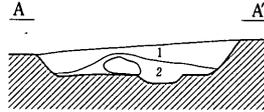
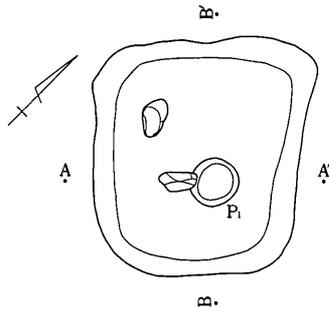


- 1: 黒褐色土 (覆土。粘性あるがもろいシルト。僅か小礫・炭含む)
- 2: 暗褐色土 (住居・ピット覆土。シルト。砂粒・ローム粒多く含む)
- 3: 暗褐色土 (ピット覆土。もろいシルト。ローム粒含む)
- 4: 黒褐色土 (ピット覆土。やや硬くしめるシルト。ローム粒含む)

- 5: 黒褐色土 (ピット覆土。もろいシルト。ローム粒多く混じる)
- 6: 暗褐色土 (カマド覆土。粘土。カマド構築土がくずれたもの)
- 7: 黒褐色土 (カマド覆土。粘土が多く混じる)
- 8: 暗褐色土 (カマド覆土。もろいシルト。焼土粒・粘土ブロック含む)
- 9: 暗褐色土 (カマド構築土。砂粒混じる。熱を受けて赤みを帯びる)
- 10: 暗褐色土 (掘り方・砂粒・小礫多く混入)

図21 26号竪穴住居跡

31 竪

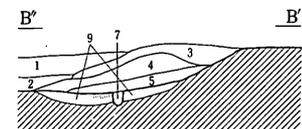
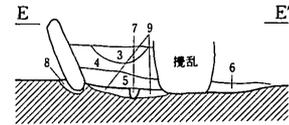
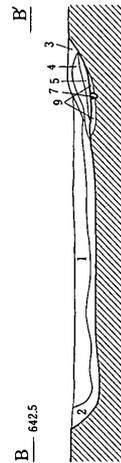
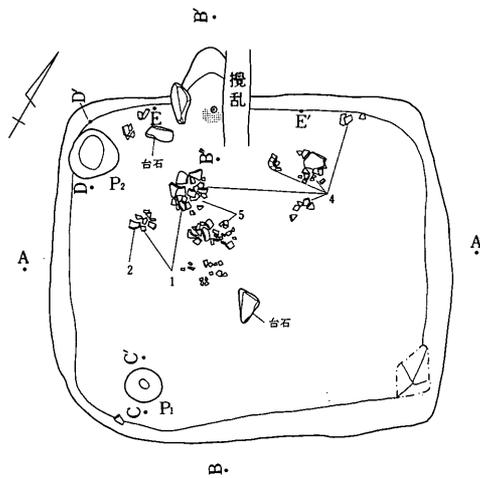


L-6415

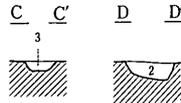
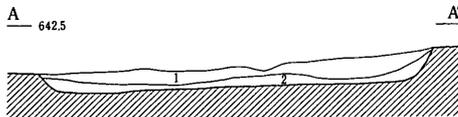
0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。もろいシルト。ローム粒・塊混入 僅かに砂粒・礫混入)
- 2: 黒褐色土 (覆土。1よりローム粒・塊の混入少)

32 住



0 (1:40) 1m



L-642.2

0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。シルト。人頭大の礫多く、焼土・砂混入)
- 2: 暗褐色土 (覆土。ローム粒多く、人頭大の礫が混入)
- 3: 暗褐色土 (カマド覆土。砂粒を多く含むシルト。焼土・砂混入)
- 4: 暗褐色土 (カマド覆土。砂粒を僅か含むシルト)
- 5: 暗褐色土 (カマド覆土。砂粒を多く含むシルト)
- 6: 褐色土 (カマド構築土。粘性強くしまり良い。砂粒・焼土粒含む)
- 7: 黒褐色土 (支脚痕。シルト)
- 8: 褐色土 (袖石掘り方。粘性あるシルト。砂粒混入する)
- 9: 黒褐色土 (カマド掘り方。シルト。ロームブロック混)

図22 31号竪穴状遺構・32号竪穴住居跡

立ち上がりの境が沈線状の鈍い段を成し、内面底に屈曲線が巡る器形、6は平底に近い底部で、内面底に屈曲線が巡る。8は丸底で口縁部が内傾する土師器小形鉢。9～11は小形甕。12～14は球胴甕。12は底部が突出し、13は胴の張りが強い。15はボタン状耳をもつ須恵器提瓶である。7を除き床面検出だが、散在的な出土状況である。土器以外は、有溝の砥石(252)、台石(239)、磨石(203・204・207)がある。

分析 覆土およびカマド内出土の種実遺体の同定を行ったところ、どちらからも、イネの穎および炭化した胚乳と、コムギの炭化した胚乳が検出された。また、カマドから獣骨片が出土したが、種は不明。

時期 6世紀末～7世紀前葉に位置付ける。

31号竪穴状遺構 (図22・51)

位置 III A-5

検出 IV層上面で検出した。

**構造** 平面形は台形気味で、床面規模  $2.1 \times 1.8 / 1.6$  mを測る。軸方向は  $N-46^{\circ}-W$ 。床は地山を平坦に整えたもので中央に硬化面がある。カマド・柱穴は認められない。中央やや東隅寄りに径 50cm の浅いピットを検出したが、柱穴とは考えられない。

**遺物** 覆土から土器片が出土している。1は底部回転ヘラ切りののち静止ヘラケズリを施す須恵器坏。他に、土器片板(13)が検出された。

**時期** 8世紀中～後葉を考慮しておきたい。

#### 32号竪穴住居跡(図22・51) 位置 I V-21

**検出** IV層上面で検出した。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模は  $3.3 \times 3.8$  m。軸方向は  $N-30^{\circ}-W$ 。床はカマド周辺と住居中央が硬化している。貼床はない。柱穴は西隅および南隅に1基ずつ確認された。カマドは北西壁中央やや左に取り付く。燃烧部が壁を半円形に掘り込む形態である。構築は、掘り方を埋め、礫と粘質土で袖をつくるが、右袖を攪乱で失っている。燃烧部中央に支脚抜き取り痕とみられる小穴があり、その前面に酸化した被熱面が残る。

**遺物** カマド前面から床面中央にかけて集中的に出土している。1は底部回転ヘラケズリののち静止ヘラケズリを施す須恵器坏、2は器高の低い盤状の須恵器高台付坏である。3は底を抜いた器形の須恵器甑。4・5は外反するくの字状口縁で外面ハケ調整の長胴甕で、中・南信系と思われる。口縁部に最大径をもち、口縁内面は横ハケ調整。5の体部中位には上下のハケメを切るタタキ痕がみられる。土器以外は、カマド左脇(238)と中央付近に台石が検出された。

**時期** 8世紀前葉に位置付ける。

#### 34号竪穴住居跡(図23・52) 位置 I U-15・20

**検出** IV層上面で検出した。北東隅を攪乱される。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模  $5.0 \times 4.8$  m。軸方向は  $N-18^{\circ}-W$ 。床は竪穴掘り方凹部を埋め戻し、さらに灰黄褐色土を貼って敲き締めている。柱穴は南東隅に1基検出された。カマドは北壁中央に付設され、褐色粘土でつくられた袖の基部と火床が残存する。

**遺物** 床面の遺物は、カマド前面と南東隅付近に主に出土しているが、やや散在的である。1は須恵器坏蓋。2・3は坏身で、底部回転ヘラ切りののちナデ。4は須恵器甕。5は外反するくの字状口縁で外面ハケ調整の長胴甕。胴下部はさらにヘラケズリされる。3はカマド覆土出土。他は床直上。南西隅には流れ込みの角礫に混じって磨石(224)が検出された。

**時期** 7世紀後葉に位置付ける。

#### 36号竪穴住居跡(図23) 位置 III A-5・B-1

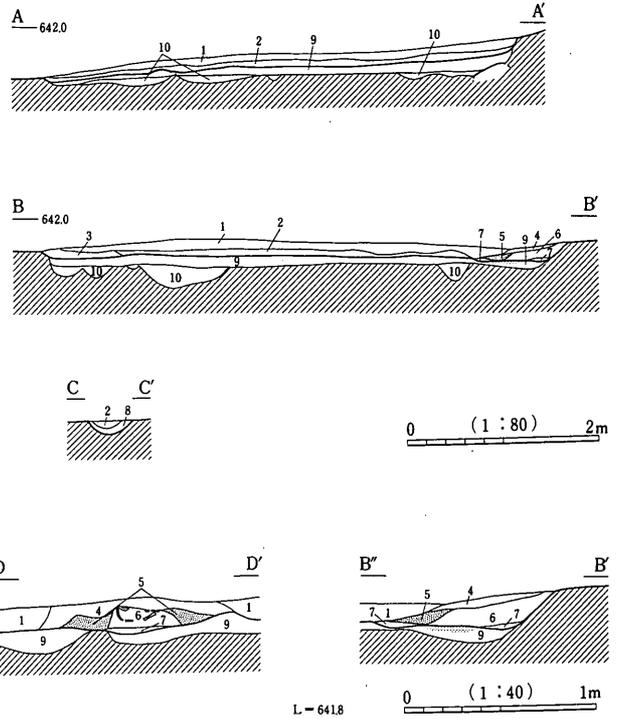
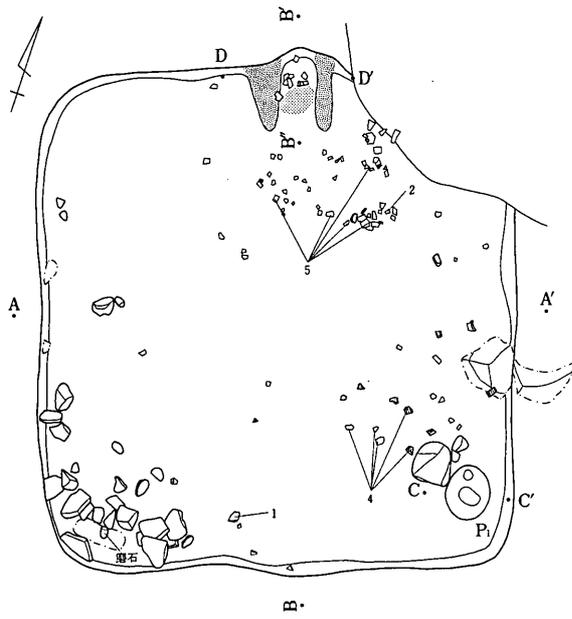
**検出** IV層上面で検出した。5号住居を切る。攪乱のため、東壁～北東隅を残すのみである。

**構造** 北辺3.0 m以上。軸方向は  $N-77^{\circ}-E$  くらいであろう。床は竪穴掘り方凹部を埋め戻して敲き締めている。ピットは1基検出されたが、柱穴かどうか判断しかねる。ピットの覆土は多量の炭化物片を含んでいる。カマドは東壁際に火床が残存し、周囲には焼土粒が散っていた。

**遺物** 床面および覆土から若干の土器片が出土している。小片で図化できないが、かえりのない古代タイプの須恵器坏蓋、土師器小形甕等がある。坏蓋の天井部外面は端近くまで回転ヘラケズリされている。

**時期** 7～8世紀と考慮しておきたい。

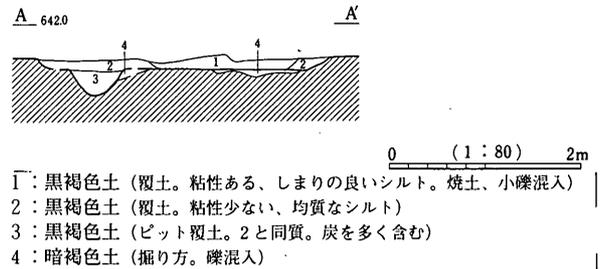
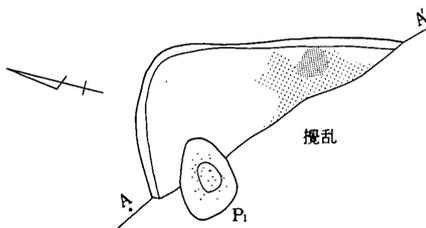
34住



- 1 : 暗褐色土 (覆土。粘性砂質シルト。白色微少礫多い)
- 2 : 黒褐色土 (覆土。粘性しまり弱い砂質シルト)
- 3 : 暗褐色土 (覆土。砂質シルト。ローム粒を多く含む)
- 4 : 灰褐色土 (カマド覆土。しまり良い砂質シルト。焼土粒多く含む)
- 5 : 褐色土 (袖構築土。硬くしまる粘土質シルト)

- 6 : 赤褐色土 (カマド覆土。粘土質シルトの焼土ブロック)
- 7 : 黒赤褐色土 (カマド覆土)
- 8 : にぶい黄褐色土 (ピット覆土。粘性弱い砂質シルト。ローム粒混)
- 9 : 灰黄褐色土 (貼床。シルト質。硬くしまる)
- 10 : 黄褐色土 (掘り方。粘性砂質シルト。ロームと暗褐色土混合)

36住



- 1 : 黒褐色土 (覆土。粘性ある、しまりの良いシルト。焼土、小礫混入)
- 2 : 黒褐色土 (覆土。粘性少ない、均質なシルト)
- 3 : 黒褐色土 (ピット覆土。2と同質。炭を多く含む)
- 4 : 暗褐色土 (掘り方。礫混入)

図23 34号・36号竪穴住居跡

37号竪穴住居跡 (図24・52)

位置 IU-25

**検出** 21号住居の床面精査中に、黒褐色土の陥ち込みとして検出した。その上を21号住居の貼床が一部覆っているため、切り合いは本住居が古い。21号住居と攪乱に切られ、南部～西部を失っている。

**構造** 平面方形で、床面規模は3.5m以上×3.0m以上。軸方向はN-74°-E。床は地山を平坦に整えた後、黄褐色土を貼って敲き締めている。ピットは検出されなかった。カマド燃焼部は北東壁を台形に掘り込んで、外側に張り出した形態となっている。火床は張出し部の前面に赤く酸化した被熱面が残り、その周辺に、崩壊した袖構築土の堆積がみられる。また、カマド左脇にはカマド構築材と考えられる平石が集められている。カマド廃絶儀礼を示すものであろう。

**遺物** 床面および覆土から若干の土器片が出土している。1は須恵器坏で、口縁端部は側方につまみ出され、体下部は回転ヘラケズリ。2は土師器の鉢であろう。3は口縁直下に櫛描波状文を1条巡らせる須恵

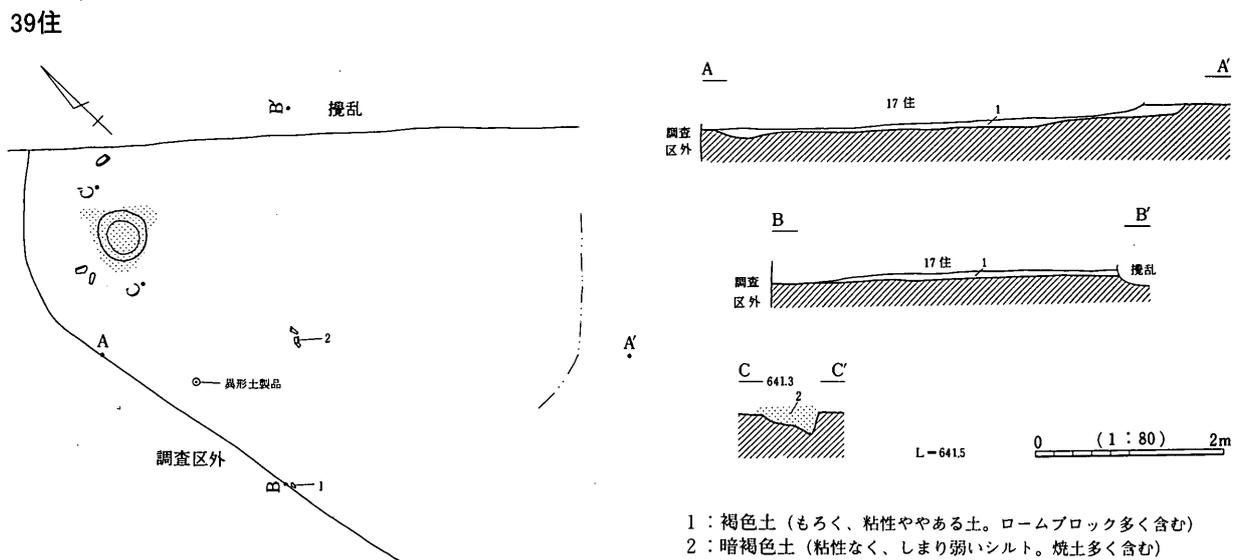
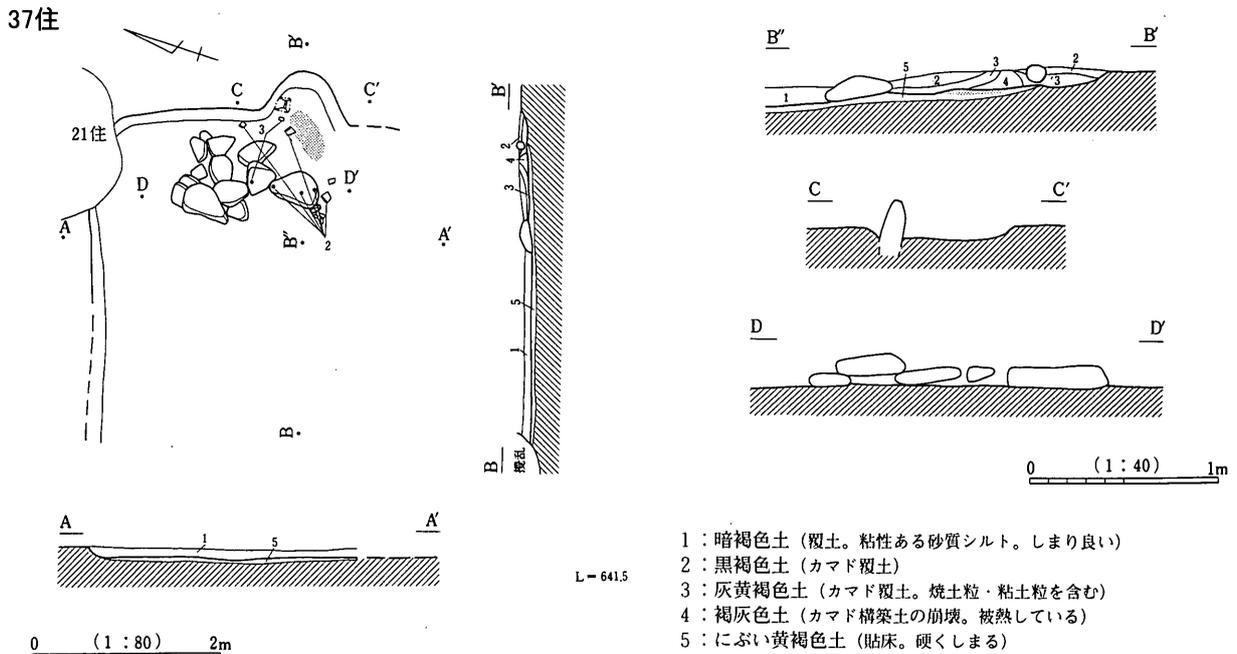


図24 37号・39号竪穴住居跡

器甕。1～3とも床面出土である。

時期 21号住居とほぼ同じかやや古い時期、6世紀後葉～7世紀前葉を考慮しておきたい。

39号竪穴住居跡 (図24・52) 位置 IU-24

検出 17号住居の調査過程で検出した。17号住居の構築によってかなり削平されており、南東部の壁の立ち上りが一部残ってはいるものの、規模・方向とも不明という外ない。

構造 床面は18㎡程残存する。床は竪穴掘り方を平坦に整形したもので、若干硬化している。明確な柱穴・カマドは確認されなかった。ただし、焼土が溜まったピット1基が検出されている。

遺物 1はかえりのない古代タイプの須恵器坏蓋、2は内黒高坏の脚部を切り取った転用坏で、坏部は浅い半球形を呈する。土器以外では、円盤状の体部に突起ないし把手がついた手捏ね土製品(2)がある。いず

れも床面出土である。

時期 7世紀中葉～後葉と考える。

## 2 掘立柱建物跡・柱穴列

1号掘立柱建物跡 (図25) 位置 III B-2・3

検出 IV層上面で検出した。2・3・4号住居を切る。

構造 3×2間の東西棟で、棟軸方向はN-74°-E。規模は桁行5.6m(北側柱列)・5.8m(南列)、梁行5.2m(西列)・4.7m(東列)を測り、東側列より西側列がやや長い台形状の柱配置である。東から二列目の中央柱穴は東柱というより、間仕切りに関係した柱穴であろう。柱間は、桁方向1.8～2.0m、梁方向2.2～2.8m。柱穴掘り方は直径40～60cmの円形プランを基調とするが、不整な方形ないし楕円形を呈するものもある。深さはややバラツキがみられる。

遺物 底部切り離し後回転ナデを施す、古代的器形の須恵器坏小片が出土している。

時期 切り合い関係と土器から、8世紀中葉～後葉と考える。

2号掘立柱建物跡 (図25) 位置 III L-1・2

検出 自然流路2の底面で検出した。IV層上面相当である。

構造 5基の柱穴によって構成され、四角形の西角を隅切りした五角形を描く柱穴配置であるが、1×1間の建物跡と捉えた。棟軸方向はN-40°-E。桁行2.2m、梁行2.3mを測る。柱穴掘り方は直径20cm前後の円形プランを基調とする。

時期 遺物皆無であり、自然流路2との切合いも明らかでないため、時期不明といわざるを得ない。

1号柱穴列 (図25) 位置 III F-10

検出 IV層上面で検出した。

構造 3基の柱穴が直線的に並ぶ。軸方向はN-63°-W。柱間は1.6および1.9mを測る。柱穴掘り方は50×40cmから40×30cmの楕円形プランである。周囲には、類似した形態のピット群が検出されており、それらの一部とともに掘立柱建物を構成する可能性がある。しかし、遺構の見落としがあるのか、整合的な組み立てはできなかった。

時期 遺物皆無であり、時期不明といわざるを得ない。

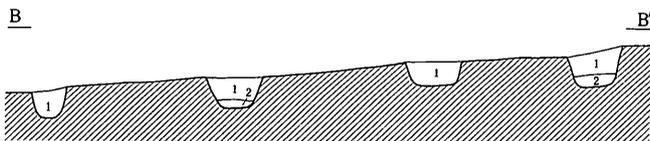
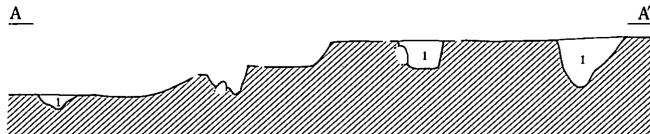
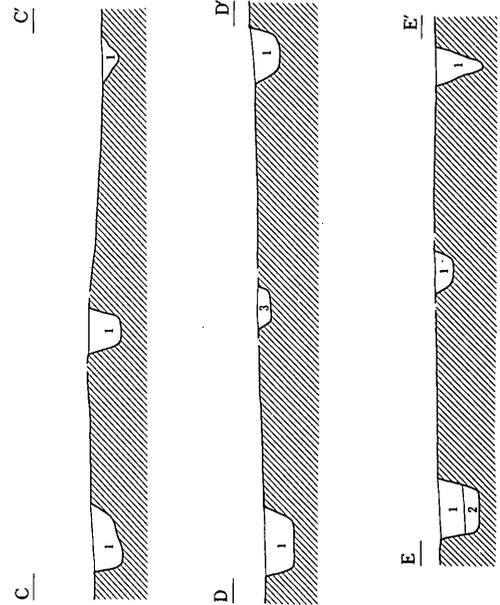
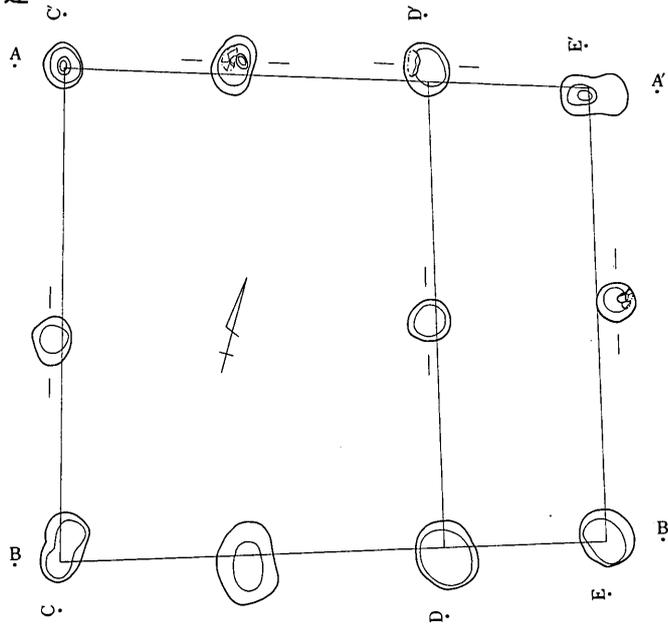
## 3 土坑・ピット群

24号土坑 (図26) 位置 III B-3

IV層上面で検出した。7号住居を切る。一方の端が尖り気味の楕円形を呈し、規模は140×110×30cmを測る。底面は平坦である。覆土に30～10cmの角礫が含まれる。

時期 古墳時代前期以降。

1 建

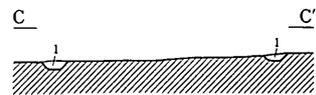
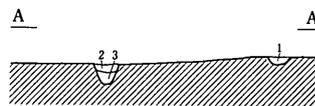
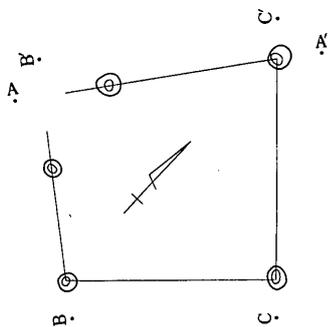


L-6428

0 (1:80) 2m

- 1 : 黒褐色土 (粘性・しまり少ないシルト。ロームブロック混入)
- 2 : 暗褐色土 (粘性・しまり少ないシルト。ロームブロック混入)
- 3 : にぶい黄褐色土 (粘性の弱いシルト)

2 建

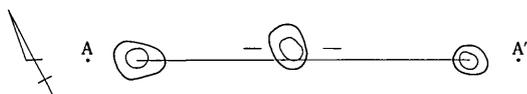


L-638.0

0 (1:80) 2m

- 1 : 灰黄褐色土 (粘性少なくしまり良いシルト)
- 2 : 黒褐色土 (粘性あり、しまり良いシルト)
- 3 : にぶい黄褐色土 (しまり良いシルト。ローム粒混じる)

1 列



- 1 : 黒褐色土 (やや粘性あり、しまり良いシルト。ローム粒・砂・礫混入)
- 2 : 暗褐色土 (1と同質シルト。ローム粒多く混入。砂・礫僅か混入)

0 (1:80) 2m

図25 1号・2号掘立柱建物跡、1号柱穴列

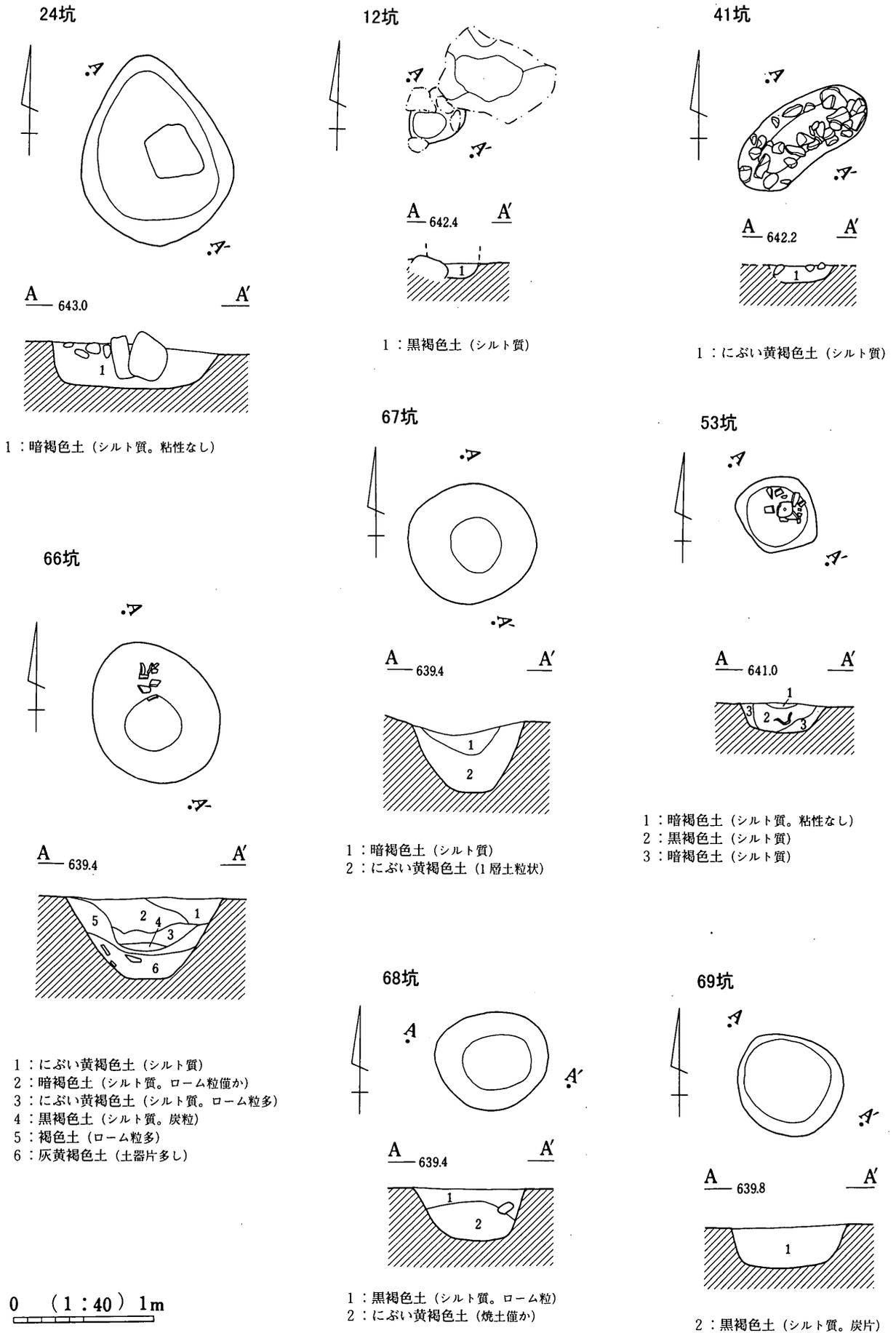


図26 土坑

**12号土坑** (図26) 位置 III B-14

自然流路1底面で検出した。楕円形を呈し、規模は50×30×10cmを測る。覆土から古墳時代前期土器片が僅かに出土している。

**41号土坑** (図26) 位置 III B-1

IV層上面で検出した。長円形を呈し、規模は105×45×12cmを測る。底面は平坦である。覆土に10cm前後の角礫が多量に入っている。古墳時代前期土器片1点が検出された。

**53号土坑** (図26・46) 位置 III B-17

IV層上面で検出した。やや丸みを帯びた方形を呈し、規模は60×50×20cmを測る。底面は平坦である。覆土は3層に分層できたが、埋没状況は不明である。覆土から50点強の土器片が出土し、3個体が図示可能な状態に復元できた。廃棄されたものであろうか。1はく字状に屈折する口縁部をもつ台付甕、2・3は高坏の脚部である。

**時期** 古墳時代前期に位置付けられる。

**66号土坑** (図26) 位置 III A-9

IV層上面で検出した。楕円形で、規模は105×85×60cmを測る。断面形は掘り鉢状を呈する。覆土最下層(6層)から甕・鉢などの古墳時代前期土器の小片が50点ほど出土している。廃棄されたものか。

**時期** 古墳時代前期と思われる。

**67号土坑** (図26) 位置 III A-19

IV層上面で検出した。円形を呈し、規模は直径90cm弱、深さ50cmを測る。断面形は掘り鉢状である。覆土から縄文時代晩期および古墳時代前期の土器片が僅かに出土している。

**68号土坑** (図26) 位置 III A-27

IV層上面で検出した。直径80cm弱の略円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土から縄文時代晩期および古墳時代前期土器片が若干出土している。

**69号土坑** (図26) 位置 III G-3

IV層上面で検出した。直径80cm弱の略円形を呈し、深さは40cmを測る。底面は平坦である。古墳時代前期土器片が僅かに出土した。

**ピット群** (図4)

自然流路2の西岸、IV-25グリッドに、ピット10基が集中して検出された。直径20～30cmの円形ないし楕円形プランで、深さは10～30cmを測る。1号柱穴列周辺のピット群に類似した在り方を示し、形態からみて、これらも柱穴の可能性が高いと考えられるが、掘立柱建物または柱穴列として整合的な組み合わせを抽出することはできなかった。

## 4 SF

**SF1** (図4・46) 位置 III G-4

自然流路2覆土中の検出となる。木根の攪乱により寸断されているが、長径60cm、短径40cmの楕円形を呈する被熱面である。遺物は「く」字状口縁台付き甕(1)、ミニチュア土器(2)が出土した。

時期 古墳時代前期と考えられる。

S F 2 (図4) 位置 III B-25

IV層上面検出。木根の攪乱で寸断されるが、長径50cm、短径30cmの楕円形を呈する被熱面である。

S F 3 (図4) 位置 III B-15

IV層上面検出。直径15cmの円形を呈する被熱面である。

S F 4 (図4) 位置 III B-8

IV層上面検出。直径30cmの円形を呈する被熱面である。

S F 5 (図4) 位置 III B-2

IV層上面検出。長径55cm、短径40cmの楕円形を呈する被熱面である。

## 5 自然流路跡

### 1号自然流路跡 (図27・52)

発掘区のほぼ中央を東北(I-W-20)から南西(III-F-05)に流れ、途中、III-B-17グリッド辺りで二股に分岐する形状を呈する。流路の肩すなわち河岸が不明瞭なところが多く、谷状地形斜面と河道部分とを明確に区別することは難しい。平面図作成面における規模を示すと、幅は東北端付近で3.5m、分岐直前で6.5m、分岐後3~4m、深さは60~30cm程度である。

埋積層は、下位で砂・礫が多く混じり、上位は黒褐色~黒色シルトが主体を成す傾向がある。しかし、堆積の様相はところによって異なり、いくつかの河道が切り合っている状況も断面で観察される。埋積層は縄文時代早期から平安時代に至る各時期の土器片を包含するが、層位の上下と遺物の新旧とは対応しない。層位を越えて接合した例も多く、総体として各時期の遺物が混在している。18号住居の床下に古い河道部分が検出されたことにより、1号自然流路は古墳時代前期には存在していたことが明らかである。時期的にどこまで遡るか確かではないが、形成以後、旧河道の埋積と新河道の開析とが幾度となく繰り返されたと考えられる。二股に分岐した形状は或る時期の流路変更の結果である可能性がある。

遺物は、縄文時代早期後葉・中期・後期・晩期末の土器、古墳時代前期の土器、古墳時代後期~平安時代の土器、および石器類が混在的に出土した。主体を成すのは、縄文時代晩期末の土器、古墳時代前期の土器、黒曜石の石鏃・剥片類である。縄文土器と石器類については別項で後述する。古墳時代前期の土器は竪穴住居群および2号自然流路跡出土の土器群と同様相を示している。ここでは、量的には少ないが、2号流路跡からあまり検出されなかった古墳時代後期の土器を取り上げた。図示した6点は全て土師器である(図52)。1~4は坏で、1は体部中ほどで屈曲し口縁部が大きく外反する。2は浅い半球形の体部から口縁部が内傾して立ち上がる器形で、口縁部と体部境の稜直上に鈍い沈線が廻る。3はやや扁平な浅い半球形の体部。4は平底気味の丸底からやや内彎して斜めに体部が立ち上がる器形。5は長い脚柱部から大きく裾が開く高坏。6は底部多孔小形甑である。

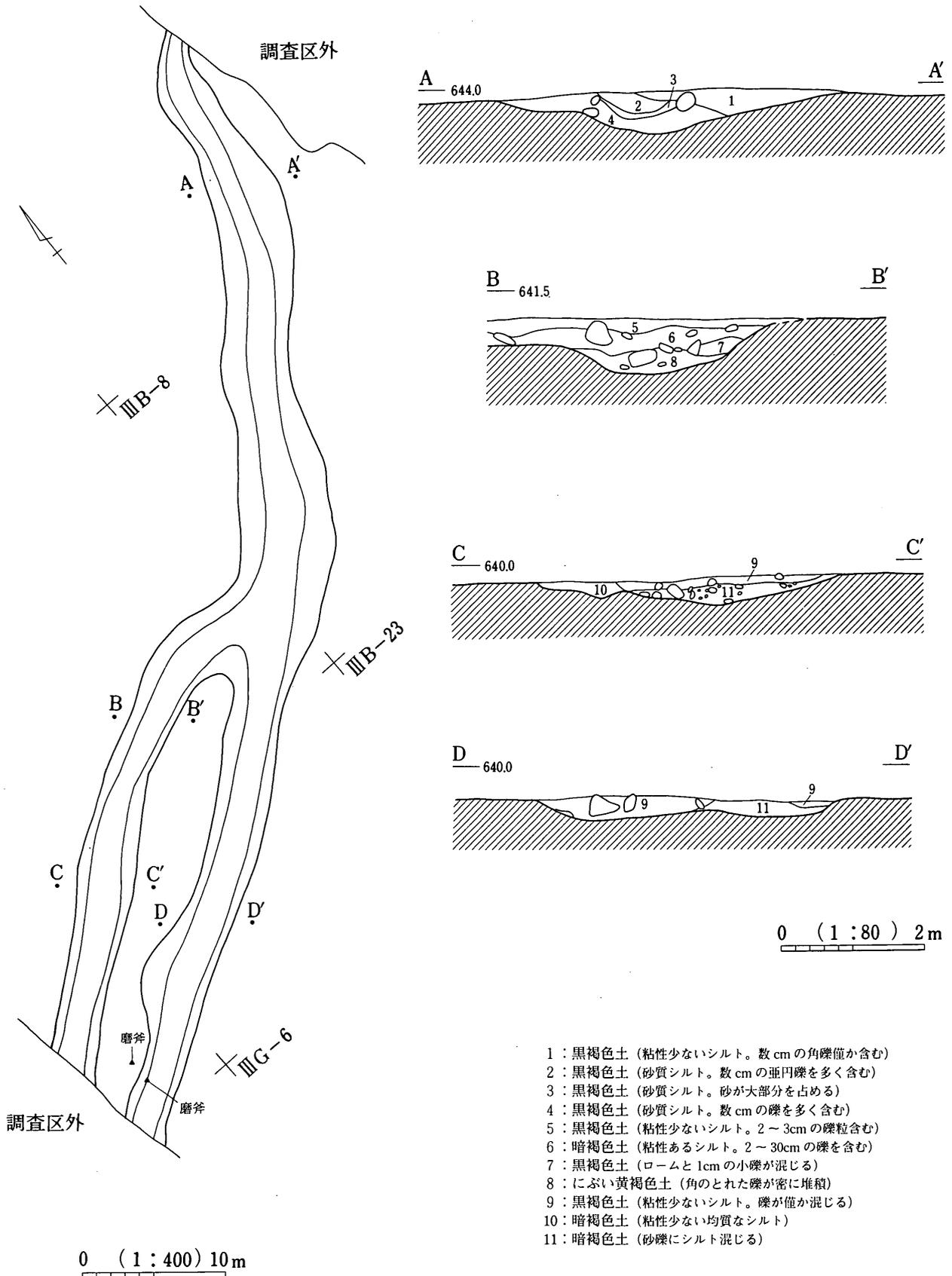


図 27 1号自然流路跡

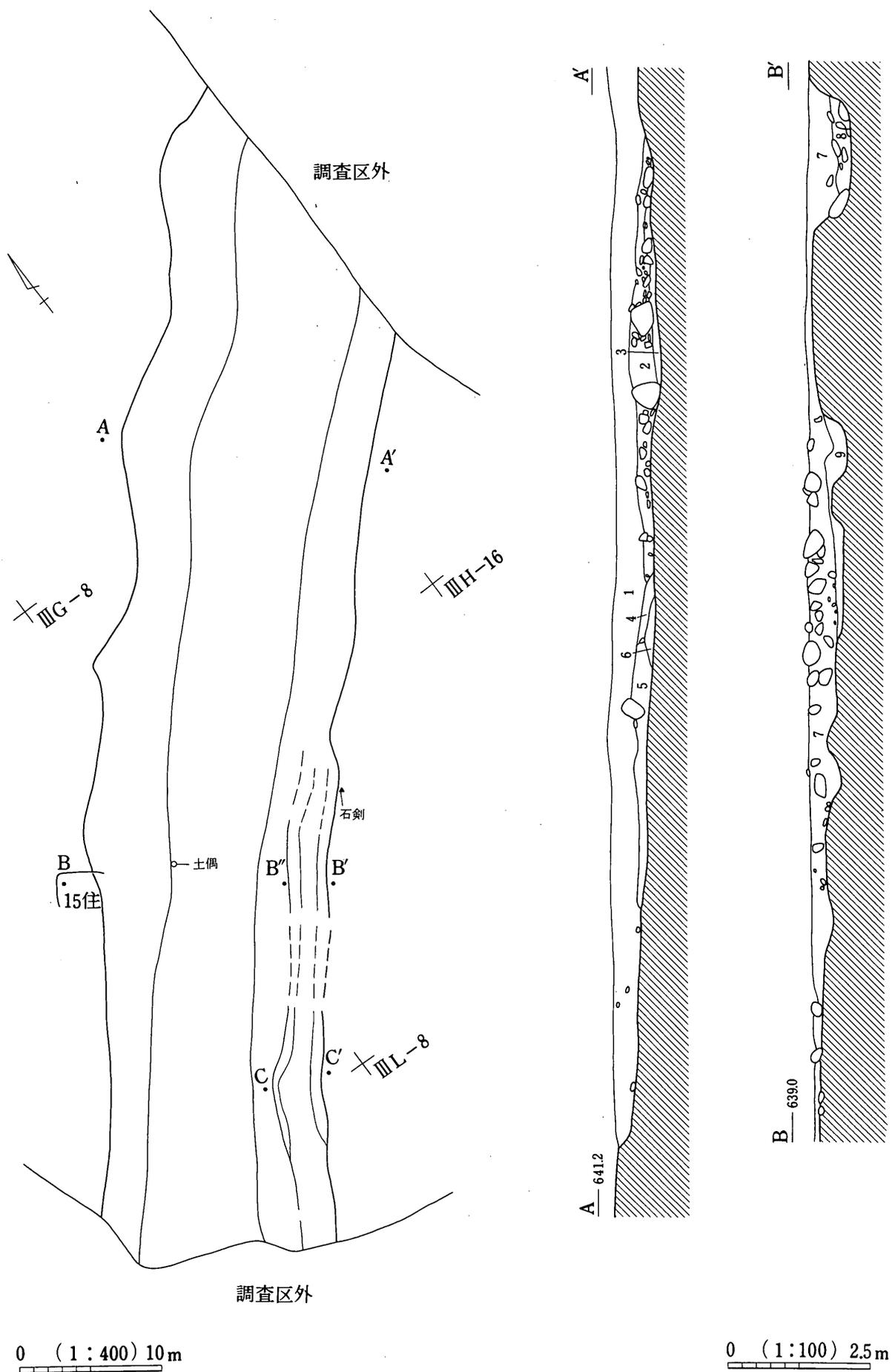
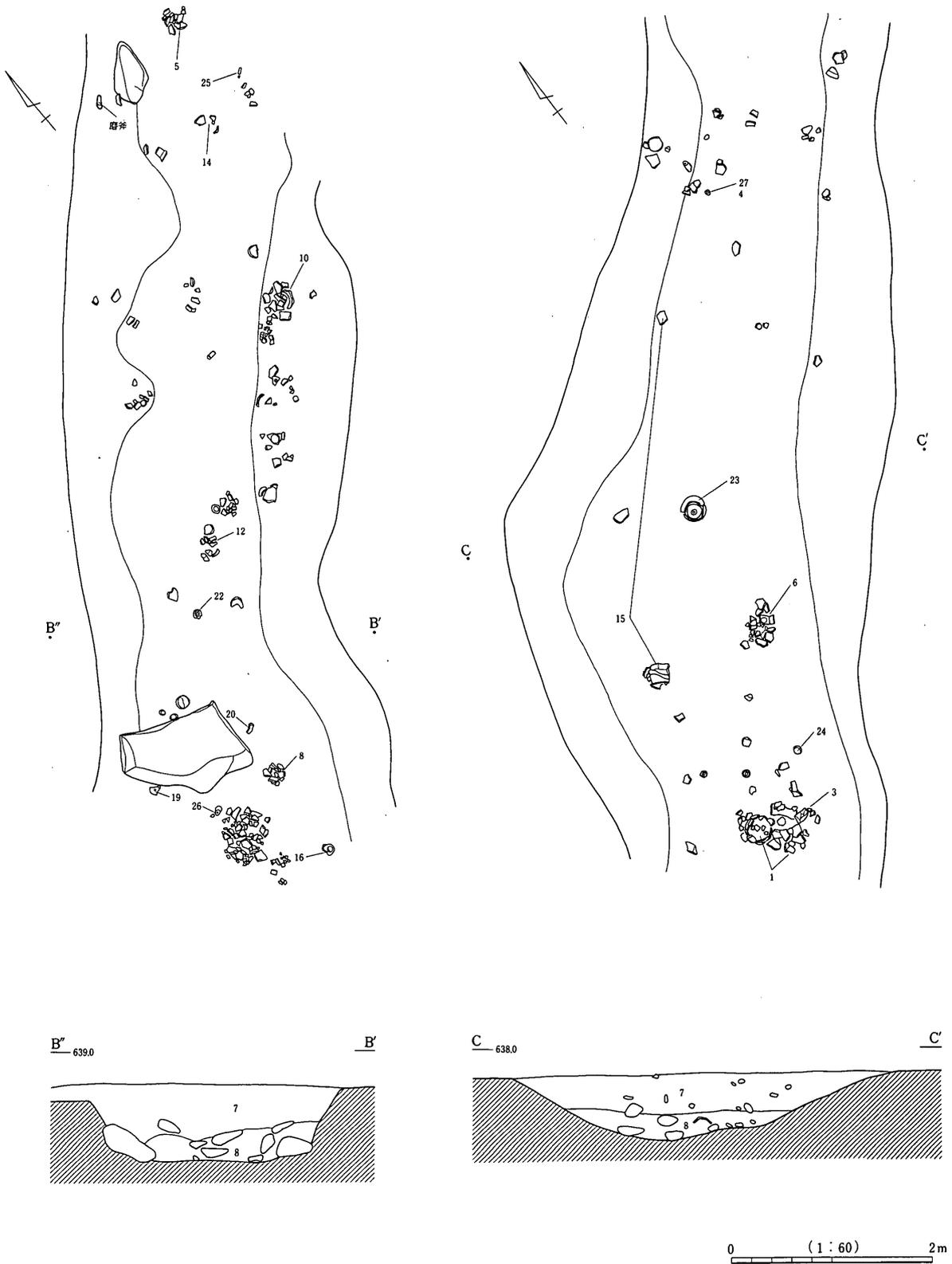


図28 2号自然流路跡



- 1：黒褐色土（しまり良い粘土質シルト）
- 2：黒褐色土（10cm～1mの角のとれた礫を多く含む）
- 3：黄灰色土（1～3cmの玉砂利層。間に中粒砂入る）
- 4：黄灰色土（黄灰色粘土と黒褐色土と中粒砂が不連続に混じる）
- 黒褐色土

- 5：黒褐色土（1～20cmの礫と1層土・砂が混じる）
- 6：にぶい黄褐色土（中～粗粒砂とロームが混じる）
- 7：黒褐色土（粘性強いシルト。20cmの礫含む）
- 8：黒褐色土（砂と礫を多く含む）
- 9：暗褐色土（砂と1cm以下の小礫を多く含む）

図29 2号自然流路跡（遺物出土状況）

## 2号自然流路跡 (図28・29・46・47)

発掘区の南部を東北(Ⅲ-C-20)から南西(Ⅲ-K-05)に走っている。河岸は不明瞭で、特に東南岸はだらだらと外方へ広がり、肩を捉えることが難しい。平面図作成面における規模を示すと、幅は16～18m、深さは最深部で80cm程度と広さのわりに浅い。南東部の岸近くには、古墳時代前期以前の河道中心部の痕跡と思われる、幅2.5～3.5m、深さ80cm程の溝状に抉れた部分が伸びている。

埋積層は、下位に砂・円礫・亜円礫を主体とする層または砂・ロームブロックを多く含む層、中位に小形～大形礫が多く混じる黒褐色シルト、上位に比較的礫を含まない黒褐色シルトが堆積する層序が平均的な在り方である。1号流路に比べてやや単調な堆積様相といえよう。しかし、縄文時代早期から平安時代に至る各時期の土器片が混在して包含されており、やはり、層位の上下と遺物の新旧とは必ずしも対応しない。そのなかで、南東岸近くに伸びる溝状の抉れ部分の下層(8層)からは、古墳時代前期の土器群が、それより新しい時期の遺物を混じえずに検出された。器種は多様で、完形で出土したものや、完形の個体がある。その場で潰れたようなまとまりを示す例が多くみられた。竪穴住居群の存続期間と対応するように、これらの土器群は前期初頭から後半までの幅をもつ。

遺物は、縄文時代早期中葉～平安時代の土器、および石器類で、2号流路とほぼ同じ構成である。縄文土器と石器類については別項で後述し、ここでは、南東岸近くの溝状抉れ部分下層出土の古墳時代前期土器を取り上げる(図46・47)。1・2は球形化した胴部の壺で、口縁部は短め。2の口縁端部は受け口気味である。3は胴部径が60cmを超える大形の壺で、胴部に比べ口頸部径が極端に小さい。頸部直下にはT字文を施している。4～6は櫛描波状文を施す甕。7は口縁部がく字状に短く外反するハケ調整の球胴甕。8・9は口縁部が短く直立する小形の甕、8は赤色塗彩されている。10～12は台付甕。13～21は高坏で、13～18は赤彩、21は脚柱部から屈折して裾が開く器形である。22は小型器台。23は底部から直線的に体部が開く有孔鉢である。24は赤彩片口鉢。25は扁平な丸底を呈する体部から、段状に屈折して口縁部が斜め上方に立ち上がる器形の鉢。26・27はミニチュア土器である。

## 6 遺物

## (1) 縄文時代の土器

大日ノ木遺跡には明らかに縄文時代に属すると考えられる遺構は存在しなかったため、遺構ないし層位ごとの分析はせず、遺跡出土土器全体を、型式学的な操作によっておおそ年代順、器種などの分類順に配列し、それぞれについて見ていくこととする。

## 縄文時代早期の土器 (1～60)

## 早期中葉の土器 (1～6)

いわゆる押型文土器。1・2は山形押型文の異方向帯状施文の土器「樋沢式」。3は縦位密接の山形押型文、4・5は横位密接の楕円押型文、6は格子目風の横位密接楕円押型文。3～6はいずれも「細久保式」。

## 早期後葉から末葉の土器 (7～60)

貝殻沈線文土器と絡条体圧痕文土器・絡条体条痕文土器ないしは東海系貝殻条痕文土器がある。

## 貝殻沈線文土器 (7～26)

混和剤には石英、長石が入るほかに雲母が目立ち、全体に色調も赤褐色を帯びていて特徴的である。またわずかに繊維を混入するものが散見される。施文具は刺突の先端や条痕の末端の様相からフネガイ科の殻肋が発達した二枚貝の腹縁を用いて沈線や条痕を用いたと推測される。本稿ではとくに断らない限り、以下貝殻条痕とよべば、この手のフネガイ科などの殻肋の発達した二枚貝の腹縁による条痕のことをさすものとする。

7・8は地に貝殻条痕を施した後に、貝殻腹縁を細かく割ったもので並行沈線を施している。口唇端部外面には同一原体による刺突が施される。9は鋭く矢羽状に刺突される。16は縦位ないし横位に貝殻腹縁押し引文が施される。26のように貝殻腹縁を矢羽状に刺突するものもある。小破片が大半で、量的にも多くないが、望月町新水B遺跡などで出土している田戸上層式に並行する資料だろう。

## 絡条体圧痕文土器・絡条体条痕文土器 (27～52)

絡条体圧痕文・条痕文土器の原体であるが、明らかに絡条体が押捺されているものはともかく条痕のものだと、貝殻など他の原体の条痕と判別が難しいものがある。しかし、詳細に観察すれば、この手の条痕の横断面はみな丸みを帯び、個々の条痕の断面もU字形を呈している。また、間接的な分類根拠となるが、絡条体圧痕文はいずれも繊維が含まれ全体に軟質であるのに対し、東海系貝殻条痕文土器は繊維はほとんど含まれず、石英や長石が目立ち、絡条体圧痕文土器に比べれば硬質であり、前記の観察状況ともおおそ一致していて、土器の産地の差異を示しているものと考えられる。

本遺跡の絡条体圧痕文土器は27・28・39などに見られるように、低い隆帯が口縁部と胴部の区画をなし、低隆帯上を鋸歯状に絡条体で押圧する。33のように絡条体を縦位に押捺するものもある。また、内外面に絡条体条痕のみが施されたものも前述のことなどを根拠に絡条体圧痕文土器に伴うものと考えた。

## 東海系貝殻条痕文土器 (53～60)

早期後葉の貝殻沈線文土器ほど条痕は明瞭ではないが、条痕のはいずれも比較的はっきりした段を持ち、殻肋の発達した貝殻腹縁が施文原体と考えた。58のように貝殻腹縁を短冊状にして外面に刺突を施したものもあるが、他(53～56)はいずれもへら状工具による連続刺突が施されている。器形は絡条体圧痕文・条痕文に一般的な平縁ではなく、ゆるい波状を呈す(55・56)。また、受口状の突起を口縁部に有し、東海系貝殻条痕文土器の中でも粕畑式に対比できると思われる。

## 前期 (61～63)

当該期の資料は極めて少ない。61はゆるい波状口縁の波頂部の突起。62は縄文RLの横位回転。胎土に繊維は含まれない。63は櫛歯状工具による条線文。いずれも前期後葉(諸磯b式からc式?)と思われる。

中期 (64～69)

この時期も決して多くない。64は連環状突起?で、中葉か。66は胴部の渦巻文が施された突起。67は口縁部直下には沈線が横位に施され、胴部は縦位に沈線が区画する磨消縄文。加曽利E式か。

後期 (70～74)

70は胴部から頸部にかけて屈曲する鉢形土器胴部の擬口縁部分か。71は同様な鉢形土器の頸部で、8字状突帯が貼付されている。おおよそ後期前葉の堀之内式に属するものと考えられる。

晩期 (75～469)

本遺跡の縄文土器の大半を占めるのが晩期の資料である。石英、長石のほかに角閃石や軟質の褐色粒子をおもに含む土器が多い。量的に多いので器種・器形をもとに以下、

- I 口縁部に文様帯を残す有文深鉢形土器の口縁部、
- II 口縁部に文様帯はなく条痕だけが施された深鉢形土器、無文深鉢形土器のそれぞれ口縁部
- III 上記のI・IIに対応する胴部に条痕、縄文、貼付文などが施された深鉢の胴部破片
- IV 壺形土器、
- V 浮線文浅鉢形土器の口縁部破片（頸部がはっきり作出されるのを1類、ほとんど作出されないのが2類、有文ではあるが頸部はないものを3類とする）
- VI Vの有文浅鉢形土器に対応する胴部破片
- VII 縄文が施された精製浅鉢
- VIII 無文浅鉢
- IX 底部
- X 土偶
- XI ミニチュア土器

の11分類に大別してある。

I 口縁部文様帯を残す有文深鉢形土器 (75～198)

口縁部文様帯は基本的に凹線を平行に巡らせただけで、口縁端部外面を部分的に肥厚し、浅い刻みを持つものも散見される。量的には多いが、全体の器形が把握できそうなものは意外に少ないが、75や132のように胴部上半で屈曲し頸部を作出するのがわかるものがある。こうした微妙な器形の差異から本来は深鉢形土器と甕形土器などの器形を分離すべきなのであろうが、本遺跡の資料ではそうした作業は著しく困難なので、器高が胴径より大きいと推測されるものを深鉢形土器として一括した。

口縁部の文様からは凹線が3条ないし4条施され、浮線が浮き彫り状に2条ないし3条となるもの(75～131 1類)、凹線が2条施され、浮線が浮き彫り状に1条となるもの(132～184 2類)、口縁部直下に凹線が1条だけ巡るもの(185～188 3類)、口縁部に2条の凹線を施し、胴部の地には比較的細密な条痕を施すもの(189～198 4類)に分けることができる。

II 条痕文土器および無文土器 (199～218)

有文深鉢形土器の4類と同一の細密な条痕だけが施された深鉢形土器(199～209)。ナデ調整が施される無文深鉢形土器(210～218)。

III 条痕文・縄文・貼付文が施された胴部破片 (219～248)

これらは有文深鉢形土器4類、IIの条痕文土器に対応する胴部破片(219～237)。いずれも氷1式特有の細密な条痕が中心で、胴部に縦位にジグザグを描くもの(223、229、231、232)などがある。238～242は比較的はっきりした段が見られる粗い条痕(貝殻条痕か)の土器の破片。244～247は縄文ないし撚糸文を施す。248は眼鏡状の貼付文を施す。

## IV 壺形土器 (249～260)

249、253～255は口縁部に橋状の把手を持つ壺(250～252もこの壺の口縁と思われる)と口縁を若干肥厚させ、刻みを有する壺(256～260)の2種類がある。

## V 浮線文浅鉢形土器 (261～377)

有文精製浅鉢形土器で施文部位、器形などで3類に細分した。口縁端部外面に若干の肥厚および刻みを有し、頸部を屈曲させるもの(261～298 1類)。口縁部外面を若干肥厚させ刻みを有するが、頸部の屈曲は明確ではなく頸部と胴部の境は不明瞭なもの(299～343 2類)。頸部の無文部がないもの(344～377 3類)

## VI Vに対応する胴部破片 (378～404)

横位に対向した眼鏡状の意匠を持つもの(379、381、392など)、細隆帯上に列点状の刺突を巡らすもの(403、404)も本類に含めた。

## VII 縄文が施された浅鉢形土器 (405～412)

いずれも内外面丁寧なミガキが施され、縄文は非常に細かい単節LR。内面に1条沈線を巡らすもの(407～412)が多い。全形を同える資料はないが、浮線文の浅鉢より器高は若干高いと思われる。

## VIII 無文浅鉢形土器 (413～434)

一見、土師器の坏を思わせるような、器形をしたものもあるが、胎土に軟質の褐色粒子や角閃石を含む点で晩期の土器群と共通し、器面調整がいずれも粗いナデ調整であることから、晩期の土器群に含まれると判断した。413は口縁部内面は横位ミガキが施される。底部はわずかに上げ底になっている。414は緩い波状口縁を呈す。また、415、425～428は焼成前の穿孔がある。429、430は口縁部にかすかな瘤状の貼付を持つものや432、433のように口唇部に刻みを持つものもある。

## IX 底部 (435～462)

底径や形状からだいたいの器種・器形が想定できるものもあるが、峻別は極めて困難であるので一括した。438、440はわずかに上げ底になっていて、無文の浅鉢形土器か。444～456は網代痕。457～462は広葉樹の葉痕。いずれも晩期後葉の土器によく見られるものである。

## X 土偶 (463～468)

463、464はいわゆる容器形の土偶で、顔の部分だけが剥離したものと思われる。463は鼻部が少し磨滅しているが、半截竹管状工具で刺突した部分がかすかに残る。464は顔の周囲及び眉のあたりに細かいヘラ状工具で連続刻みを施す。いわゆる黥面土偶か。465は後頭部全体に細半截竹管状工具の刺突が施される。466は肩部で、パットのような装飾が施される。467は半截竹管状工具の刺突が施された脚部。468は両腕と頭部が欠損した土偶の胴部と脚部。

## XI ミニチュア土器 (469)

内外面にミガキ調整を施され、3条の沈線を巡らせた土器(469)が1点出土している。口縁端部は欠損している。

## 編年的位置付け

以上、大日ノ木遺跡出土の縄文土器を概観してきたが、全体を通してまとめてみたい。まず、早期の押型文土器は量的には極めて少ないが、異方向帯状施文の山形押型文土器(樋沢式)が認められたのは東信地方では極めて珍しい。(既報告のものとしては栃原岩陰遺跡(小松1976・西沢1986)例)。

また、早期後葉の貝殻沈線文土器がまとまっている。貝殻沈線文土器は東信地方としては、北佐久郡望月町新水B遺跡(福島・中沢1997)、御代田町戻場遺跡(中沢・賛田1996)にまとまった資料が出土しているが、上小地方では極めて少なく真田町菅平の富沢畑遺跡など(菅平研究会1970)に散見されるに過ぎないので、貴重な資料と言えよう。時期的には関東地方の編年で言えば田戸上層式に並行する資料だろう(田中1997)。

早期末葉も、東信地方は資料に恵まれているとは言えない。本遺跡では在地の土器と考えられる絡条体圧痕文土器並びに絡条体条痕文土器がまとまって出土している。この絡条体圧痕文土器の変遷観や編年的位置づけは百瀬忠幸(1985・88・89)や綿田弘実(1993)らによって行われているが、それらの研究を踏まえた上で近年中沢道彦が県内の資料を集成した上で、隣接地域との関係を論じているとともに変遷観も示している(中沢1996)。

中沢も、施文原体の変化も注目するのであるが、型式学的な指標として口縁部が絡条体圧痕で胴部と区画される段階、口縁部を絡条体の圧痕隆帯文で広く区画する段階、さらにこの絡条体圧痕の隆帯が口縁部直下にせり上がってきた段階といった3段階を設定している。その是非についてここで細かく論じている紙幅はないが、たしかに施文原体の多寡や変化は型式学的な変遷を見る場合の重要な属性であるが、土器型式を時間的に細分する場合には、中沢の方法論が優位と言えよう。

さて、中沢の絡条体圧痕文の変遷観に照らしあわせてみると、本遺跡の資料は27・28・39のように口縁部を絡条体圧痕がある低い隆帯で、幅広に区画しており、中沢のいう「中」段階、高風呂遺跡39号住居址の段階に位置づけられよう。この高風呂遺跡39号住居址では、東海系条痕文土器の粕畑式が相伴していて、中沢もこうした資料を根拠にこの段階を粕畑式に並行すると位置づけているが、近年原村南平遺跡小堅穴333(川崎1998)でも、本遺跡と同段階と思われる絡条体圧痕文と粕畑式が相伴している。本遺跡でも粕畑式(53～60)が出土しているが、すでに述べたような出土状況と一致しており、中沢の編年的位置づけを補強する資料と言えよう。

前期、中期、後期はいずれも散見される程度で、細かい様相はよく分からない。

晩期は本遺跡の縄文土器の過半を占める。量的に多い割には全体の器形が伺えるような資料は極めて少ない。

分類別に特徴を見ていくとまず浮線文深鉢形土器は、口縁端部外面を部分的に肥厚させ(いわゆる口外帯の作出、以下口外帯と呼ぶ)、刻みを有するもの(75・85など)も存在する。口外帯の下に浮線文が施されるが、ほとんど並行する意匠になっている。浮線は3条のものもあるが、2条や1条のものも多い。これらは氷式でも新しい様相と考えられる。

浅鉢形土器には頸部の無文部を持つ浅鉢1類ないし2類の胴部の文様帯には網目状浮線文の意匠が見られるものが少なくない(261～266など)。これは頸部の無文部を持たない浅鉢3類も同様な傾向である。

深鉢形土器に施される条痕はいわゆる氷Ⅰ式特有の細密条痕と呼ばれるハケ目様の調整である。僅かに貝殻条痕の土器(238～242)が認められたが、あまりに細片で器形の復元まで至らず、細かい型式の認定は困難であった。また、細かい縄文単節LRないし撚糸文Rと考えられる資料(244・245)も出土している。

壺形土器は橋状把手を持つものと口縁端部外面を若干肥厚して刻むものの2者が存在する。この手の壺形土器は氷遺跡からは出土していないが、長野市篠ノ井遺跡群長野市営塩崎体育館地点では、細密条痕が施された土器と橋状把手の壺形土器が出土しており(青木ほか1990)、中沢によると氷Ⅰ式後半ないしはその直後の時期と考えられるという(中沢1991)。縄文施文の精製の鉢?形土器も氷遺跡(氷Ⅰ式)に類例がある。

以上ざっと概観しただけではあるが、ほぼ全体としては小諸市氷遺跡の出土資料で設定された氷Ⅰ式の範疇にこれらの土器が位置づけられ、その直後の時期(「氷Ⅱ式」(百瀬1986・中沢1998))の資料は基本的に含まれていないと思われる。

中沢によると氷Ⅰ式は近畿地方の「畿内」第1様式古段階から新段階、東海地方の馬見塚式(新段階?)から檜王式に並行するが、中部高地としては縄文時代晩期末の「最終型式」に位置づけられる(中沢・丑野1998)という。縄文時代と弥生時代の境界をどのように考えるかは非常に興味深い問題ではあり、その根拠を含めて本稿では詳述できないが1)、本報告においては当該資料を縄文時代晩期末に位置づけた。

## 註

1) 縄文時代と弥生時代の区分、土器型式編年上の指標などについては、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 20 - 東部町内 -』を参照されたい。

## 引用参考文献

- 青木和明 1990 『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
- 川崎 保 1998 「縄文時代早期末の土器」『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会
- 小松 虔 1976 「栃原岩陰の押型文土器」『長野県考古学会誌』27
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4
- 菅平研究会 1970 『菅平の古代文化』
- 田中 総 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相（発表要旨）」『シンポジウム押型文と沈線文本編』長野県考古学会（早期）部会
- 中沢道彦 1991 「長野県の資料」『東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会
- 中沢道彦・丑野 毅 1998 「レプリカ法による縄文時代晩期土器の粉状圧痕土器の観察」『縄文時代』9
- 中沢道彦・賛田 明 1996 「長野県北佐久郡御代田町炭場遺跡採集の縄文土器について」『縄文時代』7
- 長野県考古学会縄文時代（早期）部会 1997 『シンポジウム「押型文と沈線文」資料集』
- 永峯光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9
- 西沢寿晃 1986 「栃原岩陰遺跡」『長野県史』
- 福島邦男・中沢道彦 1997 「長野県北佐久郡新水B遺跡の遺構と遺物」『シンポジウム押型文と沈線文本編』長野県考古学会縄文時代（早期）部会
- 百瀬忠幸ほか 1985 『堂の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会
- 百瀬忠幸ほか 1988 「膳棚B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告』1 長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬忠幸ほか 1989 「八窪遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告』2 長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘実 1993 「第Ⅱ群早期末葉の土器群」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 12 - 東筑摩郡坂北村・麻績村一向六工遺跡ほか』(財)長野県埋蔵文化財センター

(2) 遺構外出土の古墳時代前期の土器 (図 47)

明らかな混入品や検出面出土の土器のうち、完形またはそれに準ずるものを中心に5点を取り上げた。1は北陸系の甕である。口縁部は短く字状に外反し端部を面取りする。胴部は底部が小さくすぼまった倒卵形を呈し細かなハケ調整が為される。2は口縁部がいったん直立した後外反する甕。3は球胴甕の底部を切り取ったような器形で、器種は蓋としておく。口縁端面はヘラケズリされている。4は赤色塗彩の片口鉢。5は平底から直線的に斜め上方に立ち上がる体部の小形鉢である。

(3) 土製品 (図 53)

匙形土製品 (4～6)

4点出土しているが、全体形を知り得るものはない。いずれも酸化炎焼成である。7は匙部が完存する。平面楕円形、断面U字形の端正な形状に仕上げられ、先端には注ぎ口を作り出している。柄は匙部から水平に伸びる形勢である。5も柄は水平に取り付く。4・6は柄が斜め上方に伸びる形状と思われる。6は短い柄が完存する。柄は手捏ね成形のままである。

土器片板 (10～14)

土器片の側辺を加工した土器片板は21点出土している。側辺全周研磨2点、3/4周研磨1点、打ち欠きのみ10点、研磨の可能性のあるもの8点を数える。形状は略円形が殆どで、ほぼ真円のものと同方形のものが各1点ある。大きさや重量には幅があり、最大は5.1×4.7cm・25.4g、最小は2.7×2.4cm・6.7g。利用土器材は殆ど古墳前期の壺ないし甕で、明らかな古墳後期以降の土器は認められない。用途を限定することは難しいが、ここでは、手持ちの研磨具ないしそれに近い機能を想定しておきたい。

その他 (1～3、8、9)

9は土製紡錘車、8は基石に似た形状の用途不明土製品、1～3も用途不明の土製品である。1は弧状ないし輪状製品の一部であろう。片面にタタキ痕を残し、内側面は丸みを帯びた形状に、外側面は板状工具により平坦に仕上げられる。タタキ痕を残す面の外側縁はつまみ出されたような形状を成している。2は楕円形の盤状部に突起ないし把手がつく手捏ね土製品である。3は筒状の土製品であろう。円形透し孔の外側をヘラ描沈線が二重に取り巻く。実測図は上下逆かもしれない。

(4) 金属製品 (図 53)

銭貨 (1～7)

7点が出土した。遺構に伴うものはない。1は皇宋通宝、2・3 聖宋元宝、4～7 寛永通宝。

銅鏃 (8)

逆刺をもつ有茎腸扶柳葉式の銅鏃である。全体的に刃毀れが多く、鏃身部の形状を損ねているが、刃部最大幅と関部幅はほぼ等しい。鏃身部は縦の鑄を有するが、鋒先端に達する前にぼやけてしまう。身部の全面には鑄に対して斜行方向をとる研磨痕が認められる。茎は、表裏面とも中央に鑄から連続する稜が通り、側面にも稜をもつため、断面四角形ないし菱形を呈する。茎端の切り放しは表裏両面から断面V字形の刻み目を入れて折り取ったようである。

鉄鏃 (9)

逆刺をもたない柳葉式の鉄鏃である。鏃身先端および茎端を欠く。鏃身部は、身幅が関部から先端近くまでほぼ一定で、断面菱形を呈するが、錆ぶくれのためか鑄は明確ではない。関は撫関である。茎の断面形は、現状では円形か方形か判別し難い。杉山秀宏の分類(杉山1988)では、柳葉鏃群第IV形式第2型式A類に相当しよう。とすれば、古墳時代前期後葉となる。

異形鉄製品(10)

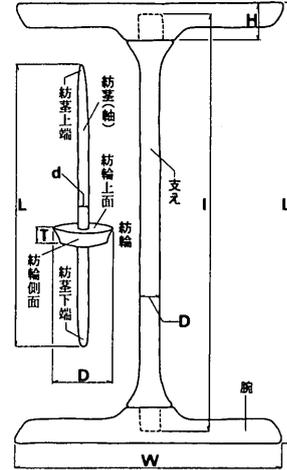
用途不明の鉄製品である。現状では、実測図の左の端が直角に折れ曲がり、右端は先端が鋭く尖ったカギ状を成す。しかし、右端は銹化の進行による剥落が多く、本来の形態でない可能性がある。

(5) 木製品 (図 53)

18号住居跡からは炭化した木製品2点が出土した。

1は紡錘(つむ)の紡輪(紡錘車)である。断面形はやや彎曲した台形状となる。紡輪の存在を考え合わせると、2は杵の支え木の端部である可能性が高い。腕木に支え木を組み合わせて工字型にするもので、ホゾ中央に腕木側面から栓を打ち込み固定するための小孔がみられる。兩者についてその概念図を右に示した。図は『木器集成図録一近畿原始篇一』奈良国立文化財研究所1993より引用した。

紡錘で撚りをかけた糸を杵に巻き取るという一連の作業が想定でき、本住居内で行われていた生業の一端が窺える。



(6) 石器・石製品 (図 54 ~ 62)

石器・石製品は総数1723点、石片類は総量5.6kg強が出土した。器種ごとの内訳を表2に記す。これらの大半が縄文時代に属すると考えてよいが、今回の調査では明確な縄文時代の遺構は検出されていない。出土位置は、遺物包含層(基本層序Ⅱ層)、自然流路埋積層(同Ⅲ層)の他、遺構覆土に混入したものも多い。出土数は黒曜石製石鏃と黒曜石片類が多いが、上記三層からほぼ万遍なく出土しており、偏在性を見出すことはできない。

石鏃 (図 54・55)

総数1315点。完形の製品189点、未製品383点。残りの743点は欠損品および破片であり、基本的には未製品類と理解してよいと思われるが、自然的営力による破損品も含んでいよう。

石材別点数は、黒曜石1250点(95%)、チャート48点(3%)、ガラス質安山岩6点、硬質頁岩4点、千枚岩質粘板岩1点、粘板岩6点である。

形態の類別は、茎の有無および基部形状に注目して4大別7中分類した。未製品と欠損品についても、可能な限り分類を行ってみた。なお、巻末に掲載した遺物観察表の法量については、先端角の二等分線を鏃の中軸線とし、中軸に平行する最大長を鏃の長さ、直交する最大幅を鏃の幅として計測した。

A類：無茎平基(124点)。

底辺(基部辺)が中軸に対して直交するa(74点、1~4・7~9・15・17・20)、中軸に対して傾くa2(7点)に細別。

表2 石器・石片類の出土数量

器種	石鏃	石匙	石錐	スクレ	打斧	磨斧	磨石	研磨円礫	台石
数量(点)	1315	18	26	24	114	10	117	6	60
器種	凹石	砥石	石剣類	玉類	多孔石	五輪塔	UF RF 点/g	剥片類 g	石核類 点/g
数量(点)	2	17	7	5	1	1	256/633	51622	286/4650

B1類：無茎凹基で、基部の挟りが鍔身長の1/3未満のもの（487点）。

基部形が爪形ないし逆C字形を呈する b（194点、5・22～25・28・29・31～33・35～37・40～43・55・60・65・67・68・71・72・142）、逆V字形の c（74点、27・34・38・39・61・64・69・141）、台形の d（29点）、逆U字形の e（19点、63・70）、また、b・cのうち片方の脚が長い b2（86点、44～46・49～52・56～59・62・30）・c2（15点、47・48・53）に細別。

B2類：無茎凹基で、基部の挟りが鍔身長の1/3以上のもの（13点）。

基部形が爪形ないし逆C字形を呈する b（1点、26）、逆V字形の c（12点、73～80）に細別。

C1類：無茎凸基で、基部の突出が鍔身長の1/3未満のもの（46点）。

基部が突出する fのみである（14点、82・84～87・89・92・93・143）。

C2類：無茎凸基で、基部の突出が鍔身長の1/3以上のもの（7点）。

基部が突出する fのみである（4点、99）。

D1類：有茎で、茎が鍔身長の1/3未満のもの（311点）。

基部形が平らで直線的な a（21点、128・133～135）、爪形ないし逆C字形の b（132点、103・106・108・114・115・122・127・129～131・135）、逆V字形の c（46点、104・107・109・110・116・118～121・126）、台形の d（21点）、逆U字形の e（31点、102・105・111・113）、基部が突出する f（9点、136・137）、片脚が長い b2（8点、117）に細別。

D2類：有茎で、茎が鍔身長の1/3以上のもの（6点）。

基部形が爪形ないし逆C字形の b（1点）、逆V字形の c（1点、138）、基部が突出する f（1点、140）に細別。

表3 石鍔の属性

形態	基部形状									脚部先端形			側辺部形				素材剥片		
	a	b	c	d	e	f	b <sub>2</sub>	c <sub>2</sub>	a <sub>2</sub>	1	2	3	A	B	C	D	A	B	C
A	74								7				27	3	30	12	9	7	12
B <sub>1</sub>		194	74	29	19		86	15		262	68	31	205	20	194	39	14	14	23
B <sub>2</sub>		1	12								5	3	6	3	2	7			
C <sub>1</sub>						14							8	1	1		2		
C <sub>2</sub>						4							1		1				
D <sub>1</sub>	21	132	46	21	31	9	8			185	35	15	78	38	61	60	8	8	3
D <sub>2</sub>		1	1			1				2			1			1			

形態	欠損状況								未製品		
	1	2	3	4	5	6	7	合計	未製品Ⅲ	未製品Ⅳ	合計
A	18	28	21	3	10	1	20	81	28	15	43
B <sub>1</sub>	116	71	106	40	52	19		424	46	17	63
B <sub>2</sub>	4	1	4		2	2		13			
C <sub>1</sub>	6	3	4		1			14	23	9	32
C <sub>2</sub>	1	2	1					4	3		3
D <sub>1</sub>	43/38	34/29	57/26	9/8	20/8	2	2	276	27	8	35
D <sub>2</sub>	1	1	1					3	3		3
								815			179

未製品の素材剥片					
	A	B	C	不明	合計
未製品Ⅰ	7	17	20	21	65
未製品Ⅱ	4	6	9	27	46
未製品Ⅳ	4	5		84	93
破片				117	117

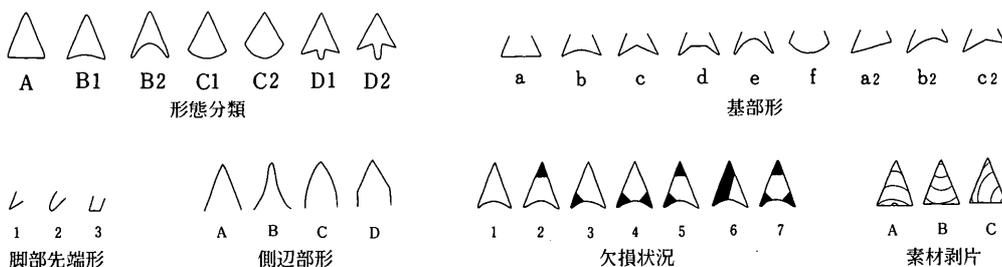


図30 石鍔属性類型模式図

上記分類を補佐する側辺部形状は、直線的なA類(323点、1・70・84・131・134など)、内彎するB類(64点、64・66・137など)、外彎するC類(294点、4・48・61など)、屈折して角張るD類(112点、102・116・141など)が識別される。角張るD類は有茎鏃(形態D類)にほぼ限られる。脚部先端形は、尖った形状の1類(454点、30・53・76・102・114など)、丸い形状の2類(106点、51・63など)、方形の3類(52点、66・78・80など)が区別できる。

無茎凹基鏃のB1類が最も多く49%、次いで有茎鏃のD1類が31%を占める。A類およびC類は、一般に整形が粗雑で、厚みのあるずんぐりした形態のものが多く、未製品を含んでいるかもしれない。B類には、片方の脚が長く、平面形が左右対称にならないものが相当数(24%)認められる(44～53・55～62)。これらは、基部を水平に置くと、直角三角形に近い形となり、片刃状の着装形態が想定されようか。B2類のなかで脚部が幅広いもの(66・77～80)はいわゆる鍬形鏃の部類であろう。また、晩期に特徴的といわれる飛行機鏃も認められ(111・116)、その他、五角形鏃(141)、雁股鏃様のもの(142)、逆Y字形のもの(64・66)、ブーメラン様のもの(26)、両側辺に抉りをもつ大形鏃(143)もみられる。

素材となった剥片の主要剥離面を残すものがあり、それから、素材剥片の形状を復元的に分類してみると、A類：打面幅が広く先端部が尖る形状の縦長剥片、B類：打面幅が狭く端部が広い縦長剥片、C類：打面が狭く二側辺が不均等な横長剥片、の3類が識別できる。A類は素材の打面を鏃基部とし、B類は素材の先端部を鏃基部とする。C類は打面を挟む二側辺の短辺を鏃基部としている。器形類型と素材選択との関係は、無茎平基鏃であるA類は特に傾向を指摘できない。無茎凹基のB類は素材C類が多く、有茎のD類は素材A類・B類が多い。有茎鏃は、茎を作り出すため、平面形・断面形とも、なるべく左右対称な素材形状が求められたのであろう。

未製品については、二次加工が全体の粗成形に留まるものを未製品Ⅰ(65点)、粗成形後、細部調整が施されるものを未製品Ⅱ(46点)とし、形態分類可能なものを未製品Ⅲ(失敗品を除く)(130点)とする。ⅡとⅢは必ずしも作業進行度の段階差を表すものではないが、粗成形後に、まず先端部を整形し、次いで基部の整形・作出へと向かう場合が多いように見受けられる(19など)。また、加工過程で形状を大きく損ねる事態が起って製作を放棄したと考えられるものがあり、これを未製品Ⅳ(失敗品)(142点)とする。特に、基部に加えた剥離が長く伸びて先端部を欠落させた例が目につく(20・91・93)。

欠損率はA類77%、B類72%、C類61%、D類84%で、まず高いといえよう。欠損部位は、当然ともいえるが、先端部および片方の脚部(隅部)が多い。B・D類では、片脚欠損が先端欠損を上回っている。なお、表3の欠損状況について、D1類の欄の斜線の右側はその部位プラス茎欠損のものを示している。

#### 石匙(144～154)

総点数18点。つまみ部が刃縁に対して直交する横形(145～148、151～153)、つまみ部が刃縁に対して斜行する斜め形(144・149・150)がある。148はつまみ部が幅広い形態、146は刃部の作出が不十分な粗製の形態である。154は縦形かもしれないが欠損している。154のつまみ括れ部には切込状の擦痕があり、144のつまみ部側縁・刃部には摩滅痕がみられる。石材は、ガラス質安山岩・千枚岩質粘板岩・チャートなど、黒曜石以外のものが7割以上を占める。

#### 石錐(155～167)

総点数26点。A類：剥片の一端に長さ5mm程の極短い錐部を作るもの(167)、B類：基部は細く錐部が長さ1cm程のもの(159)、C類：基部は細く錐部が1.5cm以上の長めのもの(155～158、160～166)に分けられる。C類は全体に調整が施されるものが多く、基部と錐部の境が判然としないものを含むが、両者の区別は明瞭である。石材は黒曜石が9割以上を占める。

### スクレイパー (168～177)

総点数 24 点。剥片縁辺部の一部または全部に調整を施して刃部を作り出したものを抽出した。両面調整により急斜度の刃部を作出 (170・176・177)、片面調整により急斜度の刃部を作出 (169・172)、両面調整で緩斜度の刃部を作出 (168・173・175・177)、片面調整で緩斜度の刃部を作出したもの (171) に類別する。169 は切断様剥離面の鋭い縁を刃部とし、折断面側から若干の調整を加える。171 は二縁ある刃部の調整はそれぞれ逆面からの加圧によって行われる。168 は例外的な大形品である。掌に握り込んで使用したものか。石材は 9 割以上黒曜石である。

### 打製石斧 (178～193)

総点数 114 点。完形品 29 点、破片を含めた欠損品 85 点である。製作は剥片を剥取し、敲打成形される。大きさは、最大長さ 15cm のものから最小 6cm まで幅がある。全体形は以下の 4 類に類別する。

A 類：長方形状 (20 点、178・179・181・184・185・189・191・193)。主体となる形態である。178 は基部が絞られたように細い形態、179 は非常に細長い台形状だが、本類に含めた。

B 類：台形状 (6 点、186・187・190・192)。長さ比べて幅広い形状をとる傾向が窺える。186 は片方の側面に弱い抉りが入っている。

C 類：撥形状 (10 点、180・182・188)。両側面に抉り部をもつものと、側辺が全体的に内彎するものに大別できる。A 類に次いで多い。

D 類：三角形状 (3 点、183)。完形品 2 点、基部破片を含めても 3 点しかない。

刃部を残すものは 48 点ある。刃部平面形は直刃 (14 点、179・181・189・191・193)、円刃 (30 点、178・180・182～188・190・192)、尖刃 (4 点) に類別され、刃縁が身部の中軸に対して斜交するものが、直刃類では 29%、円刃類では 77% を占める。ただし直刃類は片隅切り形状 (179・193) を合わせると、左右対称のものは殆どない。刃部断面形は片刃形態を成すものが 77% を占める。刃部の作出は、素材剥片の縁辺を利用し、基本的には大きく加工することがなかったようで、刃部に自然面や主要剥離面のカーブを残す例 (180・186・187) も 29% ある。

刃部に摩耗痕・線状痕が観察されるもの 35 点 (73%)、基部の主面や両側縁に摩耗痕が観察されるものは 6 点である。刃部の摩耗痕・線状痕は、土砂との衝突・摩擦によって生じたと考える。凸面側に広く強く表れる傾向が明白で、また、突出する稜の摩耗は強いが、剥離面の凹部には及ばない。線状痕は刃縁に対して直交ないし若干傾く (最大 70 度)。基部の摩耗痕は装着によるものと考えられる。

石材は、千枚岩質粘板岩が 70% と大半を占め、その他、硬砂岩・粘板岩・頁岩・千枚岩質凝灰岩・ガラス質安山岩が少量みられる。

### 磨製石斧 (194～200)

総点数 10 点。側面の作出の有無と大きさ及び主面の形状で、以下の 2 類 4 細別する。

I 類：主面との境界が稜を成す側面を作出しないもの。いわゆる乳棒状磨製石斧。

I A 類—横断面が楕円形で基部が細い (195・197・198)。

I B 類—I A 類に比べ横断面形が扁平で、主面に明瞭な平坦面を作り出している (194・196)。

II 類：主面との境界が稜を成す側面を作出するもの。いわゆる定角式磨製石斧。

II A 類—大形のもの (199)

II B 類—小形のもの (200)

刃部を残すものは 5 点である。刃部平面形は、すべて円刃であり、刃縁は身部中軸に対し傾く。刃部断面形は、200 (II B 類) が片刃、その他は両刃である。

刃部の使用痕については、5 点すべてに刃毀れ・摩耗痕・線状痕が観察され、対象物との衝突・摩擦に

よるものと考えられる。線状痕の入射角は、殆どは刃縁に対し90～80度だが、195・199には60度位に振れるものも確認できる。また片刃の200は刃面と反対側の面の刃縁付近にのみ、短く密な線状痕が観察される。線状痕については、研磨痕と思われる横方向の擦痕に消される部分がしばしば観察され、刃部をこまめに研ぎ直す状況が推定される。

#### 磨石 (201～214、218～233)

総点数117点。する、たたく、つぶす、といった作業が想定できる資料。大きさは、長さ15cmを超えるものから3cm前後の極小品まで幅がある。素材は安山岩、輝石安山岩等の目の粗い転石を用いており、1点のみチャートがある。形態の類別は、断面形を含めた全体形状から2類4細別する。

I類：丸い礫を素材とするもの。

I A類—扁平な形状を呈するもの (53点、201～207・209・210・212・228・232)。

I B類—球形に近いもの (25点、208・214)。

II類：細長い礫を素材とするもので、柱状の形態を取るものが殆どである。

II A類—断面三角形形状を呈するもの (25点、218・220～226)。

II B類—断面長方形形状のもの (13点、211・213・219・227・229～231)。

小破片で類別不能のものが1点ある。

機能的視点からの観察は、素材の礫面構成と磨り面・敲き痕が形成された面との関係を見る。素材の礫面構成は、I類は平坦面と側面、II類では平坦面と側面および端面が基本となる。

#### 磨り面

I類：77点中、完形品は62点あり、磨り面が平坦面にだけ形成される1類 (33点、203・205・206・208・209・210・228・232)・磨り面が平坦面と側面両方に形成される2類 (29点、201・202・204・207・212・214) に類別できる。

II類：II類は折損率が高く、完形品は5点しかない。しかし、総体的な様相から、以下の3類を類別化することは可能と考える。磨り面が平坦面にだけ形成される1類(222)。磨り面が平坦面と側面両方に形成される2類 (211・213・218～211・223～227・229～231)、磨り面が平坦面と側面に加え端面にも形成される3類 (227)。

I類・II類とも、側面だけ(端面だけ)に磨り面をもつ例はない。I類の場合、磨り面形成の主体となるのは平坦面といえる。平坦面は対象物と磨り合う面積が広く、「すり、つぶす」作業を効率的に行うのに適しているのだろう。側面の摩耗度は、平坦面に比べて概して弱く、「する」行為に用いられた頻度の少なさを示唆している。II類の場合も、側面・端面の摩耗は弱く、「する」機能は主に平坦面が担ったと考えられる。

#### 敲き痕

I類：以下の4類に類別できる。敲き痕が認められないa類 (43点、203・205・206・208・209・210・228)。敲き痕が側面にだけ形成されるb類 (13点、201・202・204・207・214・232)。敲き痕が平坦面にだけ形成されるc類 (1点、212)。敲き痕が平坦面と側面両方に形成されるd類 (5点、208)。敲き痕形成の主体となるのは側面と考えられる。

II類：完形品5点については、敲き痕が認められないもの (2点、231)、敲き痕が端面だけに形成されるもの (2点、221)、敲き痕が端面と側面に形成されるもの (1点、218) に分けられるが、折損品を含めた類別はしない。平坦面に形成されるもの (219・230) もあるが、総体的にみて、敲き痕形成の主体となるのは端面であることは指摘できそうである (211、218、220～226)。また、両端部を残す例はいずれも両方の端部に敲き痕がみられる (211、218、220、221)。

敲击痕の形状は、Ⅰ類・Ⅱ類とも、平坦面のもは小さな単位が集合して凹部を構成するものが大部分を占め、二か所以上にわたる例もある。固定的な使用部からは、「たたく・わる」作業の受け手としての機能も想定できよう。側面および端面の敲击痕は、アバタ状ないしささくれた状態のものが比較的広くまとまって形成される例が殆どである。「たたく・わる」作業の持ち手が想定できる。

磨り面と敲击痕の共存関係をみると、検討可能な資料89点のうち、磨り面のみ有するものⅠA類23点、ⅠB類20点、ⅡA類2点、ⅡB類2点、両者共存するものはⅠA類21点、ⅠB類4点、ⅡA類12点、ⅡB類5点である。ⅠB類は磨り面だけのものの割合が高く、逆にⅡA類は共存するものが大多数である。ⅠB類(球形)は専ら「する」作業に用いられ、ⅡA類(細長三角柱状)は「たたく」作業の比重が相対的に高かったことを示唆するのではあるまいか。

#### 研磨円礫 (215～217)

総点数6点。長さ7cm以下、平均4cm程の小形の円礫である。頁岩の4点は円形を呈し、細かく密な線状痕(研磨痕)が全面に及ぶ。チャートの2点は楕円形および細長い形状で、石質故か線状痕はさほど目立たない。道具としては、こする、みがくといった作業が想定できよう。敲击痕は全く認められない。

#### 凹石 (233・250)

総点数2点。小形の233は片面に深さ4mmの擂鉢形の凹みがあり、その裏面中央には敲击痕がみられる。大形の250は深さ2.6cmの逆円錐形の凹みをもち、底部がすぼまった形状で自立はできない。両者とも凹みは細かい敲打による成形である。磨り面は認められない。

#### 多孔石 (249)

総点数1点。浮石製。回転穿孔による小円孔6孔が同一面にまとまって穿たれている。6孔とも孔底部は断面U字形で底径は7～8mmを測る。底面の中央が短く突出することから、ほぼ同じ太さの管状物体による穿孔、ないしは管状物体の研磨に用いられたことが推定される。石本体の形状は、孔面を上にしての自立はできない形状である。

#### 砥石 (252～260)

総点数17点。板状のもの(252～254・259・260)と柱状のもの(255～258)がある。板状品は欠損率が高く、全体形状が不明瞭だが、柱状品より大形で砥面も広く、置いて使用するに適しているよう。石材の大半は砂岩である。252は砥面に断面半円形の細長い凹みのある有溝砥石である。柱状品は手に持った使用形態を想定する。石材は凝灰岩など板状品より緻密な岩石を用いた例が多い。ただし、目の粗い安山岩もある(258)。255は研ぎ減りによって細くなった中央部で折れたものだろう。256は顕著な砥面は1面で、他の砥面には櫛歯状製品による使用痕が見られる。

#### 台石 (234～248)

総点数60点。平坦面に主に磨り面が認められ、する・つぶす等の作業の台として、床に置いて使用した状況が想定される資料を台石とした。欠損品が多く、全体形状が判明するものは少ないが、厚み(高さ)がある角礫を素材とするもの(234・236・241)、板状の角礫を素材とするもの(235・237～240・242～246・248)、扁平な円礫を素材とするもの(247)がある。236・242は磨り面が若干凹面を成しており、242・247は磨り面に重複してアバタ状の敲击痕が認められる。磨り面が非常に平滑なもの(234・235・237・240・243～246・248)は砥石としての用途も考えた方がよいかもしれない。

#### 石剣類 (261～265)

総点数7点。すべて折損品・破片で、全体が判るものはない。石材は緑色片岩を主体とする。261・262・261は明確な刃縁を作り出していないので、石棒と称した方が適切かもしれない。261・262は龟头状の頭部をもち、その表現は写実的といえる。263は折れ面に摩耗痕が観察され、二次利用が考えられる。

## 玉類 (266～270)

総点数5点。267～269は滑石製の白玉で、古墳時代後期後半の竪穴住居から、カマド廃絶儀礼に係ると推定される状況で出土した。孔面・側面とも殆ど研磨されておらず、側面全面に整形時の切削痕を残したままである。270は滑石製の勾玉で、頭部に3条の刻線を施している。背は中ほどでく字状に屈曲し、腹は直線的な形状で、頭部は不均等な圭頭状を呈する。縄文時代晩期の所産であろう。2号自然流路出土。266はガラス小玉だがこの項に載せた。色はスカイブルー。

## 五輪塔 (251)

総点数1点。上面に断面逆台形の削り込みを有する水輪である。側面形は球形で、最大径位置は中位。南北朝期以降の所産としてよいだろう。

## 引用・参考文献

- 青木一男・宇賀神誠司 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70号 長野県考古学会
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』(勸愛知県埋蔵文化財センター)
- 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2  
(勸長野県埋蔵文化財センター)
- 大村直 1984 「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第17号
- 尾見智志 1995 「上田小県地方ノ弥生後期の土器と集落」『長野県考古学会誌』76号 長野県考古学会
- 小葉一夫 1990 「土製円板の機能的側面について」『東京の遺跡』No.28 東京考古談話会
- 近藤尚義 1991 「第3章 第18節栗毛坂遺跡群 i (2) 石器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』(勸長野県埋蔵文化財センター)
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『榎原考古学研究所論集』第8号 榎原考古学研究所
- 鈴木俊成 1992 「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』第3号 新潟県考古学会
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』 柏書房
- 寺島俊郎 1991 「第3章 第18節栗毛坂遺跡群 5 (1) 古墳時代末～平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』(勸長野県埋蔵文化財センター)
- 富沢一明 1996 「佐久平における古墳時代の土器編年試案」『長野県考古学会誌』79号 長野県考古学会
- 富田和氣夫 1991 「第4章 第2節 1 B銅鏃」『岡山市浦間茶臼山古墳』 浦間茶臼山古墳発掘調査団
- 花岡弘・西山克己 1995 「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略として—」  
『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 町田勝則 1993 「第3章 第3節 2 (2) 石器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』(勸長野県埋蔵文化財センター)
- 町田勝則 1996 「石器の研究法」『長野県の考古学』(勸長野県埋蔵文化財センター)
- 柳澤亮 1998 「第3章 第1節国分寺周辺遺跡群 4 (2) 遺物」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』(勸長野県埋蔵文化財センター)

### 第3節 小結

大日ノ木遺跡を時代順に概観してまとめとしたい。今回の調査で得られた資料は、時期的には、縄文時代、古墳時代前期、古墳時代後期から平安時代、に大別される。

**縄文時代** 明らかに縄文時代に属すると判断できる遺構は存在しなかった。しかし、1号・2号自然流路および、包含層から、相当量の縄文時代遺物が出土した。土器は、早期中葉、早期後葉～末葉、前期、中期、後期、晩期後半の土器が検出されている。早期の押型文土器は量的には極めて少ないが、樋沢式、細久保式が出土した。早期後葉は田戸上層式並行と思われる貝殻沈線文土器がまとまっている。早期末葉も、高風呂遺跡39号住居址段階に位置付けられる絡条体圧痕文土器・絡条体条痕文土器がまとまって出土している。さらに、東海系貝殻沈線土器の粕畑式が出土しており、この段階の絡条体圧痕文土器が粕畑式に並行するという編年観を補強する資料といえよう。前期～後期はいずれも断片的な資料であり、細かい様相は判然としない。晩期は本遺跡の縄文土器の大半を占める。全体的な器形が窺える資料は極めて少ないが、総体的には、氷Ⅰ式の範疇に位置付けられる資料である。石器は量的には多いが、土器との共伴関係を捉えることができず、各時期の組成・様相を明確にし得ないが、土器が主体を占める早期および晩期に概ね対応した内容を示しているようである。

**古墳時代前期** 空白の弥生時代を経て、弥生時代後期末ないし古墳時代初頭に、ようやく集落が確認され、前期末葉まで存続する。

当該期の住居跡は19軒が検出されており、前節で、各住居の時期を宇賀神誠司の編年に対比させ、4時期を認めたが、ここで、若干の推定部分を含めて整理してみる。まず、弥生後期末からⅠ期古段階の住居数は4軒(3・7・8・29住)、Ⅰ期新段階は6軒(4・5・23・27・28・35住)、Ⅱ期古段階4軒(1・13・15・38住)、前期末葉1軒(12住)である。ただし、Ⅰ期新段階の住居はその重複関係や出土土器の様相から、古い一群(5・27・35住)と新しい一群(4・23・28住)に分かれる可能性が高く、結果として5時期の変遷が認められる。Ⅰ期に属するがそれ以上の限定が難しい18・30号住居、前期末葉以前としか限定できない14・16号住居を合わせて判断すると、集落は、終末期を除いて、一時期4・5軒の規模であった考えられる。

弥生後期末からⅠ期新段階にかけての3時期の集落は、それぞれ1軒の大形住居と、それを取り巻く3ないし4軒の中・小形住居から構成され、住居間の格差がみられる。さらに、大形住居が集落南西側のほぼ同位置を占居し、中・小形住居がその北西側に配置されるという空間構成も概ね同じである。このことは、この間、集落を営んだ集団内部において、中核的な家族体と従属的な家族体の関係が基本的に変化しなかったことを意味しよう。Ⅱ期古段階の住居は遺存状況が悪く、数的には変わらないものの、前段階までの構成がそのまま存続していたかどうかは明確ではない。ただし住居群の中心が南側の低地部に移動するようであり、それに伴って何らかの変化があったかもしれない。いずれにしても、次の前期末葉の段階をもって、調査区内においては集落は消滅する。

**古墳時代後期から平安時代** 古墳時代中期から後期の或る時期まで、本遺跡では人間活動の痕跡が絶えている。しかし、6世紀後葉ないし末葉に至って、再び一定規模の集落経営が始まる。

若干の推定を含めて、該期の住居数の変遷を整理してみると、6世紀後葉1軒(9住)、6世紀末葉～7世紀初め2軒(19・26住)、7世紀前半2軒(21・11住)、7世紀中頃～後半2軒(34・39住)、8世紀前半3軒(32・2・6住)、8世紀後半2軒(24・31住)、9世紀2軒(20・22住)となる。7時期の変遷が認められ、集落は一時期2・3軒の規模であった考えられる。6世紀末葉～7世紀前半の集落は、相対的に大形の住居と小形住居の組み合わせが基本構成である。7世紀後半は不明確であるが、8世紀前半にはその基本原理が崩れ、住居が小形化するとともに住居間の格差は少なくなっている。8世紀後半もそうした在り方は継続すると思

われるが、小竪穴建物が加わり、また、1号掘立柱建物はこの時期に属すると思われるので、集落の建物構成に変化が生じたといえよう。9世紀の住居は中葉以降に属し、前段階の集落との間に断絶期がある。9世紀後半には、集落の拡散化が活発となる状況が、各地で認められており、こうした動きと連動させて考えるならば、この地に6世紀から8世紀にかけて集落を営んだ集団とは別の人々による移住の結果として理解する方が妥当であろう。また、2軒は切り合いをもつため、1時期の住居数は1軒ということになり、8世紀後半までの集落とは全く違った景観がそこにある。

9世紀を最後として居住活動は途絶え、以後、いかなる土地利用が行われたのか、それを語る考古学的資料は得られなかった。

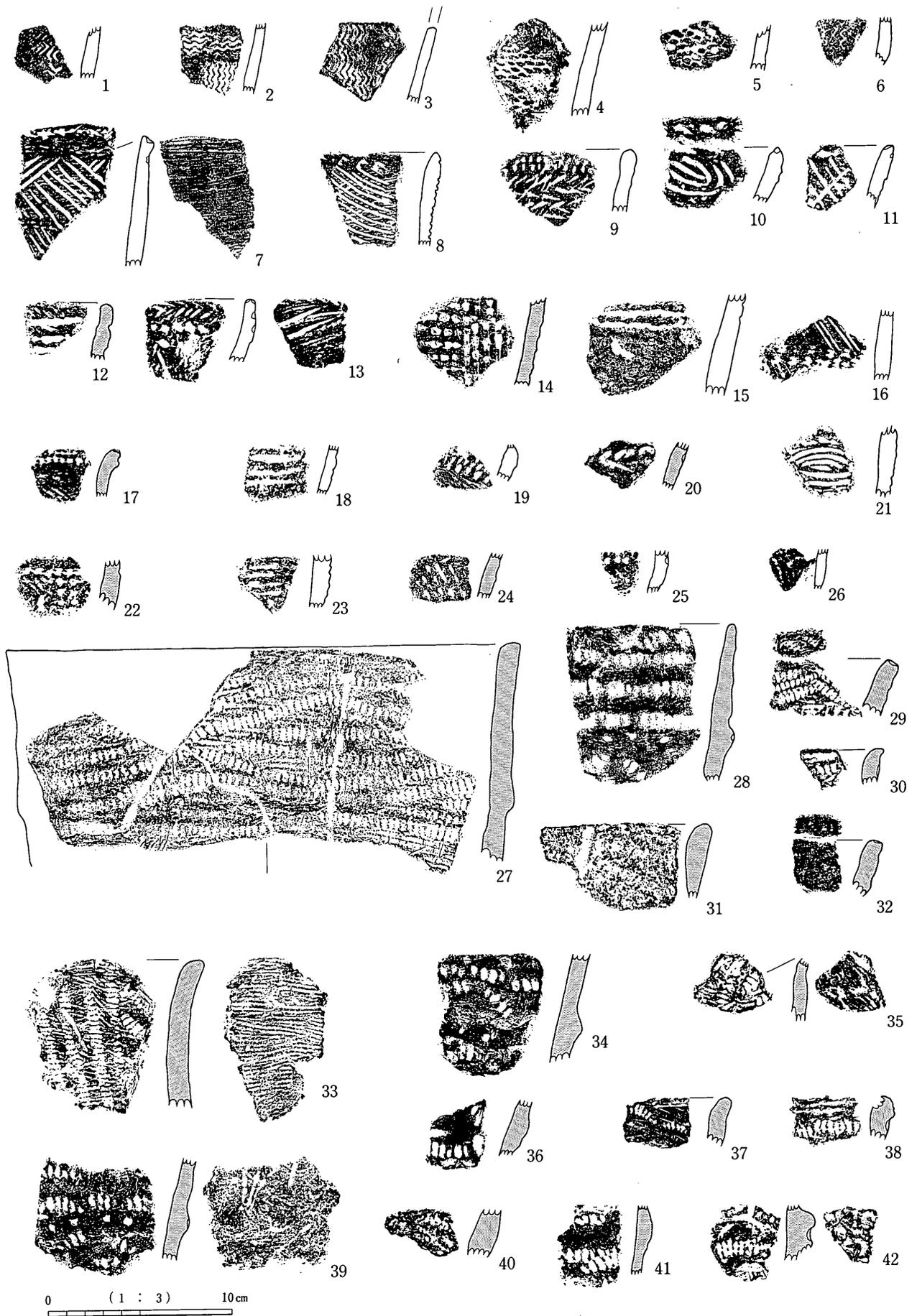


図31 土器(1)―縄文時代―

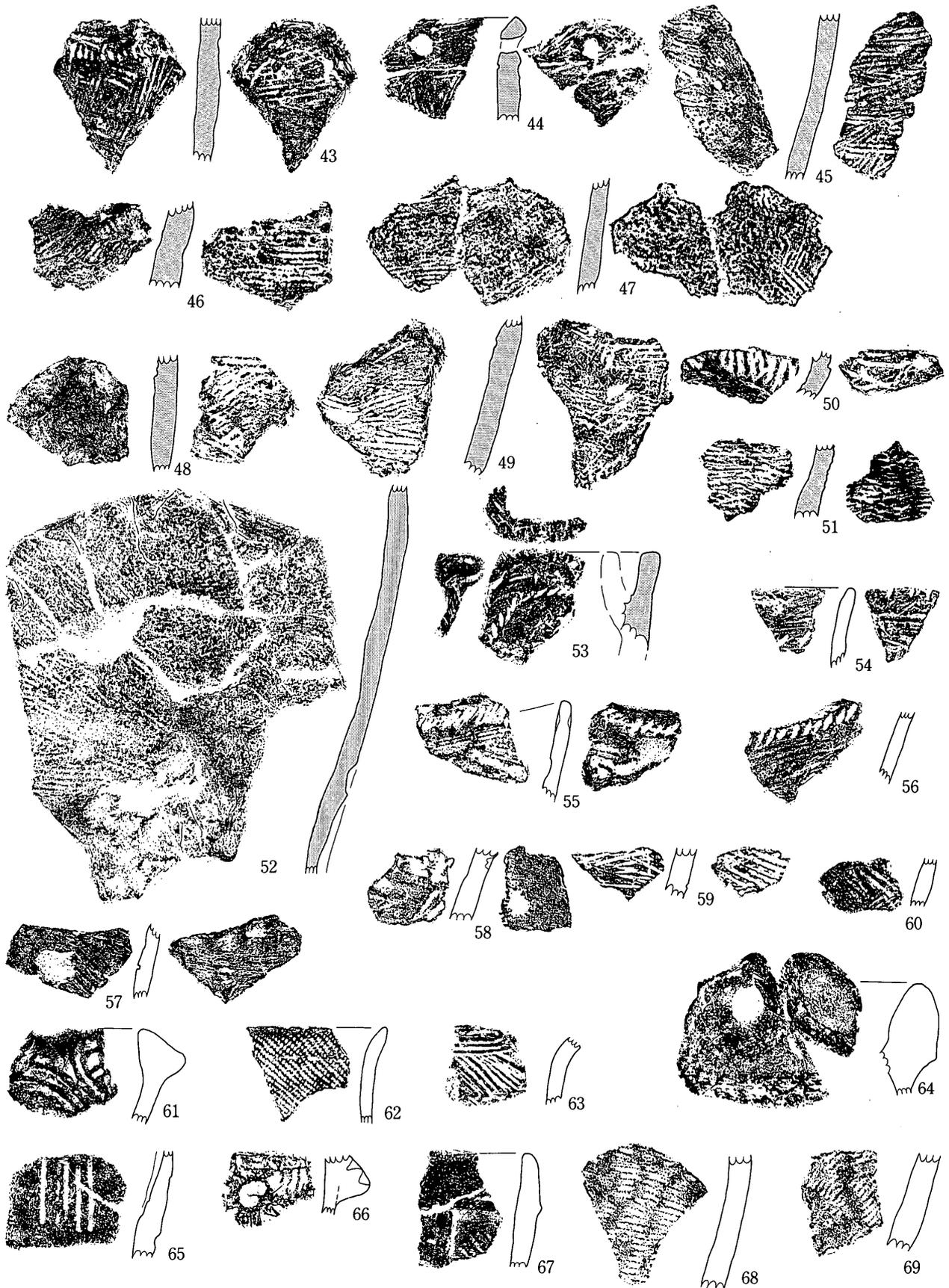


图 32 土器(2)一繩文時代一

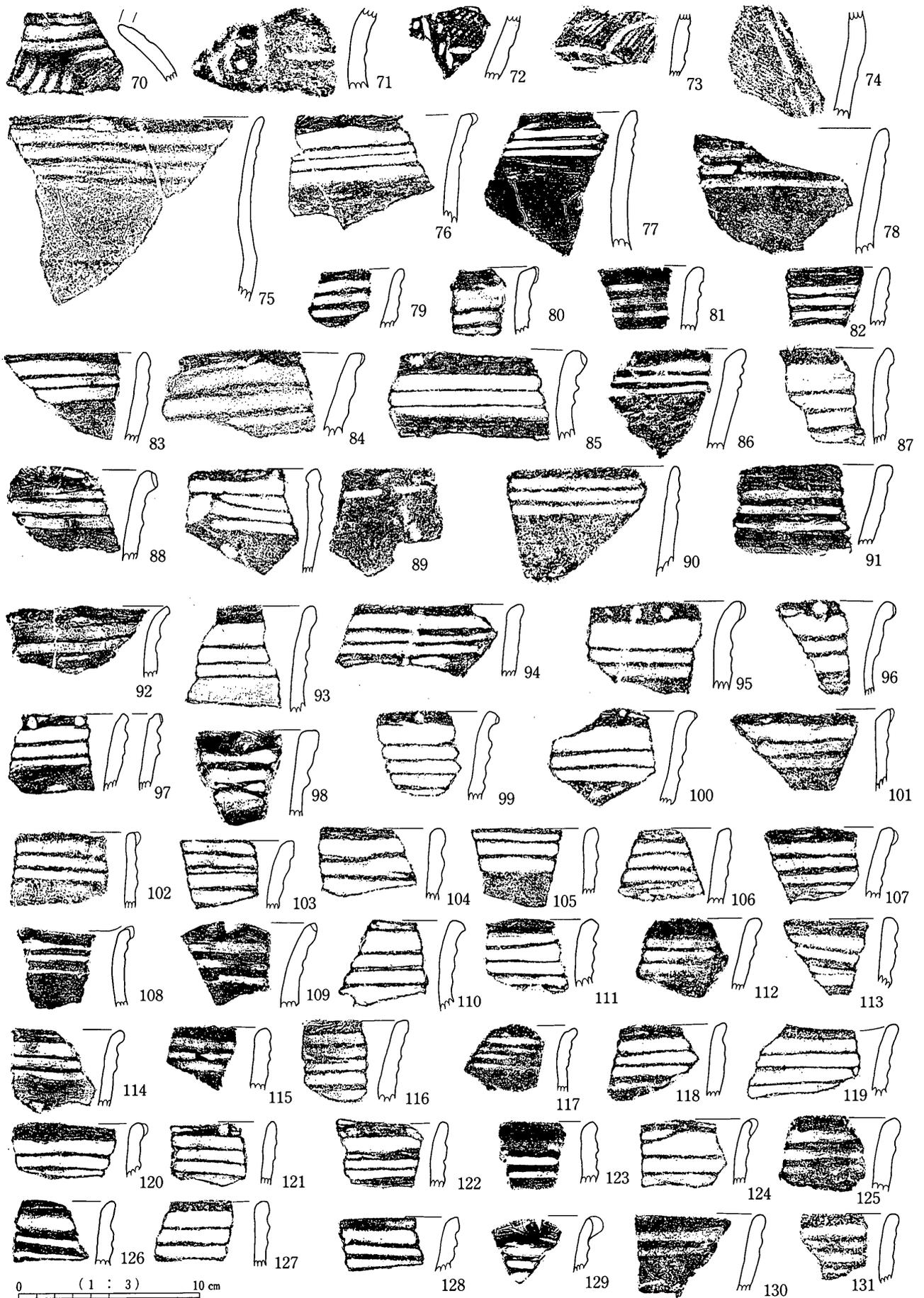


図33 土器(3)—縄文時代—

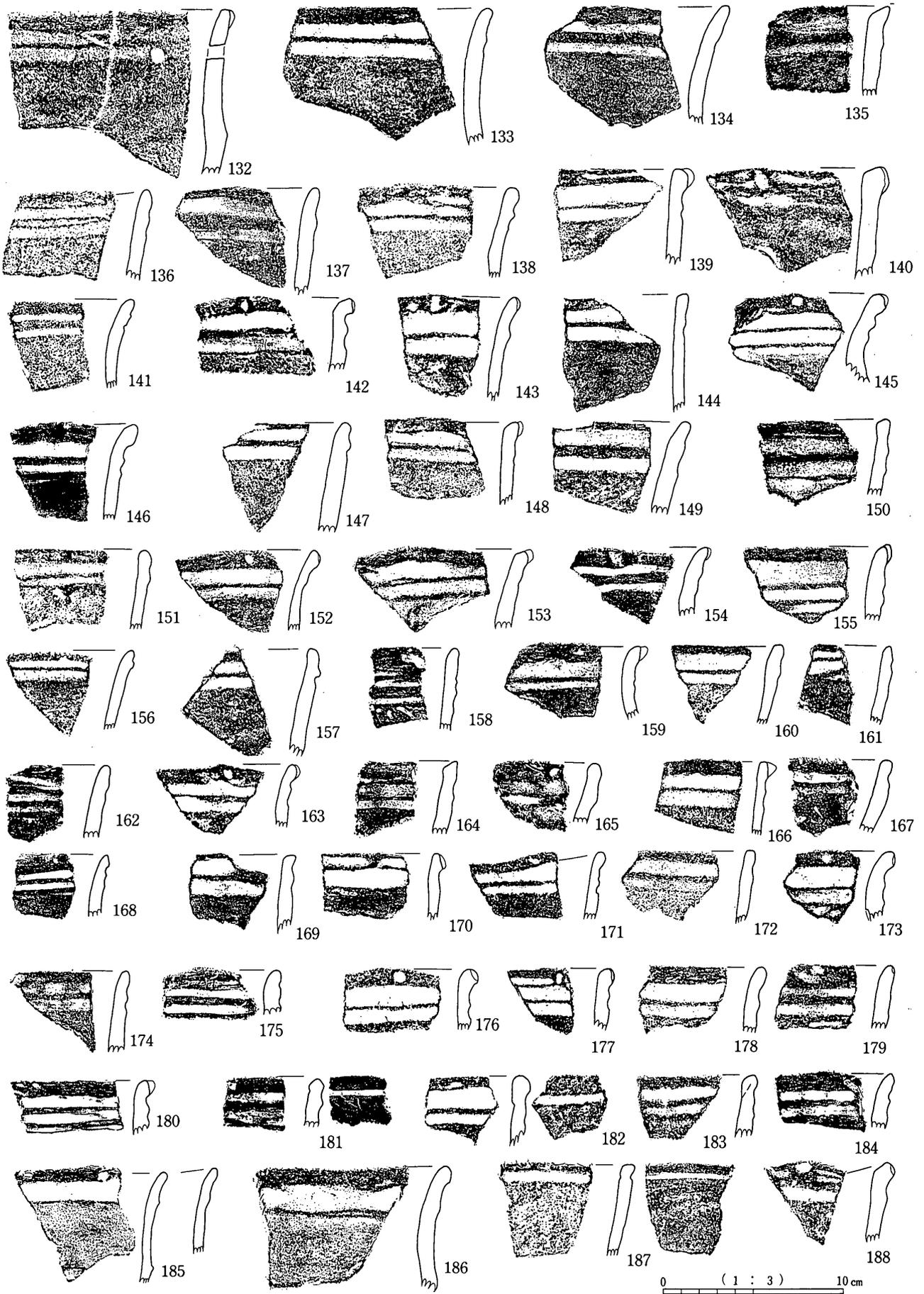


图 34 土器(4)—縄文時代—

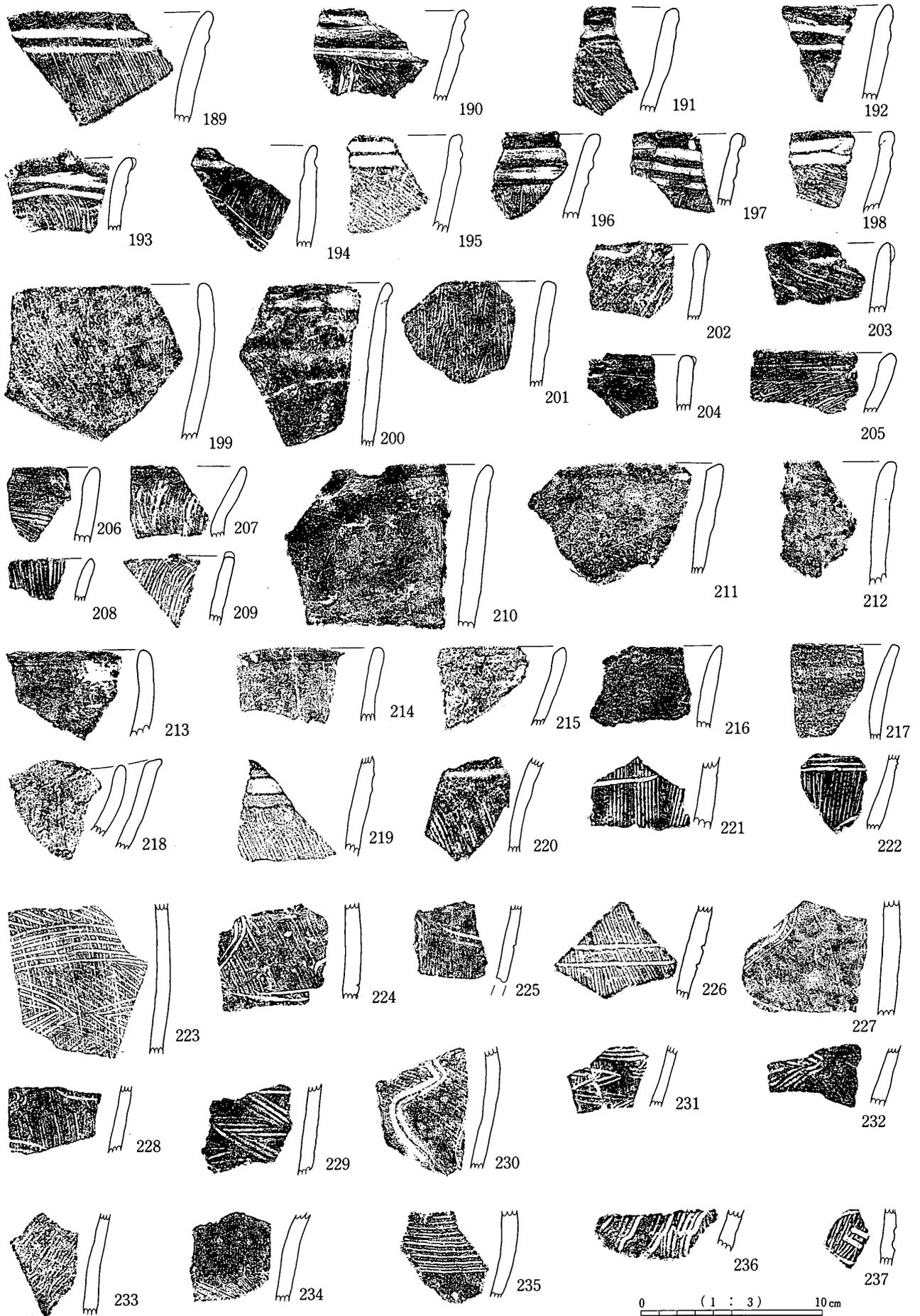


図 35 土器(5)―縄文時代―



图36 土器(6)—繩文時代—



図37 土器(7)―縄文時代―

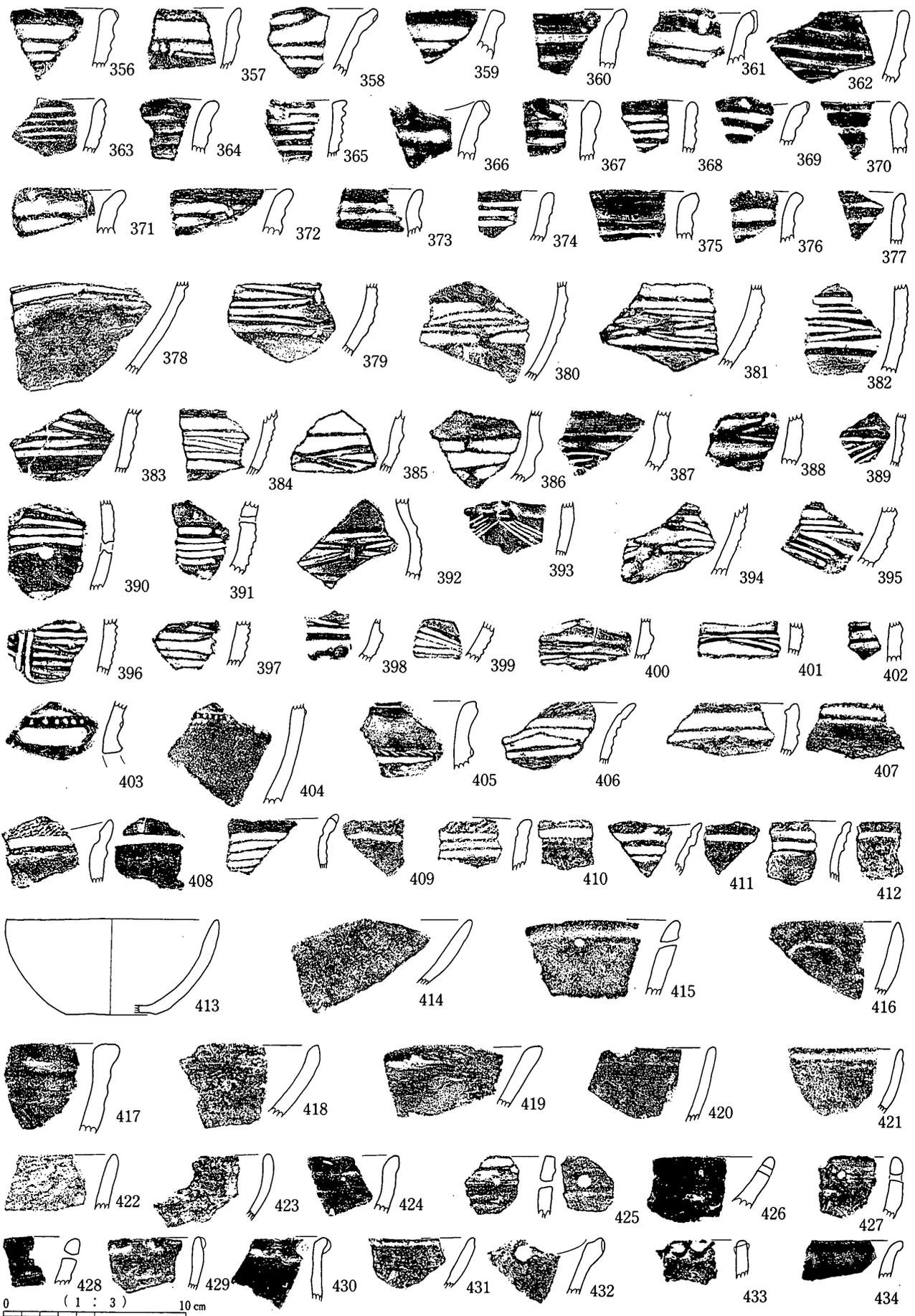
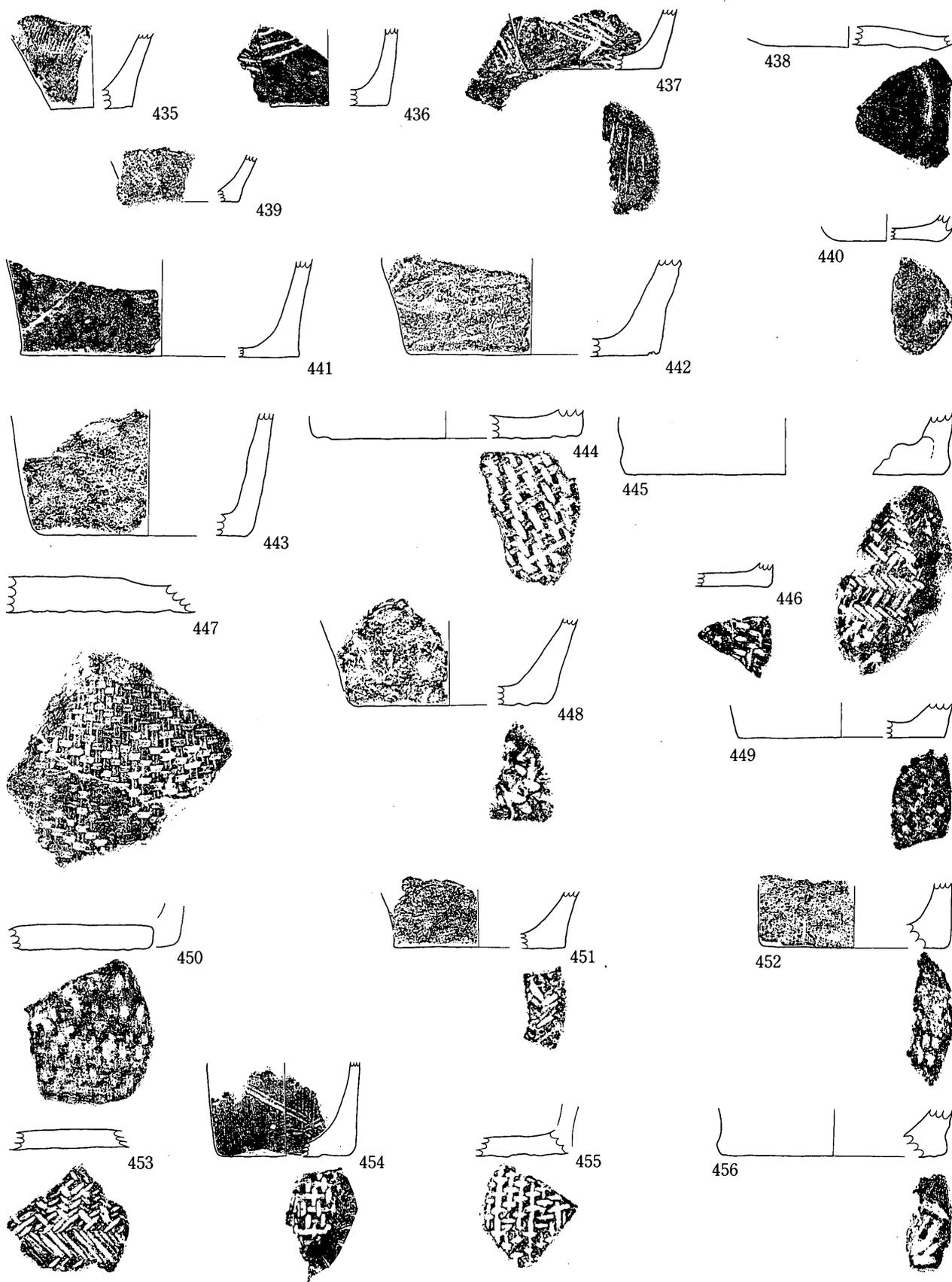


图 38 土器(8)一繩文時代一



0 (1 : 3) 10 cm

図39 土器(9)―縄文時代―

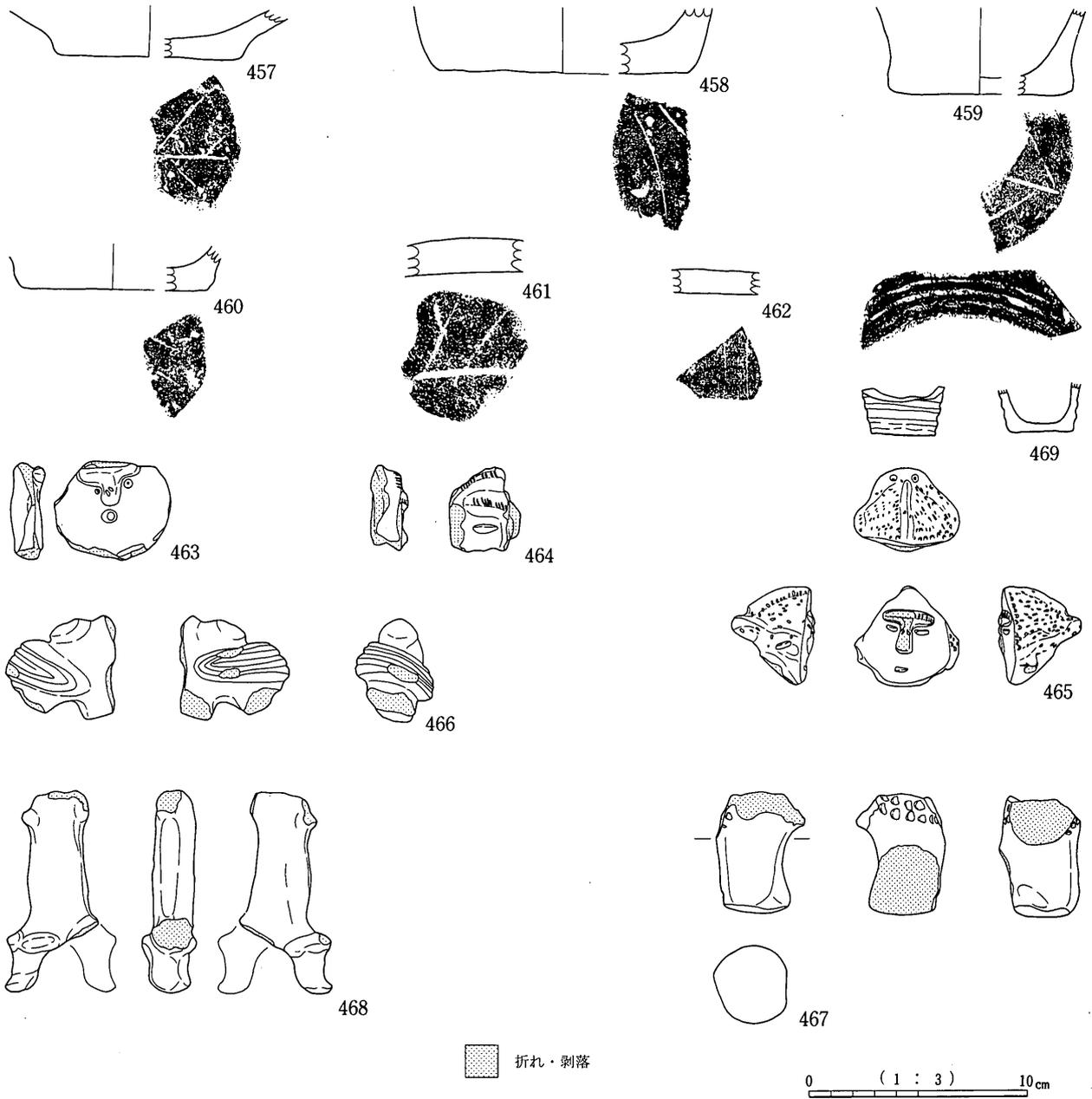
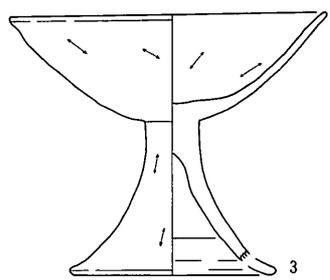
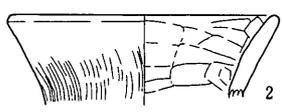
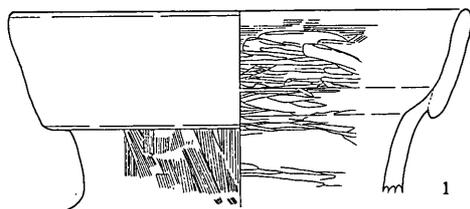
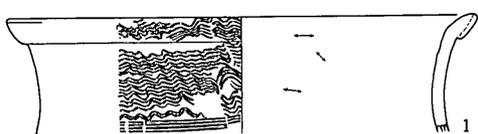


図40 土器(0)・土偶—縄文時代—

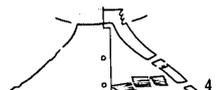
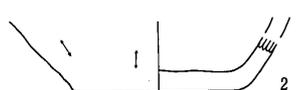
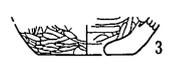
1 住



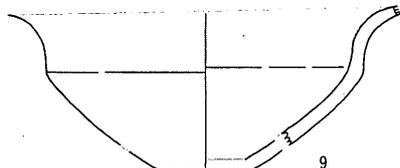
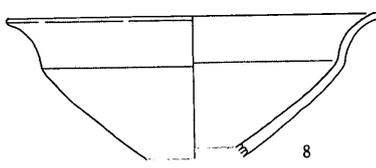
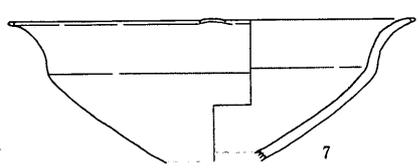
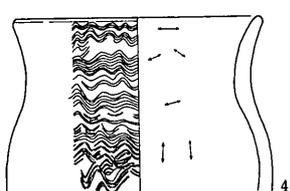
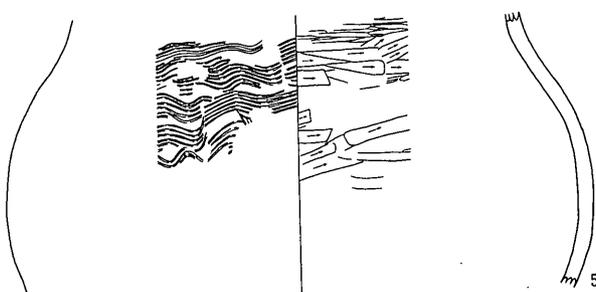
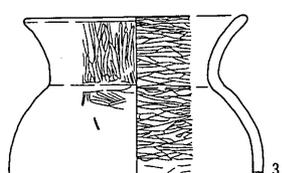
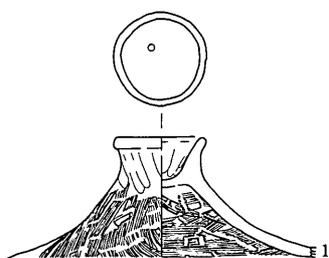
3 住



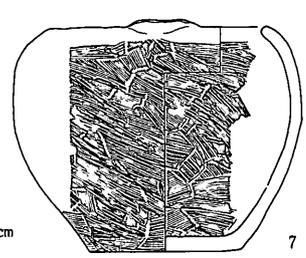
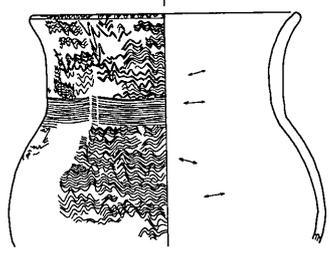
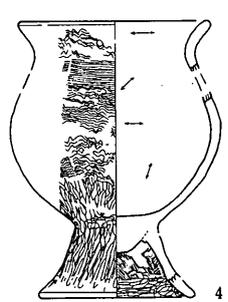
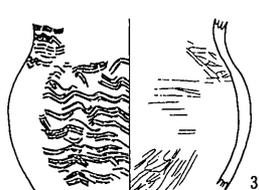
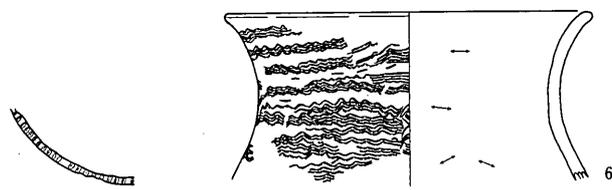
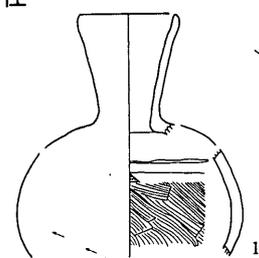
4 住



5 住



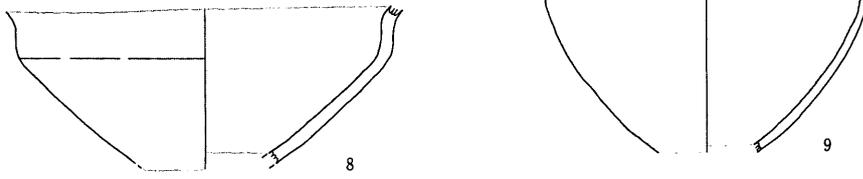
7 住



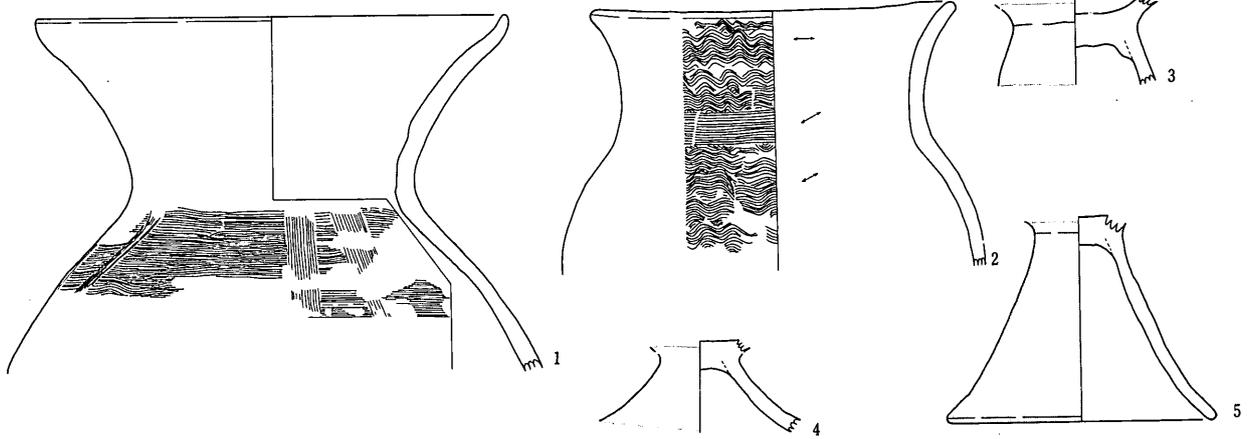
0 (1 : 4) 10 cm

図 41 土器(1)一弥生時代後期末～古墳時代前期一

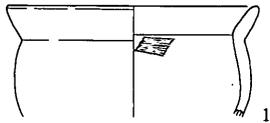
7住



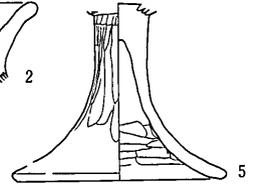
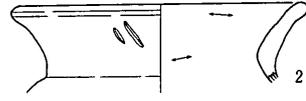
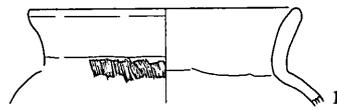
8住



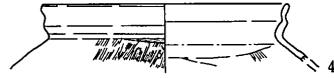
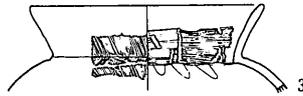
12住



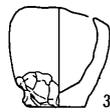
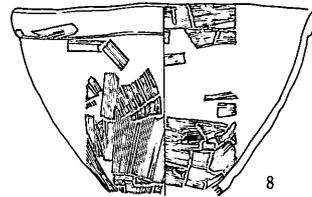
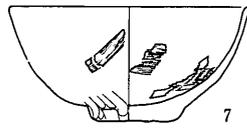
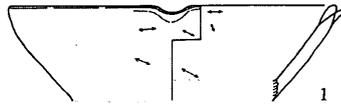
13住



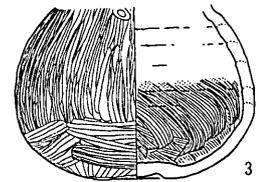
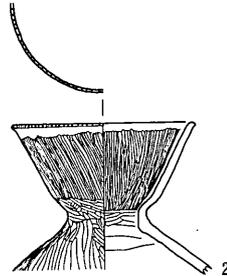
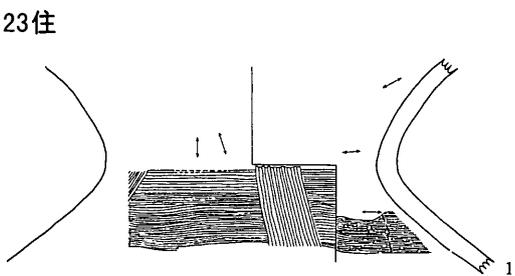
15住



18住



23住



0 (1:4) 10cm

图 42 土器(2)一弥生時代後期末~古墳時代前期一

23住

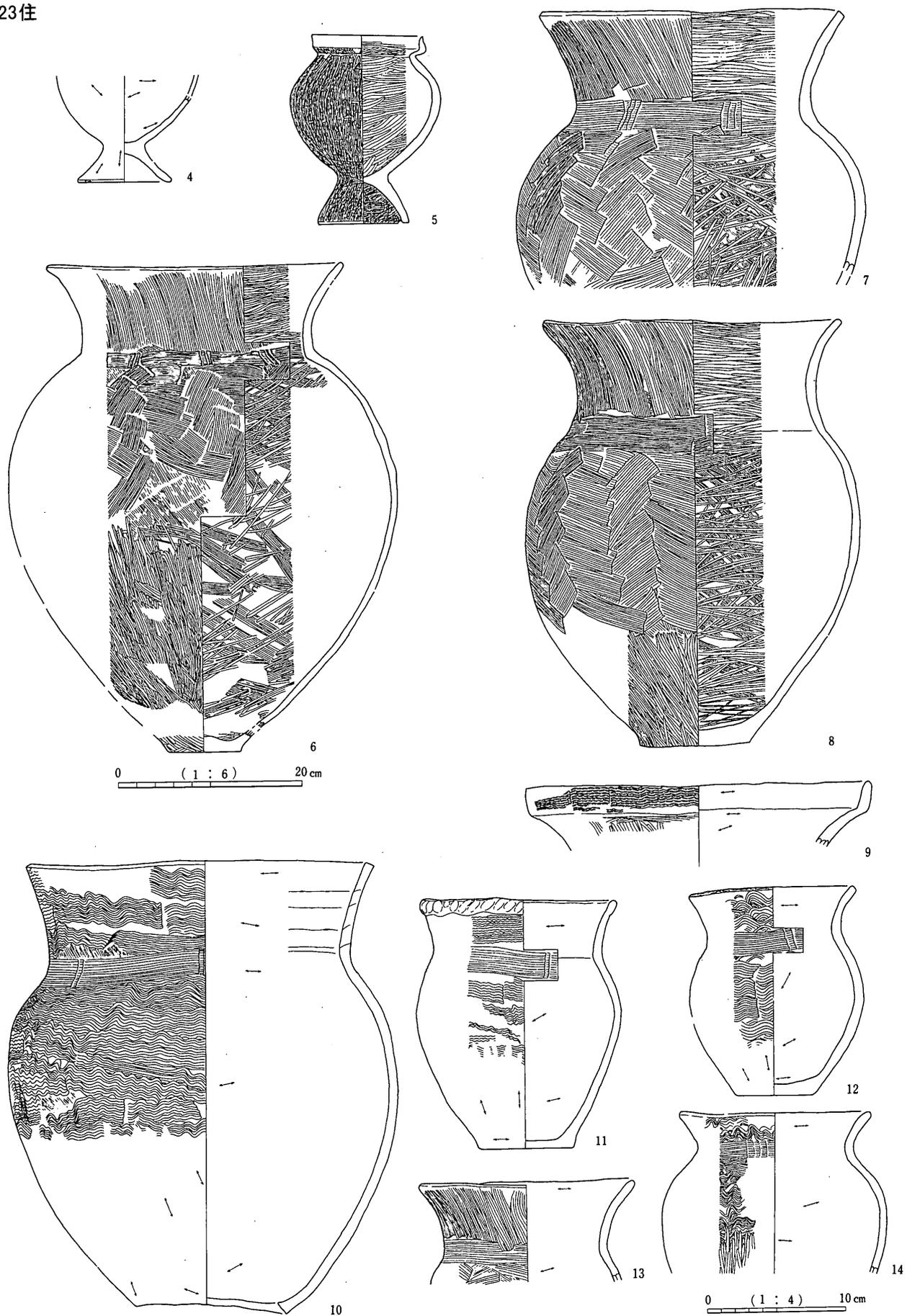


图 43 土器⑬—弥生時代後期末～古墳時代前期—

23住

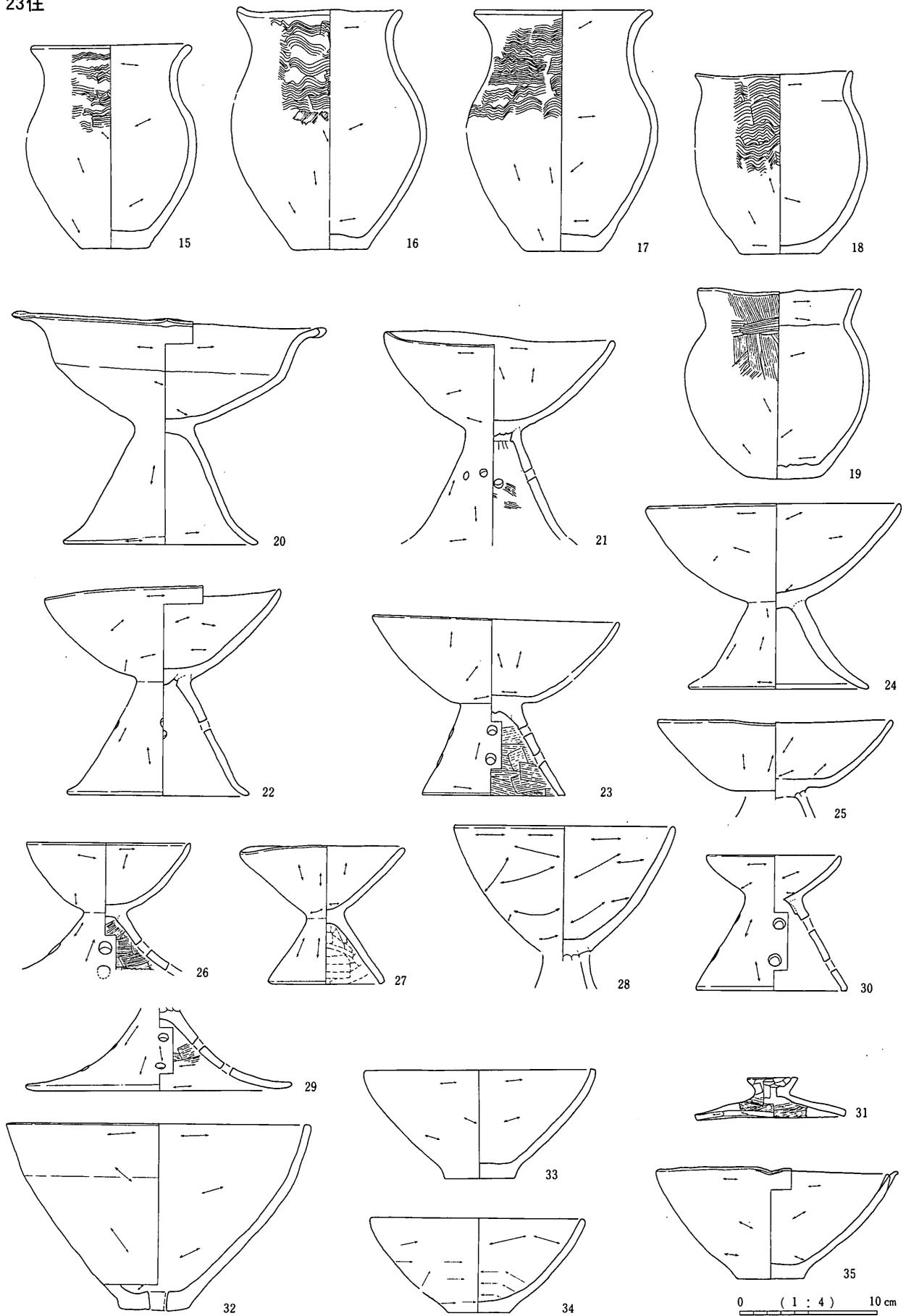
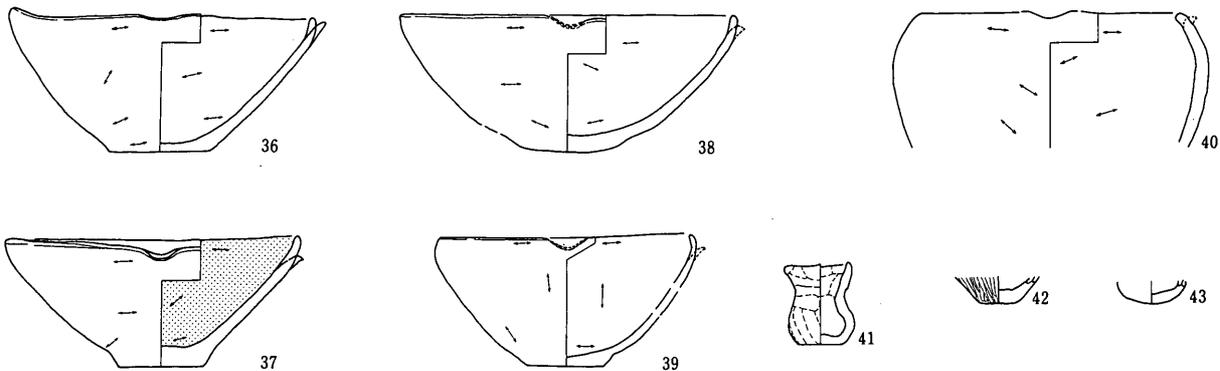
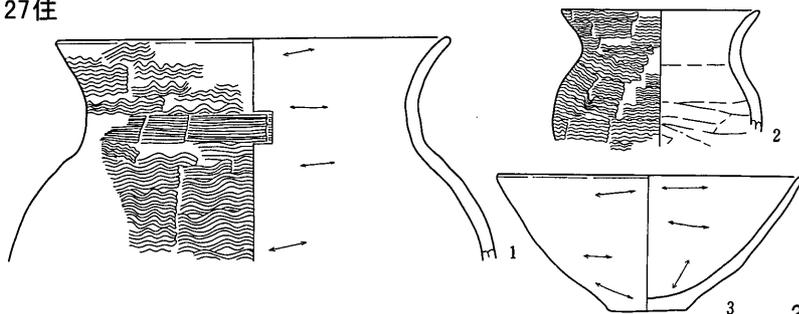


圖 44 土器(4)一弥生時代後期末~古墳時代前期一

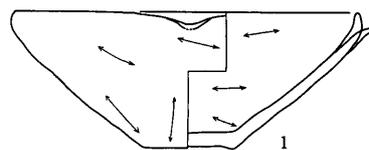
23住



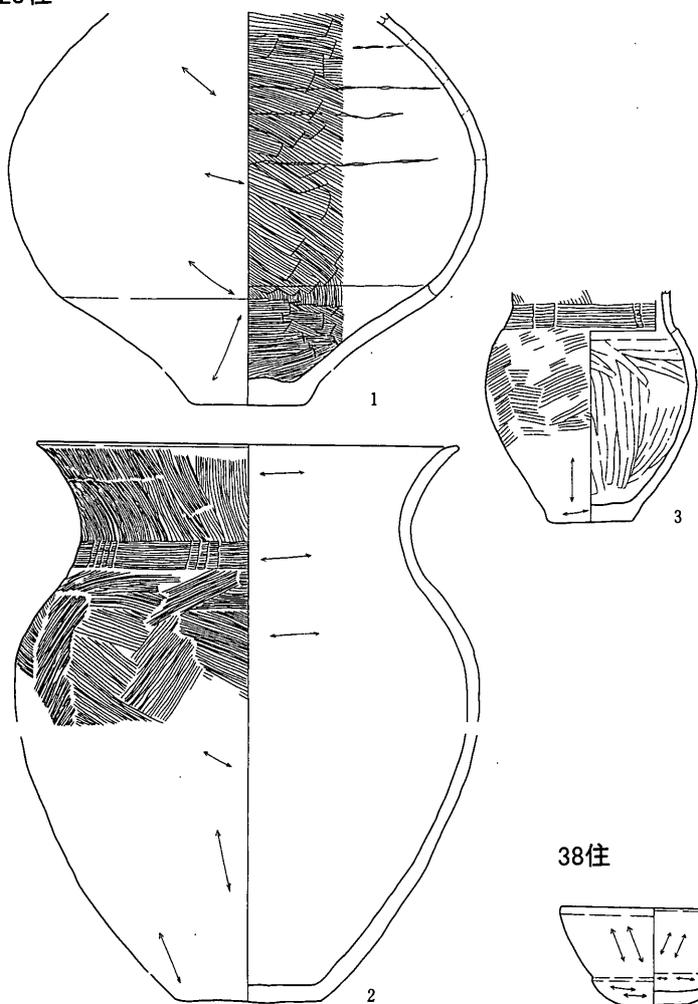
27住



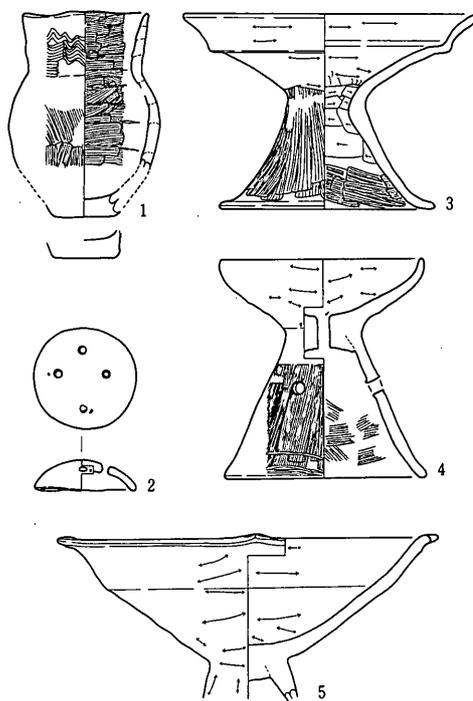
30住



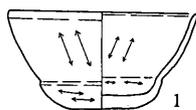
28住



35住



38住

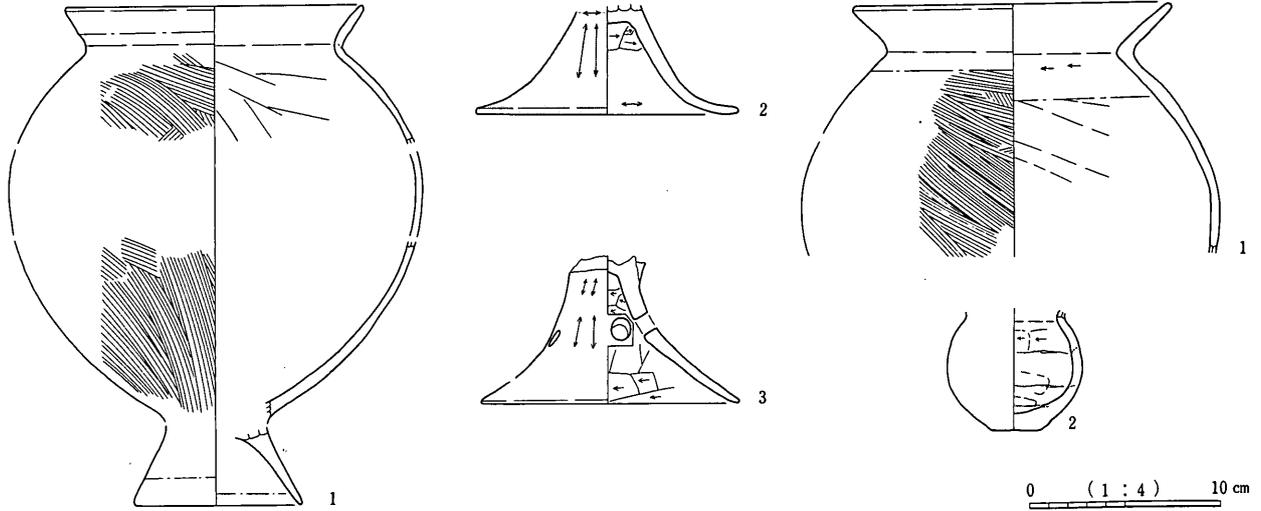


0 (1 : 4) 10 cm

图 45 土器(5)一弥生時代後期末~古墳時代前期一

53 坑

SF 1



2 流路

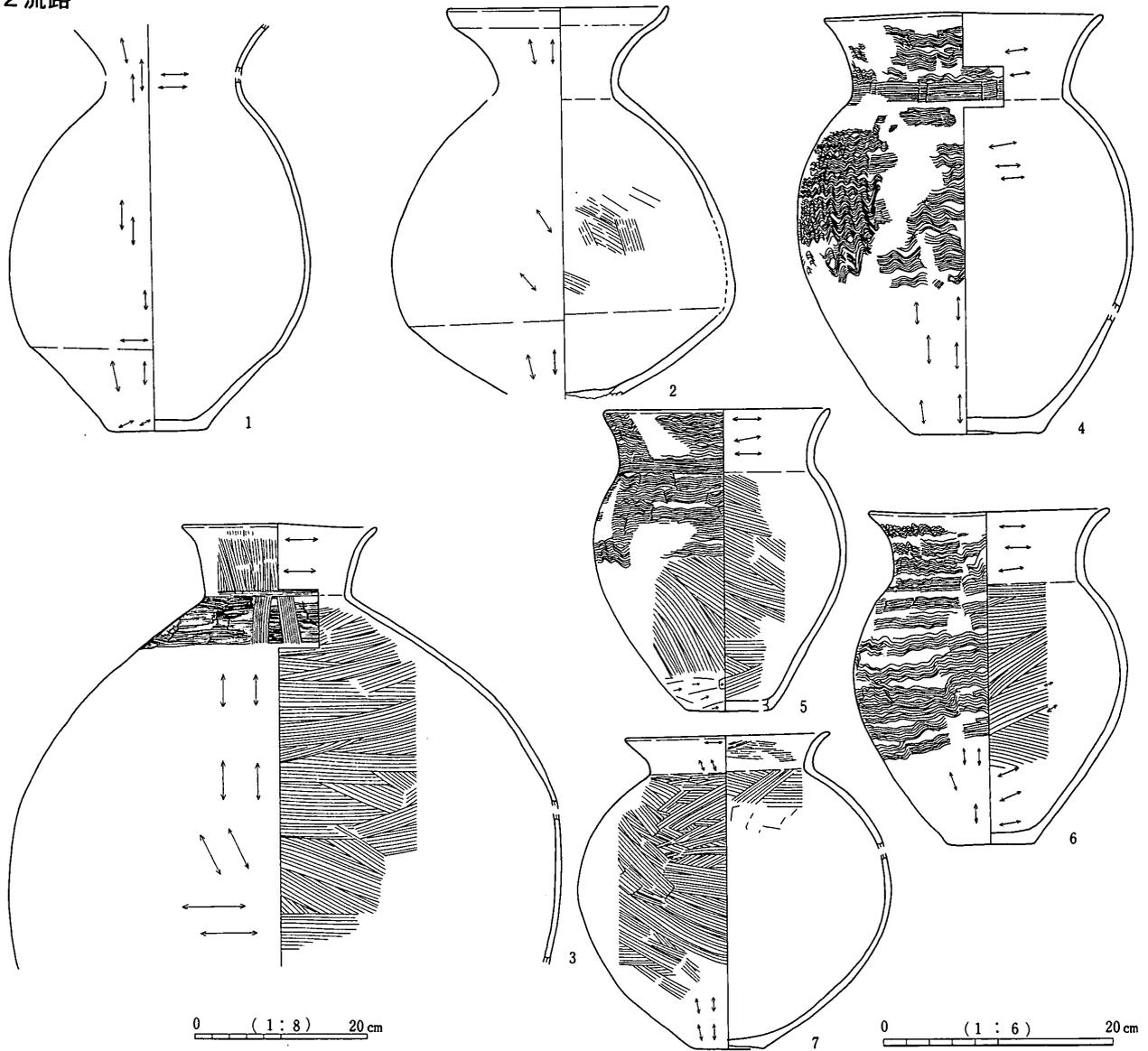
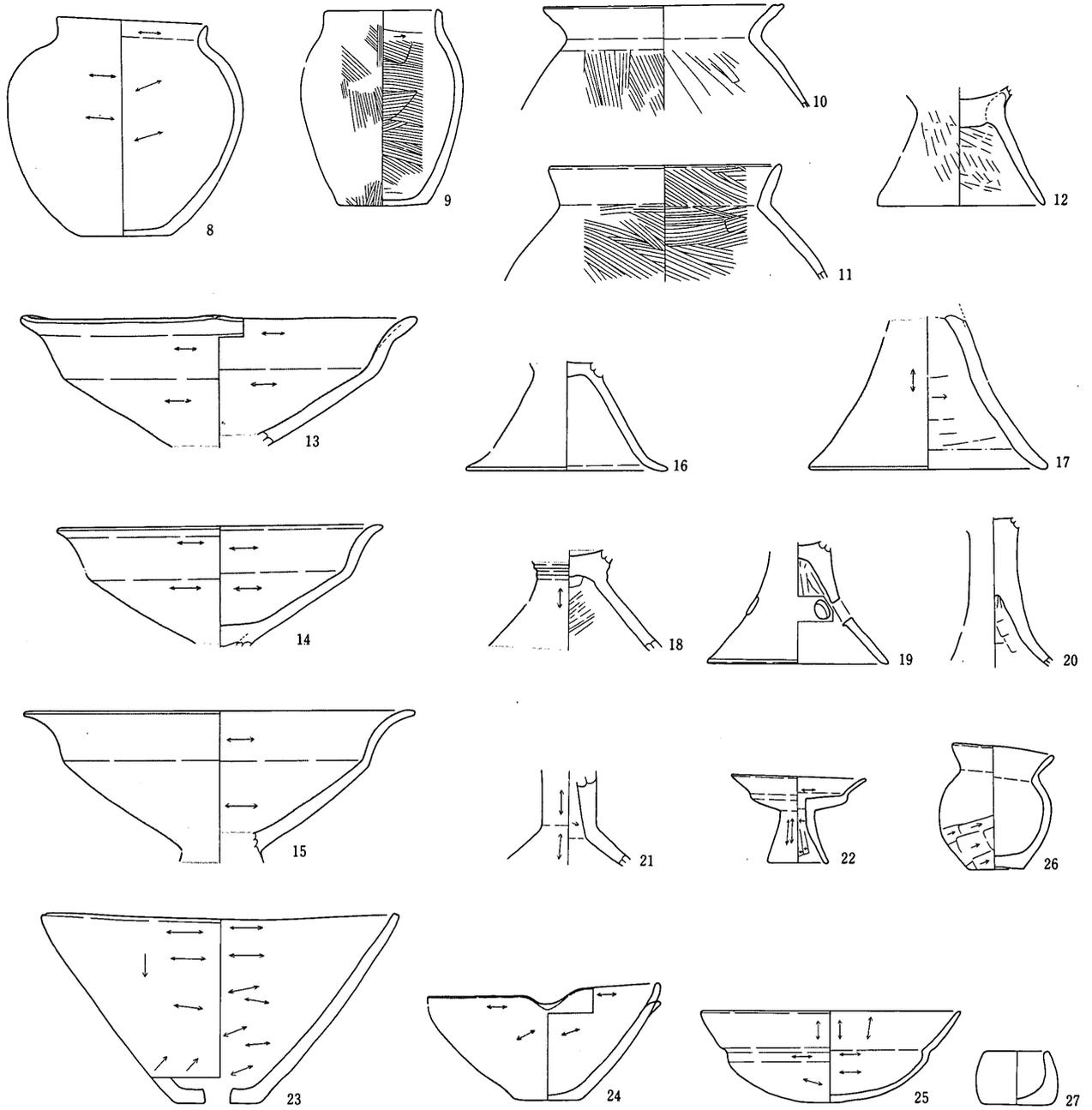


图 46 土器(6)一弥生時代後期末~古墳時代前期一

2 流路



遺構外

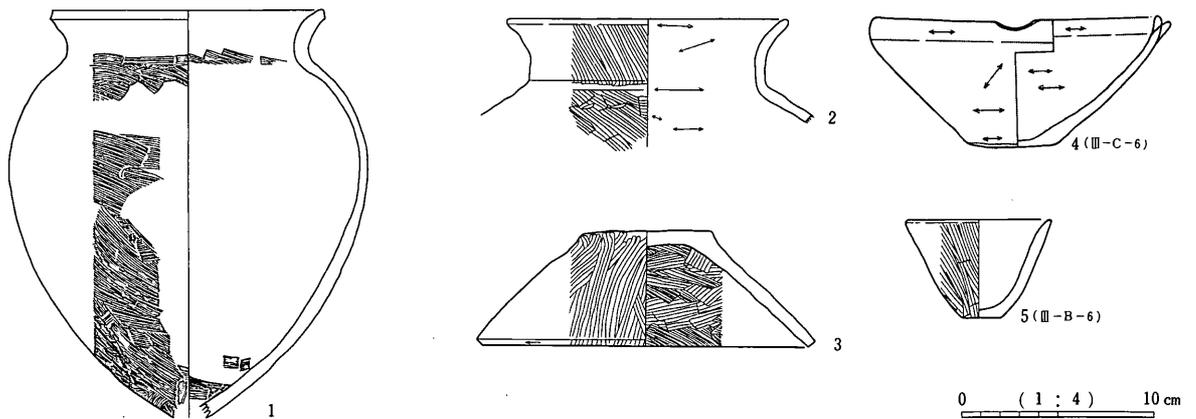
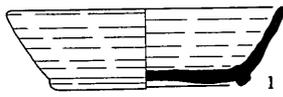
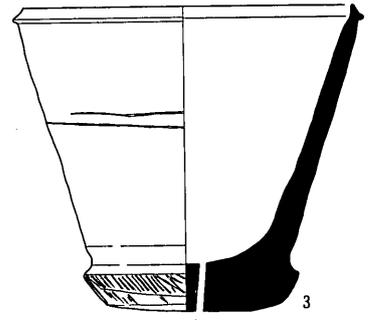
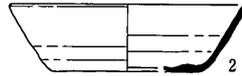


図47 土器(17)一弥生時代後期末～古墳時代前期一

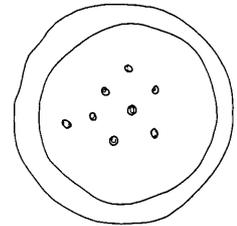
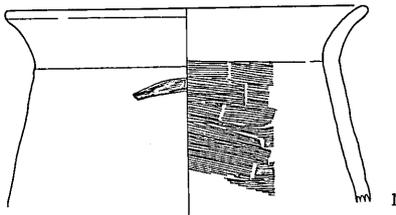
2住



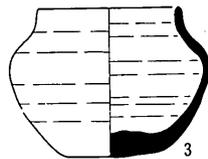
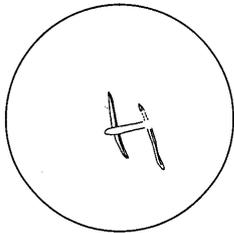
6住



9住



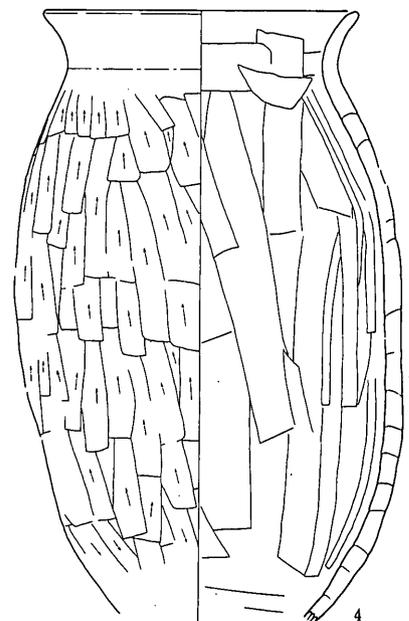
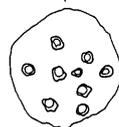
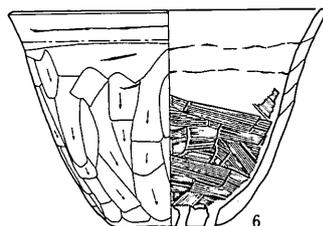
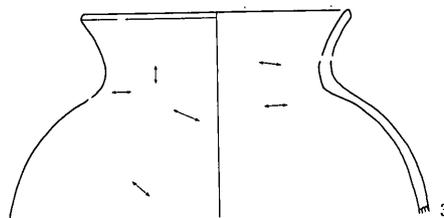
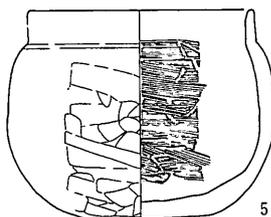
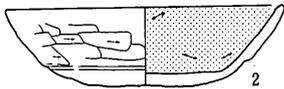
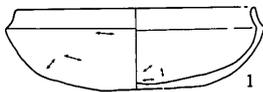
11住



17住



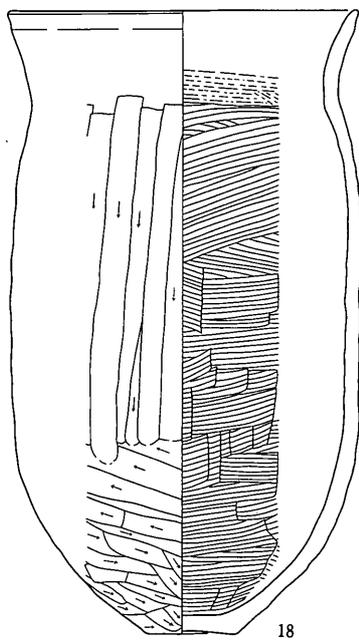
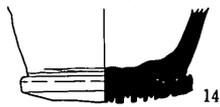
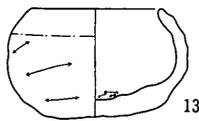
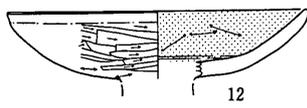
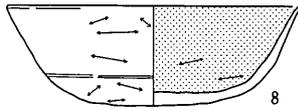
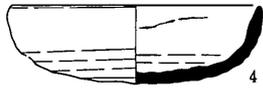
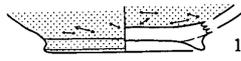
19住



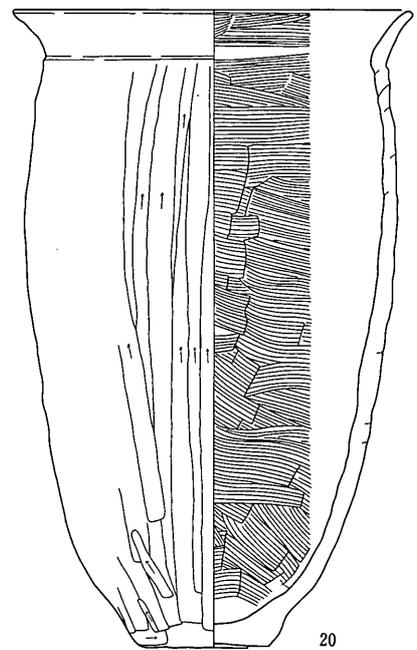
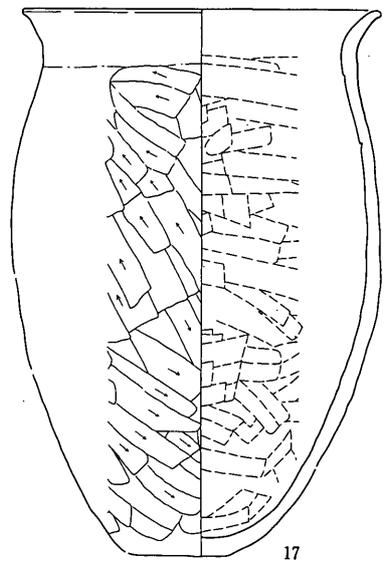
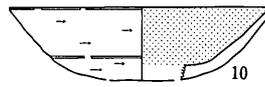
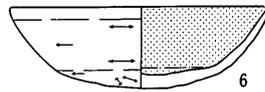
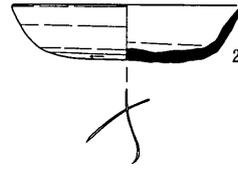
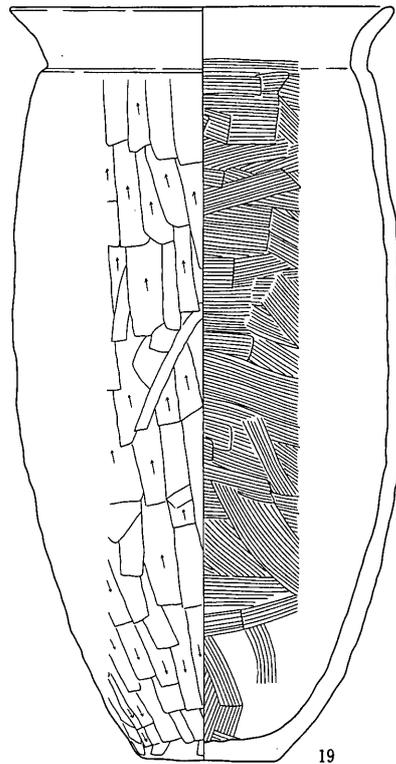
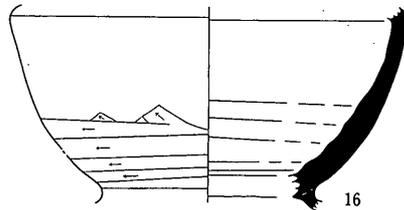
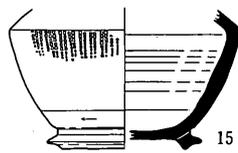
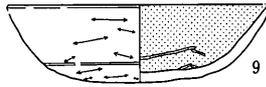
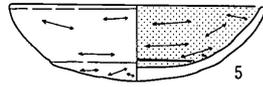
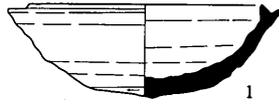
0 (1:4) 10 cm

图48 土器(8)—古墳時代後期～平安時代—

20住



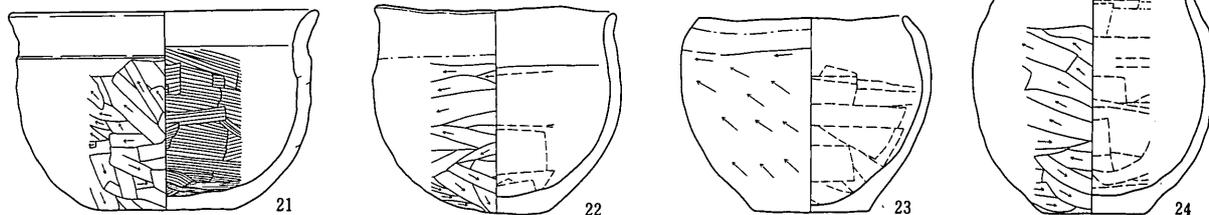
21住



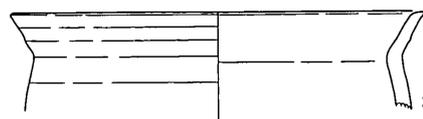
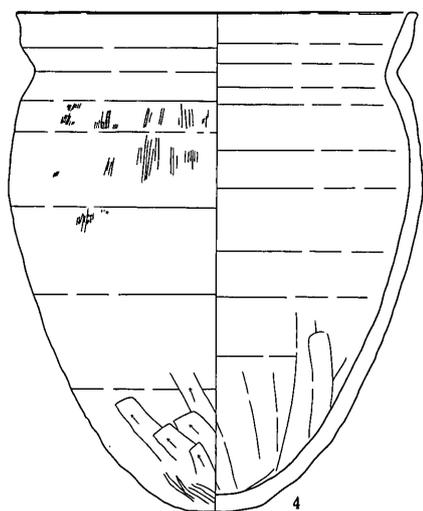
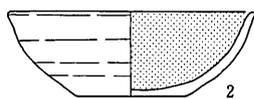
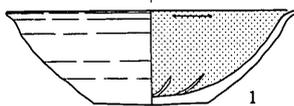
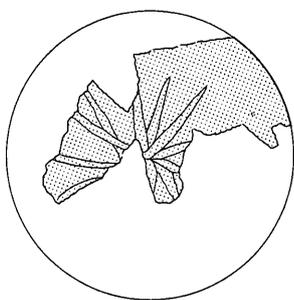
0 (1 : 4) 10 cm

图49 土器(9)一古墳時代後期~平安時代一

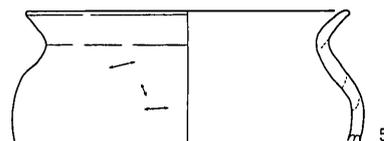
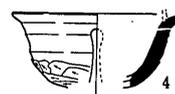
21住



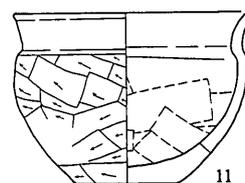
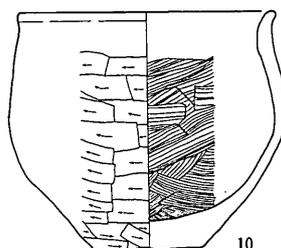
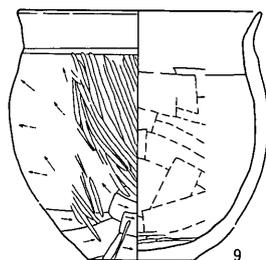
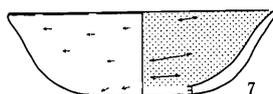
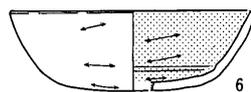
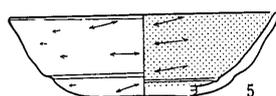
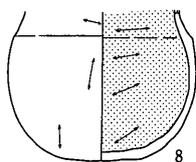
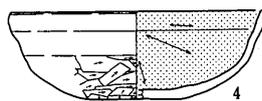
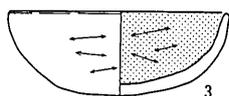
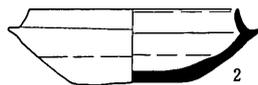
22住



24住



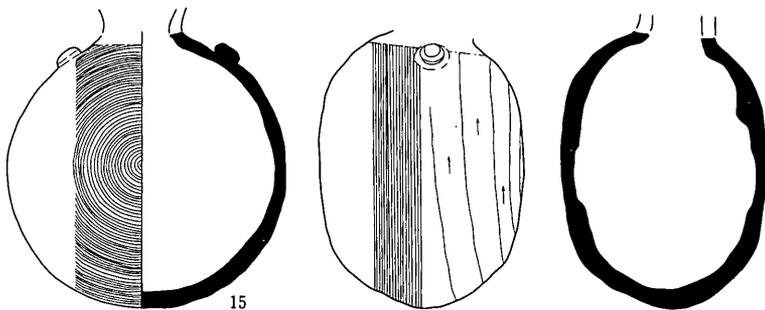
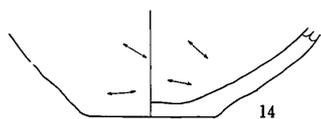
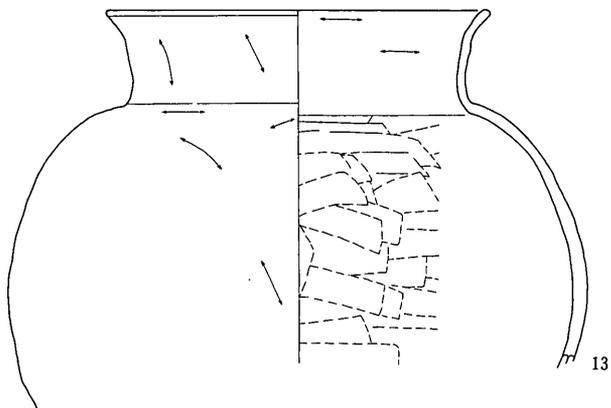
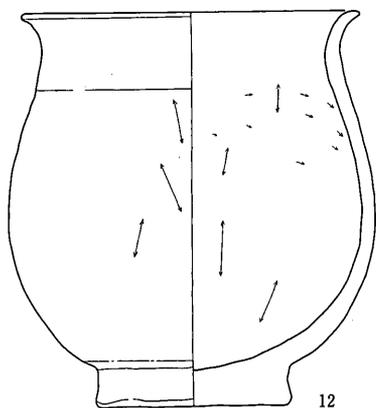
26住



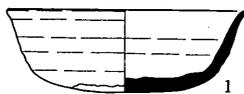
0 (1:4) 10 cm

图 50 土器(20)—古墳時代後期～平安時代—

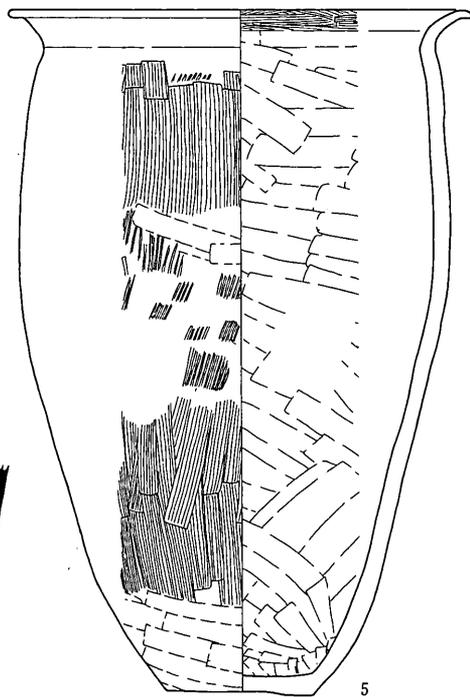
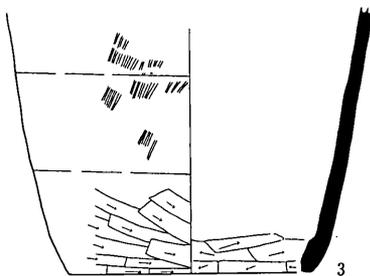
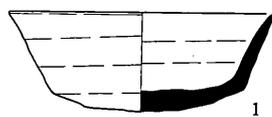
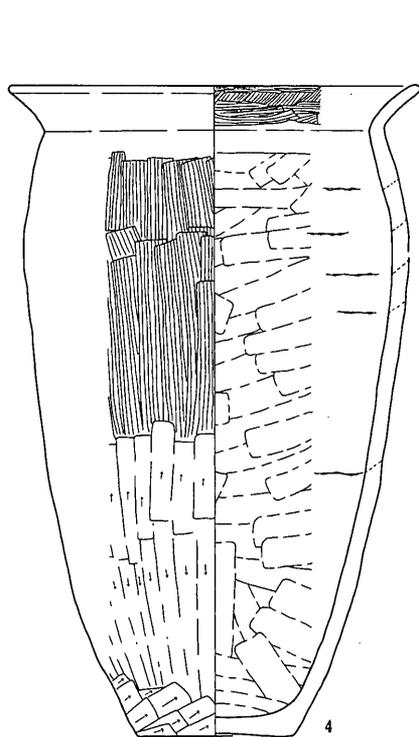
26住



31竖



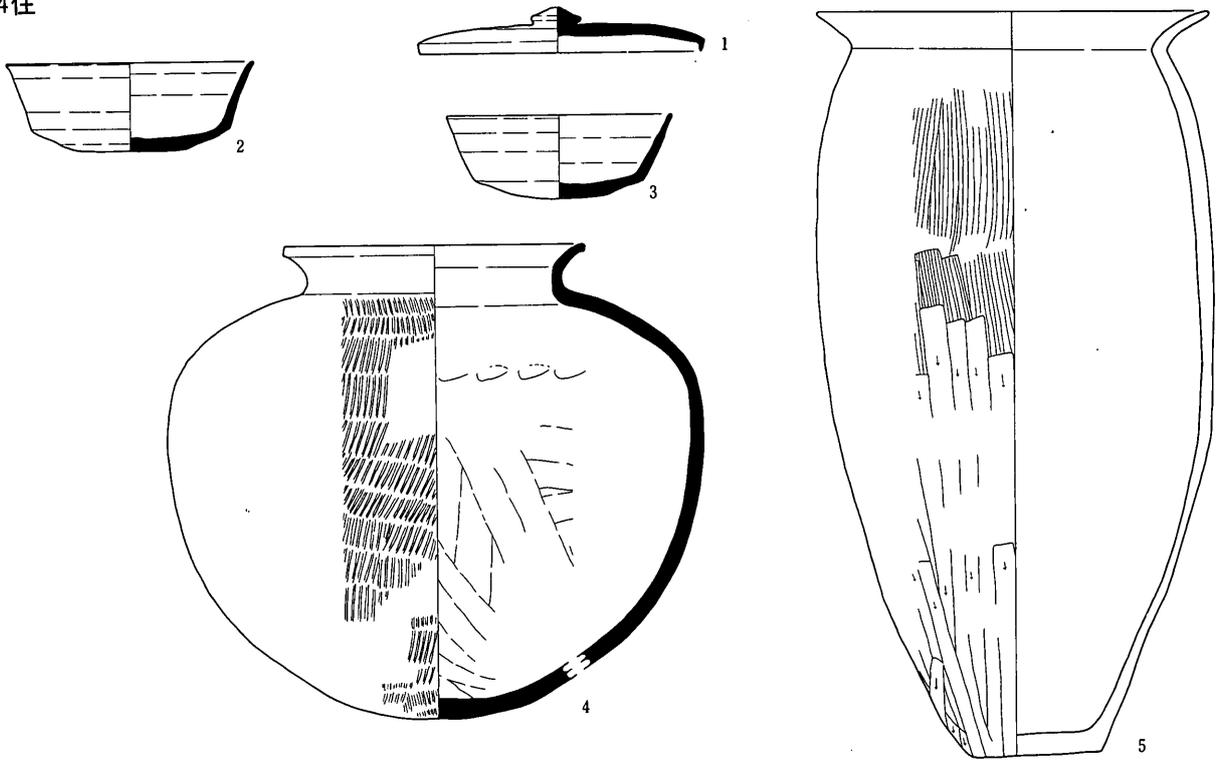
32住



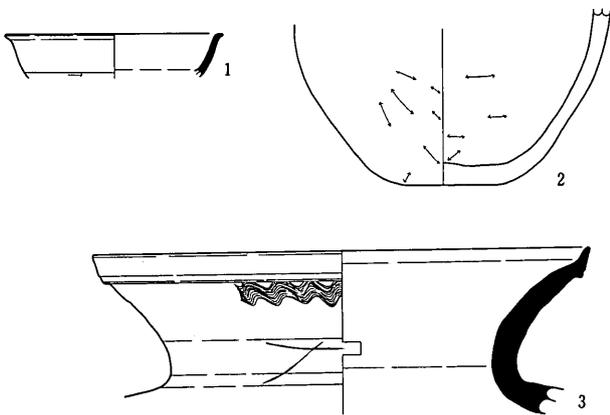
0 (1 : 4) 10 cm

图 51 土器②—古墳時代後期～平安時代—

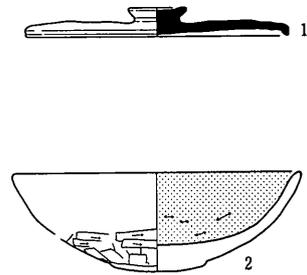
34住



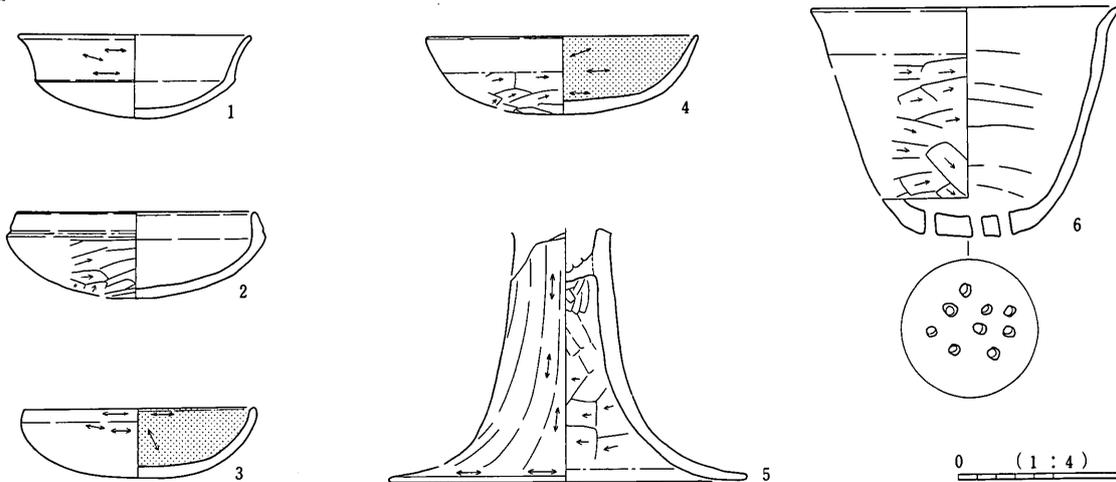
37住



39住



1 流路



0 (1 : 4) 10 cm

图52 土器(2)一古墳時代後期~平安時代一

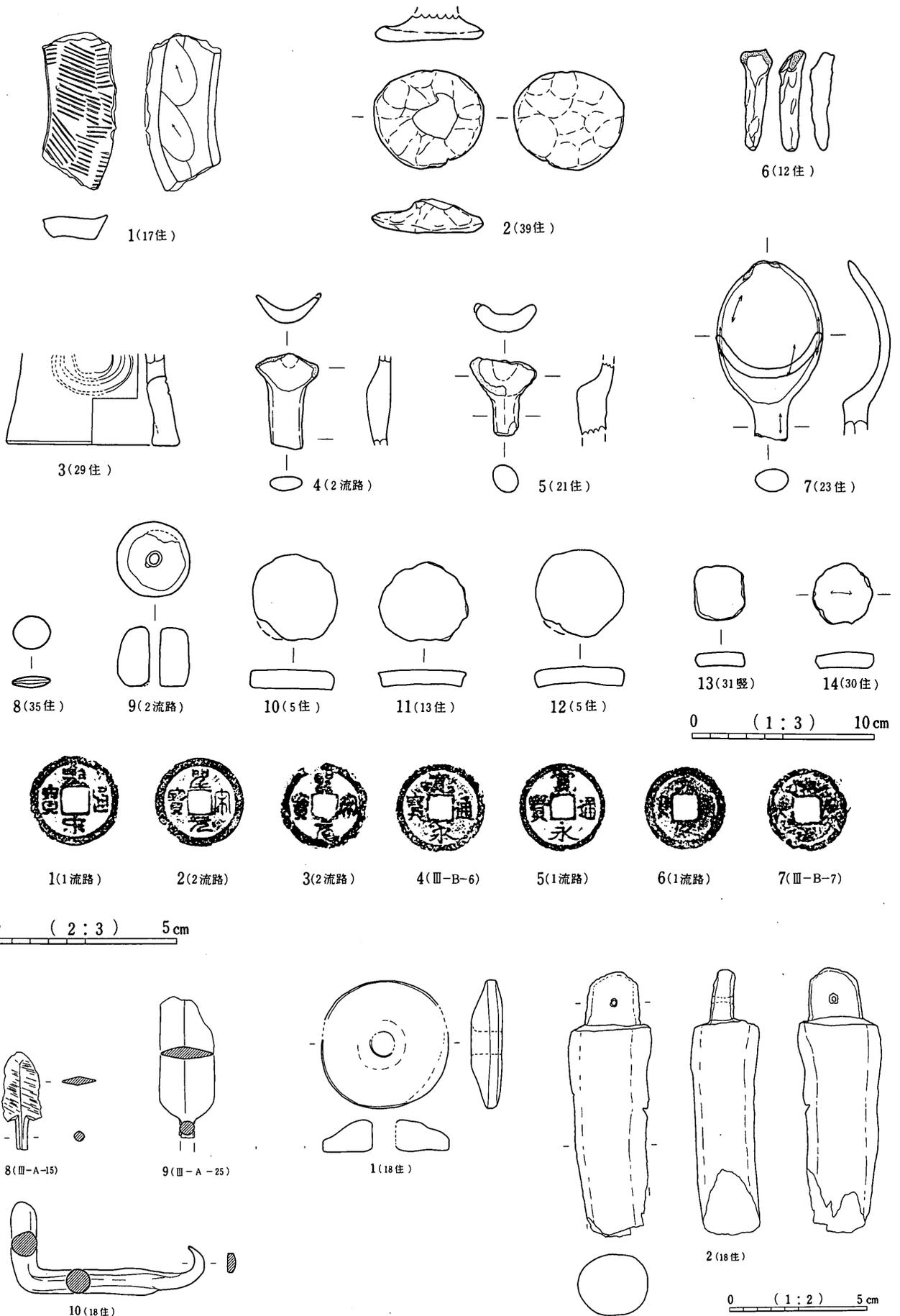


图 53 土器品・金属製品・木製品

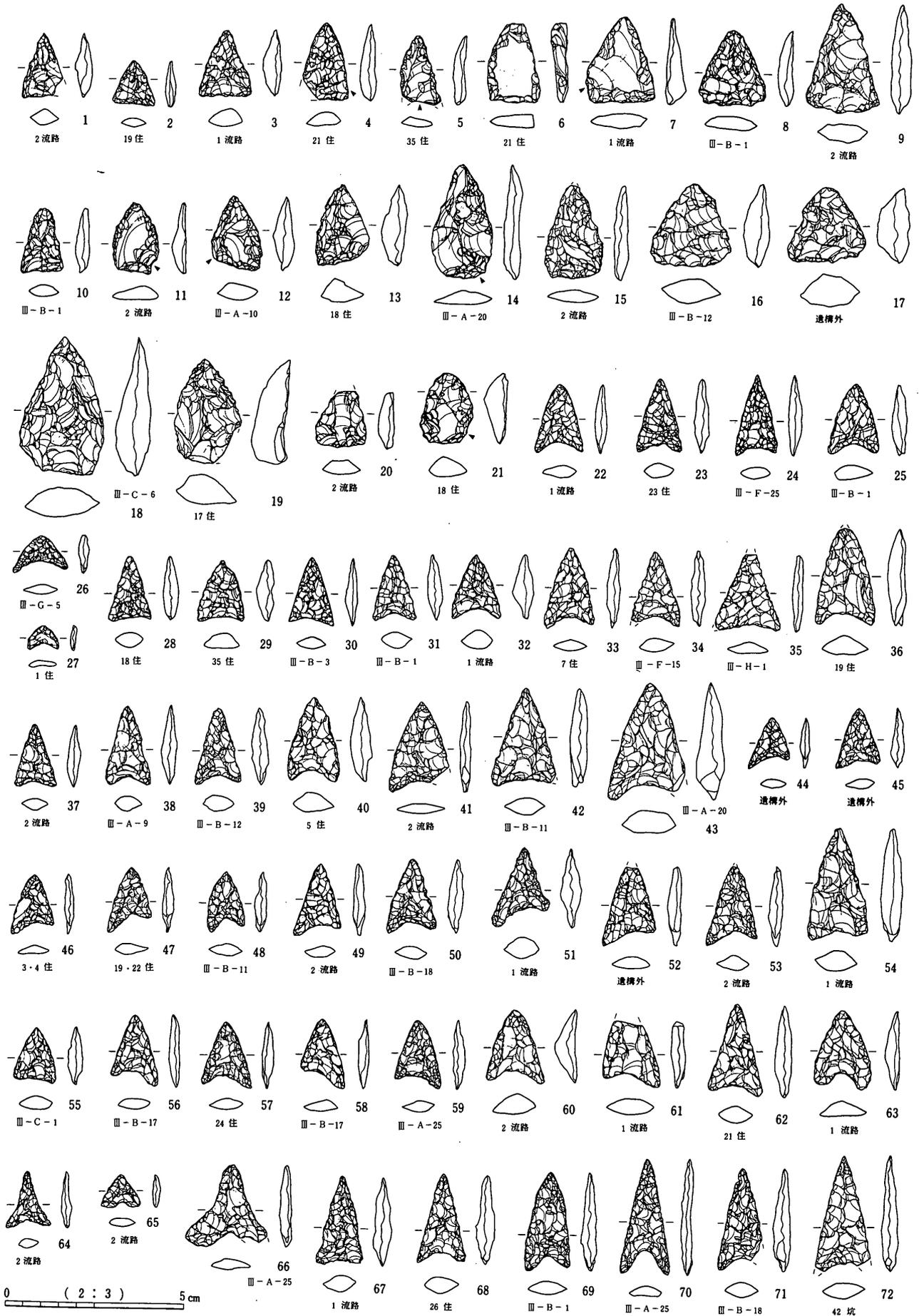


图 54 石器·石製品(1)一石鏃一

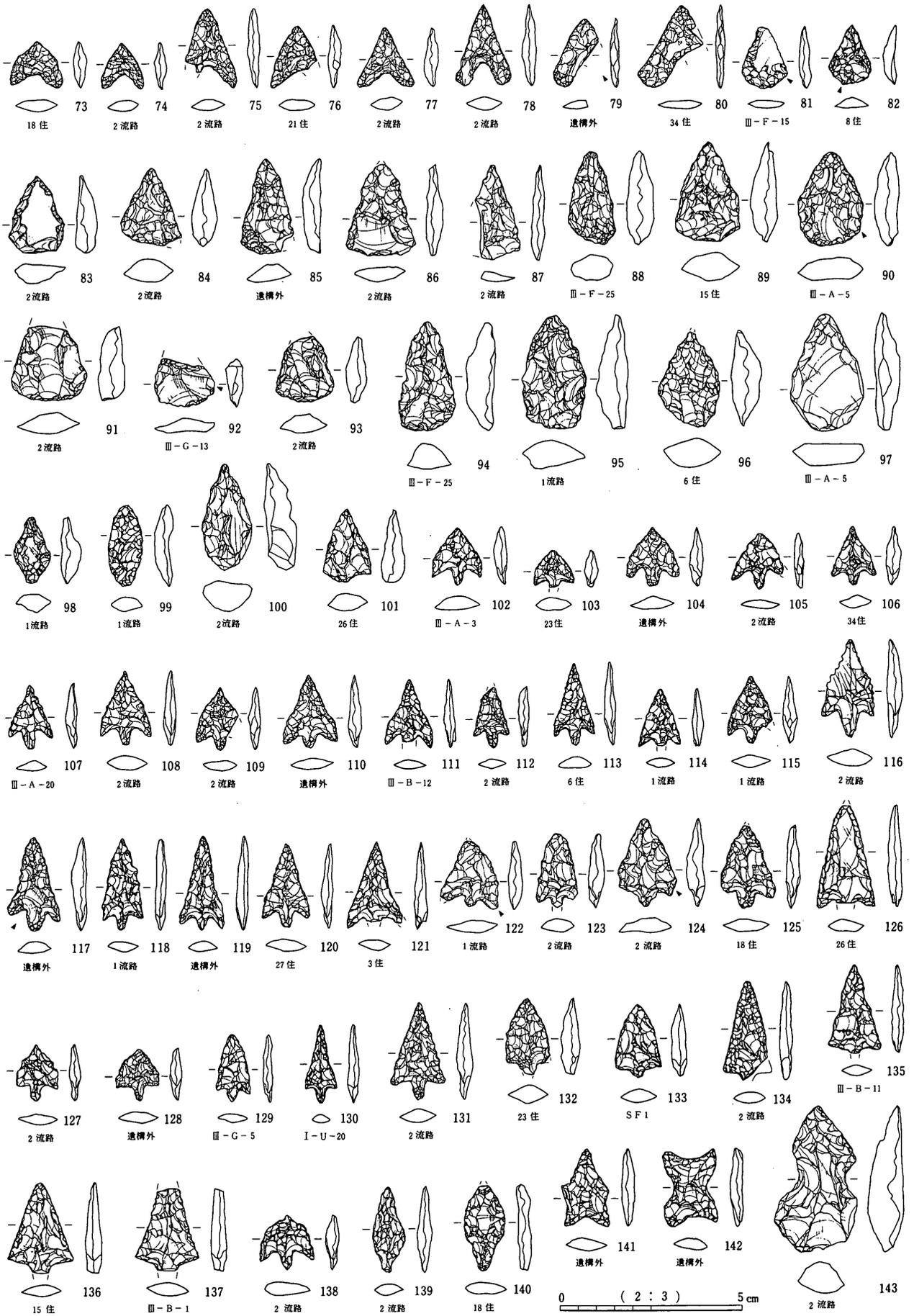


図55 石器・石製品(2)―石鏃―

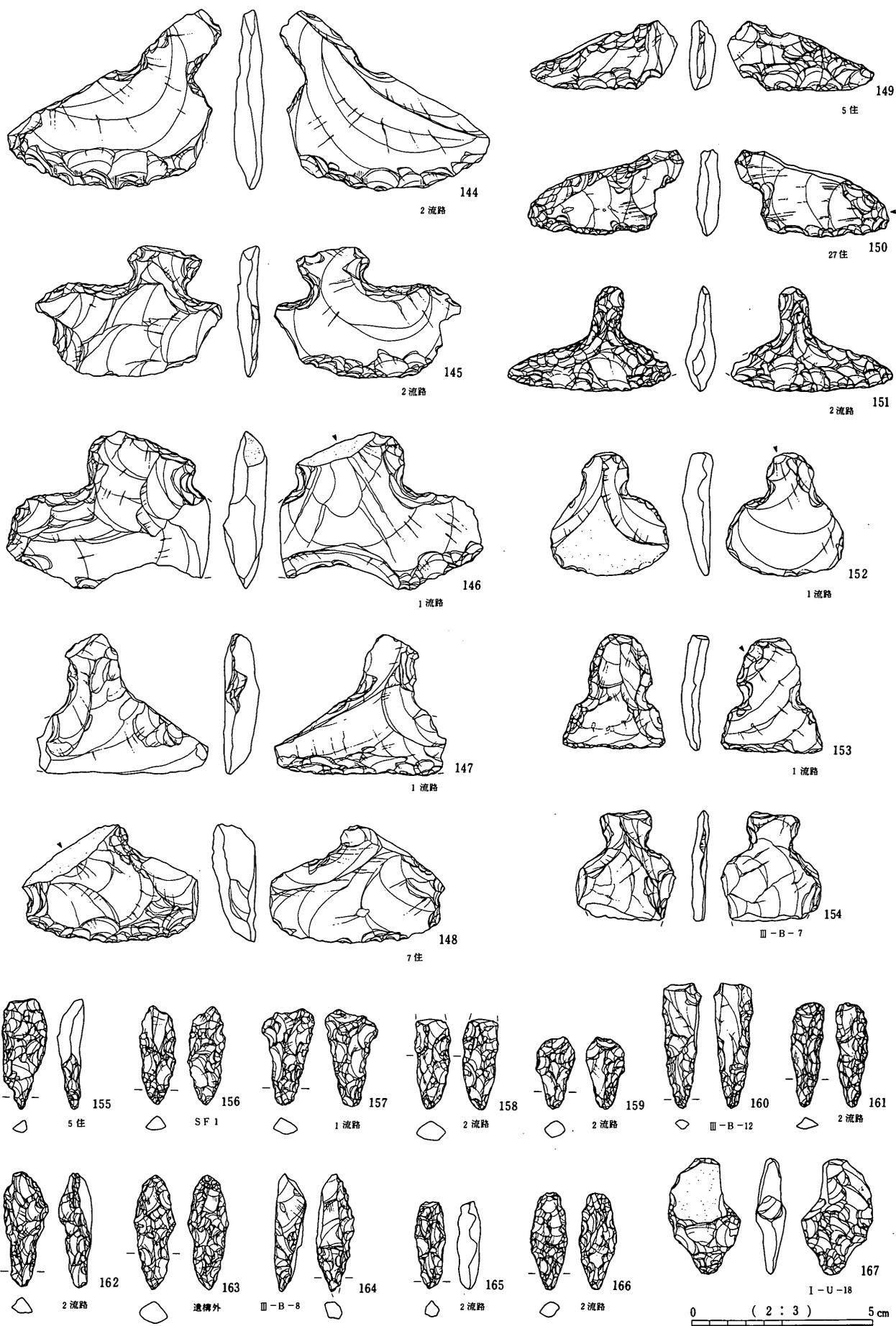


图 56 石器·石製品(3)—石匙·石錐—

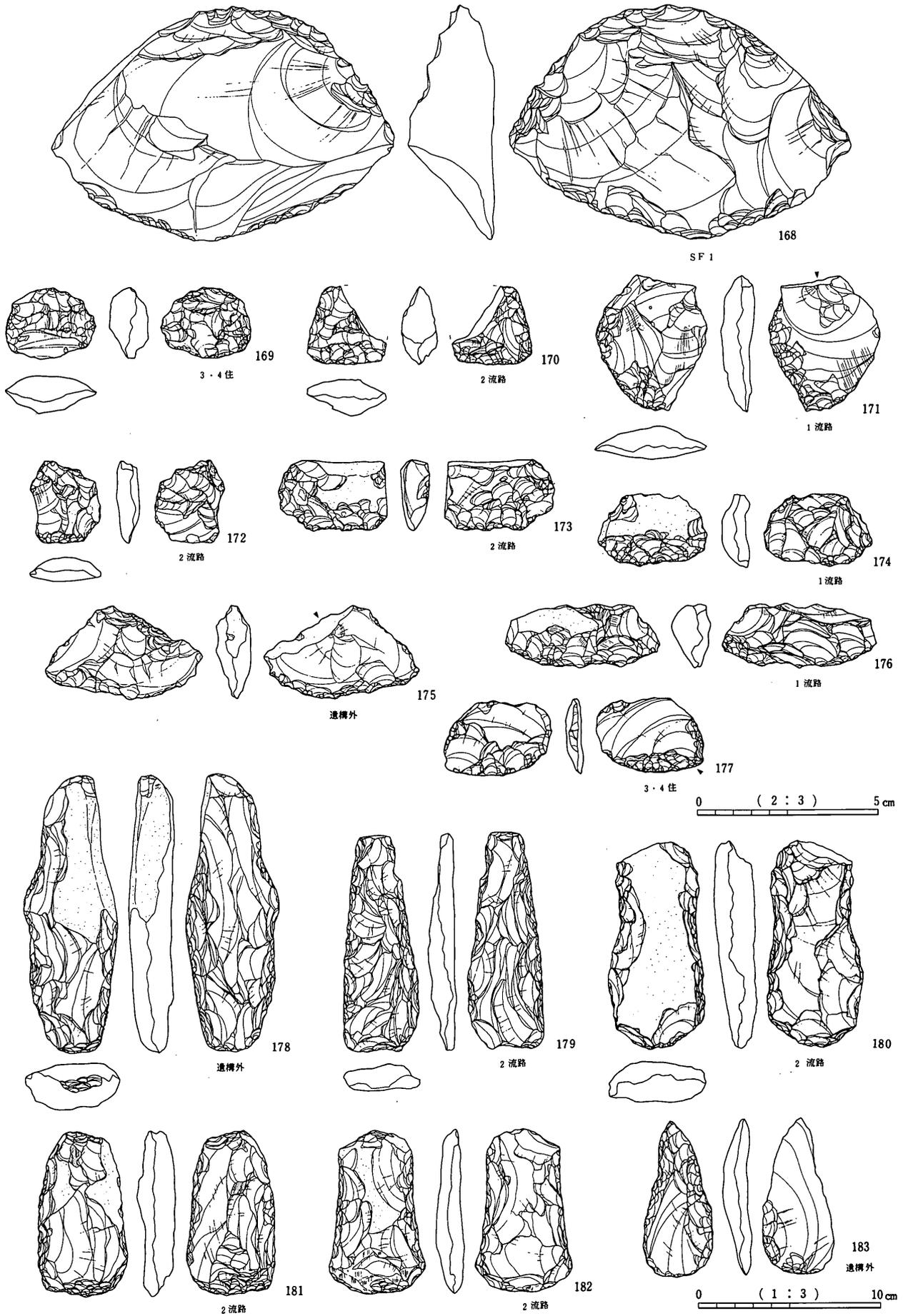


図57 石器・石製品(4)―スクレイパー・打製石斧―

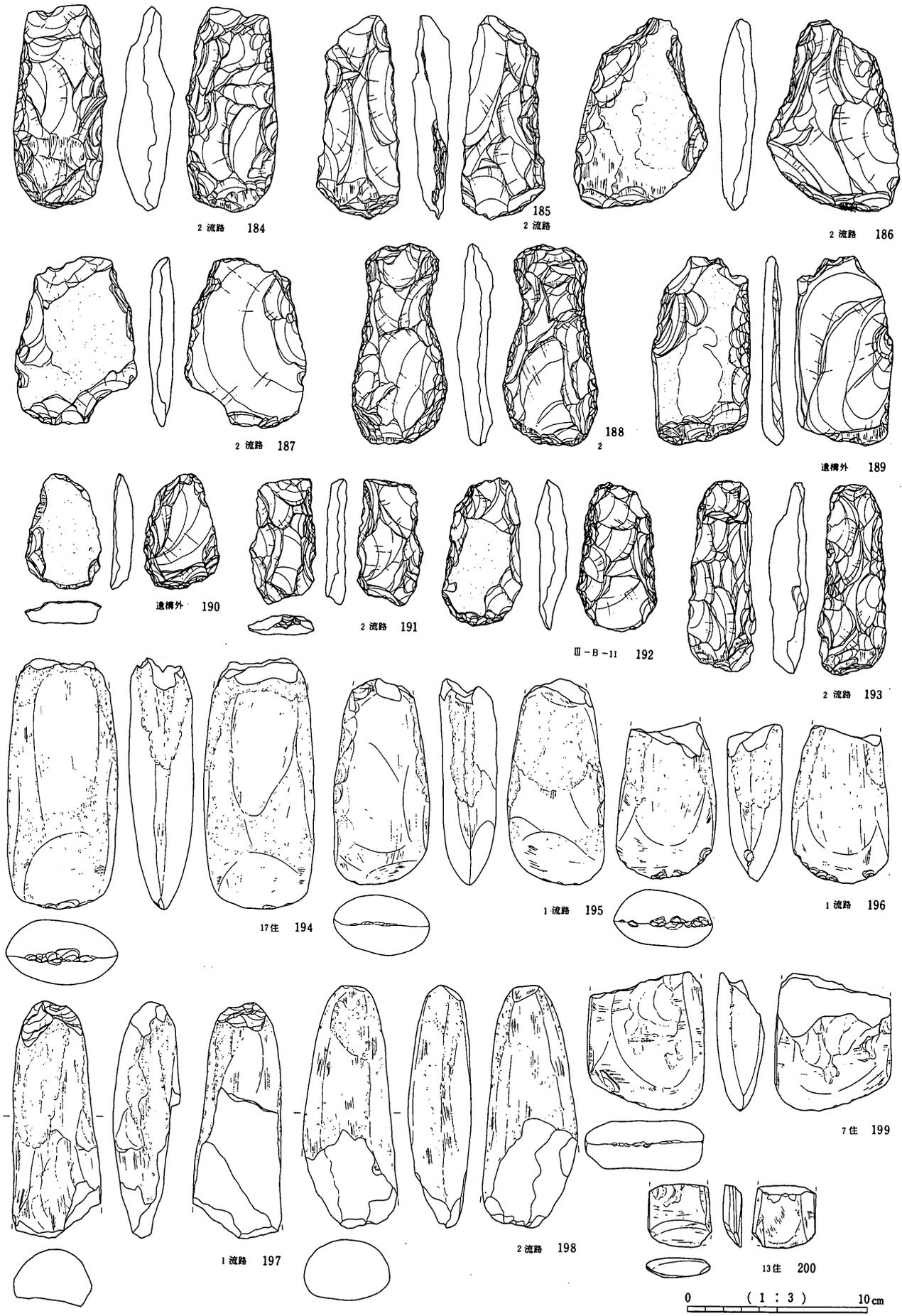


图 58 石器·石製品(5)一打製石斧·磨製石斧一

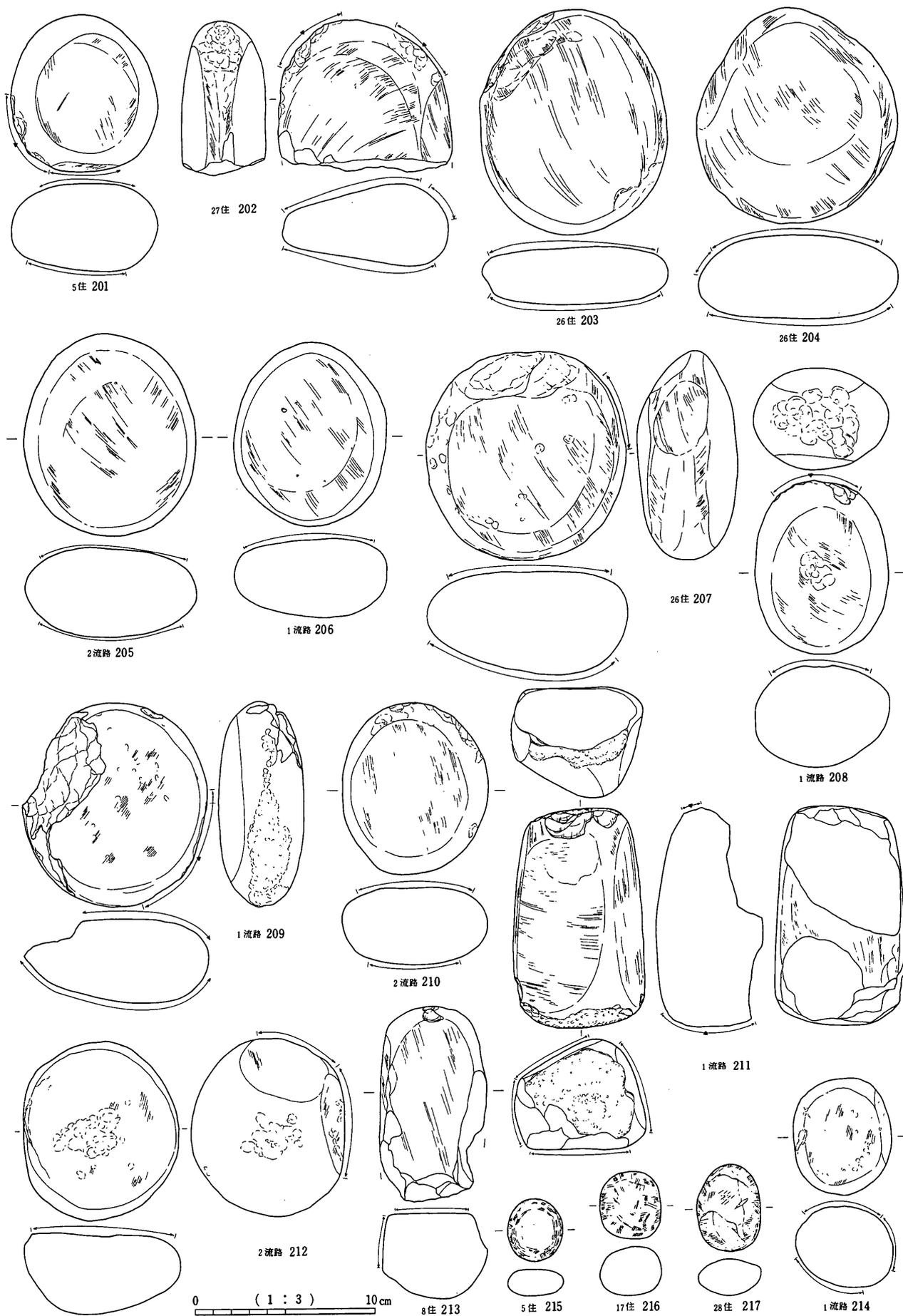


图59 石器·石製品(6)一磨石一

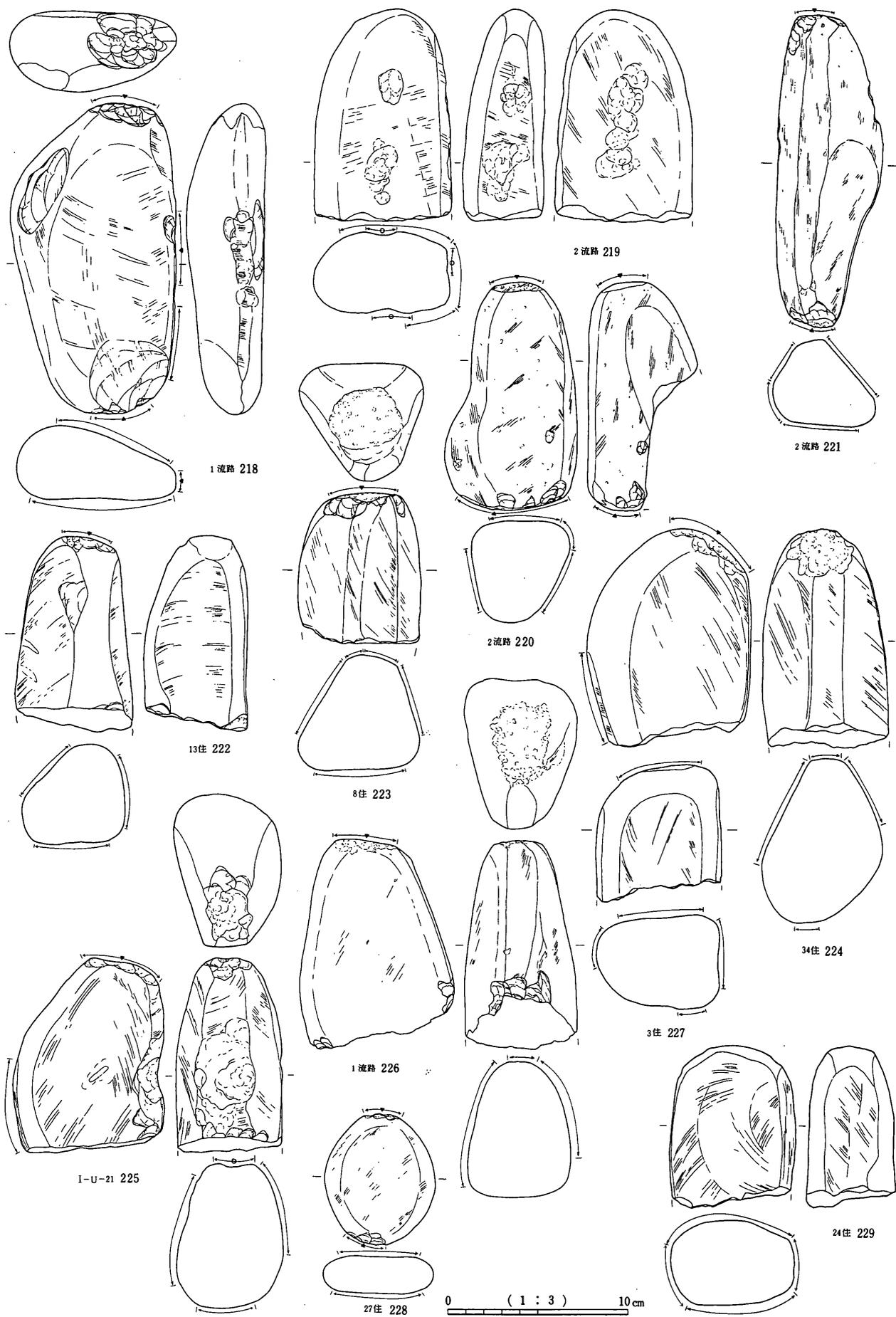


图 60 石器·石製品(7)一磨石·研磨円礫一

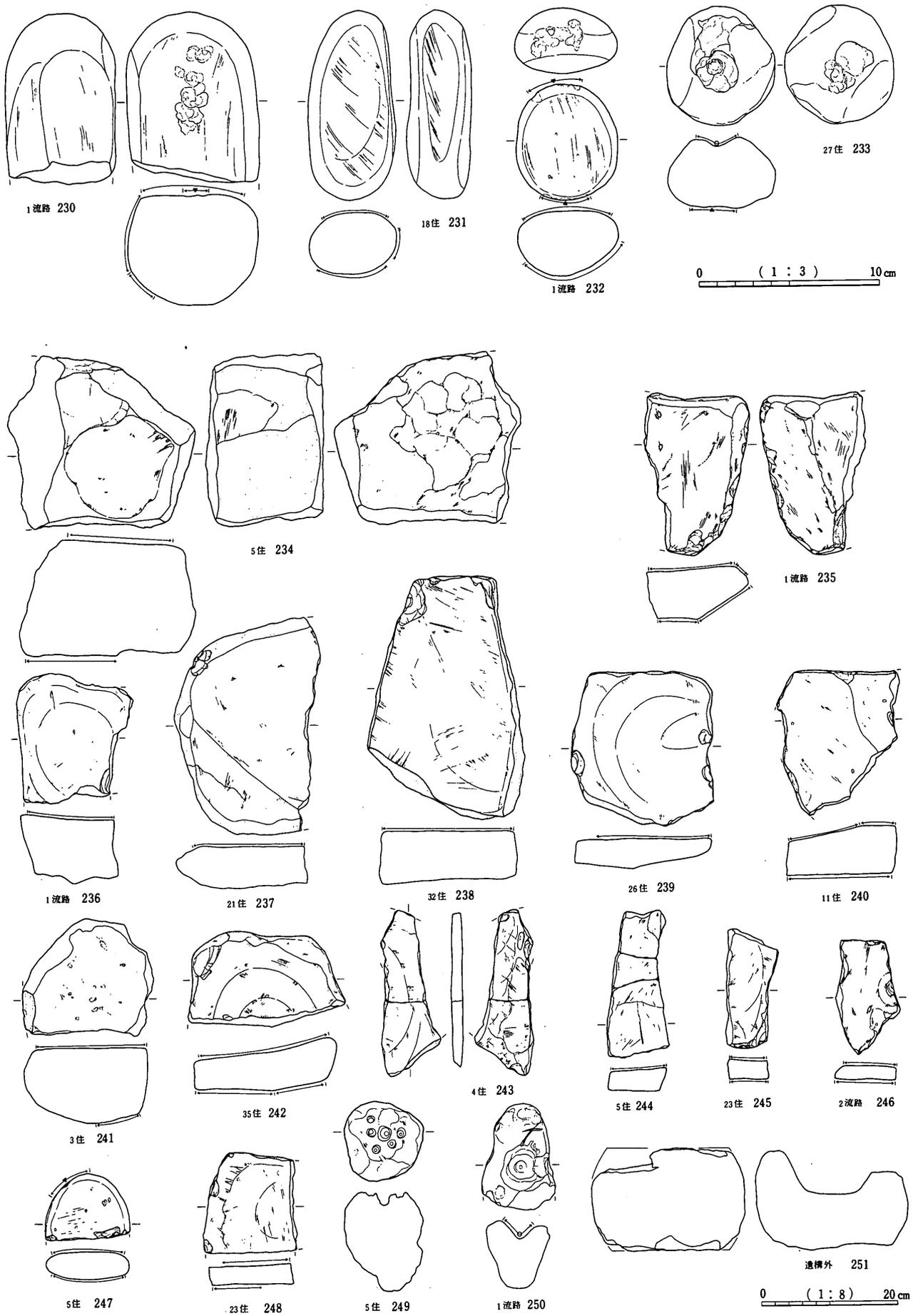


図61 石器・石製品(8)―磨石・台石・その他―

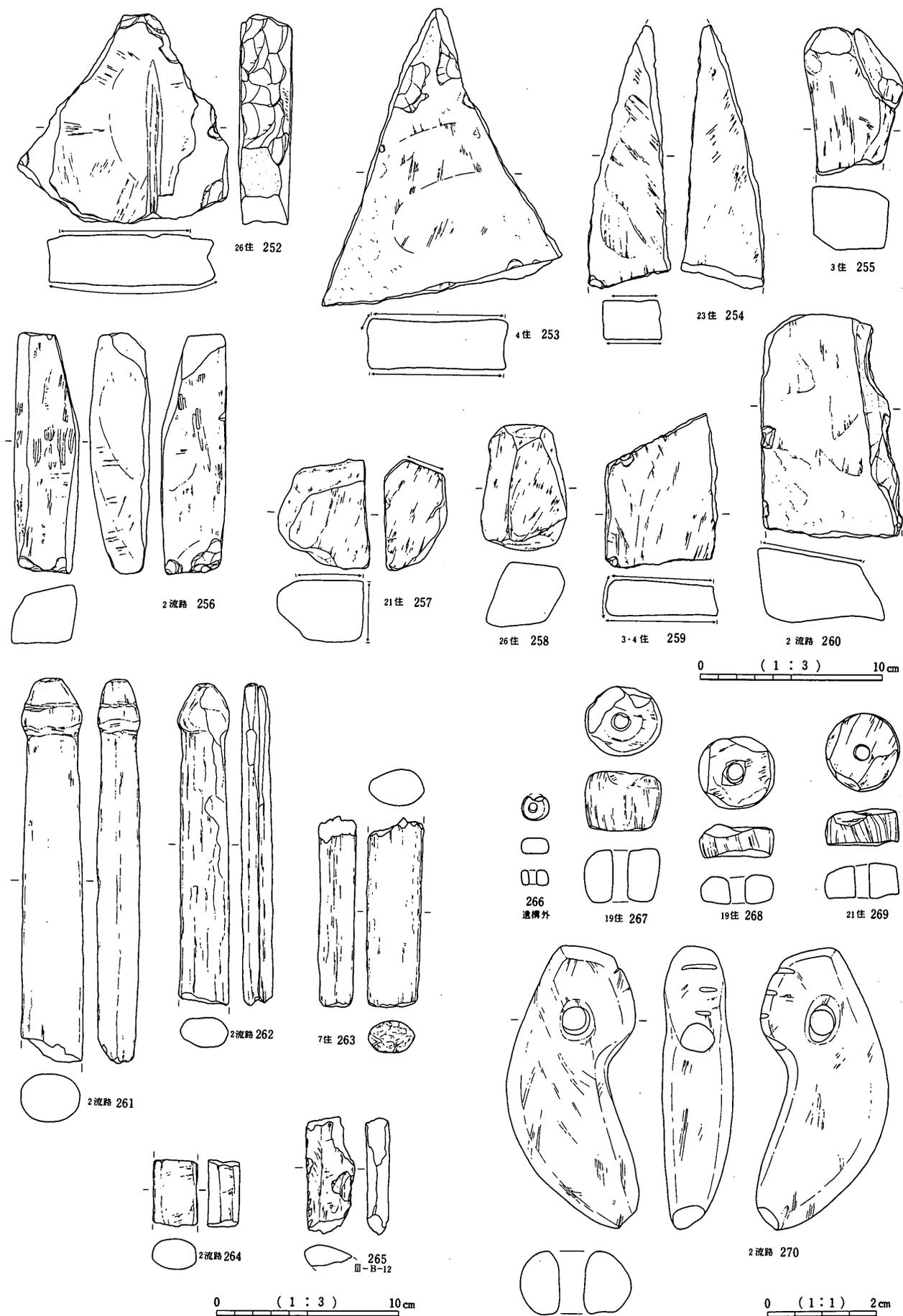


図62 石器・石製品(9)―砥石・石剣類・玉類―

## 第4章 セツ塚古墳群・染屋台条里遺跡

### 第1節 遺跡の概観

染屋台条里遺跡は上田市域の東部に位置する。北に虚空蔵山と横山丘陵が東西に連なり、東南は神川の段丘崖に臨み、西南はいわゆる染屋段丘崖（千曲川の第一段丘崖）に画された、面積およそ5.76km<sup>2</sup>を測る染屋台地のほぼ全域が遺跡範囲となっている。染屋台地は条里的地割を残す地として知られ、南方の下位段丘面には信濃国分寺跡が存在する。1972年に地理学・文献史学的方法を用いた条里的遺構調査が実施され、その成果に基づいて、大字古里字東之手・字西之手の方六町の区域に、創置の信濃国府跡を推定する学説が提起された。考古学的発掘調査は、上田市教育委員会により1982年以後の5次にわたる国府推定地確認調査を含めて幾度か行われたが、国府や条里制に直接係る遺構・遺物は確認されていない。

セツ塚古墳群は、染屋台地の北東隅、虚空蔵山南麓末端の緩斜面部から神川段丘崖の縁辺に分布する。上田市文化財分布図には11基登録されているが、かつては20数基を数えたという。7世紀頃の造営と推定される古墳群である。第1号墳（新屋古墳）は、古墳群中、完存する唯一の古墳で、上田市指定文化財となっている。他は全壊もしくは石室の一部を残すのみである。いずれの古墳も発掘調査が行われた経歴はない。立地や石室形態の差異から、新屋古墳群と矢花古墳群に二分する見解もある（塩入ほか1995）。

### 第2節 調査の概要

#### 1 セツ塚古墳群

調査地は長野県上田市上野字弥素視867ほかに在り、虚空蔵山南麓で、セツ塚古墳群分布範囲の北縁部にあたる。標高は590～620mを測る。一部を除き、桑畑・果樹畑として開拓されている。地表観察では高速道用地内に明確な古墳は見当たらないものの、墳丘を失った古墳が存在する可能性が残されていた。

調査はトレンチを設定し、重機を用いて掘下げた。現表土および耕土下は堅固な暗茶褐色～黄茶褐色土で、約1m掘下げたが、遺構、遺物とも検出されなかった（土層柱状図B）。また、東端部で石積みが見つかったが、巨石の周囲に径数十cmの礫が無造作に積み上げられているのみで、古墳ではなかった。

調査期間は平成5年11月1日～12月10日、調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。

#### 2 染屋台条里遺跡

調査地点は、インターチェンジ部分と、セツ塚古墳群に隣接する高速道本線部分の2箇所である。

インターチェンジ部分の調査地は染屋台地の北部に位置し、標高は534～525mを測る。調査は平成5年度と6年度の二次にわたった。5年度は国道144号線の東側、上田市住吉字竈田359他を調査した。トレンチを設定し重機を用いて掘り下げた。現水田土（土層柱状図AⅠ層）直下に旧水田土層（Ⅱ層）を確認できる部分があり、その周辺を面的に広げたが、Ⅰ層から須恵器四耳壺、珠洲焼甕、土師質鍋等の若干の土器小片が出土したのみである。Ⅲ層以下は、砂混り粘土層～砂礫層と変化し、遺構はもちろん1点の遺物も検出されなかった。なお、Ⅱ層はマツ属花粉を多く含むため、近世以降の堆積の可能性が高いようである（註）。6年度の調査位置は、国道144号線の西側、上田市住吉字塚田541他である。現水田土直下から砂礫層や粘質土層となり、水田土壌、水田関連施設等は検出されず、遺物も出土しなかった。

本線部分の調査地は虚空蔵山南麓に位置し、地籍は上田市上野字宮林929他である。標高は608～578m

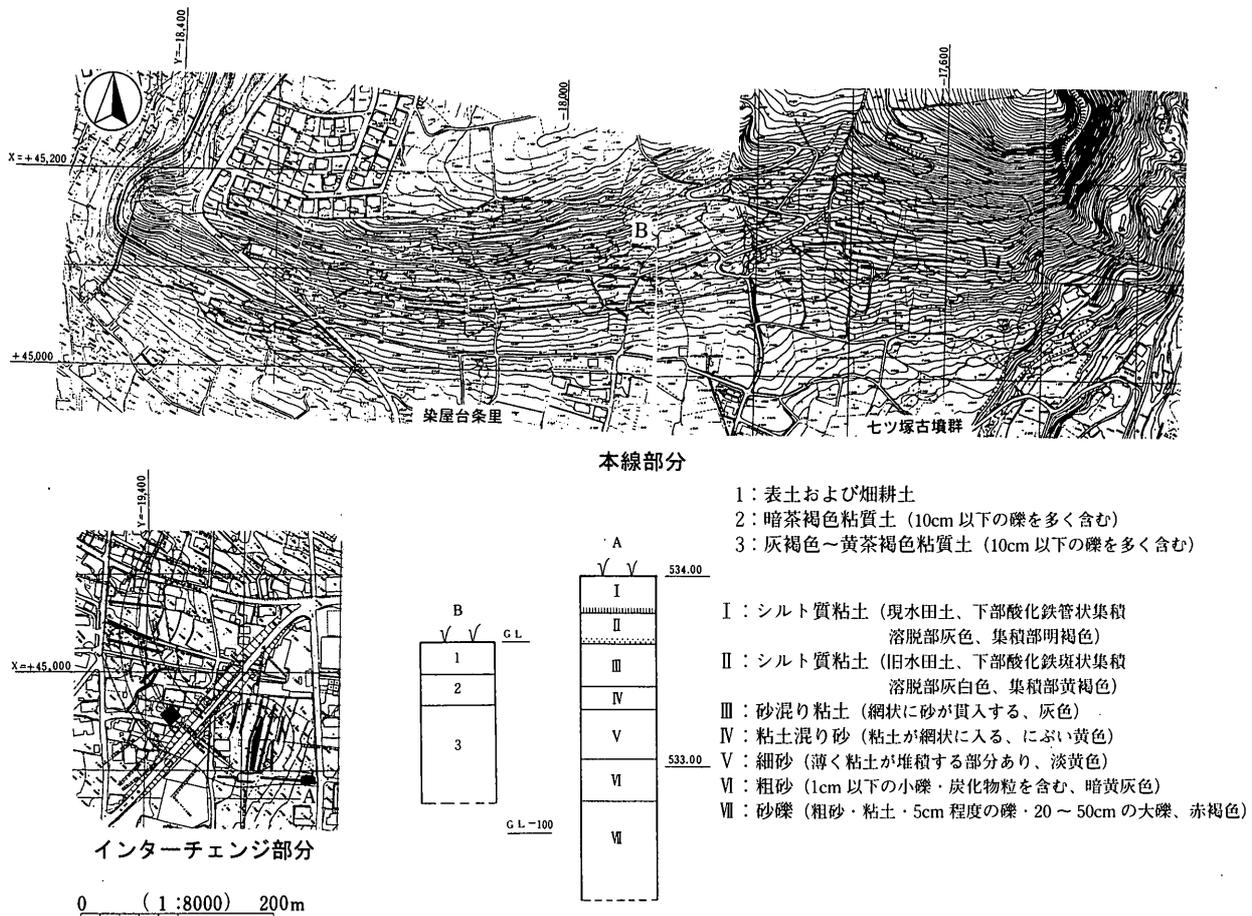


図 63 調査範囲・土層柱状図

を測る。調査は七ツ塚古墳群と一連の方法・工程で実施した。トレンチの状況は七ツ塚古墳群と同様で、遺構・遺物は検出されなかった(土層柱状図B)。

調査期間はインターチェンジ部分が平成5年4月26日～5月21日および平成6年8月1日～11月24日、本線部分が平成5年11月1日～12月10日、調査面積は延べ3,700㎡である。

### 第3節 小結

今回の調査では七ツ塚古墳群に属する新たな古墳は発見されなかった。古墳群の分布は1号墳が北限と考えられる。また、染屋台条里遺跡でも、調査の主眼とした水田関連遺構は見つからなかった。染屋台地における条里制・条里水田に係る溝、畦畔、道路といった施設の確認は今後の発掘調査に期待したい。

註 パリノ・サーヴェイ社に依頼した花粉分析結果による。その報告書は当センターが保管している。

#### 引用・参考文献

- 上田市教育委員会 1983 『東之手・西之手遺跡 創置の信濃国府跡推定地第一次発掘調査概報』
- 上田市教育委員会 1984 1985 1986 1987 『創置の信濃国府推定地確認調査概報』Ⅱ～Ⅴ
- 塩入秀敏ほか 1995 『上田県誌』第六巻 歴史篇上 (一) 考古

## 第5章 陣馬塚古墳

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

陣馬塚古墳は古墳時代後期の横穴式石室墳である。上田市域東部に広がる染屋台地の北縁を限る横山丘陵の頂部に立地しており、所在地は上田市住吉字横山471番地ほかである。横山丘陵は、上田盆地の第一平坦面をつくる虚空蔵山層に属し、東太郎山の東南麓から南西に突き出した後、西に屈曲して伸び、長島集落付近で終わる。陣馬塚古墳はこの丘陵屈曲点の稜線上に位置する。標高600mの古墳に立つと、南方直下に広がる染屋台、さらに千曲川右岸の上田盆地全域を一望の下に見渡すことができる。眼下の平坦面との比高およそ50mである(図64)。周辺に他に古墳は見当たらず、本墳は単独墳の可能性が高い。

上田市文化財分布図には横山丘陵の先端に玄蕃塚古墳が記載されている。しかし、墳丘や石室といった古墳としての構造を観察することはできず、遺物が出土したとの伝承もなく、内容・時期とも不明といわざるを得ない。同一丘陵とはいえ距離的にもかなり隔たった位置にあり、陣馬塚古墳との直接的な関係を考えることは難しい。また、矢出沢川を挟んだ丘陵斜面に熱泰寺古墳が存在したが、全壊状態とされ、上信越自動車道の建設に伴う事前踏査でも、その存在を確認することはできなかった。一方、眼下の染屋台地上には、その北縁に塚田塚古墳がある。墳丘は失われたが、横穴式石室が現存している。さらに、塚田塚古墳から東へ800m離れた神川段丘崖の縁辺部から虚空蔵山南麓末端にかけて七ツ塚古墳群が分布している。どちらも、6世紀後半から7世紀代に属すると考えられる。

陣馬塚古墳の周辺では、6～7世紀を中心とした一定規模の集落遺跡は知られていなかったが、1993年に、横山丘陵の北西側、矢出沢川の右岸段丘上に、宮平遺跡が発見され、上信越自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた。その成果は本書第6章で報告している。

#### 2 調査の方法と経過

古墳の現況を把握するために、平成4年12月17日に現地踏査を行った。古墳周辺は畑地として利用されており、墳丘ぎりぎりまで耕作面が迫っていた。現状で直径9m程の墳丘の表面には、石室の一部と思われる巨石や、構築材らしき人頭大～拳大の角礫が露出し、また、頂部から南斜面にかけて大きく破壊され、天井石は既に取り去られていることが明らかであった(図65)。

発掘調査は平成5年5月11日～8月11日に実施した。天井石抜き取り痕が示す石室の主軸と開口方向を考慮して、ほぼ南北の方向に墳丘主軸(縦軸)を設定し、さらに、墳丘を二分する位置で主軸に直交する副軸(横軸)を設定した。これにより4分割された墳丘の北東部から逆時計回りに墳丘1・2・3・4区と呼称した。主軸および副軸に沿ってトレンチを入れた結果、天井石撤去後に再度積み上げられた土石層(図67-2・3層)が墳丘を覆っていることが判った。この土石層を除去し旧状を把握したうえで、石室の調査、墳丘構造の調査、墳丘外施設の調査、の3点を柱として本格的な発掘調査に取りかかった。

石室内部の調査は、崩落した側壁・裏込め石(3層)を、必要に応じて記録を残しつつ、取り除いていった。石室壁面があらかた露呈して石室基底部近くの平面形状が明らかになった段階で、改めて石室の主軸を設定した。主軸に直交する副軸は、断面図の作成を考慮して、玄室の中心ではなく、側壁の残りが最も良い奥壁から約1.5mの位置に設定した。これにより、玄室を4分割、それぞれの区画を玄室床面調査の単位とし、奥壁に向かって右側奥から、逆時計回りに、1・2・3・4区と呼称した(図70)。遺物の取り上げ



図64 調査範囲

もこの区画を単位として行っている。副葬品を検出してからの覆土はすべて篩別・洗浄した。

墳丘構造の調査は、石室床面の調査と並行して墳丘断ち割りトレンチを入れた。その結果、盛土の版築構造を確認し、さらに裏込め石を含めた石室との関係を把握して両者の解体へと進んだ。

墳丘外施設の調査は、まず、墳丘主軸および横軸に沿ったトレンチを外方に伸ばして墳丘裾から2～3m外側に周溝を捉えた。次いで手掘り作業により調査面を広げ、周溝の全体を明らかにした。

なお、古墳周囲の遺跡の存否を確認するために、現場プレハブ設営地の造成をかねて、広い範囲で表土剥ぎを行った。それを合わせた調査面積は2200㎡である。

## 第2節 墳丘と周溝

墳丘 裾に列石を巡らす直径8.2mの円墳である。石室規模の割りに小形の墳丘といえる。耕作による削平が墳裾際にまで及び、本来の位置より20cm程下に見かけの墳裾ができているが、東側に裾列石の残る部分があり、それから推定して、平面形状・規模はほぼ旧状を保っていると考えてよいだろう。見かけの墳裾は石室が開く南側に顕著である。実測図を読み取るに当たって注意されたい。上部が破壊されているため、墳丘の高さは不明だが、奥壁の上端レベルから考えると、少なく見積もっても、2.5mはあったと考えられる。墳丘基底面は主軸・副軸方向ともほぼ水平である(図65～67)。

本古墳は、横穴式石室とその裏込め・その外側の土盛り・墳端を画し、また盛土の崩壊を保護する裾列

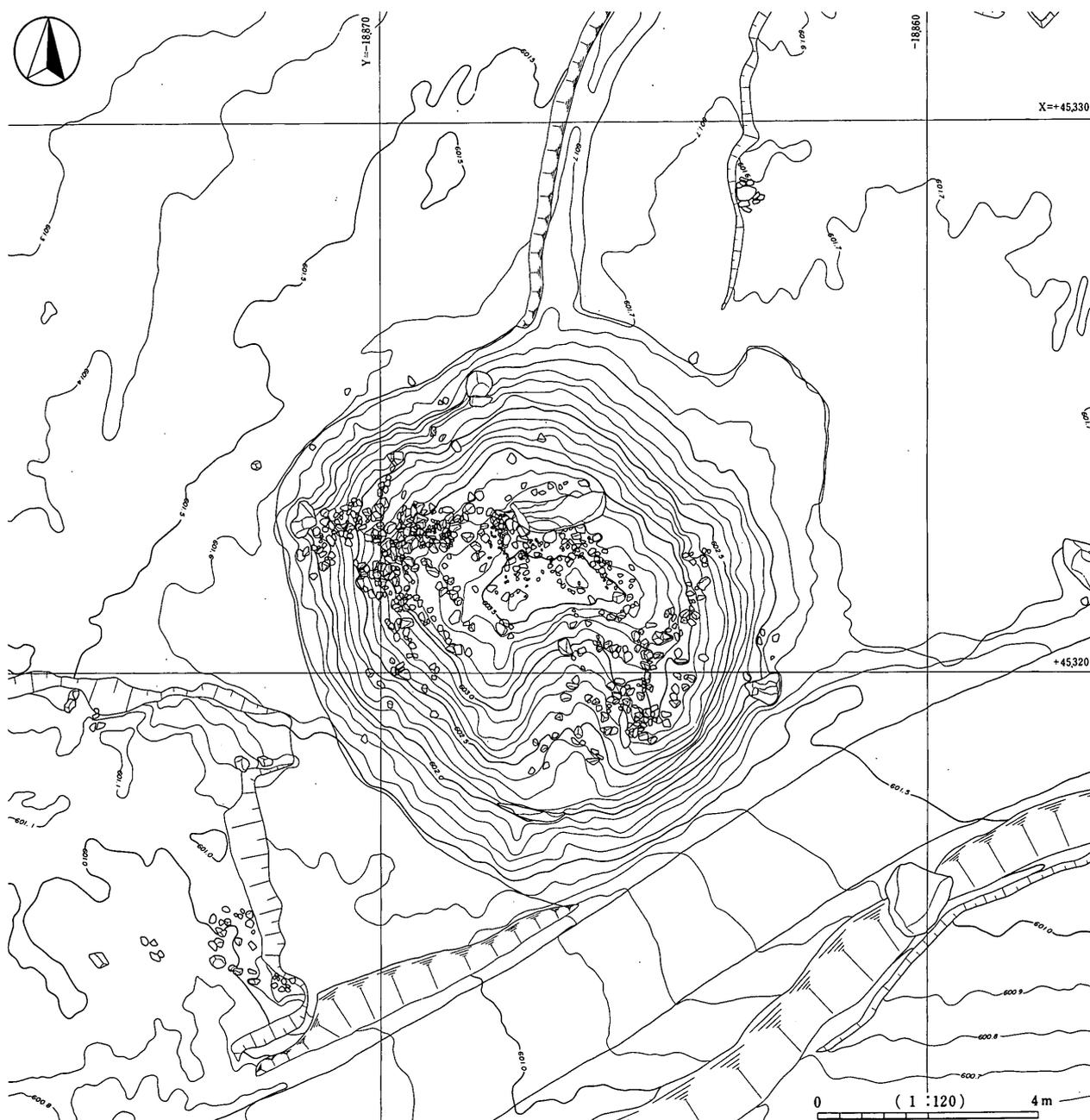


図65 調査前地形

石の3要素が一体となって墳丘を構成しているのだが、石室と裏込めは次節に記述する。

裾列石は本来墳丘を一周していた筈であるが、現状では、明確なものは東部に2石が残存するのみである。本来上方に幾段か積み上げてあったかもしれない。残存する2石は石室裏込め石よりやや大振りの長さ50～60cm強の角礫を用い、その最も広い面を外側に揃えている。構築面に密着させて置いてあり、掘り方はもっていない。また、羨道左側壁前端に連結する長さ1.3mの大石は、その部分の裾列石を兼ねるとともに、正面観の装飾を企図したものだろう。

盛土は、基本的に、黒色土ブロックを混ぜた粘質の暗褐色土と、極小礫を混ぜた硬い黄褐色土を交互に突き固めた版築構造をもち、最下位すなわち構築開始面直上の土は前者が選択されている。盛土各層の上面に勾配をもたせた積み方が為されているのは排水性を考慮してのことであろう。また、盛土中には大小の角礫がところどころ含まれている。なお、墳丘上部の構造は不明である。

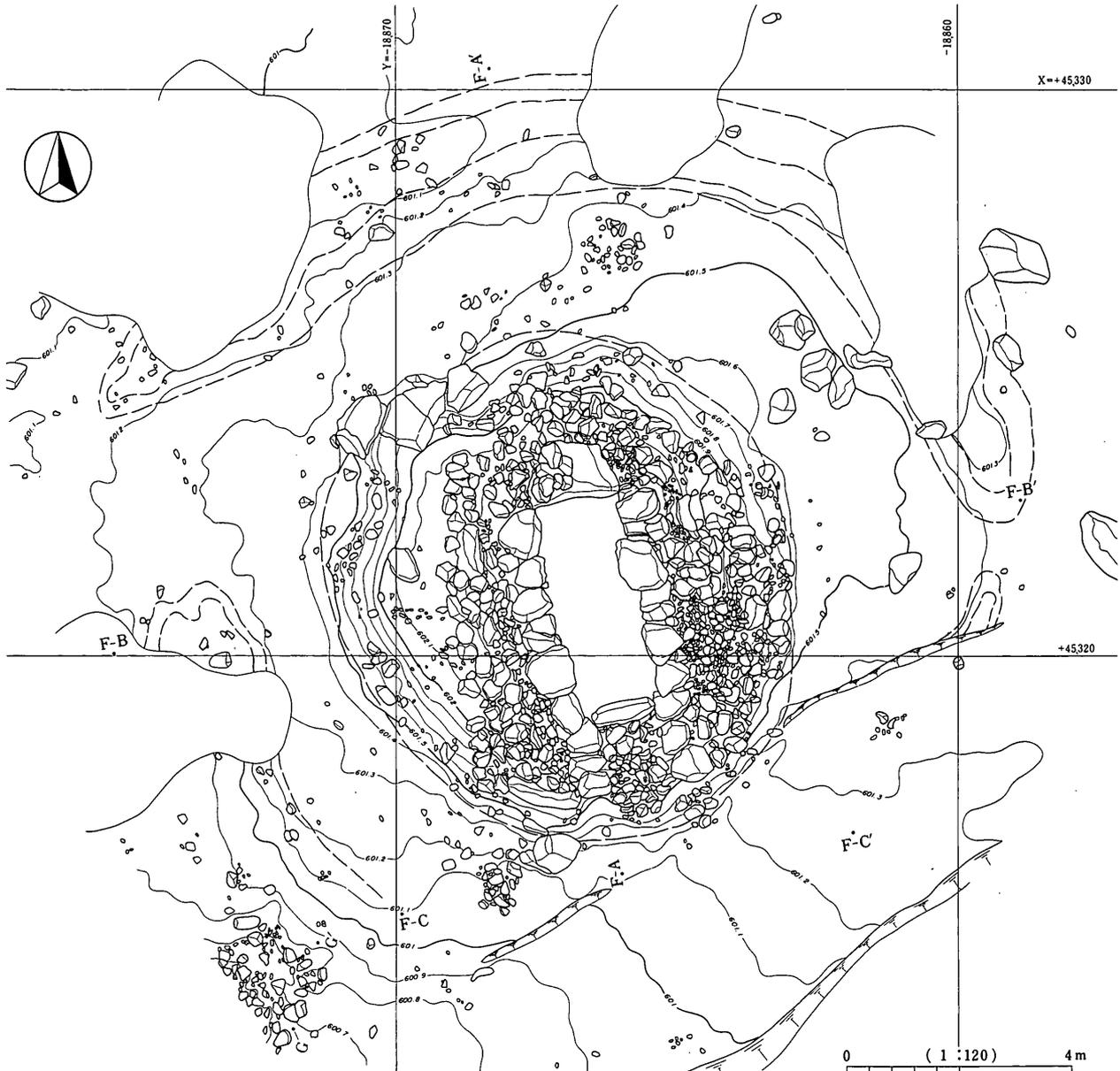
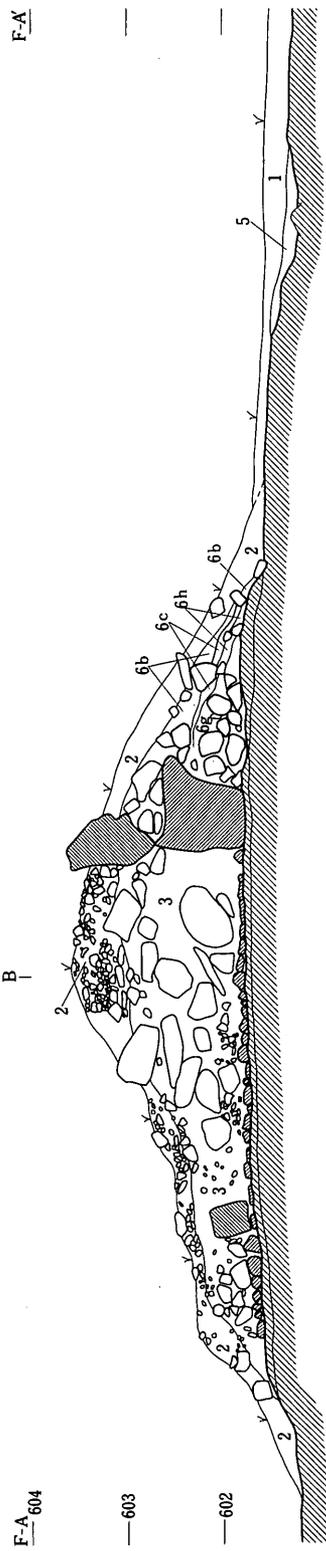


図 66 墳丘平面図

墳丘および石室の構築は旧地表面上に直接なされる。多少の整地は行ったようだが、地山の礫をそのまま墳丘や石室の構造に取り込んだ部分もあり、入念な基礎地業を行った様子はみられない。

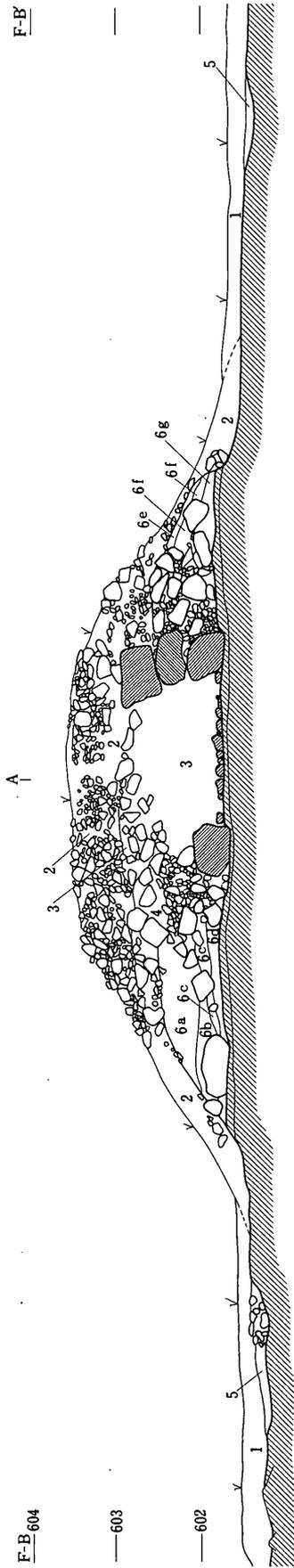
**周溝** 墳裾の2～3 m外方に周溝が巡っている(図66・67)。従って、周溝と墳裾の間はテラス状の平坦面を形成することになる。周溝は、断面緩やかなU字形に掘り込まれ、現状で幅約2 m、深さ20cmを測る。削平された部分を推定すると、本来の規模は、幅2.5 m、深さ40cm程度に復元されようか。それほど深いものではない。西側と東側に各々一箇所、周溝が途切れる部分がある。東側については、幅も狭く、かつその辺りの周溝は極めて浅くなっているため、やや疑わしい。しかし、西側の途切れ部は、微地形的に最も高まる位置にあたり、本来的なものである可能性が高い。削平が著しい南半部の状態は明らかでないが、南西側では、内側の肩が石室開口部正面付近まで伸びる形勢が看取できる。ただし、その末端付近では、溝の形状を保っていなかったかもしれない。



F-A 604

—603

—602



F-B 604

—603

—602



F-C 603

—602

- 1: 表土・畑耕土。
- 2: 黒色土 (近現代形成層。拳大~人頭大の礫。ボサボサの土)
- 3: 黒色砂質土 (崩壊土。礫・砂粒含。グサグサの土)
- 4: 茶褐色土 (崩壊土。締りある砂質土。礫含)
- 5: 黒褐色土 (周溝埋土)
- 6 a: 暗褐色砂質土 (墳丘構築土。茶褐色小礫含)
- 6 b: 暗褐色砂質土 (墳丘構築土。黒色土ブロック混)
- 6 c: 黄褐色灰色砂質土 (墳丘構築土。黄色の径1~5mmの礫・茶褐色礫含)
- 6 d: 明黄褐色土 (墳丘構築土。粘質の強い土。礫混入)
- 6 e: 暗茶褐色土 (墳丘構築土。黄褐色土・黄・白色小礫含)
- 6 f: 暗褐色粘質土 (墳丘構築土。風化礫ほとんどなし)
- 6 g: 褐色土・暗褐色砂質土 (墳丘構築土。赤褐色~黄褐色の風化小礫・黄色土・黒色土ブロック多量に含)
- 6 h: 黒褐色砂泥り粘質土 (墳丘構築土。風化小礫含)

図 67 墳丘断面図・立面図

## 第3節 石室

本古墳の内部構造は、南に開口する両袖の横穴式石室である(図66～70)。天井石が取り外されてしまったために、側壁や裏込めが内部に向かって崩壊し、調査時にはほぼ完全に埋もれた状況であった。

石室の全長は5.2 mあり、主軸はN-12°-Wを指す。従って開口部は若干東に振れている。地形の流れに逆らわず、尾根の稜線に直交させた結果であろう。石室本体は墳丘の中心から東にずれ、また玄室の中心はやや手前に来ている。使用された石材は付近で産出する安山岩の自然石である。古墳周囲の地表にも露出しており、手近なところで調達可能であったと思われる。なお、以下の文中における、側壁などの左・右の表現は、石室開口部から奥壁に向かっての左右として記述した。

**玄室** 玄室の平面形は中央部が僅かに広い長方形である。幅は奥壁側で1.6 m、中央で1.8 m弱、玄門側で1.6 mを測る。長さは、右側壁3.5 m、左側壁3.8 mを測る。高さは不明だが、床面から奥壁残存部の上端までは1.85 mあり、これに近似した数値であろう。なお、図68の壁体断面形は一定のレベルで輪切りにしたもので、図70の方が玄室平面形の特徴をよく表している。

奥壁は、玄室幅より若干幅広い巨石を用い、上下2段が残存する。下段の石は床面からの高さ80cm、奥行き100cmの特に巨大なものである。上段の石は下段石とほぼ同じ広さの壁面をもつが、断面三角形を呈し、下段石との接地面は僅かで構造的に不安定といえよう。

側壁は、右側壁が全体2段、最大3段が残存し、左側壁は全体1段、最大2段が残存する。壁体石の大きさは長さ100～50cm、高さ50～30cmと不揃いだが、いずれも平坦な自然面を内側に揃えて横積みないし小口積みに積み上げ、内傾する壁面をつくっている。奥壁側に大振りの石を配しているようにもみえるがそれを強調することはできない。また、石室内に崩落していた壁体石から推定すると、側壁上部に小振りの石が偏在していた様相は認められない。右側壁は、羨道まで含めて、比較的長方形に整った面を壁面に揃え、横目地がよく通り、また、互目積みを施した様相も認められる。左側壁は壁面を整える配慮にやや欠けるようだが、やはり、互目積みを意識していたらしい。立柱石のような玄門を具体化する施設は存在せず、玄室より20cm程内側に配された羨道側壁最奥の石がつくる僅かな前壁を袖部として捉えておく。

床は、15～20cm程の角礫を敷き並べた直上に、小円礫・亜円礫を敷き詰めるという二重構造をもつものである。下部の角礫敷きは、羨道まで連続して施され、羨道の床を形成する。上部円礫敷きの範囲は玄室に限られる。遺物の出土状況を含め、上部円礫敷きが追葬に伴う二次床である証拠は確認されなかったため、本来このような構造であったと理解する。床は奥壁際が最も高く、そこから入口に向かって緩やかな下り勾配を成している。玄室内に滲み落ちた雨水は下部角礫敷きの隙間を通して石室外に排出されたであろう。なお、玄室左奥に下部角礫敷きが存在しない部分があり、盗掘時に剥ぎ取られたと考えられる。従って、その部分の上を覆う上部円礫敷きは旧状を留めたものではない。この部分では遺物分布は稀薄で、大形の遺物は存在していない。

**羨道** 羨道は右側で長さ1.6 m、左側で1.4 mとごく短い。幅は1.1 mである。両側壁とも、最下段の石のみ残存し、石の小口側の平坦面を壁面としている。左側壁の前端から2番目の石は地山の石に凭せ掛けるように置いてある。なお、右側壁先端の石は右(東)に動いているようである。

羨道と玄室の境界には梱石が置かれている。幅1.1 m、奥行き35cm、床面からの高さ40cmを測る。梱石は下部角礫敷きの上に乗れり、上部円礫敷きはこの梱石の際まで施されている。梱石の前面には人頭大～拳大の角礫が乱雑に詰まっており、調査段階では閉塞石と考えた。しかし、礫隙間の土は特に堅固というわけではなく、特異な土質でもないため、石室裏込め石が崩落した可能性は否定し切れない。

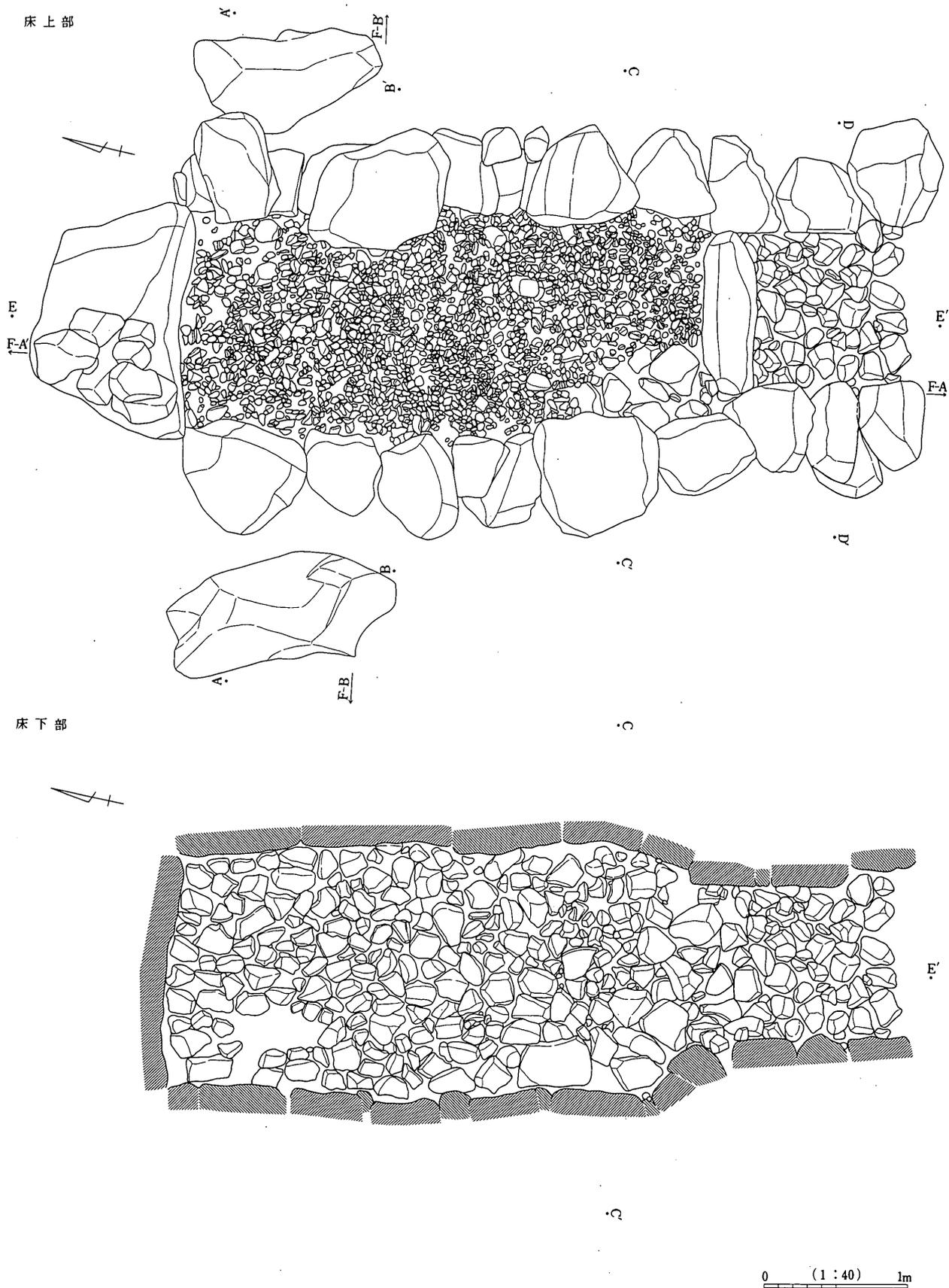


图 68 石室平面图

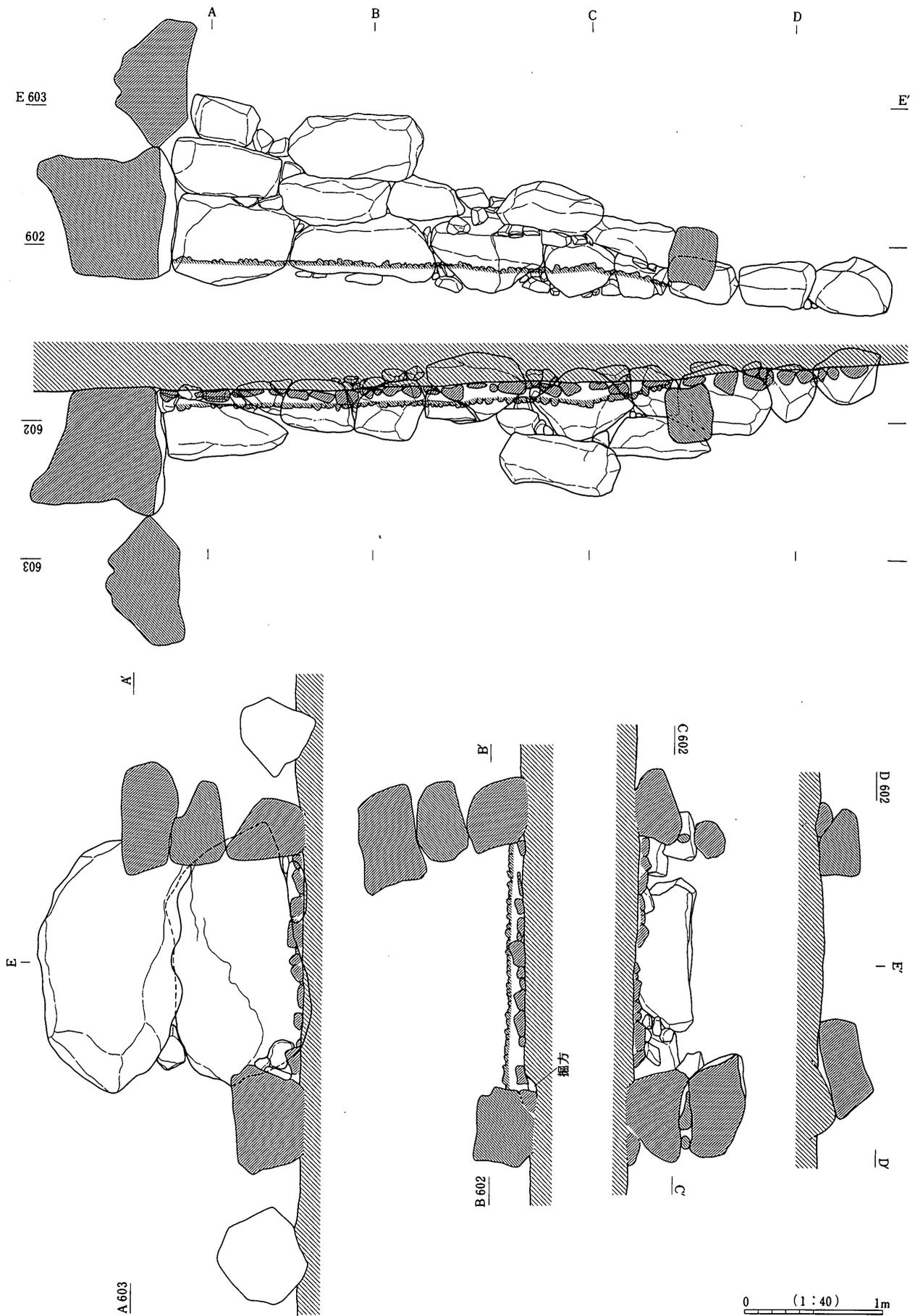


图 69 石室立面图·断面图



図70 玄室遺物出土状況

**裏込め** 壁体石の外側0.8～1.2mの範囲で、裏込めが石室を覆っている。側壁と奥壁では構造が違い、側壁では、内側つまり壁体石と接する部分には拳大以下の小角礫・亜角礫を主に充填する。その外側には、小礫部分を押し盛土層との混交を防ぐために人頭大～小児頭大の角礫を配しているが、外縁は一定しておらず、レベルによって、外に張り出す部分がまみられた。裏込めの築成が盛土作業と一連の工程で行われたことは明らかである。奥壁の側面では以上の状況と同様だが、背後では小礫を殆ど用いず人頭大の石を盛土と混交させながら積み上げている。

**その他** 石室構築との関係で注意されるのが、石室の両側に位置する2石一対の巨石である。この巨石は、大きさが近似する、長辺が石室中軸に平行しかつ中軸から等距離にある、北端を石室奥壁ラインに揃えている、といった点で、意図性および石室との強い関係を感じさせる。下面は旧地表面に食い込んでいるが、地山に含まれる石ではない。技術上の要請からか、思想的な理由によるのか、何らかの意味をもって配置されたものには違ひなからうが、現時点では合理的な説明を提示できない。



図71 大甕出土状況

## 第4節 出土遺物

### 1 出土状況

**玄室** 玄室内の遺物は、人骨、副葬品として土器類、金属器・金属製品類、玉類、石製品が出土した。轡や鏡、雲珠といった明確に馬具と認識できるものは見当たらない。埋葬時の位置関係は、盗掘等による改変を受けていることが明白だが、調査時の区割りに従って出土状況を概述する(図70)。人骨については茂原信生氏(京都大学霊長類研究所)に鑑定を依頼し、その報文を付章に掲載した。なお、羨道から遺物は出土していない。

人骨は、鑑定によると、壮年から熟年の頑丈な男性、性別不明の成人、1歳～1歳半程度の小児、の3体が確認された。人骨の出土状態は、1区には四肢骨を主体とする集中がみられ、その中に頭蓋骨1個体(B4)を含む。しかし、各部の骨が無秩序に混在し、自然な埋葬状態であるとは考えられない。頭蓋骨は1区集中部の他、3区(3-B1)と4区(4-B3)で検出されているものの、それに伴う体幹骨・四肢骨の位置は明確ではない。総体として、散乱した状態であり、本来の埋葬位置を特定することはできない。ただし、1区の人骨集中は、直刀等の遺物を含め、追葬時の片付けを反映する可能性があるだろう。

土器類は、1区壁際の須恵器3個体や、2～4区に散在する土師器がある。1区では、奥壁際中央に長頸壺が横倒しの状態で、右奥隅に平瓶が土圧で潰れた状態で出土した。右側壁際には提瓶が横倒しになっていた。これら3点はいずれも完形ないし完形に復元できるものである。2区では土師器坏、3・4区では内黒土師器坏の、それぞれ離れて検出された破片が接合した。

金属器類は直刀・鉄鏃の武器類の他、刀子、飾り金具、耳環がある。直刀は、2区中央寄りの左側壁に沿う状態で1本が出土し、他は3・4区奥側から1区に分布する。大刀は玄室中央と右奥にそれぞれ3本・2本が斜めに並列するような状態だが、切先の向きはまちまちである。また刀装具が刀本体から離れて出土している。鉄鏃は殆ど1・2区で出土し、奥壁寄りに多い。1区右側壁際には壁に平行して重なり合う1群があるが、切先の向きが逆のものも含まれている。刀子は1・2区に散在する。耳環はやや偏在性をみせ、4区奥側に4点が集中するほか、篩選別により4区でさらに2点、1区で1点を検出した。半球形の飾り金具が1・2区の奥寄り出土し、うち2点は入れ子状に重なって錆着していた。玉類は3・4区の玄室中央寄りから2区にかけて主に分布し、1区には少ない傾向がある。また、床礫の隙間に落ち込んだものも多い。

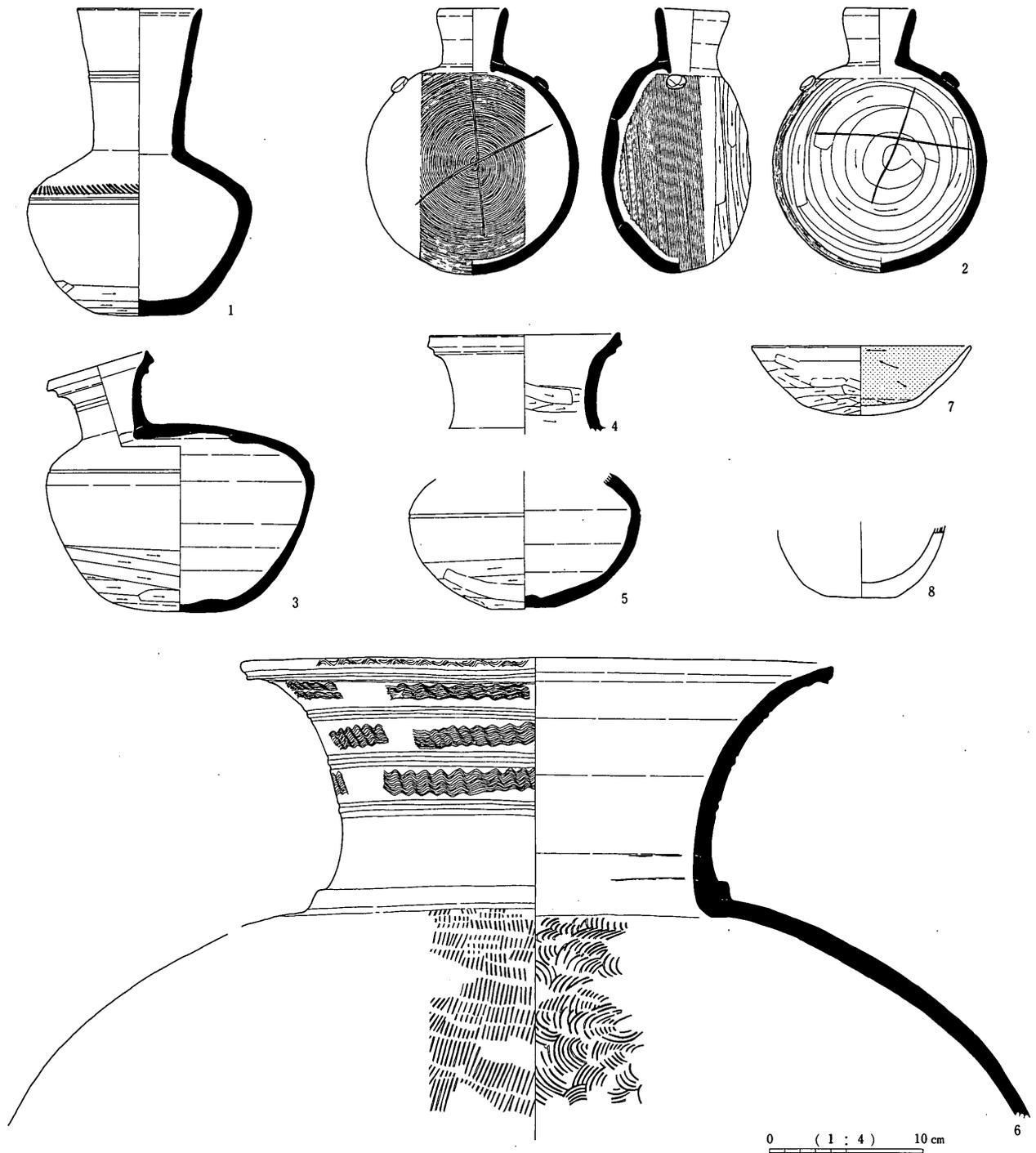


図72 土器

**墳丘外** 南西部の墳裾から5 m程離れた箇所で、須恵器の破片がまとまって出土した(図71・72)。その殆どは大甕だが、広口壺も含まれている。墓前祭祀に用いられたものであろう。

**墳丘** 天井石撤去後の形成層である2層から多種の土器類が検出された。須恵器壺・提瓶・無蓋高坏・甗・横瓶・甕・大甕、土師器坏・高坏・小形甕がある。その多くは玄室から掻き出されたものと考えられるが、すべて小破片で、接合率も極端に悪く、殆ど図化することができなかった。須恵器大甕・広口壺は墳丘外南西部の須恵器集中地点のものそれぞれ接合した。また、崩壊した石室裏込めと2層が混交する3層から管玉・鉄鏃片・鞘尻金具が出土した。玄室から掻き出されたものだろう。

## 2 遺物

## (1) 土器 (図72)

図示した須恵器長頸壺(1)・提瓶(2)・平瓶(3)、土師器内黒坏(7)・坏(8)は玄室、須恵器広口壺(4)・壺(5)・大甕(6)は墳丘2層および墳丘外遺物集中部の出土である。

## 須恵器

**長頸壺(1)** やや開く口頸部は中程に2条の沈線を廻らせ、端部を尖り気味におさめる。胴部は肩の張った形状で、屈曲部に2条の沈線が巡り、その上に連続して刺突文を施す。底部は回転ヘラケズリ。

**提瓶(2)** 口頸部はやや開き、端部を丸くおさめる。胴部は、腹面から側面にかけてカキメを施し、背面は回転ヘラケズリ。肩部にはボタン状の耳を貼付している。背腹両面に×字状のヘラ記号を刻む。

**平瓶(3)** 外反する口頸部の端面は内傾する。外面端部直下が突出して段を成し、二段口縁状の形態となっている。頸部中程には相接した2条の沈線を巡らせている。やや丸みを帯びた胴部は下部を回転ヘラケズリし、肩部には1条の沈線が巡る。

**壺(4)** 広口の壺である。外反する口頸部の端面は凹線状にくぼみ、端部直下に突線状のつまみ出しが巡る。頸部内面は横方向のヘラケズリが施されている。

**壺(5)** 下部を回転ヘラケズリする。胴部は丸みをもって立ち上がり、肩部には1条の沈線が巡る。

**大甕(6)** 頸部に突帯を巡らす、いわゆる補強帯大甕である。接合率が悪く完周しないが、肩より上部を復元することができた。大きく外反する口縁部の端部に波状文を施し、その下端を突線状につまみ出している。口縁部外面は、2条沈線による擬似突線で4段に区画され、上3段に波状文を充填し、最下段を無文帯とする。最上段の波状文の直上にはさらに突線1条を巡らせる。波状文は1単位11本幅15mm程の工具を用い、振幅長10mm程度に細かく上下し、振幅に乱れない丁寧な文様を描いている。補強帯は方形に突出し、上面は水平だが、その端部はシャープではない。補強帯大甕は、群馬県から埼玉県北西部に濃密な分布をみせ、栃木・茨城・千葉・神奈川県に点在的に分布する(田中広明1993)。長野県でも、本古墳の他、臼田町中原2号墳(島田1996)・長野市篠ノ井遺跡群(田中正治郎1998)・同県町遺跡(笹沢1982)等の千曲川流域で出土をみている。

## 土師器

**内黒坏(7)** 扁平な丸底を呈する底部からほぼ直線的に開く体部をもつ。内面底と体部立ち上がりの境には屈曲線が巡る。器壁は薄い。外面は底部から体部下半ヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキ。

**坏(8)** 小さな平底から丸い体部が立ち上がる。器壁は厚い。摩耗のため調整は不明である。

## (2) 直刀および刀装具 (図73・74)

直刀は玄室内から9本が出土した。すべて刀身は平棟平造りである。刀身が短く細身のものは、刀子との区別を付けにくいだが、ここでは、20cm程度を基準とした。なお、鞘尻金具13は墳丘3層出土である。

**1号刀(1)** 一度折れた茎を鍛着して修理している。鍔が覆うため直接観察できないが、関は小さく直角に切れ込む両関と思われる。茎は刃側に彎曲し、尻を欠く。目釘穴は2穴認められ、茎尻近くの目釘穴には鉄製の目釘が残っている。刀装具は鉄製である。鐔は無窓の倒卵形で、刃側の端部が尖っている。鍔は鉄板を倒卵形に巻いたものである。鐔より元側に倒卵形の輪状金具が組み合い、一種の柄縁金具と考えた。これについては、保存処理のため、実測図作成以前に取り外してしまったので、図73では写真等に基づいて出土時の位置に復元して書き入れてある。

**2号刀(2)** 切先を欠損している。刀身に鍔本穴を有している。関は直角に切れ込む両関であるが、背(棟)側は浅く刃側はやや深い。目釘穴は3穴、目釘は残っていない。また、刀装具は失われているが、10が組み合う可能性があろう。刀身の中央と元付近に木質が付着しているが、実測面の裏側のため、図化はして

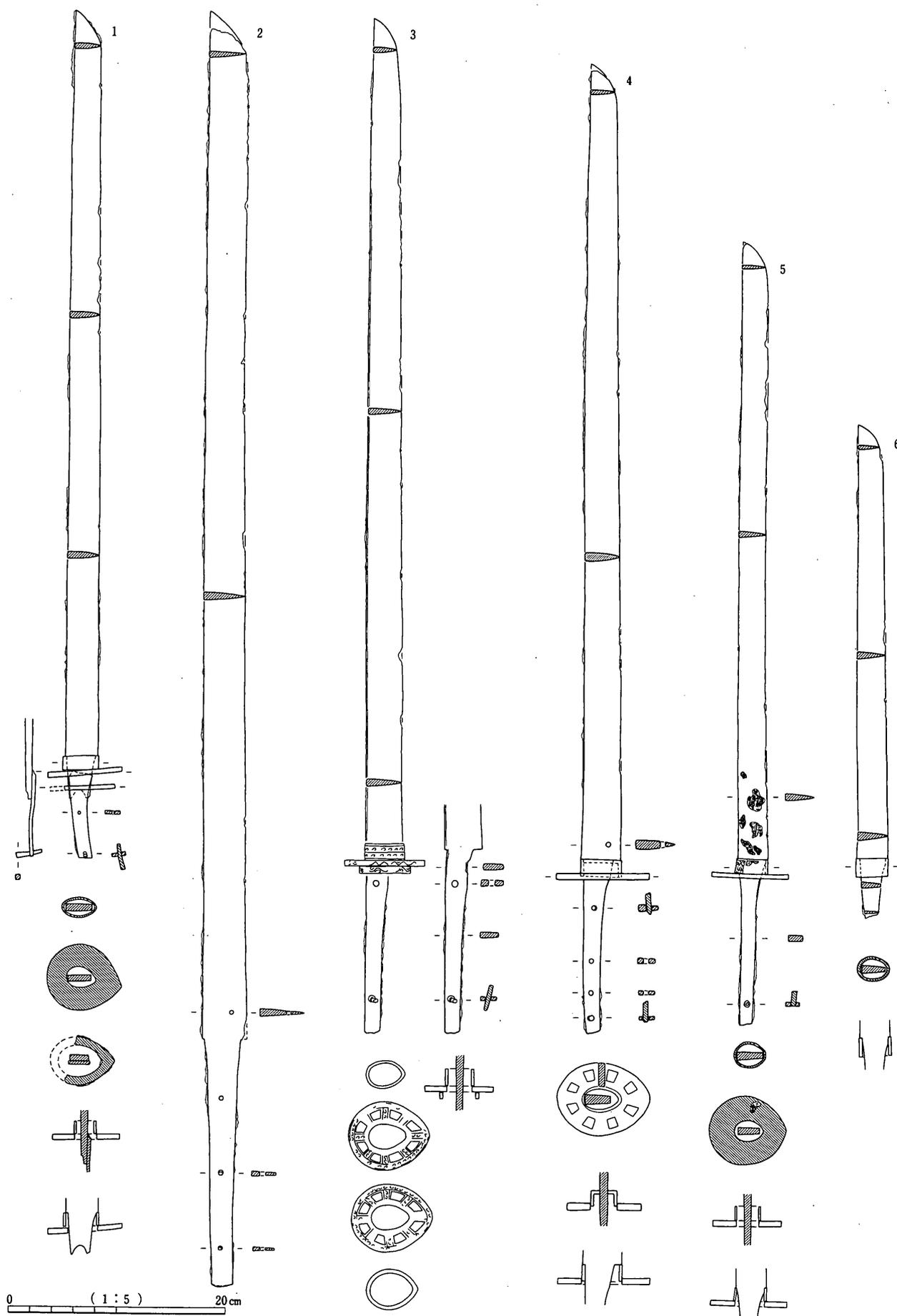


图73 金属器·金属品 (1) 一直刀

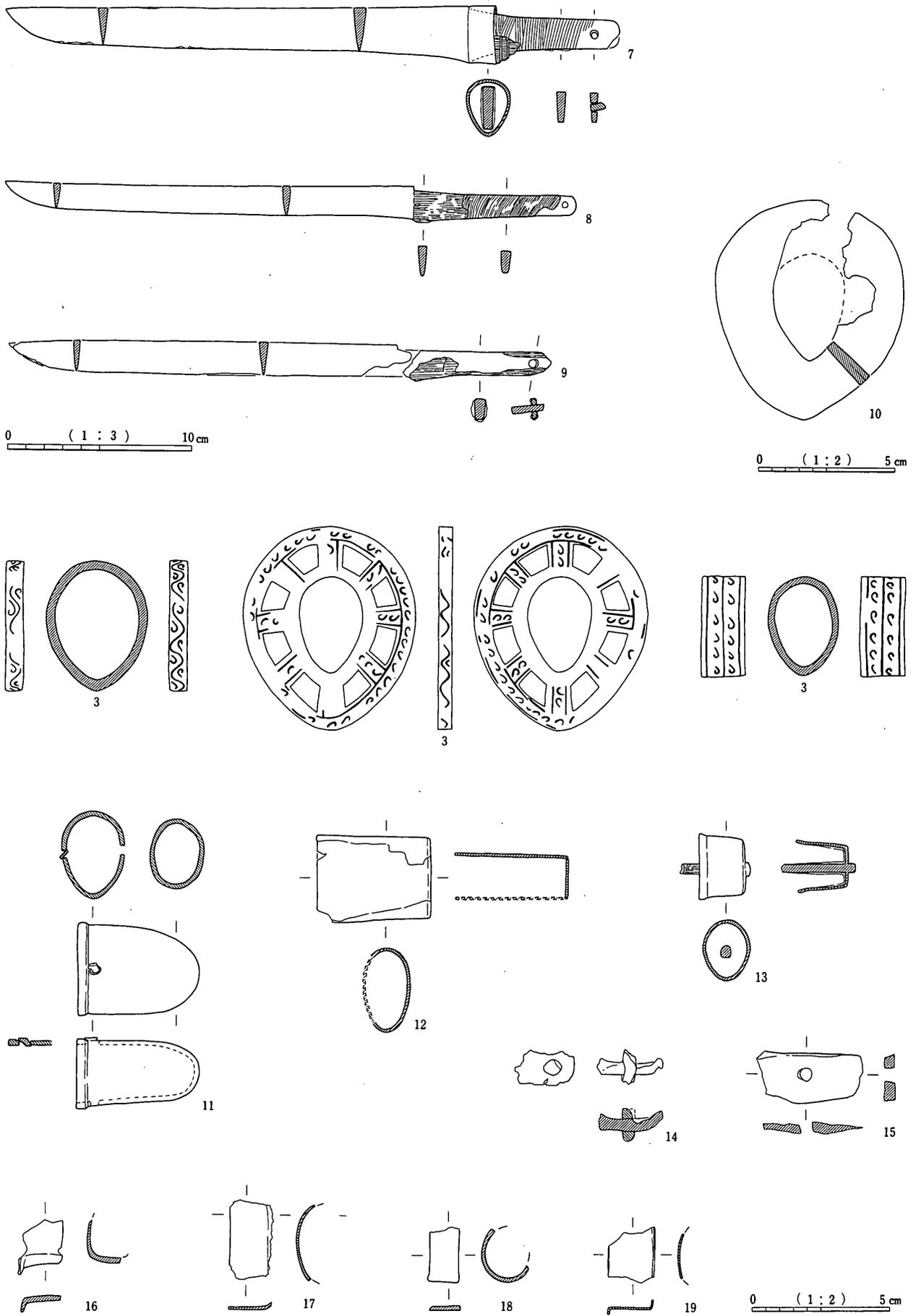


图74 金属品·金属製品(2)一直刀·刀装具一

いない。

**3号刀(3)** ほぼ完形である。関は直角に切れ込む両関であるが、背側は抉り状の浅いもので、対照的に刃側は深く切れ込んでいる。茎は茎元抉を有し、目釘穴は2穴認められ、茎尻近く目釘穴には鉄製の目釘が残っている。刀装具は鉄製で断面形は端正な倒卵形を呈する、鉄板を巻いた釧、八窓鐔、柄縁金具が組み合う。刀装具には銀象嵌が施されている(図74-3)。当初は全面銹に覆われていたが、保存処理を進める過程で象嵌の存在が判明した。

釧の象嵌文様は、刀身に直交する3本の区画線で2列の文様帯を画し、その中に連続するC字状文を巡らせる。

鐔は平と耳に象嵌を施している。平の文様は、周縁に二重の圏線を巡らせ、その中に連続C字状文を1列に巡らせている。C字の開口部は外側を向く。さらに、透し間に、周縁内側の圏線から2本の区画線を伸ばし、その中に2ないし3個のC字状文を1列に充填している。耳の文様は、中央に1本の波線を巡らし、波頂間にC字状文1個を左右交互に充填する。C字の開口部は外側を向く。

柄縁金具の象嵌文様は鐔耳の文様と同様な波状C字状文である。

なお、刀装具については、実測図作成以前に保存処理を行ったため、その過程で取り外してしまい、表裏がわからなくなってしまった。

**4号刀(4)** 切先を僅か欠損する。刀身には釧本穴を有している。X線写真により、関は直角に切れ込む両関であるが、背側は浅く、刃側は深く切れ込むことが判明した。茎は中程から尻にかけて僅かに彎曲している。目釘穴は4穴あり、両端の2穴には鉄製の目釘が残っている。刀装具は鉄製である。鐔は倒卵形の八窓鐔で、透しは逆台形を呈する。3号刀の鐔に比べやや細長い形状といえようか。釧は切先側がふさがり形態である。

**5号刀(5)** ほぼ完形である。釧のため直接観察できないが、両関であることは間違いない。ただし、背関は浅く撫角に切れ込み、刃関は浅く直角に切れ込んだ後、刃縁に平行に僅か伸びて再び撫角に切れ込む二段関と思われる。茎は関部から急激に細まるがそこから以後幅は変化しない。目釘穴は茎尻付近に1穴認められ、鉄製の目釘が残っている。刀装具は鉄製である。鐔は無窓の倒卵形で、刃側の端部が尖っているが、ずんぐりした形状である。釧は鉄板を倒卵形に巻いたもので、内側には木質が遺存している。なお、刀身の元付近と鐔の平に布目痕が認められ、抜き身を布で包んで副葬したことが推測できよう。

**6号刀(6)** 茎尻を欠損する。釧のため直接観察できないが、両関であることは間違いない。背関は浅く直角に切れ込み、刃関は、5号刀同様、浅く直角に切れ込んだ後、刃縁に平行に僅か伸びて再び撫角に切れ込む二段関と思われる。目釘穴は茎尻付近に穿たれていたのだろうか。刀装具は鉄製である。釧は鉄板を倒卵形に巻いたものである。

**7号刀(7)** ほぼ完形の短刀である。釧のため直接観察できないが、背、刃とも浅く撫角に切れ込む両関であることが確認できた。茎には糸が巻かれ、目釘穴は茎尻付近に1穴穿たれている。釧は鉄板を倒卵形に巻いたものである。鹿角を用いた柄が一部遺存し、刀身に直交する刻線が2条確認される。

**8号刀(8)** 細身の短刀である。茎には糸が巻かれ、その上に木質が付着する。そのため、刃関は観察できないが、背関は浅く直角に切れ込む。目釘穴は茎尻付近に1穴穿たれている。

**9号刀(9)** 細身の短刀である。茎は分厚いが尻付近が薄くなっており、木質が付着している。背関は浅く直角に切れ込む。目釘穴は茎尻付近に1穴穿たれ、鉄製の目釘が残る。

刀本体から離れて出土した刀装具および刀の破片がある。10は鉄製の無窓鐔である。平面形は倒卵形を呈し、刃側の端部が尖っている。2号刀と組み合う可能性が考えられる。11～12は袋状を呈する鉄製金具である。柄頭か鞘尻か判断し難いが、ここでは一応、11を円頭柄頭、12・13を方形の鞘尻と考えておく。

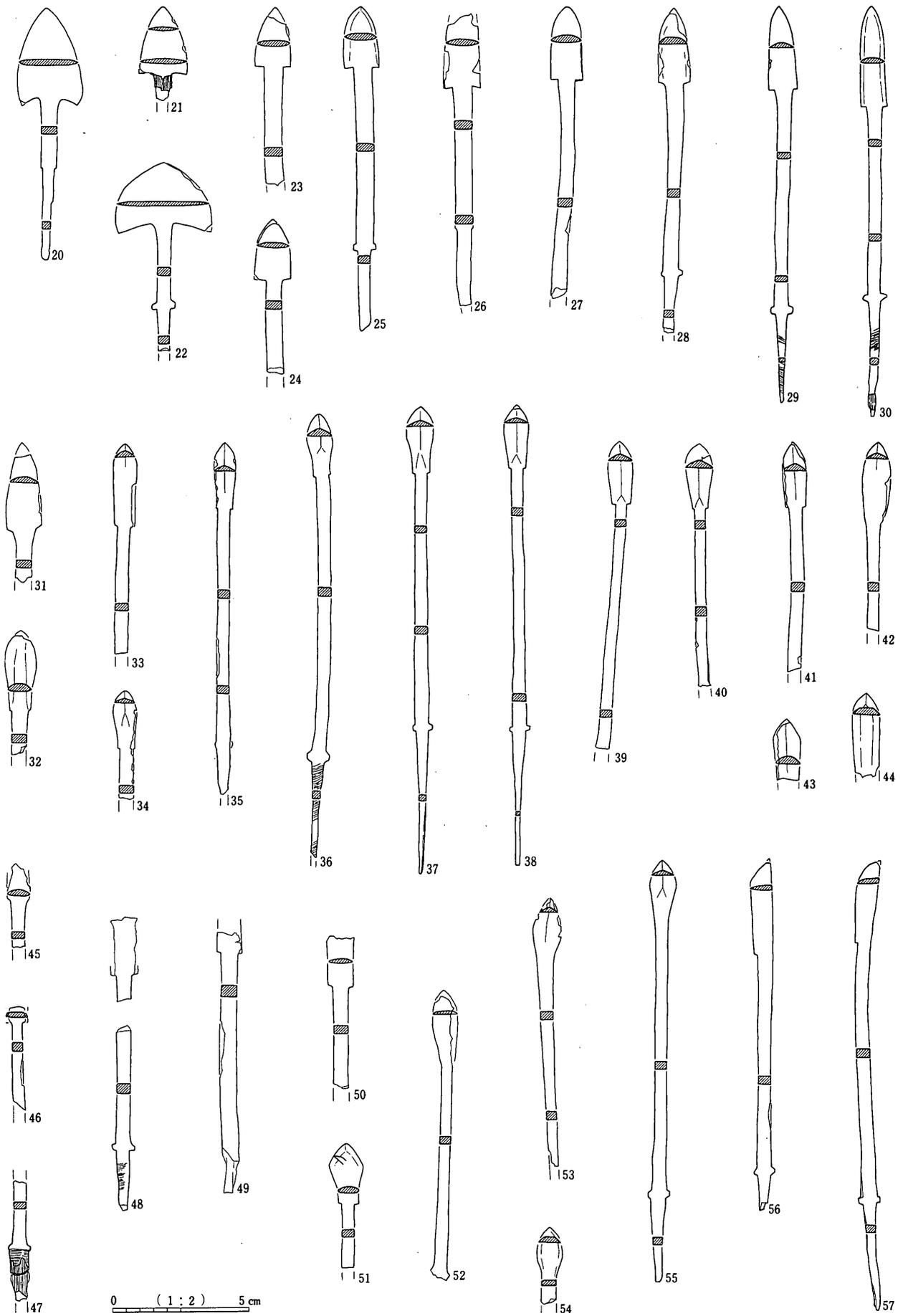


图 75 金属品·金属製品 (3) — 鉄鍬 —

11の開口部は断面倒卵形を呈し、その縁は台形状に肥厚する。頂部付近では断面楕円形となっている。片方の側面には目釘穴があり、鉄製の目釘が残る。12は片側面を大きく欠損する。残存部に目釘穴は認められない。13の開口部縁は外方に屈曲し、頂部から開口部に向かって鉄製の長い釘が打ち込まれている。14・15は茎の破片である。双方とも目釘が残る。16～19は鞘金具と思われる鉄製金具である。

(3) 鉄鏃 (図75-20～57)

鉄鏃は、鏃身部で計上すると43点が出土した。墳丘2層検出の頸部片1点を除き、すべて玄室から検出されており、その殆どは長頸鏃である。以下、頸部の有無と長さ・鏃身部の外形から分類を行うが、各部の名称と大枠の分類は杉山秀宏の方法(杉山1988)を規範とする。

- 1類：無頸のもの。鏃身部外形は三角形を呈し、鏃身関は直角である(21)。矢柄の木質が鏃身に接して遺存することで無頸と判断した。
- 2類：短頸で、鏃身部外形が三角形を呈し、鏃身下端部が浅い逆刺状になるもの。いわゆる広根系鏃である。鏃身が長めで頸部関(以下関)が直角のもの(20)と、鏃身幅が広く棘状関をもつもの(22)がある。
- 3類：長頸で、鏃身部外形が三角形を呈するもの。鏃身関は直角である。関は確認した限りすべて棘状関である。頸部は4～6類に比べて太く短い(23～25)。
- 4類：長頸で、鏃身部外形が長三角形ないしその変化形のもの。関は確認した限りすべて棘状関である。鏃身形状の特徴から3細分する。なお、鏃身中軸に弱い稜が観察されるものがあるが、鑄造と断定するには躊躇を覚える。ここでは、片丸造の範疇に含めておきたい。
  - 4a類：鏃身部外形が長三角形を呈するもの。鏃身関は直角に切れ込む(26～31)。4c類以降に比べ頸部が太いものがある。
  - 4b類：鏃身部最大幅がふくら部にあり、関部に向かって細くなるもの。鏃身関は浅く直角に切れ込むもの(32～46)。4a類の鏃身関部が退化したものと理解する。
  - 4c類：鏃身部最大幅がふくら部にあり、鏃身関が緩い撫角をなすもの(52～55)。
- 5類：ふくら部が角張り、鏃身部が五角形状を呈するもの。鏃身関は浅い直角(51)。
- 6類：長頸片刃鏃。鏃身部最大幅はふくら部にある。鏃身関は浅い直角(56・57)。
  - 4b類・5類の鏃身関部が欠損すると4c類に近い形状となるが、55は遺存状況が良好で欠損・変形していないので、4c類が成立することは確かである。鏃身部の断面形は、1類：平造、2類：平造、3類：両丸造、4a類：両丸造(26)・片切刃造(28)・両丸造(その他)、4b類：片丸造、4c類：片丸造、6類：平片刃造である。5類は端刃造のようにみえる。

(4) 刀子 (図75-58～66)

刀子は玄室1・2区から散在して出土した。確認した限り、刀身はすべて平棟平造りで、また、関は両関である。刀身の長いもの、中位のもの、短いものがあるようである。また、切先付近に反りをもつもの(61)がある。58の茎には糸巻きが施され、60・64には木質が付着している。64は銅製の釧を伴う。

(5) 耳環 (図75-74～80)

玄室から7点出土した。いずれも芯には銅を用い、外面に金を施しているが、金箔貼りであるか鍍金であるかは判別し難い。大形のもの和小形のものがあり、さらに芯の太さや全体形状等で類別すると、74と77、79と80が対を成すと思われる。75・76・78は組み合わせ相手が見つからないので、本来、少なくとも5対は存在したことになるろう。

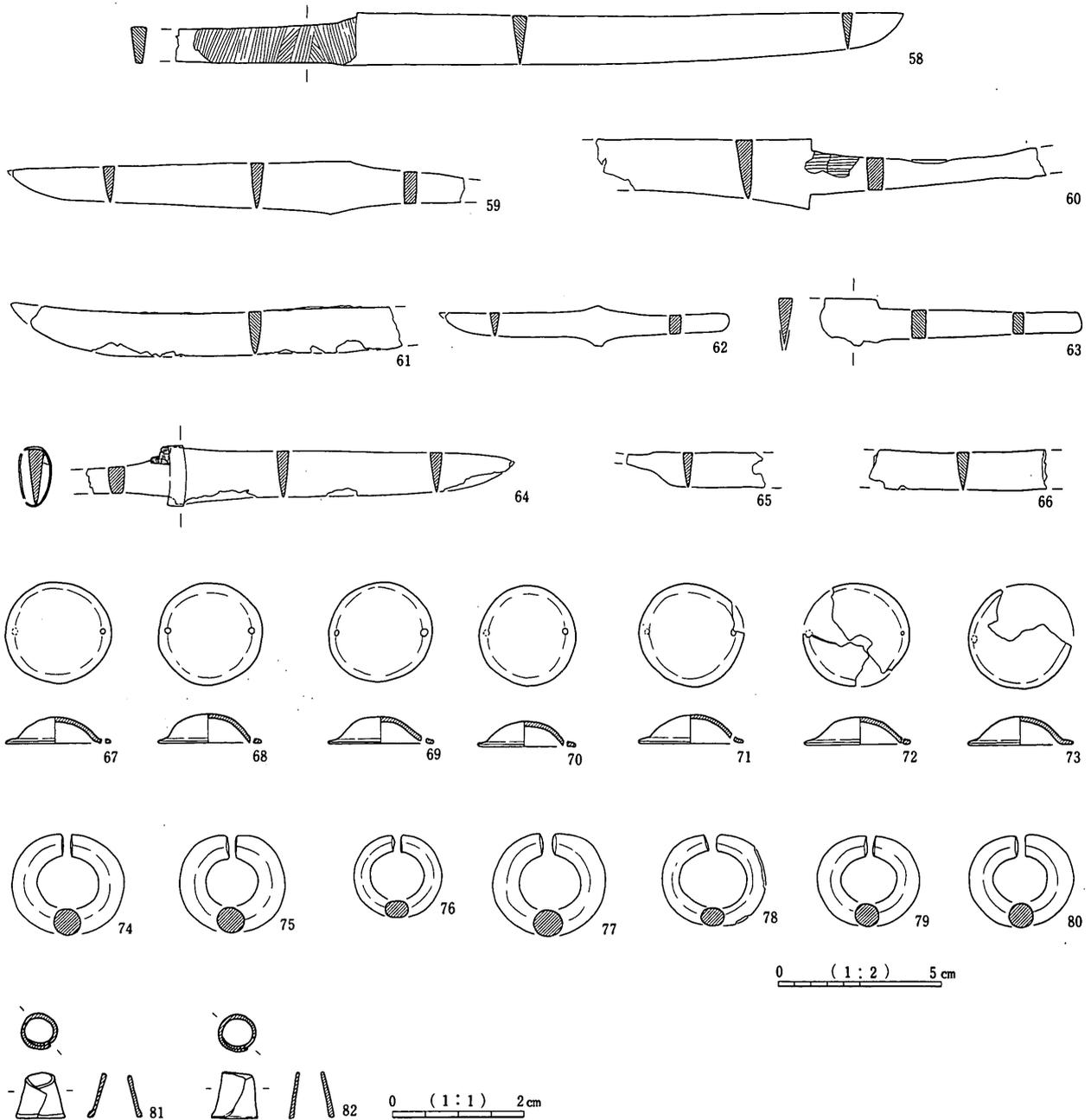


図76 金属器・金属製品(4)

(6) 金具類 (図75 - 67 ~ 73・81・82)

玄室出土である。67 ~ 73は浅い半球形の体部をもつ鉄地金張りの金具である。周縁を鏝状に張り出させ、鏝の根元に小孔をあけている。この小孔に細いピンを通して対象物に止めたものと思われる。その相手は確認されなかったが、有機質のものであることは間違いなく、何かの革帯・布製品の飾り金具と想定しておく。類例として、群馬県綿貫観音山古墳では100点以上が検出されており、その数多さから、宝器または祭器的な副葬品の装飾として用いられたことが推測されている(梅沢1981)。81・82は截頂円錐形を呈する小形銅製金具である。薄い銅板を巻いて左前に合わせ、成形している。底縁は僅かに肥厚する。用途は不明である。

(7) 玉類 (図77・78)

総計194点が検出された。内訳は管玉5、勾玉・棗玉・切子玉・白玉各1、土製丸・小玉75、ガラス小

玉 111 点である。このうち管玉 2 点 (1・5) が玄室外で、その他は玄室内出土である。なお、巻末掲載の玉類計測表の法量については、種類を問わず、穿孔方向で「厚さ」を計測し、それに直交する方向で「長径」・「短径」を計測した。

**管玉** 管玉は碧玉製が 4 点 (1～3・5)、土製が 1 点 (4) である。碧玉製管玉は、色は暗緑灰色を呈するが、2 は黄色味が強く素材が異なる。形態は大形のもの 1 点と小形のもの 3 点が認められる。穿孔方法は片面穿孔であり、終孔の周縁を研磨して穿孔時の剥離割れを整形している。土製管玉は黒色を呈する。

**勾玉**(6) 滑石製小形の勾玉である。腹部は丸みを帯びたコ字状を呈する。

**棗玉**(7) 滑石製の棗玉である。穿孔は片面穿孔である。外彎する側面は横方向(穿孔軸に直交)に研磨されている。孔面には研磨を施していないが、放射状に削って形を整えようとした様子が認められる。

**切子玉**(8) 水晶製の切子玉である。側面は上下二段各 6 面が作り出され、全体として 14 面体をなす。穿孔は片面穿孔で、終孔の周縁に細かな剥離を加え、穿孔時の割れを整形している。

**白玉**(9) 滑石製の白玉である。穿孔は片面穿孔である。直線的な側面は斜方向に研磨されている。孔面は両面とも研磨を施している。

**土製丸玉・小玉**(10～79) 表面の色は黒色で光沢を帯び、黒漆を塗っているものと考えられる。地の色は暗褐色である。大形のもの(10～65)と小形のもの(66～79)があり、両者の差は画然としている。平面形はほぼ円形に整えられているが、側面形は長方形に近い形状・楕円形・不整形と不揃いである。

**ガラス小玉**(80～175) 色調から、コバルトブルー系のもの(80～121・152・153)、スカイブルー系のもの(122～151・154～159)、黄色のもの(160～175)に大別できる。さらに、コバルトブルー系は、濃灰紺(80)・濃紺(81～93)・紺(94～121)・灰濃紺(152)・濃黒紺(153)に細別され、スカイブルー系は青(122～148)・濃青(149～151)・青緑(154～159)に細別される。大きさと色調の関係をみると、黄色のものは大きさがほぼひとまとまりになるが、コバルトブルー系とスカイブルー系のものは、大・中・小に 3 分できるようである。大形のもの土製丸玉に匹敵する大きさをもつが、境界がやや曖昧なため、特に区別せず、ガラス小玉として一括した。内部に気泡が観察できるものがあり、それはすべて孔と平行に並ぶことから、製作技法はガラス管を切断して作る管切り技法によると考えられる。

#### (8) 石製品 (図 78-1)

平面逆台形を呈する磨製石製品である。玄室から出土した。上辺および下辺は僅かに外彎し、上端中央に円孔があげられている。石材は粘板岩と思われる。垂飾りの一種と考えておく。

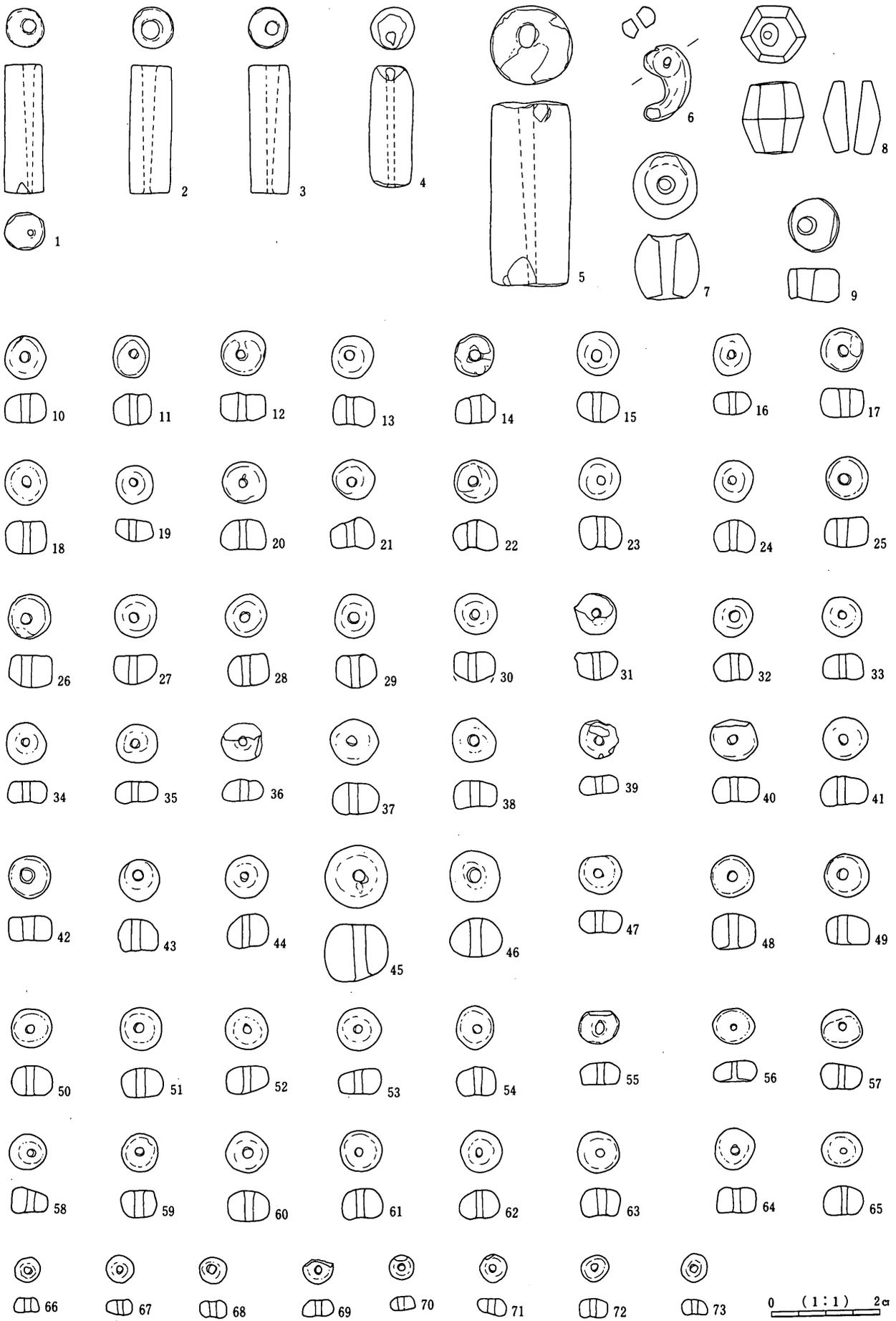


图77 玉類(1)

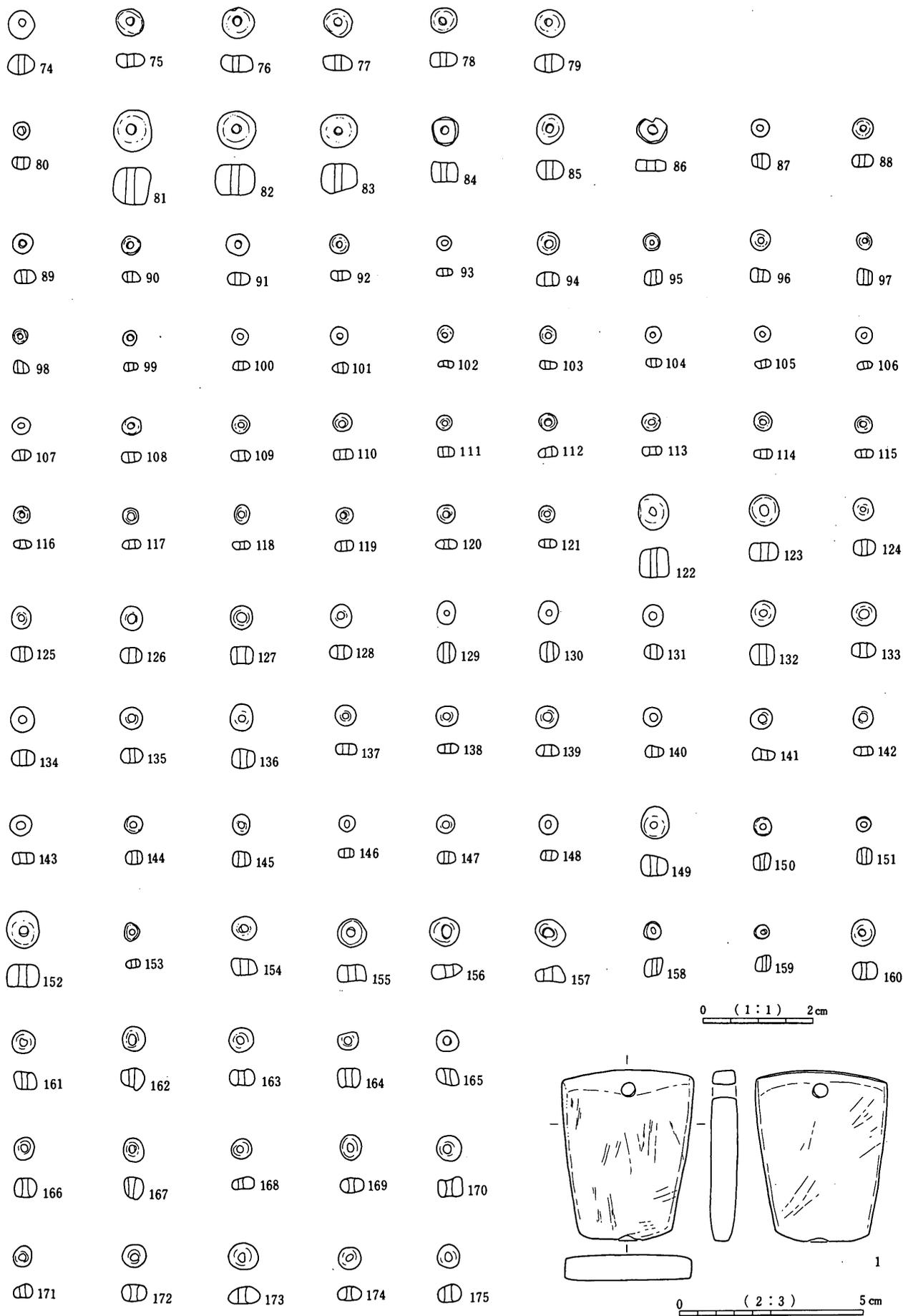


図78 玉類(2)・石製品

## 第5節 小結

### 1 陣馬塚古墳の年代

本古墳からは多数の遺物が出土した。以下、その様相を検討し、本古墳の年代を考えてみたい。

#### 土器類の様相

玄室出土の須恵器であるが、提瓶は口径が小さく短い単純口縁で、ボタン状耳を有しており、平瓶は二段状口縁、丸みを帯びた底・体部といった特徴をもつ。田辺昭三によれば、提瓶は陶邑編年のMT 15型式に現われてTK 209型式まで存続し、平瓶は第Ⅱ期末（TK 209前後）に出現するという（田辺1981）。また、東海地方の資料を中心に瓶類の検討を行った宮下知良の示した変遷観と年代観（宮下1984）によると、本古墳の提瓶はTK 43型式期に対応し、平瓶は宮下分類のⅡ類に相当しよう。ただし、平瓶の体部は逆台形に近づいているので、その中でも新相か。長頸壺については、文様や、体部が逆台形に近づいている点から、TK 217併行と考えておきたい。須恵器諸型式の実年代比定には諸説あるが、最近、近畿地方歴年代の整理を行った小山田宏一の見解（小山田1996）に従えば、TK 43・TK 209・TK 217型式は各々6世紀第4四半期・7世紀代1四半期・7世紀第1四半期～第2四半期にかけてとなる。平瓶の宮下Ⅱ類は7世紀前半という年代が示されている。内黒土師器は7世紀前葉頃に位置付けられるもので、須恵器が示す年代幅の中におさまる。

墳丘外出土の須恵器大甕は頸部に補強帯をもつものである。補強帯大甕については田中広明の研究があり、とりわけ補強帯の断面形状と口縁部波状文の表現手法が、純粹に時間的変化を示す属性であるという（田中1993）。そこで、その2点をみると、補強帯断面は田中分類のC類ないしD類に、波状文の手法はA類に相当し、本古墳の補強帯大甕は田中編年のⅡ期に位置付けられよう。Ⅱ期の年代は6世紀後葉～7世紀前葉とされているが、波状文がA類であることから、その中でも古い方と考えておきたい。

以上、土器群はほぼ6世紀第4四半期から7世紀前半の年代が与えられる。

#### 鉄鍬の様相

本古墳の鉄鍬は長頸鍬を主体として、それにごく少量の広根系三角形鍬が組み合う。長頸鍬はすべて棘状関である。鍬身形状は、三角形の3類および長三角形の4a類を合わせた一群と、鍬身関部が退化し幅狭くなった4b類がほぼ同割合で長頸鍬組成の主体を占めている。鍬身関の退化がさらに進行して緩い撫角になった4c類と、片刃鍬6類は少数である。広根系鍬は、1点は直角関、もう1点は棘状関である。

関義則・杉山秀宏によれば、長頸鍬においてはTK 43型式期に棘状関が出現するが、広根系では採用が遅れ、TK 209型式期以降に認められるようになる（関1986、杉山1988）。また、TK 209型式期には、鍬身部が相対的に小形化するとともに、鍬身関が退化して撫角や無関のものが出現し、以降の組成の大半を占めるようになる。7世紀第2四半期頃になると刃部が鋒のみに付された鍬が出現する（関1986）。

こうした先学が示す、6世紀終わり頃から7世紀前半にかけての鉄鍬変遷の枠組みに、本古墳の鉄鍬を位置付けてみると、長頸鍬がすべて棘状関をもつことから6世紀第4四半期（TK 43）より遡ることはなく、また、組成に占める4c類の割合が少ないことから、7世紀第3四半期まで降らせる必要はないと考える。したがって、本古墳の鉄鍬群は、総体として6世紀第4四半期から7世紀前半の年代を示していることが理解され、土器群の様相から導かれた年代幅に合致する。

#### 象嵌装刀

3号刀には象嵌を施した刀装具が伴っている。鍔の象嵌文様は3本の直線の間には2列のC字状文が連続する。鐔の平は、周縁に巡らせた二重圏線の間には1列のC字状文が連続し、透し間には2本の直線間にC字状文を2個一列に充填する。耳は1本の波線の波頂間にC字状文1個を左右交互に充填する。柄縁金具は

鐔耳の文様と同様な波状C字状文である。従って、3号刀の刀装具の象嵌はいずれも連続C字状文を主なモチーフとする文様であることがわかる。象嵌鐔については橋本博文の編年があり（橋本1993）、3号刀の鐔は、橋本が象嵌文様を4系列に分類したうちの、C字状文系列に属することは言うまでもない。以下、橋本編年との対比を基軸として、3号刀を位置付けてみたい。

橋本がその編年の第二段階とした島根県岡田山1号墳の「額田部臣」銘銀象嵌大刀の喰出し鐔は、その平に三重に巡らせた圏線の中に連続する二列のC字状文を充填する。耳には複合鋸歯文を施す。同刀の鐔の文様は3本の直線間に二列の連続するC字状文を充填するもの（三宅・松本1987）であるが、これは3号刀とまったく同じ構成である。鐔の平にC字状文帯を二重に巡らす表現は無窓鐔に特徴的な表現と考えられるが、これに比べて3号刀例のC字状文にはやや乱れと変形が認められる。このことから、3号刀をより新しく位置付けておきたい。耳の文様は系統が異なるので直接対比はできない。

第三段階に属する群馬県筑波山古墳例は（橋本1993）、八窓鐔の平に、周縁C字状文を一列に連続させ、透し間に直線に挟まれたC字状文を配する点で3号刀と類似するが、周縁内側の圏線を欠き、C字状文もより乱れが大きい。同じ第三段階の伝群馬県高崎市倉賀野出土例（橋本1993）も八窓鐔であるが、周縁のC字状文が粗くなってやや乱れた連弧状文となり、外側の圏線も欠いている。透し間には2本の直線間にC字状文2個を一列に充填するが、C字はかなり乱れている。耳は2本の直線間に連続するC字状文を一列に充填するものである。瀧瀬芳之によれば（瀧瀬・野中1995）、こうした直線C字状文が変化して3号刀例のような波状C字状文が成立したとされるので、耳文様に限っては3号刀例より先行的といえようか。しかし、平文様の退化ぶりは明らかである。このように、筑波山・倉賀野例に比べて3号刀が古く位置付けられることが理解される。

伝群馬県高崎市岩鼻出土例は第三段階の古相に位置付けられている。平周縁の文様は3号刀例と同様であるが、透し間には3本の直線間に二列の連続するC字状文2ないし3個を充填する。耳は2本の直線間に連続するC字状文を一列に充填する（西山1986）。文様としては3号刀より古相といえようか。ただし、鐔自体は後出的な六窓鐔である。埼玉県永明寺古墳例（瀧瀬・野中1995）は、九窓鐔の耳は岩鼻出土例と同様な構成、平は3号刀と同様な構成を取るが、透し間のC字文は3ないし4個と多い。鐔には3本の直線間に2本の波状文が施されている。この鐔の文様は3号刀や岡田山1号墳例の3直線2列C字状文が変化したものと考えられるので、それより後出的といえる。以上を総合すると、3号刀・岩鼻出土例・永明寺古墳例はほぼ同段階の資料と考えられる。即ち、3号刀を橋本編年第三段階古相に位置付ける。

橋本は第二段階に6世紀第3四半期、第三段階に6世紀第4四半期の年代を与えている。従って、この年代観に従えば、3号刀の年代は6世紀第4四半期の古い方とみるのが妥当であろう。この年代は、八窓鐔の出現年代（橋本1993）や、刀身の形制（白杵1984）・柄回りの構造（菊地1990・1993）が示す年代と矛盾するものではない。

### 陣馬塚古墳の年代

遺物の検討から、本古墳の墳墓としての存続期間は6世紀末から7世紀前半と理解される。およそ数十年の時間幅があり、実際、3体の人骨が確認されているので、複数時期の埋葬が考えられるが、最も古相を示す一群の遺物の年代から、6世紀末を本古墳の築造年代と考える。

出土状況によって検証することができないため、各埋葬に伴う副葬品セットの具体的な抽出は難しいが、3号刀や須恵器大甕・提瓶、鉄鍬3類および4a類は初葬時に伴う可能性があろう。7世紀に位置付けられる平瓶・長頸壺・内黒土師器坏や鉄鍬4b～6類は追葬に伴うものと考えておきたい。

## 2 築造工程と企画

### 築造工程

本古墳の築かれている横山丘陵の頂部は瘦せ尾根ではない。現在の地形は、畑の造成により多少改変され、頂部は比較的広い平坦面を成しているが、古墳築造当時とさほど変わるものではないだろう。古墳はその頂部の南側に偏した位置にあり、古墳の前面は南に下る緩斜面となっている。古墳から約10 m辺りで傾斜が強くなり、築屋台地に向かって急激に落ち込んでいる。また、微地形をみると、石室奥壁はちょうど平坦部から斜面に移る変換点に据えられている。石室床が奥壁から開口部に向かって若干下り勾配を成し、排水を意識した設計になっていることが推定されるので、石室そして墳丘の構築に当たって、微地形を把握した上でそうした位置を選地したと考えてよい。

古墳の築成前にまず構築面となる地盤の整備が行われた筈である。ただし、本古墳の場合、墳丘直下全面に旧地表腐植土層と思われる黒色土層が厚さ10～20cm程に残っていることから、整地は、草木を取り除き、地表を若干削って整える程度のものであったと考えられる。旧地表面に突き出ていた地山礫については、石室床構造（下部礫敷き）の一部とした例や、最下段壁体の支えに利用した例もあり、積極的に除去しようとした形跡が認められないが、これは地盤の荒れを防ぐため、むしろ当然といえよう。整地の上には特に基礎地業は行われておらず、整地面がすなわち石室および墳丘構築の基底面となる。

整地終了後、石室の構築が始まる。石室は墓壙がなく、壁体石も基本的に掘り方をもたないので、最下位石は基底面上に直接並べられる。基底面から浮く部分には小振りの石を詰めて安定を図っている。石室は奥壁が要の位置にあるため、実作業としては、その据付けが側壁に先行した公算が大きい。側壁の設置と併行して裏込めと盛土の充填が行われる。以後、同様な作業を繰り返して、石室の構築が進行して行くが、奥壁下段石の上端から側壁第二段にかけて横目地が通り、ここで作業工程の段階を画す区切りがあったと考えられる。墳丘は石室と構造上一体のものであるので、その築成は石室の構築と同時に進行することになる。ただし、初期の盛土端が墳丘裾にまで達していない部分が多いため、裾列石は、石室構築がある程度進行した段階で設置されたのだろう。盛土断面の観察によれば、おそらく側壁第二段を積んだ時点以後の工程の中で行われたことが推定される。

天井石架構後、それを覆う盛土がなされ、古墳は完成したと思われるが、その構造や具体的な構築方法は判然としない。

### 築造企画

古墳の築造企画に基準となる何らかの物差しが使用されたことはしばしば指摘されている。陣馬塚古墳の場合はどうか、この問題に簡単ながら触れてみたい。設計・施工上、最も厳密さが必要とされたであろう石室についてみる。本古墳の石室計測値は以下ようになる。

石室全長 5.2 m、玄室長 3.8 m、玄室幅（中央）1.8 m弱、羨道長 1.4 m、羨道幅 1.1 m

さて、上の計測値の組み合わせについては、35cmを1単位とする物差しを想定すると、比較的バランスよく適合するようである。一方、25cm 1単位の物差しを当てはめてみても概ね適合し、24cm 1単位の物差しも捨て難い。墳丘径の8.2 mという数値に対しては後二者の方が整合的といえる。

とはいえ、石材に凹凸がある自然石積み石室の場合、計測位置を何処に取るかによって様相は大きく変わるため、恣意的な操作が可能となる。例えば、上記の計測値についても、玄室長・羨道長は、右側壁は歪みが大きい左側壁での値を採用したものであるが、この時点で既に選択が行われてしまっている。また、35cmは高麗尺の1尺（尾崎1966）、25cmは宋尺の1尺（森1995）、24cmは晉尺（宇賀神1991など）にほぼ対応するが、はたして6世紀末に高麗尺の使用が一般的なものであったかどうか問題を残している。ここでは、諸種の尺度のうち、どの尺度が本古墳の企画に用いられたのかを断定することは避けておきたい。

## 第5章 陣馬塚古墳

### 引用・参考文献

- 宇賀神誠司 1991 「第3章 第11節4(3) 大星尻古墳 5(3) 大星尻古墳の諸相」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2  
—佐久市内その2—』(勲)長野県埋蔵文化財センター
- 宇賀神誠司 1995 「寄山古墳の調査」『寄山』佐久市教育委員会
- 臼杵勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 臼杵勲 1986 「古墳出土鉄刀の多変量解析」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
- 梅沢重昭 1981 「32 観音山古墳(149)」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- 大塚初重・安藤道由ほか 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3—長野市内その1—大室古墳群』  
(勲)長野県埋蔵文化財センター
- 大村直 1984 「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第17号 史館同人
- 岡林孝作 1992 「第8章 第4節 長野県北部における横穴式石室の編年と系譜」『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報  
告書—』長野県更埴市教育委員会
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 尾崎喜左雄 1977 「横穴式石室編年への一考察—主として石材の取り扱い方について—」『上野国の古墳と文化』  
尾崎先生著書刊行会
- 小瀬康行 1989 「古墳時代ガラス勾玉の成形法について—内部気泡の観察を中心として—」『考古学雑誌』  
第75巻第1号 日本考古学会
- 小山田宏一 1996 「近畿地方歴年代の再整理」『考古学と実年代』第I分冊 第40回埋蔵文化財財研究集会発表要旨集  
埋蔵文化財研究会
- 菊池芳朗 1990 「V 考察」『大年寺山横穴群』宮城県教育委員会・仙台市教育委員会
- 菊池芳朗 1993 「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第7号 福島県立博物館
- 桐原健 1998 「科野に観る金環出土古墳のあり方」『考古学資料館紀要』第14輯 国学院大学考古学資料館
- 群馬県古墳時代研究会 1998 『群馬県内の横穴式石室I(西毛編)』
- 近藤義郎・北条芳隆ほか 1987 『岡山県総社市 緑山古墳群』総社市文化振興財団
- 笹沢弘 1982 「県町遺跡」『長野県史』考古資料編(2) 主要遺跡(北・東信)
- 塩入秀敏ほか 1995 『上田小県郡誌』第6巻 歴史篇上(1) 考古
- 島田恵子 1996 「第3章 中原2号古墳」『幸神古墳群』長野県南佐久郡白田町教育委員会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『榎原考古学研究所論集』第8号 榎原考古学研究所
- 関邦一ほか 1998 「邑楽町松本23号古墳出土の象嵌装大刀」『研究紀要』15 (勲)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関義則 1986 「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
- 滝瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 滝瀬芳之 1986 「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』No.266 ニュー・サイエンス社
- 瀧瀬芳之 1991 「埼玉県の拵付大刀」『研究紀要』第8号 (勲)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之・野中仁 1995 「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『研究紀要』第12号  
(勲)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中正治郎 1998 「第2章 第2節 8 古代の土器」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その1—』(勲)長野県埋  
蔵文化財センター
- 田中広明 1993 「補強帯のある大甕の生産と流通」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 田中広明 1994 「『国造』の経済圏と流通—「武蔵」の「クニ」を形作るもの—」『古代王権と交流2 古代東国の民衆と社会』  
名著出版

- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 冨沢一明 1996 「佐久平における古墳時代の土器編年試案」『長野県考古学会誌』79号 長野県考古学会
- 中村浩 1981 『和泉陶器窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』 柏書房
- 新納泉 1984 「関東地方における前方後円墳の終末問題」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 新納泉 1987 「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号
- 新納泉 1991 「武器」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅲ 副葬品 雄山閣
- 西山克己・花岡弘 1995 「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略として—」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 西山克己 1996 「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」『長野県の考古学』(助長野県埋蔵文化財センター)
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌—刀装具について—」『考古学雑誌』第72巻 第1号 日本考古学会
- 西山要一・泉森皎ほか 1992 『本郷大塚古墳』 須坂市本郷大塚古墳発掘調査団
- 橋本博文 1986 「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』No.266 ニュー・サイエンス社
- 橋本博文 1993 「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 土生田純之 1991 『日本横穴式石室の系譜』 学生社
- 土生田純之 1997 「信濃における横穴式石室の受容」『信濃』第49巻第4・5号 信濃史学会
- 町田章 1987 「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会
- 三宅博士・松本岩雄 1987 「第I部 第3章 第5節 1号墳出土遺物 武器」『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会
- 宮下知良 1984 「須恵器瓶類について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 森泰通 1995 『京ヶ峰1号墳・谷下古墳』 豊田市教育委員会
- 柳澤亮ほか 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』(助長野県埋蔵文化財センター)
- 柳澤亮 1998 「第3章 第1節 国分寺周辺遺跡群 古墳時代中・後期の土器」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』(助長野県埋蔵文化財センター)
- 横田義章 1985 「古墳時代の象嵌文様—九州の諸例紹介を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』10
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編(2) 主要遺跡(北・東信)
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編(4) 遺構・遺物

## 第6章 宮平遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

宮平遺跡は上田市の北部、東太郎山南麓の山裾に所在する古墳時代後期から中世にかけての複合遺跡である。東太郎山の南麓は幾筋かの尾根が伸び、間の谷間を河川が南流し小規模の扇状地を形成する。宮平遺跡はこの谷間に営まれた遺跡で、矢出沢川右岸の河岸段丘状の扇状地上に立地する。遺跡の立地する谷間は、遺跡北方の金剛寺集落から徐々に広がり、尾根が切れる遺跡南方の長島集落付近で他からの河川を集め、比較的広い複合扇状地を形成する。遺跡付近では150m程の幅となり、矢出沢川に張り出すように平坦面が広がる。遺跡は矢出沢川の段丘崖上直ぐから西側の尾根裾まで全体に広がっている。調査地点は上田市住吉字宮平965ほかで、金剛寺集落と長島集落の間にある。標高は541～549mを測る。

周辺の主な遺跡を概観すると、矢出沢川の上流に縄文・平安時代の上テ村遺跡と縄文時代の蔵王遺跡が存在する。下流方向に目を転じれば、長島集落の扇状地上に熱泰寺遺跡があり縄文時代の土器や石器が採集されている。また、黄金沢扇状地の末端に位置する金井裏遺跡では、国道18号バイパス工事に伴って発掘調査が実施され、弥生時代後期の竪穴住居跡などが検出された。古墳は矢出沢川左岸の横山丘陵の稜線上に、横穴式石室を内部主体とする後期古墳の陣馬塚古墳がある（本書第5章）。宮平遺跡西側の尾根斜面にも古墳時代後期～終末期古墳と考えられる熱泰寺古墳が存在したとされるが、現在は湮滅し所在不明である。また、遺跡南方の染屋台地に広がる染屋台条里遺跡でも弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が発見されている。千曲川右岸の古墳時代から平安時代にかけての遺跡としては、神川左岸の第二段丘上の神林遺跡・太田遺跡・林之郷遺跡、信濃国分寺周辺遺跡などが知られている。

上田市の千曲川右岸地域では、神川左岸の遺跡群と信濃国分寺周辺以外まとまった発掘調査は行われておらず、実態が明らかになっていない部分が多い。こうした状況の中で、宮平遺跡で古墳時代後期から平安時代の集落のほぼ全容を明らかにできたことは意義深いことであろう。

#### 2 調査の経過

宮平遺跡は当初周知されておらず、上田市文化財分布図にも登録されていなかった。平成5年、染屋台条里遺跡の調査中、地元住民から当該地において土器などが拾われたとの情報が寄せられ、現地踏査したところ土器類が採集されたのを受け、県教委が遺跡確認のための試掘調査を実施した。その結果、古墳時代から平安時代にかけての住居跡などが検出され、上田インター予定地内全域に遺跡が広がっていることが確認された。工事着工がせまっていることから、平成5年度に工事用道路と橋脚工事エリアの調査を実施し、翌6年度に残りの部分を調査することとなった。実際には用地の残件などにより平成7年度にも一部調査を実施した。調査面積は延べ16100㎡である。

第一次調査は平成5年8月18日～11月16日に実施され、遺構集中部の一部と矢出沢川低位段丘面に向かう緩斜面で重複し合う遺構群を調査した。古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡が中心で、床面直上に炭化材を良好に遺す焼失住居や中世の火葬施設と考えられる土坑なども検出された。

第二次調査は平成6年4月11日～12月16日に行われた。遺跡範囲の殆どを調査し、多くの遺構が検出された。遺構は矢出沢川の崖線近くのやや高まった部分にまとまりが見られ、北西側の丘陵裾側では稀薄となることが明らかになった。昨年は明確でなかった掘立柱建物なども検出され、また、人骨を伴う土壇

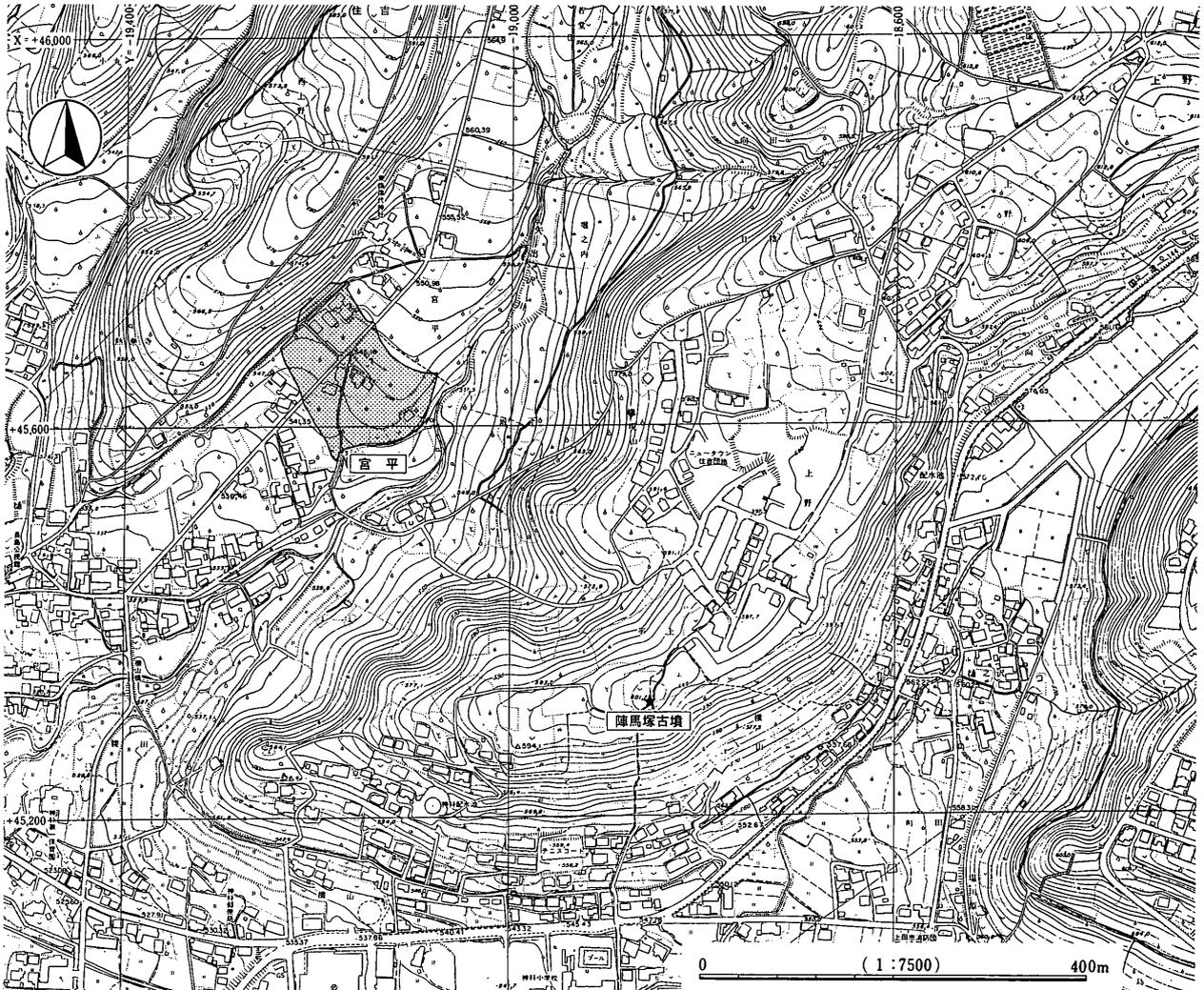


図79 調査範囲

墓も数基検出された。

第三次調査は平成7年4月10日～5月19日に残件の調査を実施した。これにより宮平遺跡の主要部分は調査されたこととなる。

#### 基本層序

I層は現耕作土で、締まりなくぼそぼその黒色土。II・III層は黒褐色土から暗褐色土で黄褐色粒子を多量に混入する。本来の遺物包含層であるが、削平や耕作などにより残りが悪く、遺存している範囲でも分層できない部分が多い。IV層は黄褐色土で、拳大程度の礫を多量に含む。遺構は本層上面で検出した。

## 第2節 遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居・竪穴状遺構86軒、掘立柱建物44棟、土塋墓を含む土坑およびピット1079基、溝3条などである。竪穴住居・竪穴状遺構は中世の3軒を除き、古墳時代後期後半から平安時代に属する。掘立柱建物と土坑・ピットは中世に属するものを相当数含むと思われる。遺構は調査範囲全域に展開するが、矢出沢川段丘崖に近いやや高位となる調査区中央部に集中がみられ、縁辺部では稀薄となる。

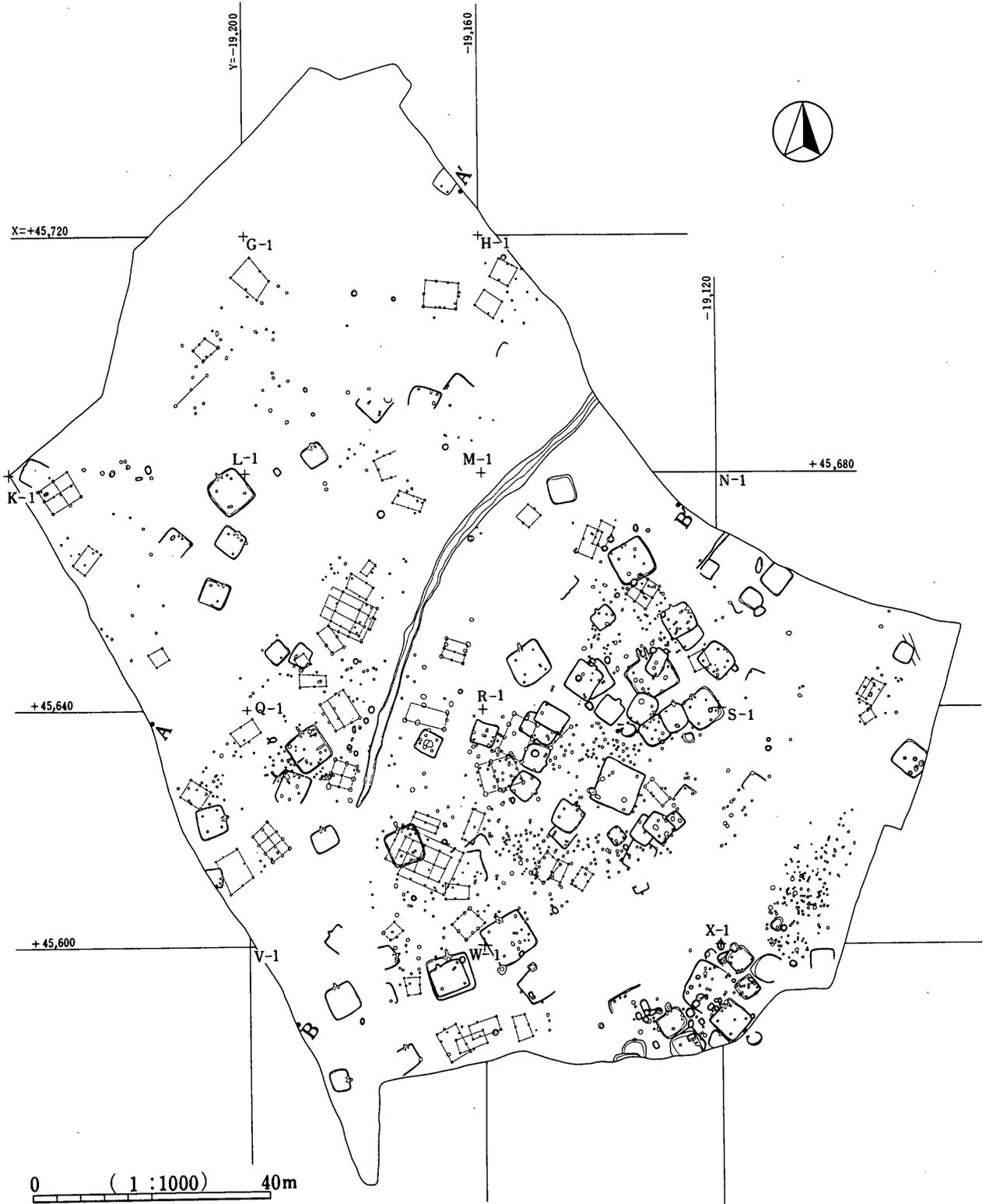


図80 遺構全体図

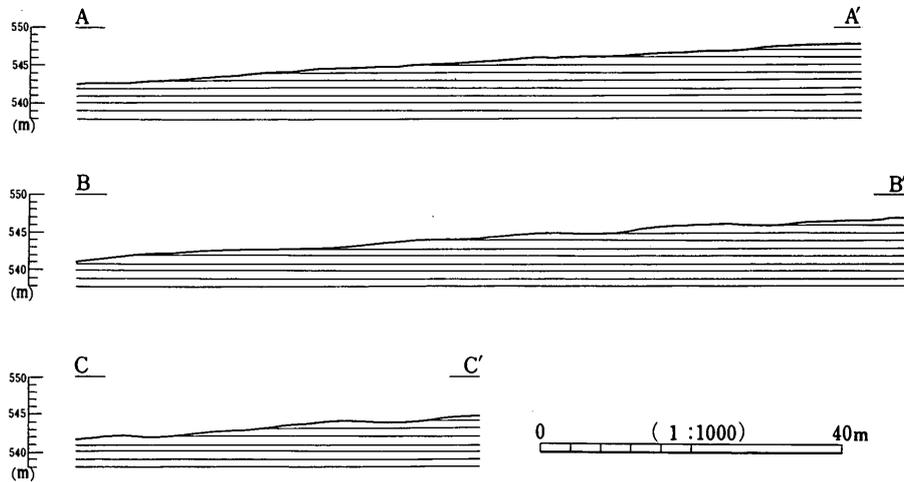


図81 検出面地形

なお、遺跡は東西を矢出沢川と丘陵で画されており、南北方向は調査区外に幾分広がるが、集落域のほぼ全容が捉えられたといえよう（図80・82～85）。

なお、以下の土器の記述について、非ロクロ整形の内（両）面黒色処理土師器を内（両）黒土師器、ロクロ整形の内（両）面黒色処理土師器を内（両）面黒色土器と表記する。巻末の観察表と若干表現が違うので注意されたい。

### 1 竪穴住居跡・竪穴状遺構

#### 1号竪穴住居跡（図84・147） 位置 N-11・12

**検出** IV層上面で検出。北壁の一部は調査区外に広がる。覆土は礫混じりの暗褐色土である。

**構造** 方形の平面形状で、軸方向はN-39°-Eを示す。床面規模は4.4×4.2m。床面は中央部は比較的堅緻だがそれ以外では明確でなく、床面上に礫が露出する。カマドは検出されないが、調査区外の北壁に付設されているかもしれない。柱穴も検出されなかった。

**遺物** 3は須恵器坏。4はロクロ土師器坏。5～7は内面黒色土器。5は坏で内面に暗文風の太いヘラミガキ、6・7は埴。坏はいずれも底部回転糸切り不調整。8は灰釉陶器皿。9は須恵器鉢。他に緑釉陶器皿の破片が検出された。土器以外の遺物としては、瓦片（1・2）、帯金具（28）が出土している。すべて覆土出土である。

**時期** 土器の様相から10世紀前半に位置付ける。1・2は混入品。

#### 2号竪穴住居跡（図84・147） 位置 N-11

**検出** IV層上面で検出。1号土坑に切られる。また、81号住居とも重複するはずであるが調査では切り合いとしては確認できなかった。覆土は礫を多く含んだ暗褐色土。

**構造** 全体に丸みをおびた方形の平面形を呈する。床面規模は3.4×2.4mで、軸方向はN-34°-Eを示す。床面・壁面とも礫が混じり、明確ではない。カマド・柱穴とも検出されなかった。

**遺物** 1は内黒土師器坏、2は須恵器高台付坏。いずれも覆土出土。

**時期** 7世紀後葉から8世紀前葉か。

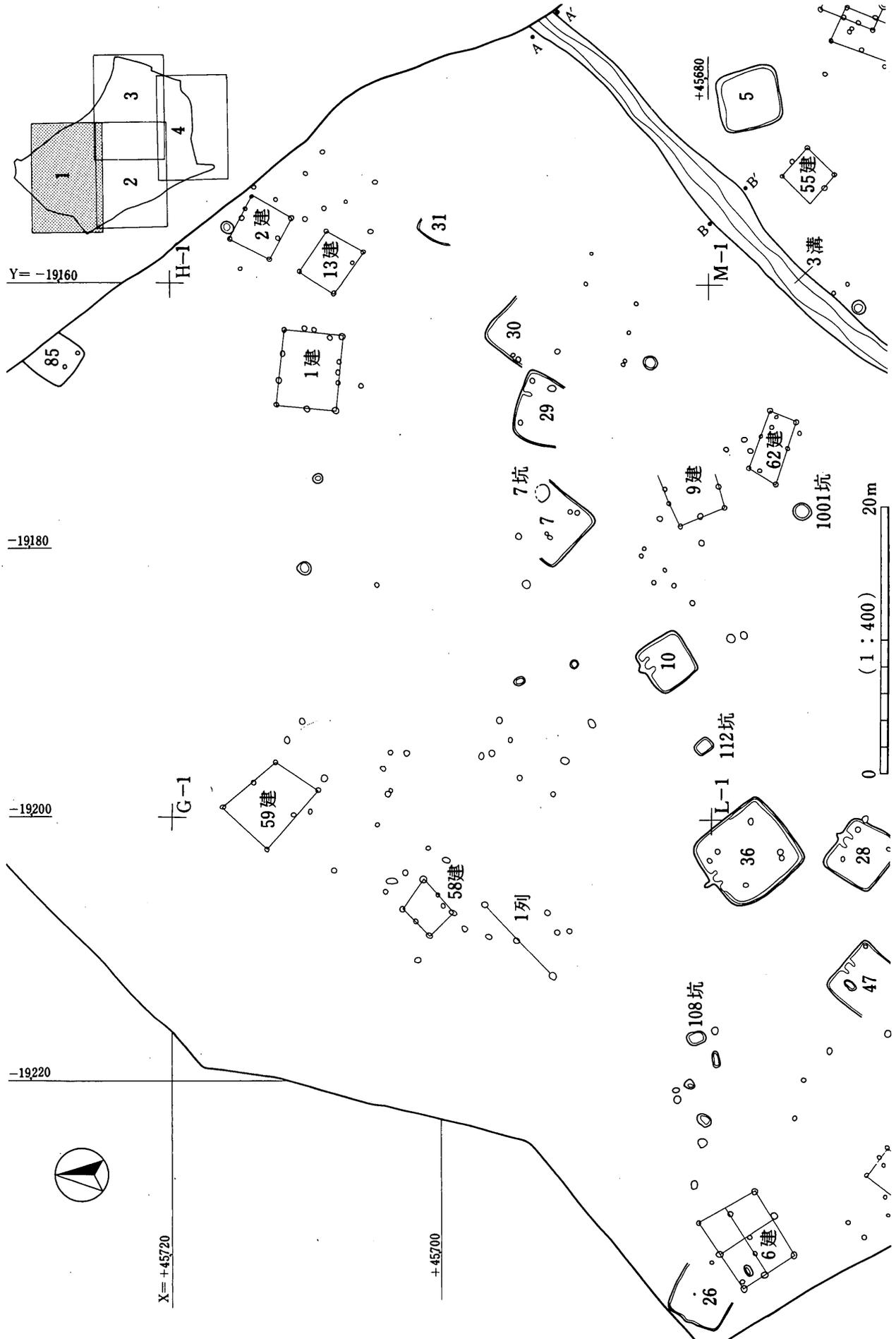


图82 遺構配置图1 (1:400)

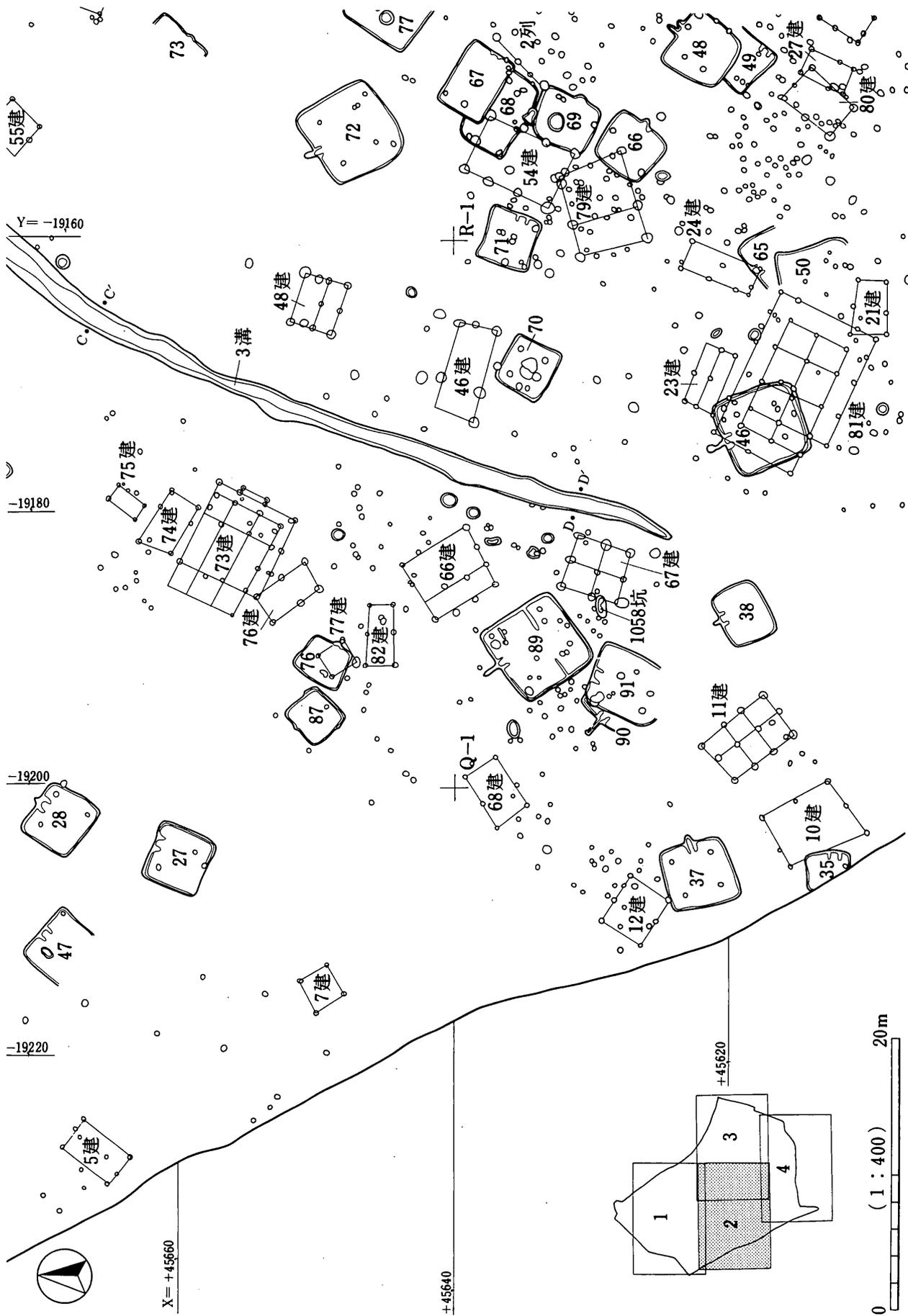


図83 遺構配置図2 (1:400)

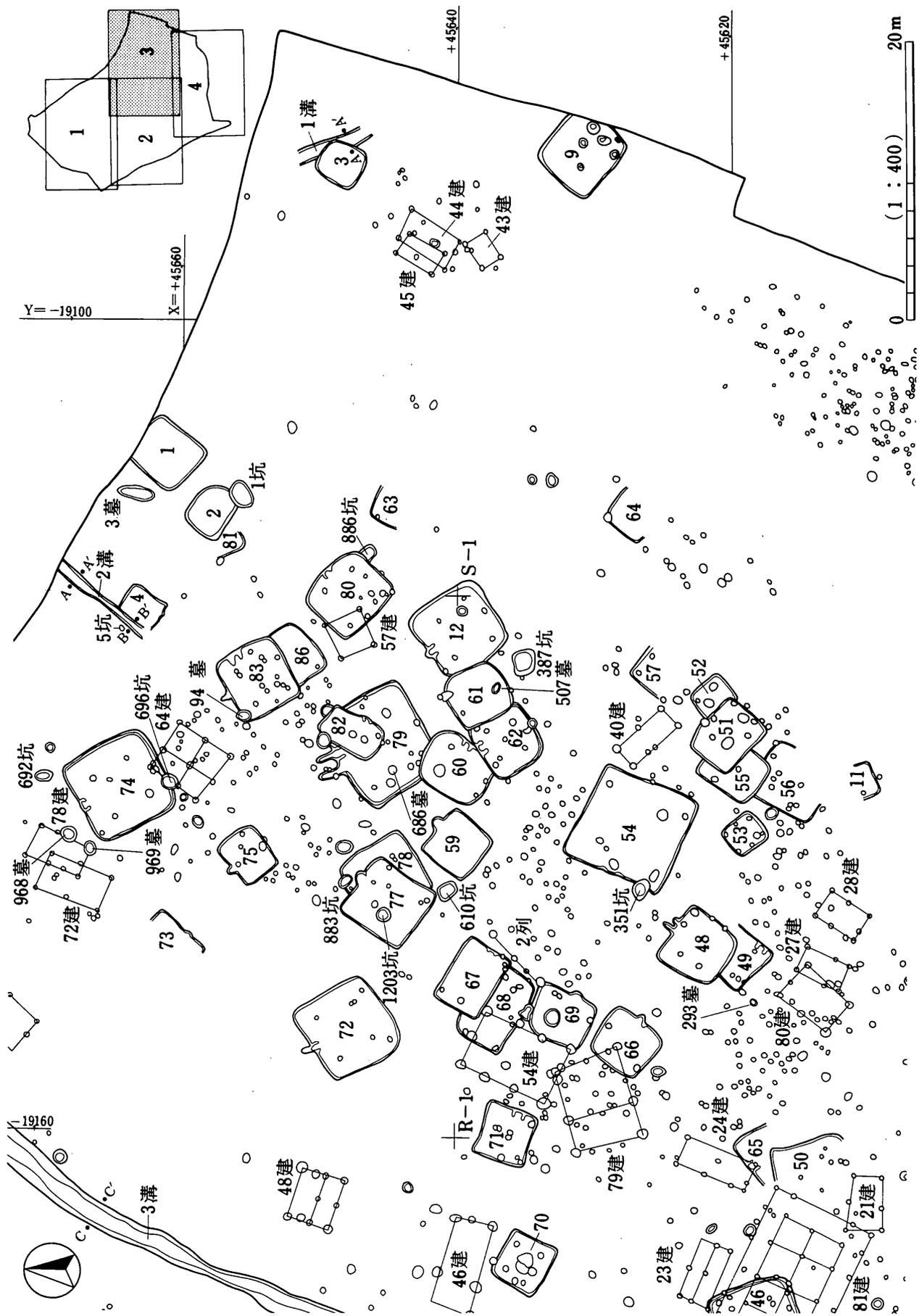


图84 遺構配置图3 (1:400)

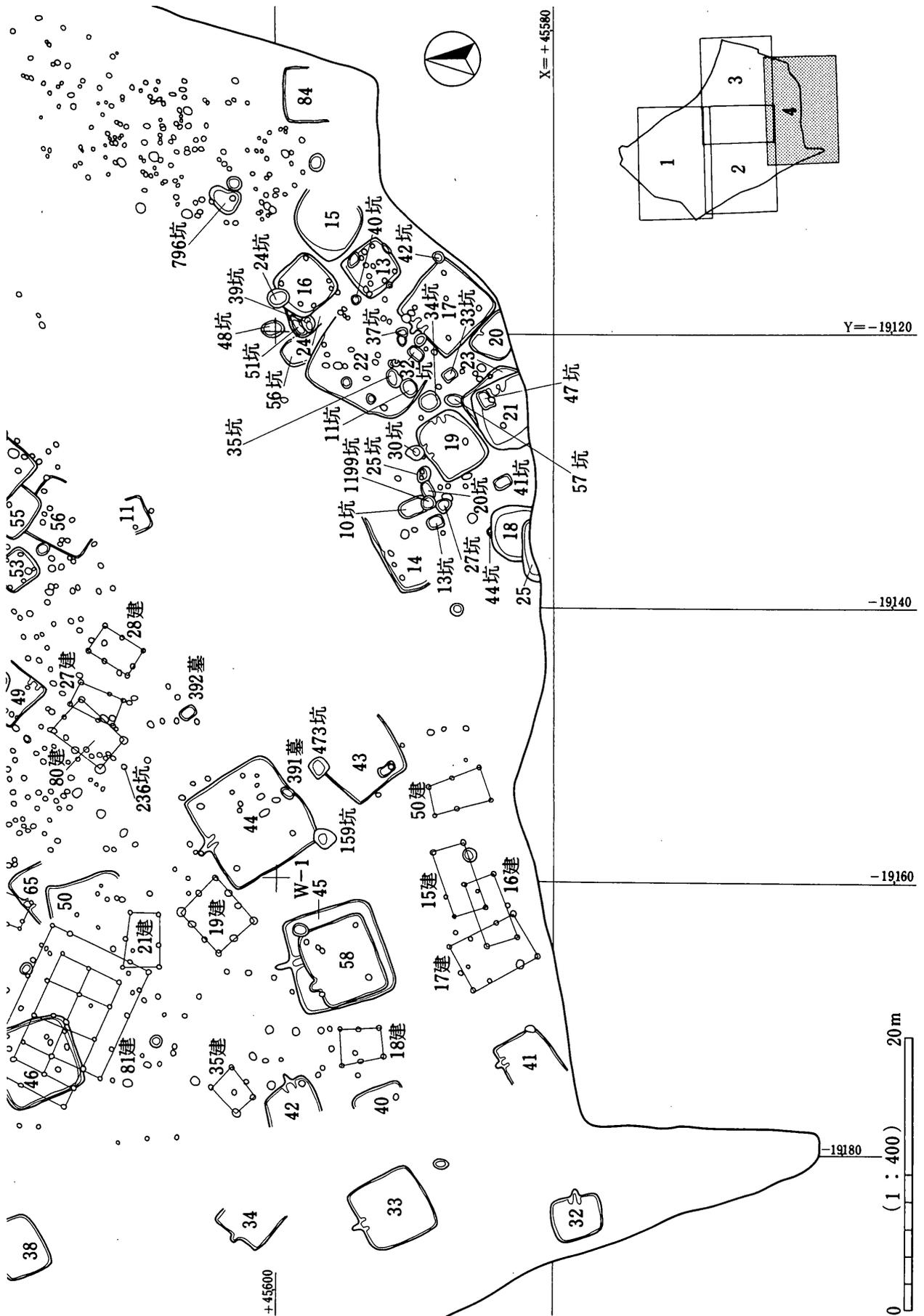


图85 遺構配置図4 (1:400)

3号竪穴住居跡 (図86・147) 位置 N-19・20

検出 矢出沢川に向かった緩斜面の調査区北東隅に位置する。IV層上面で検出し、1号溝を切る。

構造 平面形状は丸みをおびた方形で、床面規模は3.2×2.8mを測る。軸線はN-24°—E。床面はそれほど明確ではない。北東隅付近に焼土がみられたがカマド施設とは思えない。カマド・柱穴とも未検出である。焼土周辺から土器類が出土した。

遺物 1～3は内面黒色土器。1・2は立上がり之急で内彎する体部の坏。3は須恵器高台付坏を模倣した器形。いずれも覆土出土である。

時期 8世紀後半とする。

4号竪穴住居跡 (図84・147) 位置 M-10・15

検出 IV層上面で検出。2号溝に切られる。覆土は礫混じりの褐色土。

構造 西側を2号溝に切られるが、床面規模3.0×2.1m以上を測る方形を呈する。軸線はN-15°—Wを示す。床面はそれほど明確ではないが、壁面は比較的明瞭であった。北西隅に焼土があり、その周辺に遺物が集中していた。カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物 1は底径が小さく体部の開きが大きい内面黒色土器坏。2は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。4は須恵器四耳壺。すべて覆土出土。

時期 9世紀前半と考えられる。3は混入品。

5号竪穴住居跡 (図82・147) 位置 M-2・3

検出 IV層上面で検出した。切り合いはない。覆土は上部が礫混じりの暗褐色土で下部は同じく礫混じりの黒色土である。

構造 平面形状は北西隅がやや内側に入る方形で、床面規模は4.0×3.9/4.2m。軸線はN-15°—Wを示す。床面は堅固に締まっている。カマド・柱穴は未検出。南東隅に僅かに焼土が見られた。

遺物 3は須恵器高台付坏。4～6は内黒土師器坏。7は土師器坏。8は深く丸い体部をもつ小形の内黒土師器鉢。9は口縁部が外反する長胴甕で、最大径は口縁部にある。

時期 7世紀中葉～後葉とする。1・2は混入品。2は金属塊模倣か。

7号竪穴住居跡 (図86・147) 位置 G-18・19

検出 IV層上面で検出。7号土坑に切られる。覆土は床面直上の僅かが残るのみで、小礫を含む堅く締まった黒褐色土である。

構造 南壁と西壁の一部を検出したのみだが、隅が直となる方形の平面形を呈する。床面規模は確認された範囲で4.7m程度×3.8m以上。軸線はN-40°—E。ピットは2基づつが近接して検出され、P1とP2は支柱穴か。カマドは未検出。

遺物 出土遺物は少なく、図化できたのは底部回転糸切り不調整の須恵器坏底部2点(1・2)と内面黒色土器坏底部1点(3)のみである。いずれも覆土から出土した。

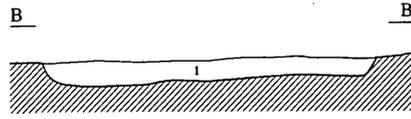
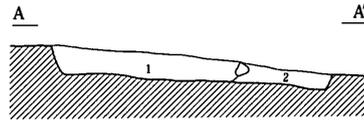
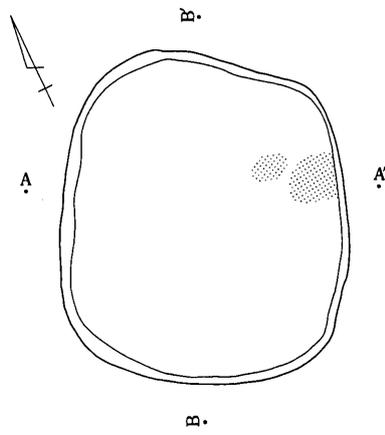
時期 9世紀前半とする。

9号竪穴住居跡 (図87・148) 位置 S-4・5・9・10

検出 調査区西端の矢出沢川崖線直上に位置する。検出はIV層上面。覆土は礫混じりの暗褐色土。

構造 西壁の立ち上がりは不明確だが、平面形状は床面規模5.4m程度×4.7mの方形を呈する。軸線は

3住

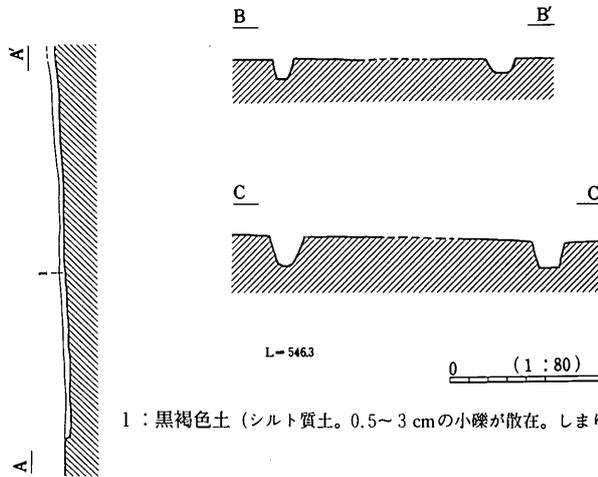
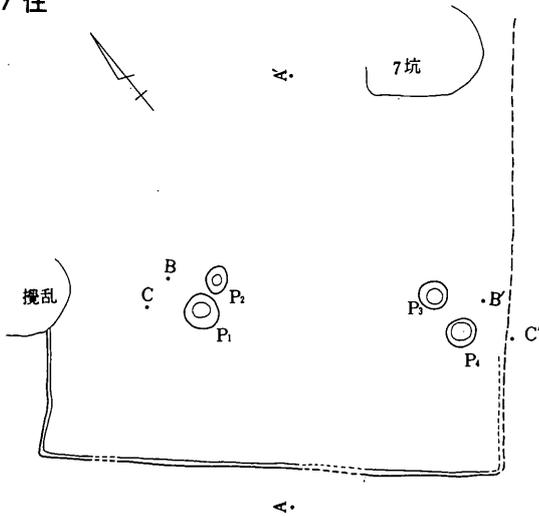


L-5453

0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。礫混、しまり・粘性強い。炭僅か)
- 2: 暗褐色土 (シルト。礫混。粘性少なくもろい。灰・焼土・炭多い)

7住

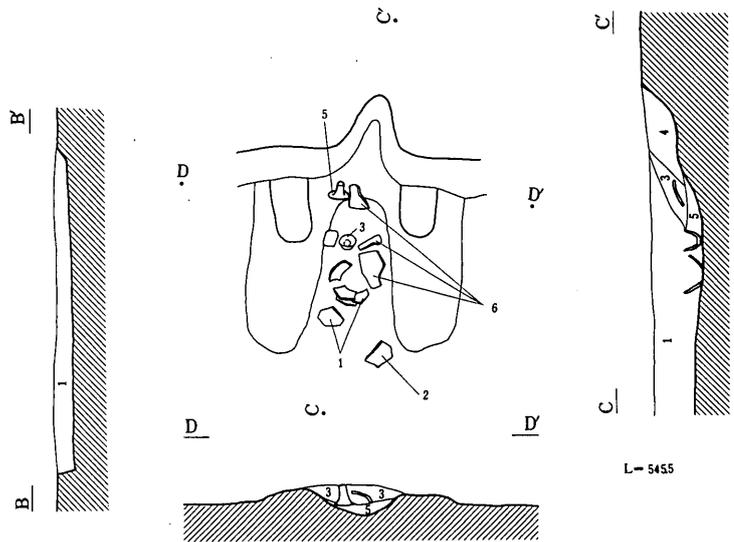
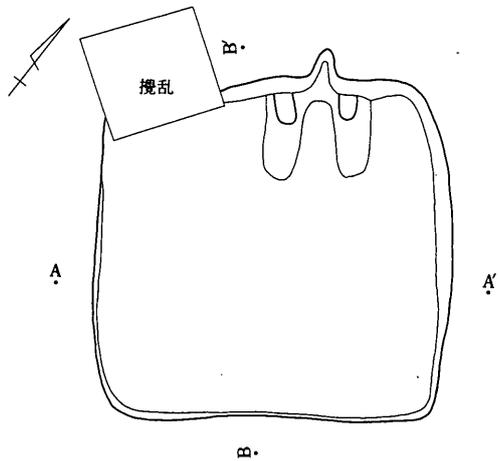


L-5463

0 (1:80) 2m

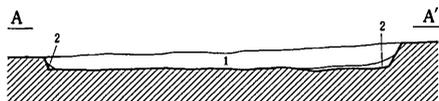
- 1: 黒褐色土 (シルト質土。0.5~3 cmの小礫が散在。しまり強い)

10住



L-5455

0 (1:40) 1m



0 (1:80) 2m

- 1: 暗褐色土 (覆土。シルト質。2~5 cmの礫散在)
- 2: にぶい黄褐色土 (覆土。粘土質シルト。地山土を多く含む。しまりよい)
- 3: 暗褐色土 (カマド覆土。粘土質シルト。礫混。炭・焼土。しまりよく、粘性あり)
- 4: 褐色土 (カマド覆土。粘土質シルト。しまり悪く、軟らかい。粘性あり。焼土・炭多)
- 5: 橙褐色土 (カマド覆土。粘土質シルト。焼土の堆積)

図86 3号・7号・10号竪穴住居跡

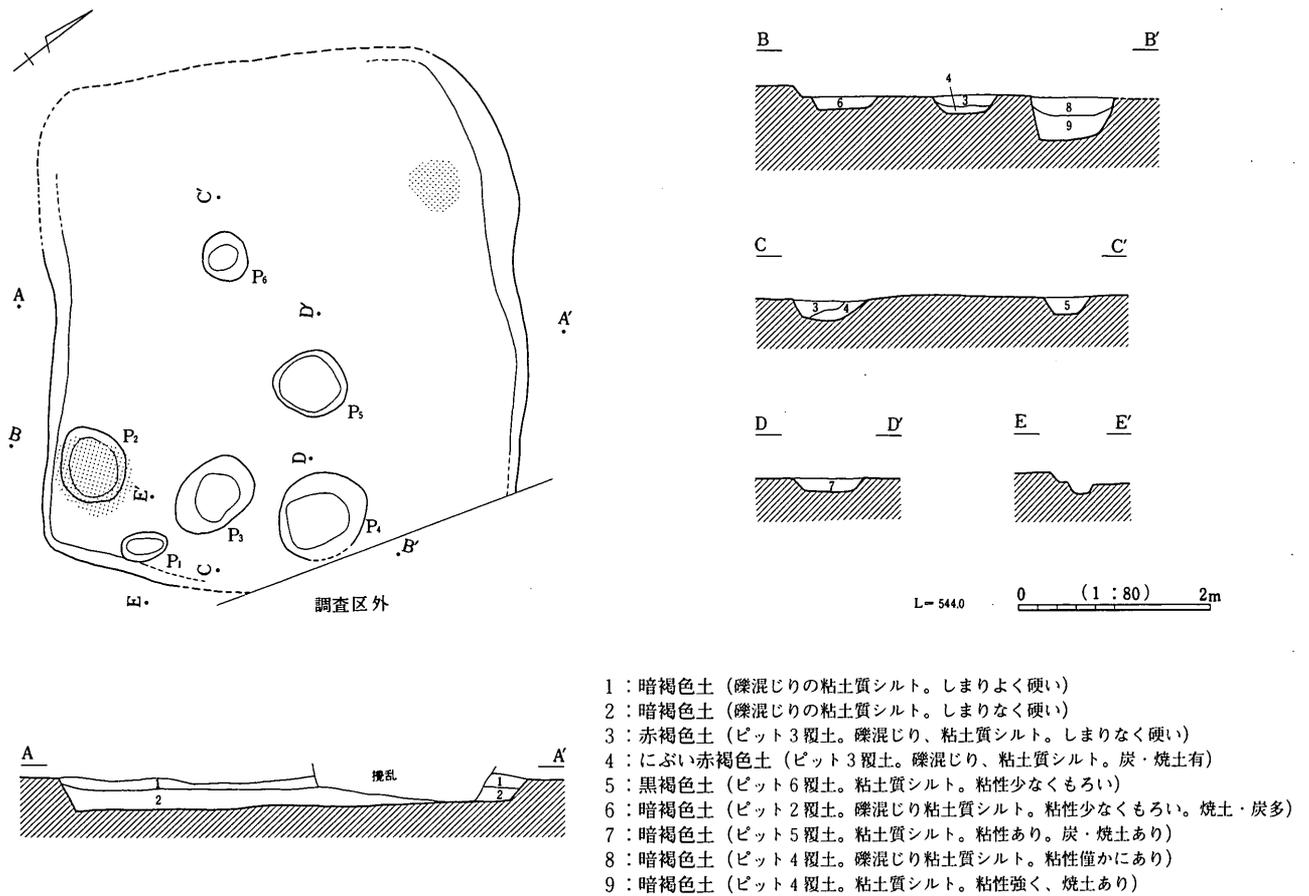


図87 9号竪穴住居跡

N—53° —Wを示す。床面は住居中央部の一部が貼床状となり、南東隅に焼土が見られたがカマドとは考えにくい。床面には直径70cmから1 m程の土坑状のピットが検出され、内部からは土器や鉄滓等が出土したが性格は不明。明確な柱穴はない。

**分析** 床面で検出した炭化材1点の樹種同定を行ったところ、クヌギ節であった。

**遺物** 覆土や床面から多くの遺物が出土した。床面に限定されるものは14・19～21であるが、床面出土の破片と覆土下部の破片、さらにピット出土の破片が接合した例も多い。土師器はすべてロクロ整形である。1は坏、7・10は埴である。2～6は内面黒色土器坏。8・9・12・13～17は内面黒色土器埴、11は両面黒色土器埴。埴は大形で体部が深いもの（8・9・13）・浅いもの（7・14）、小形で体部が浅いもの（15）がみられる。19～23は内面黒色土器高台付皿で、22の口縁端部は面取り状をなす。23は長い脚部をもつ。18・24は灰釉陶器で釉ハケ塗り・三日月高台、24は高台付皿で、光ヶ丘1号窯式後半段階のものだろう。18は埴か。25～27はロクロ整形の北信型の甕および小形甕で、26の口縁部はやや内彎し、27の頸部のくびれはごく弱い。また、25・27の口唇部は面取り状をなす。29は両面黒色土器鉢、30は内面黒色土器の片口鉢。31は台付鉢（盤）で、脚部には方形透し孔があり、口縁端部は直立するシャープな面取り状をなしている。体部は深めといえよう。32は両面黒色土器の小形壺。28は須恵器甕である。14・19～21が床面出土、土器以外の遺物としては、覆土から瓦片（3～11）、砥石（49）、刀破片（5）、床面で石皿（35）が出土した。

**時期** 10世紀前半と考えられる。

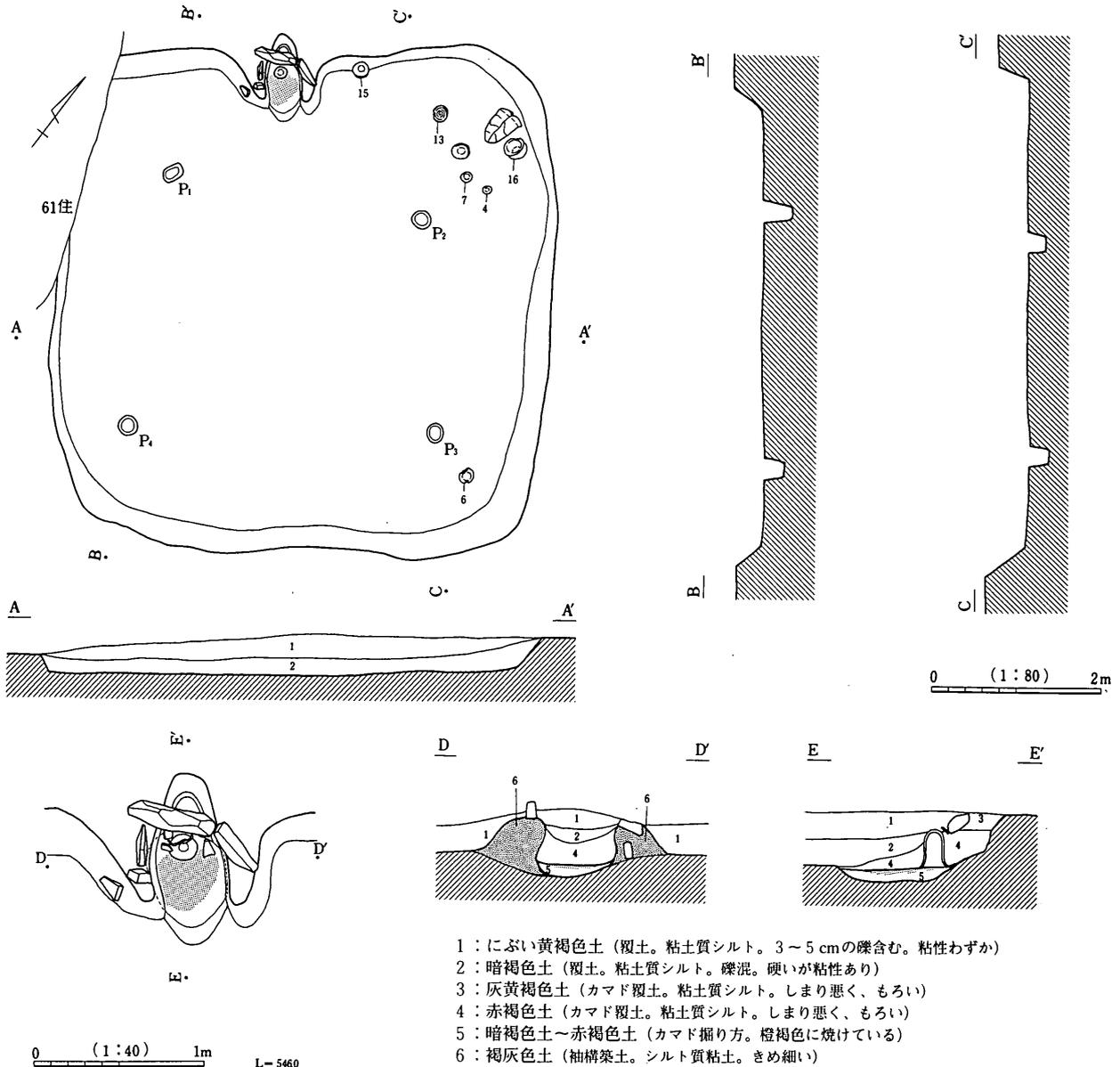


図88 12号竖穴住居跡

10号竖穴住居跡 (図86・149) 位置 G-22

**検出** IV層上面で検出。北西隅を攪乱される。覆土は礫を少量含む暗褐色土・にぶい黄褐色土。  
**構造** 平面形は隅が丸みをおびた方形で、床面規模は3.3×3.5m。軸線はN-33°-W。カマドは北壁中央東寄りに構築される。袖基底部と火床部が残るのみで遺存状態は悪い。カマド内からは土製支脚等が出土したが原位置は保っていない。柱穴は検出されなかった。  
**遺物** 1・2は内黒土師器杯。3は土師器鉢。4は小形甕。5はカマド内出土の土製支脚。6は長胴甕でカマド内出土、胴部は縦位のヘラケズリが施される。1～4は覆土出土。  
**時期** 7世紀中葉から後葉とする。

11号竖穴住居跡 (図84) 位置 R-19

**検出** IV層上面で検出。北半部は攪乱され南半部のみ遺存。覆土は小礫を含む暗褐色土。  
**構造** 平面形は方形で、床面規模は2.4×1.5m以上で、軸線はN-18°-Eを示す。床面は明確でなく、

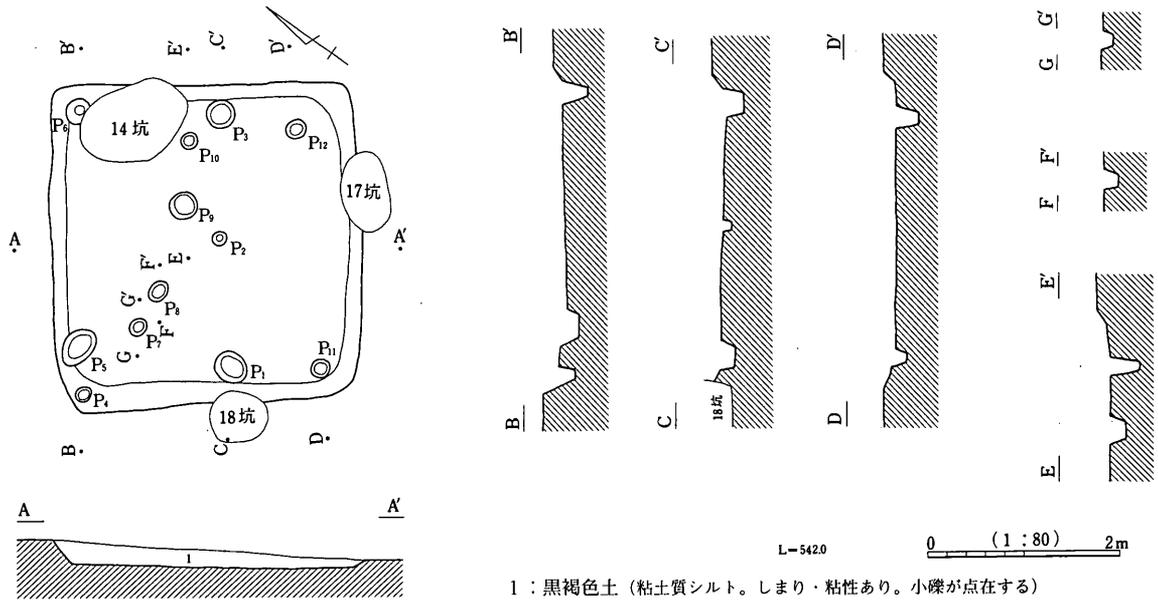


図89 13号竪穴住居跡

カマドは未検出。柱穴は1本確認された。

遺物 遺物は少なく、図示できるものはないが、底部回転糸切り不調整の内面黒色土器片、無高台のロクロ整形土師器小皿片、須恵器甕片が覆土から検出されている。

時期 土師器小皿の形態から、11世紀と考えておきたい。

12号竪穴住居跡 (図88・149) 位置 M-25、N-21、R-5、S-1

検出 IV層上面で検出。61号住居に切られる。覆土は2層に分層され、上層は礫混じりの鈍い黄褐色土、下部は礫混じりの暗褐色土。

構造 方形の平面形状で、床面規模は5.3×5.5mを測る。軸線はN-36°-W。床面は貼床ではないが堅緻で明確である。カマドは北壁中央に位置し、袖は角礫と粘質土で構築し天井部にも角礫を用いている。火床には支脚として使用したものか甕が伏せられていた。カマド右側から右隅にかけての床面にまわって土器が出土した。柱穴はP1～P4の4基を検出。

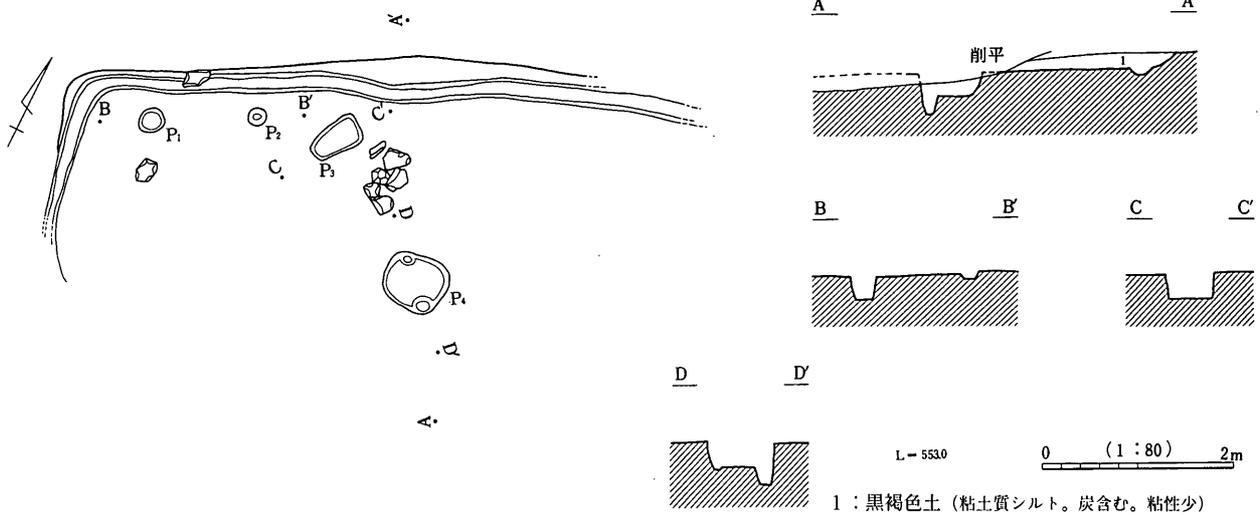
遺物 1～3はかえりのない古代タイプの須恵器坏蓋。4・5は須恵器坏。6～8は半球形の体部をもつ内黒土師器坏だが、7は平底気味の底部である。9・10は小形の鉢。11は須恵器小形短頸壺。12は半球形の坏部をもつ高坏。13は耳をもたない須恵器提瓶。14は丸い体部に口縁が内彎する器形の須恵器鉢で、内面底部に放射状の打ち欠き・剥ぎ取りがなされており、搦鉢に転用したものだろう。器形は金属器の模倣か。15は内黒土師器鉢。16・17は丸い胴部の甕。18～21は長胴甕で、いずれも外面縦へラケズリを施し、最大径は口縁部にある。18は小形である。4・6・7・13・16・21は床面出土である。土器以外の遺物は、土製紡錘車(4)、砥石(39)が覆土から出土している。

時期 7世紀後葉～8世紀前葉と考えられる。

13号竪穴住居跡 (図89) 位置 X-1・6

検出 矢出沢川に面した緩斜面に位置し、IV層上面で検出。14・17・18号土坑に切られる。覆土は小礫が点在する黒色土。

14住



16住

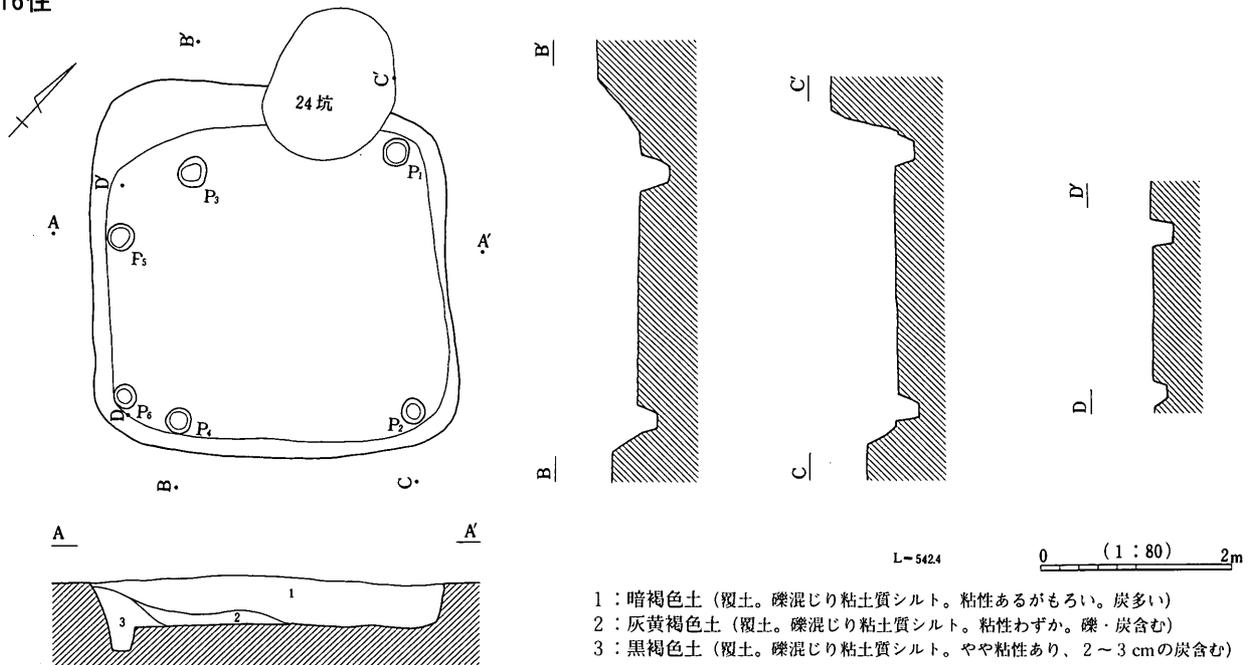


図90 14号・16号竪穴住居跡

**構造** 床面規模3.0×2.9mの方形を呈し、軸線はN—54°—Eを示す。P5・P6・P11・P12の4本が主柱穴と考えられ、P1・P3も柱穴に関係するか。この他にも4基のピットが検出された。カマドや炉は存在しない。

**遺物** 遺物は出土していない。

**時期** 構造が53号竪穴に類似することから、中世に属するものと考えておきたい。

14号竪穴住居跡 (図90) 位置 W—3・4・8・9

**検出** 13号住居同様に矢出沢川に面した緩斜面にある。IV層上面検出。黒褐色土の覆土は僅かが残存するのみ。

**構造** 斜面上側となる北壁と西壁の一部が検出されたただだが、比較的大形の方形の平面形を呈すると

思われる。残存する床面規模は6.7×1.4m以上。軸線はN—32°—W。検出範囲では壁に沿って幅10~20cm、深さ10cm程の周溝が廻る。4基のピットが検出されたが柱穴か否かは不明。カマド・炉は不明。

**遺物** 遺物は少なく、図示できるものはないが、覆土から底部回転糸切りの須恵器坏片、内面黒色土器片、ロクロ整形の土師器小形甕片が出土している。

**時期** 9世紀か。

15号竪穴住居跡 (図90・150) 位置 X—1・2

**検出** 矢出沢川に面した緩斜面に位置し、IV層上面で検出。覆土は砂質の黒褐色土。

**構造** 丸みをおびた方形の平面形を呈するが、東壁は不明で、検出された床面や立ち上がりも不明瞭。床面規模は4.6×3.8m程度を測り、軸線はN—30°—Wを示す。カマド・柱穴などは検出されなかった。

**遺物** 1・2は内黒土師器坏。2は平底気味の底部からやや内彎する体部が立ち上がる。3は小形の内黒土師器鉢。いずれも覆土出土。

**時期** 7世紀後葉~8世紀前葉とする。

16号竪穴住居跡 (図90) 位置 X—1

**検出** 15号住居の北側に近接し、24号土坑に切られる。24号住居とも重なるが切り合いは不明。覆土は礫混じりの暗褐色土で、西半部には灰黄褐色土や黒褐色土が見られる。

**構造** 方形の平面形で、床面規模は3.5×3.3mを測る。軸線はN—36°—W。柱穴は6本検出され、西側のP3・P4の2本は壁下よりやや内側に入り、壁下にも2本の柱穴が穿たれている。カマドはない。

**遺物** 土器類はすべて小片で図示できるものはないが、竜泉窯製品と思われる青磁蓮弁文碗、須恵質播鉢、土師質小皿が覆土から出土した。他に滑石製品(53)、北宋銭(31・32)が検出されている。

**時期** 出土遺物から、中世と考えておきたい。おそらく13世紀以降。

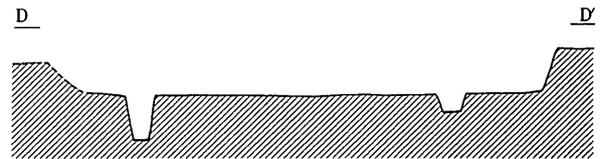
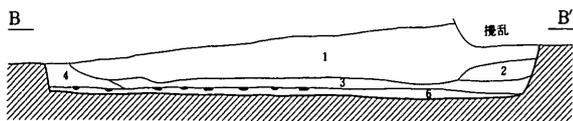
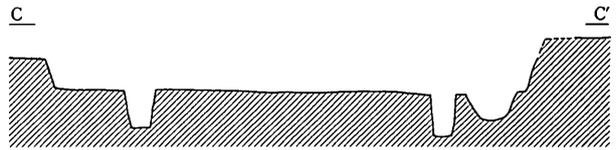
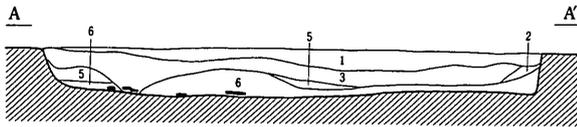
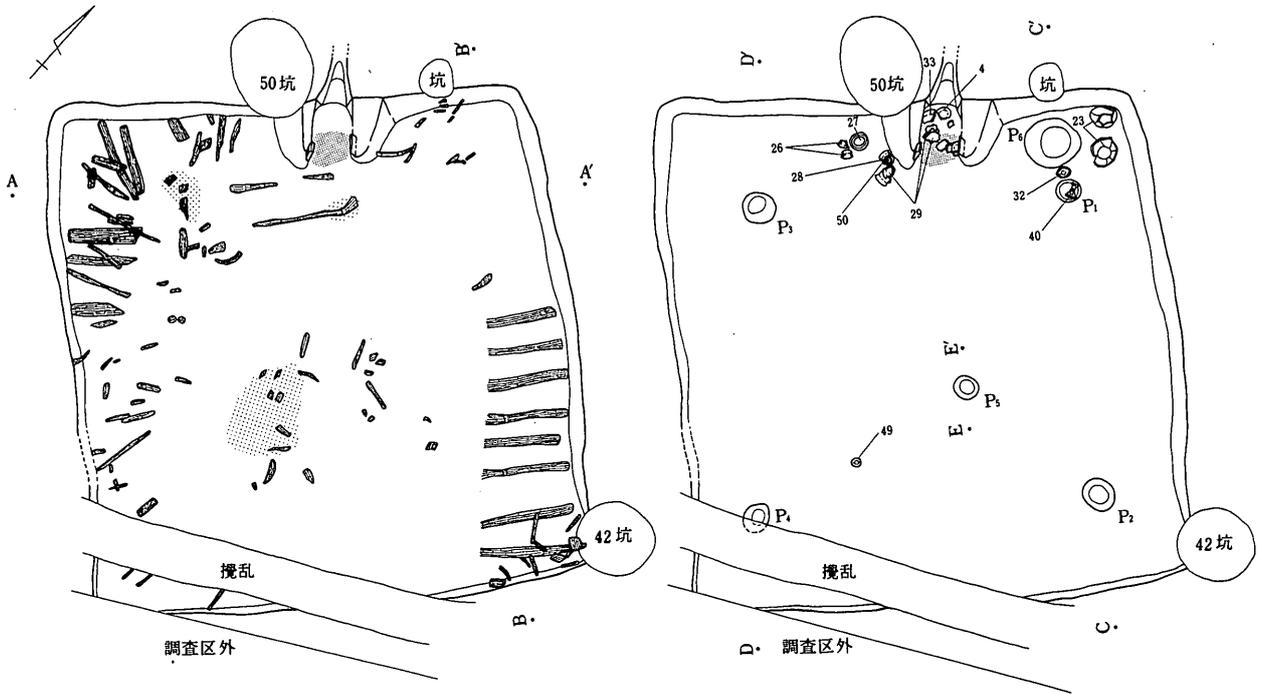
17号竪穴住居跡 (図91・150~152) 位置 W—10、X—6

**検出** 矢出沢川の低位段丘面に向かった緩斜面に位置する。42・50号土坑に切られる。

**構造** ほぼ正方形の形状を呈し、床面規模は5.0×5.1m。軸線はN—42°—Wを示す。カマドは北壁中央に地山と類似した黄褐色土で構築されるが、天井部などは崩落している。カマド東側には直径50cm程の貯蔵穴があり、カマド・貯蔵穴周辺から遺物が多数出土した。P1~P4の4本が支柱穴で、住居中央部にもピットが1基検出された。床面上には粘質の焼土ブロックを含んだ黄褐色土が一面に広がり、その上部には炭化材が壁面に直交するように遺存し、焼失家屋の状況を示している。炭化材は20~40cm間隔で並び、住居の上屋を構成した垂木などの部材と想定でき、屋根を覆っていた土と共に住居内に倒れ込んだものと考えられる。

**分析** 垂木と想定される炭化材11点の樹種同定を行ったところ、すべてクヌギ節であった。また、垂木材上下で検出された粘質土ブロックからは、植物珪酸体分析によりススキ属・ヨシ属・タケ亜科・キビ族などが短細胞・機動細胞ともに認められ、ヨシ属については短細胞列も確認された。

**遺物** 床面・覆土下部から多量の遺物が出土している。4~6は土師器坏で、4・6は体部が底部との境付近から大きく浅く外反するものである。7~21は内黒土師器坏。丸底のもの(7)、主体を成すやや丸みをもつ底部のもの(8~15・17~19)、須恵器坏蓋模倣のもの(16・20・21)がある。9・11・12・14は底部と体部の境の内面に稜ないし沈線状の段が廻る。22は内黒土師器の鉢ないし深い体部の坏。23・24は土師器壺。25~34は小形甕で、底部が突出し、ハケとケズリが主な調整手法である。35は丸い胴部の小形



E E'

L-5416

0 (1:80) 2m



- 1 : 黒褐色土 (覆土。粘性少ない粘土質シルト。硬くしまり良い。土器片多い)
- 2 : 黒褐色土 (覆土。粘土質シルト。しまり悪い。8 cm 程度の礫が混じる)
- 3 : 黒褐色土 (覆土。粘土質シルト。粘性あり。しまり不良。軟らかい。土器大形破片多い)
- 4 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。中小礫が多い)
- 5 : 赤灰色～明褐色土 (覆土。粘土質シルト。焼土が多く混じる)
- 6 : にぶい黄褐色土 (覆土。粘土質シルト。礫は少なく細かい。粘性あり、しまり良い。炭化材多い)
- 7 : 黒褐色土 (カマド覆土。礫混じり粘土質シルト。しまり良く硬い。粘性少。炭含む)
- 8 : にぶい黄褐色土 (地山の崩れ。粘土質シルト)
- 9 : にぶい黄褐色土 (カマド覆土。シルト質粘土。炭が混じる)
- 10 : 橙褐色土 (焼土。炭・ススが混じる。硬くしまっている。カマド天井からの崩落と思われる)
- 11 : 黒褐色土 (カマド覆土。粘土質シルト。5～10cm の焼土粒が点在。粘性あり、軟らか)
- 12 : 灰色土 (カマド覆土。非常に粘性が強い。焼土若干・炭・ススが混じる。下面はスス・炭が多い)
- 13 : にぶい黄褐色土 (砂っぽい粘土質シルト。10cm 程度の礫・焼土・炭多い)
- 14 : にぶい黄褐色土 (袖構築土。砂質シルト。粘性少く硬い。しまり良い。角礫・炭焼土を少し含む)

図91 17号竪穴住居跡 (1)

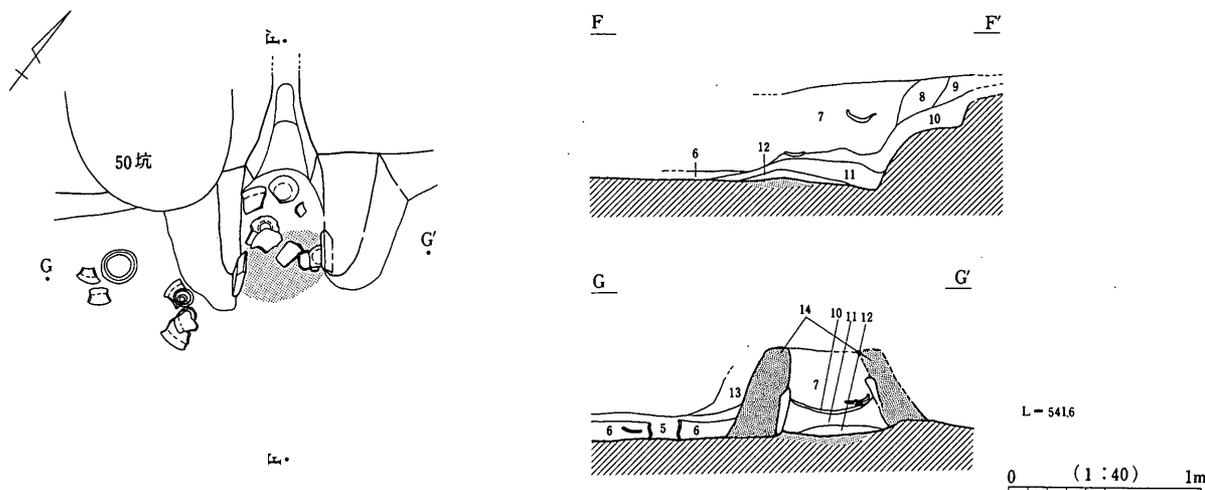


図92 17号竪穴住居跡(2)

甕。36・39は長胴甕で、36は胴上位ないし中位に最大径をもつ。37・38は球胴の甕。40は長脚1段透しの須恵器無蓋高坏で、TK43併行か。41～43は土師器高坏。41は半球形の坏部、43の坏部は鈍い稜をもつ。44は底抜けの甑。45～47は内黒および両黒土師器鉢。49土師器無頸壺、50・51小形土師器。土器以外の遺物は、石製紡錘車(1)が床面で、耳環(22)が覆土から出土した他、石鏃・磨石がみつまっている。

時期 土器の様相から6世紀末～7世紀前葉に位置付ける。2・3は混入、1も混入と考える。

18号竪穴住居跡(図85・153) 位置 W-13・14

検出 17号住居等と同じく低位段丘面に近い緩斜面にあり、IV層上面で検出。南半部は25号住居に切られる。覆土は小礫を含んだ黒褐色土である。

構造 略方形の平面形を呈し、床面規模は3.3×2.7m以上。軸線はN-6°-W。床面は明確でなく、中央部に少量の焼土がみられた。カマドは検出されない。柱穴は北東隅で1本検出された。

遺物 1・2・5・7須恵器、1は坏蓋、2は底部回転糸切りの後静止ヘラケズリを施す坏、5は小形鉢、7は鉢。3は丸みを帯びた底部の土師器坏、4は内黒土師器坏。6は口縁部に最大径がある長胴甕。8はほぼ平底の内黒土師器鉢。8は床面、他は覆土出土。土器以外の遺物は、覆土から石鉢(37)が出土した。なお、北宋銭(33・34)がみつまっているが、検出面で確認されたもので、本遺構には伴わない。

時期 8世紀前半とする。

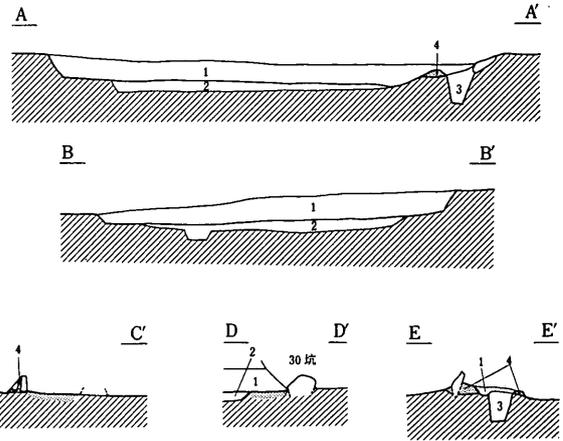
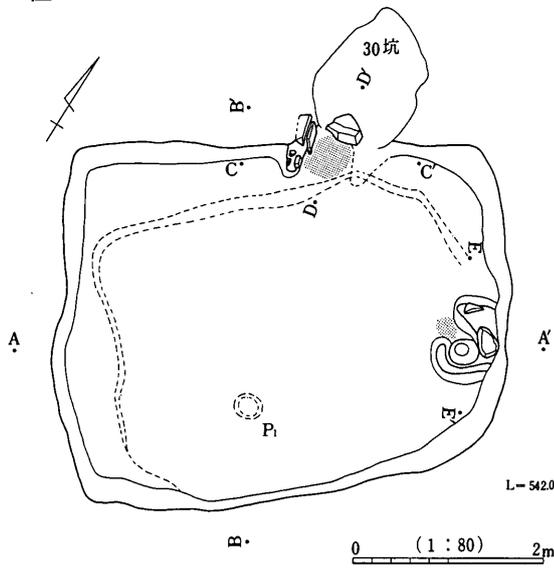
19号竪穴住居跡(図93・153) 位置 W-9・10

検出 低位段丘に近い緩斜面に位置している。IV層上面で検出した。30号土坑に切られる。覆土は礫を含む暗褐色土。

構造 南東隅がやや内側に入る東西に長い方形で、床面規模は2.9/3.4×4.4mを測る。軸線はN-33°-W。カマドは北壁中央にあり、袖に角礫を用いて構築しているが天井部などは破壊され残存しない。床面は礫を多く含み、軸線をやや異にした一段深い掘り込みがある。住居建て替えに伴うものか本住居以前の住居の痕跡か。また、東壁下には周囲を粘質土で土手状に囲んだ深さ30cmほどのピットが検出された。粘質土表面は被熱で硬化している。

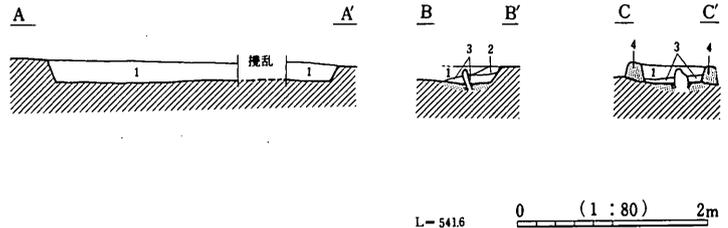
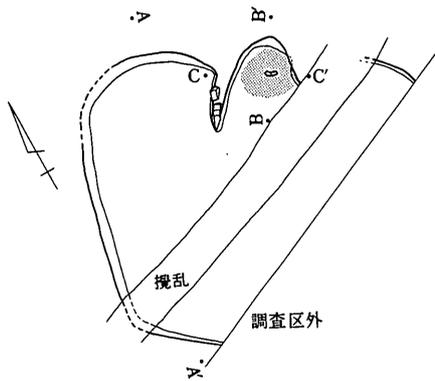
遺物 1は須恵器高台付坏。2はかえりのない古代タイプの須恵器坏蓋と同器形の内黒土師器坏蓋。3

19住



- 1 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。しまり良い。粘性僅か。礫・炭を含む)
- 2 : にぶい黄褐色土 (覆土。粘土質シルト。粘性あり、軟らかい)
- 3 : 黒褐色土 (カマド覆土)
- 4 : 暗褐色土 (カマド2構築土。粘土質シルト。小礫・焼土含む。硬くもろい)

20住



- 1 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。きめ細かい。しまり良く硬い)
- 2 : 黒色土 (カマド覆土。炭・すす混じる。粘性あり、しまり悪い)
- 3 : 暗赤褐色土 (カマド覆土。粘性強く、軟らかい。焼土含む)
- 4 : にぶい黄褐色土 (カマド構築土。粘土質シルト。きめ細かく、しまり良く硬い。粘性少)

図93 19号・20号竪穴住居跡

は半球形を呈する体部の内黒土師器坏。1は床面、他は覆土出土。他に板状鉄製品(20)が床面で出土。  
 時期 7世紀後葉～8世紀前葉とする。

20号竪穴住居跡 (図93・153) 位置 W-15・20、X-6・7

検出 低位段丘に接する緩斜面に位置し、17号住居に接する。東半部は調査区外に広がる。IV層上面で検出。覆土は小礫を含む暗褐色土。

構造 ややいびつだが方形を呈するものであろう。確認できた床面規模は2.7×3.4m以上を測り、軸線はN-31°-Eを示す。カマドは北壁中央に構築されるが、袖や天井部は破壊される。火床に支脚石が残る。柱穴は検出されなかった。

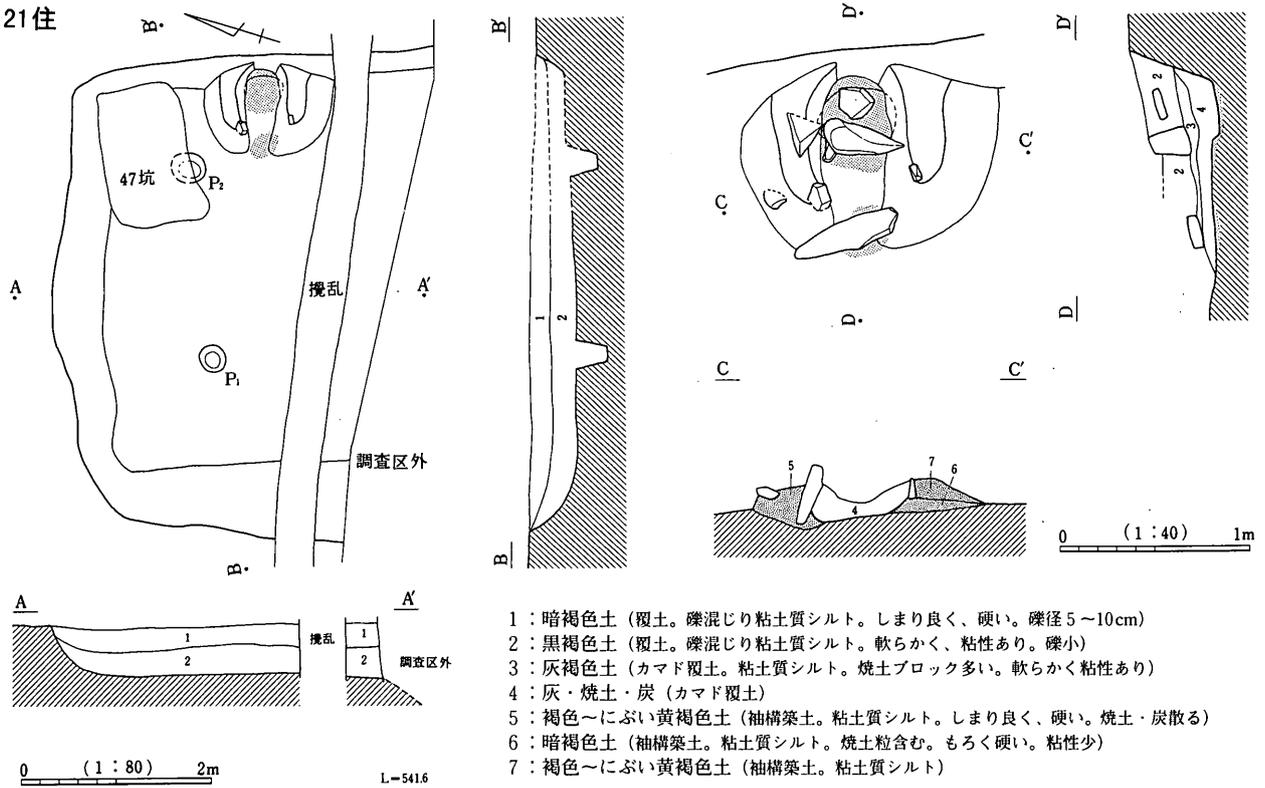
遺物 覆土から小形の内面黒色土器坏(1)が出土した。

時期 10世紀中葉頃か。

21号竪穴住居跡 (図94・153) 位置 W-9・10・14・15

検出 矢出沢川低位段丘に接する緩斜面に位置し、南半部は調査区外に広がり、23号住居を切り47号土坑に切られる。IV層上面で検出。覆土は礫が混入する粘質土で上部は暗褐色土、下部は黒褐色土となる。

21住



22住

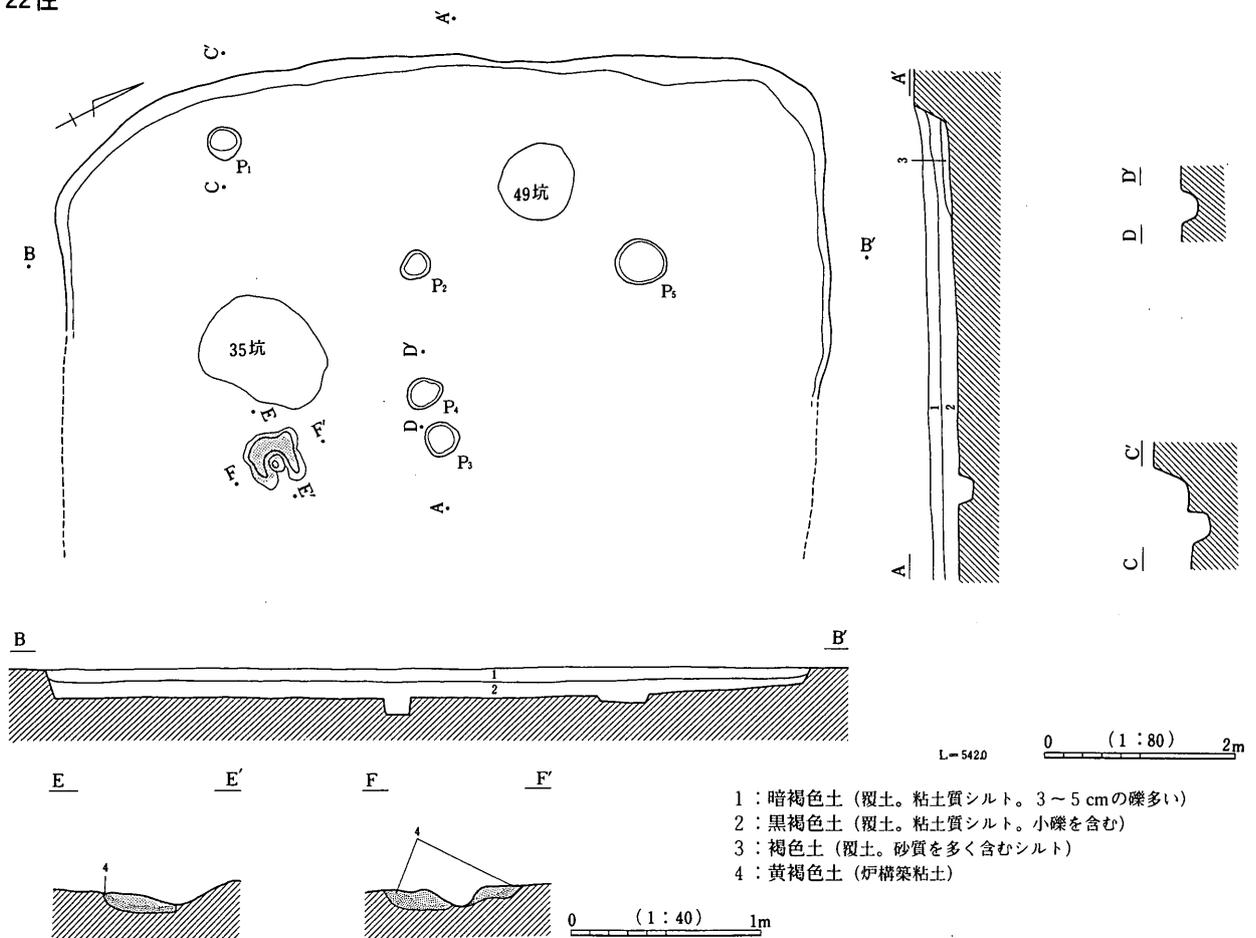


図94 21号・22号竪穴住居跡

**構造** 平面形は方形、床面規模は4.0×2.1m以上。軸線はN—70°—E。床面は全体に軟弱で斜面下方の南側では砂質となる。カマドは東壁にあり、袖は角礫を芯材に粘質土を貼って構築している。天井部にも角礫が用いられるが、殆ど壊され遺存していない。柱穴は2本検出された。

**遺物** 1・2は内黒土師器坏で、2は平底気味の底部をもつ。3は内黒土師器鉢で、体部は丸く、口縁端部付近で短く外反する。いずれも覆土出土である。

**時期** 7世紀後葉～8世紀前葉であろう。

**22号竪穴住居跡** (図94・153)                      位置 W—5・10、X—1・6

**検出** 低位段丘に向かう緩斜面に位置し、IV層上面で検出。11・35・49号土坑に切られる。住居規模を想定すると17号住居と重なる可能性があるが、斜面の関係もあり、切り合いとしては確認できなかった。覆土は礫を含んだ暗褐色土と黒褐色土。

**構造** 床面規模7.9×7.0m程度を測る大形の住居で、東半部は斜面で確認できなかった。軸線はN—62°—Wを示す。カマドは確認した範囲では見当たらない。床面は礫混じりで堅く締まる。ピットは5本検出されたが柱穴かどうか不明。住居中央やや南側に焼土・粘土ブロックを含むピットが検出され、鍛冶炉の可能性が考えられる。

**遺物** 1は須恵器高台付坏、2は底部周辺ヘラケズリの内面黒色土器坏。どちらも覆土出土。

**時期** 9世紀とする。

**23号竪穴住居跡** (図85・153)                      位置 W—5・10、X—1・6

**検出** 低位段丘に向かう緩斜面にあり、IV層上面検出。21号住居・57号土坑に切られ、検出部分は東壁部の一部のみである。覆土は礫混じりの黒褐色土。

**構造** 大半を21号住居に切られるが、方形を呈すると考えられる。残存する床面規模は4.7×2.3m以上を測り、軸線はN—39°—W。カマド・炉は検出されないが、北東隅で少量の焼土が確認された。

**遺物** 1・2は半球形の体部をもつ内黒土師器坏。4は口縁部最大径の長胴甕。いずれも覆土出土。

**時期** 7世紀中葉～後葉であろう。3の内面黒色土器碗は混入とする。

**24号竪穴住居跡** (図85)                      位置 W—5、X—1

**検出** IV層上面で検出。北西隅の一部のみを検出したに止まる。16号住居に殆ど重なるが、切り合い関係は不明。39・51号土坑に切られ、56号土坑を切る。

**構造** 検出範囲に限られるが、方形を基調とした平面形であろう。残存する床面規模は2.3×1.5mで、軸線はN—25°—Wを示す。床面は、住居内に2基の土坑が掘り込まれ残る範囲は僅かであるが、小礫混じりで堅緻である。カマド・柱穴は検出されない。

**遺物** 遺物は出土していない。

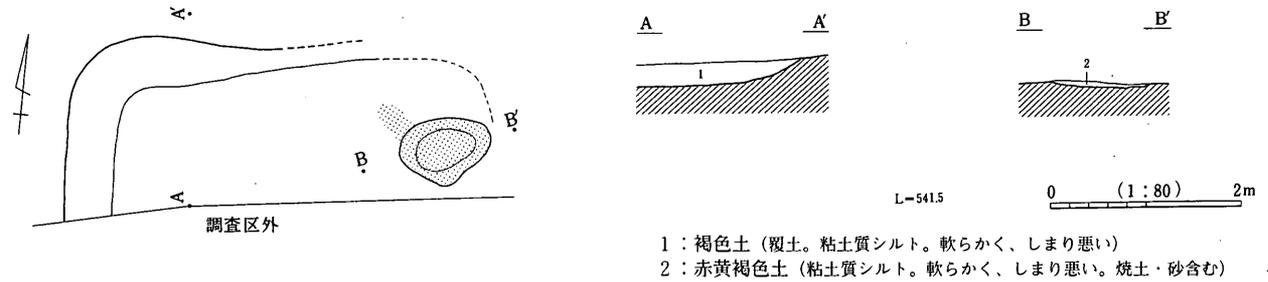
**時期** 不明といわざるを得ない。

**25号竪穴住居跡** (図85)                      位置 W—13・14

**検出** 低位段丘に接する緩斜面に位置し南半部は調査区外に広がる。IV層上面で検出され、18号住居を切る。覆土は褐色土。

**構造** 確認できた範囲は狭いが、方形の平面形を呈すると思われる。検出された床面規模は4.0×1.4mを測り、軸線はN—7°—W。北壁手前で焼土の広がりが見られ、カマド火床部の痕跡かもしれない。

25住



26住

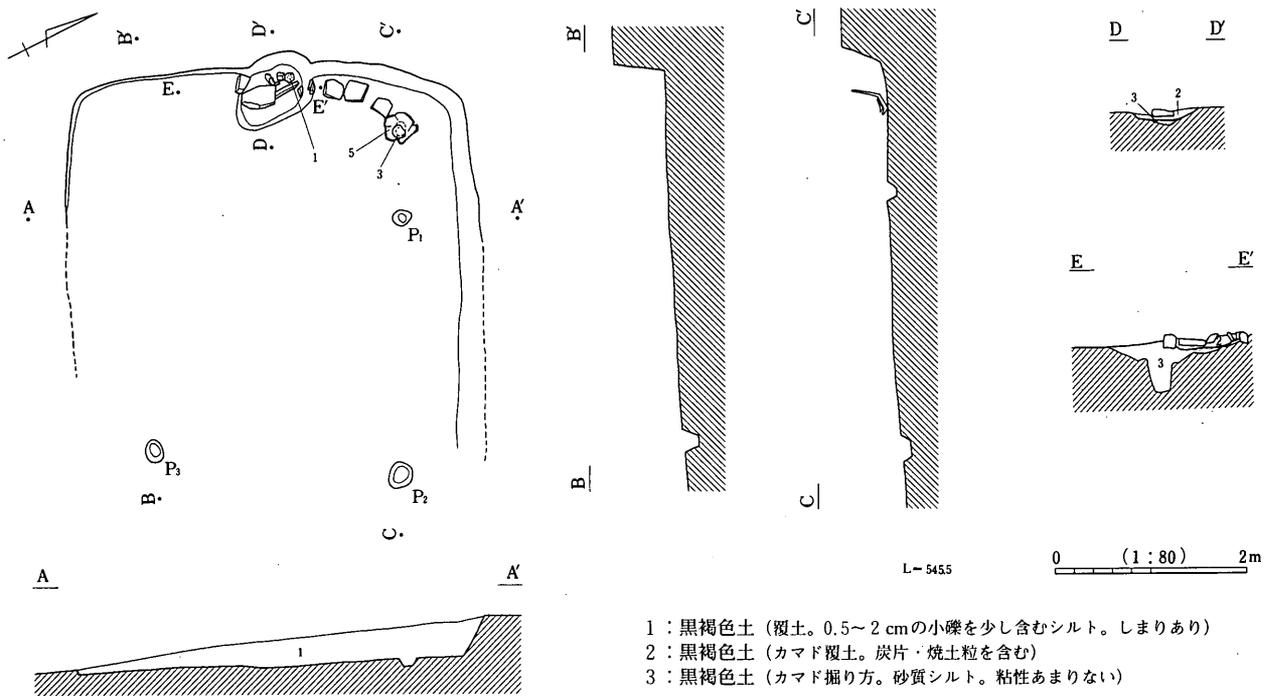


図95 25号・26号竪穴住居跡

柱穴は検出されなかった。

**遺物** 土器はすべて小片で図化できるものはないが、覆土から底部回転糸切りの須恵器坏、内面黒色土器坏、口縁部く字状の東信型甕が検出された。また、覆土から石鏃(14)が出土している。

**時期** 18号住居を切ること、土器片の様相から8世紀後半~9世紀前半と考えておきたい。

**26号竪穴住居跡** (図95・153・154) 位置 F-21、K-1

**検出** 調査区北西隅の丘陵裾に位置する。西壁部は立ち上がりを検出できたが、それ以外は削平で確認できなかった。検出層位はIV層上面。6号建物に切られる。覆土は小礫を含む黒褐色土。

**構造** 平面形は方形を呈する。確認された床面規模は4.6×4.1m。軸線はN-62°-Wを示す。カマドは西壁中央部に位置し、袖や天井を構成した角礫がカマド内に崩落している。火床には角柱状の支脚石が残る。カマド北側の床面上から須恵器大甕が潰れた状況で出土した。柱穴は3本が検出されたが、北西隅は未検出。

**遺物** 1は底部回転糸切りの須恵器坏。2・3は内面黒色土器坏で、2は口径の割りに底径が大きく、

内彎する体部の立上がり之急である。3は2に比べ直線的に体部が開く。4は器壁の薄い東信型の甕である。口縁上部が屈曲し、胴部最大径は口縁部径を超えない。6は須恵器甕。1・2・4はカマド出土、4はカマドに向かって右隅の床直上出土。3は5の上に乗る状態であった。

時期 8世紀後半と考えられる。

27号竪穴住居跡 (図96・154・155) 位置 K—15

検出 IV層上面で検出。調査区北側の遺構稀薄部にあり、他の遺構との切り合いはない。覆土は礫を多く含む黒褐色土。

構造 床面規模4.4×4.4mを測る方形の平面形で、南西部は削平される。軸線はN—15°—E。壁下には幅10cm程の周溝が廻っている。カマドは北壁中央部に設置され、カマド内や周辺にカマド構築材と考えられる角礫が点在する。柱穴は対角に2本検出されたが、他の2本は不明。南壁中央部のピットは入り口施設に関係したものか。

遺物 覆土下部から坏類が多数出土した。1～10は須恵器坏。口径の割りに底部が広いものが多く、また底部全面ヘラケズリ調整が施されるものが殆どである。従って、底部切離し技法が判明するものはごく少ない。6は底部形態から回転ヘラ切りと推定されようか。また、7は回転糸切り不調整である。11～14は須恵器高台付坏。高台は断面台形を呈する。11・12の底部は下方に突出し、13・14の体部は途中で屈曲して立ち上がる。15～22は内面黒色土器坏。内彎する体部の立上がり之急で、古相の形態を示している。18は口縁端部が上方を向くほど体部の彎曲が強い。23はタタキ整形・27はロクロ整形の須恵器鉢。24・25は球形胴部の土師器甕である。28は土師器小形甕。2・8・23はカマドと覆土出土の破片が接合した。土器以外の遺物としては、覆土から刀子ないし短刀(3)が検出されている。

時期 8世紀後半に位置付けられる。

28号竪穴住居跡 (図96・155) 位置 K—10

検出 27号住居の北側に位置する。IV層上面検出。切り合いはない。覆土は礫を含む黒褐色土。

構造 平面形状は方形で、床面規模4.1×4.3m、軸線N—34°—E。軸線が若干異なるが規模等は27号住居と類似する。カマドは北壁中央に扁平な河原石を芯材として砂質土で覆って構築しているが、住居廃絶時に破壊している。床面は堅く締まっている。柱穴は南西隅を除く3基が検出された。

遺物 1は須恵器坏蓋。2は内面黒色土器鉢。3～6は東信型の甕で、胴部最大径は口径を凌駕するが、口縁部は断面コ字状になっていない。4は器高の低いすづまりの器形。3～6はカマド、他は覆土出土。土器以外は、砥石(40)、石鏃(16)が覆土から出土した。

時期 9世紀初頭と考える。

29号竪穴住居跡 (図96) 位置 G—19・20

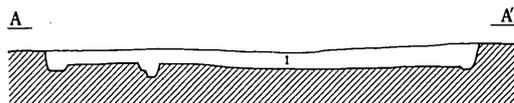
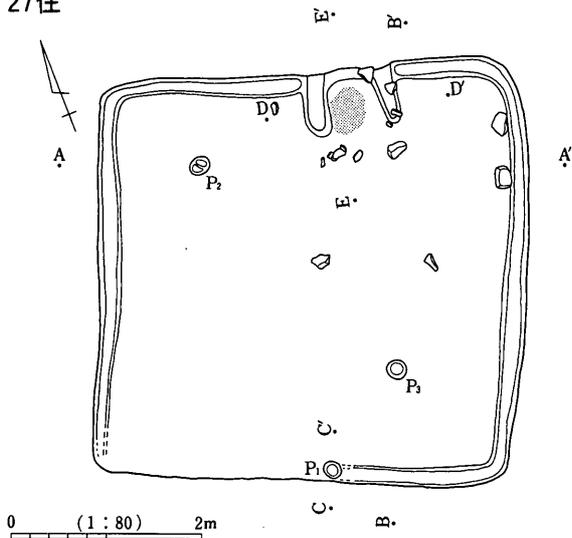
検出 調査区北側の遺構稀薄部に位置し、IV層上面検出。南壁部は削平される。覆土は暗褐色土。

構造 方形の平面形で床面規模は3.2m以上×4.8mを測る。軸線はN—20°—E。カマドは北壁の中央にあり、大形礫を粘質土で固めて構築する。ピットは3基確認され、P1・P2は主柱穴と考えられるが、P3は性格不明。

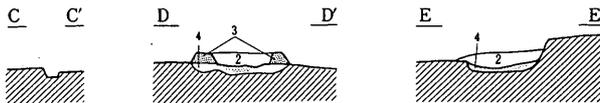
遺物 遺物は少なく、床面出土の須恵器坏1個体だけが図化できた(1)。浅い体部の立上がり之急で箱形に近い器形である。底部は全面静止ヘラケズリされている。

時期 8世紀前葉前後か。

27住

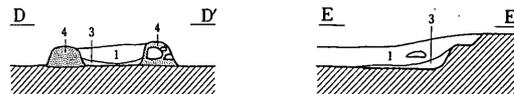
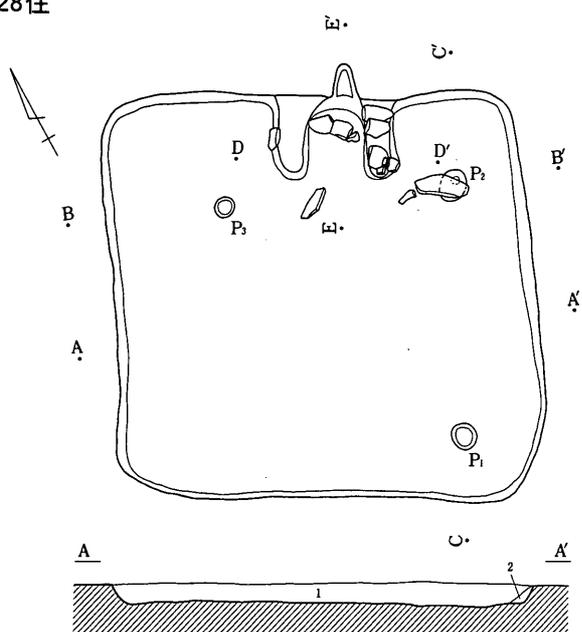


L-5440



- 1: 黒褐色土 (覆土。粘性あり。0.5~5 cmの礫多く、ローム粒まばら)
- 2: 茶褐色土 (カマド覆土。粘性しまりなし)
- 3: 褐灰色土 (袖構築土)
- 4: 褐色土 (カマド掘り方)

28住

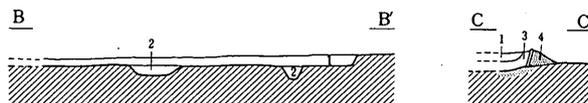
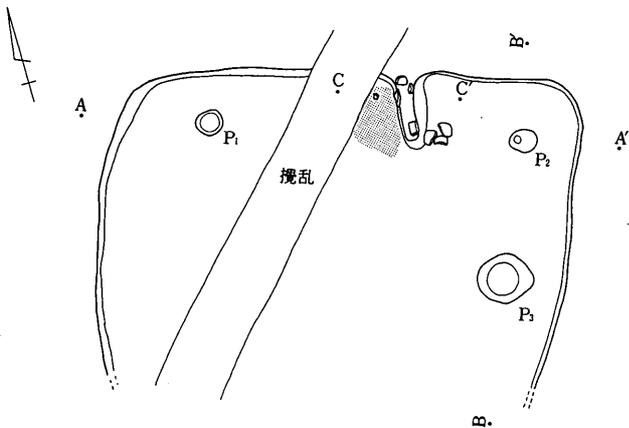


L-5455

0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。砂質シルト。1~7 cmの礫を含む)
- 2: 褐色土 (覆土。粘性少なく。しまり良い)
- 3: 黒色土 (カマド覆土。シルト質。炭・灰・焼土が混じる)
- 4: 褐色土 (袖構築土。砂質シルト)

29住



L-5465

0 (1:80) 2m

- 1: 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。炭混じる)
- 2: 褐色土 (ピット覆土。粘土質シルト)
- 3: 褐色土 (カマド覆土。炭・焼土粒が多い)
- 4: 褐色土 (袖構築土。粘土質で硬い。焼土含む)

図96 27号・28号・29号竪穴住居跡

## 30号竪穴住居跡 (図82・155) 位置 G—20・15

**検出** IV層上面検出。29号住居と重複する可能性あるも詳細は不明。覆土は小礫を多く含む暗褐色土。  
**構造** 平面方形だが、東壁と南壁は削平のため確認できない。検出できた床面範囲は3.5×3.4m。軸線はN—50°—W。カマドは検出範囲にはない。浅いピットが2基検出されたが、柱穴かどうか不明。  
**遺物** 1～3は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。4・5は内面黒色土器坏で、体部の開きは大きく直線的である。いずれも覆土出土。  
**時期** 8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

## 31号竪穴住居跡 (図82) 位置 H—11

**検出** IV層上面で検出。現道路下に位置し、北西隅の一部のみが確認された。  
**構造** 検出範囲が狭く詳細は不明である。平面方形の形状であろう。確認された床面規模は2.7×0.8m。軸線はN—38°—E。  
**遺物** 遺物は出土していない。  
**時期** 不明

## 32号竪穴住居跡 (図97・155) 位置 V—12・13

**検出** 調査区南西隅のIV層上面で検出。覆土は茶黒褐色土。  
**構造** 南西隅が内側に入る台形を呈し、床面規模は2.7/3.1×3.5mを測る。軸線はN—82°—E。カマドは東壁中央に設置されるが、住居廃絶時の破壊で遺存状態は悪い。袖は砂質土で構築される。床面は一部に硬化が認められる。柱穴は検出されなかった。  
**遺物** 1は須恵器坏。2は体部立上りが急な古相の内面黒色土器坏。3・4は東信型の甕、口縁部はく字状を呈する。最大径は胴部上半にある。3・4はカマド、1・2は覆土出土。他に石鏃(38)が検出された。  
**時期** 8世紀中葉と考えられる。

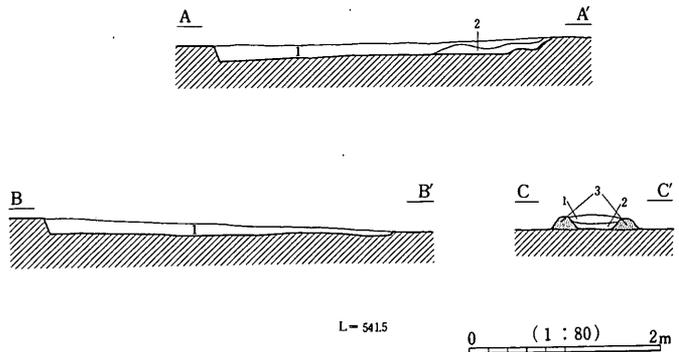
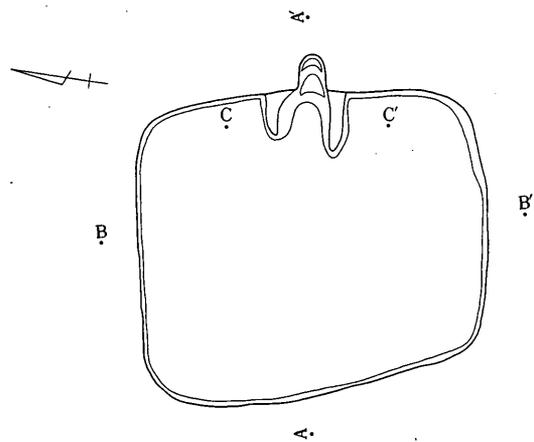
## 33号竪穴住居跡 (図97・155) 位置 V—2・3・7・8

**検出** IV層上面検出。覆土は黒褐色土の単層。  
**構造** 方形の平面形で、床面規模は5.1×5.0m。軸線はN—25°—W。カマドは北壁に存在。袖は粘土混じりの砂質土で構築されるが、遺存状態は悪い。煙道は住居外に60cm程延びる。床面は不明瞭で、柱穴は検出されなかった。  
**遺物** 1・2は底部が丸みを帯び、直立気味に体部が立ち上がる器形の須恵器坏。底部は静止ヘラケズリされる。3はヘラ描き文様のようなものがみられる土師器片。いずれも覆土出土。  
**時期** 7世紀中葉～後葉と考えておきたい。

## 34号竪穴住居跡 (図98・155) 位置 Q—22、V—2

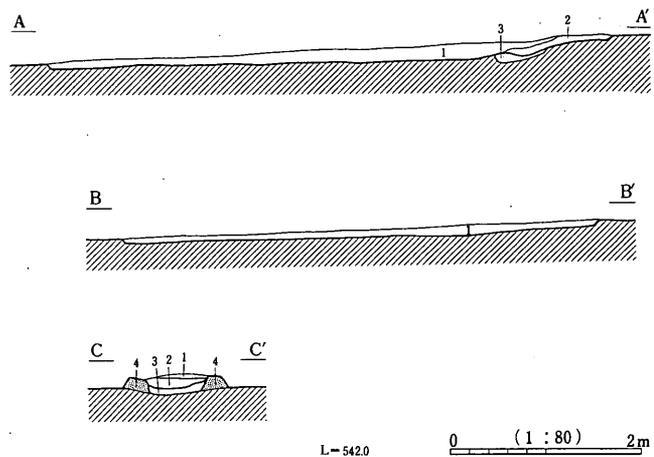
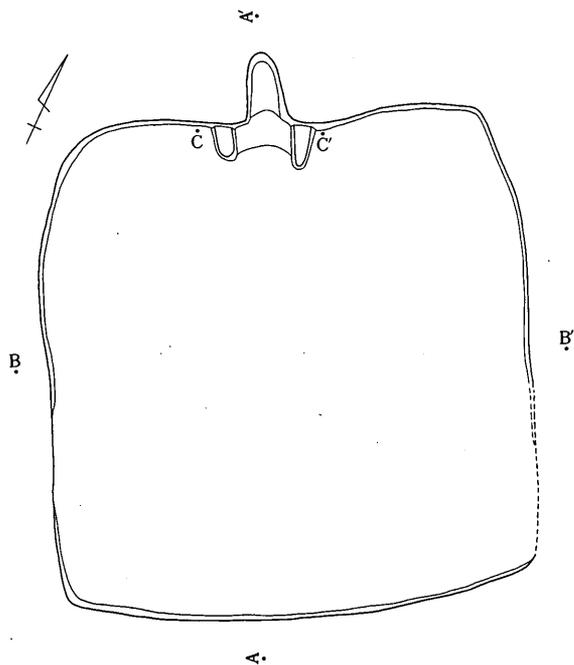
**検出** IV層上面で検出。他の遺構との切り合いはない。南東部は削平により確認されない。  
**構造** 床面規模3.2m以上×3.8mの方形を呈し、軸線はN—55°—Eを示す。カマドは西壁中央部に設置されるが、住居外に延びる煙道部と僅かな焼土の広がりを除いて遺存していない。床面は砂質土が硬化している。柱穴は検出されなかった。  
**遺物** 遺物は少なく、カマド出土の須恵器坏1個体だけが図化できた(1)。  
**時期** 8世紀後半～9世紀か。

32住



- 1 : 茶黒褐色土 (覆土)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。多量の炭化物・焼土粒・粘土粒含む)
- 3 : 褐色土 (袖構築土)

33住



- 1 : 黒褐色土 (覆土)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。炭粒・多量の焼土粒が混じる)
- 3 : 黒褐色土 (カマド覆土。炭粒混入)
- 4 : 褐色土 (袖構築土)

図97 32号・33号竪穴住居跡

35号竪穴住居跡 (図98・155)

位置 P-20

**検出** 調査区西端にあり、南西部は調査区外に広がる。IV層上面検出。10号建物と切り合うが新旧関係は不明。覆土は黒褐色土の単層。

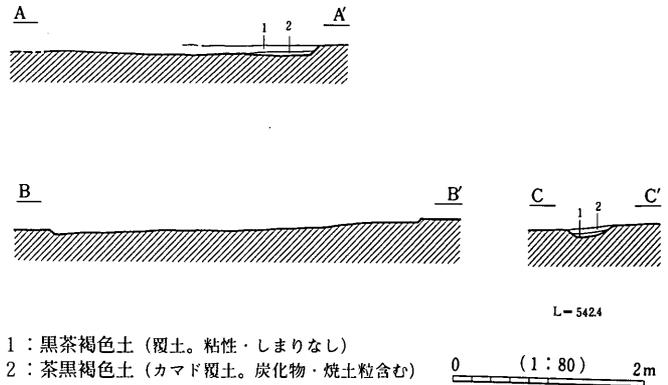
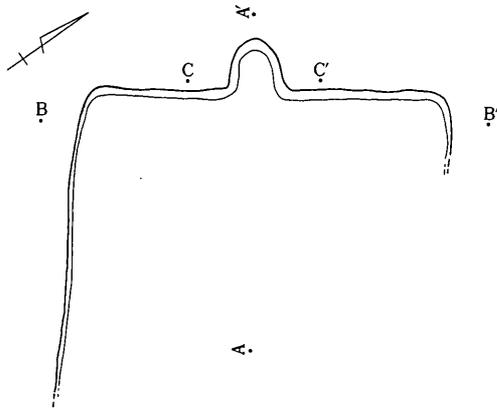
**構造** 平面形は方形で、床面規模は2.6m以上×3.1m。軸線はN-90°-E。床面は若干の硬化がみられるが全体には明瞭でない。カマドは東壁に位置し、大形礫を用いた袖石と火床部が遺存するのみである。

カマド前面にも構築材と考えられる礫が点在する。柱穴は南東部で1基検出。

**遺物** 1は体部の開きが大きく底部回転糸切り不調整の須恵器杯。2・3は内面黒色土器杯で、口径に比べ底部が広い器形。1はカマド出土、2・3は覆土出土。

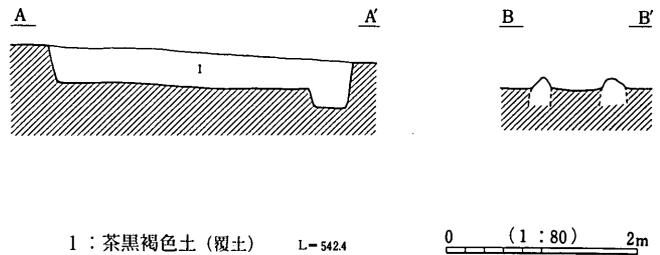
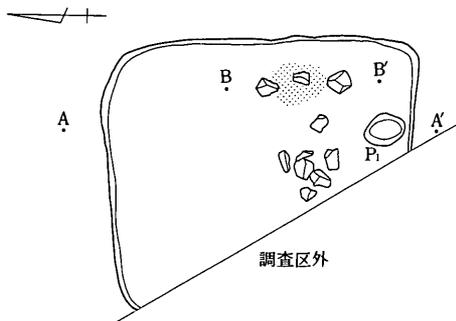
**時期** 8世紀末～9世紀初頭とする。

34住



1：黒茶褐色土（覆土。粘性・しまりなし）  
2：茶黒褐色土（カマド覆土。炭化物・焼土粒含む）

35住



1：茶黒褐色土（覆土） L-5424

図98 34号・35号竪穴住居跡

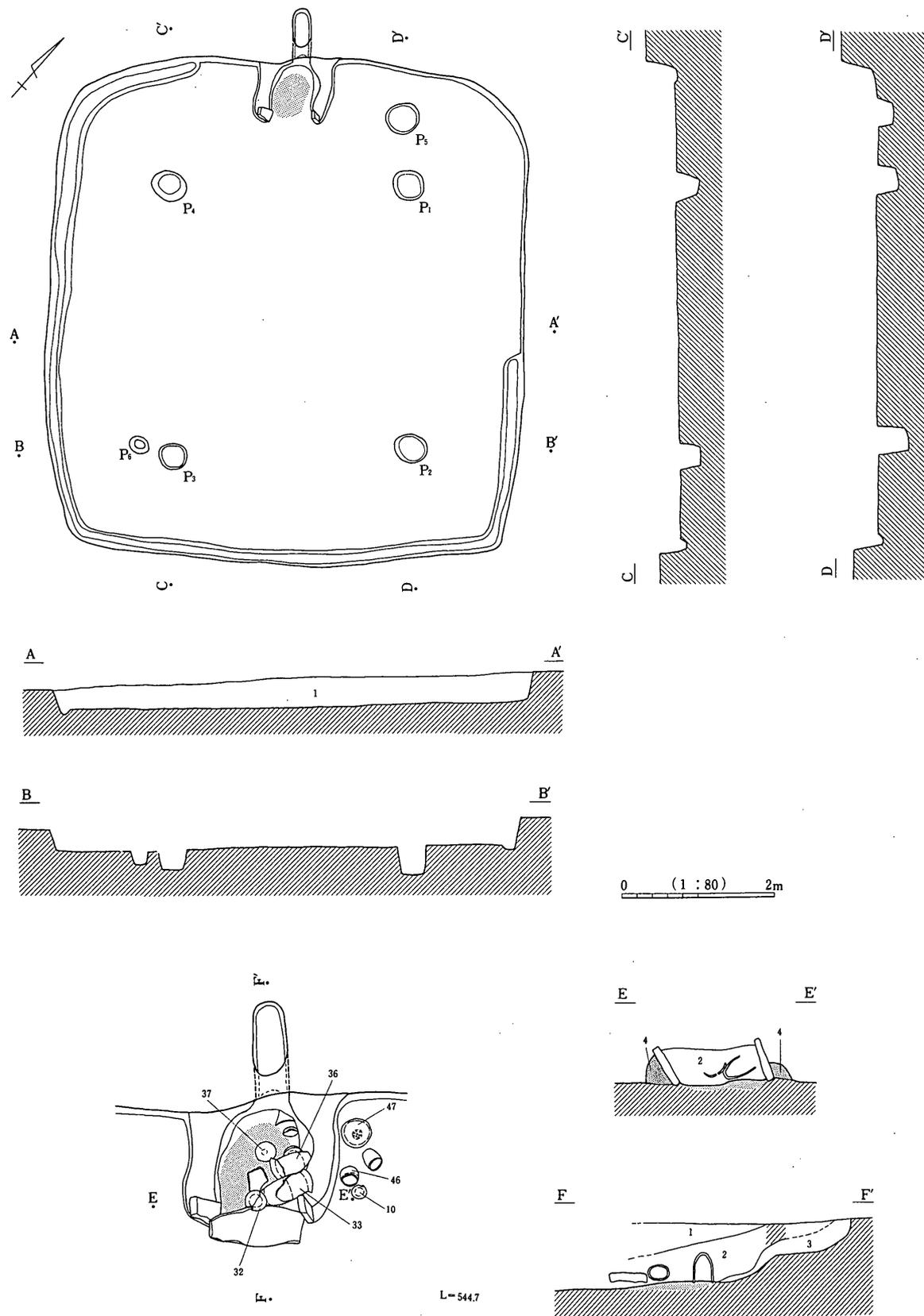
36号竪穴住居跡（図99・156・157）

位置 F-25、K-5、L-1

**検出** 調査区北側の遺構が稀薄な部分にあり、検出はIV層上面。覆土は礫を少量含む黒褐色土の単層。

**構造** 北壁の両隅がやや丸みをおびた方形で、床面規模は6.4×6.2mを測る。軸線はN-38°—Wを示す。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁下にはカマド部から東壁中程までを除き周溝が巡る。床面は地山となる礫混じりの土層上面に粘質土を貼っている可能性がある。カマドは北壁中央部に設置され、両袖の先端に板状の石を立て砂質土で覆って構築される。袖石の上に同じく板状の天井石を架けているが、破却によりカマド手前に崩落している。火床も良好に遺存し、長胴甕が支脚として伏せられている（37）。煙道は住居外に約70cm伸びている。柱穴はP1～P4が主柱穴である。P6は掘り方調査で確認された。P5は貯蔵穴か。カマド内（32・33・36）やその右側（10・46～48）に多くの土器類が検出された他、覆土中からも多量の遺物が出土した。

**遺物** 床面および覆土から多数の坏類が検出されている。須恵器坏蓋（1～3）・坏（4～11）には前代的な形態のもの（1・10・11）が伴う。底部切り離し技法は、回転ヘラ切りが主体を占めているようだが、静止張り引き糸切りによるものが1点認められる（9）。須恵器高台付坏は大形のもの（13・14・16）と小形のもの（15）がある。土師器坏は、前代的な半球形の体部をもつ非ロクロ整形の坏（18・21・25・26・30）・内黒坏（19・20・22・23・28・29）に、新たに出現したロクロ整形の内面黒色土器坏（17・24・27）が加わっている。内面黒色土器坏は体部の立ち上がりが急で全体に丸みを帯びており、底部と体部の境の稜があまり明瞭ではない。初現期の形態をよく示していると考えられる。底部は全面ヘラケズリが施されるが、24はヘラキリ痕が観察できる。高坏は半球形の坏部をもつものである（31・32）。甕類は球胴形態（39・



- 1 : 黒褐色土 (覆土。砂質シルト。0.5~4 cmの礫散在。しまり良い)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。粘性の少ないシルト質。焼土・炭片混じる。上部に小礫)
- 3 : 黒色土 (カマド覆土。2層より焼土粒点在)
- 4 : 褐色土 (袖構築土。砂質シルト)

図99 36号竪穴住居跡

42)と長胴形態がある。長胴甕は大形のもの(33~35)と小形のもの(36・37)を区別できる。その他の器種としては須恵器甕(38)・長頸壺(43)、土師器小形甕および鉢(40・41・44~46)・底部多孔小形甕(47)、焼成後に底部に穿孔した鉢ないし甕(48)がある。なお、1の須恵器坏蓋は床面で検出した完形遺物で、単なる混入とは考えにくい。長期間使用された可能性もあろう。また、坏身としての使用を想定した方が良いかもしれない。土器以外の遺物は、覆土から石鉢(38)が出土している。

**時期** 8世紀中葉(第2四半期)に位置付ける。

**37号竪穴住居跡**(図100・157) 位置 P-15

**検出** 調査区西端に位置し、IV層上面で検出。12号建物に切られる。覆土は礫を多量に含む黒褐色土。

**構造** 方形の平面形を呈し、床面規模は4.7×5.1m。軸線はN-70°-E。カマドは東壁中央部に板状の石を芯材として構築している。天井石も同様な板状石を用いるがカマド前面に倒れている。煙道は幅広く、住居外に延びる。火床には柱状の支脚石が残る。カマド内から完形の甕が出土している。床面は中央部がやや窪み気味となる。柱穴は4本検出された。西壁面に流れ落ちたような状況でほぼ完形の円面硯が出土した。

**遺物** 1は深めで体部立ち上がりが必要な須恵器坏。2~4は半球形体部の内黒土師器坏である。7・8の高坏は半球形の体部をもつ。6は小形の長胴甕。5は円面硯で、脚部に小円形四方透かしが開けられている。墨堂面に帯状の強い擦面が観察されるが、その半分は剥落している。3・4は床面、6はカマド、その他は覆土出土。

**時期** 8世紀前半とする。

**38号竪穴住居跡**(図100・158) 位置 Q-12

**検出** IV層上面検出。覆土は黄褐色土粒を多量に含む灰黄褐色土。

**構造** 隅がやや丸みを帯びる方形で、床面規模は3.5×4.5m。軸線はN-27°-W。カマドは北壁に板状の石を芯材として構築される。袖は板状石を立て、周りを構築土で覆う。煙道部も両側に石を並べて立てており、天井部も石が乗せられている。おそらくカマド本体の天井も板状の石を乗せていたのであろうが、遺存していない。柱穴は検出されなかった。

**遺物** 1は口縁部に三段の波状文を施す須恵器甕。2は長胴甕。3・4は丸い底部の小形甕である。2はカマド、3は床面、1・4は覆土から検出された。その他、覆土から台石(36)が出土している。

**時期** 7世紀後葉~8世紀前葉と考えておきたい。

**40号竪穴住居跡**(図85) 位置 V-3・4・8・9

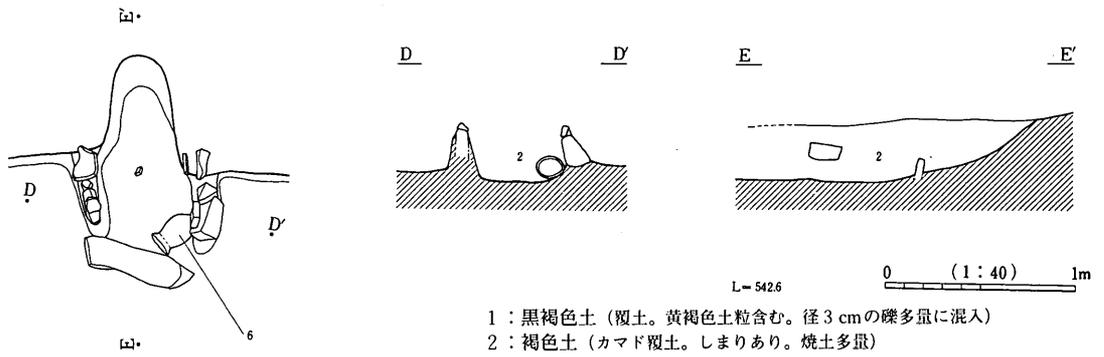
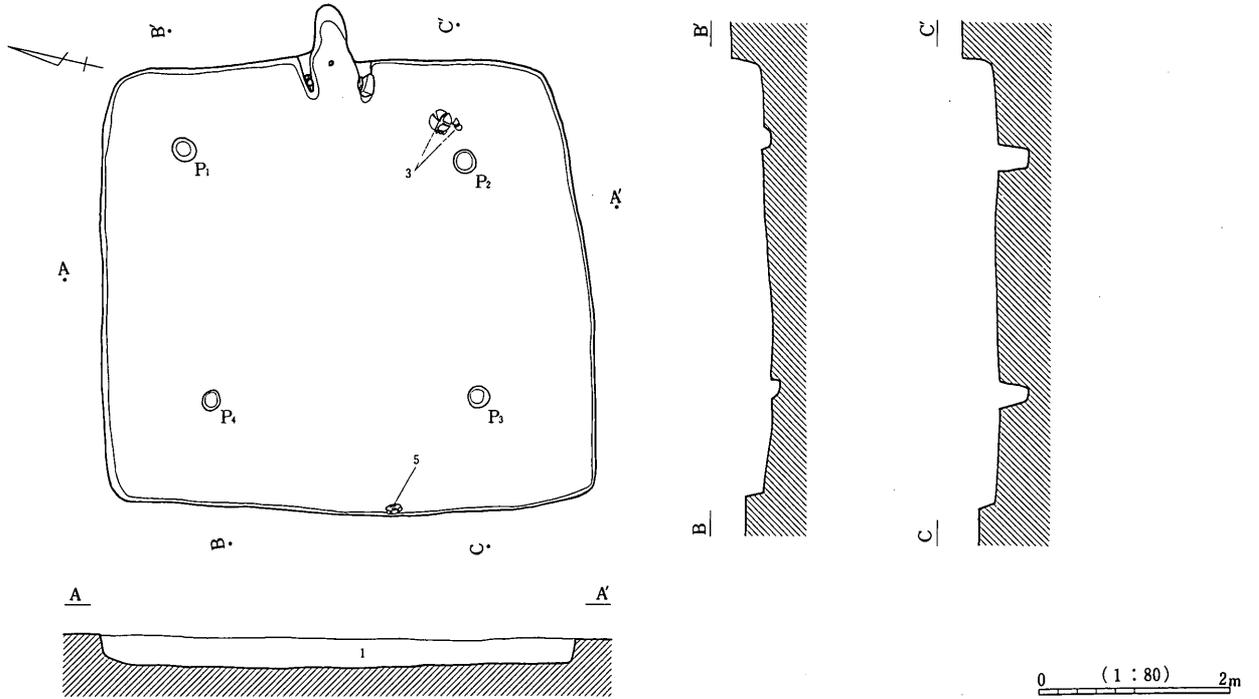
**検出** IV層上面で検出。道路により削平され東壁部のみが残存。覆土は小礫を含む褐色土。

**構造** 方形の形状をなすが全体形状は不明。検出できた床面規模は3.4×0.8m。軸線はN-20°-W。床面は硬化している。カマドは調査範囲内には存在しない。柱穴は1基検出された。

**遺物** 覆土から、須恵器甕・非ロクロ整形半球形体部の土師器坏・長胴甕の破片が出土しているが、すべて小片で図化できるものはない。

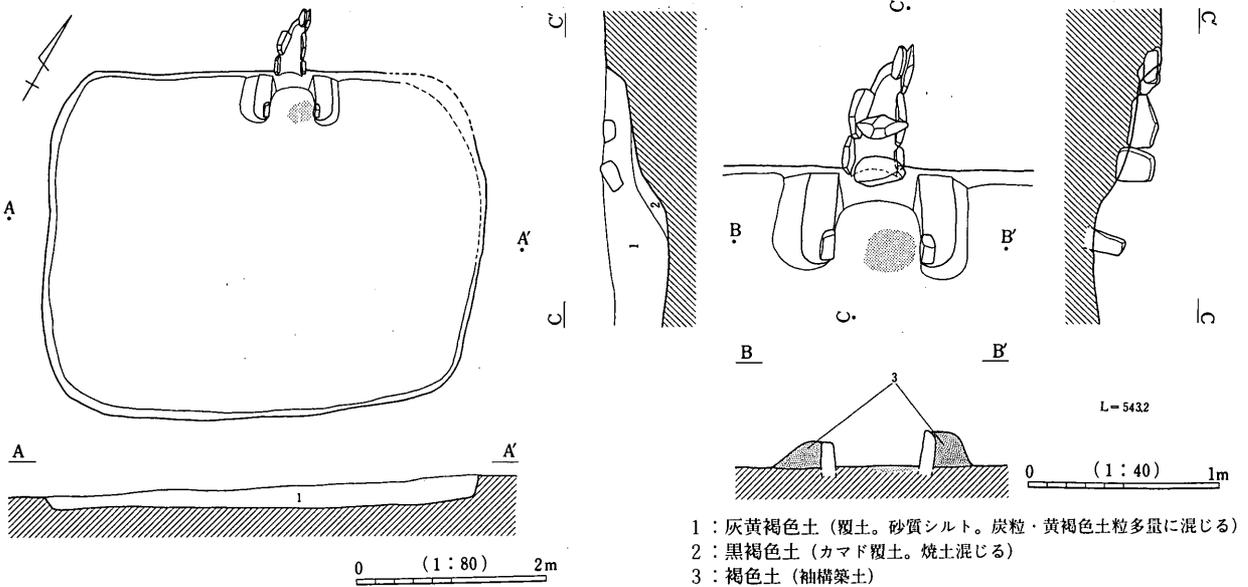
**時期** 黒色土器を含まないことから、7世紀から8世紀前葉としておきたい。

37住



- 1 : 黒褐色土 (覆土。黄褐色土粒含む。径3cmの礫多量に混入)
- 2 : 褐色土 (カマド覆土。しまりあり。焼土多量)

38住



- 1 : 灰黄褐色土 (覆土。砂質シルト。炭粒・黄褐色土粒多量に混じる)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。焼土混じる)
- 3 : 褐色土 (袖構築土)

図100 37号・38号竪穴住居跡

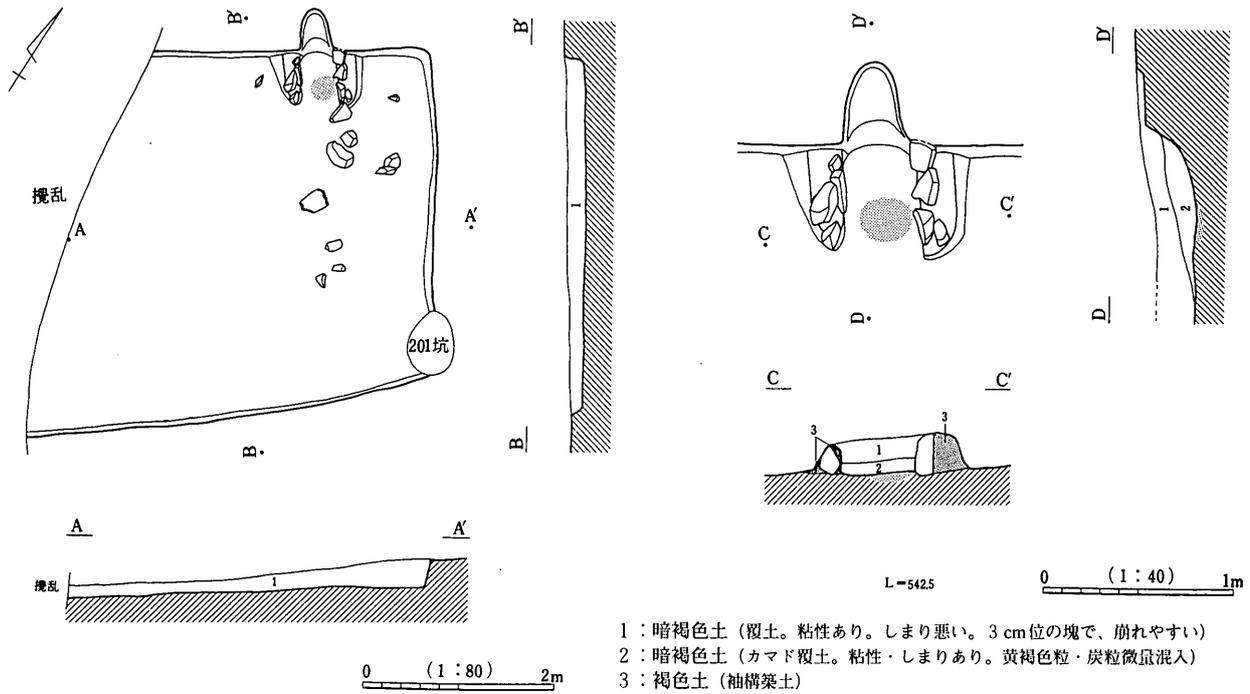


図101 41号竪穴住居跡

41号竪穴住居跡 (図101・158) 位置 V—14

**検出** 調査区南西端近くに位置する。検出層位はⅣ層上面で、西側を道路により削平される。201号土坑に切られる。覆土は暗褐色土の単層で東側には礫が多量に含まれる。

**構造** 隅が直となる方形の平面形で、床面規模は3.7×4.2m以上を測る。軸線はN—30°—E。カマドは北壁東寄りに設置される。袖は板状の石を数枚立て、粘質土で固めて構築される。天井部は依存していない。煙道部は幅広く、住居外に延びる。柱穴は未検出。

**遺物** 1・3・8は須恵器。1は宝珠つまみの付いた坏蓋。3は低い脚の付いた高坏、8は半球形の体部をもった鉢で、口縁部は内曲する。2は半球形体部の内黒土師器坏。7は低い脚台と把手ないし突起の付いた土師器鉢。4は丸みをもった体部の甕。5・6は長胴甕で、6の最大径は胴部中位にある。8はカマド、他は覆土出土。

**時期** 7世紀中葉～後葉とする。

42号竪穴住居跡 (図102・158・159) 位置 V—3・4

**検出** Ⅳ層上面で検出。西壁部は道路により削られている。覆土は礫を含む黒褐色土。

**構造** 方形の平面形を呈すると考えられるが、北東隅も一部削平を受けており立ち上がりが不明確となる。確認された床面規模は3.1×3.8mで、軸線はN—74°—Eを示す。床面は礫が混じらないところは堅く締まる。カマドは東壁中央部にあり、石を立てその外側を土で覆っている。天井部には板状の石を用いており、原位置からややずれたように袖石に乗っている。カマド内からは甕などが出土。

**遺物** 1は甑。2～4はやや丸みを帯びた底部の土師器坏および内黒土師器坏。2は内面見込みの周囲に鈍い段が巡る。4は体部が深い。5・6は小形甕。7・8は長胴甕である。2・7はカマド、6は床面、他は覆土出土である。土器以外の遺物としては、石製紡錘車(2)が覆土から検出された。

**時期** 7世紀前葉に位置付ける。

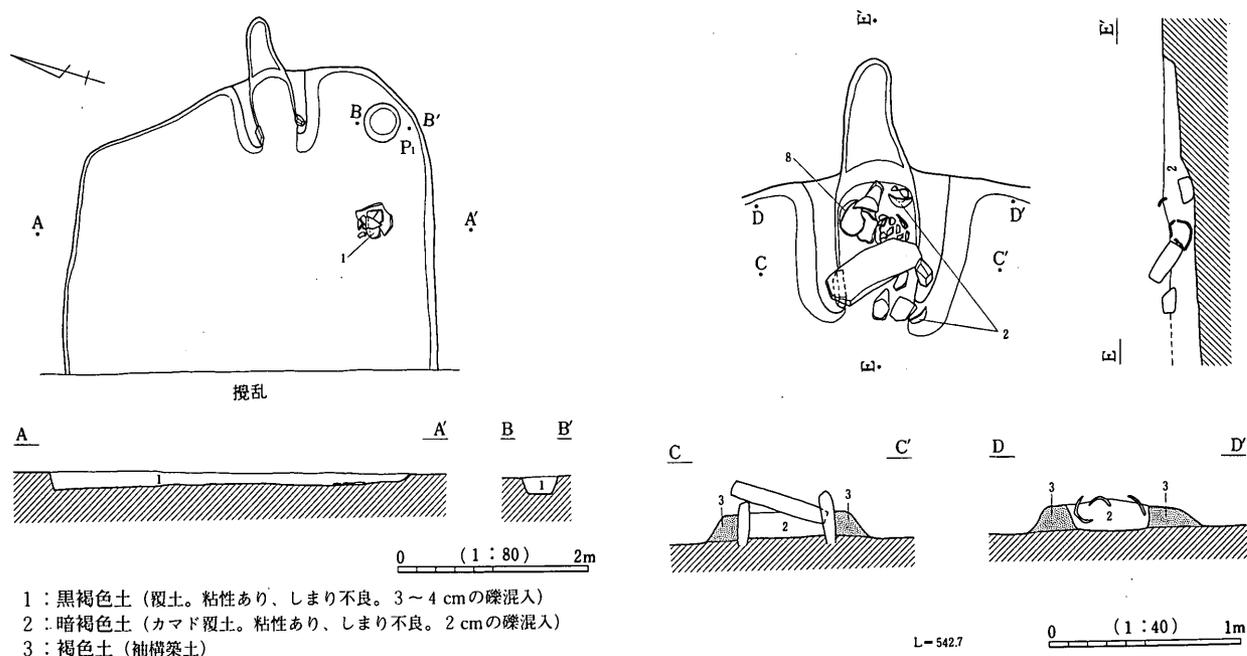


図102 42号竪穴住居跡

43号竪穴住居跡 (図85・159) 位置 W—1・2

検出 IV層上面で検出。北東壁は削平され不明。473号土坑との切り合い不明。

構造 平面形状は方形で、軸線はN—39°—Wを示す。床面規模は5.2×4.5m以上。床面は北から南側に向かいやや傾斜する。柱穴1基を検出したが、他の柱穴やカマドは検出されなかった。

遺物 1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。2は口縁端部を外反させる内面黒色土器坏で、体部は深く大形である。3は内面黒色土器碗。4は口縁く字状を呈する東信型の甕。いずれも覆土出土である。

時期 9世紀後半と考えておきたい。

44号竪穴住居跡 (図103・159~161) 位置 R—21、W—1

検出 遺構集中部の南端近くにあり、IV層上面で検出。南壁を159・391号土坑に切られる。覆土は礫を含む暗褐色土。

構造 本遺跡中では大形の住居で、床面規模7.3×7.4mを測る方形を呈する。軸線はN—35°—W。カマドは北壁中央部に設置され、カマド内面に大形の礫を屹立させその外側を土で固めている。天井部も大形の板状石を用いており、破却によりカマド前面に落ちている。天井石上に3個体の甕が倒れた状態で出土している。火床には支脚石が遺存する。支柱穴はP1・P2・P7・P12の4基で、この他に住居南東部からピットがまとまって検出されたが性格不明。床面はカマド右側がやや高くなっている。覆土中から多くの遺物が出土しているが、特にカマド右側から甕などの煮沸具が多く出土した。

遺物 1~3は須恵器坏蓋、4~6は須恵器坏。11~13・16・21は内黒土師器坏。11・12は半球形体部、13は平底気味の底部、16は深い体部をもち丸底から直線的に斜め上方に立ち上がるもの、21は深い半球形体部のもの。14・15は浅い半球形体部の土師器坏で、口縁部を短く内彎させ、大小がセットを成す。23は頸部のくびれが少ない甕。24~28は長胴甕。大振りのものと小振りのものがある。30・31は小形甕。この他、須恵器台付盤(34)・短頸壺(38)・鉢(39~41)、土師器高坏(35・36)・甕(37)・鉢(42~44)・底部多孔小形甕(45・46)が出土している。24・25・28はカマド焚き口に横倒れになっていたもの、26・27・

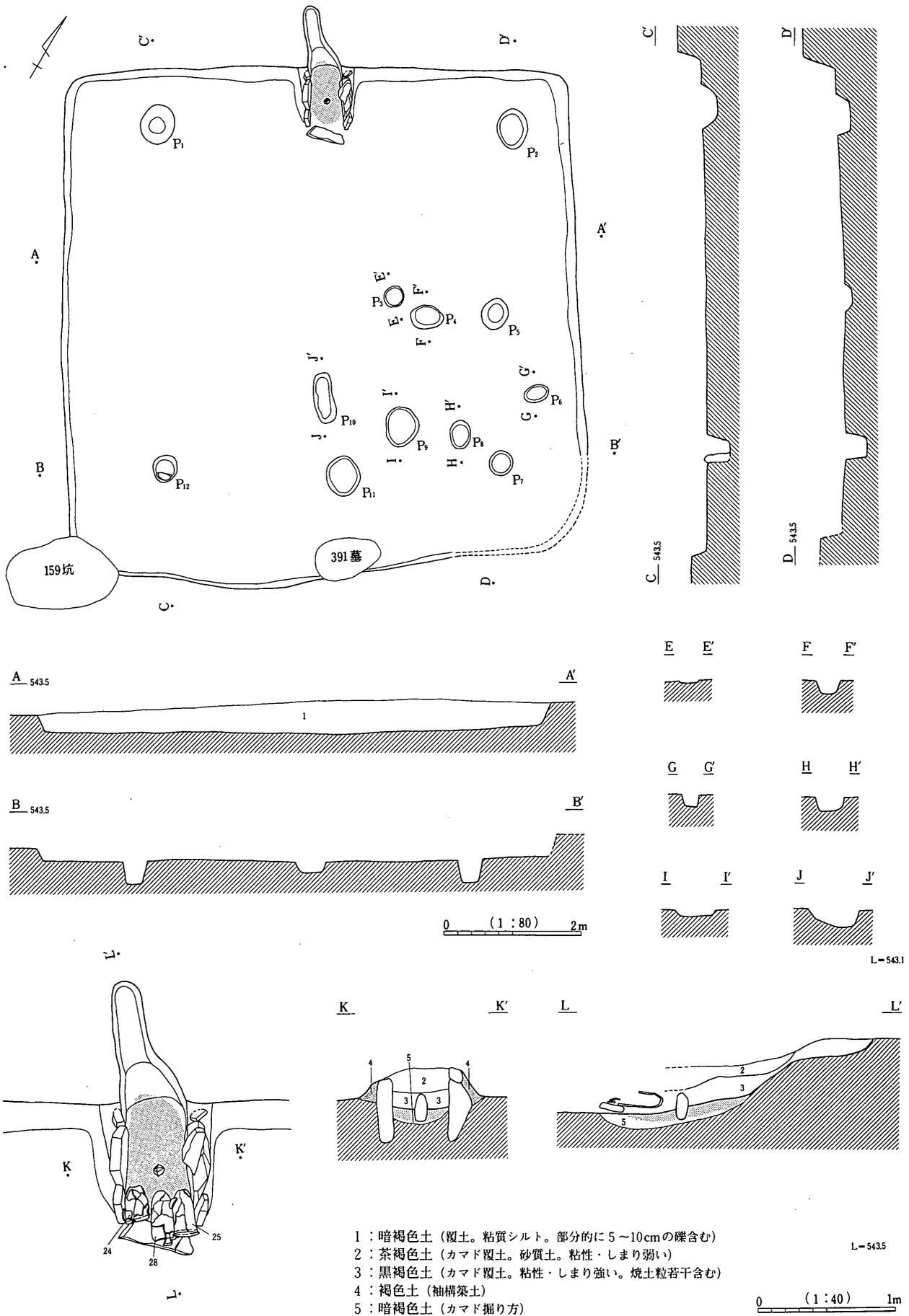


図103 44号竪穴住居跡

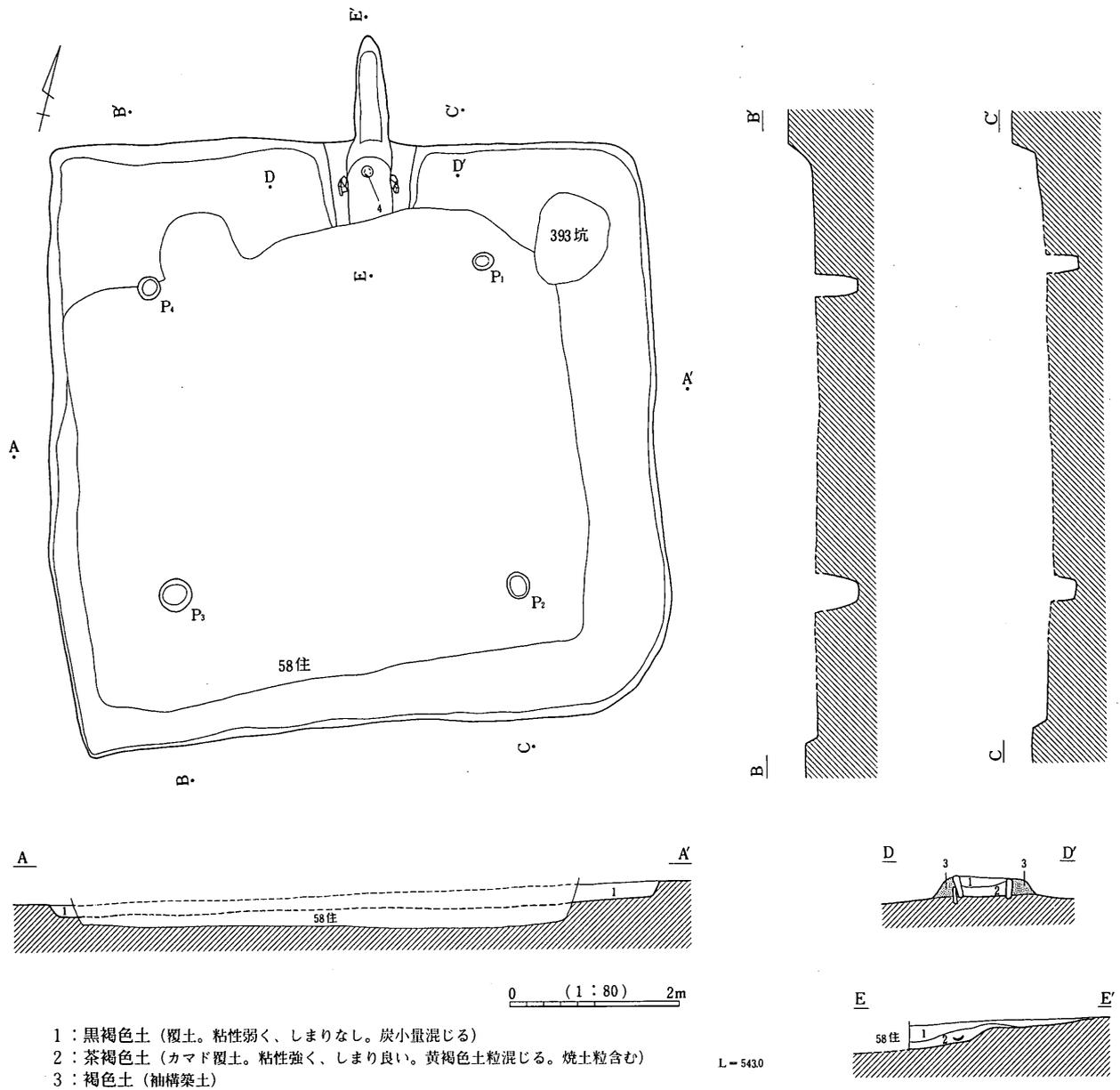


図104 45号竖穴住居跡

46はカマド周囲の床面および覆土、42はカマド内、12・23・30・31・38～41・44・45は床面、その他は覆土から出土したものである。なお、7～10・17～20・29・32・33は混入品であるが、9・10には墨書(「主」か)がみられ、22には「本」がヘラ描きされている。土器以外には、床面から砥石(41)、覆土から土製紡錘車(3)、敲石(21)が検出された。

**時期** 混入品を除いた土器群の様相から、7世紀中葉～後葉に位置付ける。

**45号竖穴住居跡** (図104・161) 位置 V-4・5

**検出** 遺構集中部の南端に位置し、58号住居・393号土坑に切られる。検出層位はIV層上面。

**構造** 床面規模6.7×7.1mの比較的大形の住居だが、住居内に58号住居が重なるため遺存部分は少ない。軸線はN-18°-W。カマドは北壁中央に石を芯材とし粘質土で覆って構築している。天井部などは壊されている。煙道は90cm程住居外に延びる。柱穴は4基検出。

**遺物** 1・2は須恵器。1は壺蓋か。3～5は半球形体部の土師器・内黒土師器坏。13は鉢、7は内外面ハケ調整の長胴甕。4はカマド、6は床面、その他は覆土出土である。

**時期** 7世紀中葉～後葉と考える。

**46号竪穴住居跡** (図106・161・162) 位置 Q—14・19

**検出** IV層上面で検出。23・81号建物に切られる。覆土は礫を多量に含む黒褐色土の単層。

**構造** 平面形は方形で、床面規模は5.7×5.5mを測る。軸線はN—26°—Wを示す。壁立ち上がりは垂直に近く、壁下には幅10～15cmの浅い周溝が廻る。床は堅緻な貼床である。柱穴は住居隅より1.2m程内側に4基が検出された。南壁中央のP5は入り口に関係するものか。カマド右側の住居北東隅のP6は貯蔵穴としては小さく浅い。カマドは北壁中央にあり、角礫を両側に数個ずつ立て並べその外側を粘質土で覆って構築している。袖の遺存状態は比較的良好であるが天井部は壊されており、天井石がカマド前面に落ちている。火床には支脚石が残る。煙道部は1m程住居外に延び、先端はピット状に掘り込まれ甕が入れられていた。

**遺物** 床面および覆土から多くの土器が出土した。1～3は須恵器坏蓋・坏。4～8・10～19は土師器および内黒土師器坏。4は須恵器坏蓋模倣の器形、5・7・11・13は半球形の体部。6・8・12・15～17はやや丸みを帯びた底部から外傾ないし内彎して体部が立ち上がる器形だが、内面見込み周囲に稜や段をもつものは含まれない。10は深い半球形の体部から口縁部が短く内傾するもの。18・19は平底で粗雑な作りの小形坏。20・21は小形甕、22・23は球胴の甕。その他の器種としては、須恵器甕(24)・高盤(25)・フラスコ形長頸瓶(29)・土師器高坏(26～28)・長頸壺(30)・底部多孔小形甕(31)・鉢(32～35)がある。14・20はカマド、6・15・33・34は床面、その他は覆土出土である。9は混入品。

**時期** 坏類の様相から、17号住居より1段階新しい7世紀中葉に位置付ける。

**47号竪穴住居跡** (図106・162) 位置 K—9

**検出** 遺跡北側の遺構稀薄部に位置する。IV層上面検出。覆土は礫を少量含む暗褐色土の単層。

**構造** 平面形状は方形を呈するが、南側については削平のため明らかにできなかった。確認された床面規模は3.5×4.5mで、軸線はN—43°—E。カマドは北壁中央に付設される。両袖内側に数個の扁平な石を立て、外側を粘質土で覆っている。天井部は破却で遺存せず、カマド内に大形の石などが投棄されている。支脚石は下部のみが残っていた。床面は南西部に粘質土の貼床が認められたが、住居全体には施されていない。ピットは2基検出されたが位置や規模などから柱穴とは言い切れない。

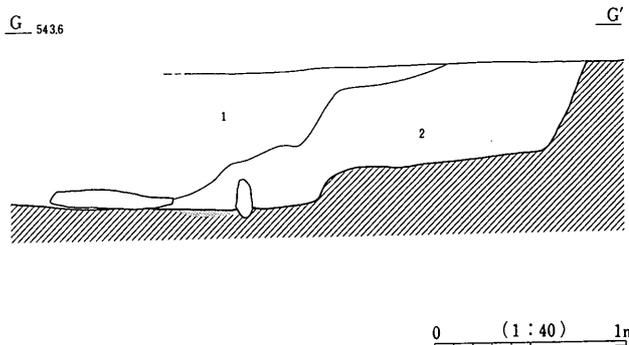
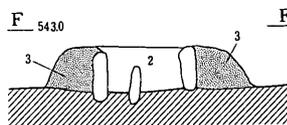
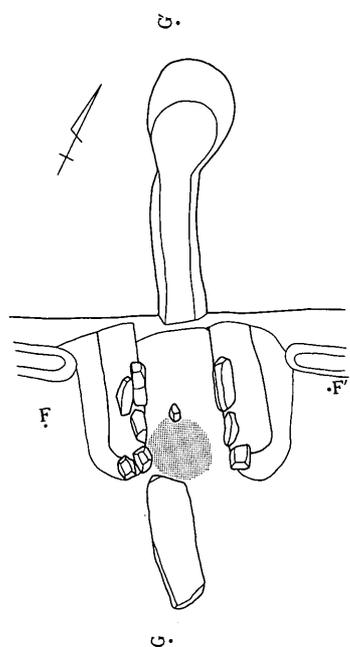
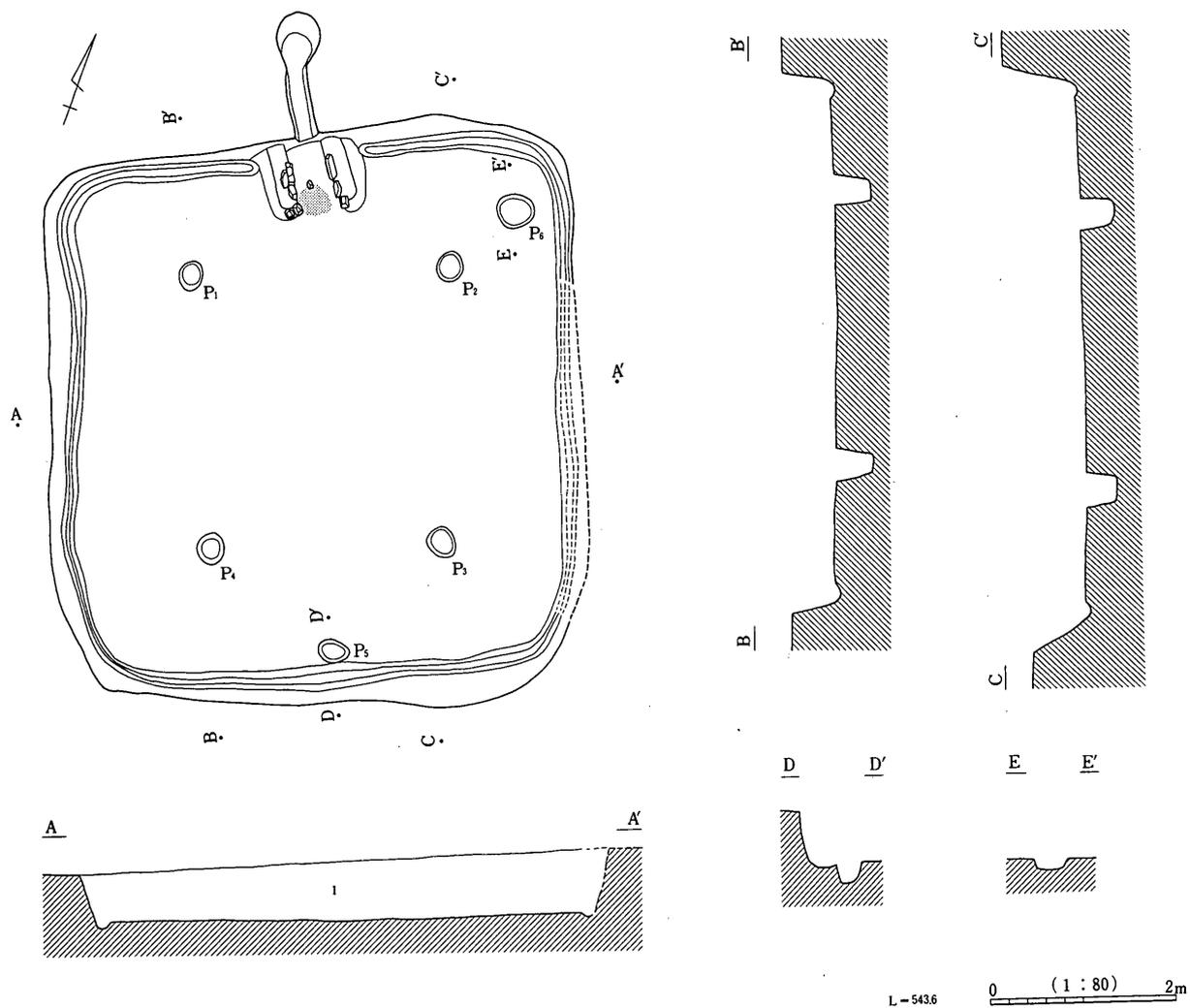
**遺物** 遺物は少なく、図示できたのはカマド出土の須恵器鉢1点のみである(1)。

**時期** 8～9世紀か。

**48号竪穴住居跡** (図106・162・163) 位置 R—12

**検出** 調査区中央の遺構集中部に位置し、IV層上面で検出。49号住居を切り、501・506号土坑に切られる。覆土は小礫が散在する暗褐色土の単層。

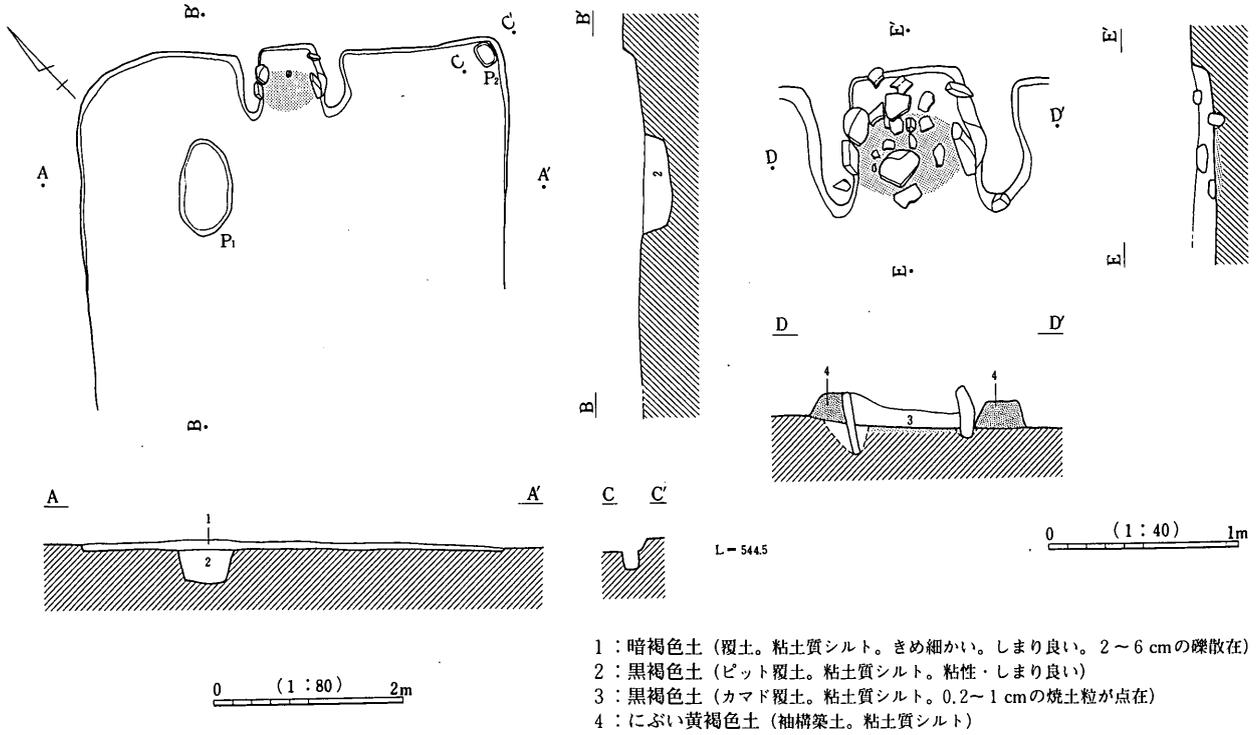
**構造** 南側が狭い逆台形を呈し、床面規模は4.3×3.9/4.7mを測る。軸線はN—34°—Eを示す。カマドは造り替えが行われている。新段階のカマドは北壁中央(左側)に付設され、袖や天井などは遺存せず火床と煙道部のみが検出され、カマド前面に構築材と考えられる大形の石が点在する。旧段階のカマドは新段階の東側(右側)にあり、床面下より火床部が確認され煙道部も一部検出された。北東隅には直径50cmの貯蔵穴があり、完形に近い坏が5個体出土した。柱穴は西側の2基が検出された。



- 1 : 黒褐色土 (覆土。粘性あり。しまり小。3~5 cmの礫多量。黄褐色土粒微量)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。粘性・しまりあり。炭粒微量。2~3 cmの礫少量)
- 3 : にぶい黄褐色土 (袖構築土。粘性・しまりあり。小礫混じる)

図105 46号竪穴住居跡

47住



48住

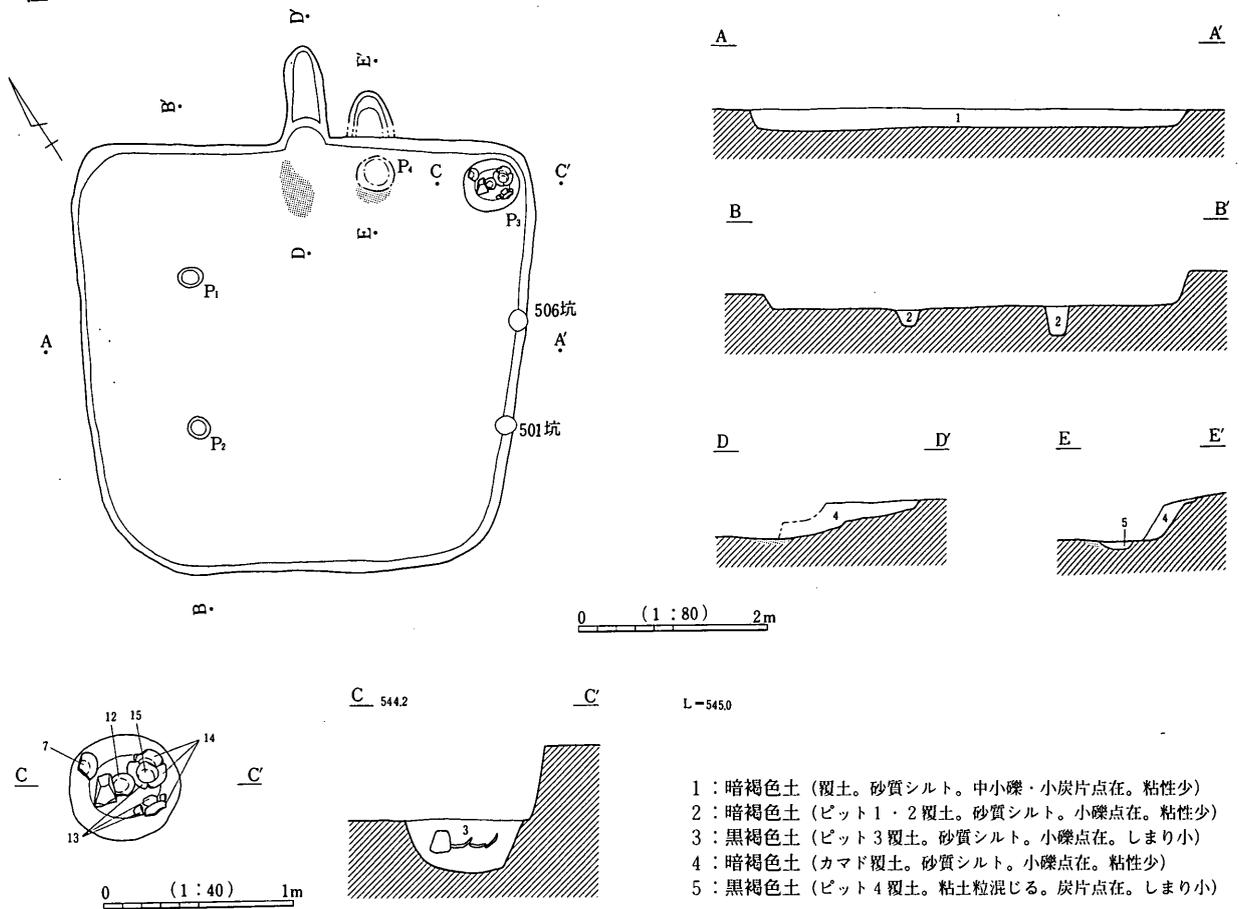


図106 47号・48号竪穴住居跡

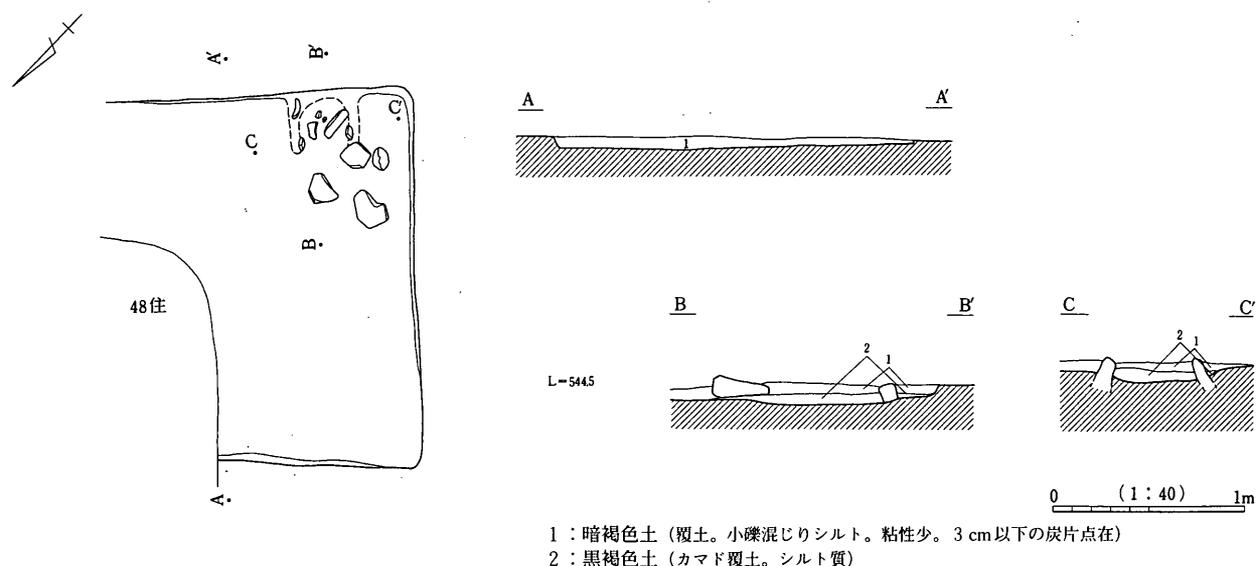


図107 49号竪穴住居跡

**遺物** 1・2は須恵器坏蓋。3～8は須恵器坏で、いずれも底部回転糸切り不調整。9～15は体部の開きが大きい内面黒色土器坏で、いずれも体部下部をヘラケズリするが、底部回転糸切り不調整のもの4点、回転糸切り後にナデないしケズリを施すもの3点である。14には「足」、15には「足」「酒（酒）坏」の墨書がなされている。19は須恵器小形壺。21は口縁く字状の甕で、薄手の作り。16～18は内面黒色土器坏の破片で、16・17には墨書、18にはヘラ描きが認められる。7・12～15が貯蔵穴から出土したもの、8はカマド、その他は覆土検出である。

**時期** 9世紀初頭（第1四半期）と考える。20は混入品。

**49号竪穴住居跡**（図107・163） 位置 R—12

**検出** 48号住居に切られる。検出層位はIV層上面。覆土は小礫が混じる暗褐色土。

**構造** 方形の平面形を呈する。削平や切り合いにより、東壁の一部は明確に立ち上がりを確認できたものの他は不明確。確認できた床面規模は3.7×2.9m。軸線はN—133°—E。カマドは東壁の南東隅近くに構築される。袖石の一部が遺存し、前面には構築材と考えられる扁平な石が散乱する。他の住居同様に、石を芯材とし、周囲を土で覆った構造であろう。柱穴は検出されなかった。

**遺物** 遺物は少ないが3点図示できた。1は須恵器坏蓋、2は回転糸切り不調整の須恵器坏、3はロクロ整形の甕。2・3がカマド、1は覆土出土である。

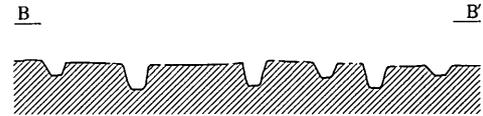
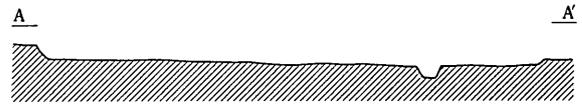
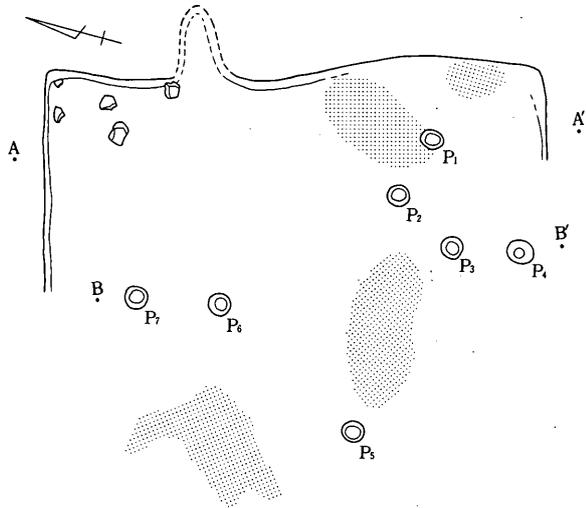
**時期** 8世紀後半か。

**50号竪穴住居跡**（図108） 位置 R—12

**検出** 遺構集中部にあり、65号住居、21・81号建物と重複すると考えられるが詳細は不明。覆土は黒褐色土の単層。

**構造** 北東隅の立上がりは確認できたが、それ以外は不明確である。平面形は方形。確認できた床面規模は2.0×5.1m。軸線はN—66°—E。カマドは東壁北寄りに構築されるが遺存状態が悪く、煙道部が推測されたに止まる。床面上には1m以上の広がりをもつ焼土が3箇所確認された。ピットは6基検出されたが柱穴は不明。

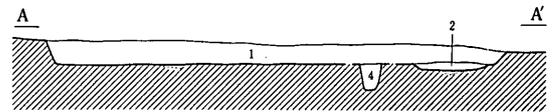
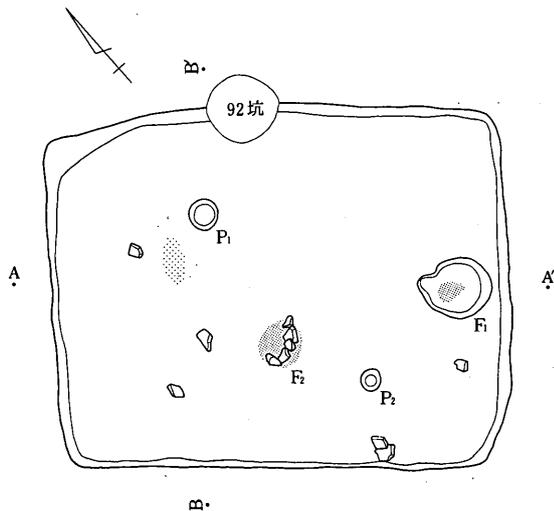
50住



L-5438

0 (1:80) 2m

51住



L-5446

0 (1:80) 2m

- 1: 黒褐色土 (覆土。シルト質。15cm以下の礫が散在)
- 2: 黒褐色土 (F-1覆土。炭粒多い。焼土粒若干)
- 3: 黒褐色土 (ピット1覆土。シルト質。小礫点在)
- 4: にぶい黄褐色土 (ピット2覆土。シルト質)

図108 50号・51号竪穴住居跡

遺物 遺物はごく少なく、須恵器坏片1点、内面黒色土器坏片2点が出土したのみである。須恵器坏は体部の開きが大きい器形である。

時期 8世紀後半から9世紀か。

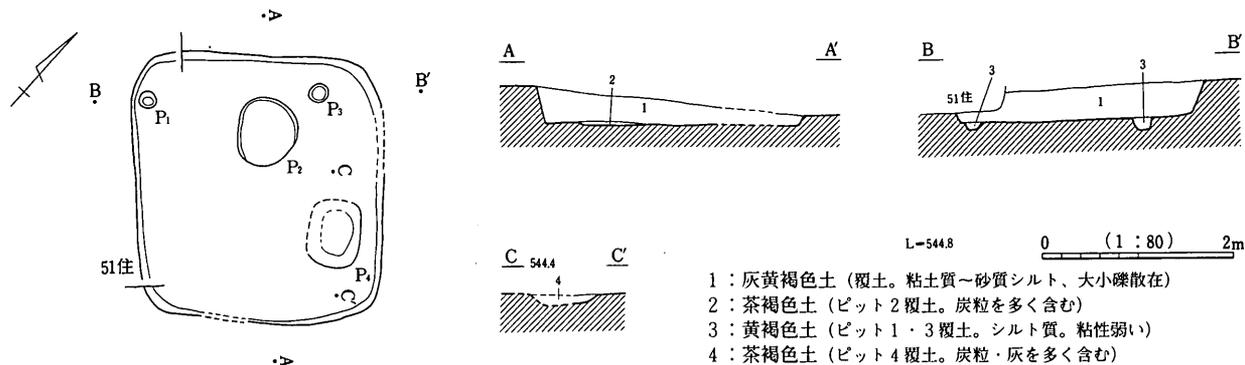
51号竪穴住居跡 (図108・163) 位置 R-14

検出 遺構集中部にあり、52・55号住居を切り、92号土坑に切られる。覆土は礫が散在する黒褐色土。

構造 平面形は東西方向に長い方形で、床面規模は4.6×3.7mを測る。軸線はN-41°-Eを示す。明確なカマドは検出されなかったが、東壁中央の壁下に底部が被熱した浅い落ち込みがあり、覆土にも焼土粒が含まれるので、カマドの痕跡かも知れない。他に2個所の焼土ブロックが確認された。柱穴は対角に2基検出された。

遺物 1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。2・3は内面黒色土器坏。4は内面黒色土器・5は土師器の高台付皿で、高台は断面三角形を呈する。6・7は須恵器四耳壺で、7の肩の張りは強い。いずれも

52 竪



53 竪

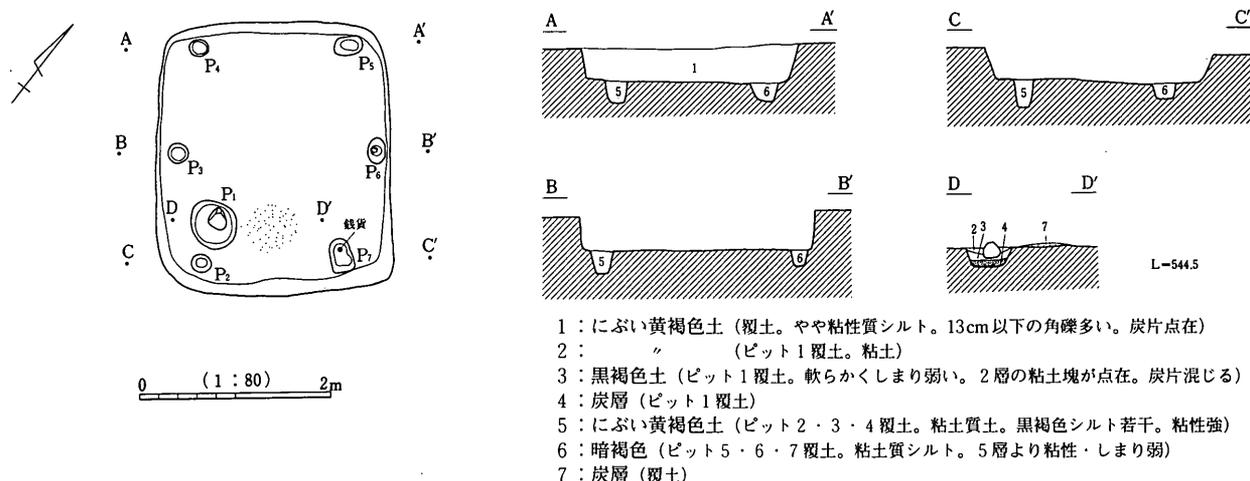


図109 52号・53号竪穴状遺構

覆土出土である。土器以外の遺物は、覆土から、刀子 (8)、棒状鉄製品 (16) が検出された。

時期 9世紀前半とする。

52号竪穴状遺構 (図109) 位置 R-14・15

検出 遺構集中部の東端に位置し、51号住居に切られる。覆土は礫を含む灰黄褐色土。

構造 比較的小形の方形竪穴で、床面規模は2.7×2.5m。軸線はN-44°-Wを示す。カマド・炉は確認できなかった。P1・P4には炭粒や灰を含んでいるが性格は不明。P1とP2は位置から見て柱穴と思われるが浅く不明確なものである。

遺物 遺物は少なく、図示できるものはないが、体部が大きく開く器形の須恵器坏、底部回転糸切り不調整の内面黒色土器坏、ロクロ整形の長胴甕が覆土から出土している。

時期 9世紀か。

53号竪穴状遺構 (図109) 位置 R-13・14

検出 遺構集中部に位置する。覆土は礫を含むにぶい黄褐色土。

構造 平面形は方形で、床面規模は2.6×2.3mと小形の竪穴である。軸線はN-40°-W。柱穴が長軸となる辺に3基ずつ認められ、床面は粘質土の貼床となる。カマドはなく、南壁よりの床面に厚さ数cmの

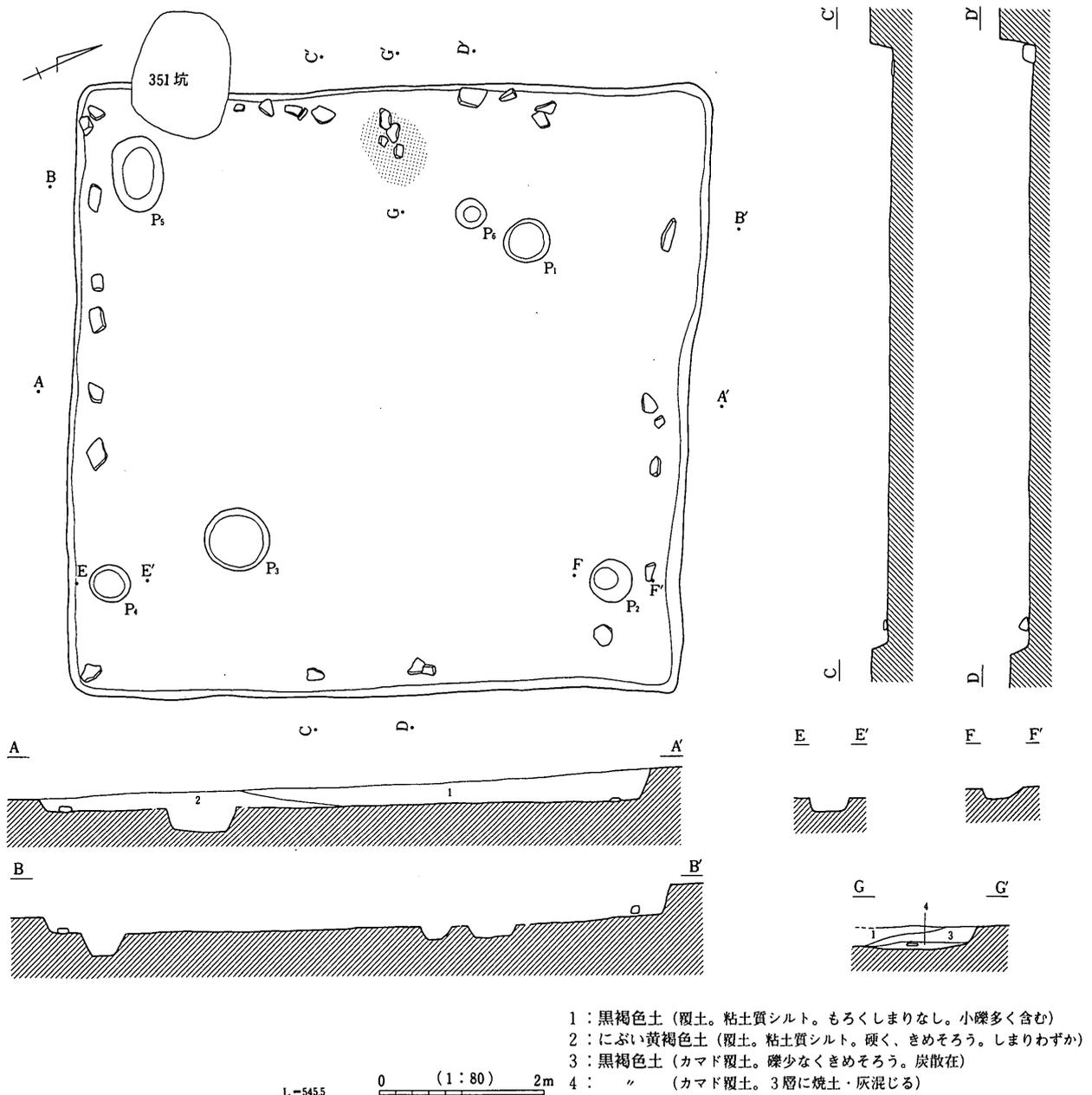


図110 54号竪穴住居跡

炭ブロックがあり、それに隣接して底部に炭層をもつ掘り込みがある。

遺物 覆土から播鉢片、政和通宝かと思われる銭貨(37)が出土している。

時期 出土遺物から中世と考える。なお、13号住居は構造的に本遺構に類似するといえる。

54号竪穴住居跡 (図110・163・164)      位置 R-8・9

検出 遺構集中部にあり、検出層位はIV層上面。351号土坑に切られる。覆土は南側に小礫を多く含むにぶい黄褐色土が堆積し、北側ではその上部に黒褐色土がのっている。

構造 隅が直となる方形の平面形で、7.4×7.1mの床面規模を測る大形住居である。軸線はN-63°-Wを示す。中央部から西壁にかけては堅緻な床面となる。カマドは西壁に中央部で火床部が検出され、火床上面にカマド構築材と考えられる角礫が点在する。袖や煙道部は遺存していない。P1~P4が支柱穴か。壁沿いにはところどころに床面に食込むように平石が一行に配置される。

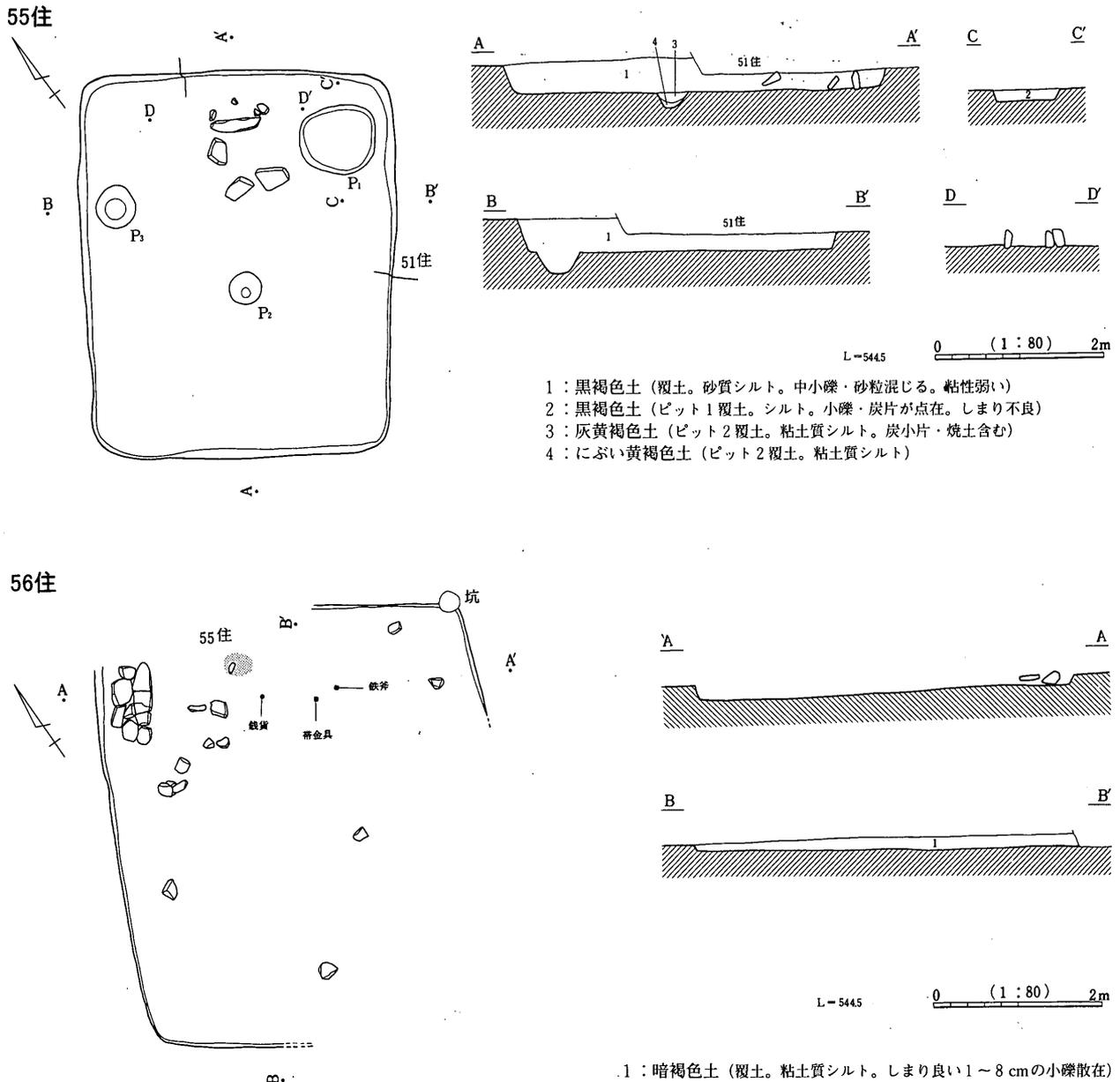


図111 55号・56号竪穴住居跡

**遺物** 1~7は須恵器坏で、うち底部回転糸切り不調整4点、回転糸切りの後静止ヘラケズリ・ナデ各1点、他1点は静止糸切りかもしれない。4は体部に黒斑を有するいわゆる軟質須恵器である。13は須恵器高台付坏。8~12は内面黒色土器坏で、うち底部回転糸切り不調整2点、回転糸切りの後静止ヘラケズリを施すもの3点である。9は古相の器形を呈する。17・18は長胴のロクロ整形の北信型甕で、18の口縁部はやや内彎するが、端部はしっかりした面取りがなされている。19~21は須恵器壺類。4・9・17・18はカマド周囲の床面、その他は覆土出土。他に釘(13)が覆土から出土した。

**時期** 坏類の特徴から8世紀末~9世紀初頭とする。14~16は混入。

**所見** 北信型甕の分布圏は9世紀前半までは拡大しないとされる(直井1996)ので、本住居のもつ宮平遺跡の中で類例のない構造とともに、その特異な出土状況が注目される。

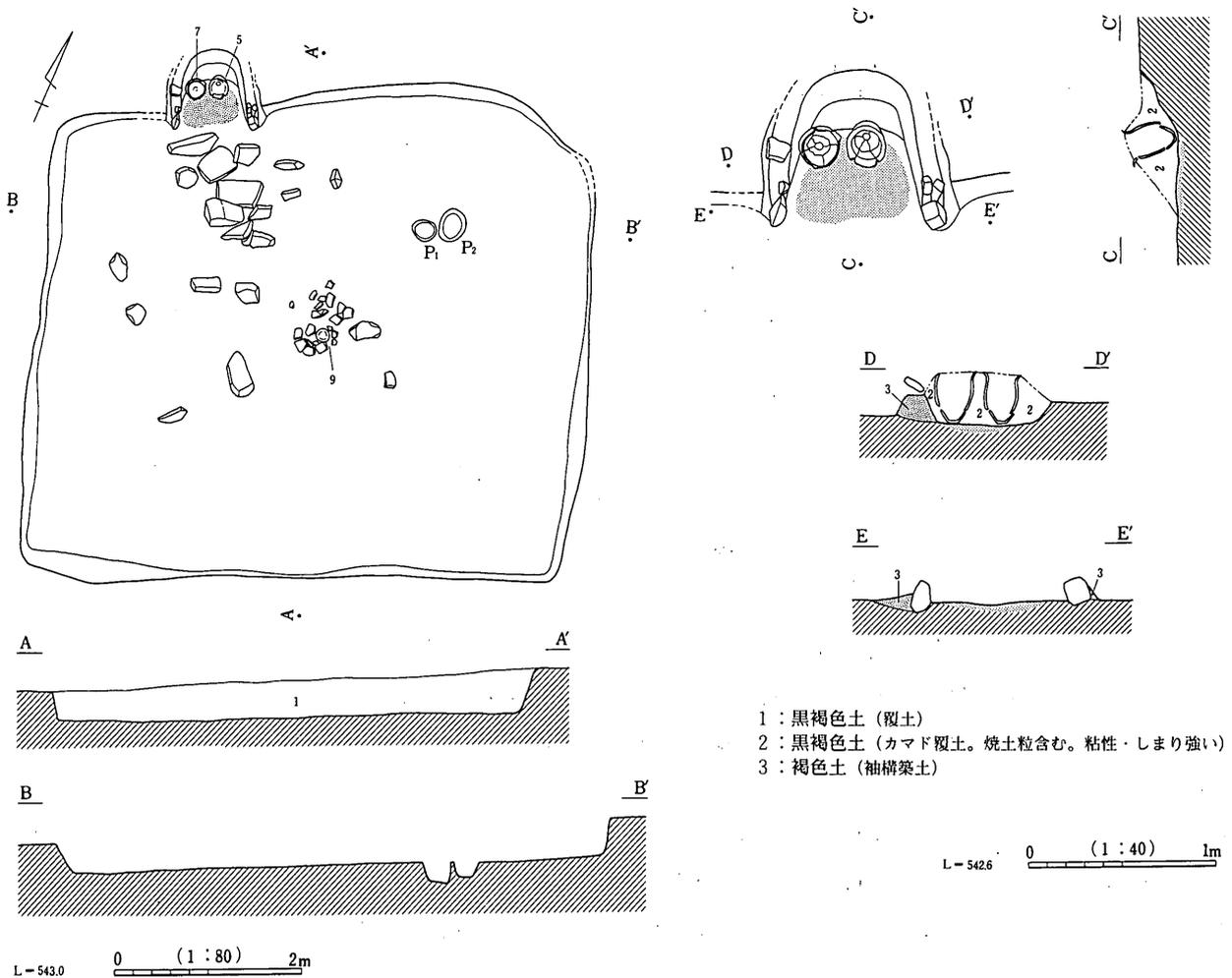


図112 58号竪穴住居跡

55号竪穴住居跡 (図111・164)

位置 R-14

**検出** 遺構集中部東端に位置し、56号住居・51号住居に切られる。IV層上面で検出。覆土は礫を含む黒褐色土。

**構造** やや南北に長い方形を呈し、床面規模は4.3×3.5m。軸線はN-34°-E。カマドは芯材の石のみが残存し、周囲に天井石などが散乱している。明確な火床や煙道は確認できなかった。P1はカマド右側の住居北東隅にあり、貯蔵穴か。

**遺物** 1・2は須恵器坏蓋。3～7は須恵器坏で、うち底部回転ヘラ切り3点、回転糸切り後ヘラケズリないしナデを施すもの2点を数える。器形は口径に比べ底径が割合広い。8は須恵器高台付坏で、高台は断面四角形。9～13は内面黒色土器坏で、うち底部回転糸切り不調整2点、回転糸切り後、ケズリを施すもの3点。器形は体部の内彎が強い古相の形態である。15はロクロ整形の土師器小形甕である。いずれも覆土出土。土器以外の遺物は帯金具(丸柄)(26)、磨石(23)が覆土上部から検出されている。

**時期** 8世紀後半に位置付ける。14は混入。

56号竪穴住居跡 (図111・164)

位置 R-14・19

**検出** 遺構集中部の東端に位置し、IV層上面検出。覆土は小礫が散在する暗褐色土である。調査段階では55号住居に切られると判断されたが、遺物の検討から新旧を逆転させた。従って、本住居が新しい。

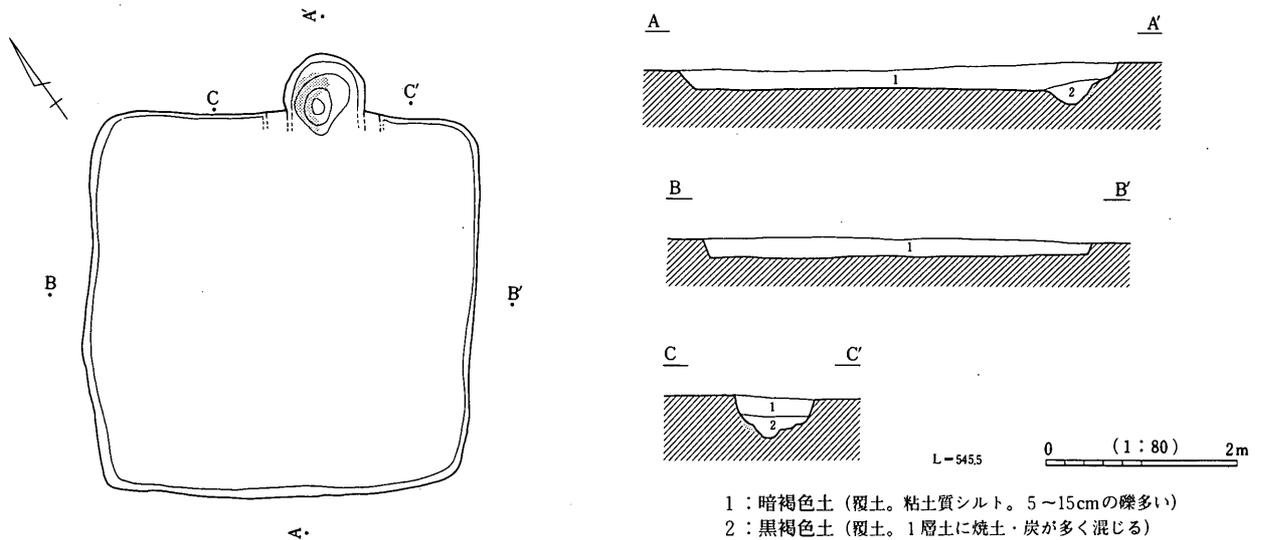


図113 59号竪穴住居跡

**構造** 北西隅で55号住居と切り合い、南東部は削平によって明確にできなかった。平面形は方形で、床面規模は5.0×4.5m程度。軸線はN—35°—E。カマドは北壁西寄りで火床の一部が確認され、その西側の西壁下に天井石をはじめとするカマド構築材がまとめて置かれていた。カマド廃絶に伴う片付けと思われる。柱穴は検出されなかった。

**遺物** 1は須恵器坏。2は須恵器高台付坏。3は体部の開きが大きい内面黒色土器坏。4は内面黒色土器高台付皿。坏はどちらも底部回転糸切り。出土はいずれも覆土中である。土器以外の遺物は、鉄斧(10)、帯金具(27)が覆土から検出された。なお、銭貨(38・39)が検出面で見つがっているが、本住居に属するものではない。

**時期** 8世紀末～9世紀前半とする。

**57号竪穴住居跡 (図84) 位置 R—10**

**検出** 遺構集中部の東端に位置する。検出はIV層上面。削平が著しく、検出できたのは北西隅の一部のみである。僅かに残った覆土は黒褐色土。

**構造** 検出された北西隅の状況より方形の平面形となろう。確認できた床面範囲は2.5×1.9m。軸線はN—41°—E。壁下には幅10cmほどの周溝が廻る。柱穴は2基検出。

**遺物** 遺物は出土していない。

**時期** 不明

**58号竪穴住居跡 (図112・164・165) 位置 V—4・5**

**検出** 45号住居の床面で検出され、45号住居を切っている。僅かに残存した覆土は黒褐色土。

**構造** 北東部が歪んでいるが、隅が直となる方形の平面形を呈する。床面規模は4.9×4.7mで、軸線はN—25°—W。カマドは北西隅近くの北壁に設置される。燃烧部が台形状に住居外に張り出す形態で、袖先端には板状の石が立てられている。火床部には2個体の甕が並列して直立する状態で出土したが、天井石は残存せず、カマド前面に散乱する。2基のピットが近接して存在する。

**遺物** 1は須恵器坏蓋。2は須恵器坏で、底部回転糸切り不調整。3は小形甕。4～6は口縁部く字状の東信型薄手甕。4の最大径は胴上部、5・6は口縁部にある。5の頸部の屈曲は弱い。7・8は口縁く

字状のロクロ整形の甕、9は横広形態のロクロ整形甕で、いずれも北信型といえる。7・8はタタキ痕を残す。5・7がカマド内に直立していたもの、4・6・8はカマド、9は床面、その他は覆土出土。

時期 8世紀末～9世紀初頭と考える。

59号竪穴住居跡 (図113・166) 位置 M-23、R-3

検出 遺構集中部の中程に位置する。IV層上面で検出。覆土は礫を多く含む暗褐色土。

構造 床面規模3.8×3.9mのほぼ正方形の平面形で、比較的小形。軸線はN-38°-Wを示す。カマドは北壁にあり、燃烧部が住居外に逆U字形に張り出す。柱穴は検出されなかった。

遺物 1～5は須恵器坏で、2～4は底部回転ヘラ切り後ヘラケズリないしナデ、1は底部全面ヘラナデのため切り離し技法は判然としない。6～8は須恵器高台付坏。9～12は古相の内面黒色土器坏。13は器壁は厚いが東信型に類似する器形の甕。最大径は口縁部にある。14は鉢。1・2・4・13・14はカマドないしカマド周辺の床面出土、その他は覆土出土。

時期 8世紀中葉に位置付ける。

60号竪穴住居跡 (図114・166) 位置 M-24、R-4

検出 遺構集中部の中程に位置し、62・79号住居を切る。IV層上面で検出。覆土は暗褐色土。

構造 隅が丸みをおびる方形の平面形状で、床面規模は4.1×5.0m。軸線はN-112°-E。南半部の床面は割と堅緻に締まっている。カマドは東壁中央に付設される。大形の角礫を主体に小礫を加えて組み、周りを粘質土で固めている。天井石などはカマド前面に散在する。支脚石が火床に残る。ピットは4基検出され、位置に不安はあるがP1・P3・P4が支柱穴か。

遺物 1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。2～7は体部が大きく開く内面黒色土器坏で、底部回転糸切り不調整が2点、他は回転糸切り後ヘラケズリないしナデを施すもの。2は墨書(「山」か)が認められる。8・9はロクロ整形の小形甕で、9は外面カキメ調整。10は口縁がく字状に外反する薄手の東信型甕で、最大径は胴上部。11は底部を欠くが、半球形を呈する体部で口縁がく字状に外反する鍋。2・3・6・11はカマド、5・6・10は床面、他は覆土出土。

時期 9世紀前半と考える。

61号竪穴住居跡 (図84・166) 位置 R-4・5

検出 遺構集中部にあり、62・12号住居を切り507号土坑に切られる。覆土は礫を殆ど含まない暗褐色土である。

構造 南側が歪む方形を呈し、床面規模は4.1×4.0/4.2mを測る。軸線はN-25°-W。床面は締まりの良い粘質土を貼っている。カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物 遺物は少なく、古相の内面黒色土器坏が1点図示できたのみである(1)。

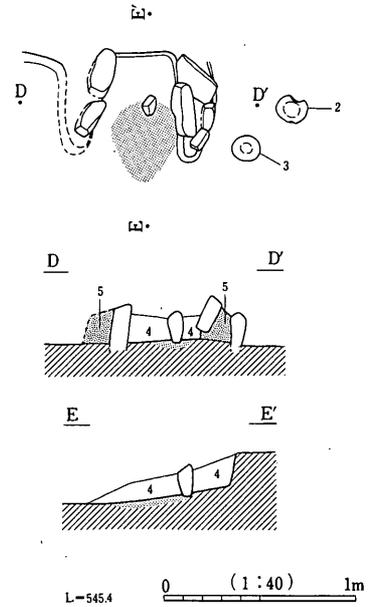
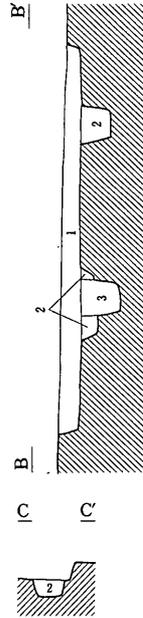
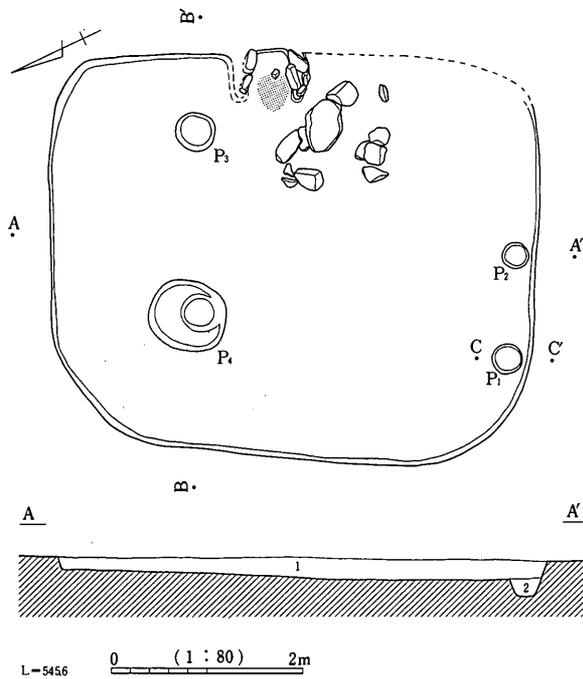
時期 8世紀後半と考えておきたい。

62号竪穴住居跡 (図114・166) 位置 R-4

検出 遺構集中部に位置し、60・61号住居、365号土坑に切られる。IV層上面で検出。覆土は黒褐色土で、上部には多くの礫を含むが下部は少ない。

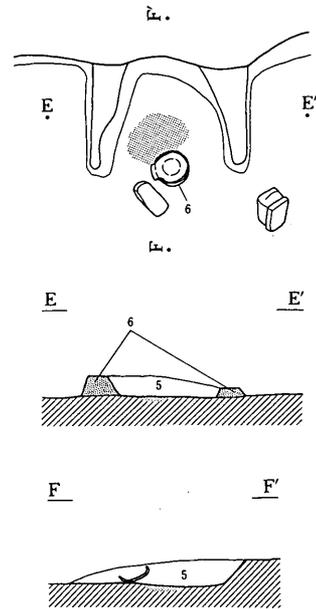
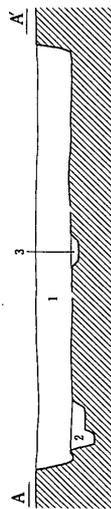
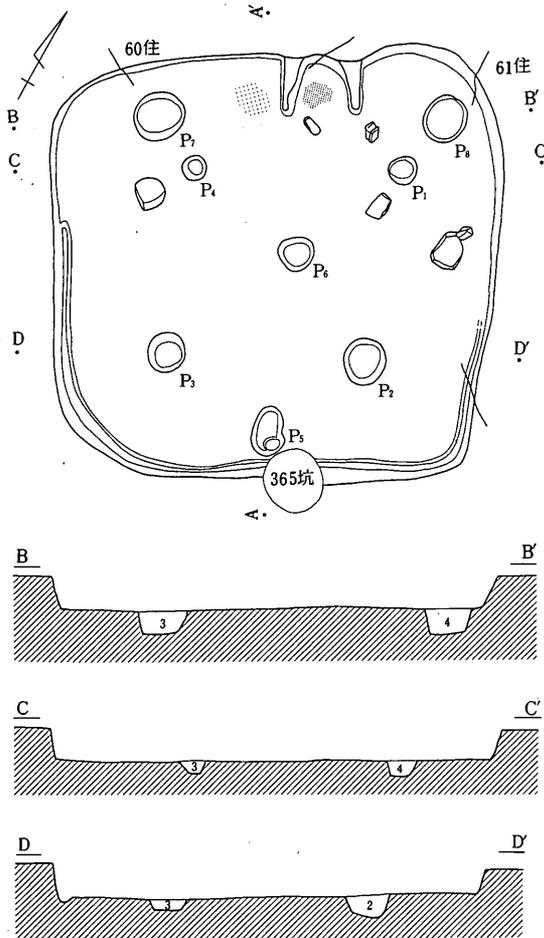
構造 隅がやや丸みをおびる方形で、4.3×4.2/4.6mの床面規模。軸線はN-29°-Wを示す。床面は非常に堅緻になっていた。住居南半部には周溝が巡る。カマドは北壁中央右寄りに設置される。柱穴は

60住



- 1 : 暗褐色土 (覆土。黄褐色土混じる。硬くしまりあり)
- 2 : " (ピット2・3覆土。粘土質シルト。しまり僅かにあり)
- 3 : 黒褐色土 (ピット4覆土。焼土少し混じる)
- 4 : " (カマド覆土。粘土質シルト。しまり僅かにあり。炭灰が散在)
- 5 : 褐色土 (袖構築土。黄褐色土混じる。硬くしまりあり)

62住



- 1 : 黒褐色土 (覆土。砂質シルト。中小の礫が多めに混じる、粘性弱い)
- 2 : " (ピット1・2・5覆土。シルト質。小礫点在、しまり弱い)
- 3 : 褐色土 (ピット3・4・6・7覆土。シルト質。小礫点在)
- 4 : 黄褐色土 (ピット8覆土。砂質シルト。粘性なく、しまり弱く、軟らかい)
- 5 : 黒褐色土 (カマド覆土。上部に焼土と炭灰が混じる)
- 6 : にぶい黄褐色土 (袖構築土。砂質シルト)

図114 60号・62号竪穴住居跡

6基検出され、P2・P3・P7・P8が支柱穴と考えられ、P1・P4は補助的な柱か。南壁にかかるP5は入り口に関係するものか。

**遺物** 1・2は須恵器坏蓋。3は底部回転糸切り後ナデの須恵器坏。4・5は内面黒色土器坏で、4は体部立ち上がりが急な器形、5は体部の開きが大きい器形。その他の器種としては、甕(6)、鉢(7)、焼成後底部穿孔の甑(8)、須恵器壺(9)、小形甕(10)が認められる。すべて覆土出土。

**時期** 8世紀後半とする。

**63号竪穴住居跡** (図84・167) 位置 N—21・22

**検出** 遺構集中部東端に位置する。覆土は礫を少量含む暗褐色土。

**構造** 北西隅のみを検出したが、他は削平により不明。確認できた床面規模は2.4×1.9m。軸線はN—24°—E。床面は不明瞭で、ピットが1基検出された。カマドは不明だが、西壁近くに火床の痕跡と考えられる焼土が確認された。

**遺物** 遺物は少ないが、3点が図示できた。1は半球形の体部から短く内傾して口縁部が立ち上がる器形の内黒土師器坏。2はヘラミガキ調整の甕。3は半球形坏部の土師器高坏。いずれも覆土出土。

**時期** 7世紀中葉～後葉か。

**64号竪穴住居跡** (図84) 位置 S—6・7

**検出** IV層上面で検出。覆土は礫を少量含む黒褐色土。

**構造** 比較的小形の方形住居で、床面規模は2.9×2.8m以上。軸線はN—30°—W。床面不明瞭でカマド・柱穴は検出されなかった。

**遺物** 覆土から土器片が少量出土したのみ。厚手の長胴甕、須恵器甕がある。

**時期** 6世紀末～8世紀中葉以前か。

**65号竪穴住居跡** (図115・167) 位置 Q—15・20、R—11・16

**検出** 遺構集中部に位置し、24号建物に切られる。50号住居と重なるはずだが切り合い関係は不明。覆土は黒褐色土の単層。

**構造** 方形を呈するが南半部は削平される。確認された床面規模は2.7×3.7m。軸線はN—41°—Wを示す。カマドは北壁に付設され、礫を芯材にして砂質土で固めている。天井石はカマド前面に落ちている。柱穴は未検出。

**遺物** 1は胴部に刺突文を施す須恵器壺、肩に1条の沈線を巡らす。2は球胴甕。4は口縁部をく字状に外反させる長胴甕。4はカマド、その他は覆土出土。

**時期** 7世紀か。3は混入であろう。

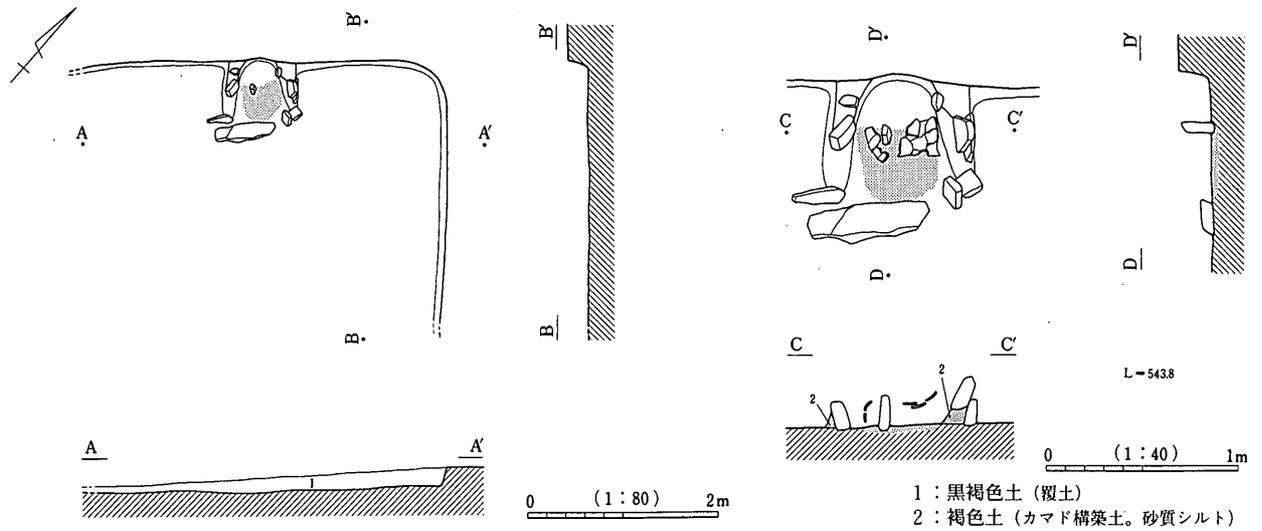
**66号竪穴住居跡** (図115・167) 位置 R—6・7

**検出** 遺構集中部の中程に位置する。IV層上面で検出され、79号建物に切られる。覆土は礫を多く含む黒褐色土。

**構造** 平面形は西側がやや狭くなる逆台形を呈する。床面規模は3.9×3.9/4.3mで比較的小形の住居である。軸線はN—125°—Eを示す。カマドは燃烧部奥半が住居壁外に張り出す形態で、東壁中央に設置されるが、遺存状態は悪く、火床と右袖の一部が確認されたのみ。柱穴は検出されなかった。

**遺物** 1・2は須恵器坏で、1は底部回転糸切り不調整。2・4は内面黒色土器坏で、古相の形態を残

65住



66住

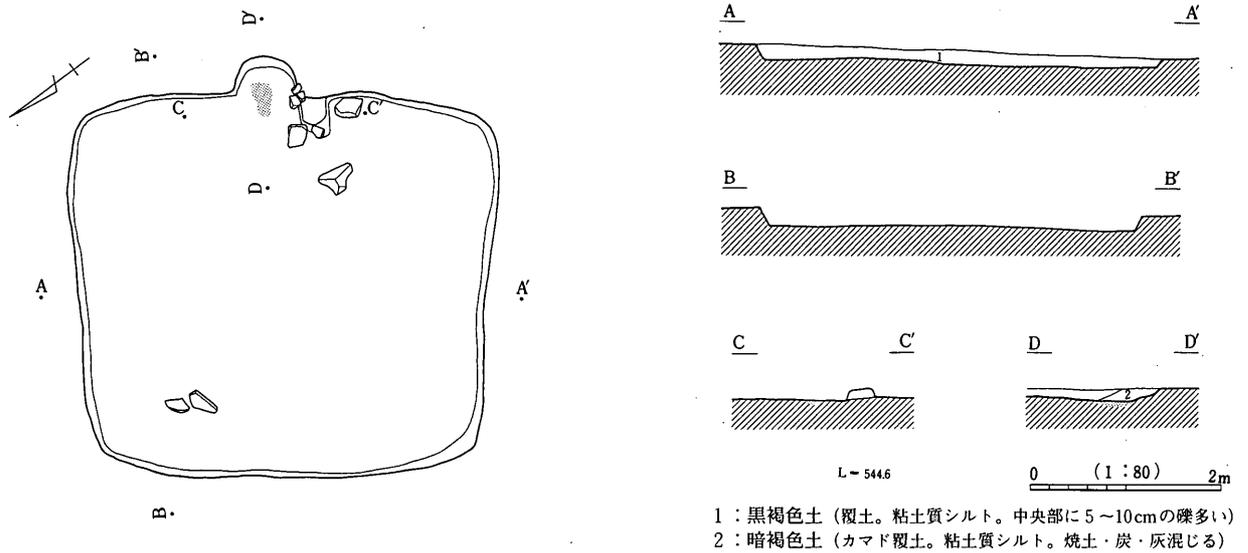


図115 65号・66号竪穴住居跡

している。5は小形甕。6・7は口縁く字状の長胴甕。6は東信型、7は胴部外面縦ハケ・口縁部内面横ハケを施す中・南信系の甕。2・4・6・7はカマド、その他は覆土出土。

時期 8世紀末～9世紀前半と考える。

67号竪穴住居跡 (図116・168) 位置 M-22、R-2

検出 遺構集中部にあり、68号住居を切り558号土坑に切られる。覆土は小礫を含む暗褐色土。

構造 東西に長い方形で、床面規模は5.2×3.6mを測る。軸線はN-124°-E。カマドは東壁中央に位置し、袖石と火床部が残存する。火床部には10～20cmほどの礫が点在する。床面はカマド前面は堅緻だが、他は地盤の礫が露出し不明瞭となる。西壁側で2基のピットが検出されたが、柱穴かどうか不明。

遺物 カマド右側から右隅付近の床面から坏・皿類がまとめて出土した(2～6)。1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。2～6・9は内面黒色土器で、2・3は底部回転糸切り不調整の坏、4・5は高

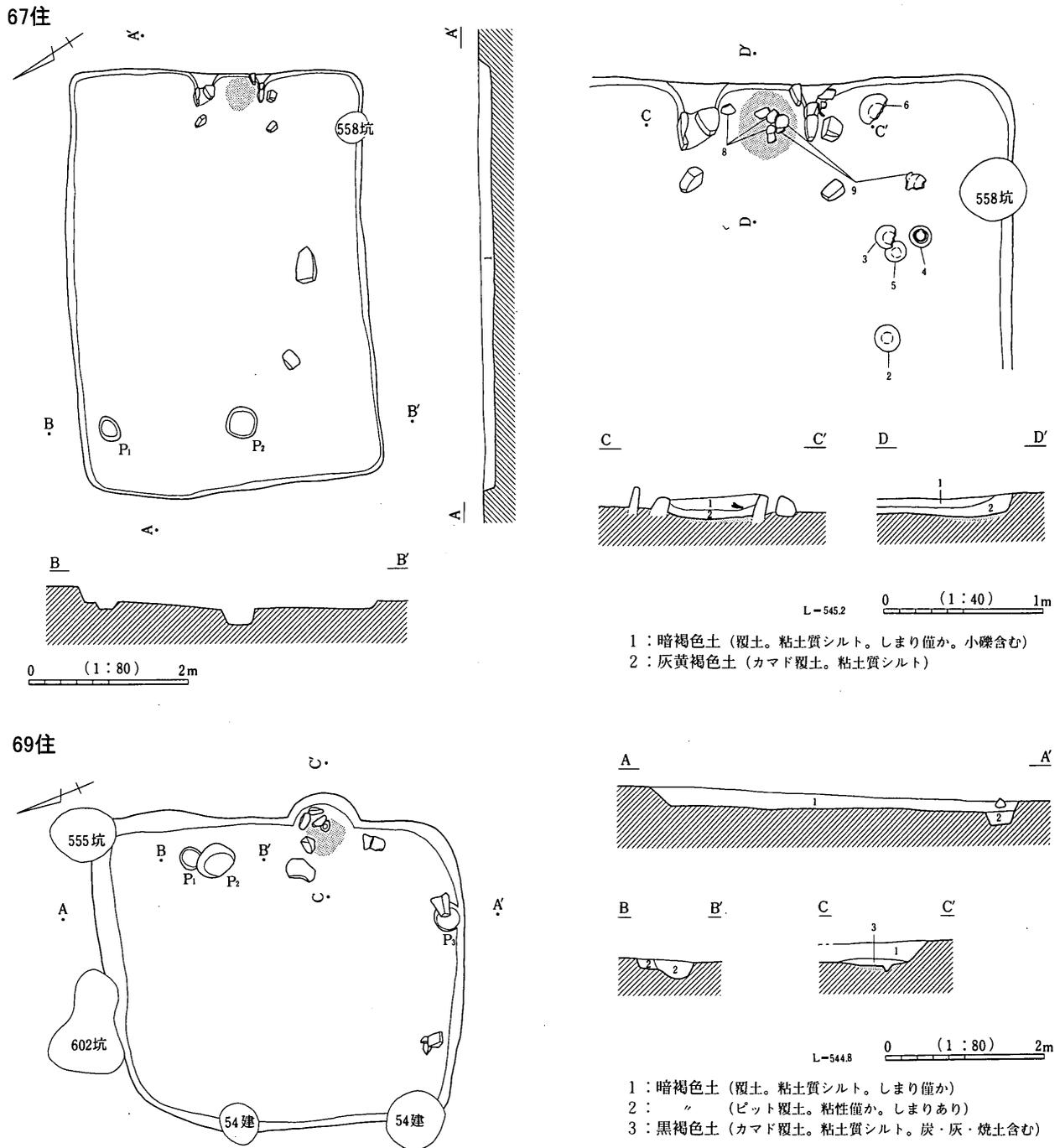


図116 67号・69号竪穴住居跡

台付皿、6は碗、9は鉢。7・8は東信型甕。8の口縁部はコ字状に近似している。1・7・8はカマド、9はカマドと床面出土の破片が接合した。

時期 9世紀後半に位置付ける。

68号竪穴住居跡 (図83・168) 位置 R-1・2

検出 遺構集中部に位置する。IV層上面で検出され、67号住居に切られる。覆土は小礫が混じる暗褐色土である。

構造 東西方向が長い方形を呈する。床面規模は5.6/6.0×4.0m程度。軸線はN-32°-E。検出範

囲ではカマドは存在しない。ピットは3基検出。床面・壁立ち上がりは削平などにより不明瞭。

遺物 遺物は少なく、底部静止ヘラケズリの内面黒色土器坏1点のみが図示できた(1)。覆土出土。

時期 8世紀末～9世紀か。

69号竪穴住居跡(図116・168) 位置 R-1・2・6・7

検出 遺構集中部のⅣ層上面で検出。555・602号土坑に切られる。覆土は小礫を多く含む暗褐色土の単層である。

構造 北西隅が丸みをおびる方形の平面形で、床面規模は3.7×3.7/4.2m。軸線はN-113°-E。燃焼部奥半が住居壁外に張り出す形態のカマドは、東壁中央やや南側に付設される。支脚石抜き取り痕がみられる火床部が検出された。カマド前面には天井石があり、カマド内には角礫が投げ込まれている。床面はカマド前面から右側(南)にかけては、比較的堅緻となっていた。ピットは3基検出されたが柱穴かどうかは不明。

遺物 1～3は体部の開きが大きい器形の須恵器坏で、底部回転糸切り不調整。4～9は内面黒色土器。4～7は体部の開きが大きい坏、8は高台付皿、9は鉢。7はカマド、1・2・6・9は床面、他は覆土出土。

時期 9世紀前半と思われる。その中でも遅い方と考える。

70号竪穴住居跡(図117) 位置 Q-4・5

検出 遺構集中部の西端に位置する。検出層位はⅣ層上面。覆土は小礫を含む暗褐色土。

構造 正方形に近い平面形で、床面規模は3.7×3.5m。軸線はN-64°-W。床面は粘質土で薄く覆われるが貼床のように締まっていない。柱穴はP1～P4の4基か。P3には焼土粒が含まれ、カマド燃焼部の可能性がある。また、住居中央部には浅い不整形の落ち込みが見られたが、性格は不明。

遺物 遺物は少なく、すべて小片で図示できるものはないが、須恵器付蓋、内面黒色土器坏、東信型甕が覆土から検出された。東信型甕の口縁部はコ字状の萌芽とみられるものがある。

時期 9世紀前半としておきたい。

71号竪穴住居跡(図117・168) 位置 Q-5、R-1

検出 遺構集中部にある。Ⅳ層上面で検出。覆土は礫を多く含む黒褐色土。

構造 規模は70号住居に類似し、床面規模3.9×3.7mの正方形に近い形状を呈する。立ち上がりは浅くて不明瞭。カマドは東壁中央部やや南側に位置し、カマド前面に構築材と考えられる大形礫が広がっている。カマド右側のP1は貯蔵穴か。P2は柱穴、P5は入り口に関係するものか。

遺物 1は須恵器坏蓋。2・3は底部回転糸切り不調整の須恵器坏、4・5は内面黒色土器坏で、4は底部回転糸切り不調整、5は口縁部が短く外反する大形のもの。6はロクロ整形の小形甕で、外面はカキメ調整。4はP5、6はP3、2は床面、その他は覆土出土である。

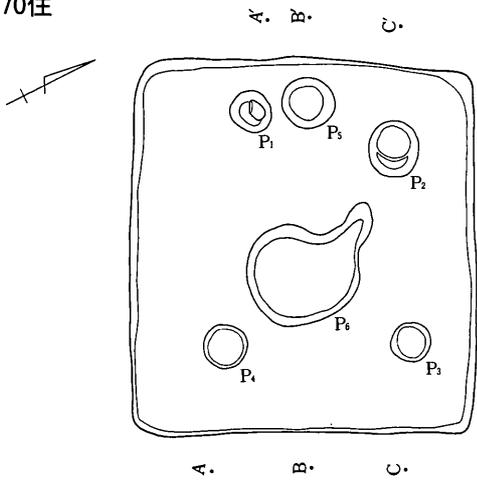
時期 9世紀前半に位置付ける。

72号竪穴住居跡(図118・168・169) 位置 M-16・17・21・22

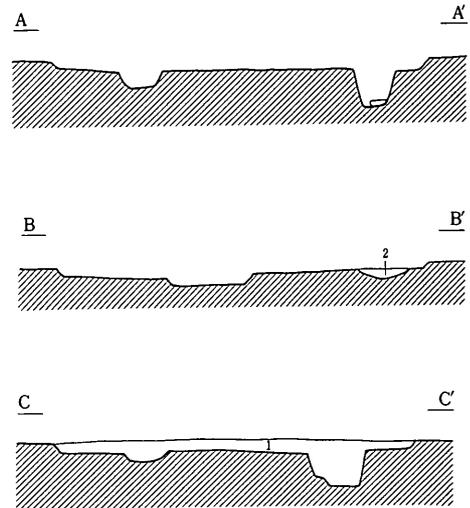
検出 遺構集中部の東端に位置する。他の遺構との切り合いはない。覆土は黒褐色土の単層。

構造 比較的大形の方形住居で、床面規模は6.0×6.1m。軸線はN-30°-W。床面は砂質土だが若干硬化が見られる。カマドは板状の礫を立て、砂質土で覆っている。カマド内や前面にやや小形の礫が散乱

70住



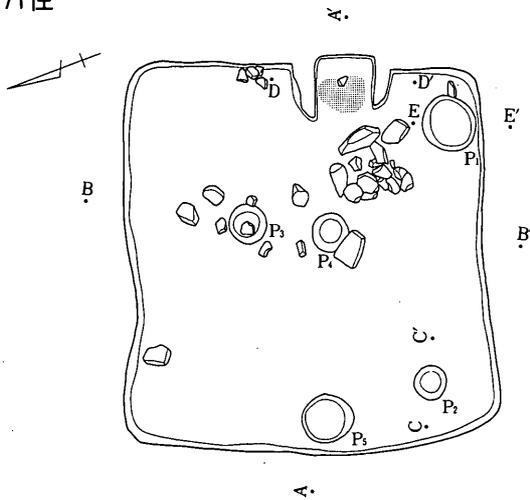
0 (1:80) 2m



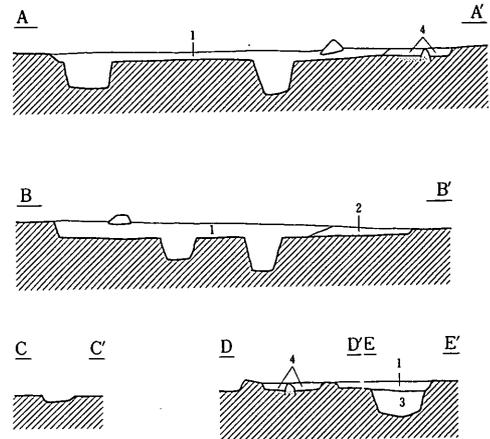
L-544.4

- 1 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。1~4 cmの小礫が点在)
- 2 : 黒赤褐色土 (ピット5覆土。粘土質シルト。焼土粒点在。全体に灰混じる。粘性大。しまり小)

71住



0 (1:80) 2m



L-544.6

- 1 : 黒褐色土 (覆土。中小の礫を比較的多く含むシルト)
- 2 : 灰黄褐色土 (覆土。粘土質シルト。粘性やや大。礫を殆ど含まない)
- 3 : 暗褐色土 (ピット1覆土。砂質シルト。小礫点在)
- 4 : 黒赤褐色土 (カマド覆土。シルト。焼土粒含む。底部に炭片点在)

図117 70号・71号竪穴住居跡

しており、構築材か。煙道部は明瞭に残る。柱穴はP1~P5が主柱穴で、規模・深さが一定する。南壁に近いP6・P7も浅いが類似した規模を持ち、補助的な柱穴か。

**遺物** 1は宝珠つまみが付くと思われる須恵器坏蓋。2・3は須恵器坏。4~10は内黒土師器坏で、4~9は半球形体部、10はやや丸みを帯びた底部からやや内彎して立ち上がる体部をもつ。11は櫛状工具により、口頸部に波状文、肩に直線文を施す須恵器大甕。その他の器種としては、球形胴を呈する土師器大形壺ないし甕(12)、球形胴の甕(13・14)、長胴甕(15~18)、土師器高坏(19~23)、外面カキメ調整の須恵器壺(24)がある。高坏には鈍い稜をなして口縁部が外反するもの(20)がみられる。2はカマド火床面、14~23は床面、その他は覆土出土である。土器以外の遺物は、刀子(6)、鉄斧(9)、鑿(11)、棒状(17)・彎曲(18)・板状(19)の鉄製品が覆土から出土している。

**時期** 7世紀中葉に位置付ける。

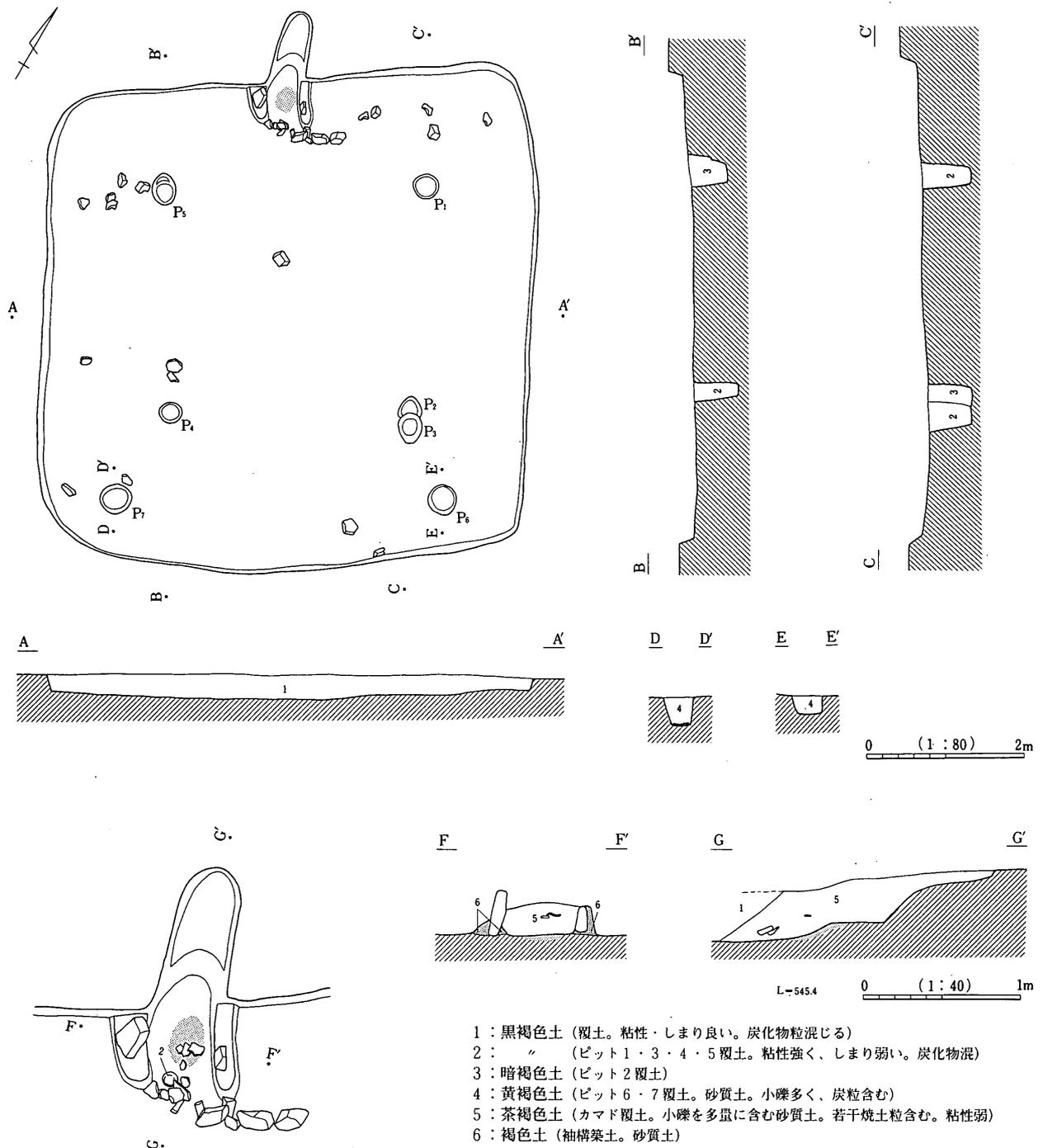


図118 72号竪穴住居跡

73号竪穴住居跡 (図84・170) 位置 M—12・13

**検出** 遺構集中部東端に位置する。IV層上面で検出し、削平が著しく東壁部の一部を検出したに過ぎない。覆土は黒褐色土の単層。

**構造** 方形を呈するが全体の規模は不明。確認できた床面規模は4.2×2.0m。軸線はN—38°—Eとなる。床面・立ち上がりとも不明瞭。カマド・柱穴は不明。

**遺物** 覆土から少量の土器が出土した。1は底部回転糸切り不調整の内面黒色土器坏。2は口縁く字状の甕で、おそらくロクロ整形の北信型甕と思われる。

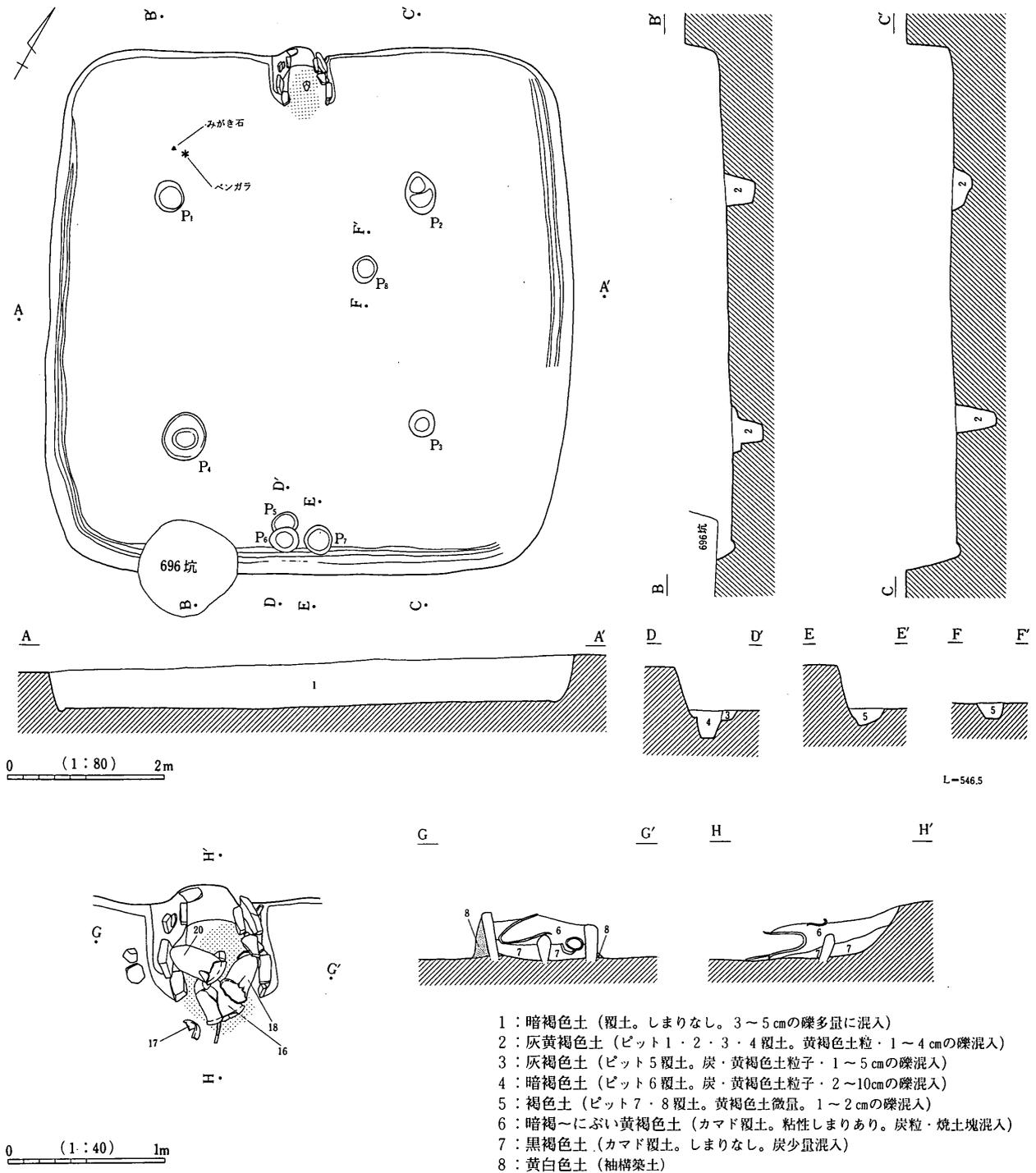


図119 74号竪穴住居跡

時期 9世紀後半か。

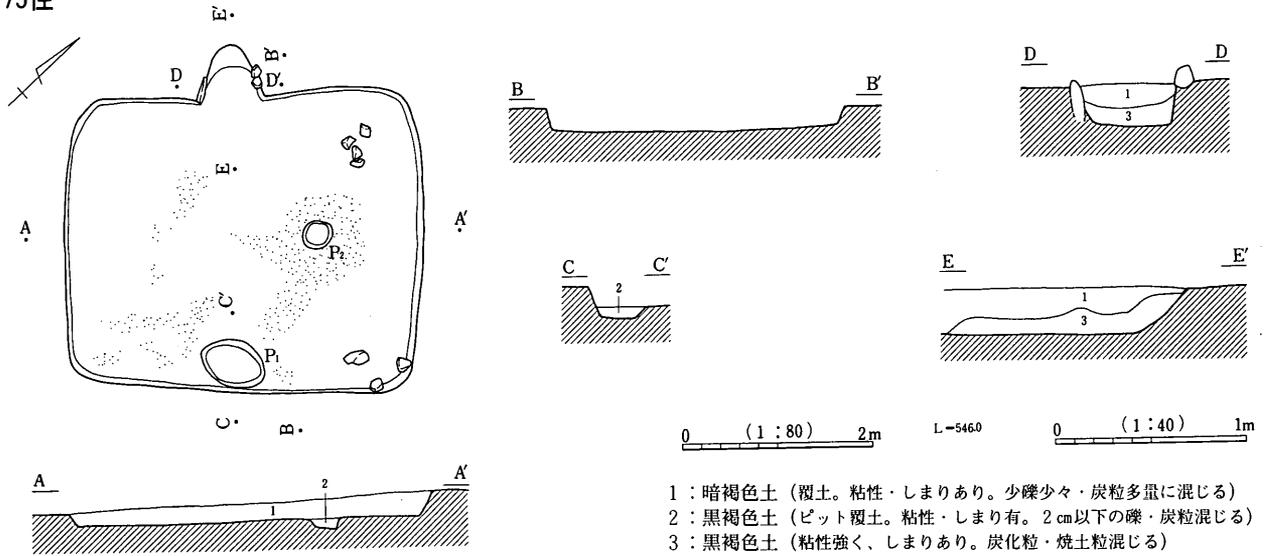
74号竪穴住居跡 (図119・170・171)

位置 M-8・9・13・14

検出 遺構集中部北側にある。検出層位はIV層上面で、696号土坑に切られる。覆土は礫を多量に含む暗褐色土の単層。

構造 床面規模6.4×6.4mを測る比較的大形の正方形を呈する住居で、軸線はN-30°-Wを示す。壁立上がりはさほど明確ではないが、カマドが付設される北壁を除き周溝が巡る。カマドは北壁中央に両袖

75住



76住

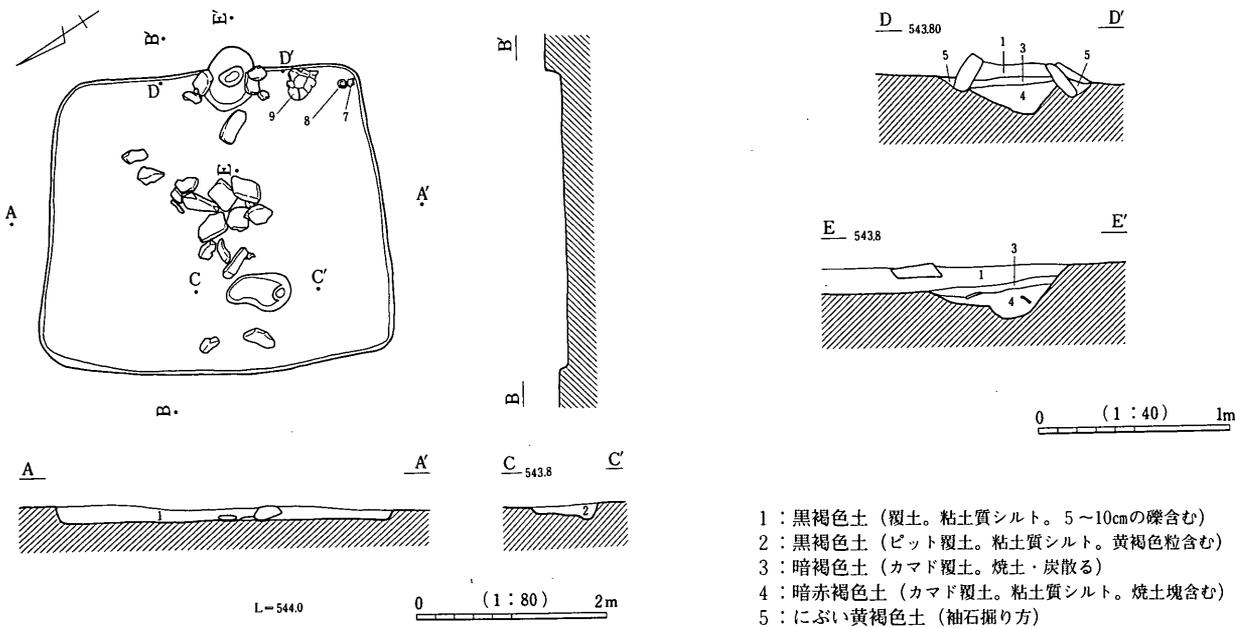


図120 75号・76号竪穴住居跡

に数個の板状の石を立て周囲を粘質土で固めて構築している。天井部は残っていない。カマド内には3個体の甕が倒れた状態で出土。支脚石は火床部に1個認められる。土器はカマド廃絶時に投棄したものであろう。床面は堅緻な黄褐色の貼床となっている。柱穴はP1~P4の4本が主柱穴で、南壁中央部に3基のピットがある。入り口構造に関係するか。なお、カマド左側の床面からベンガラと思われる赤色物質とみがき石が近接して出土した。

**分析** ベンガラと思われる赤色物質のX線回折分析を行ったところ、ヘマタイトで構成される赤色顔料のベンガラの可能性が高いという結果を得た。

**遺物** 1~6・15・25は須恵器。1は古墳時代的・2は古代的な坏蓋。3~5は坏、6は高台付坏、15は壺蓋か。25は底部外側に突帯を巡らす植木鉢形の鉢で、底面に多数の刺突がある。7~10・12~14は内

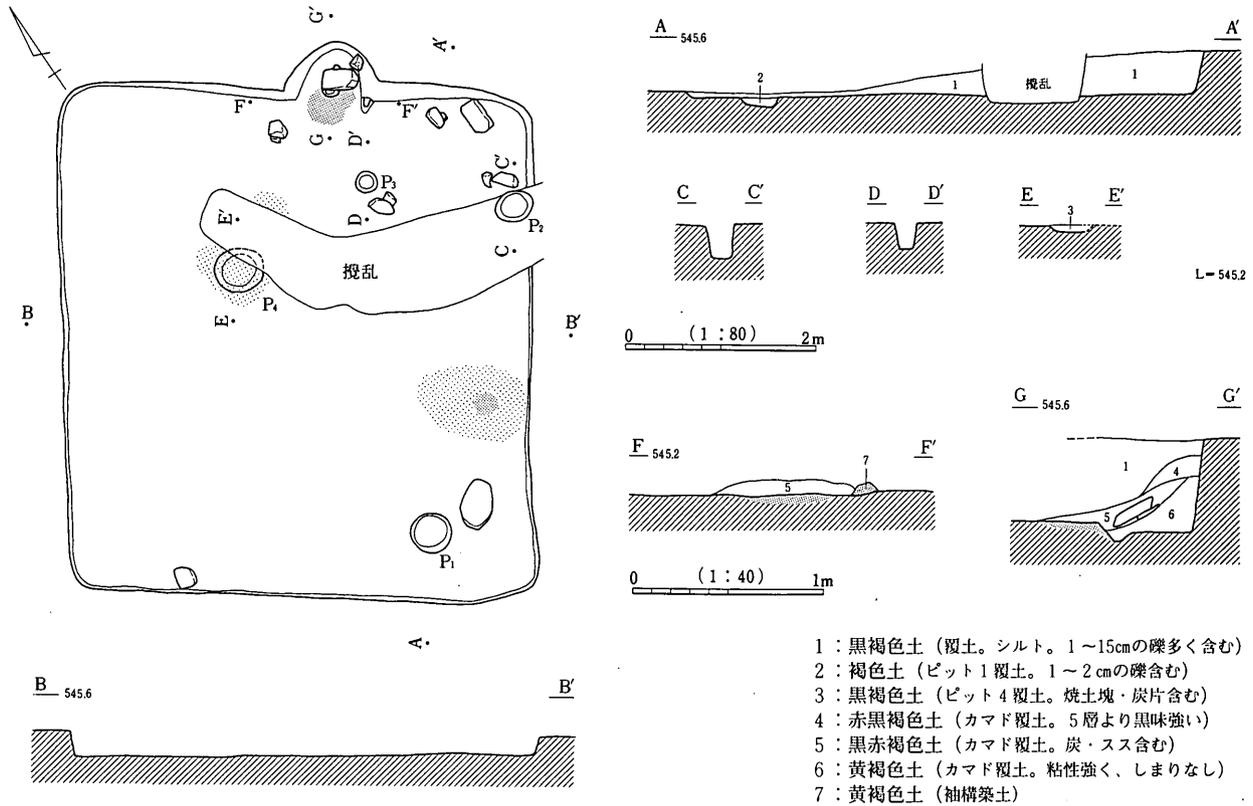


図121 77号竪穴住居跡

黒ないし両黒土師器坏で、半球形体部のもの(8・9・10・13・14)と平底に近いもの(7・12)がある。10は口縁部が短く内傾気味に直立し、14は深い体部をもつ。16~20は長胴甕で、胴部下部から上部まで直径があまり変わらない器形。最大径は口縁部にある。その他の器種としては、土師器鉢(21・22)、高坏(23・24)がある。16・18・20がカマド内に倒れていたもの、10・17・21・22・23はカマド、他は覆土出土。土器以外の遺物は板状鉄製品(21)の他、石鏃(18)、スクレイパー(19)、磨石(25・28・31)が覆土から検出されている。

時期 7世紀後葉に位置付ける。

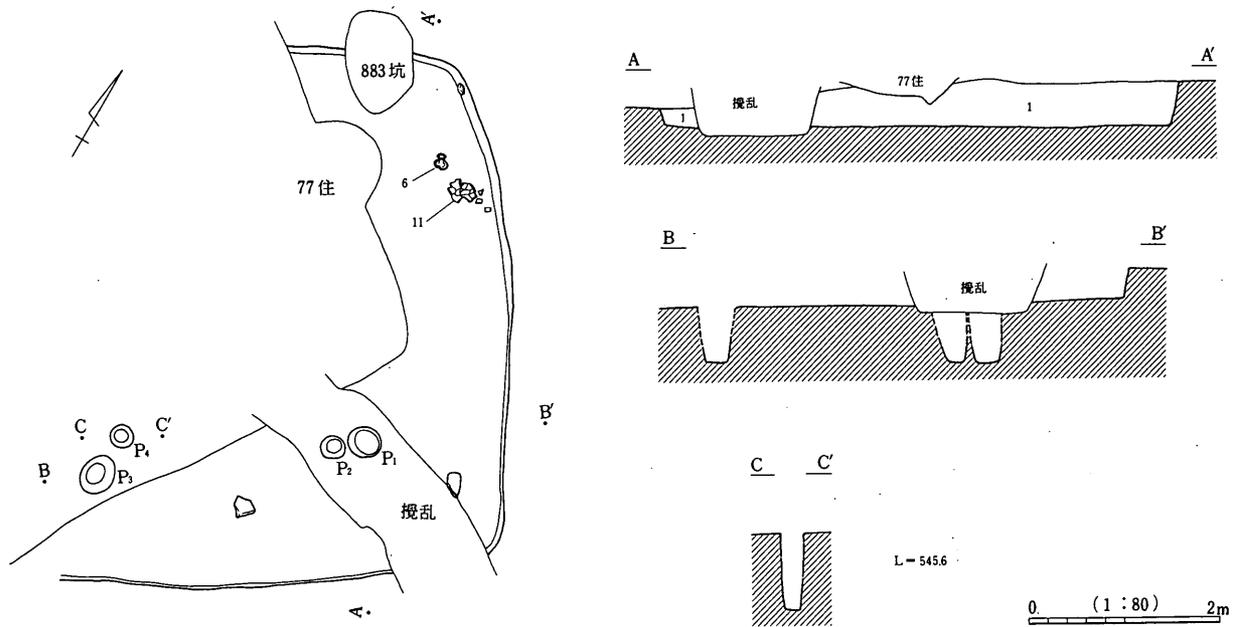
75号竪穴住居跡(図120・171) 位置 M-13・18

検出 遺構集中部に位置し、他の遺構との切り合いはない。IV層上面で検出。覆土は炭化物粒を多量に含む暗褐色土。

構造 平面形状は方形で、床面規模は3.0×3.7m。軸線はN-40°-Wを示す。比較的小形の住居である。北壁に設置されるカマドは燃烧部が住居外に広がる構造で、燃烧部両側に礫を立てている。床面上には焼土や炭化物の広がり認められ、住居廃絶時に火をかけているのかもしれない。床面は割と明確で、2基のピットが検出されたが柱穴とは考えにくい。

遺物 遺物は少なく小片で、図示できるものはないが、半球形体部の内黒土師器坏、古墳時代的須恵器坏蓋、古代的須恵器坏蓋、厚手の長胴甕がみられる。

時期 7世紀後葉~8世紀前葉と考えておきたい。



1：暗褐色土（覆土。シルト。粘性少。1～13cmの角礫混じる）

図122 78号竪穴住居跡

76号竪穴住居跡（図120・171） 位置 L—16・17

**検出** IV層上面で検出。77号建物に切られる。覆土は礫を含む黒褐色土の単層。

**構造** 東側がやや狭い台形状を呈し、床面規模は3.0×3.1/3.6mを測る。軸線はN—123°—E。カマドは東壁中央に石組みで造られる。両袖の石は残存するが破壊により内側に倒れ込んでいる。住居中央には被熱した平石などがまとまって投棄されており、カマド構築材と考えられる。床面は西半部では堅固な貼床となるが、それ以外では地盤の礫が露出する。不整形のピットが1基検出された。

**遺物** 1・2は底部回転糸切り不調整の須恵器杯。3～8は内面黒色土器杯で、底部回転糸切り不調整のもの1点、回転糸切り後ヘラケズリないしナデを施すもの4点である。8は小形のもの。9は東信型甕で、口縁上部が外曲する。2・4～6はカマド火床面、1・3・7～9は床面出土。他に石鏃（13）が覆土中で検出された。

**時期** 9世紀中葉～後半に位置付ける。

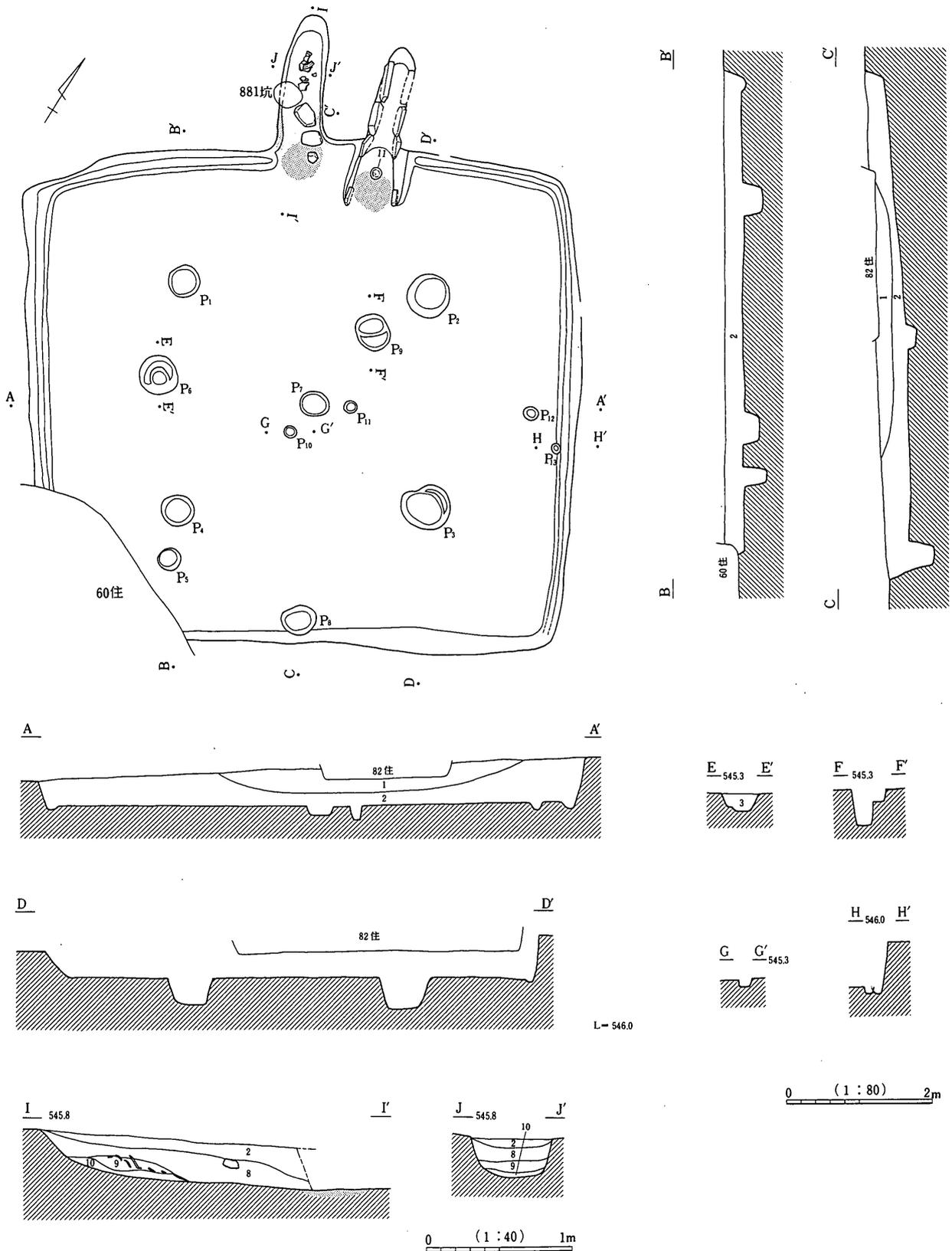
77号竪穴住居跡（図121・171） 位置 M—21・22

**検出** 遺構集中部にあり、78号住居を切り1203号土坑に切られる。検出層位はIV層上面。覆土は礫を多く含む黒褐色土の単層。

**構造** 平面方形で、床面規模は5.2×4.8m。軸線はN—35°—E。黒褐色の堅緻な床面であるが、南側の一部は直接地山の床面となる。燃烧部奥半が住居壁外に張り出すカマドは北壁中央に位置し、火床部と構築材の礫が僅かに残るのみ。東壁中央の壁下にも火床状の焼土が確認された。カマド造り替えの可能性もある。P1・P2は柱穴か。

**遺物** 1は須恵器杯蓋。2～5は底部回転糸切り不調整の須恵器杯。6・7は内面黒色土器杯。8は直立気味の短い口縁部をもつ須恵器甕。2・3・7はカマド火床面、6・7は床面、その他は覆土出土。

**時期** 8世紀末～9世紀初頭と考える。



- |                                |                               |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 : 黒褐色土 (覆土。粘土質シルト。しまりあり。炭混)  | 6 : にぶい黄褐色土 (カマド1覆土。ローム粒混。硬い) |
| 2 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。しまりあり。小礫混) | 7 : 灰褐色土 (カマド1袖構築土及び貼床。粘土質)   |
| 3 : " (ピット6覆土。粘性しまり強。炭片混)      | 8 : にぶい黄褐色土 (カマド2覆土。焼土・炭・灰混)  |
| 4 : 灰黄褐色土 (カマド1覆土。粘性強。灰混じる)    | 9 : 暗灰黄色土 (カマド2覆土。灰の塊。粘性強い)   |
| 5 : 黒褐色土 (カマド1覆土。粘土質。焼土・炭・灰混)  | 10 : にぶい赤褐色土 (カマド2覆土。8層と同質)   |

図123 79号竖穴住居跡 (1)

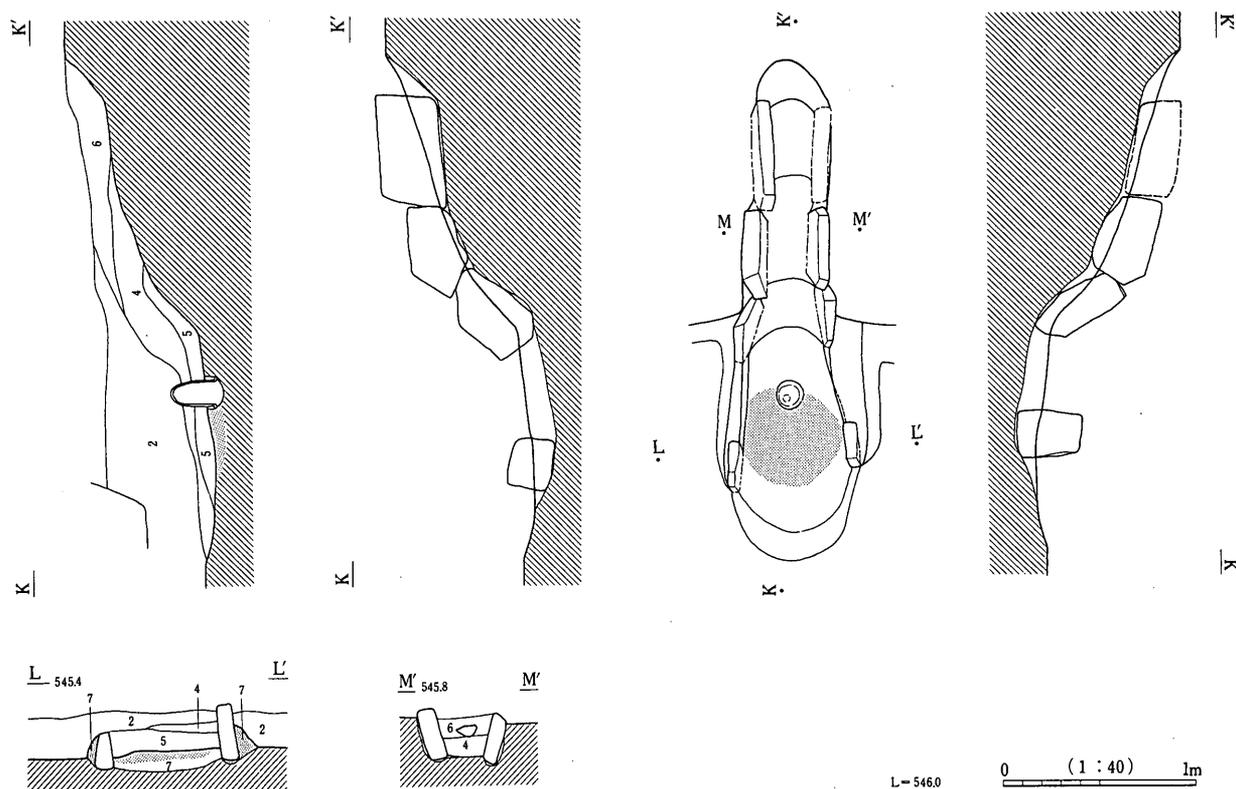


図124 79号竪穴住居跡(2)

78号竪穴住居跡 (図122・171・172)

位置 M-23

**検出** 遺構集中部に位置し、IV層上面で検出。77号住居・883号土坑に切られる。覆土は礫を含む暗褐色土の単層。

**構造** 住居中央から西側を77号住居に切られるが、方形の平面形を呈し、床面規模は5.5×4.5m以上を測る。軸線はN-29°-Wを示す。検出範囲ではカマドは存在しない。細くて深いピットが攪乱部や77号住居床面下から合わせて4基検出された。本住居の柱穴の可能性はある。

**遺物** 1は天井部と体部に境に稜をもつ須恵器坏蓋だが、体部は短い。2～5は土師器ないし内黒土師器坏。2は半球形体部、3は深い体部、4は須恵器坏蓋模倣器形、5の内面には放射状の暗文がみられる。その他の器種としては、高坏(6)、鉢(9・10)、長胴甕(11)、須恵器直口壺(8)がある。7は蓋の一種であろうか。1・6・5・7・9・11は床面、その他は覆土出土。

**時期** 7世紀前葉～中葉と考える。

79号竪穴住居跡 (図123・124・172・173)

位置 M-19・24・25

**検出** 遺構集中部にあり、60・82号住居、881号土坑・686墓に切られる。検出層位はIV層上面。覆土は2層に分けられ、上層は炭や土器が混じる暗褐色土で、下層は小礫を含む黒褐色土である。

**構造** 整った方形の平面形で、床面規模は6.5×7.2mを測る大形住居である。軸線はN-33°-W。南壁を除いて細い周溝が巡る。カマドは北壁中央で2基検出され、造り替えが想定できる。新段階のカマドは中央よりやや東側(右側)のもので、袖は石組みを粘質土で覆って構築している。また、煙道部も両側に板石を並べて組んでいる。火床部には甕を伏せ支脚としている。旧段階のカマドは北壁中央にあり(左側)、長く延びる煙道部と火床部が残存する。煙道部から土器片と角礫が出土。床面は住居東側で堅緻となる。P1～P4が支柱穴と考えられ、他にも8基の大小ピットが検出された。南壁のP8は入り口構造

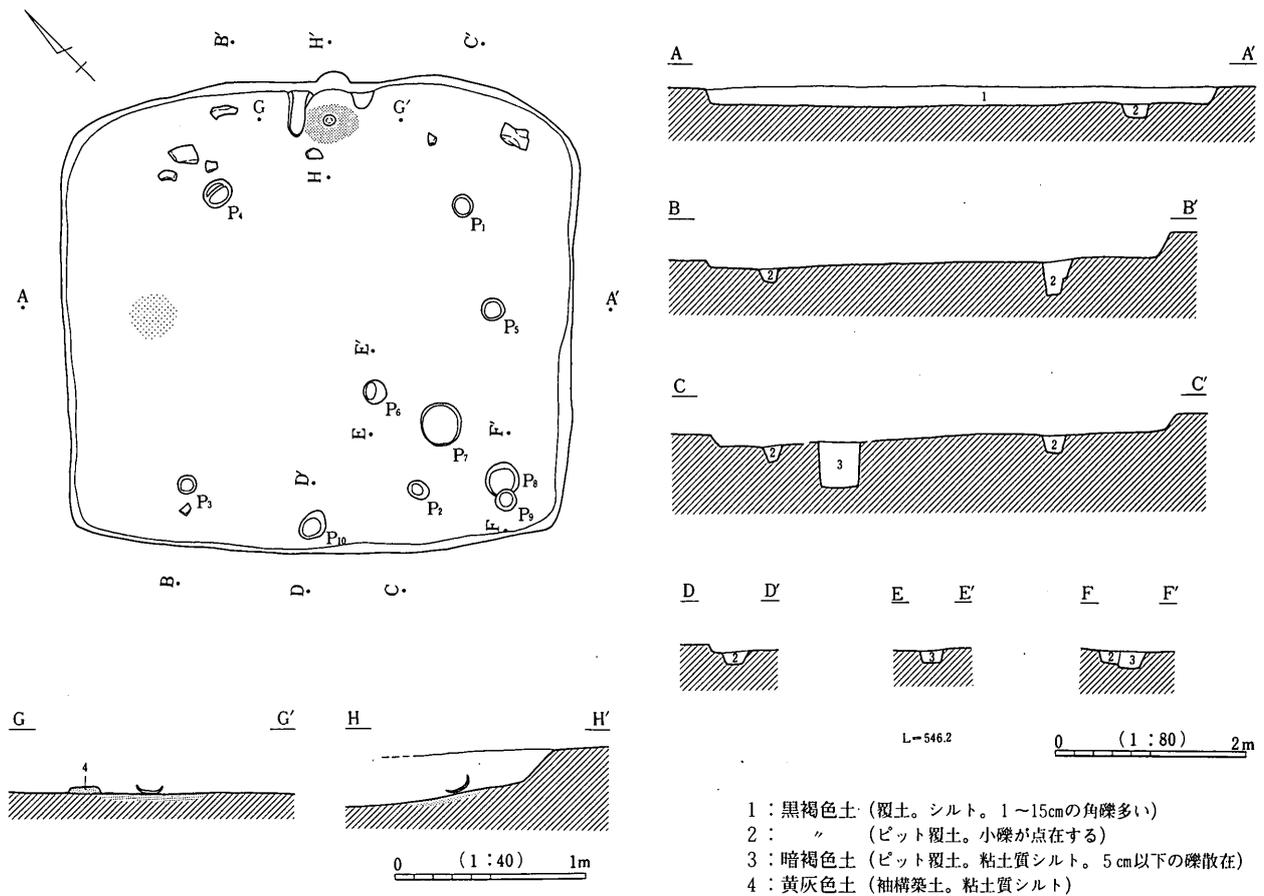


図125 80号竪穴住居跡

に關係するものか。

**遺物** 1は体部に稜をもつ須恵器坏ないし坏蓋。2は須恵器坏。3～7は土師器ないし内黒土師器坏。3・5・6は丸みを帯びた底部から外傾ないし内彎する体部が立ち上がる器形。7の底部はヘラケズリのため平底となっている。8～12は長胴甕。11は小振りである。その他の器種としては、小形甕(13・14)、鉢(15～20)、底部多孔甕(22)、甕ないし鉢(21)、高坏(23・24)、小形土器(25)がある。8・10・11・21・22はカマド、3はカマド右の床面、9はP2および床面、その他は覆土出土。土器以外の遺物は、床面で耳環(23)、覆土から石製紡錘車(3)が出土した他、磨石(24・29)が検出されている。

**時期** 7世紀前葉～中葉と考える。

**80号竪穴住居跡** (図125・173・174)

**位置** M—20・25・N—16・21

**検出** 遺構集中部の北端にあり、IV層上面で検出し886号土坑を切り57号建物に切られる。覆土は礫を多く含む黒褐色土。

**構造** 平面形は北隅がやや丸みを帯びる方形を呈する。床面規模は4.7×5.2m。軸線はN—46°—E。カマドは北壁中央に付設される。袖は粘質土で構築されるが袖石や天井石は遺存しない。火床面中央に脚部を欠いた高坏坏部が置いてあった。床面には薄く暗褐色の貼床が施される。10基のピットが検出されたが、位置関係するとP1～P4が主柱穴と考えられるが細くて浅い。

**遺物** 1は天井部と体部の境に稜をもつ須恵器坏蓋。2～7は土師器ないし内黒土師器坏。3・4・6・7は半球形体部、2・5は丸みを帯びた底部から外傾する体部が立ち上がる器形。2の内面に放射状暗文

が認められる。その他の器種としては、長胴甕(8~10)、球胴甕(11)、小形台付甕(12)、高坏(13~16)、鉢(17~21)、蓋(22)がある。高坏坏部は半球形を呈し、浅いものと深いものがある。13はカマド火床面、12はカマド右脇の床面、5・6・10・11・19~21は床面、その他は覆土出土。土器以外の遺物は、覆土から、耳環(24)、土製紡錘車(2)が出土した他、スクレイパー(20)が検出された。

時期 7世紀中葉と考える。

81号竪穴住居跡(図84) 位置 N-11・16

検出 IV層上面で検出。2号住居と切り合うはずだが、確認できなかった。

構造 検出範囲は南西隅のごく一部に止まるが、平面形は方形。確認できた床面規模は1.7×1.1m。軸線はN-21°-Wとなる。調査範囲が狭くカマド・柱穴などの施設は不明。

遺物 遺物は出土していない。

時期 不明。

82号竪穴住居跡(図126・174) 位置 M-19・24

検出 遺構集中部に位置し、79号住居を切り、871号土坑に切られる。覆土は小礫が混じる暗褐色土の単層である。

構造 住居の殆どが79号住居に重なる。平面形は南北に長い方形で。床面規模は2.6×4.3m程度。軸線はN-118°-E。79号住居に重なる範囲は貼床が行われている。カマドは東壁中央部に板状石を組んで構築している。左側袖は内側に倒れこんでおり、天井石などは取り除かれている。火床には支脚石が残る。柱穴は検出されなかった。

遺物 1~3は須恵器坏で、1は底部ヘラ切り後ナデ、2・3は底部回転糸切り不調整。4は内面黒色土器坏である。いずれも覆土出土。

時期 8世紀末~9世紀初頭と考える。

83号竪穴住居跡(図126・174) 位置 M-15・19・20

検出 遺構集中部にあり、IV層上面で検出。86号住居・945墓に切られる。覆土は黒褐色土の単層。

構造 隅がやや丸みをおびる方形の平面形で、床面規模は5.1×4.9m。軸線はN-57°-E。床面は若干の硬化が見られる。カマドは東壁と北壁の2箇所で見出された。東壁のカマドは袖の基部と火床が残存する。北壁のカマドは煙道部が遺存し、前面には構築材と考えられる礫がまとまって投棄される。煙道部両側には石組の一部が残存する。柱穴は北西を除き2基ずつ(P1・P5、P2・P7、P3・P8)存在し、住居建て替えに伴ってカマドを移設したとも考えられる。

遺物 1は須恵器坏。3~4は半球形体部の内黒土師器坏。4はやや底部の丸みが弱い。5は須恵器盤。6~8は長胴甕。9は小形土器で、ミニチュアの壺か。8が東カマド、その他は覆土出土。

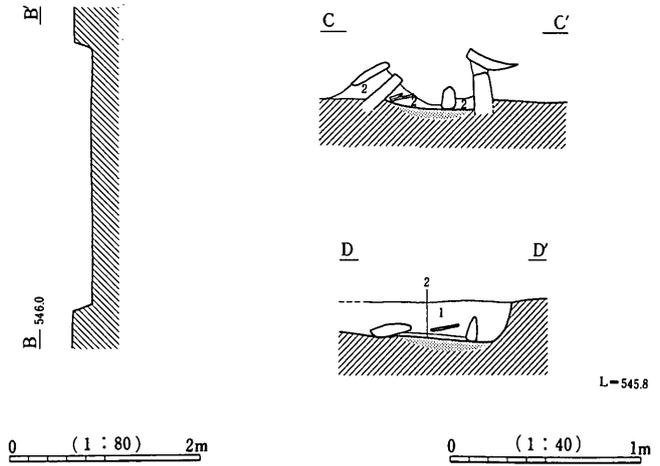
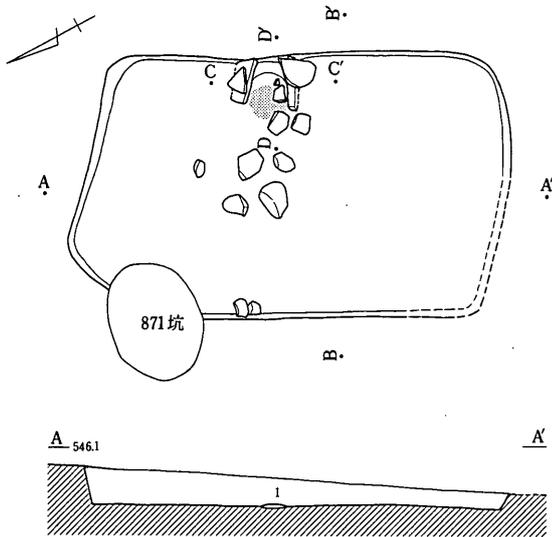
時期 7世紀中葉~後葉とする。

84号竪穴住居跡(図85・175) 位置 X-2・3

検出 調査区南東隅の低位段丘面に向かう緩斜面に位置する。南半部は削平される。覆土は礫を少量含む黒褐色土。

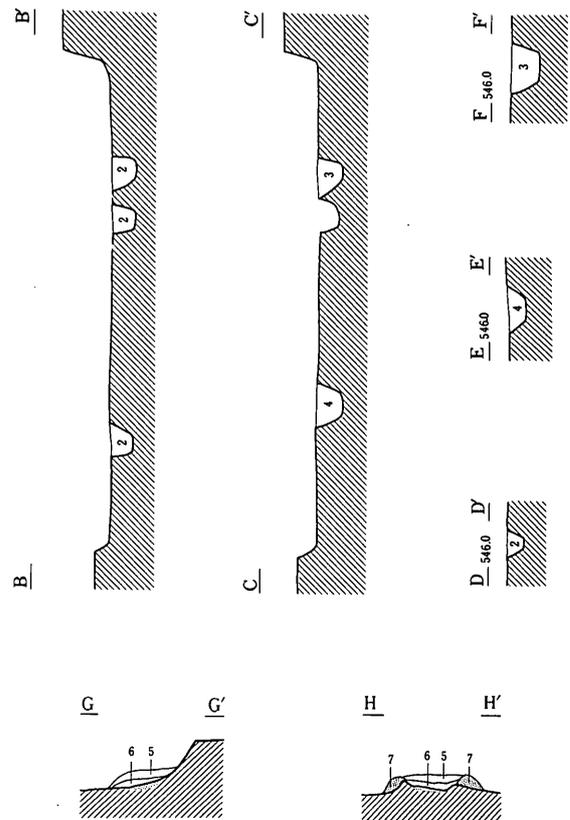
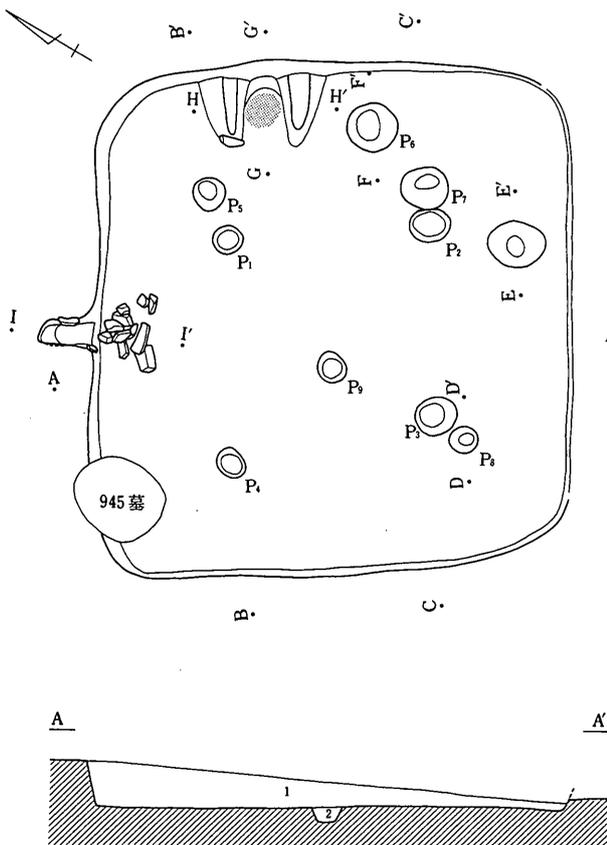
構造 方形の平面形で、床面規模は3.9×3.2m以上。軸線は真北を向く。北東隅に付近に火床と焼土の広がりが見出されたがカマド痕跡かどうか不明。検出範囲に柱穴はない。

82住



- 1 : 暗褐色土 (覆土。粘土質シルト。小礫混じる)
- 2 : 黒褐色土 (カマド覆土。粘土質シルト。炭・灰混。締り強)

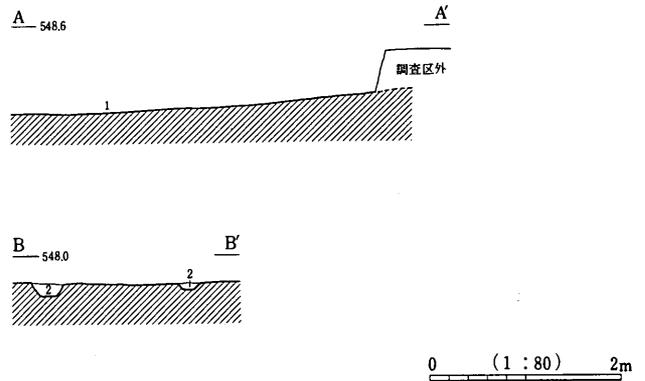
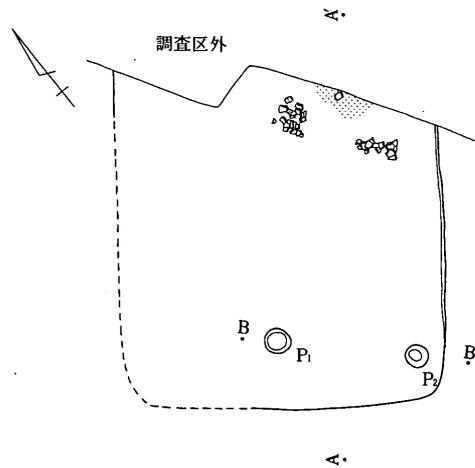
83住



- 1 : 黒褐色土 (覆土)
- 2 : 褐色土 (ピット覆土。粘性・しまり強い。炭僅かに含む)
- 3 : 黒褐色土 (ピット覆土。4層より炭粒多い)
- 4 : 暗褐色土 (ピット覆土。粘性・しまり弱い)
- 5 : にぶい黄褐色土 (カマド覆土。粘土質)
- 6 : 黒褐色土 (カマド覆土。炭粒多量。焼土粒含む。粘性強く、しまり弱い)
- 7 : 褐色土 (袖構築土)

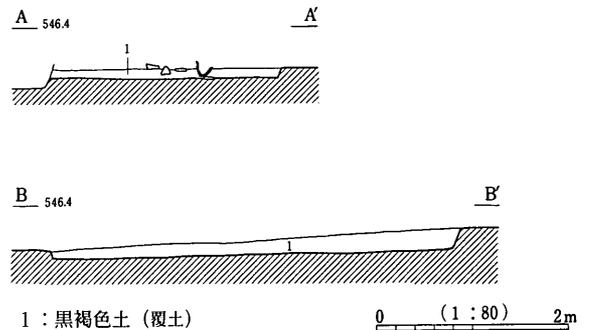
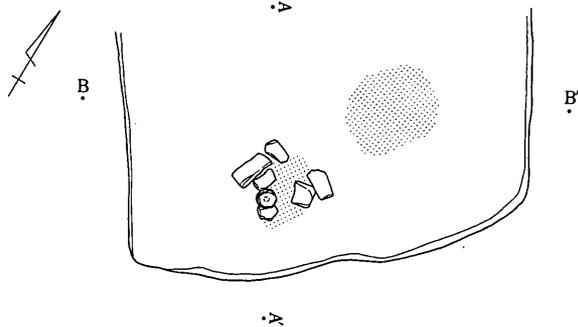
図126 82号・83号竪穴住居跡

85住



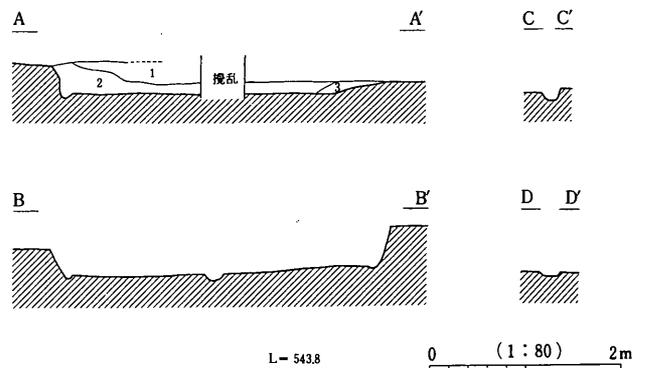
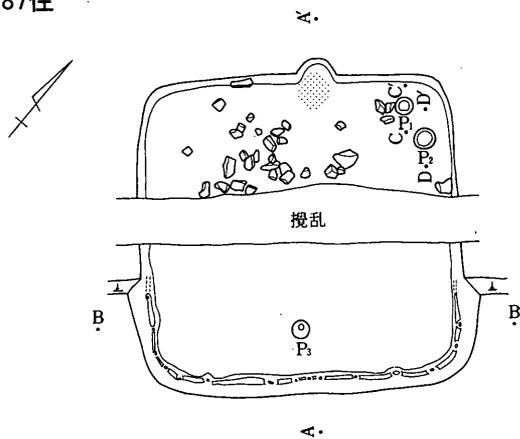
- 1 : 暗褐色土 (覆土)
- 2 : 褐色土 (ピット覆土。粘性・しまりあり。5 cm以下の礫混じる)

86住



- 1 : 黒褐色土 (覆土)

87住



- 1 : 黄黒褐色土 (覆土。5 cm以下の礫・黄褐色土小ブロック混。隙間多)
- 2 : 黒褐色土 (覆土。粘性・しまりあり。1~2 cmの礫少々混。炭化物多)
- 3 : 黒茶色土 (カマド覆土。焼土粒・炭粒混じる)

図127 85号・86号・87号竪穴住居跡

遺物 1は口縁部く字状の東信型甕で、最大径は口縁部。2はロクロ整形小形甕。どちらも覆土出土  
 時期 8世紀末~9世紀前半か。

85号竪穴住居跡 (図127・175) 位置 B-20・25

検出 調査区北端の丘陵裾に位置する。北壁は調査区外に広がり、西壁部は削平される。

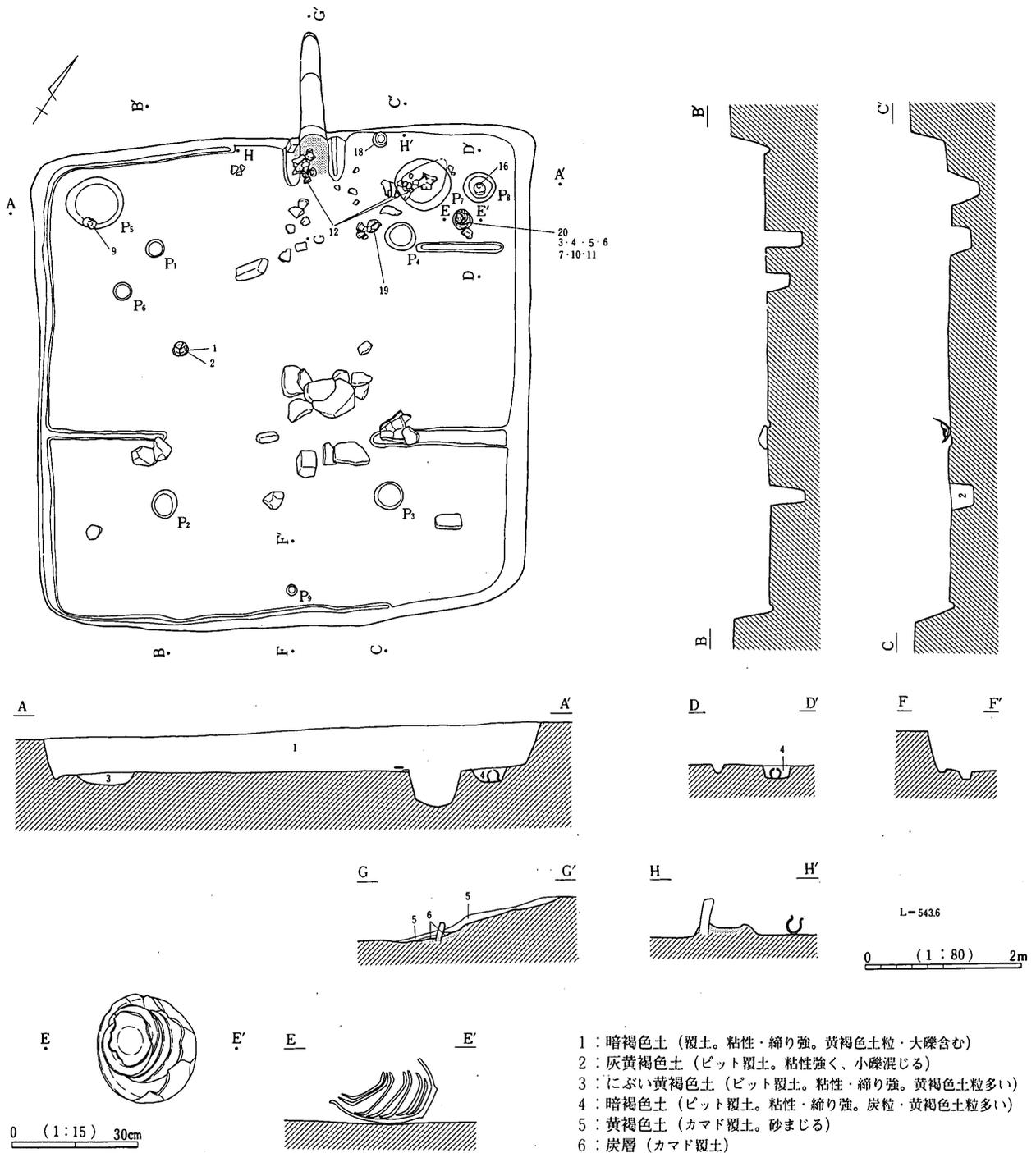


図128 89号竪穴住居跡

**構造** 残存部より形状は方形を呈する。確認された床面規模は3.4×3.5m。軸線はN—38°—E。カマドは北壁に設置されたと思われる、調査範囲北端に焼土の広がり確認された。前面には土器片が出土。2基のピットが検出された。

**遺物** 1～3は東信型甕。1・3は口縁部く字状、2は口縁部コ字状となっており、胴部最大径が口縁部径を凌駕する。いずれも覆土出土である。

**時期** 9世紀後半とする。

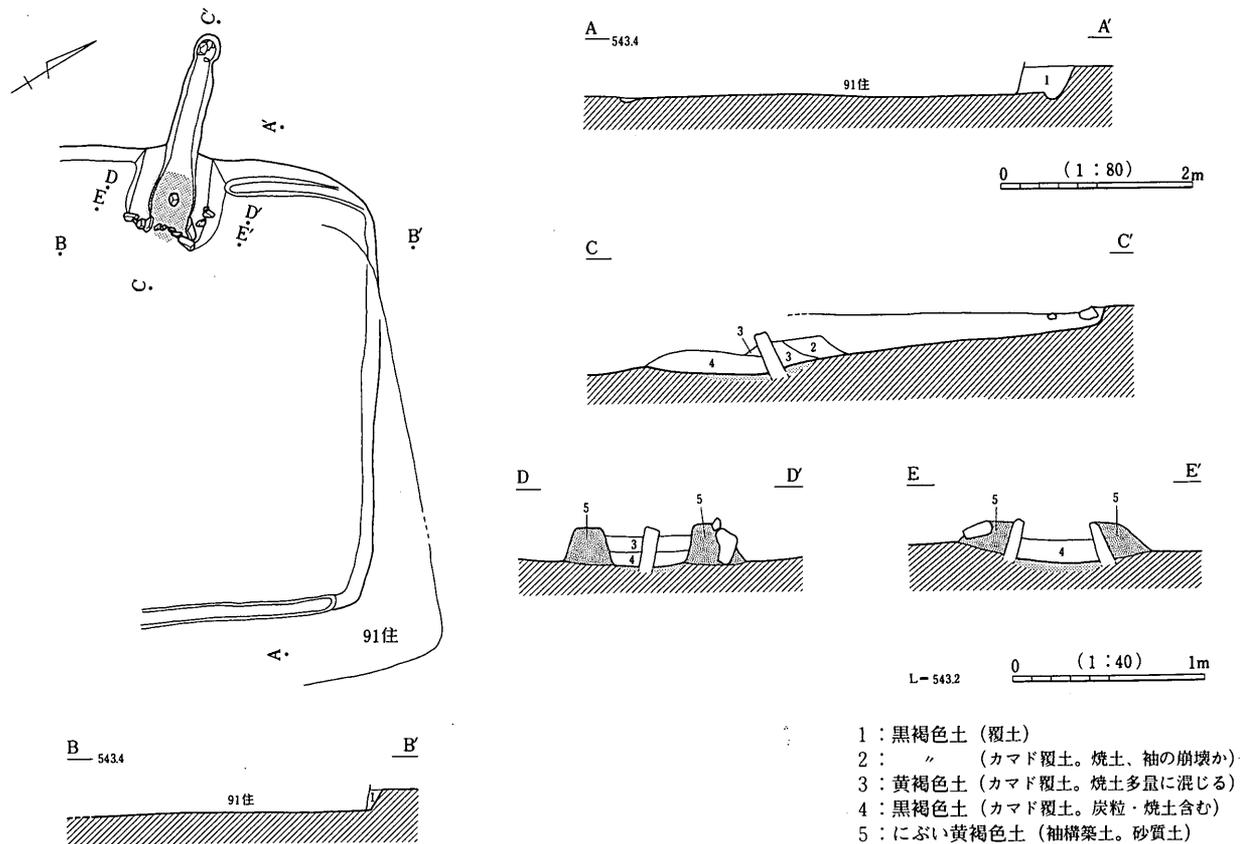


図129 90号竪穴住居跡

86号竪穴住居跡 (図127・175) 位置 M—20

**検出** IV層上面で検出。遺構集中部にあり、調査段階では83号住居が本住居を切ると判断されたが、遺物の様相から新旧を逆転させた。従って本住居が83号住居を切る。覆土は黒褐色土の単層。

**構造** 83号住居の方が掘り込みが深く全体形状は明らかでないが、検出部では南東隅が内側に入る方形を呈する。確認された床面規模は4.1×2.4m。軸線はN—30°—W。南西隅近くに焼土の広がりと板状の礫・甕などの土器が認められたが、カマドとしては住居内側に入りすぎている。柱穴は不明。

**遺物** 1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。3～4は内面黒色土器坏で、2は底部回転糸切り不調整。5は両面黒色土器高台付皿。6～10はロクロ整形の甕・鉢類である。6の口縁部はやや受け口状を呈し、8の口縁部の屈曲は弱い。10は内面黒色処理されている。2・6・9・10は南西隅近くの焼土の広がりから検出され、その他は覆土から出土した。

**時期** 9世紀後葉～末に位置付ける。

87号竪穴住居跡 (図127・175) 位置 L—16

**検出** IV層上面で検出。ほぼ正方形を呈する形状で、床面規模は3.1×3.2mを測る。軸線はN—41°—W。分割調査のため検出状況が異なり、南半部では周溝が巡り、小ピット状の窪みが20～60cm間隔で存在する。本来は北半部にも巡っていたと考えられる。カマドは北壁中央にあり、火床部のみが確認された。3基のピットが検出されたが何れも小さく浅く柱穴かどうか不明。

**遺物** 遺物は少ないが、2点を図示できた、1は須恵器高台付坏、2は長胴甕である。2はカマド出土、1は覆土から検出された。

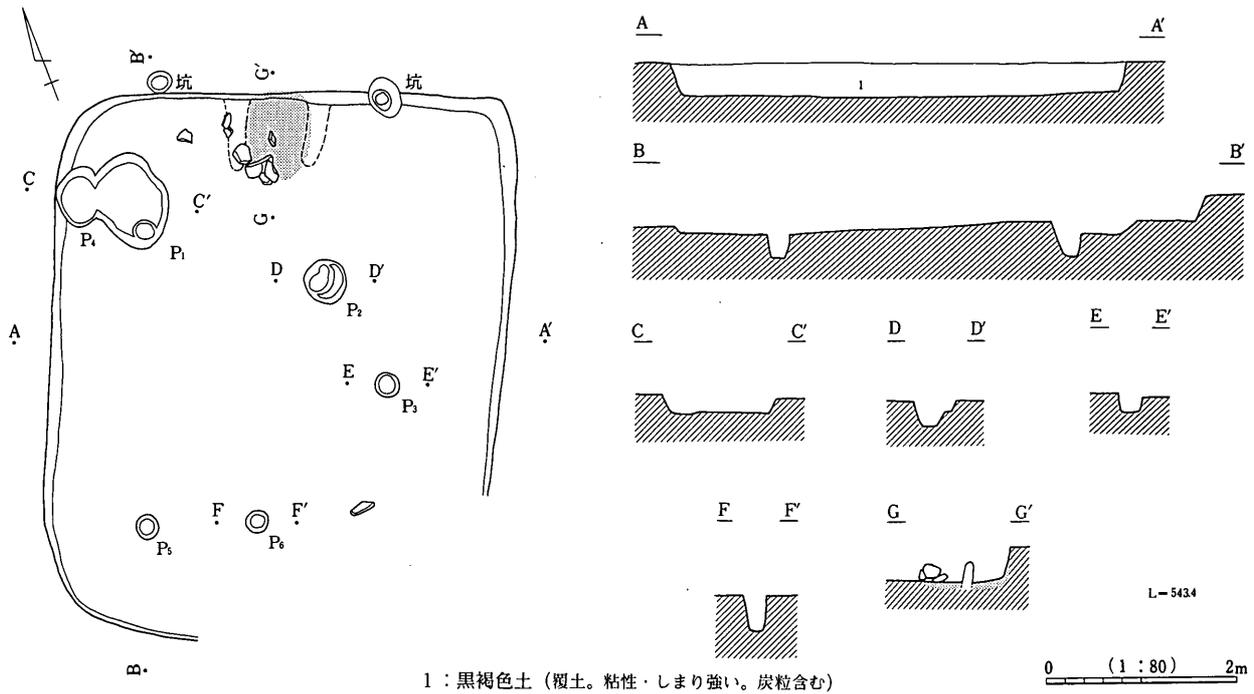


図130 91号竪穴住居跡

時期 8世紀前葉～中葉あたりか。

89号竪穴住居跡 (図128・176・177) 位置 Q—1・2・7

検出 IV層上面で検出。他の遺構との切り合いはない。覆土は礫を多量に含む暗褐色土。

構造 ほぼ正方形の平面形で、床面規模は5.9×6.0m。軸線はN—36°—W。立ち上がりは垂直に近く、西半部には周溝が巡る。床面は堅緻で、住居中央よりやや南に2m弱の間仕切り溝が東西両壁から延びる。また、北東隅近くにも1m程の間仕切り溝が東西に走る。カマドは北壁中央に構築され、袖石・火床部が残存する。煙道は住居外に長く延びる。P1～P4が支柱穴で、P9は入り口部に関するものであろう。カマド右側のP7は貯蔵穴で甕の破片などが出土し、近くの床面からは7枚の坏を入れ子状に納めた鉢形土器が出土している。また、P5やP8からも土器が出土した。

遺物 1～11は土師器ないし内黒土師器坏。いずれも、やや丸みを帯びた底部から体部が外傾して立ち上がる器形で、体部はやや内彎するものがある。3～7は内面見込みの周囲に稜ないし段が巡る。11は前段階にみられた、底部の境付近から体部が大きく外反する器形(図150—5)が変化したものかもしれない。12は球胴甕、13～15は長胴甕、16～18は小形甕、19・20は鉢。21は甑で、底部に対向する一對の円孔を穿っている。3～7・10・11は20の中に入れ子状に納められていたもの、13・14・19はカマド、12はカマドおよびP7、18はカマド右脇の床面、9はP5、16はP8、1・21は床面、その他は覆土出土。土器以外の遺物としては、耳環(25)が覆土から出土した他、磨石(27)が覆土から検出されている。

時期 7世紀前葉に位置付ける。

90号竪穴住居跡 (図129・177) 位置 Q—6・7

検出 IV層上面で検出。91号住居に切られ、検出範囲は一部である。僅かに残った覆土は黒褐色土。

構造 殆どを91号住居に切られ、西壁のカマドと東壁部の周溝の一部が確認された。推定される床面規模は4.6×3.2m以上。軸線はN—60°—W。カマドは板状の石を立て外側を砂質土で固めた構造で、天井

部は遺存しない。煙道は住居外に1.3m程延び、先端は円形にくびれる。柱穴は検出されない。

遺物 1は半球形体部の内黒土師器坏。2は小形甕。3は長胴甕。2・3はカマド、1は覆土出土。

時期 7世紀中葉～後葉と考えておきたい。

91号竪穴住居跡 (図130・177) 位置 Q—6・7

検出 IV層上面検出。90号住居を切る。覆土は黒褐色土の単層。

構造 南北に長い方形を呈し、床面規模は5.6m程度×4.6m。軸線はN—20°—E。カマドは北壁中央に位置し、支脚石が残る火床部が検出されたが、袖は殆ど残存せず、カマド内に構築材と考えられる板状の礫が点在する。床面は不明瞭。6基のピットと土坑状の掘り込みが検出されたが、P1とP5が主柱穴か。

遺物 1～6は底部回転糸切り不調整の須恵器坏。7・8は体部の開きが大きい内面黒色土器坏。9は口縁く字状の東信型甕。12は鉢。10・11はロクロ整形小形甕。9・11はカマド火床およびP1、5・6・10はカマド周囲の床面、4は床面、2・3は床面およびP1、その他は覆土出土。

時期 9世紀前半に位置付ける。

## 2 掘立柱建物跡・柱穴列

調査段階では、73棟の掘立柱建物が想定されており、その中には、形態的に明らかに無理があるものやL字状のものが多く含まれていた。そうしたものは確実性に欠けるため、整理段階で再検討を加え、完結する組み合わせを中心に44棟を抽出した。ただし、柱穴状のピットは数多く検出されているので、実際に存在した掘立柱建物は相当数に上ることは間違いないだろう。また、遺物を伴うものはかなり少ない。ここでは、44棟を柱間数により分類し、分類ごとに実測図を掲載した。記述もそれに従って行う。

6号掘立柱建物跡 (図131) 位置 F—22、K—1・2

IV層上面の検出で26号住居を切る。2×2間の総柱建物で、桁行5.7～5.9m・梁行4.5～4.8m。棟軸方向はN—55°—E。中間の桁行列は4本柱。柱穴は直径50cm前後の掘り方を持ち上面に礫を据えている。礎石的なものか。7～8世紀の土師器片が少量出土。26号住居を切ることから、時期は8世紀後半以降。

64号掘立柱建物跡 (図131) 位置 M—14

IV層上面で検出され、74号住居を切り、696号土坑に切られる。2×2間の総柱建物で、桁行4.6・梁行3.9m。棟軸方向はN—33°—E。西側の梁行柱間がやや狭い。7～8世紀の土師器片が出土。74号住居を切ることを考え、時期は8世紀以降としておきたい。なお、各柱穴の底面レベルは、最高位の柱穴の上端との比高を表わしている。以下同様。

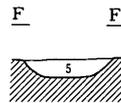
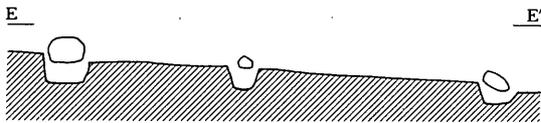
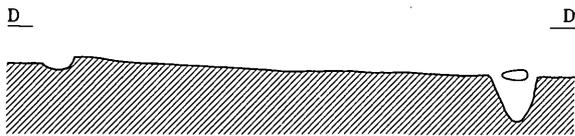
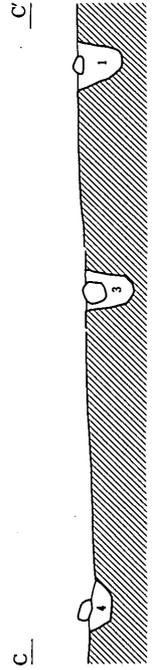
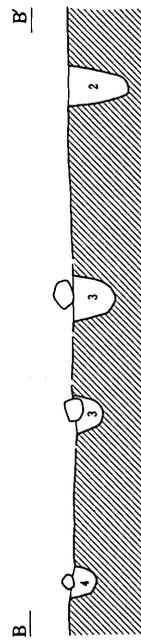
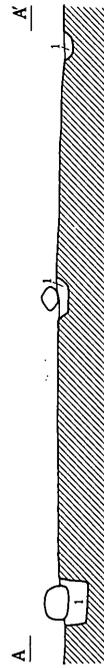
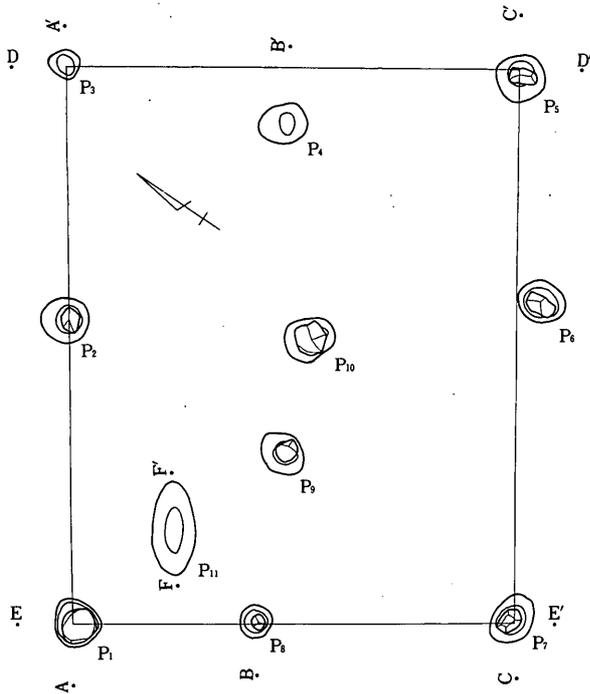
67号掘立柱建物跡 (図131) 位置 Q—2・7・8

IV層上面で検出。1058号土坑に切られる。2×2間の総柱建物で、桁行4.2～4.6m・梁行3.8m。棟軸方向はN—18°—E。梁行中間の柱穴は規模が小さく、掘り方も浅い。

11号掘立柱建物跡 (図132) 位置 Q—11・16

IV層上面で検出。3×2間の総柱建物で、桁行5.4～5.6m・梁行3.5～3.8m。軸棟方向はN—38°—W。北列の梁行は柱穴規模がやや小さく、軸が斜めとなる。7～8世紀の土師器片が少量出土。

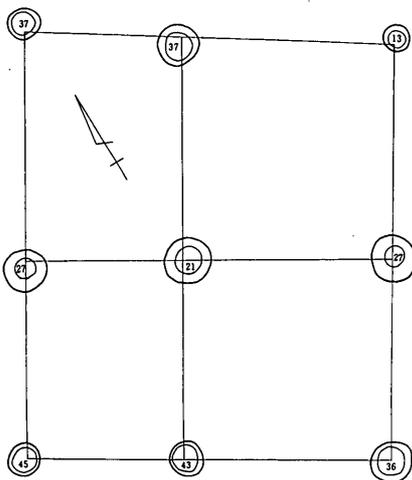
6建



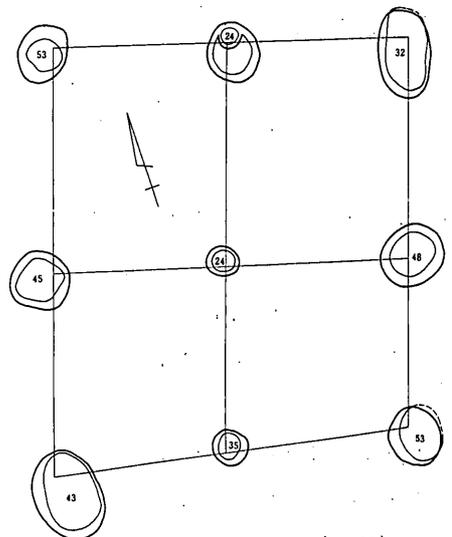
L-544.8

- 1 : 暗褐色土 (粘土質シルト。小礫点在)
- 2 : 黒褐色土 (砂質シルト。砂礫多)
- 3 : 黒褐色土 (砂質シルト。砂礫少)
- 4 : 暗褐色土 (シルト・礫多)
- 5 : 炭 (焼土混)

64建



67建



0 (1:80) 2m

図131 掘立柱建物跡 (1)

44号掘立柱建物跡 (図132) 位置 N—22・23

Ⅳ層上面で検出。45号建物跡と重なるが、切り合い関係は不明。1×1間の建物で、桁行2.9～3.1m・梁行1.8m。軸棟方向はN—30°—E。

45号掘立柱建物跡 (図132) 位置 N—22・23

Ⅳ層上面で検出。44号建物との切り合い不明。1×1間の建物で、桁行4.3m・梁行2.4m。棟軸方向はN—30°—E。

75号掘立柱建物跡 (図132) 位置 L—8・13

Ⅳ層上面で検出。1×1間の建物で、桁行2.4m・梁行1.3m。棟軸方向はN—39°—E。柱穴は直径20cm前後と細い。

13号掘立柱建物跡 (図132) 位置 G—10、H—6

Ⅳ層上面で検出。1×1間の建物で桁行3.6m・梁行3.2m。棟軸方向はN—40°—E。

43号掘立柱建物跡 (図132) 位置 S—3・4

Ⅳ層上面で検出。1×1間の建物で、桁行2.2m・梁行1.8mの小形建物。棟軸方向はN—55°—E。柱穴も細い。

16号掘立柱建物跡 (図132) 位置 V—10・15

Ⅳ層上面で検出。15・17号建物と重なるが新旧関係は不明。1×1間の建物で、桁行4.8～5.0m・梁行2.4m。軸棟方向はN—70°—E。

7号掘立柱建物跡 (図132) 位置 K—18・19・24

Ⅳ層上面で検出。1×1間の建物で、桁行2.5～2.6m・梁行2.3～2.4m。棟軸方向はN—60°—E。柱穴は小さい。

57号掘立柱建物跡 (図132) 位置 M—20・25

Ⅳ層上面で検出され、80号住居を切る。1×1間の建物で、桁行・梁行とも2.7～2.9m。棟軸方向はN—66°—E。小さい柱穴が多い。80号住居を切ることから時期は7世紀中葉以降。

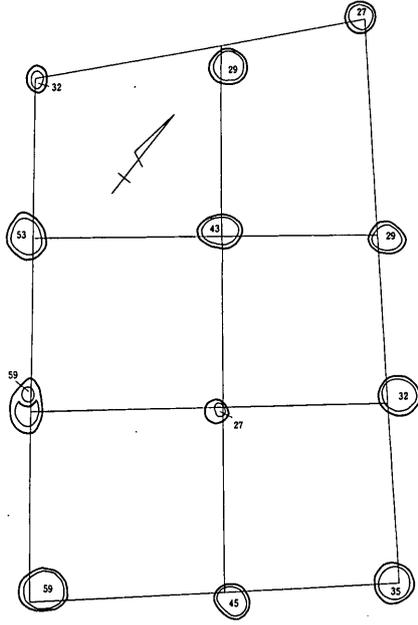
77号掘立柱建物跡 (図132) 位置 L—17・22

Ⅳ層上面で検出され、76号住居を切る。1×1間の建物で、桁行2.1m・梁行1.8～2.0mで規模がほぼ同じとなる。棟軸方向はN—55°—E。7～8世紀の土師器片が少量出土したが、76号住居を切ることから、時期は9世紀中葉以降。

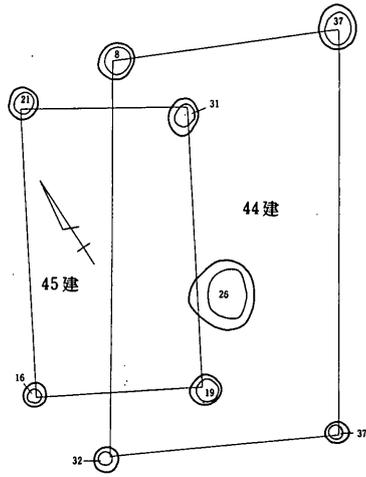
5号掘立柱建物跡 (図133) 位置 K—7・12

Ⅳ層上面で検出。1×2間の建物で、桁行4.4m・梁行2.5m。棟軸方向はN—39°—E。梁行の柱間間隔がばらつく。7～8世紀の土師器片1点出土。

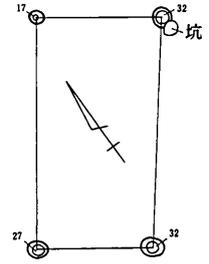
11建



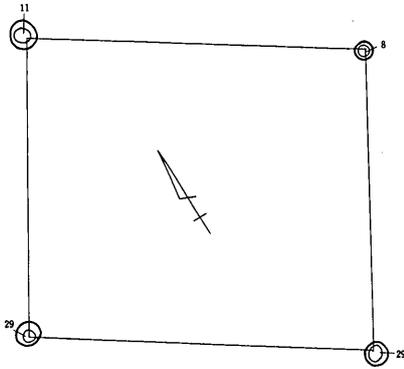
44建・45建



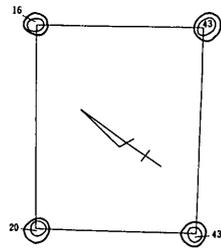
75建



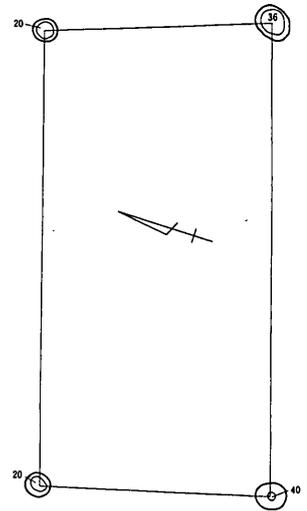
13建



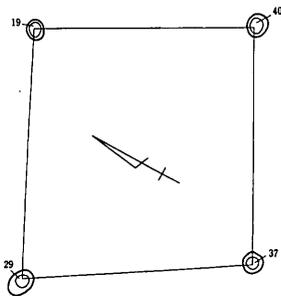
43建



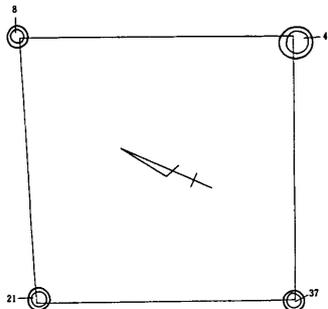
16建



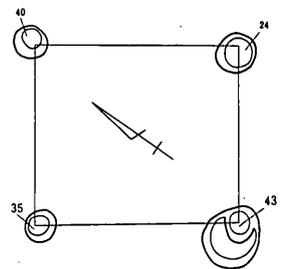
7建



57建



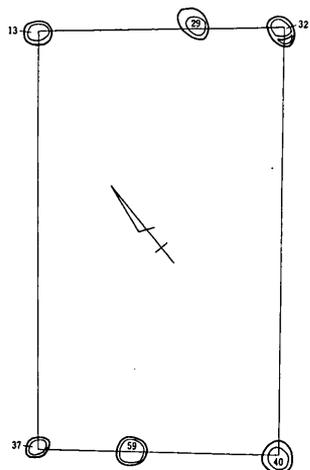
77建



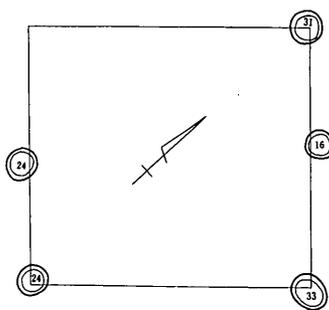
0 (1 : 80) 2m

図132 掘立柱建物跡 (2)

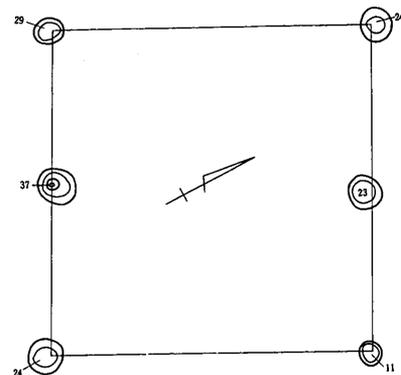
5建



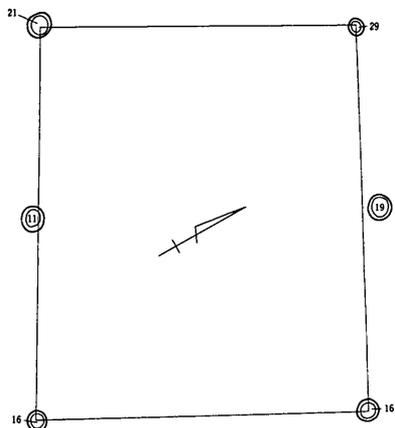
55建



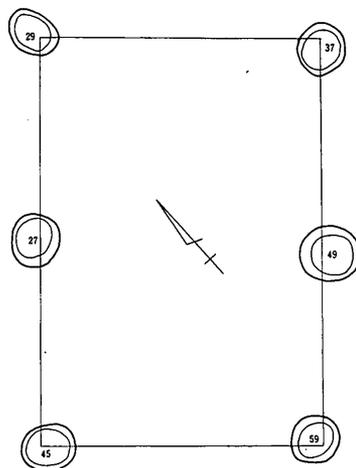
2建



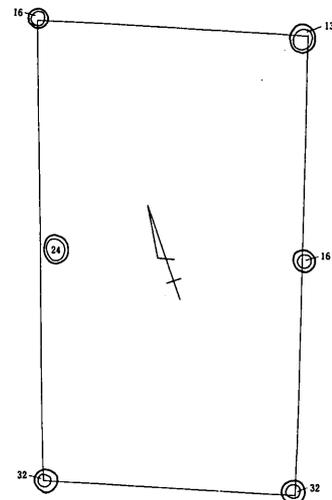
12建



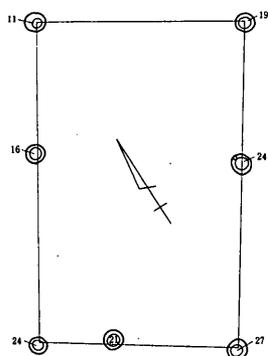
80建



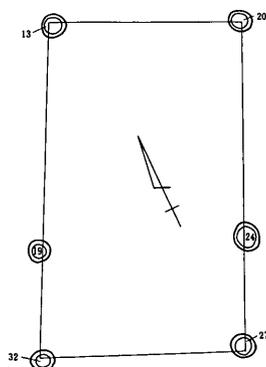
72建



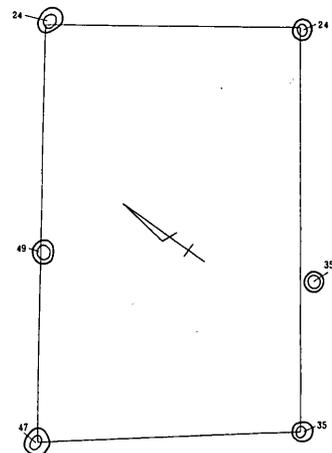
28建



27建



68建



0 (1:80) 2m

图133 掘立柱建物跡 (3)

**55号掘立柱建物跡** (図133) 位置 M—2・6・7

Ⅳ層上面で検出。1×2間の建物で、桁行2.9m・梁行2.7m。北西隅の柱穴は未検出。棟軸方向はN—45°—W。

**2号掘立柱建物跡** (図133) 位置 H—1・6

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行・梁行とも3.4mを測る正方形の形状となる。棟軸方向はN—62°—W。

**12号掘立柱建物跡** (図133) 位置 P—9・10・15

Ⅳ層上面で検出し、37号住居を切る。2×1間の建物で、桁行4.0m・梁行3.3~3.5m。棟軸方向はN—58°—W。柱穴は直径15~25cm程で小さい。7~8世紀の土師器片が少量出土。放射状暗文坏あり。37号住居を切ることから、時期は8世紀前半以降。

**80号掘立柱建物跡** (図133) 位置 R—12・16・17

Ⅳ層上面で検出。27号建物と重なるが新旧関係は不明。2×1間の建物で、桁行4.1~4.3m・梁行2.8~3.0m。棟軸方向はN—42°—E。柱穴は直径50~60cmと比較的大きい。

**72号掘立柱建物跡** (図133) 位置 M—8

Ⅳ層上面で検出。78号建物と重なるが新旧関係不明。1×2間の建物で、桁行4.7m・梁行2.6~2.7m。棟軸方向はN—20°—E。柱穴は直径20cm程で小さい。

**28号掘立柱建物跡** (図133) 位置 R—17・18

Ⅳ層上面で検出。2×2間の建物で、桁行3.4m・梁行2.1m。棟軸方向はN—35°—E。北列の梁行は中間の柱穴が未検出。柱穴は直径が20cm弱と小さい。7~8世紀の須恵器・土師器片少量が出土。

**27号掘立柱建物跡** (図133) 位置 R—17・18

Ⅳ層上面で検出。80号建物と重なるが新旧関係は不明。2×1間の建物で、桁行3.4~3.5m・梁行2.0m。棟軸方向はN—26°—E。桁行の柱間は南側が狭く、北側が広い。柱穴は何れも直径20cm弱~30cm弱と小さい。タタキのある須恵器甕片1点出土。

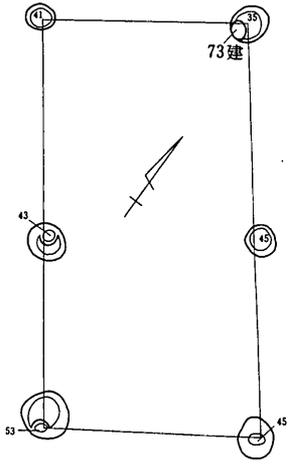
**68号掘立柱建物跡** (図133) 位置 P—5、Q—1

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行4.2~4.5m・梁行2.6~2.8m。棟軸方向はN—56°—E。柱穴は直径20cmほどと小さい。

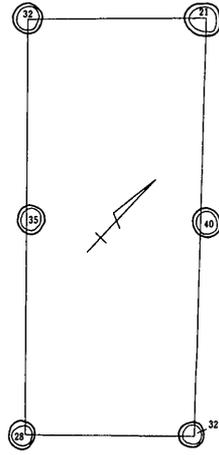
**76号掘立柱建物跡** (図134) 位置 L—17・18

Ⅳ層上面で検出。73号建物と重なるが新旧関係は不明。2×1間の建物で、桁行4.3m・梁行2.2~2.3m。棟軸方向はN—36°—W。柱間間隔がほぼ揃っている。

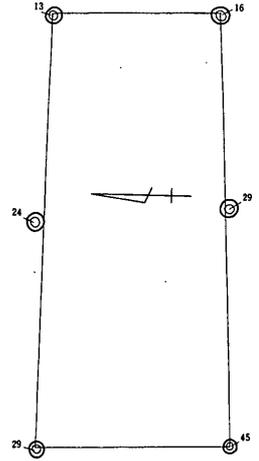
76建



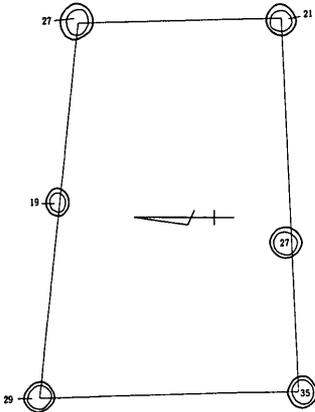
40建



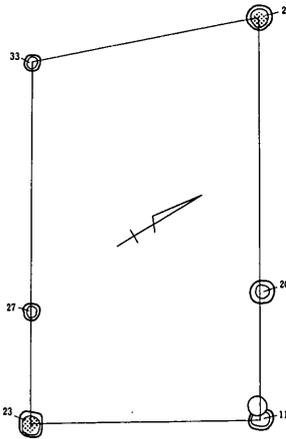
82建



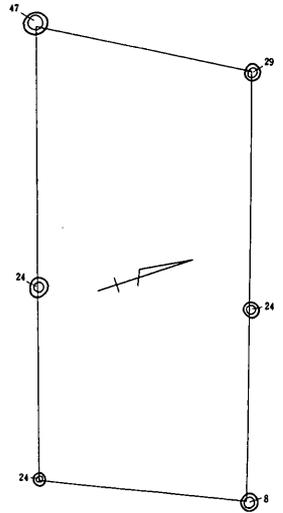
21建



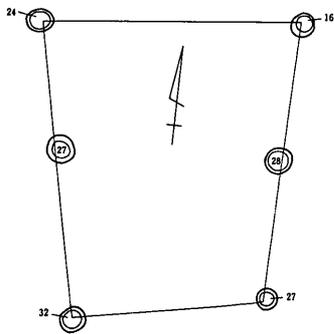
74建



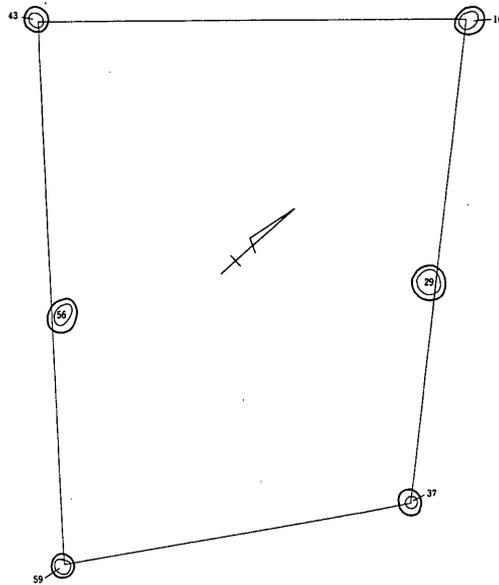
62建



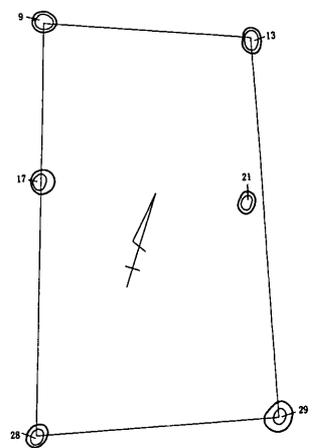
18建



59建



50建



0 (1:80) 2m

图134 掘立柱建物跡 (4)

**40号掘立柱建物跡** (図134) 位置 R-9・14

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行4.4m・梁行1.9m。棟軸方向はN-45°-E。梁行南列の柱穴がやや小さい。

**82号掘立柱建物跡** (図134) 位置 L-22

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行4.5m・梁行1.7~2.0m。棟軸方向N-92°-Eの東西棟。柱穴は何れも直径15cmほどと小さい。

**21号掘立柱建物跡** (図134) 位置 Q-20

Ⅳ層上面で検出。81号建物と重なるが新旧関係は不明。2×1間の建物で、桁行3.9~4.0m・梁行2.0~2.7m。棟軸方向N-90°-Eの東西棟。東列の梁行がやや広がる。

**74号掘立柱建物跡** (図134) 位置 L-13

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行3.9~4.4m・梁行2.4m。棟軸方向はN-58°-W。柱穴は直径16~28cmとややばらつきが概して小さい。南東隅と北西隅で柱痕が確認された。

**62号掘立柱建物跡** (図134) 位置 L-4

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行4.5~4.8m・梁行2.2~2.3m。棟軸方向はN-72°-W。柱穴は直径が15cm前後と小さい。

**18号掘立柱建物跡** (図134) 位置 V-4・9

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行3.0~3.2m・梁行2.0~2.8m。南列の梁行が狭い台形状となる。棟軸方向はN-6°-W。

**59号掘立柱建物跡** (図134) 位置 F-5、G-1・6

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行5.2~5.8m・梁行3.7~4.5m。東列の梁行が狭い台形状となる。棟軸方向はN-46°-W。柱穴は東列がやや小さい。

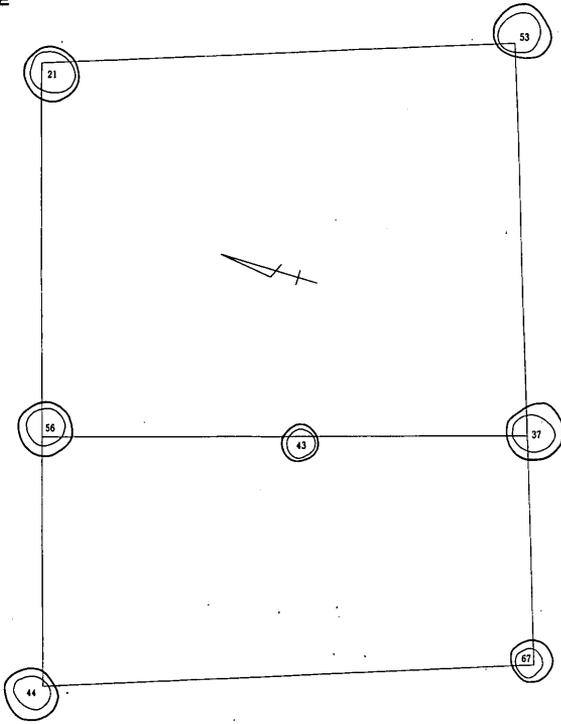
**50号掘立柱建物跡** (図134) 位置 W-6・7

Ⅳ層上面で検出。2×1間の建物で、桁行4.0~4.3m・梁行2.2~2.6m。棟軸方向はN-21°-W。柱穴は直径20cm弱~30cmと小さい。

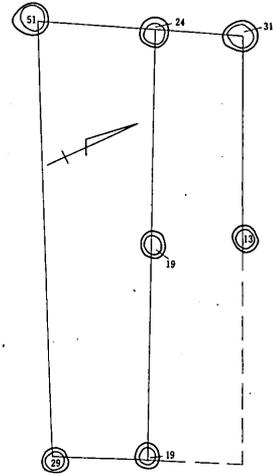
**79号掘立柱建物跡** (図135) 位置 Q-5、R-1・6

Ⅳ層上面で検出。66号住居を切り、54号建物と重なるが新旧関係不明。2×1間で、桁行6.5~6.6m・梁行5.0~5.2mと比較的大形の建物。棟軸方向はN-73°-E。梁行中間列にある柱穴は他よりやや小規模で間仕切りに関係するものか。柱穴規模は直径55~60cmで比較的大きい。66号住居を切ることから、時期は9世紀初頭以降と考える。

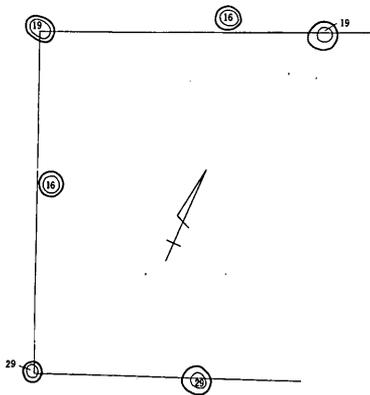
79建



23建

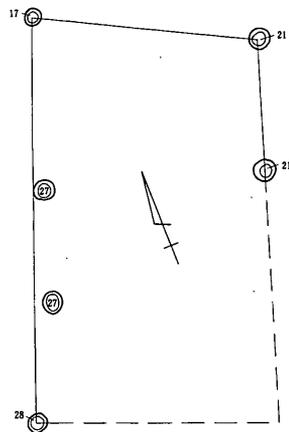


9建



0 (1:80) 2m

78建



24建

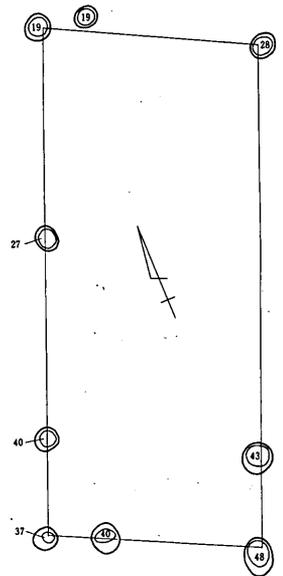


図135 掘立柱建物跡(5)

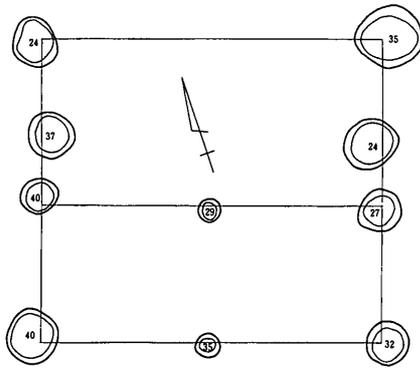
23号掘立柱建物跡 (図135・184) 位置 Q-14・15

IV層上面で検出。46号住居を切る。未検出の柱穴があるが、2×2間の総柱建物となるか。桁行4.4～4.6m・梁行2.1m。棟軸方向はN-66°-W。梁行の柱間が非常に狭い。内面黒色土器坏片1点出土。時期は8世紀中葉以降とする。

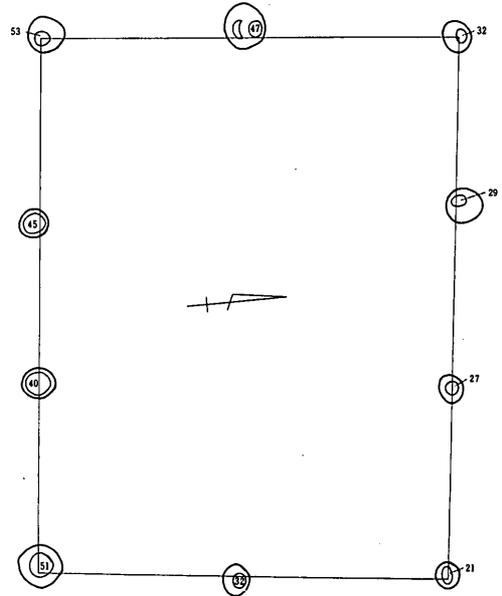
9号掘立柱建物跡 (図135) 位置 G-23・24、L-3・4

IV層上面で検出。桁行2間以上・梁行2間の建物で、梁行3.6m。棟軸方向はN-23°-W。

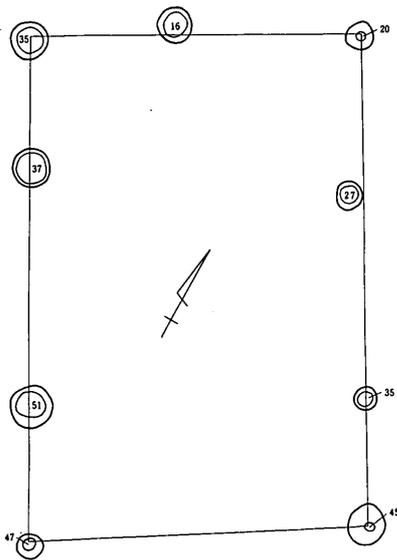
48建



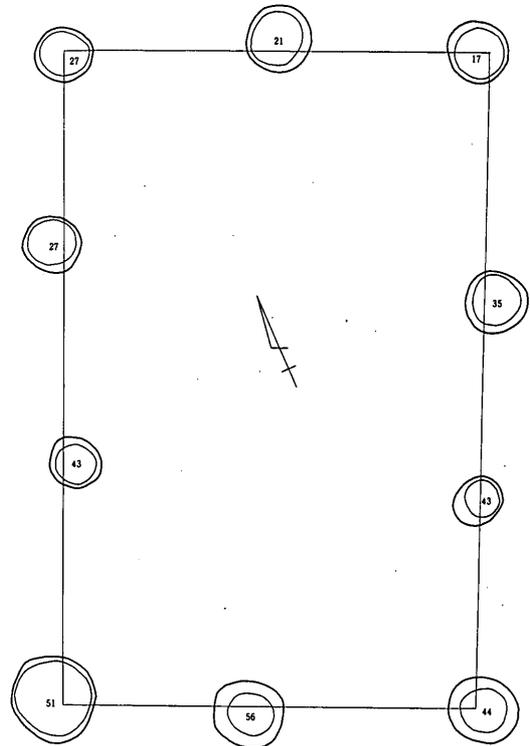
1建



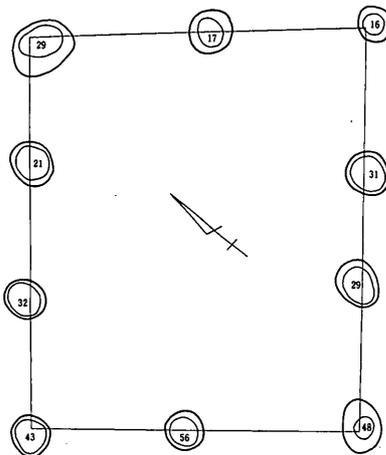
17建



54建



19建



0 (1:80) 2m

図136 掘立柱建物跡 (6)

66建

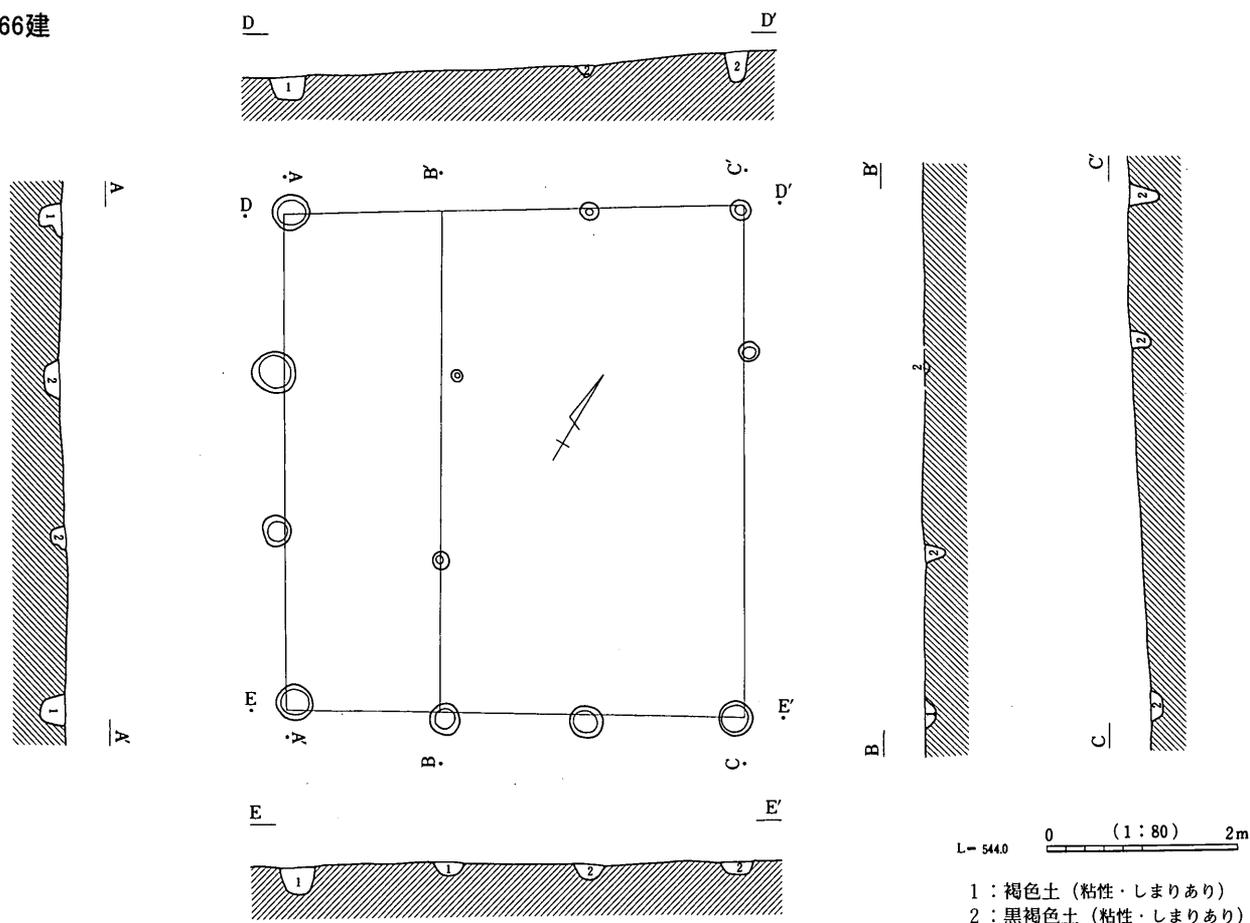


図137 掘立柱建物跡 (7)

78号掘立柱建物跡 (図135) 位置 M-8

IV層上面で検出。968・969号墓に切られ、72号建物と重なるが新旧関係は不明。3×1間の建物で、南東部2本の柱穴は墓により壊される。桁行4.2m・梁行2.4m。棟軸方向はN-22°-W。柱穴は直径が20cm前後と小さい。968・969号墓に切られることから、時期は中世以前であろう。

24号掘立柱建物跡 (図135) 位置 R-11、Q-15

IV層上面で検出され、65号住居を切る。3×2間の建物で、桁行5.3m・梁行2.4m。柱間間隔は梁行の西側が極端に狭く、桁行も南側の1間が狭くなる。棟軸方向はN-22°-E。65号住居を切ることから、時期は7世紀以降。

48号掘立柱建物跡 (図136) 位置 L-20・25

IV層上面で検出。1×3間の建物で、梁行南側2列にある小規模の柱穴は間仕切りか。桁行3.6~3.8m・梁行3.2m。棟軸方向はN-21°-W。梁行の柱間は中間が極端に狭い。柱穴は比較的大きい。

1号掘立柱建物跡 (図136) 位置 G-4・5・9・10

IV層上面で検出。3×2間の建物で、桁行5.6m・梁行4.4m。棟軸方向N-86°-Wの東西棟。

73建

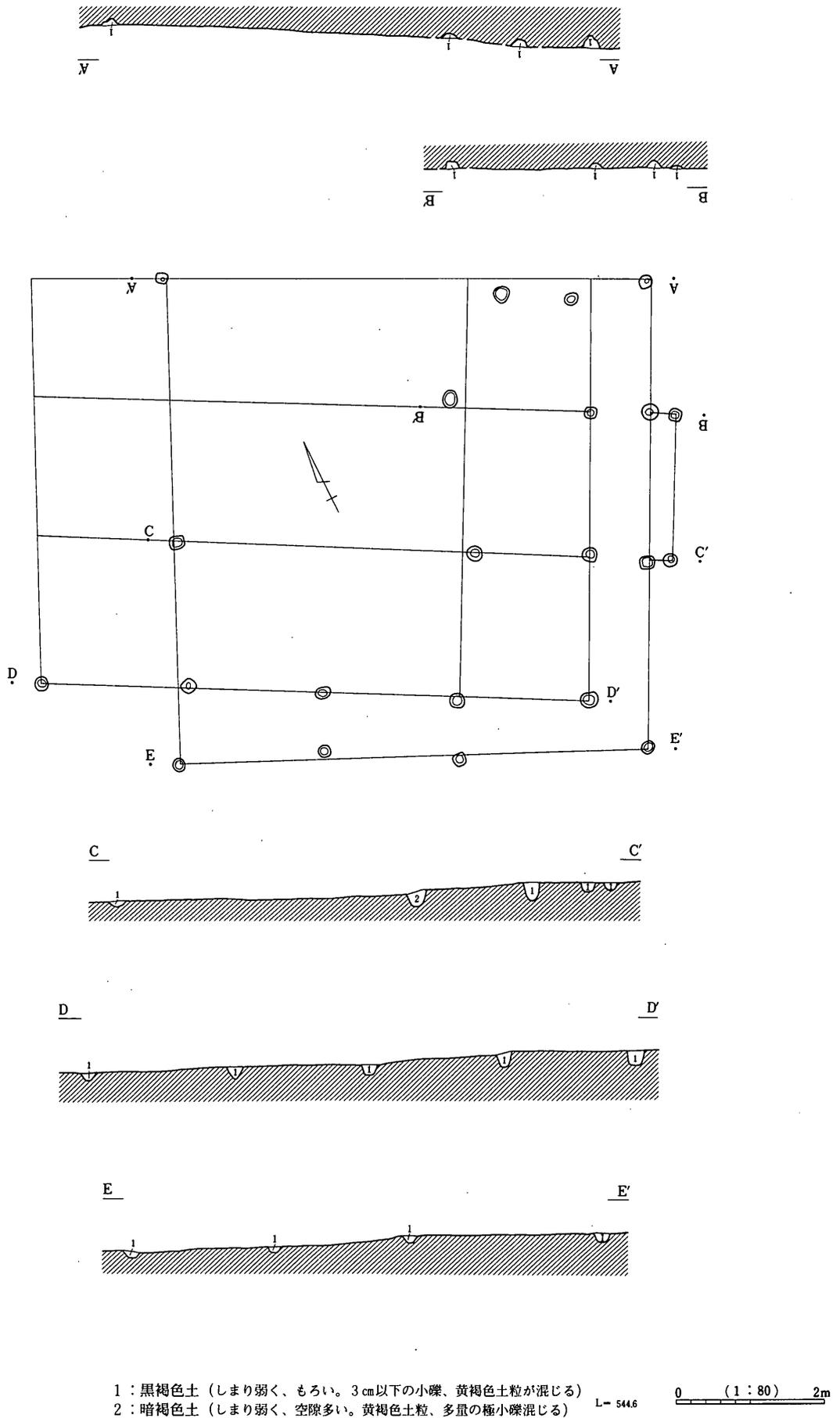
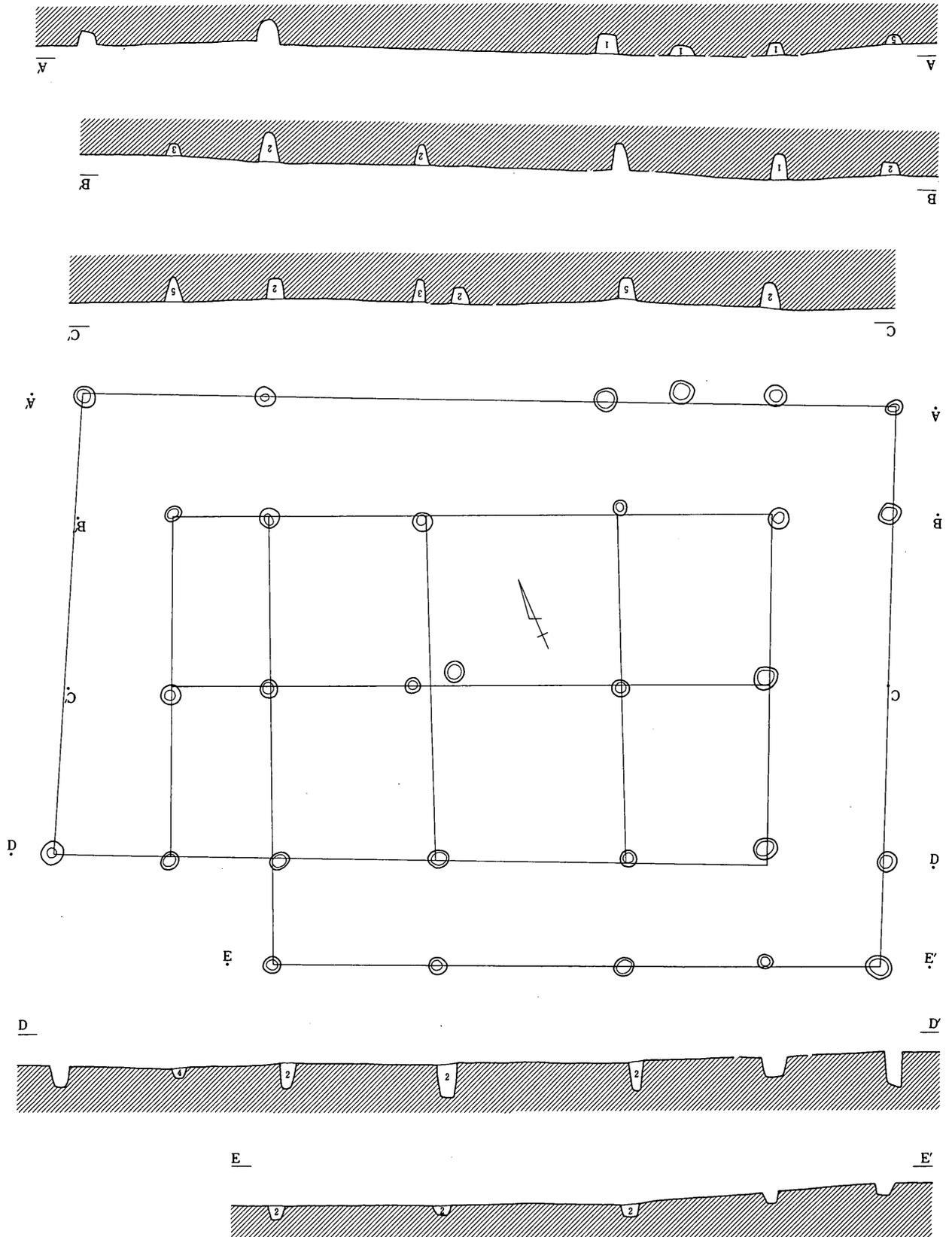


図138 掘立柱建物跡 (8)

81建



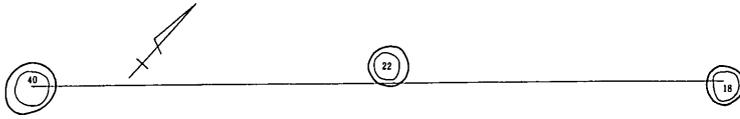
L-5436

0 (1:80) 2m

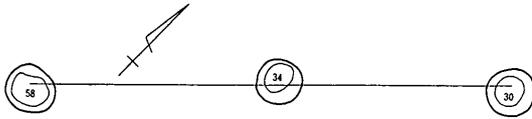
- 1: 黄褐色土 (粘性・しまりあり)
- 2: 黒褐色土 (粘性・しまりあり。黄褐色土粒・小礫混)
- 3: 黒褐色土 (しまりなし。小礫混)
- 4: 暗褐色土 (キメ細かく、しまりなし。小礫混)
- 5: 暗褐色土 (粘性・しまりあり。小礫混)

図139 掘立柱建物跡 (9)

## 1列



## 2列



0 (1:80) 2m

図140 柱穴列

## 17号掘立柱建物跡 (図136) 位置 V-9・10・15

IV層上面で検出。16号建物と重なるが新旧関係不明。3×2間の建物で、桁行5.2m・梁行3.5m。棟軸方向はN-28°-W。柱間は桁行の中間がやや広くなる。

## 19号掘立柱建物跡 (図136) 位置 Q-25、R-21

IV層上面で検出。3×2間の建物で、桁行4.2m・梁行3.5m。棟軸方向はN-45°-E。暗文風ミガキのみを施す内面黒色土器坏、東信型甕、須恵器甕の破片出土。時期は9世紀以降と考える。

## 54号掘立柱建物跡 (図136) 位置 R-1・2・6

IV層上面で検出。79号建物と重なるが新旧関係は不明。3×2間の建物で、桁行6.9m・梁行4.4m。棟軸方向はN-26°-E。柱穴の直径は54cm~94cmとばらつくが概して大きい。調査では、68・69号住居を切るとされたが、54号住居との同時性を推定する。挿図には注意されたい。

## 66号掘立柱建物跡 (図137) 位置 Q-2・3、L-22・23

IV層上面で検出。3×3間の建物で、桁行5.3m・梁行4.7m。棟軸方向はN-30°-W。桁行西側2列目の柱穴は間仕切りの柱穴か。柱穴は桁行西列と梁行東列が直径32~46cmと比較的大きく揃うが、それ以外は20cm前後と小さい。7~8世紀の土師器片数点出土。

## 73号掘立柱建物跡 (図138) 位置 L-12・13・17・18

IV層上面で検出。76号建物と重なるが新旧関係不明。未検出の柱穴があり、全体構造が掴みにくい。4×3間の大形の総柱的建物で、東側と南側の両面に軒が出る構造を取るものだろうか。主棟は桁行7.4m・梁行5.6m。軒幅は主棟に比べ狭く、梁行の外側にある柱穴は入り口構造に関係するものか。棟軸方向はN-117°-W。柱穴は直径20cm程度で小さい。

## 81号掘立柱建物跡 (図139) 位置 Q-14・15・18・19・20

IV層上面で検出。46号住居を切り、21号建物と重なるが新旧関係不明。6×4間の大形総柱建物で、回廊状に軒が取り巻く構造を取るものだろうか。桁行11.4m・梁行7.8m。棟軸方向はN-25°-E。柱穴は直径20~30cmと概して小さい。

1号柱穴列 (図140) 位置 F-15・19

Ⅳ層上面で検出。柱間3.6~3.7mの3本の柱穴列。柱穴は直径40~50cmで、深さはばらつく。軸線はN-45°-W。

2号柱穴列 (図140) 位置 R-2

Ⅳ層上面で検出。柱間2.4~2.6mの3本の柱穴列。柱穴は直径50cm前後。軸線はN-45°-W。

### 3 土坑

土坑は最も検出数の多い遺構で、総数1079基が検出された。規模や形状に関係なく番号付けを行ったために、本来の機能・性格に基づいた呼称は用いていない。以下には、柱穴と考えられるものを除いたなかから、形態や遺物の出土等で特徴的な土坑39基を選択して記述した。なお、墓として明確なものは区別して、次項に記述することとする。

1号土坑 (図141・178) 位置 N-11・16

Ⅳ層上面で検出され、2号住居を切る。先細りの楕円形を呈し、規模は220×160×34cmを測る。底面は平坦となる。覆土から、浅い半球形体部から稜をなして口縁部が短く直立する土師器坏(1)、深い半球形体部の内黒土師器坏(2)が出土。1は須恵器坏蓋ないし坏の模倣形態。2号住居を切ることから時期は7世紀後葉以降。

5号土坑 (図178) 位置 M-9

Ⅳ層上面で検出された。平面楕円形を呈し、規模は36×260×30cmを測る。覆土から、光ヶ丘1号窯式と思われる灰釉陶器皿(1)、灰釉陶器取手付小瓶(3)、須恵器長頸壺(2)の他、須恵器・土師器甕片が出土した。掘り方形状は柱穴的であるが、遺物が多い。性格は不明。時期は9世紀後半と考える。

7号土坑 (図141・178) 位置 G-18・19

Ⅳ層上面で検出され、7号住居を切る。120×98cmの不整形で丸みを帯びた方形を呈し、断面は深さ14cmの浅い逆台形。覆土から、底部回転糸切りの須恵器高台付坏(1)・内面黒色土器坏(2)の他、東信型土師器甕、須恵器甕片が出土。7号住居を切ることから、時期は9世紀前半以降と考える。

10号・1199号土坑 (図141・179・185) 位置 W-9

Ⅳ層上面で検出した。2基が重なり、1199号土坑が10号土坑を切る。

10号土坑は方形の平面形状で208×140×32cmを測る。底面は中央部がやや深くなり、北西隅がテラス状に高まっている。覆土には礫・炭・焼土が混じる。底面には大形礫を敷いている。内耳鍋片(1~3)と北宋銭2枚(40皇栄通宝・41咸平元宝)、青磁片が出土。形態や覆土の状況から火葬施設と考えられる。

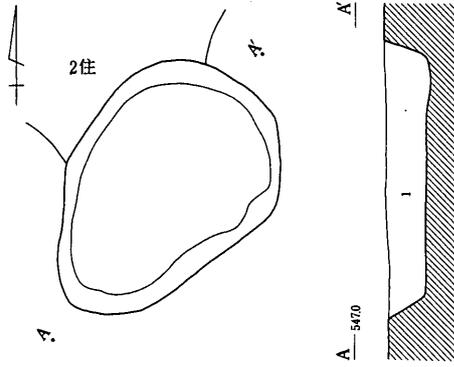
1199号土坑は不整楕円形で122×100×24cmを測る。

時期は、10号土坑は中世と考える。1199号土坑はそれ以降。

11号土坑 (図141) 位置 W-10

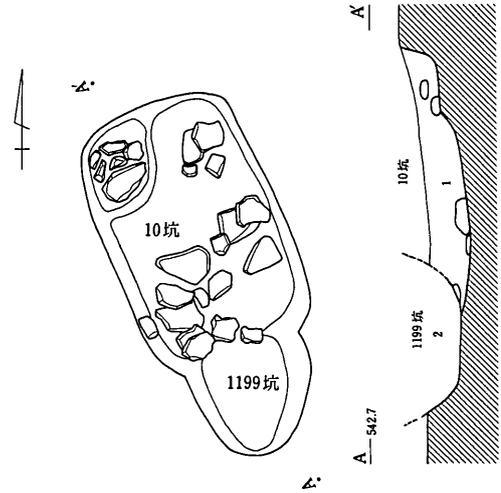
Ⅳ層上面で検出され、22号住居を切る。やや丸みを帯びた方形を呈し、130×122×26cmの規模。底面は平坦となる。覆土は黄褐色土粒を多量に含む黒褐色土。22号住居を切ることから、時期は9世紀以降。

1坑



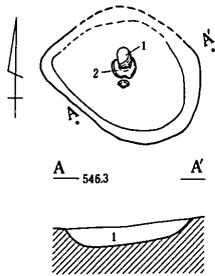
1：にぶい黄褐色土（シルト。礫混）

10坑・1199坑



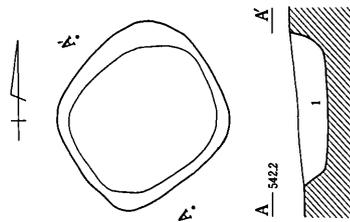
1：黒褐色土（粘土質シルト。礫・炭・焼土混）  
2：にぶい黄褐色土（粘土質シルト。礫混）

7坑



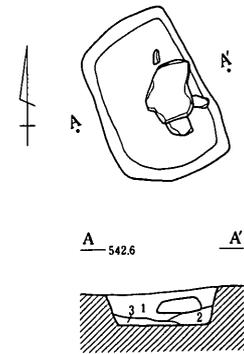
1：黒褐色土（シルト。礫混）

11坑



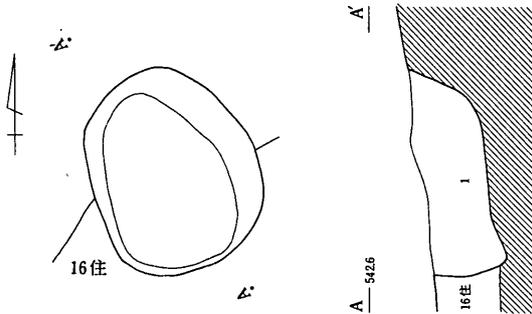
1：黒褐色土（粘土質シルト。黄褐色土粒多量）

13坑



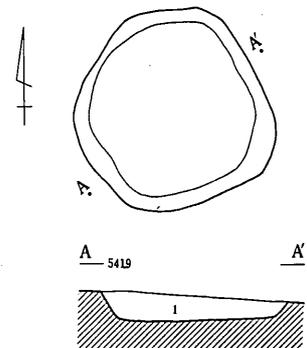
1：暗褐色土（粘土質シルト。焼土・炭混）  
2：黒褐色土（粘土質シルト）  
3：褐色土（粘土質シルト）

24坑



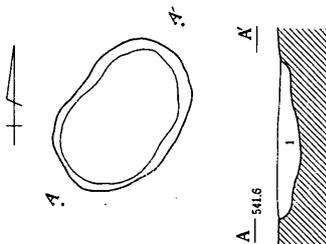
1：黒褐色土（粘土質シルト。礫混）

34坑



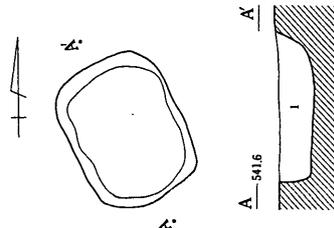
1：暗褐色土（粘土質シルト）  
2：褐色土（小礫多量）  
3：褐色土（砂質シルト）

32坑



1：暗褐色土（粘土質シルト）

33坑



1：灰黄褐色土（粘土質シルト）

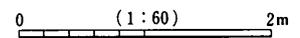


図141 土坑（1）

13号土坑 (図141・185) 位置 W-9

IV層上面で検出した。一辺がやや短い長方形を呈し、130×88×26cmの規模を測る。覆土は3層に分層され、上層には炭・焼土が混じる。底面は平坦となる。覆土中程に大形礫が混入していた。覆土から北宋銭(42政和通宝)が出土。性格は土壙墓か。時期は中世以降と考えられる。

20号・25号土坑 (図142・181・185) 位置 W-9

IV層上面で検出した。2基が切り合い、25号土坑が20号土坑を切る。

20号土坑は長方形を呈し、規模は152×90×30cmを測る。底面は平坦である。覆土から、内耳鍋片を用いた土器片板(1)、北宋銭(43景德元宝)が出土し、周辺からも北宋銭2枚が出土した。

25号土坑は134×110×24cmの楕円形で、断面形は掘り鉢状を呈する。北宋銭(46皇宋通宝)出土。

形態・遺物からして両土坑とも土壙墓の可能性があろうか。時期は20号・25号とも中世と考える。

24号土坑 (図141) 位置 S-21、X-1

IV層上面で検出した。16号住居を切り、160×130cmの楕円形を呈し、掘り込みは50~60cmと比較的深い。覆土から古代の土師器鉢・甕類の小片が出土したが、16号住居を切ることから、時期は中世以降。

27号土坑 (図142) 位置 W-9

IV層上面で検出。124×98cmを測る楕円形を呈し、深さは18cmと浅い。底面はやや不整形で断面形は逆台形となる。覆土中より7~8世紀の須恵器・土師器片少量が出土。

30号土坑 (図142・178) 位置 W-9

IV層上面で検出され、19号住居を切る。上面形は不整楕円形を呈し、規模は150×110×34cmを測る。断面形は掘り鉢状となる。覆土から須恵器坏と土師器甕片などが出土し、須恵器坏1点(1)を図示した。19号住居を切ることから、時期は7世紀後葉以降と考える。

32号土坑 (図141) 位置 W-10

IV層上面で検出。130×88cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。中央がやや深くなるが、最深でも深さ18cmと浅い。7~8世紀の須恵器や土師器片少量が出土。

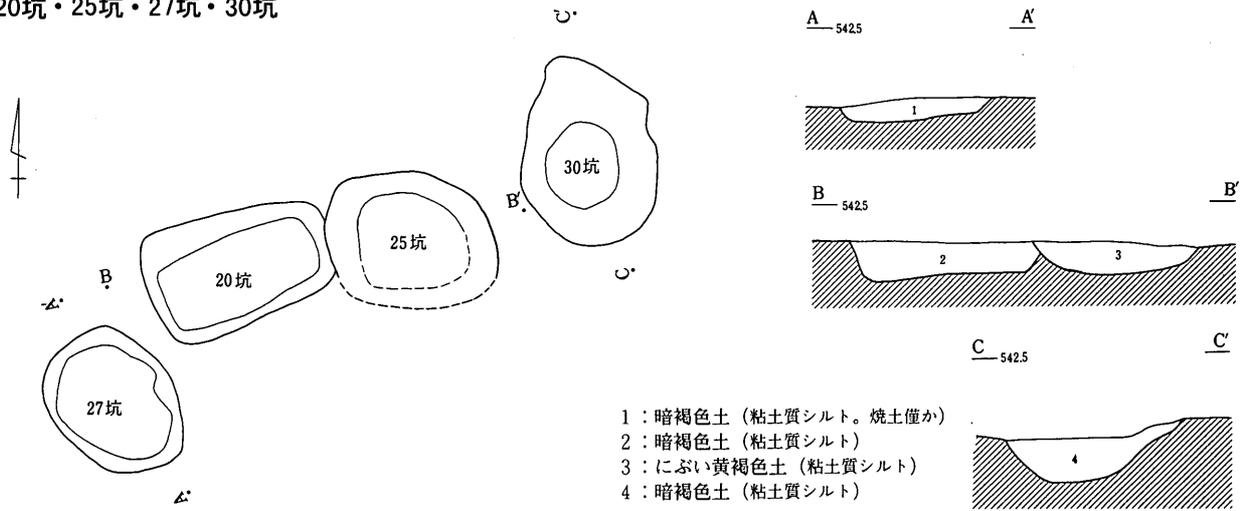
33号土坑 (図141) 位置 W-10

IV層上面で検出。隅が丸みをおびる方形で、規模は118×90×28cmを測る。底面は平坦である。7~8世紀の土師器片が少量出土。

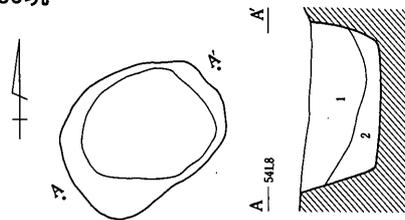
34号土坑 (図141) 位置 W-10

IV層上面で検出され、154×150cmの不整円形を呈する。底面は平坦で、深さは12cmと浅い。7~8世紀の土師器片が少量出土。

20坑・25坑・27坑・30坑

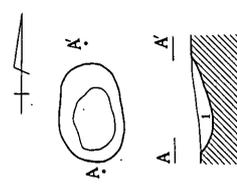


35坑



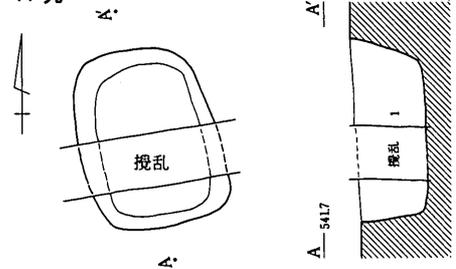
- 1: 黒褐色土 (粘土質シルト。黄褐色土粒混)
- 2: 黒褐色土 (粘土質シルト)

37坑



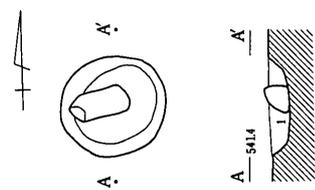
- 1: 灰黄褐色土 (粘土質シルト)

41坑



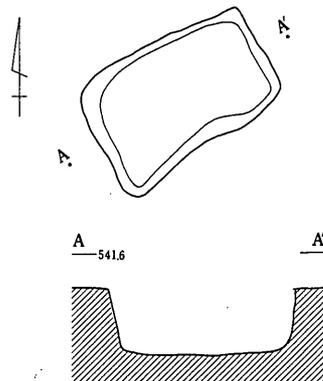
- 1: 黒褐色土 (シルト)

42坑

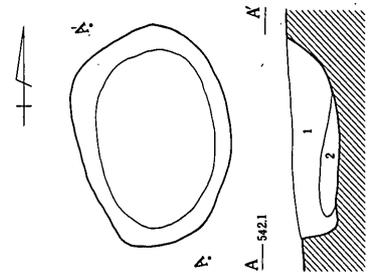


- 1: 黒褐色土

47坑

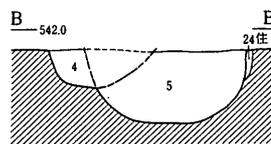
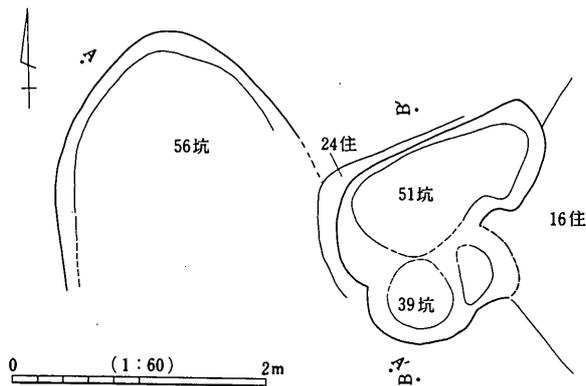


48坑



- 1: 黒褐色土 (シルト)
- 2: 炭層

39坑・51坑・56坑



- 1: 黒褐色土 (粘土質シルト)
- 2: 褐色土 (粘土質シルト。しまりあり、硬い)
- 3: 褐色土 (粘土質シルト。砂質含む)
- 4: 黒褐色土 (砂質。小礫多量)
- 5: 黒褐色土 (シルト。小礫多量)

図142 土坑 (2)

35号土坑 (図142・179) 位置 W-10

Ⅳ層上面で検出され、22号住居を切る。上面形は隅が丸みをおびた方形を呈し、底面は不整楕円形となる。規模は132×100×58cmを測る。掘り込みが深く急角度で立ち上がり、底面は平坦となる。覆土は上下に分層され、上層は黄褐色土粒が混じる。覆土から須恵質の播鉢(1)が出土した。

37号土坑 (図142・178) 位置 W-10

Ⅳ層上面で検出した。78×50cmの小形の土坑で、深さも12cmと浅い。断面形は掘り鉢状。覆土中から黒色土器坏が2個体(1・2)出土。

40号土坑 (図179) 位置 X-1

Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整な円形を呈し、断面はU字形となる。規模は73×72×18cmを測る。覆土から須恵質の播鉢片(1)が出土した。

41号土坑 (図142) 位置 W-14

Ⅳ層上面で検出した。隅丸の方形で、140×108cmの規模をもつ。深さは56cmと比較的深く、立ち上がりも垂直に近い。底面は平坦となる。7～8世紀の土師器片が覆土より少量出土。

42号土坑 (図142) 位置 X-6

Ⅳ層上面で検出され、84×68cmの円形を呈する。深さは14cmと浅く、断面形は逆台形となる。土坑中央部に大形礫が入る。

44号土坑 (図179) 位置 W-14

Ⅳ層上面で検出した。楕円形を呈し、68×52×9cmを測る。覆土中から須恵質の播鉢片(1)が出土。

47号土坑 (図142) 位置 W-10

Ⅳ層上面で検出され、17号住居を切る。150×94cmの方形で、底面は平坦でほぼ垂直に立ちあがる。深さは52cmを測る。17号住居を切ることから、時期は6世紀末以降。

48号土坑 (図142・179) 位置 R-25、S-1

Ⅳ層上面で検出した。楕円形を呈し、160×120×18cmを測る。断面は逆台形となる。底面上に炭がブロック状に認められた。覆土中から内耳鍋片(1)が出土。

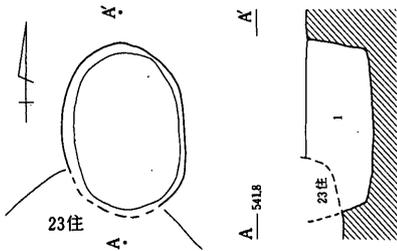
39号土坑 (図142) 位置 R-25、S-1

Ⅳ層上面で検出した。形状は明確ではないが、平面楕円形ないし円形を呈し、120×80cm程度の規模と思われる。断面は二段掘り状となり、最深部は深さ30cm程である。

51号土坑 (図142) 位置 W-5、X-1

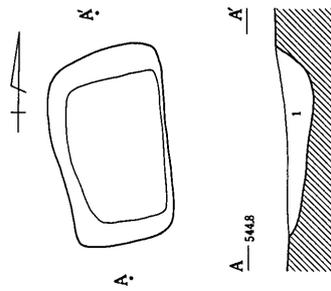
Ⅳ層上面で検出され、24号住居を切り、39号土坑と重なるが新旧関係は不明。細長い不整楕円形を呈し、182×100cm程度の規模をもつ。54cmの深さを測り、断面形は底面がやや平坦面をなす。覆土中から内耳鍋片が出土。

57坑



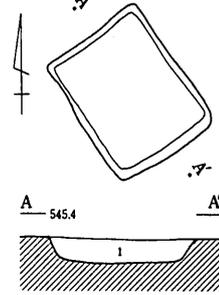
1: 黒褐色土 (粘土質シルト)

108坑



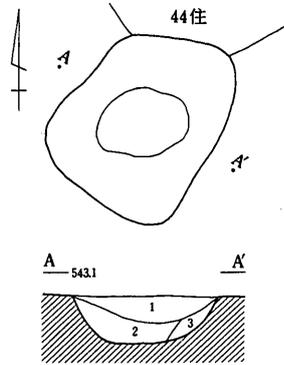
1: 黒色土 (粘土質シルト)

112坑



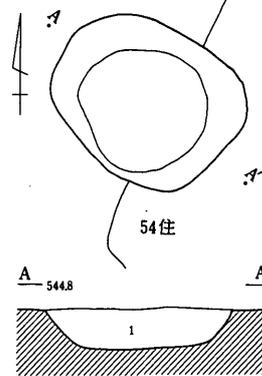
1: 暗褐色土 (粘土質シルト)

159坑



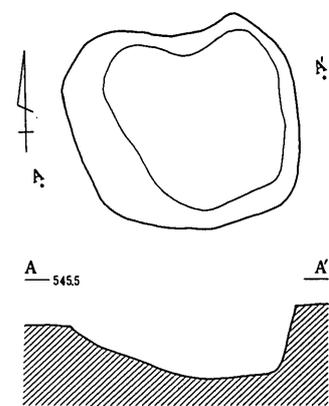
1: にぶい黄褐色土 (粘土質シルト)  
2: 褐色土 (粘土質シルト)  
3: 暗褐色土 (粘土質シルト)

351坑

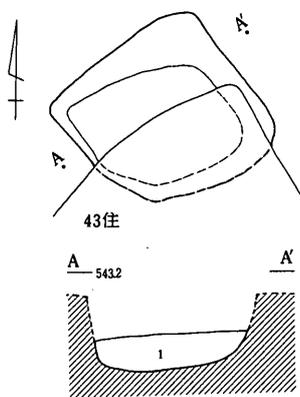


1: 黒色土 (粘性強い)

387坑

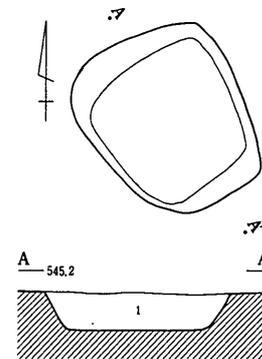


473坑



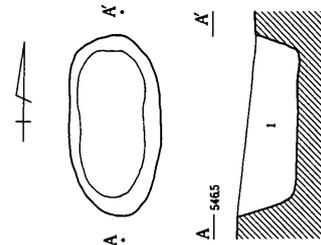
1: 褐色土

610坑



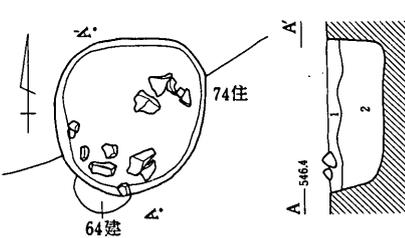
1: 黒褐色土 (シルト)

692坑



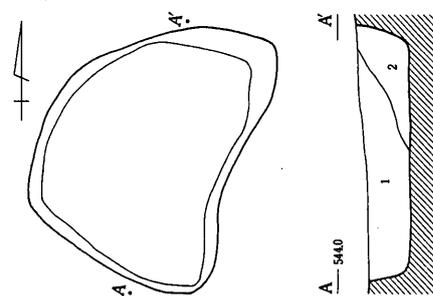
1: 黒褐色土 (シルト)

696坑



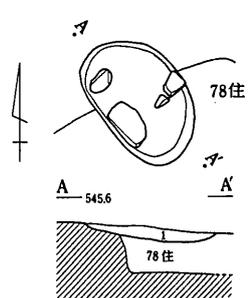
1: 黒褐色土  
2: にぶい黄褐色土 (砂質シルト)

796坑



1: 黒褐色土  
2: にぶい黄褐色土

883坑



1: 黒褐色土 (焼土粒・灰混じる)

0 (1:60) 2m

図143 土坑 (3)

56号土坑 (図142) 位置 W-5

IV層上面で検出され、24号住居に切られる。円形を基調とした平面形であろう。現存部は直径210cmを測る。底面は平坦で、深さは24cm。

57号土坑 (図143) 位置 W-10

IV層上面で検出され、23号住居を切る。長軸を北にとる楕円形を呈し、規模は134×96×52cm。底面は平坦で、掘り込みが深くほぼ垂直に立ちあがる。内面黒色土器坏・須恵器片が少量出土。

108号土坑 (図143) 位置 F-23

IV層上面で検出され、長軸をほぼ北にとる長方形を呈する。規模は150×90×24cmを測る。断面は逆台形となる。

112号土坑 (図143) 位置 G-21

IV層上面で検出。隅が直となる方形で、116×88×20cmの規模を持つ。底面は平坦となる。覆土から東信型甕と思われる薄手土師器甕片が数点出土。

159号土坑 (図143) 位置 W-1

IV層上面で検出し、44号住居を切る。上面形は隅が丸まる方形で、底面は不整楕円形を呈する。規模は150×114×38cmで、断面形は掘り鉢状となる。44号住居を切ることから、時期は7世紀中葉以降。

236号土坑 (図179) 位置 R-17

IV層上面で検出した。直径24cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。形状から考えて柱穴であろう。覆土中から須恵質の掘鉢片(1)が出土。

351号土坑 (図143) 位置 R-8

IV層上面で検出され、54号住居を切る。上面形は隅丸方形で、底面形は略円形となる。断面形は逆台形を呈する。規模は148×120×30cm。54号住居を切ることから、時期は8世紀末以降。

387号土坑 (図143) 位置 R-5

IV層上面で検出。不整形の形状で、180×150×50cmの規模を測る。西側はなだらかに立ち上がる。

473号土坑 (図143) 位置 W-1・2

IV層上面で検出され、43号住居と重なるが切り合いは不明。やや歪な方形の形状で、140×134×26cmの規模を持つ。断面形は逆台形。

420号土坑 (図178) 位置 Q-15

IV層上面で検出した。規模84×80cmを測る平面方形に近い形状である。深さは8cmと浅く、底面は平坦となる。覆土から内面黒色土器坏(1)、ロクロ土師器坏(2)が出土した。

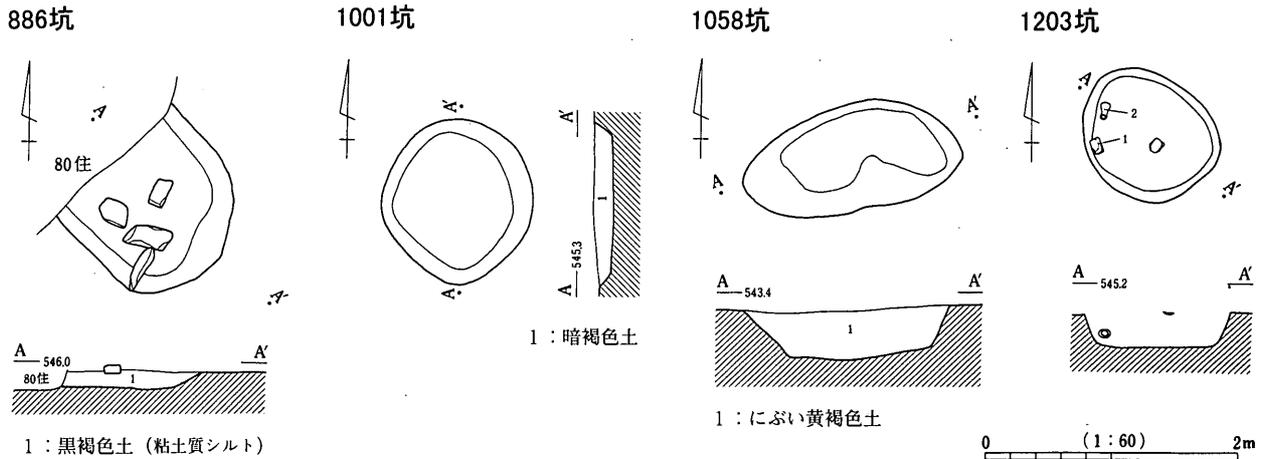


図144 土坑 (4)

610号土坑 (図143) 位置 M-23、R-3

Ⅳ層上面で検出した。台形状の方形で、144×122×30cmを測る。底面は平坦となる。

680号土坑 (図178) 位置 M-18・23

Ⅳ層上面で検出した。楕円形の土坑で、110×70×22cmの規模を測る。底面は平坦となる。覆土から半球形体部の土師器坏 (1) が出土した。

692号土坑 (図143) 位置 M-9

Ⅳ層上面で検出した。長軸が北を向く楕円形の土坑で、142×72cmの規模を測る。深さは42cmと比較的深く、底面は平坦となる。

695号土坑 (図178) 位置 M-13・14

Ⅳ層上面で検出した。直径45cm前後の円形の土坑で、深さは12cmを測る。底面は平坦となる。覆土から底部回転糸切り不調整の須恵器坏 (1) が出土した。

696号土坑 (図143) 位置 M-14

Ⅳ層上面で検出され、74号住居・64号建物に切られる。略円形の形状で、長径124cm・短径120cmを測る。底面は平坦で垂直に立ち上がる。覆土は2層に分層され、7～8世紀の須恵器・土師器片が少量出土。74号住居・64号建物に切られることから、時期は7世紀後葉以前。

796号土坑 (図143) 位置 S-22

Ⅳ層上面で検出。不整形で長軸206cm、短軸150cm、深さ40cmを測る。底面は平坦となる。

883号土坑 (図143・178) 位置 M-18・23

Ⅳ層上面で検出され、78号住居を切る。108×70cmの楕円形を呈し、深さは10cmと浅い。断面形は掘り鉢状となる。覆土から底部回転糸切り不調整の内面黒色土器坏 (1) が出土。時期は7世紀後葉以降。

886号土坑 (図144) 位置 N-21

Ⅳ層上面で検出され、80号住居に切られる。丸みを帯びた方形を呈すると考えられ、長軸110cm以上・短軸128cmを測る。深さは14cmと浅く、底面は平坦となる。覆土中に大形礫を含む。80号住居に切られることから、時期は7世紀中葉以前。

1001号土坑 (図144) 位置 L-3

Ⅳ層上面で検出した。130×120cmの略円形で、深さは16cmと浅い。土坑検出面から8世紀中葉以前の土師器甕片が出土。

1058号土坑 (図144) 位置 Q-7

Ⅳ層上面で検出。不整楕円形を呈し、底面形も歪む。規模は170×80×40cmを測る。底面はほぼ平坦。

1203号土坑 (図144・178) 位置 M-23

Ⅳ層上面で検出され、77号住居に切られる。略円形の形状で、長径110cm・短径88cm・深さ28cmを測る。底面は平坦となる。半球形に近い体部の内黒土師器坏(1)と須恵器長頸壺(2)が出土。77号住居に切られることを考え合わせると、時期は7～8世紀におさまるであろう。

#### 4 土墳墓

埋葬を伴う土坑9基を土墳墓として分離した。この他、S-17グリッドでも人骨が検出されており、土墳墓が存在した可能性が高い。出土した人骨・歯については茂原信生氏(京都大学霊長類研究所)に鑑定を依頼し、その報告を付章に掲載した。以下の各墓における人骨鑑定結果は、茂原氏の報告から筆者が抜粋したものである。

293号墓 (図145・185) 位置 R-12

Ⅳ層上面で検出した。直径44cmの円形を呈する。断面形は円錐状で深さは38cmを測る。覆土から人の乳白歯と北宋銭3枚(47～48、元祐通宝・元豊通宝・皇宋通宝)が出土した。

人骨鑑定結果 「生後1歳～2歳程度であろう」

時期 中世以降と考えられる。

391号墓 (図145・178) 位置 W-1

Ⅳ層上面で検出され、44号住居を切る。平面形は96×54cmの隅丸方形を呈し、底面は中央部がやや高まり10cmの深さとなる。床面および覆土から内黒土師器鉢(1)と骨が1点出土した。44号住居を切ることから、時期は7世紀中葉以降。

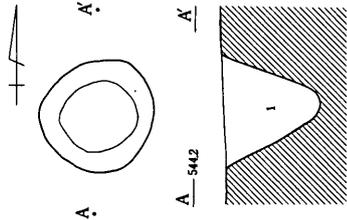
507号墓 (図145) 位置 R-5

Ⅳ層上面で検出され、61号住居を切る。隅が丸みを帯びる方形の形状で、規模は長軸90cm・短軸50cm・深さ30cmを測り、底面は平坦でほぼ垂直に立ちあがる。覆土中程に大形礫がまとまって入れられ、歯が1本出土している。

人骨鑑定結果 「新生児～1歳程度の年齢と考えられる」

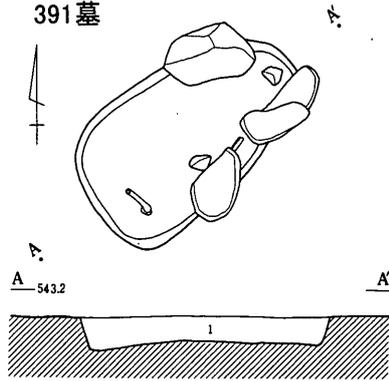
時期 61号住居を切ることから8世紀後半以降と思われる。

293墓



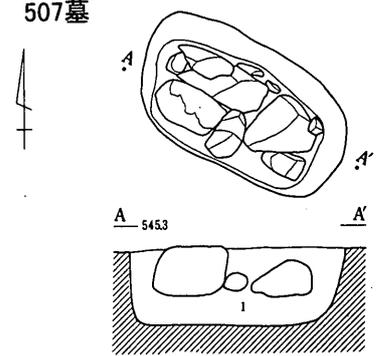
1: 暗褐色土 (粘土質シルト)

391墓



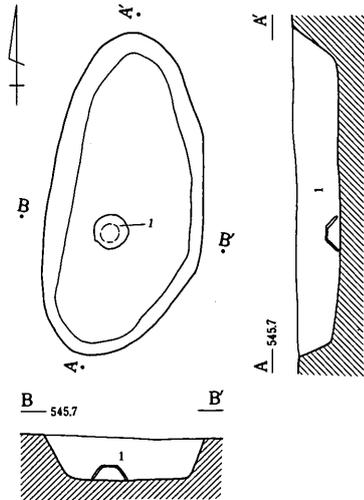
1: 黒色土

507墓



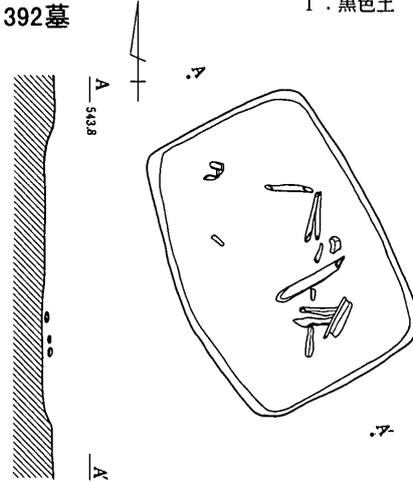
1: にぶい黄褐色土 (粘土質シルト)

3墓

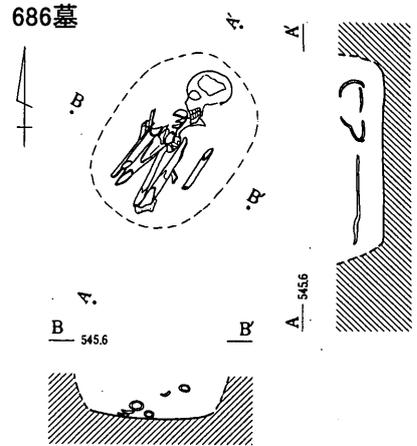


1: 暗褐色土 (シルト・礫混)

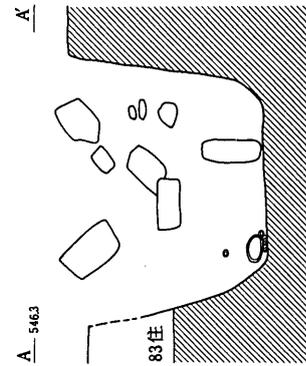
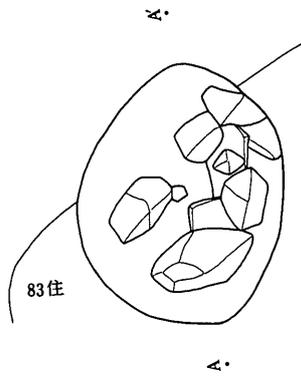
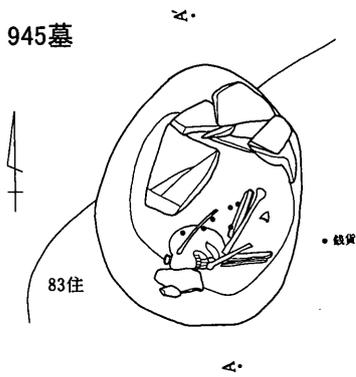
392墓



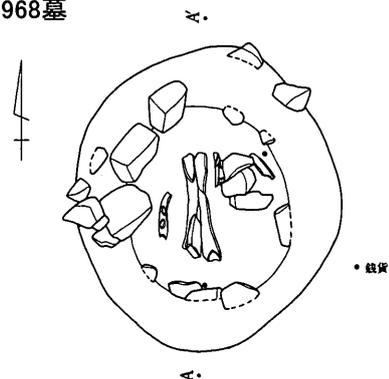
686墓



945墓

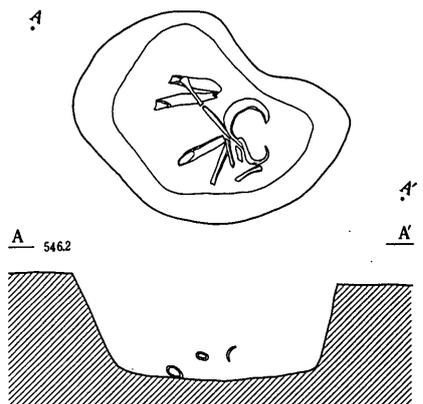


968墓



1: 黄褐色土 (粘土質シルト)

969墓



0 (1:30) 1m

図145 土壙墓

**3号墓** (図145・179) 位置 N—6・12

IV層上面で検出。長楕円形の平面形で、254×124×32cmを測る。床面は平坦となっている。完形の播鉢1点(1)が底に伏せた状態で検出された。底面から僅かに浮いているため、被葬者の上に被せた副葬状況を想定できよう。この播鉢は、在地産(千曲川流域)の珠洲焼模倣品で、13世紀末～14世紀初頭に位置付けられる。また、龍泉窯Ⅲ類の青磁蓮弁文鉢ないし盤片1点(2)が覆土から出土した。これも、13世紀後半～14世紀前半の製作時期が考えられる。人体遺残は認められなかったものの、形態・遺物の出土状況から土壙墓としてよいだろう。

**時期** 中世、13世紀末～14世紀初頭と考える。

**392号墓** (図145) 位置 R—22

IV層上面で検出した。116×80cmの方形を呈し、削平により遺構検出面からの掘り込みは6cmと浅い。覆土中から人骨が出土。

**人骨鑑定結果** 「このような形態をとるものは一般に女性であることが多い」

**686号墓** (図145・185) 位置 M—24

IV層上面で検出され79号住居を切るが、調査過程で上部を削平してしまった。74×56cmの楕円形を呈する。深さは18cm以上を測り、底面は平坦となる。底面近くから顔面を西側に向けた仰臥屈葬の人骨1体と北宋銭(50治平元宝)1枚が出土した。

**人骨鑑定結果** 「きゃしゃな男性の可能性が高いと考えられる。成人には達しており、少なくとも壮年にはなっていたと考えられる」

**時期** 中世以降と考える。

**945号墓** (図145・185) 位置 M—14・19

IV層上面で検出され、83号住居を切る。100×80cmの楕円形の平面形を呈する。76cmと深い掘り込みを持ち、底面は平坦でほぼ垂直に立ちあがる。底面から座位と思われる姿勢で1体分の人骨が銭貨5枚(51～55)を伴って出土した。銭貨は北宋銭3枚(皇宋通宝・元豊通宝・治平元宝)、明銭2枚(永樂通宝・洪武通宝)である。覆土中に大形礫が多数投げ込まれている。

**人骨鑑定結果** 「きゃしゃな四肢骨をもち、身長は大きくても153.70cm程度である。女性と考えられる。骨端は癒合しており、成人には達していたと考えられる」

**時期** 出土銭からみて1408年以降。

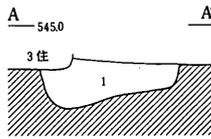
**968号墓** (図145・185) 位置 M—8

IV層上面で検出され、78号建物を切る。略円形で、120×104×34cmの規模を持つ。覆土中から1体の人骨と6枚の銭貨(56～61)が出土。銭貨は唐銭1枚(開元通宝)、北宋銭4枚(熙寧元宝2枚・宣和通宝・元祐通宝)、不明1枚である。実測図の礫は地山礫である。

**人骨鑑定結果** 「性別は不明である」

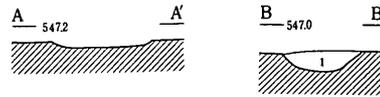
**時期** 中世以降と考えられる。

1 溝



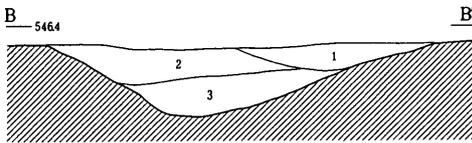
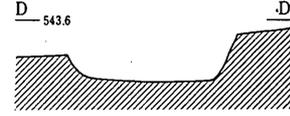
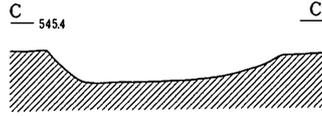
1：黒褐色土（粘土質シルト。礫混）

2 溝



1：黄褐色土（シルト質。礫混）

3 溝



- 1：褐色土（シルト質。粘性・しまり大）
- 2：暗褐色土（砂質。粘性少。小礫混）
- 3：黒褐色土（シルト質。粘性中、しまり小。炭化物少し含む。15cmの礫混）

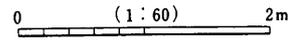


図146 溝跡

969号墓 (図145・185)

位置 M—8

IV層上面で検出され、78号建物を切る。不整形で長軸100cm・短軸70cm・深さ40cmを測る。底面は平坦となる。底面から1体分の人骨と銭貨3枚(62~64)が出土した。銭貨は唐銭(乾元重宝)、北宋銭2枚(大観通宝・熙寧元宝)である。

人骨鑑定結果 「頭蓋骨の特徴や四肢骨の頑丈さから、男性と思われる。成人には達していると思われる」  
 時期 中世以降と考えられる。

5 溝跡

1号溝跡 (図84・146)

位置 N—19・20・25

IV層上面で検出した。3号住居に切られる。溝の走行方向は南南東～北北西である。検出した長さは約6mである。検出面での幅1.1m、深さ40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南へ低くなっている。覆土は礫混じりの黒褐色土である。流水の状況は認められない。遺物は古代の土器片が少量出土し、ロクロ整形の小形甕(1)1点を図示した。時期は8世紀(後半以前)と考えておきたい。

2号溝跡 (図84・146)

位置 M—10・15、N—6

IV層上面で検出した。4号住居を切る。溝の走行方向は南西～北東で、調査区北東壁から外方へ伸びて行く。検出した長さは約8mである。検出面での幅80~60cm、深さは最大で15cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南へ低くなっている。覆土は礫混じりの黄褐色シルト。流水の状況は認められない。遺物は古代の土器片が少量出土し、2点を図示した。1は底部回転糸切り不調整の須恵器坏、2はロクロ整形の小形甕で、実測図では表現していないが、外面カキメ調整である。土器以外の遺物は、円盤形石製品(34)が検出面でみつまっている。時期は9世紀~10世紀としておく。

## 3号溝跡 (図82~84・164・178)

IV層上面で検出した。調査区のほぼ中央を等高線に直交して走る長大な溝である。検出した長さは80mに及ぶ。北東の調査区外から南西に伸び、南側にやや屈曲してH・Mグリッドを通り、Qグリッドの中央辺りで消失する。検出面での幅3~1.3m、深さ50~30cmを測り、断面形は浅いU字形ないし逆台形を呈する。底面は北から南へ向かって低くなっており、北端と南端の比高3.3mを測る。流水の状況については不明である。覆土は礫混じりの黒褐色~褐色シルトで、7世紀~古代の遺物を包含するが、中世遺物は含まれない。古代の遺物も明確に11世紀代以降以降のものは見当たらない。また、溝は、山側の遺構の広がりや谷側の遺構分布の境にある遺構稀薄地帯を貫いており、これと切合う7世紀~古代の竪穴住居・掘立柱建物は存在しない。溝の存続期間は明確でないが、中世には埋没していたと思われるので、7世紀から9世紀の或る時点で開掘され、古代集落の消滅とともに10世紀後葉には廃絶したと考えておきたい。

遺物はテンバコ1/3程が出土した。すべて土器の小片で接合率も悪く、図示できるものは少ない。1は須恵器坏蓋、2は須恵器坏、3は土師器坏で、どちらも底部静止ヘラケズリ調整。4は灰釉陶器碗。

## 6 遺構外出土土器 (図178・179)

ここでは遺構外から出土した土器のうち、完形に近いもの、類例の少ないものを中心に幾つか取り上げる。古墳時代前期の土器は、壺(1)と小型器台(2)が出土している。壺は、球形胴部からく字状の口縁部が大きく外反し、胴下部はすぼまって、突出気味の平底に至る。頸くびれ部直下に櫛描き横走文を施し、その下の肩部には櫛描き波状文を二段に巡らせる。小型器台は、ごく僅か内彎する受け部と若干外反して開く脚部をもち、その境は鈍い。胎土は精良ではなく、受け部内面はハケ調整である。15号住居覆土から出土したが、明らかに混入のため本項に記載した。

古代~中世では、須恵器は、壺蓋(6)、張りの強い肩に端面上向きの突帯を巡らす小形壺(7)、還元不十分な焼成の長頸壺(10)がある。土師器は、須恵器模倣の両面黒色処理高台付坏(1)、非黒色処理碗(2)、古代末~中世の小皿(3~5)、口縁部の外傾度が弱いロクロ整形甕(6)がある。その他、中世に属する遺物として内耳鍋、播鉢、青磁、白磁片が出土している。

## 7 土器以外の遺物

## (1) 瓦 (図180)

1号住居および9号住居覆土から平瓦・丸瓦が出土し、平瓦7点(1~7)、丸瓦4点(8~11)を図示した。いずれも破片で、全体形や法量を計測できる例はない。

平瓦は厚さ2cm台前半にほぼ収まり、凸面調整は平行タタキの後ナデを施す。凹面は比較的細かい布目痕が残る。側面および端面調整はケズリで、さらに凹面側の側縁を面取り気味に削る。この他に、3の凸面には布の綴じ目が観察され、5の凹面には糸切り痕が観察できる。

丸瓦は、須恵質のもの(8・9・11)と、平瓦と同じ焼成状態のもの(10)がある。後者は器肉2.7cmと厚く、凸面調整は平行タタキの後ナデ、凹面は横方向のナデである。前者は1.7・1.5cmと薄く、凸面調整は平行タタキ後ナデだが、凹面には布目が観察される。側面および端面調整はケズリで、さらに凹面側の側縁を面取り気味に削る。8は筒部と一体成形の玉縁部が残る。

これらは、信濃国分寺跡出土の瓦とは異なった特徴を示しており、別系統の生産地が考えられる。遺跡周辺には寺院跡等は知られていないので、当時の集落付近に瓦葺き建物が存在した可能性があろう。

## (2) 土製品 (図181)

**土器片板** 形状は台形に近い方形で、素材に内耳鍋片を利用している。

**土製紡錘車** 扁平な形状のもの(2)と厚みのある断面台形状のもの(3・4)がある。いずれも酸化炎焼成で、外面調整は2がヘラミガキ、3はナデ、4がヘラケズリ。

## (3) 石器・石製品 (図181~183)

**石製紡錘車** (1~3) 滑石製で、形態は略台形を呈する。

**石鏃** (4~18) 無茎凹基鏃(4~15)、有茎平基鏃(16)、有茎凹基鏃(17・18)がある。石材は16が硬質頁岩、その他は黒曜石。

**スクレイパー** (19・20) 横長剥片を素材とする。19は頁岩、20は黒曜石製。

**敲石** (21) 細長い安山岩礫を素材とする。表裏平坦面と側面に敲き痕がみられる。磨り面なし。

**磨石** (22~33) 石材は安山岩の自然礫を用いている。形態面では扁平な礫を素材とするもの(22~27・29・32・33)と球形に近い礫を素材とするもの(28・30・31)に区別できる。機能面では、磨り面のみのもの(22・27・31~33)と、磨り面と敲き痕を合わせもつもの(23~26・28~30)を認識できる。30は縦断面台形に近いドーム形を呈し、トチタタキ石に類似した形態といえよう。

**円盤形石製品** (34) 片方の平坦面中央に、磨擦による円錐形の凹み状小孔が穿たれている。側面は研磨により丸く仕上げている。火鑽杵の当て具だろうか。石材は砂岩。

**石皿** (35) 欠損のため、全体形は不明だが、扁平な形態で、片方の平坦面に半円形の浅い窪みがある。ただし、磨痕・敲痕が認められないので、未製品ないし未使用品でないとすれば、石皿ではなく、他の用途、例えば柱の礎板石等を想定した方が良いか。石材は安山岩。

**台石** (36) 板状の砂岩を素材とし、片方の平坦面と側面に磨面が認められる。床に置いた使用状態を想定する。

**石鉢** (37・38) 平面円形ないし楕円形で扁平気味の安山岩礫を用いている。使用面の形状は、38は浅いU字形、37は深いU字形である。37は体部壁より底部が薄くなっており、使用期間の長さを反映するか。

**砥石** (39~49) A類：板状の大形品(39・40・42)、B類：柱状の大形品(41)、C類：小形品(43~49)に分類できる。A類は床においた使用、C類は手持ちの使用状況が想定される。石材はB・C類が1点を除き緻密な凝灰岩を用い、A類はそれより目の荒い砂岩を用いており、形態の違いとともに、対象や作業工程による使い分けが推定される。なお、42の砥面には断面V字形を呈する溝状の深い擦痕が数条刻まれている。44には垂孔と思われる貫通孔が穿たれている。

**石斧** (50・51) 50は凝灰岩製の定角式磨製石斧、51は千枚岩質粘板岩製の打製石斧である。

**その他** (52・53) 52は貫通する孔をもつ不整形品だが、石器でないかもしれない。53は板状の体部に貫通孔が穿たれた滑石製品の破片。機能・用途は不明である。

## (4) 金属器・金属製品 (図184~185)

**鉄鏃** (1・2) 逆刺を有する三角形の鏃身部に短い頸部が付く。鏃身断面形は両丸造。関は1が台形関で、2が角関である。

**刀子・刀** (3~8) いずれも平棟平造で、関は5~8が両関、3は不明確である。4は茎の破片。

**鉄斧** (9・10) 基部が袋状を呈し、袋部の断面形は9が楕円形、10が長方形。

**鏟** (11) 断面長方形を呈する。頭部先端は潰れて外側に少々張り出している。

**釘・棒状鉄製品** (11~18) 釘は断面方形を呈し、12・13は頭部先端の一部が外側に張り出す形態、15は

頭部全体が身部より一回り太くなっている。16～18は棒状鉄製品としたが、釘の一種かもしれない。

**彎曲鉄製品** (19) 破片のため全体形状は判らないが、一方の端が太く、そこから彎曲中心に向かって次第に細くなる形態である。断面形は方形を呈する。太い方の端近くに平面V形の刻みがある。

**板状鉄製品** (20・21) 20は一方の端部が斜辺をなし、短く直角に折れる形態。21は次第に細くなる一方の端部を巻き込むように折り曲げている。

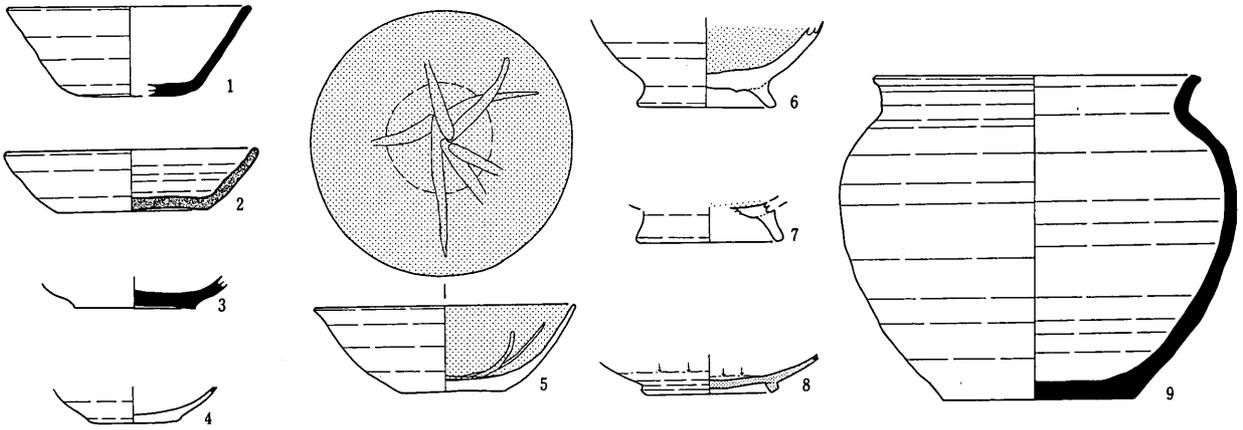
**耳環** (22～25) いずれも銅芯で、断面円形ないし楕円形。23～25は金張り。22は箔がすべて剥がれ落ちているが、黒色の錆びが認められるので、銀箔かもしれない。25には二箇所巻き糸が遺存する。

**帯金具** (26～28) 26はいわゆる鍔帯金具の「丸柄」で、8世紀後半の55号住居から出土した。表面は黒色に光沢を帯びた部分が観察され、漆を塗っていると思われる。表金具・裏金具とも垂孔をもち、大きさは縦1.8×横2.9、厚さ0.45cmを測り、垂孔は縦0.3×横1.7cmである(表金具)。表金具に3本の鋳が鑄出され、裏金具にはそれと同位置に小孔が穿たれており、脚鋳式の装着方法を採用のものである。このような形態を、田中広明が示した型式変遷(田中1990)に対比すると、垂孔プロポーションの評価にややすっきりしない部分を残すが、そのⅡ期(奈良時代後半)に位置付けられ、土器様相からみた遺構時期と整合する。27・28はともに欠損品だが、巡方ないし鉞尾の裏金具と考えられる資料である。27は両端近くに鋳が嵌入する小孔が開けられている。

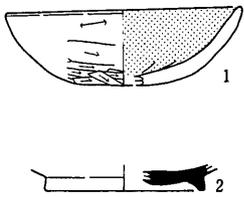
**銭貨** (31～85) 土壙墓に伴うものや検出面でみつかったものが大半を占める。銭種は殆ど宋銭で、明銭、唐銭、日本銭が若干ある。日本銭は寛永通宝の他、いわゆる皇朝十二銭のひとつ隆平永宝(84)が出土している。

**その他** (29・30) 29は薄い銅板を巻くように折り曲げて接着・成形したもので、筭の頭部か。30は両端を斜めに切った形態の筒状銅製品である。

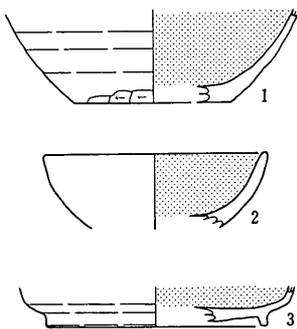
1 住



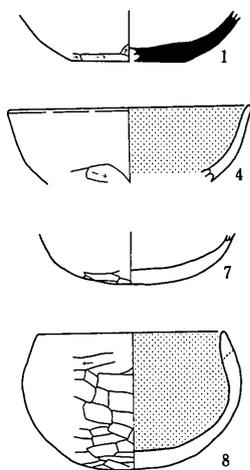
2 住



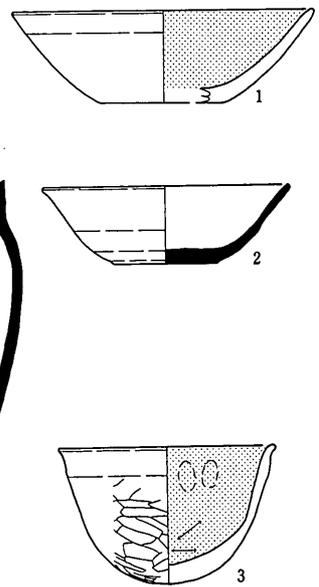
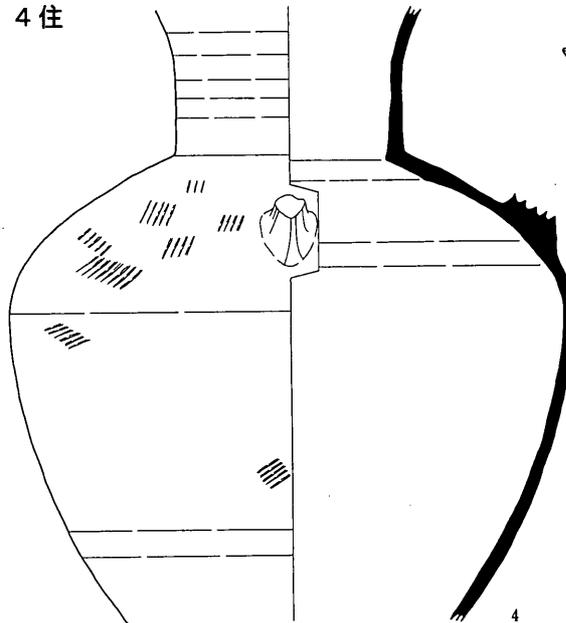
3 住



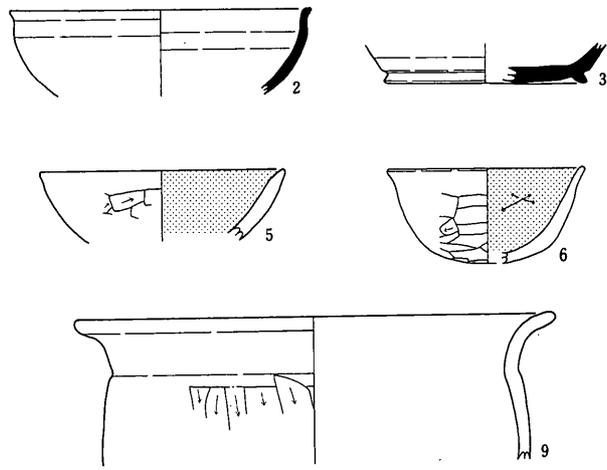
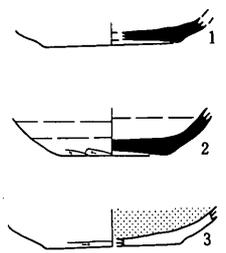
5 住



4 住



7 住



0 (1:4) 10 cm

图147 土器(1) —古墳時代後期~平安時代—

9 住

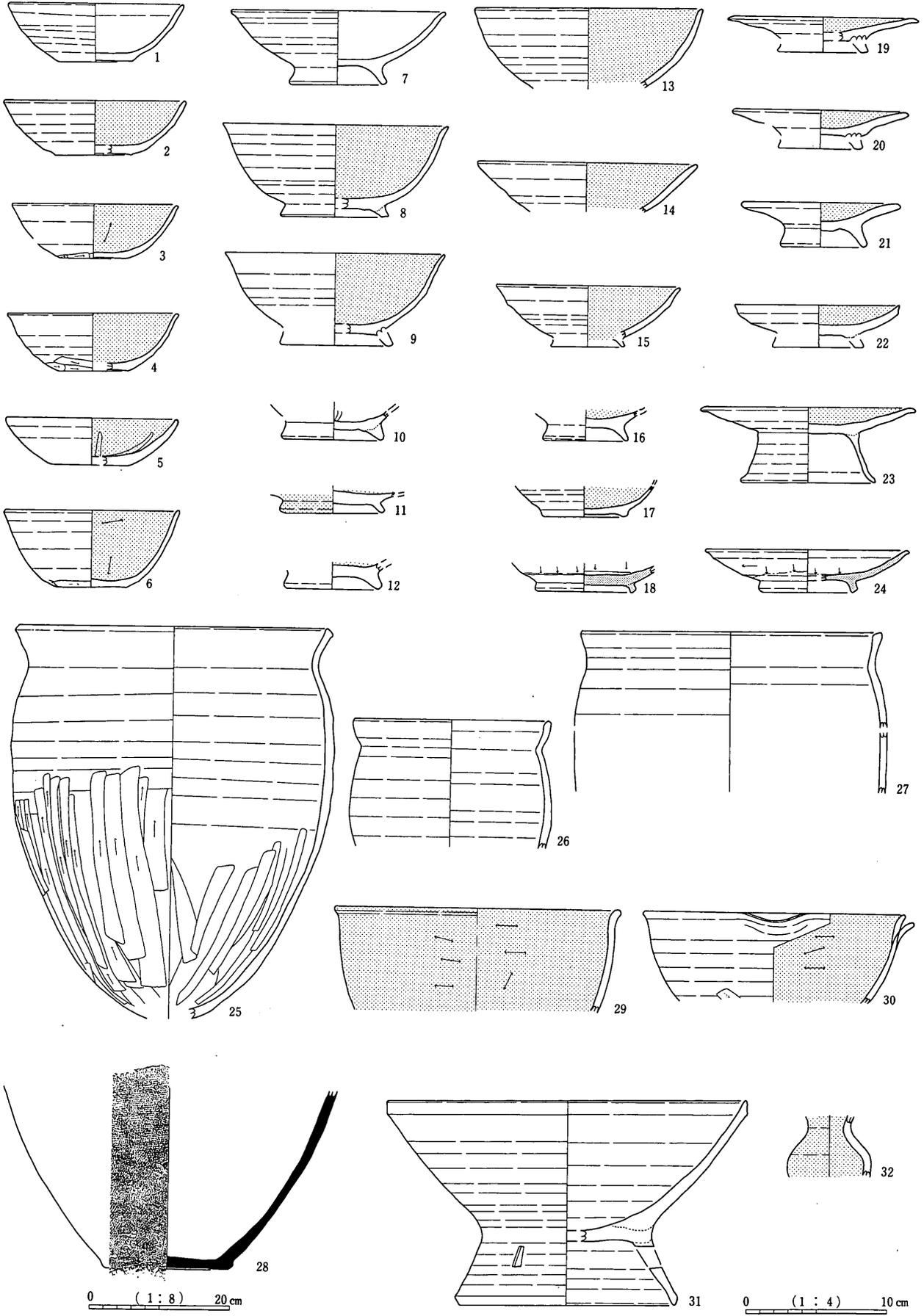
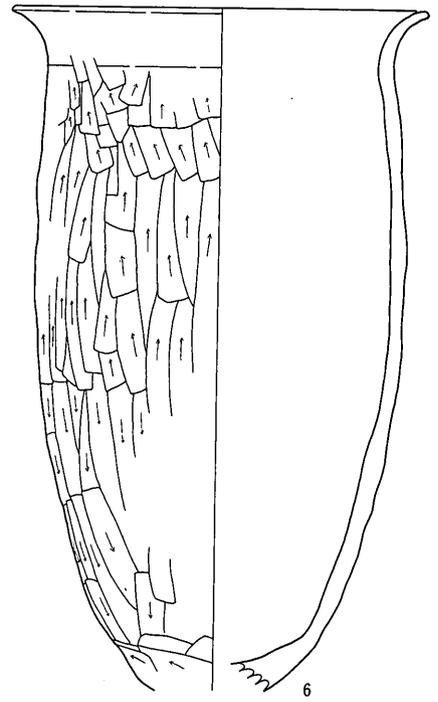
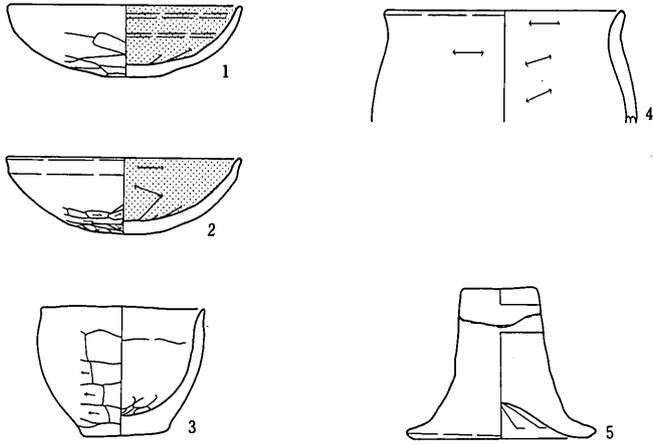
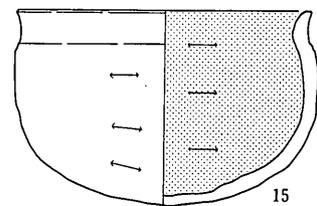
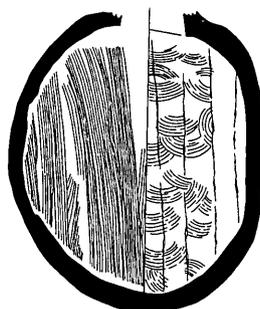
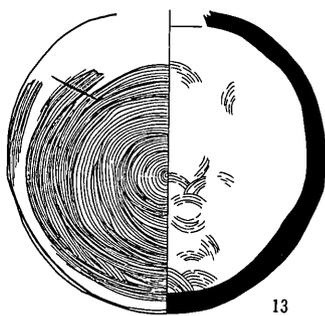
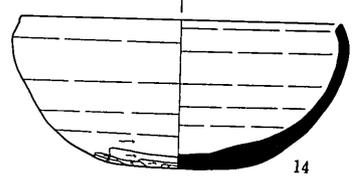
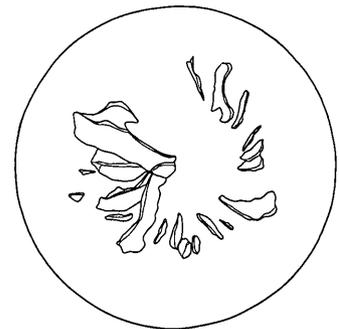
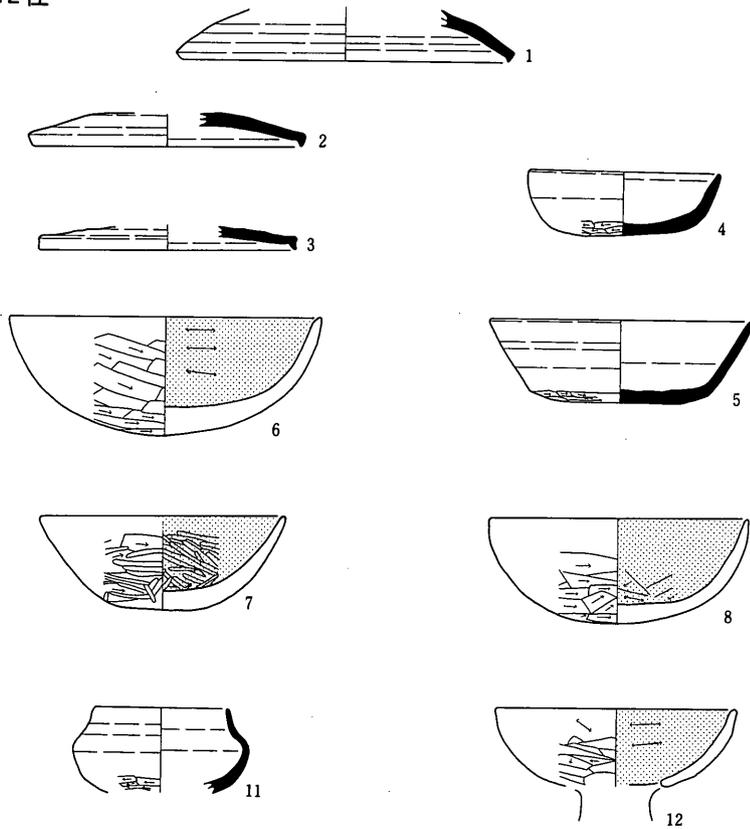


图148 土器(2) —古墳時代後期~平安時代—

10住



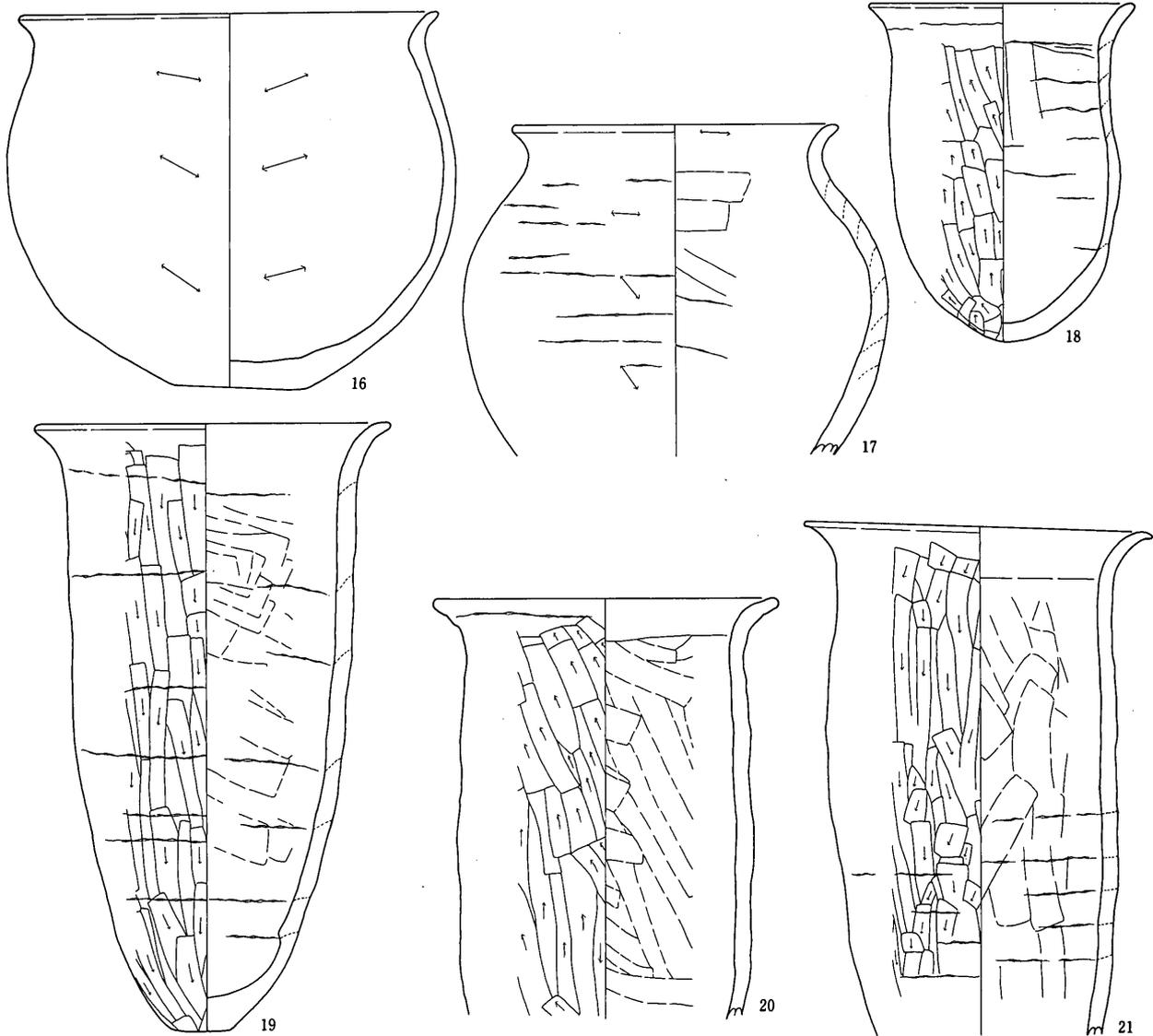
12住



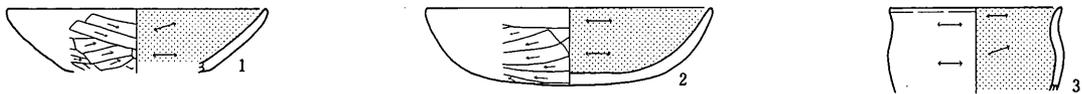
0 (1:4) 10 cm

图149 土器(3) —古墳時代後期~平安時代—

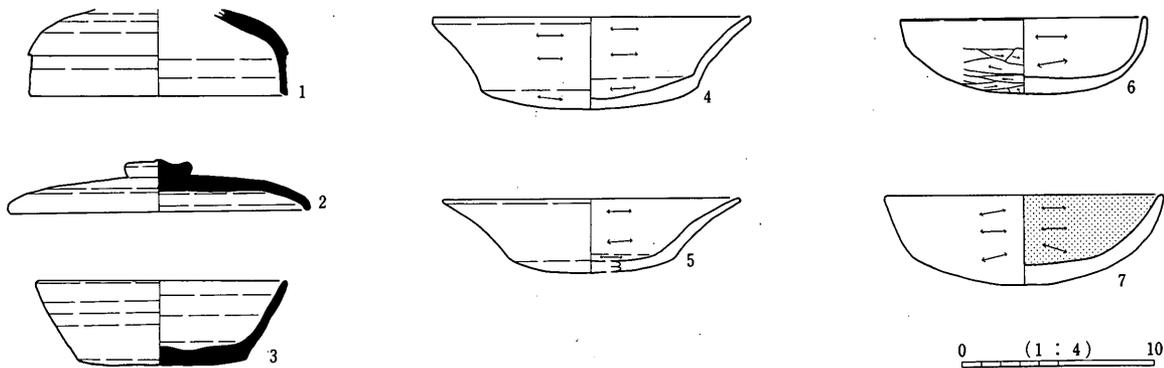
12住



15住



17住



0 (1:4) 10 cm

图150 土器(4) —古墳時代後期~平安時代—

17住

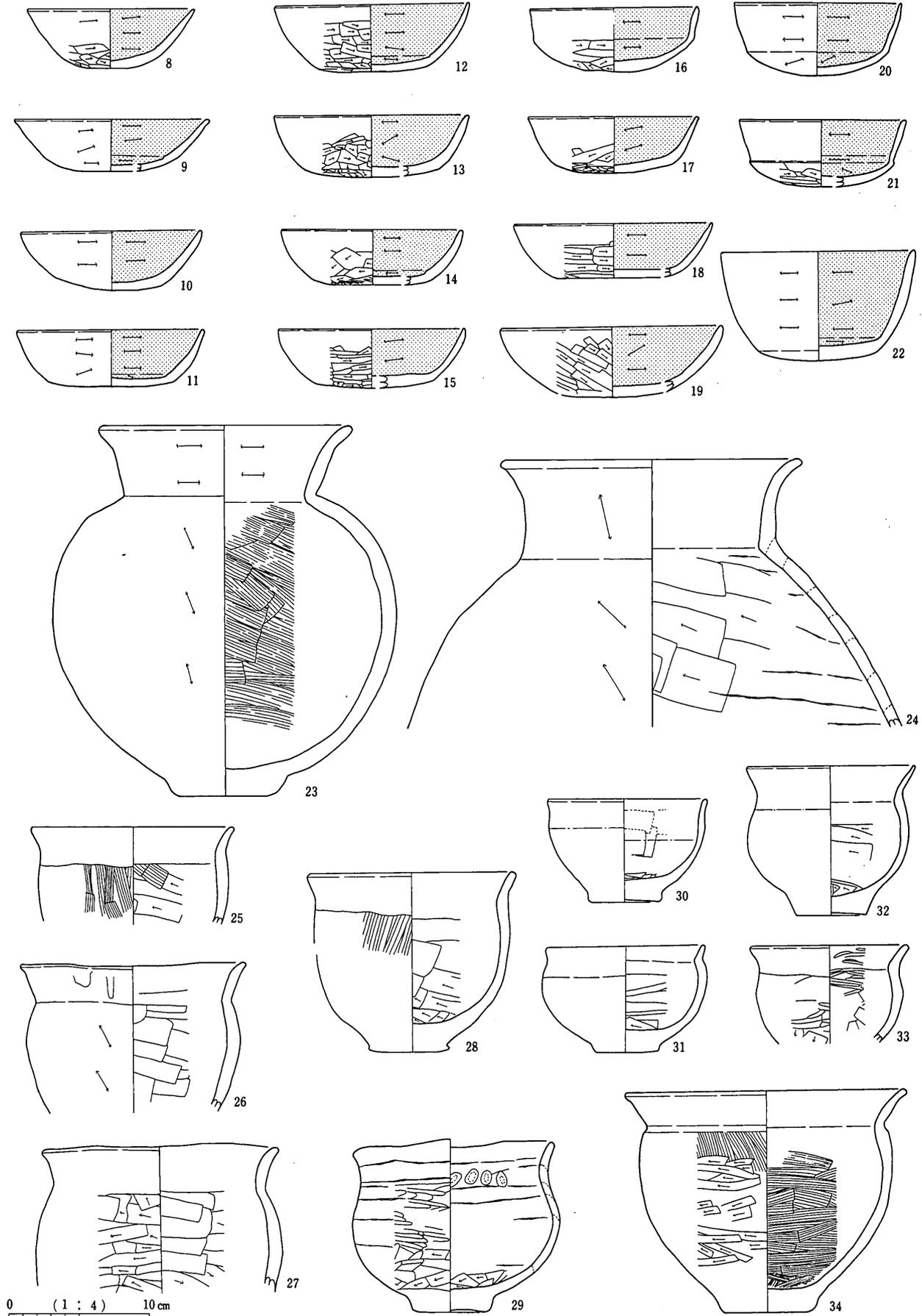


図151 土器(5) —古墳時代後期~平安時代—

17住

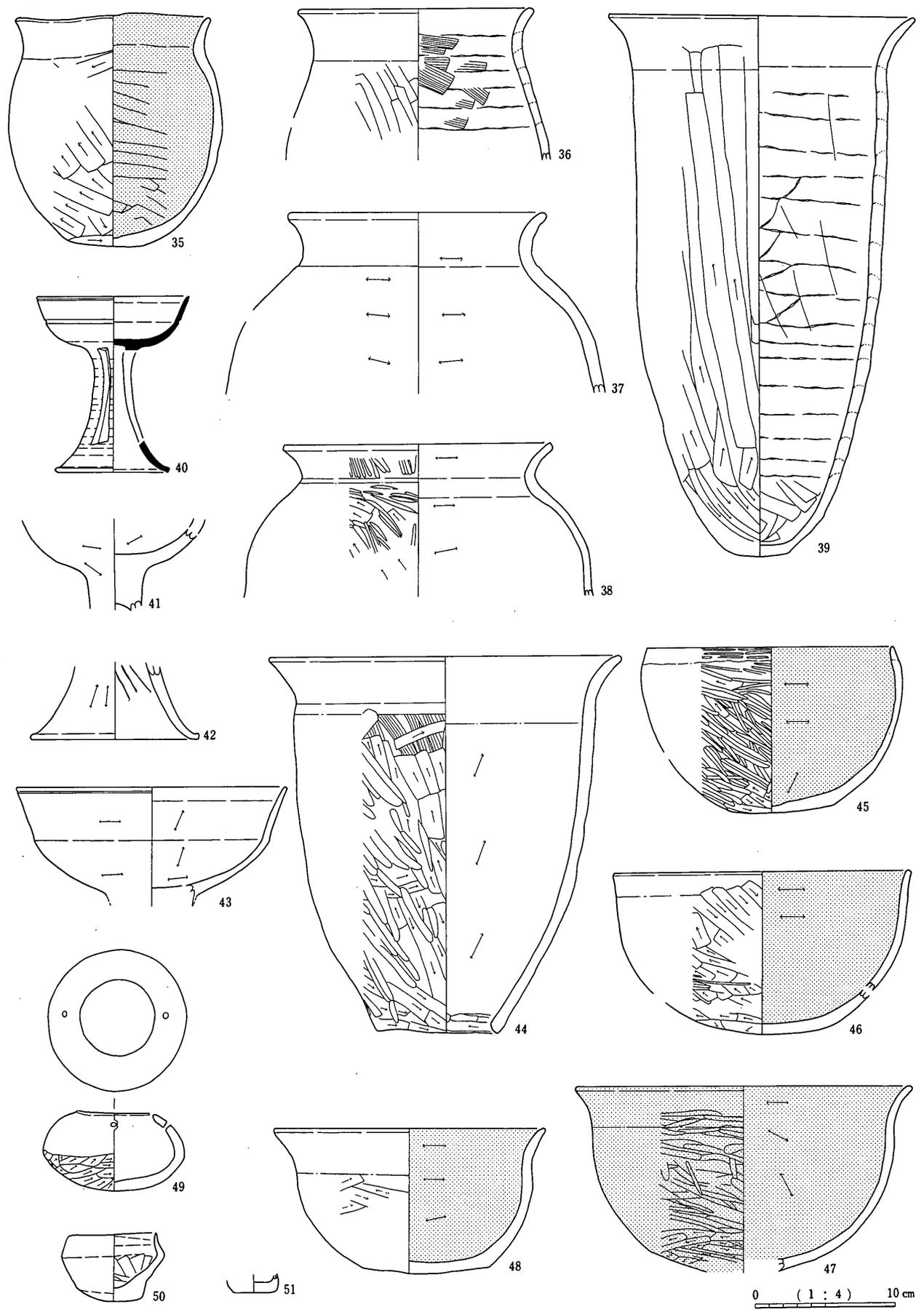
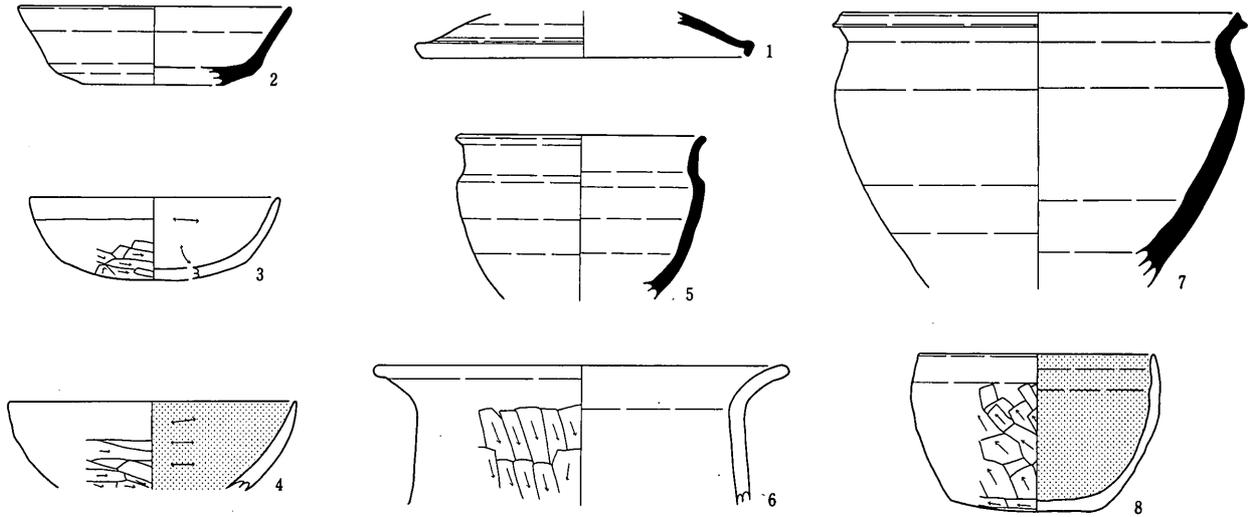
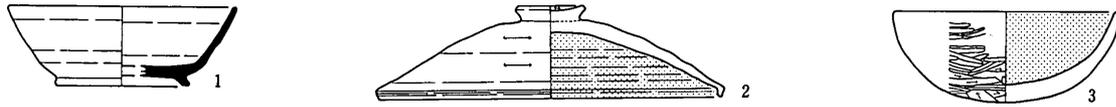


图152 土器(6) —古墳時代後期~平安時代—

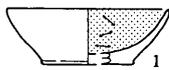
18住



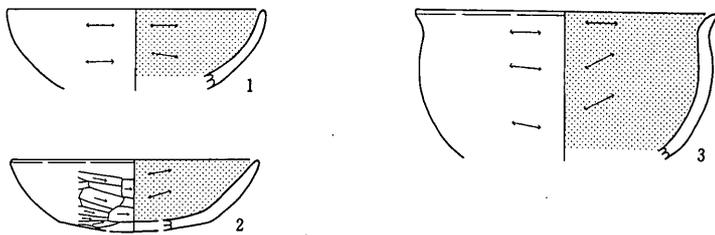
19住



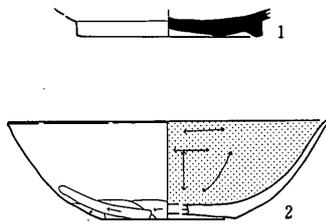
20住



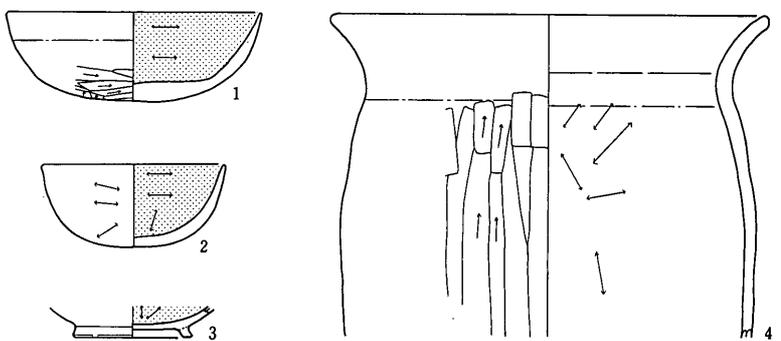
21住



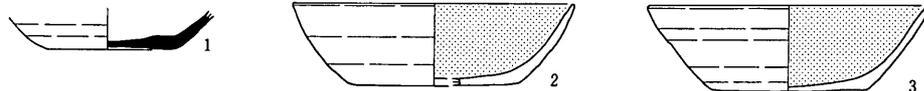
22住



23住



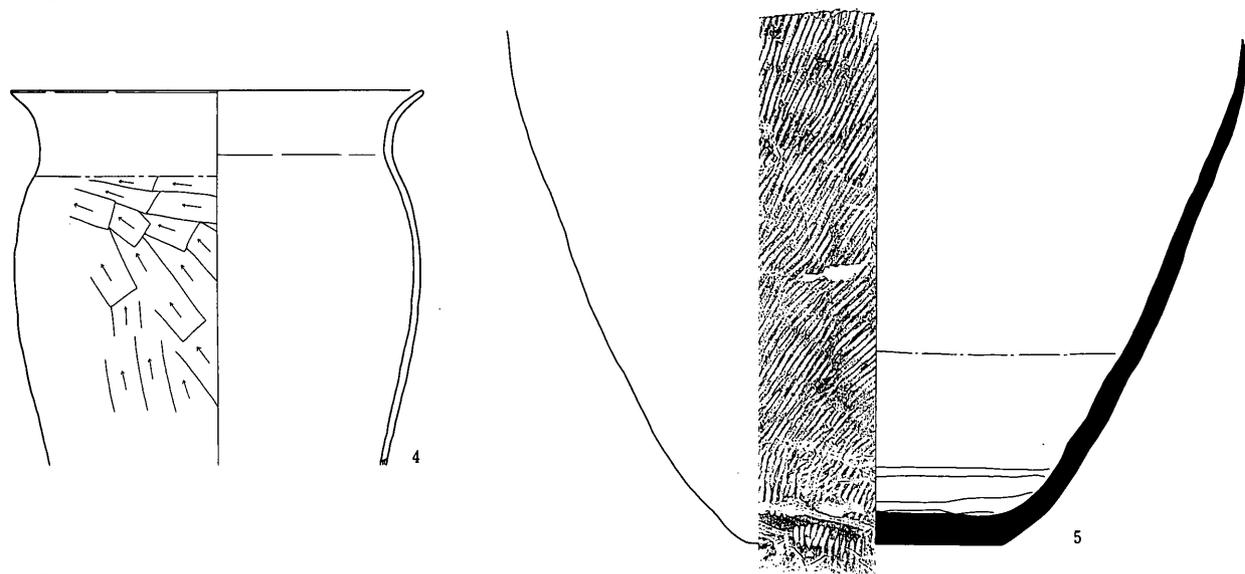
26住



0 (1:4) 10 cm

図153 土器(7) —古墳時代後期～平安時代—

26住



27住

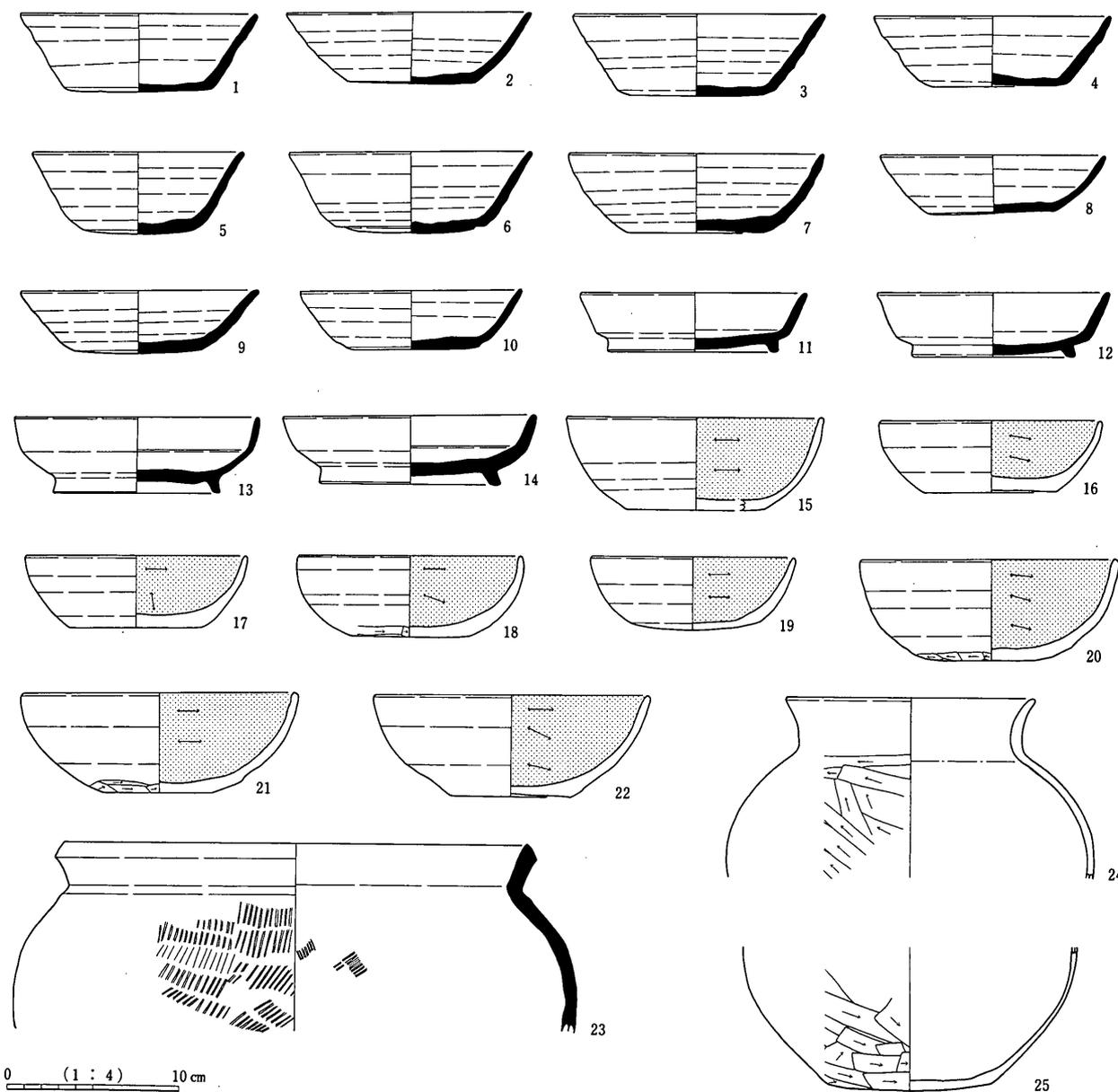
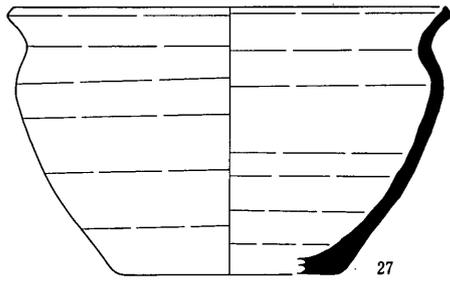
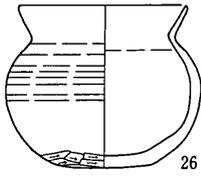
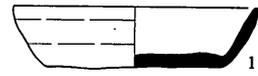


図154 土器(8) —古墳時代後期～平安時代—

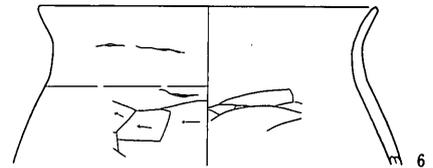
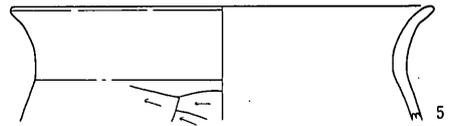
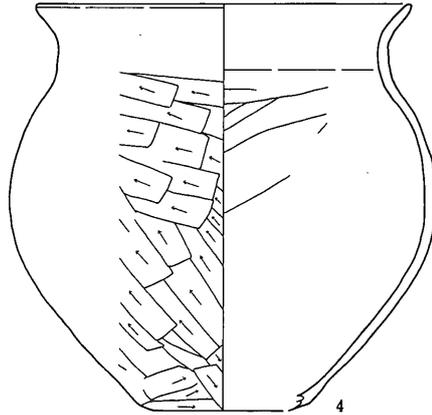
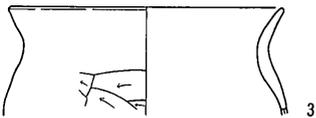
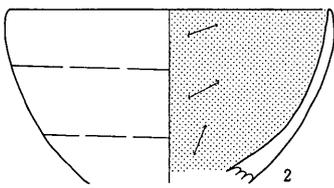
27住



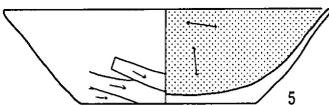
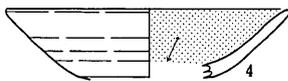
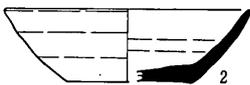
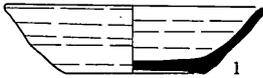
29住



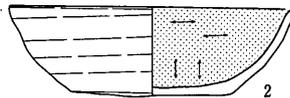
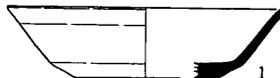
28住



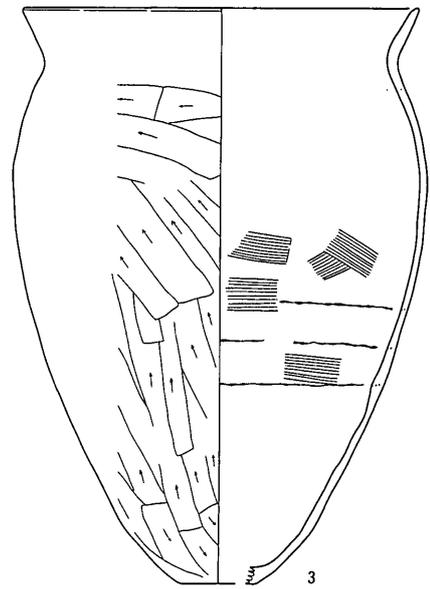
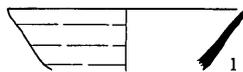
30住



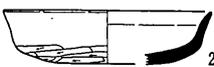
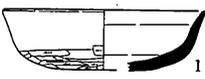
32住



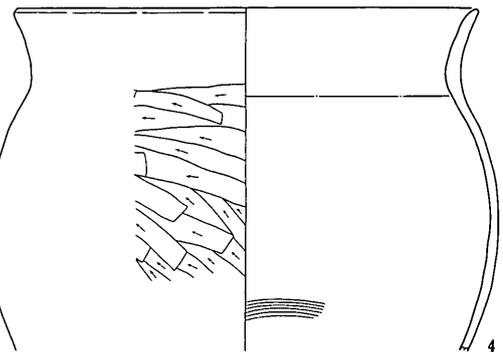
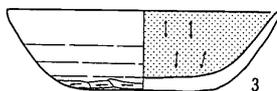
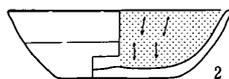
34住



33住



35住



0 (1:4) 10 cm

図155 土器(9) —古墳時代後期~平安時代—

36住

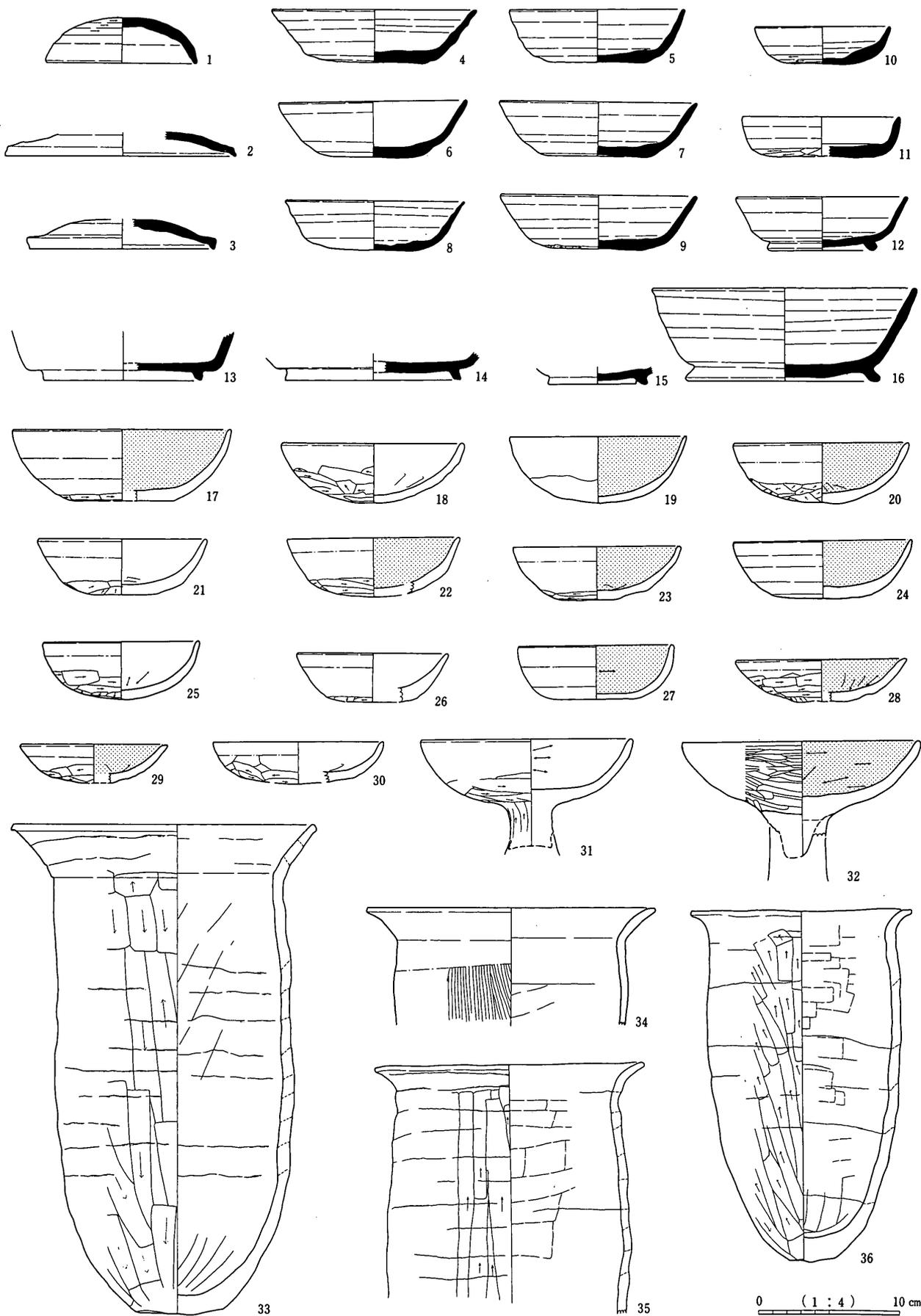
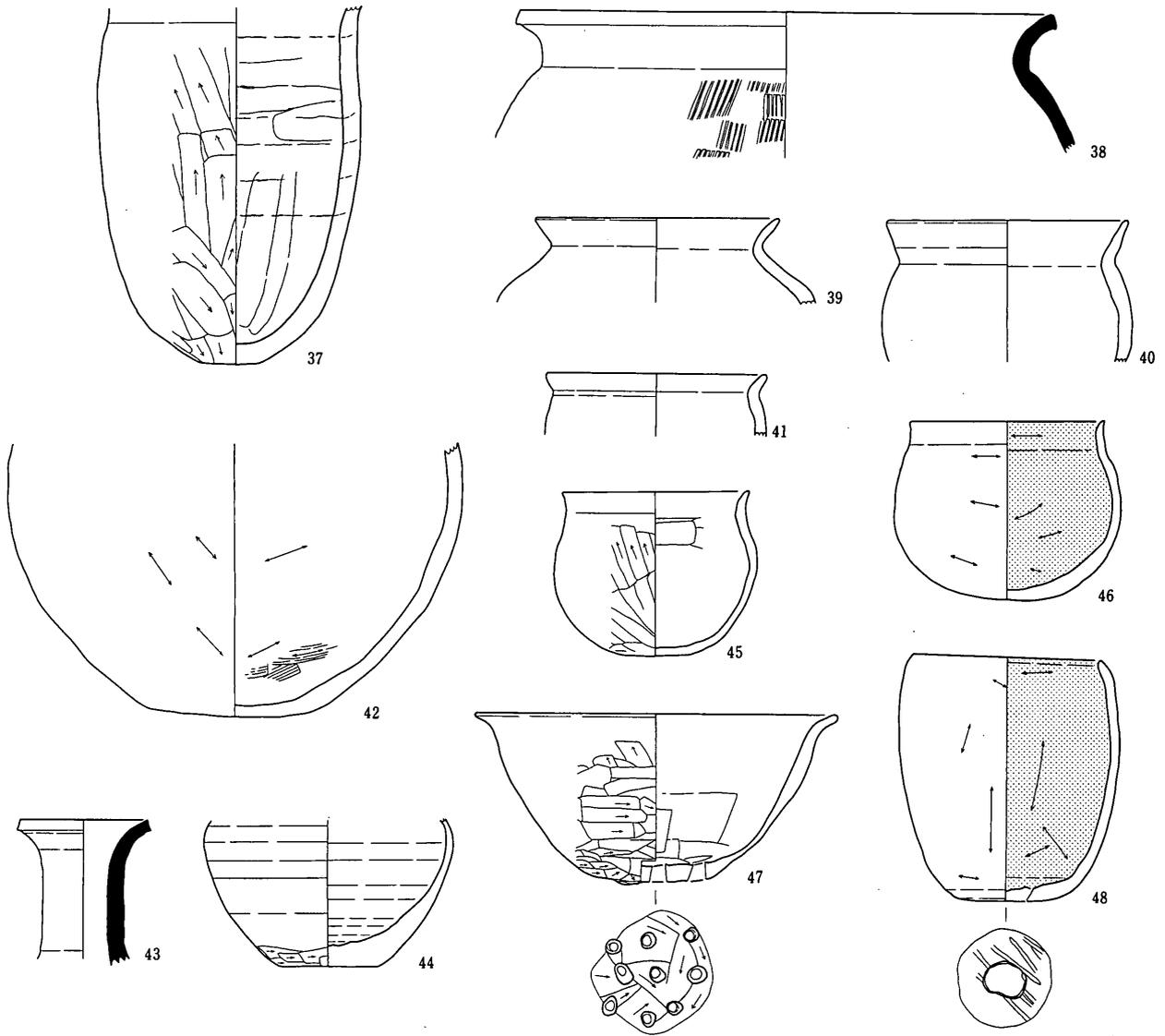


図156 土器 (10) —古墳時代後期～平安時代—

36住



37住

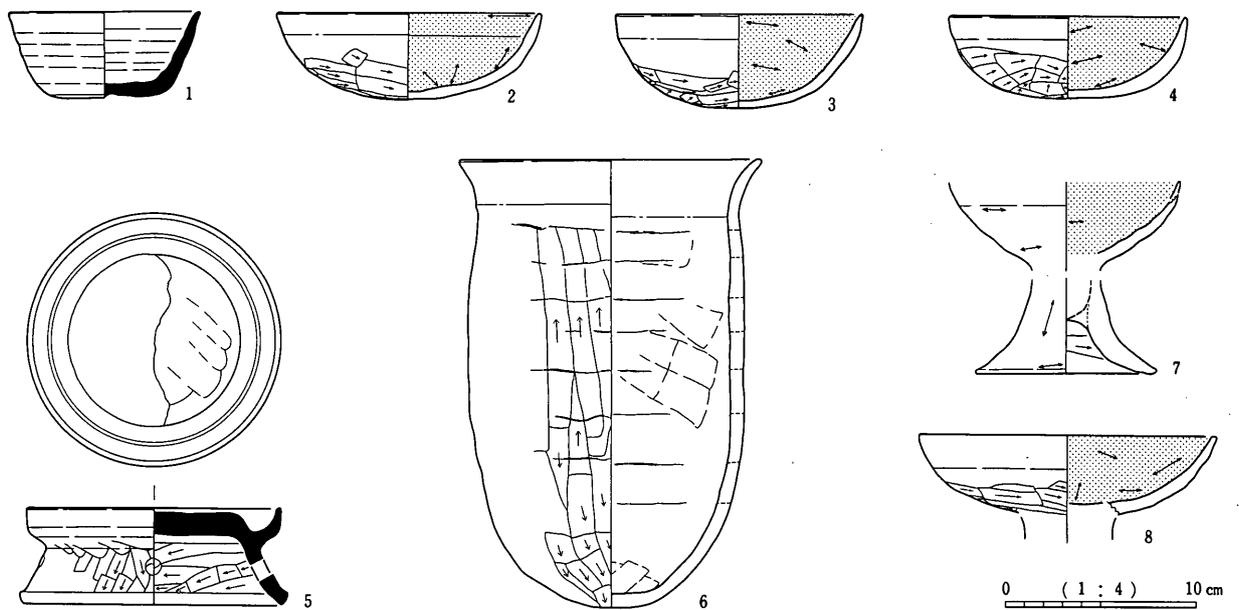
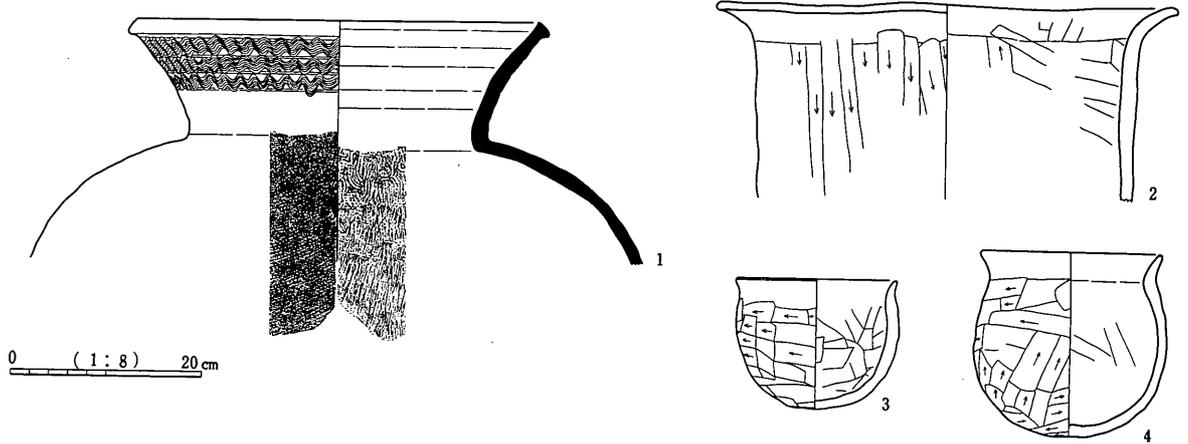
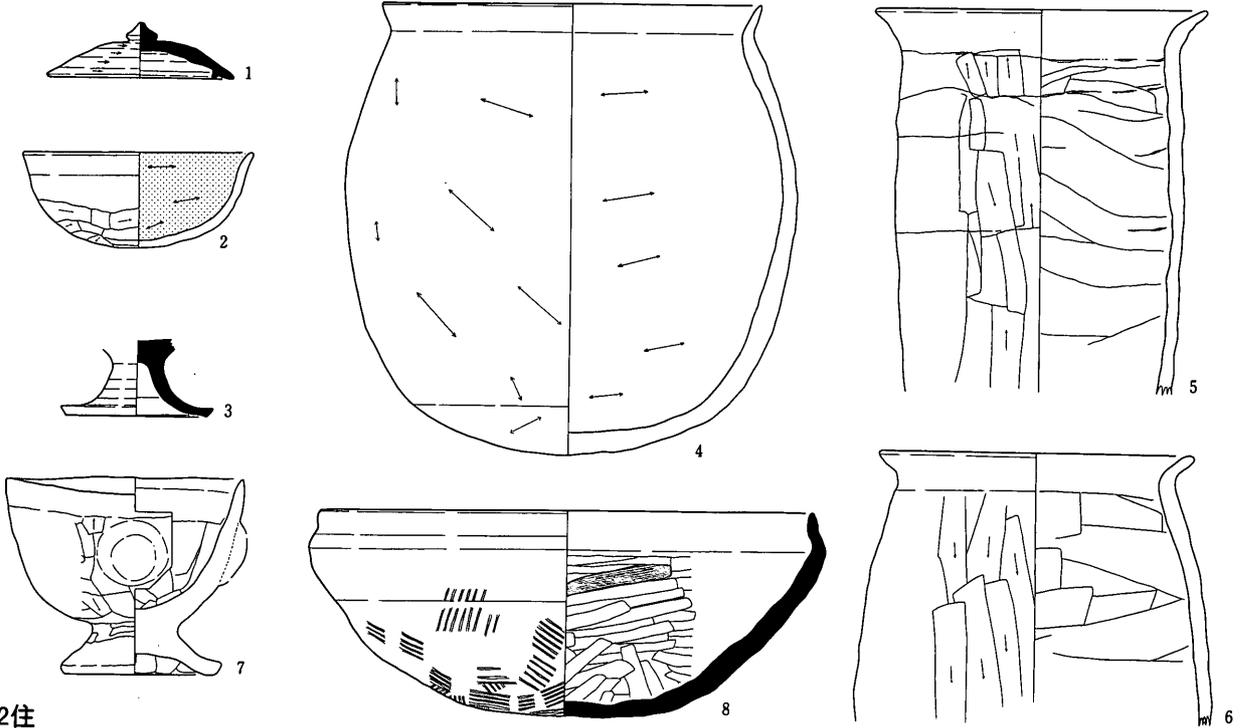


図157 土器 (11) —古墳時代後期～平安時代—

38住



41住



42住

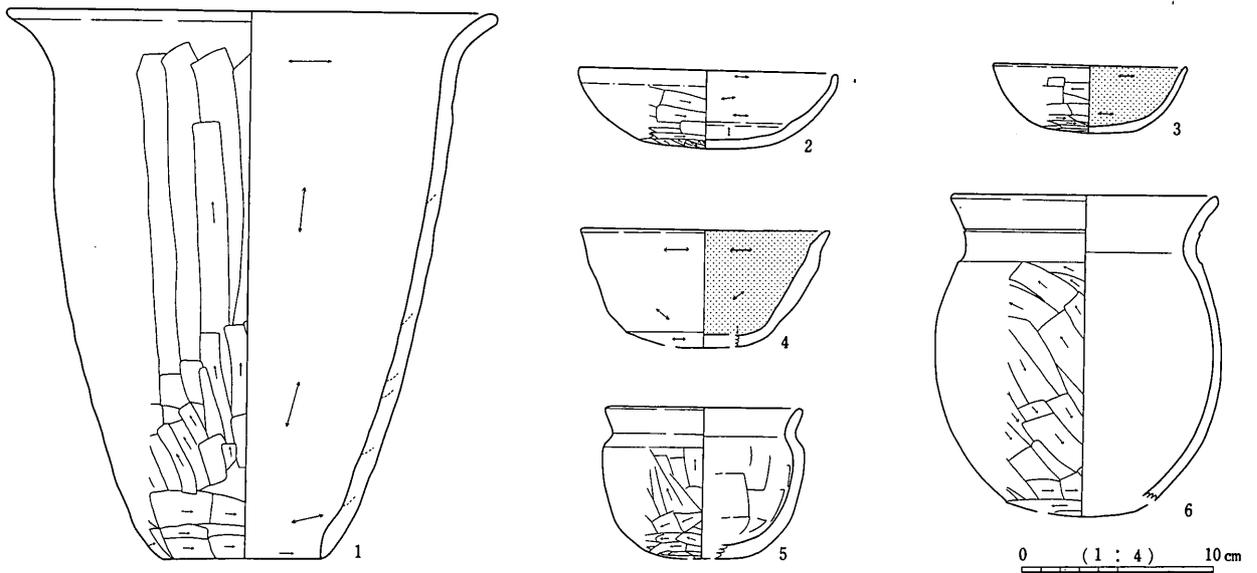
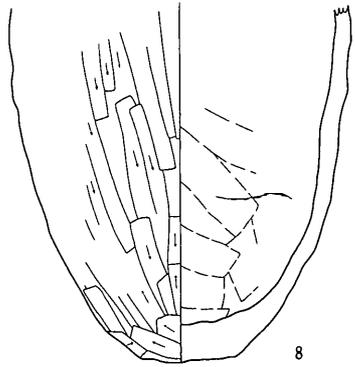
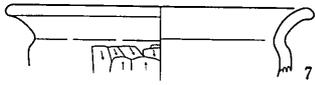
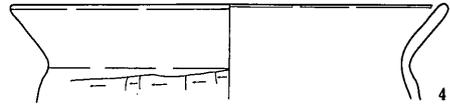
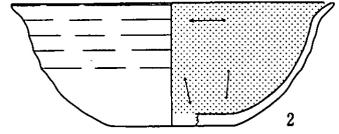
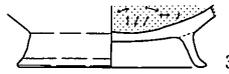


図158 土器 (12) —古墳時代後期～平安時代—

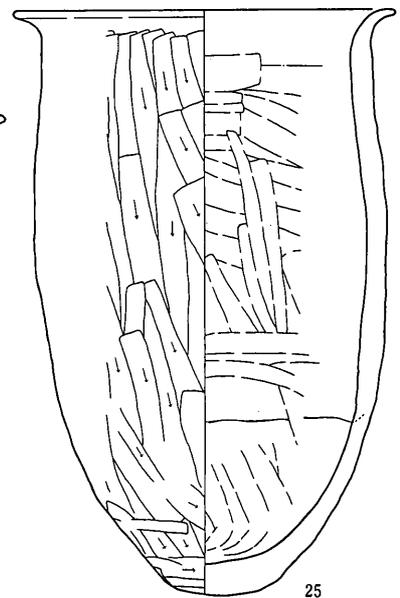
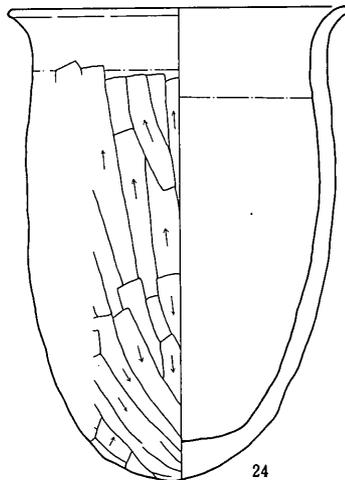
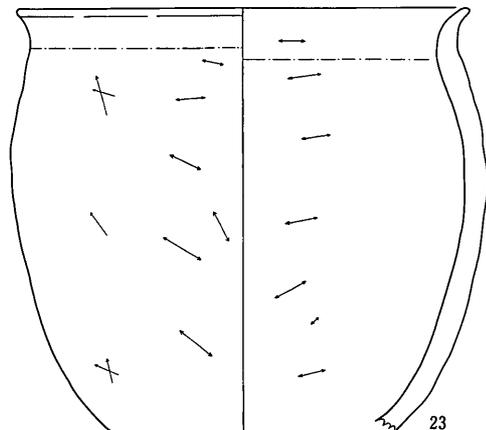
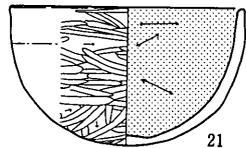
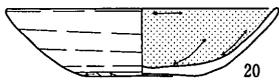
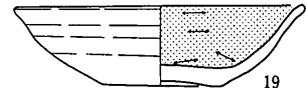
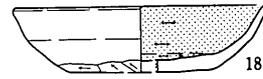
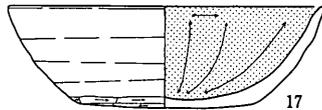
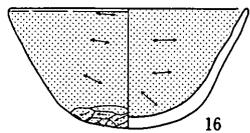
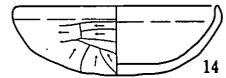
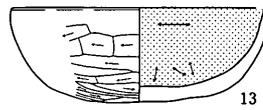
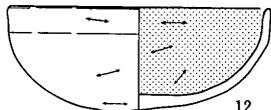
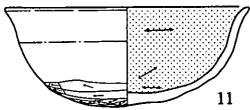
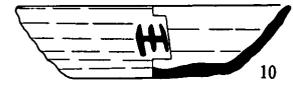
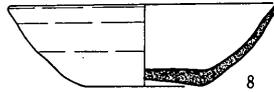
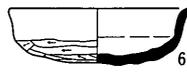
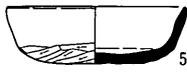
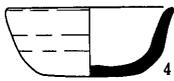
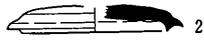
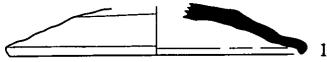
42住



43住



44住



0 (1:4) 10 cm

図159 土器 (13) —古墳時代後期～平安時代—

44住

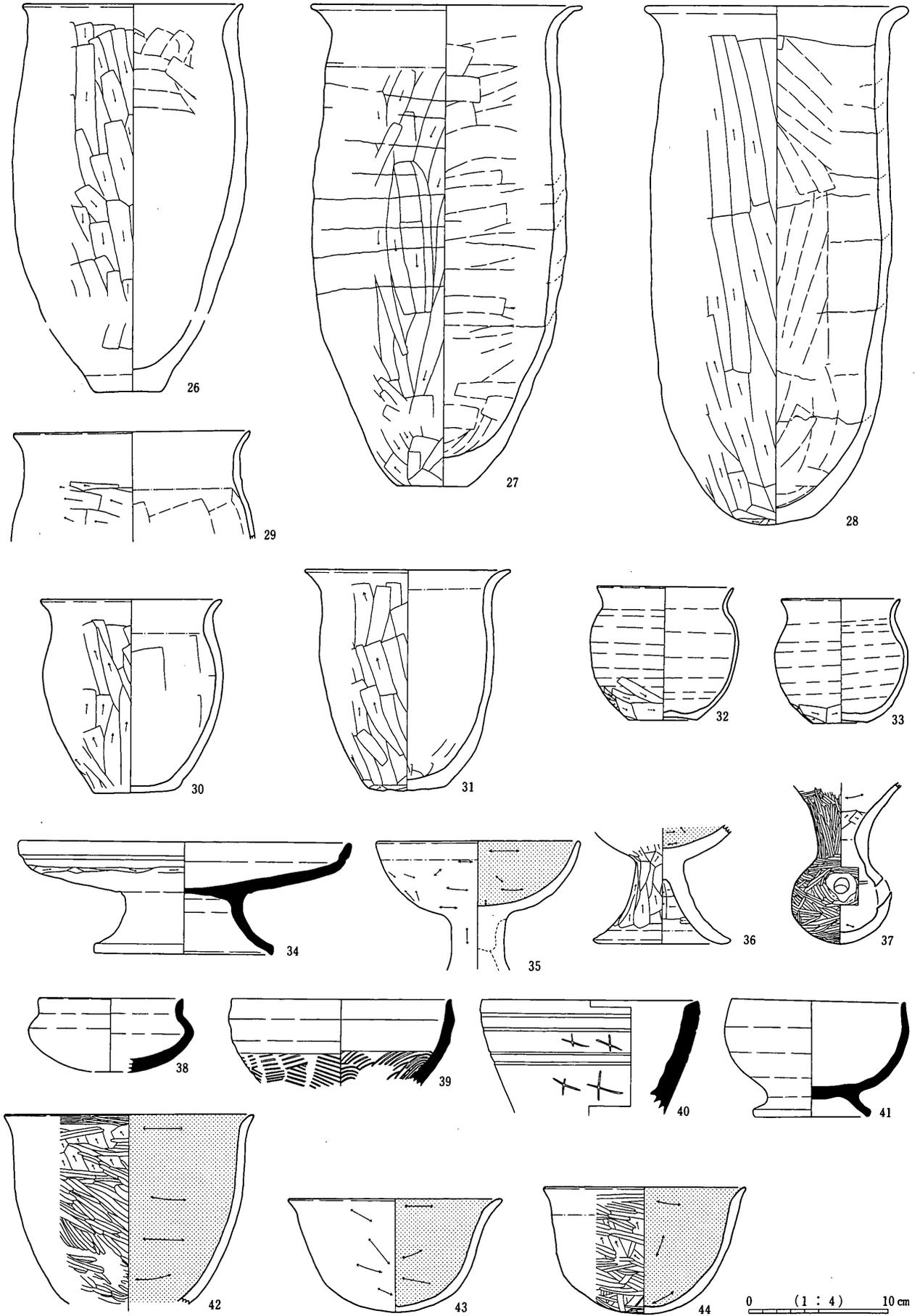
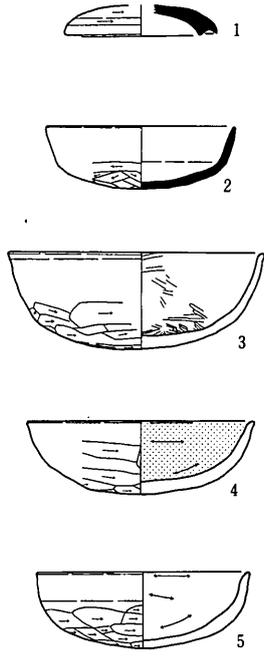
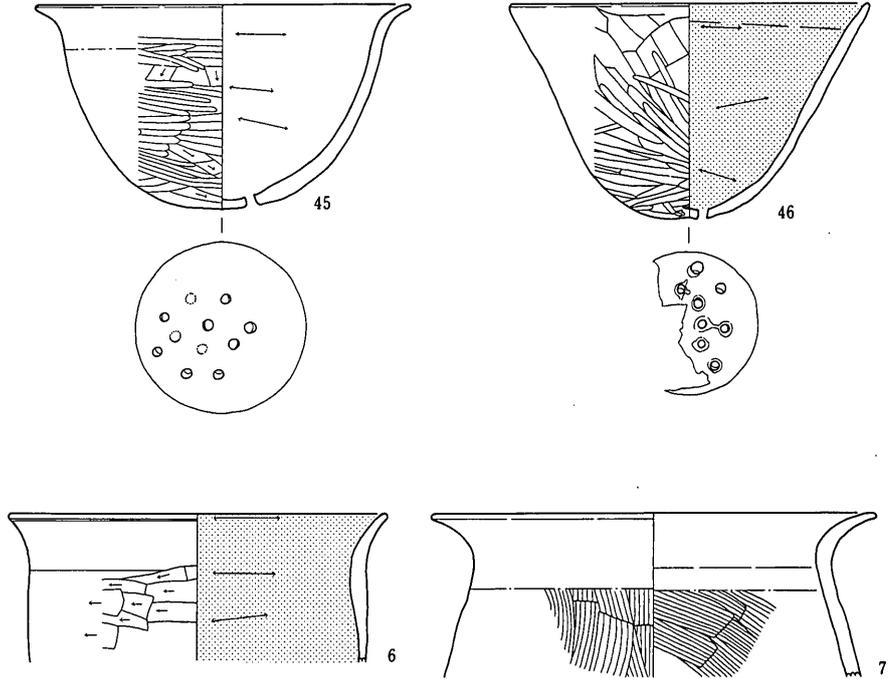


图160 土器 (14) —古墳時代後期~平安時代—

45住



44住



46住

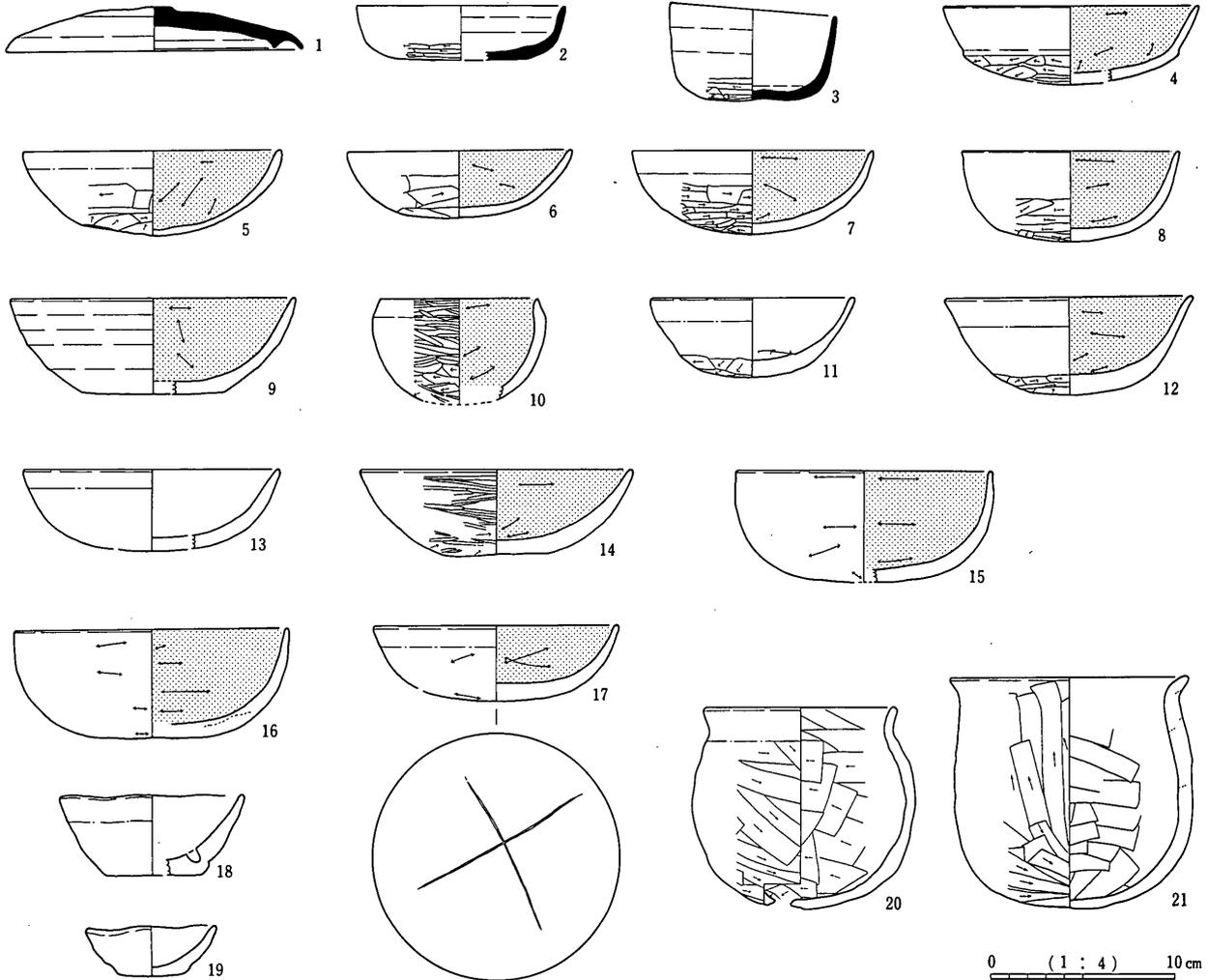
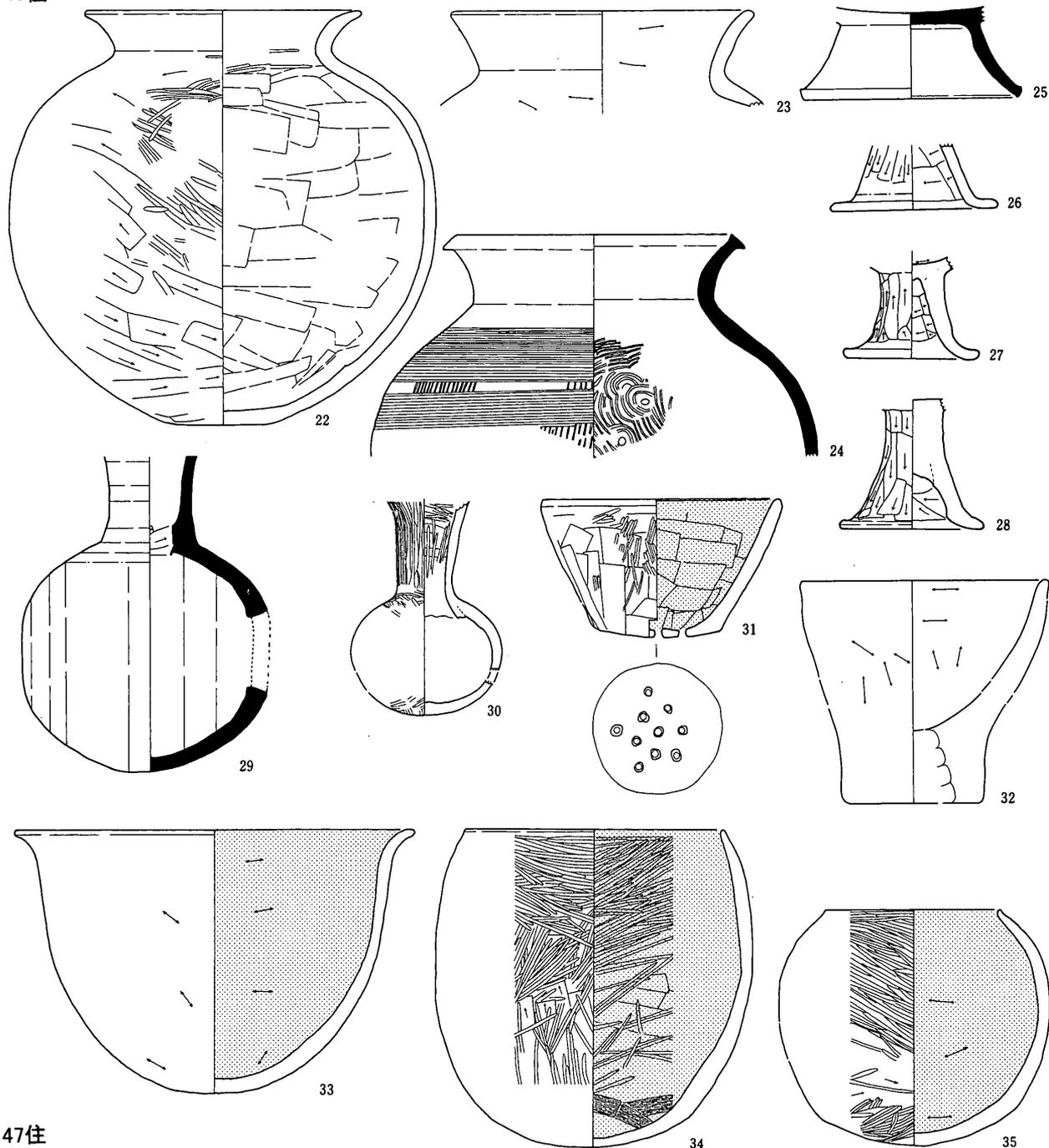
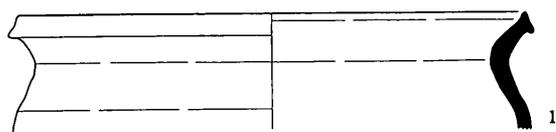


図161 土器 (15) —古墳時代後期～平安時代—

46住



47住



48住

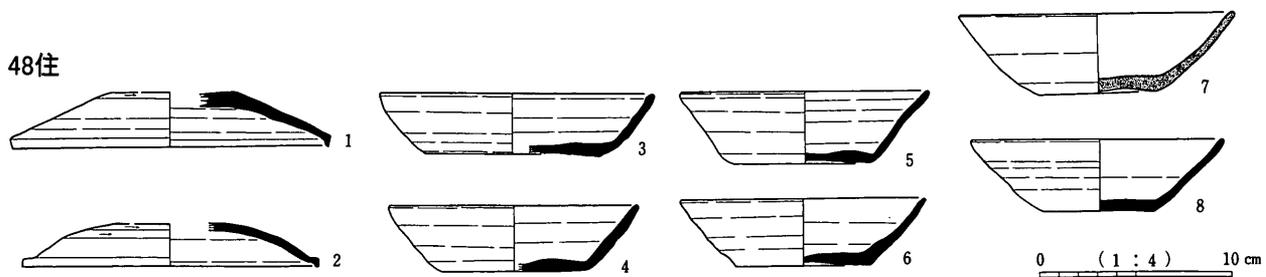
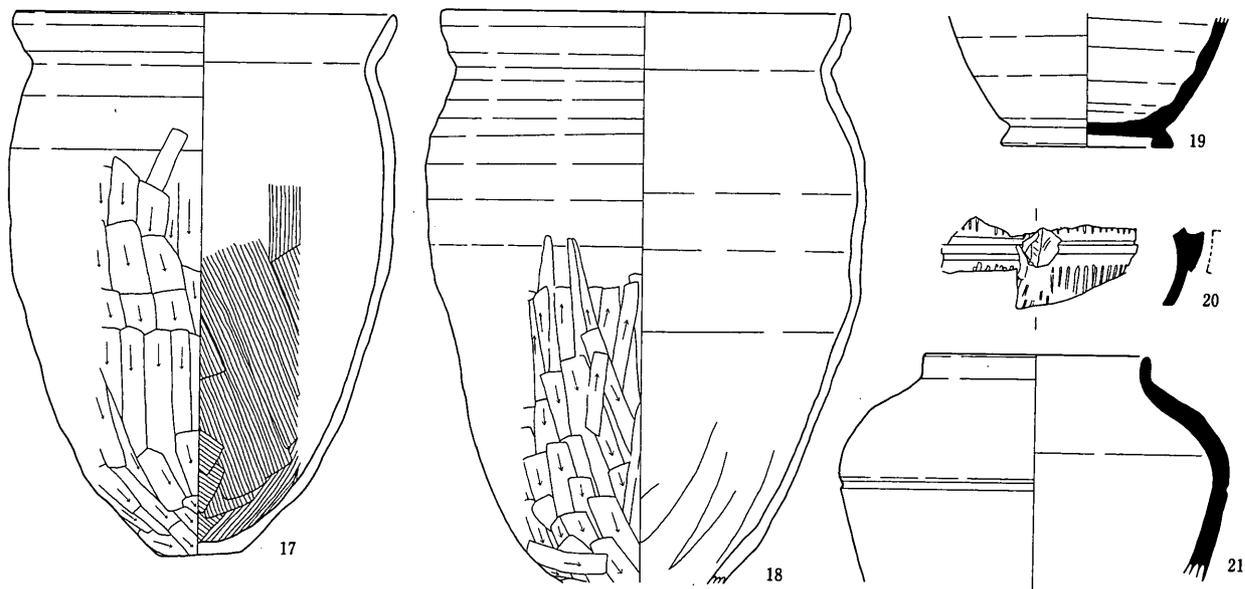


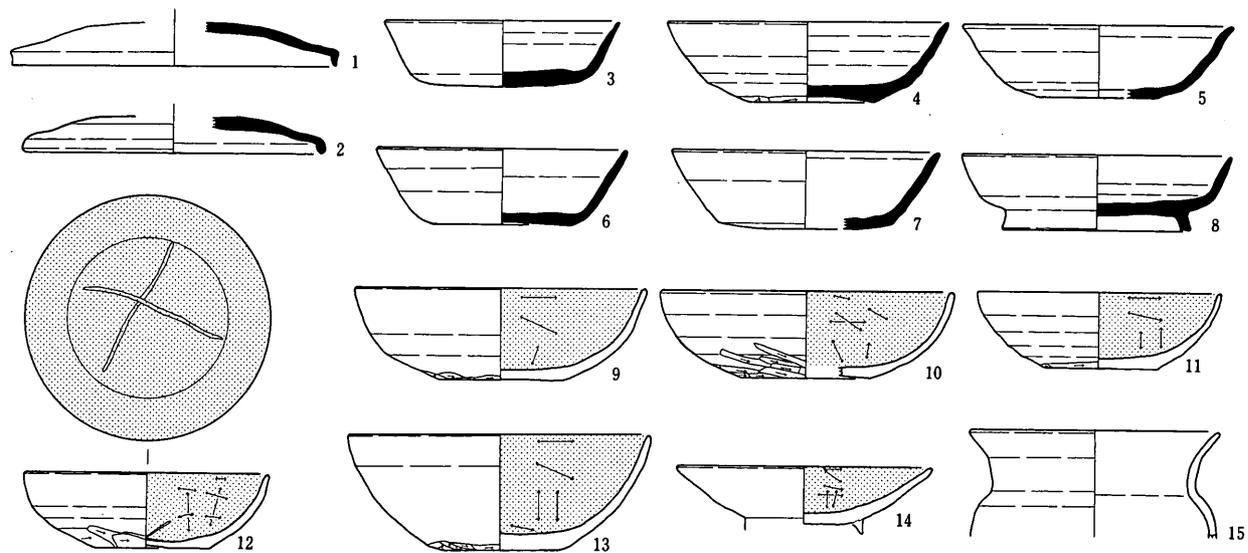
图162 土器 (16) —古墳時代後期~平安時代—



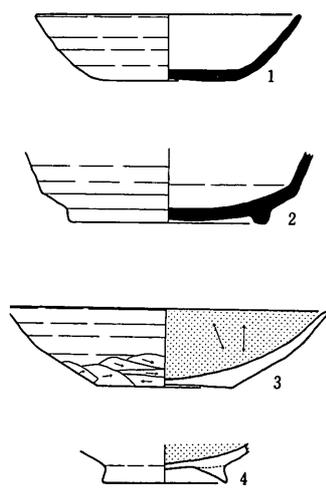
54住



55住



56住



58住

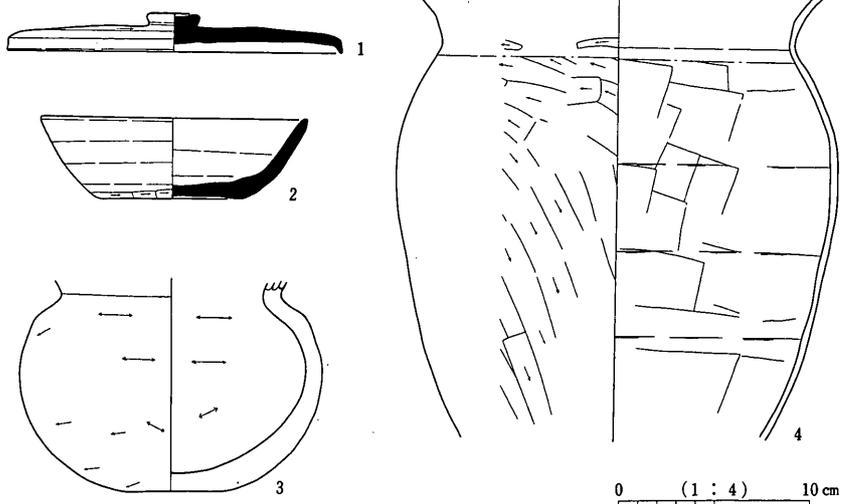
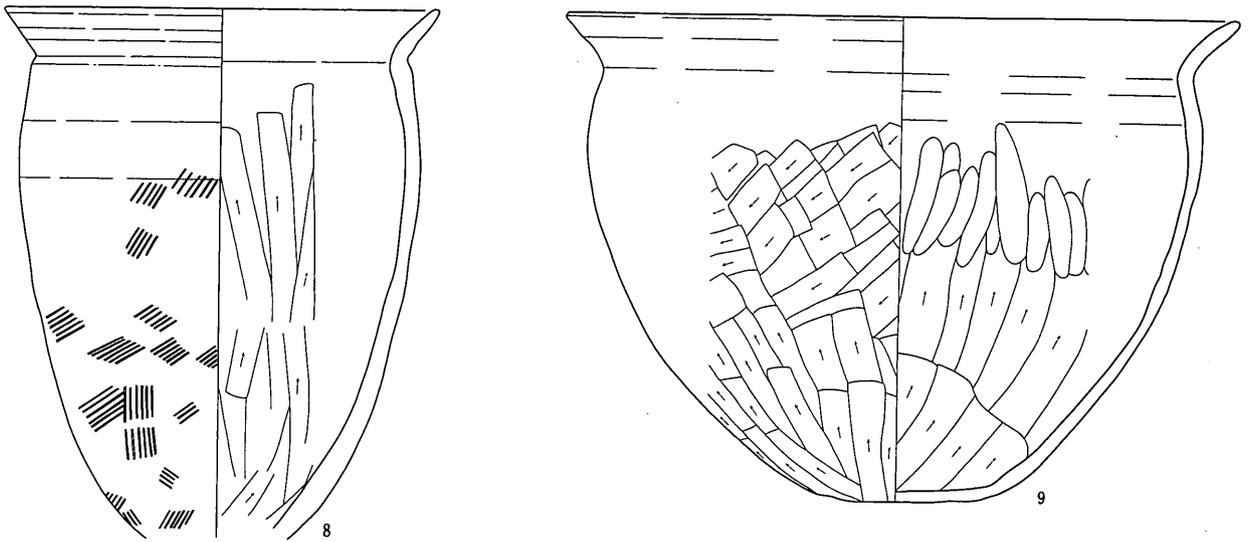
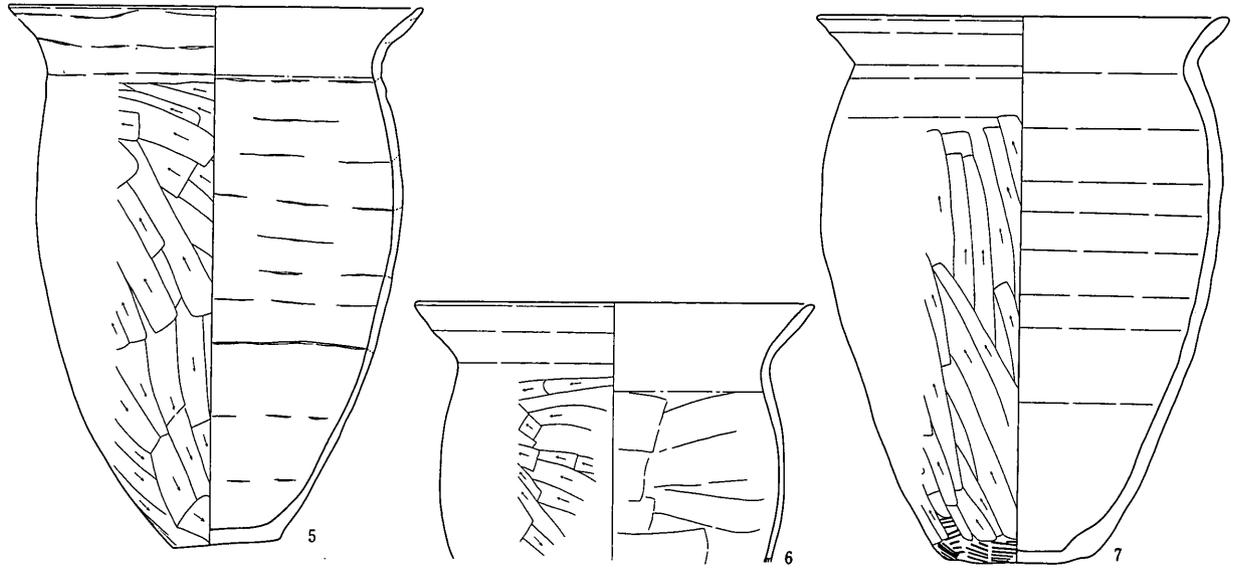


図164 土器 (18) —古墳時代後期～平安時代—

58住



59住

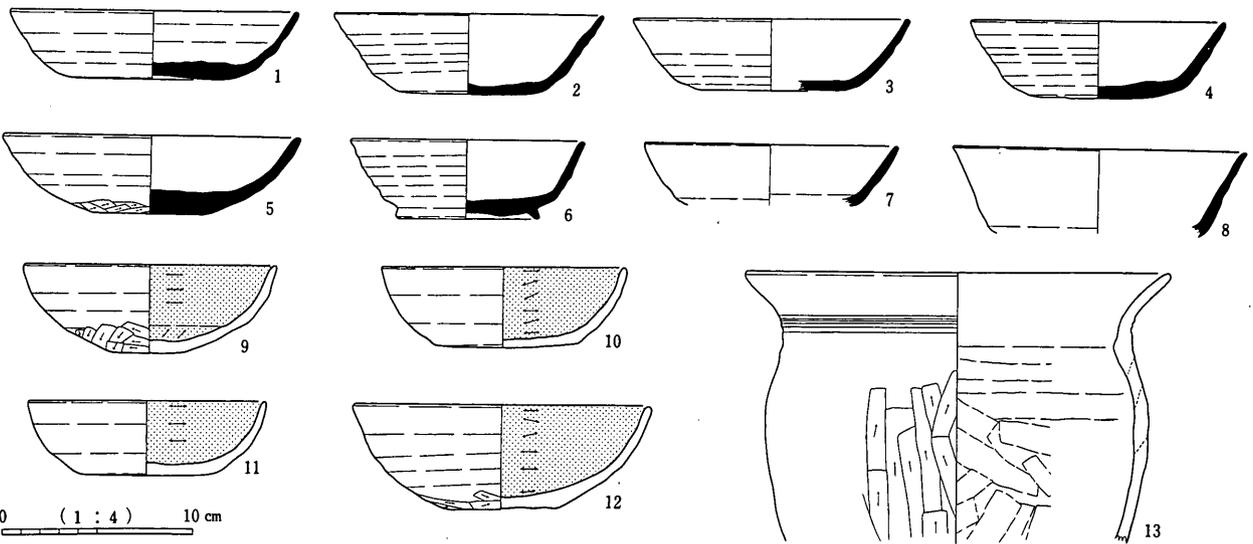
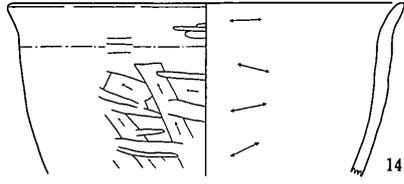
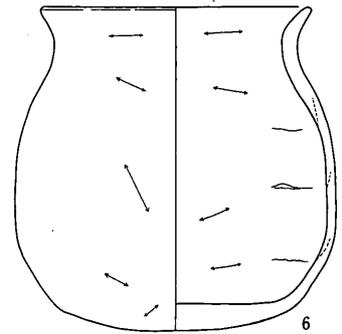
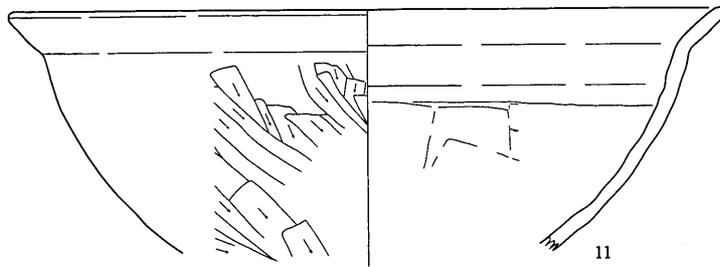
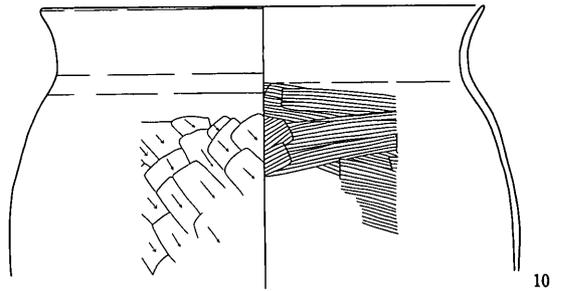
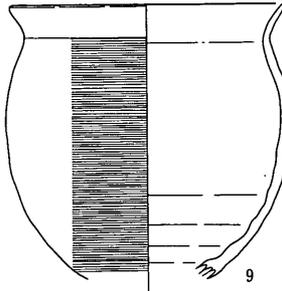
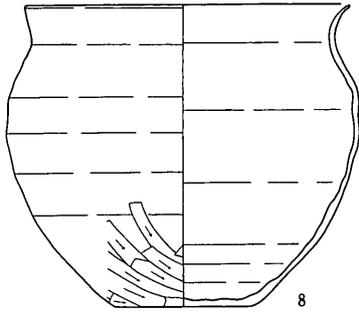
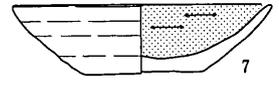
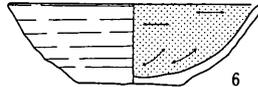
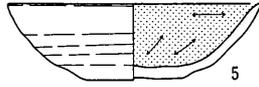
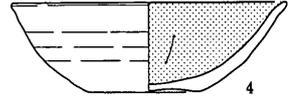
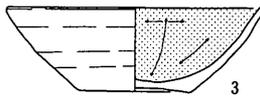
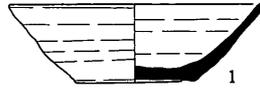


図165 土器 (19) —古墳時代後期～平安時代—

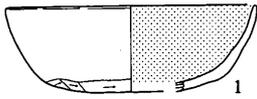
59住



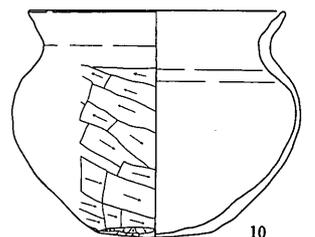
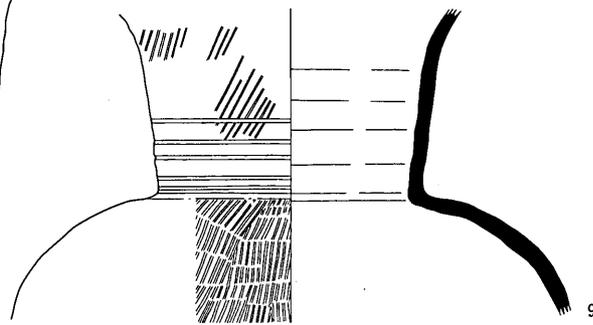
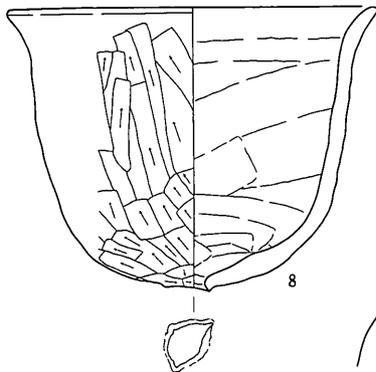
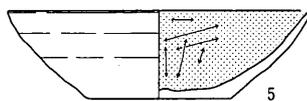
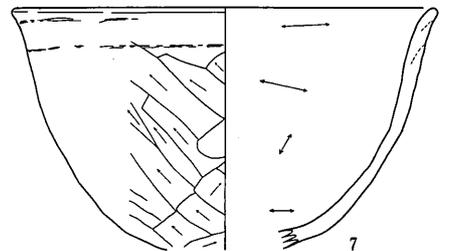
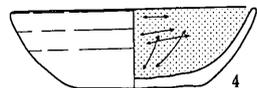
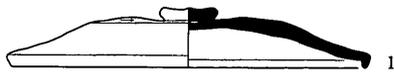
60住



61住



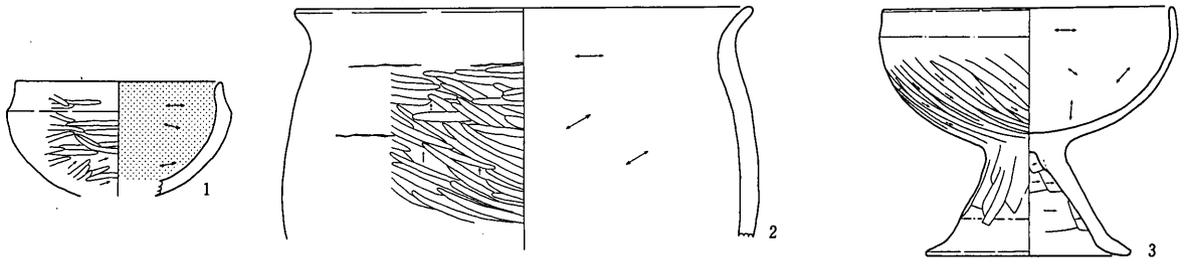
62住



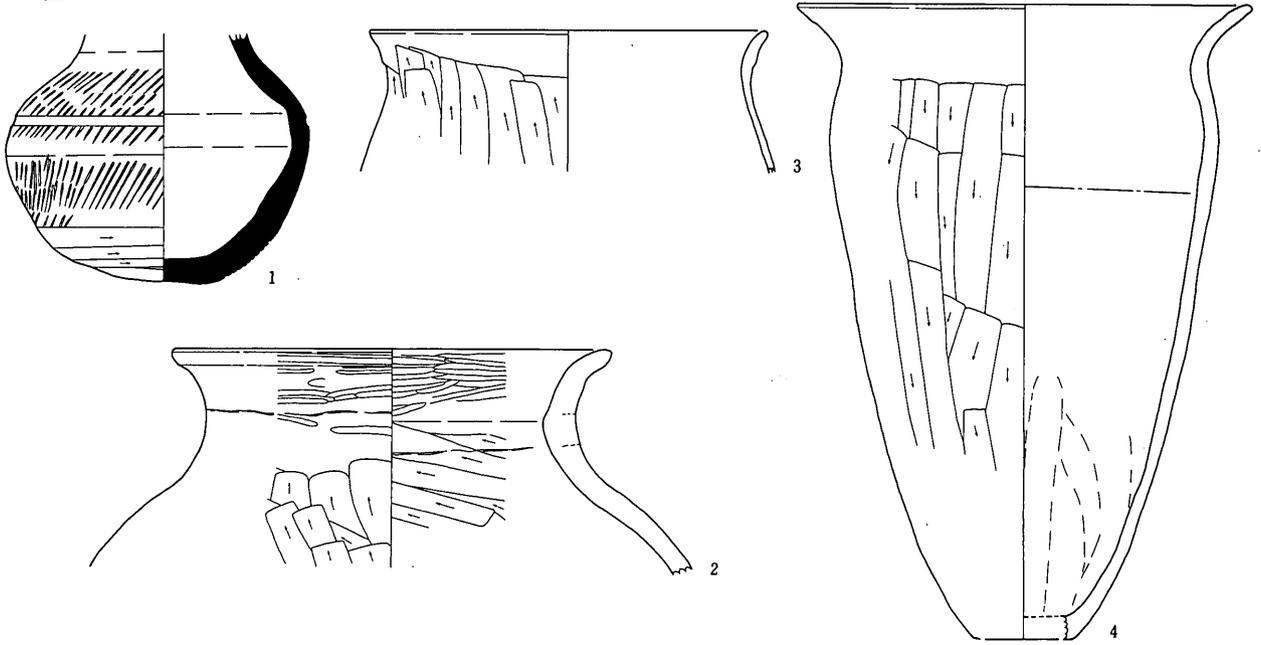
0 (1:4) 10cm

图166 土器 (20) —古墳時代後期~平安時代—

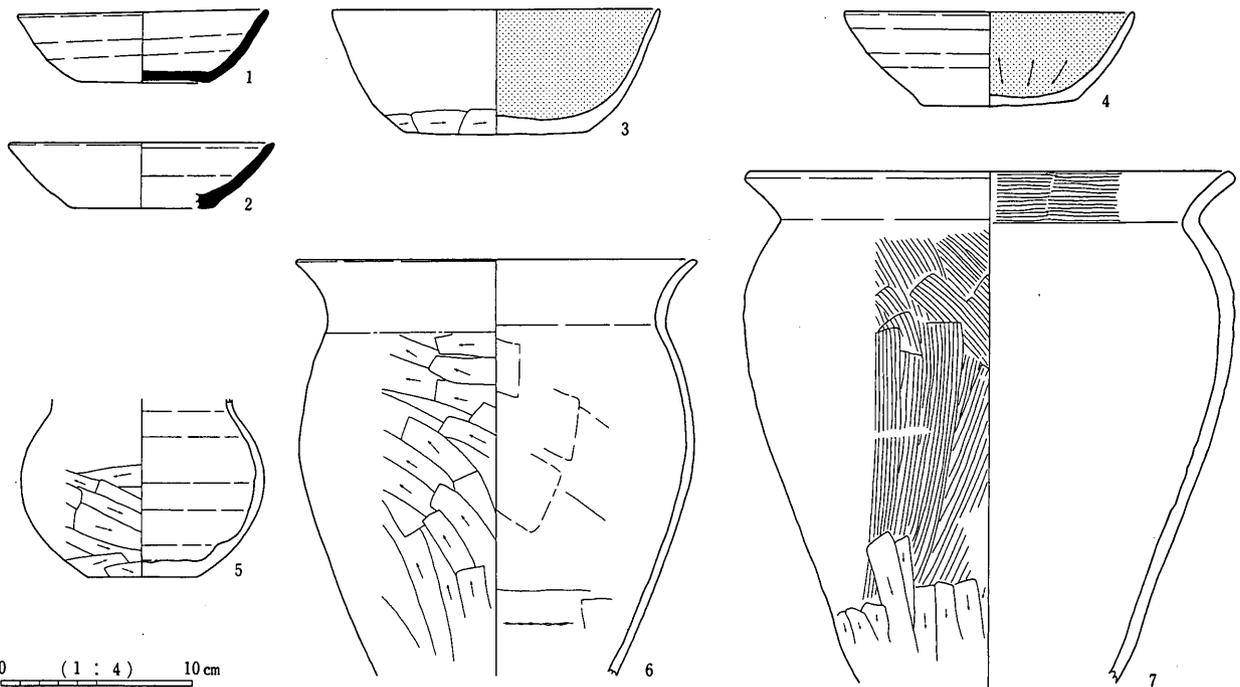
63住



65住



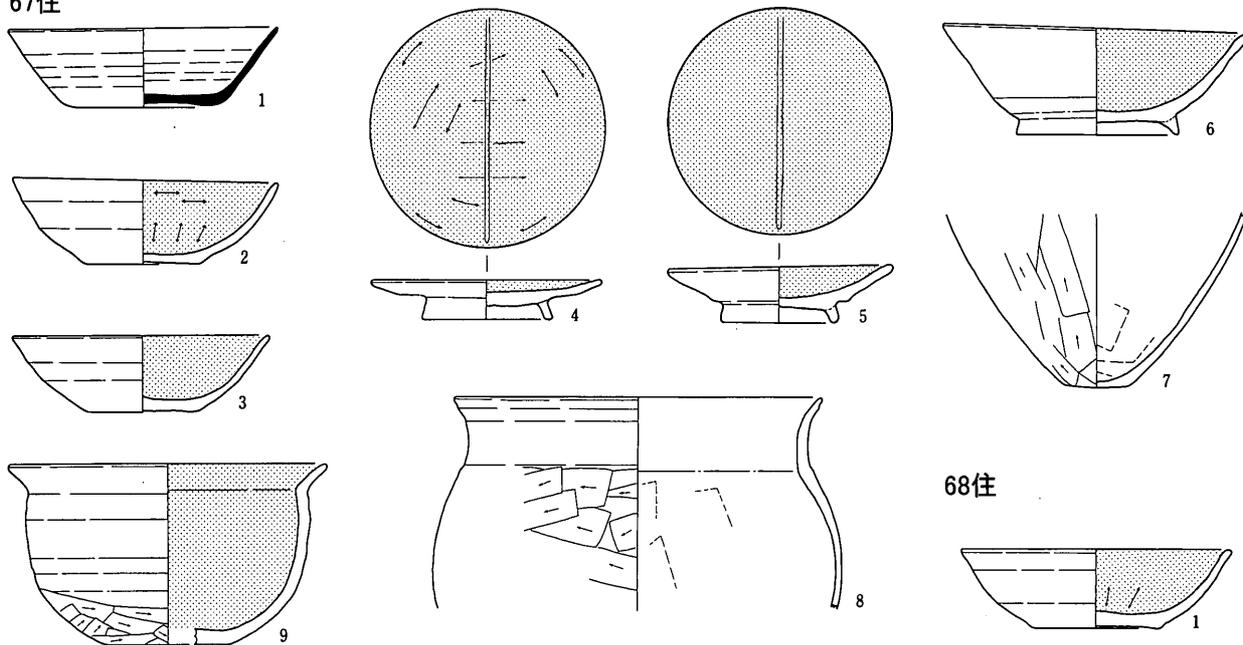
66住



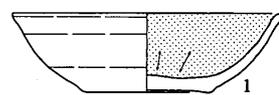
0 (1 : 4) 10 cm

図167 土器 (21) —古墳時代後期～平安時代—

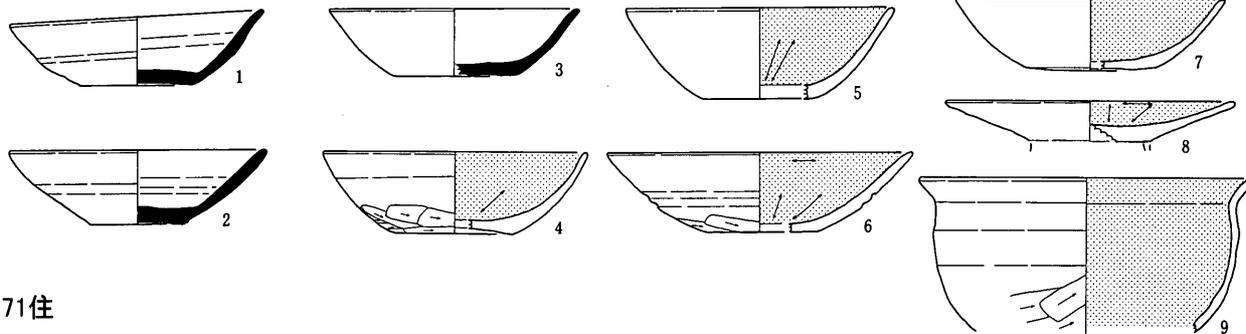
67住



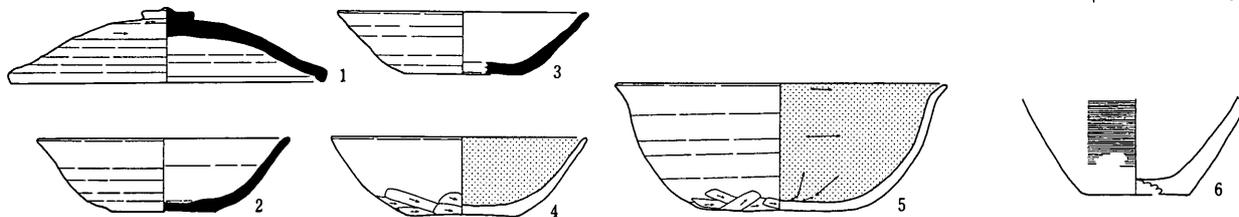
68住



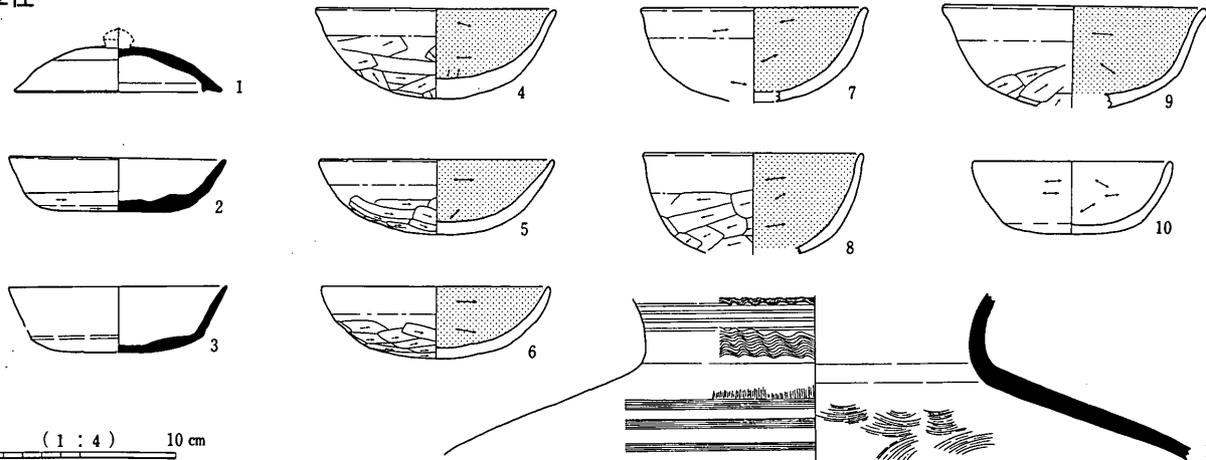
69住



71住



72住



0 (1 : 4) 10 cm

图168 土器 (22) —古墳時代後期~平安時代—

72住

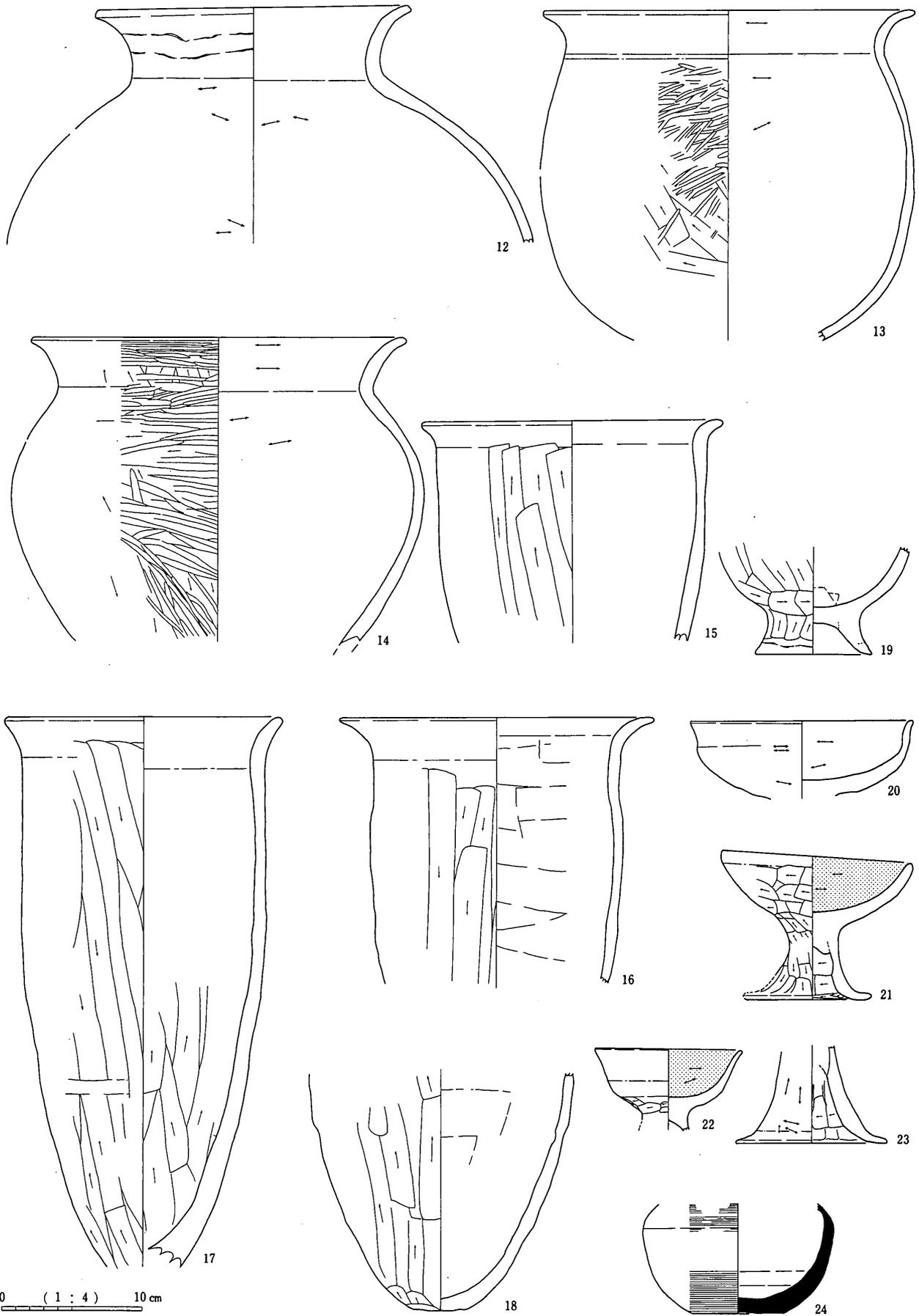
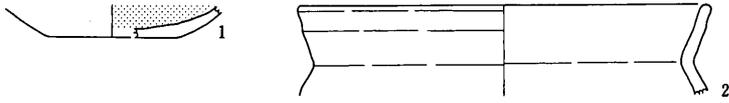
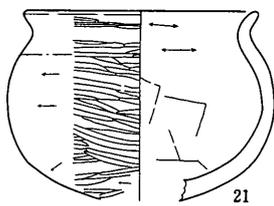
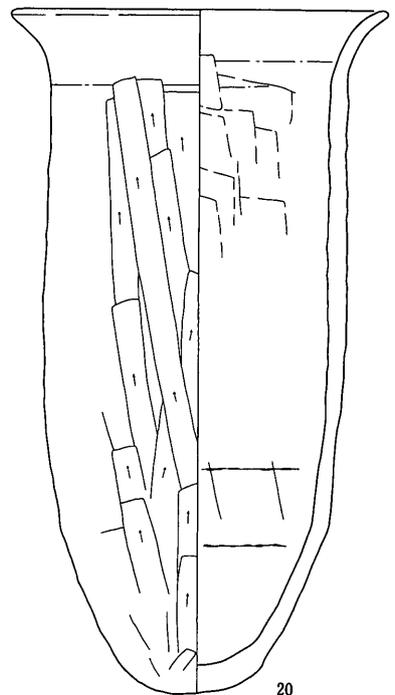
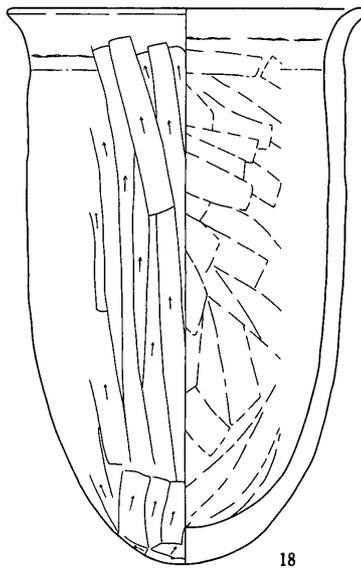
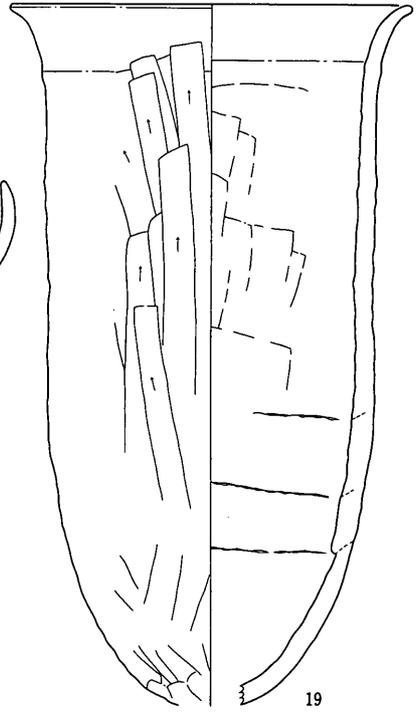
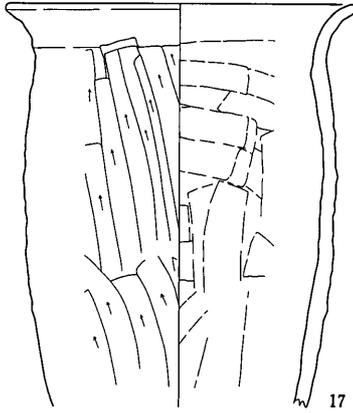
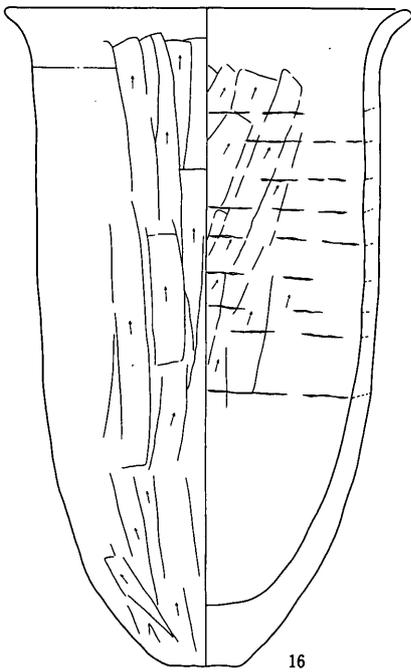
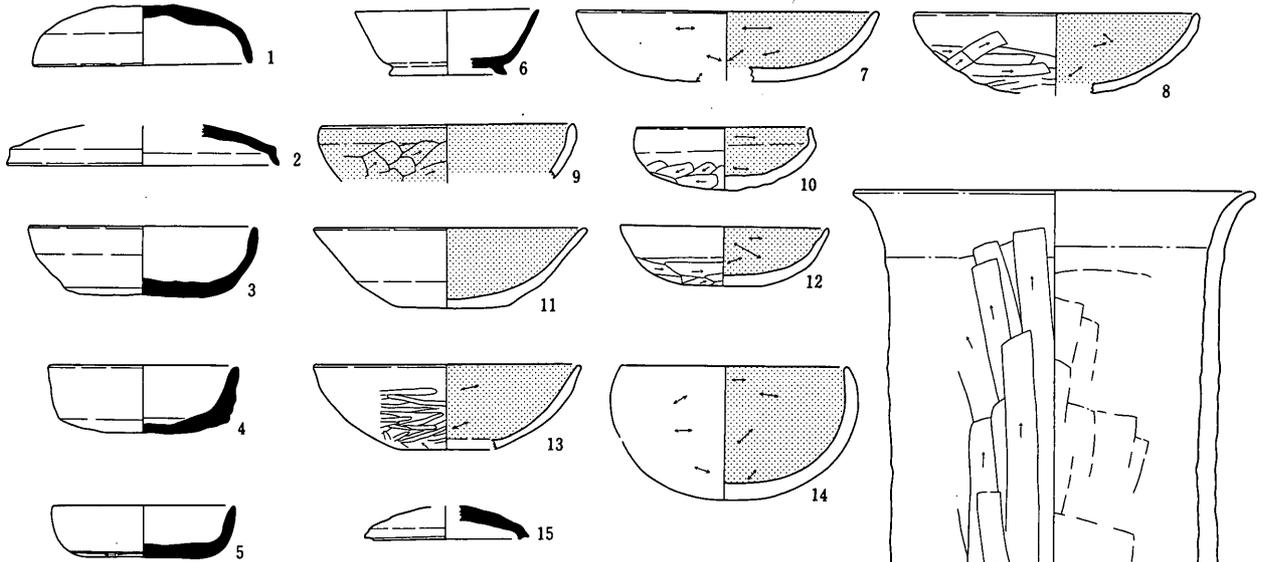


図169 土器 (23) —古墳時代後期～平安時代—

73住



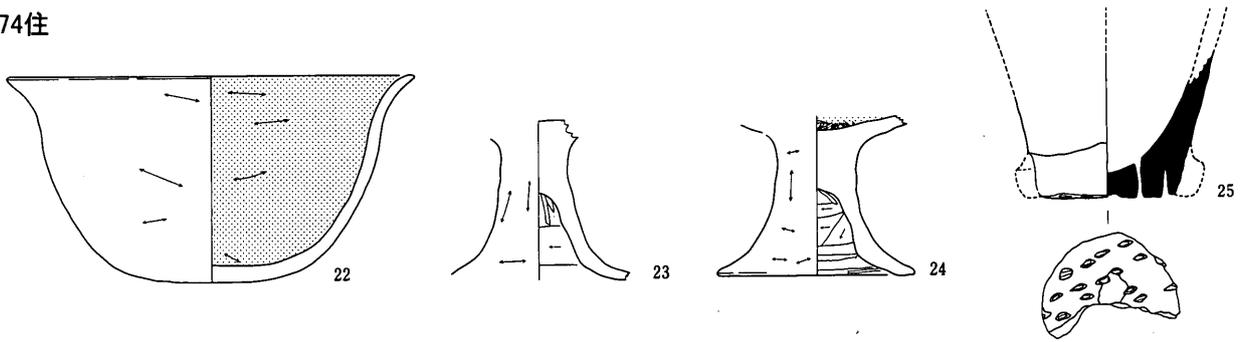
74住



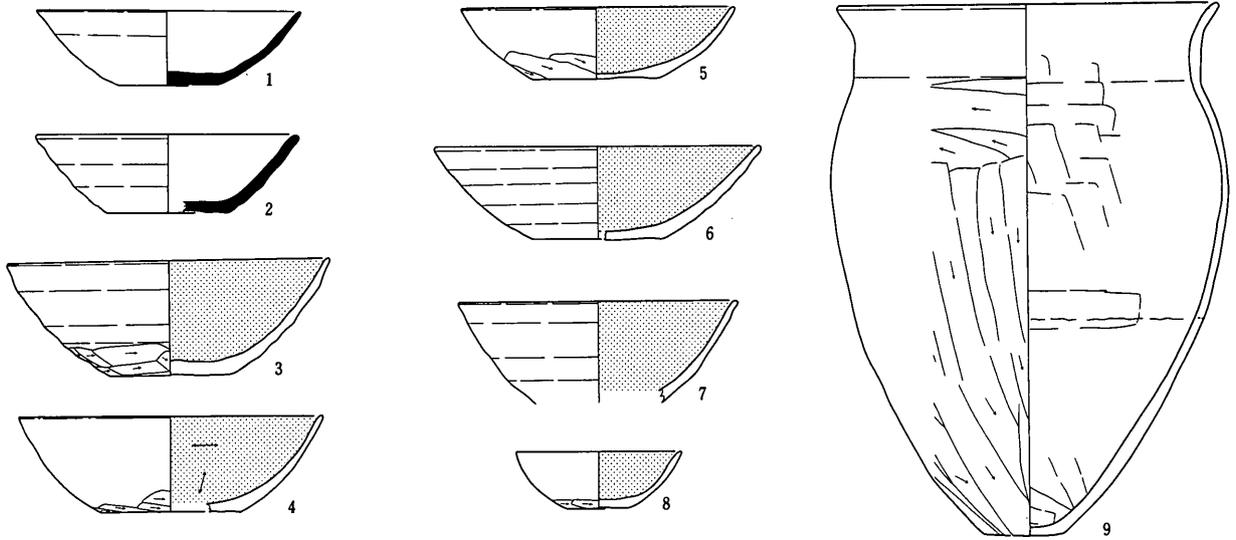
0 (1 : 4) 10 cm

图170 土器 (24) —古墳時代後期~平安時代—

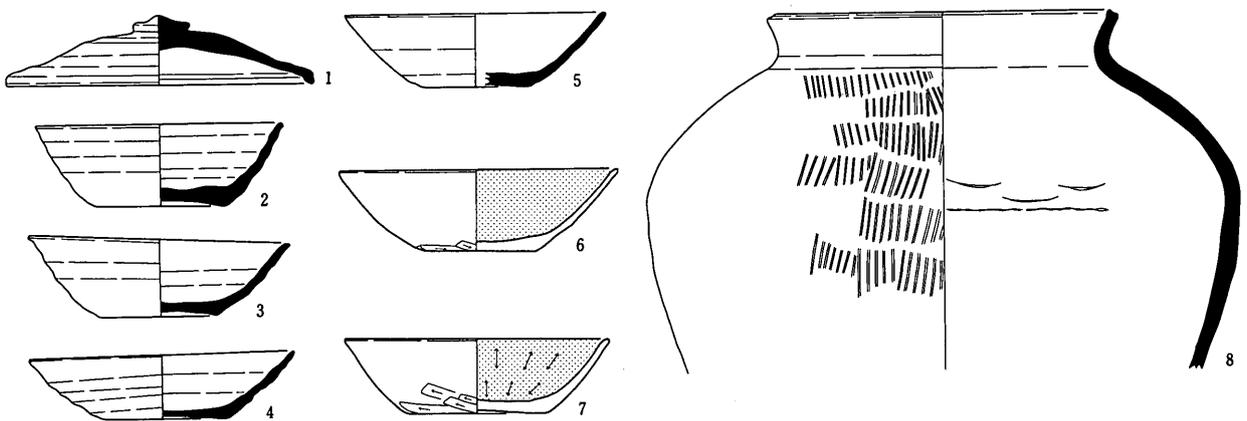
74住



76住



77住



78住

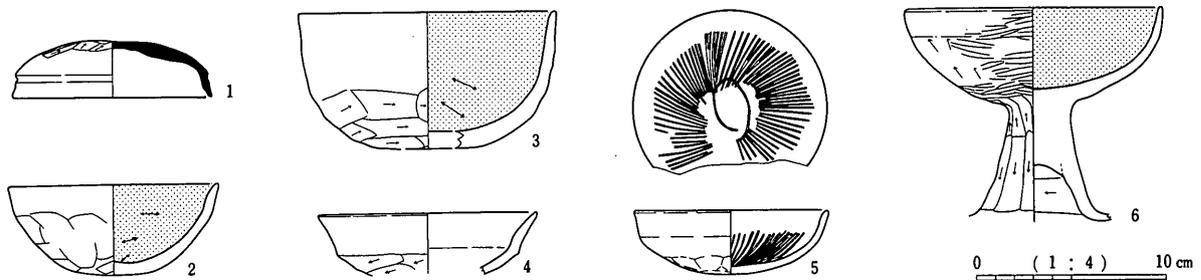
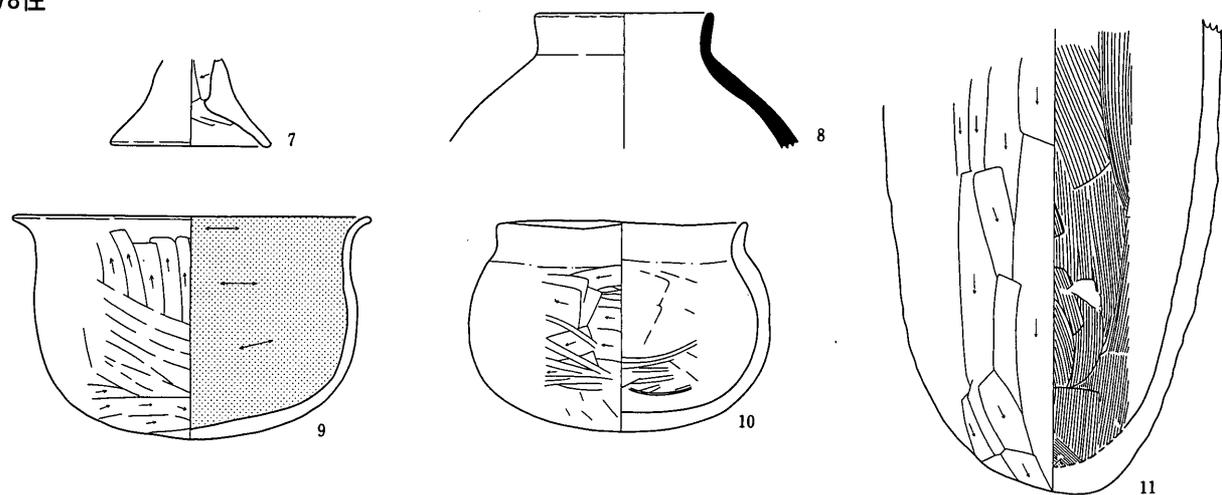


図171 土器 (25) —古墳時代後期～平安時代—

78住



79住

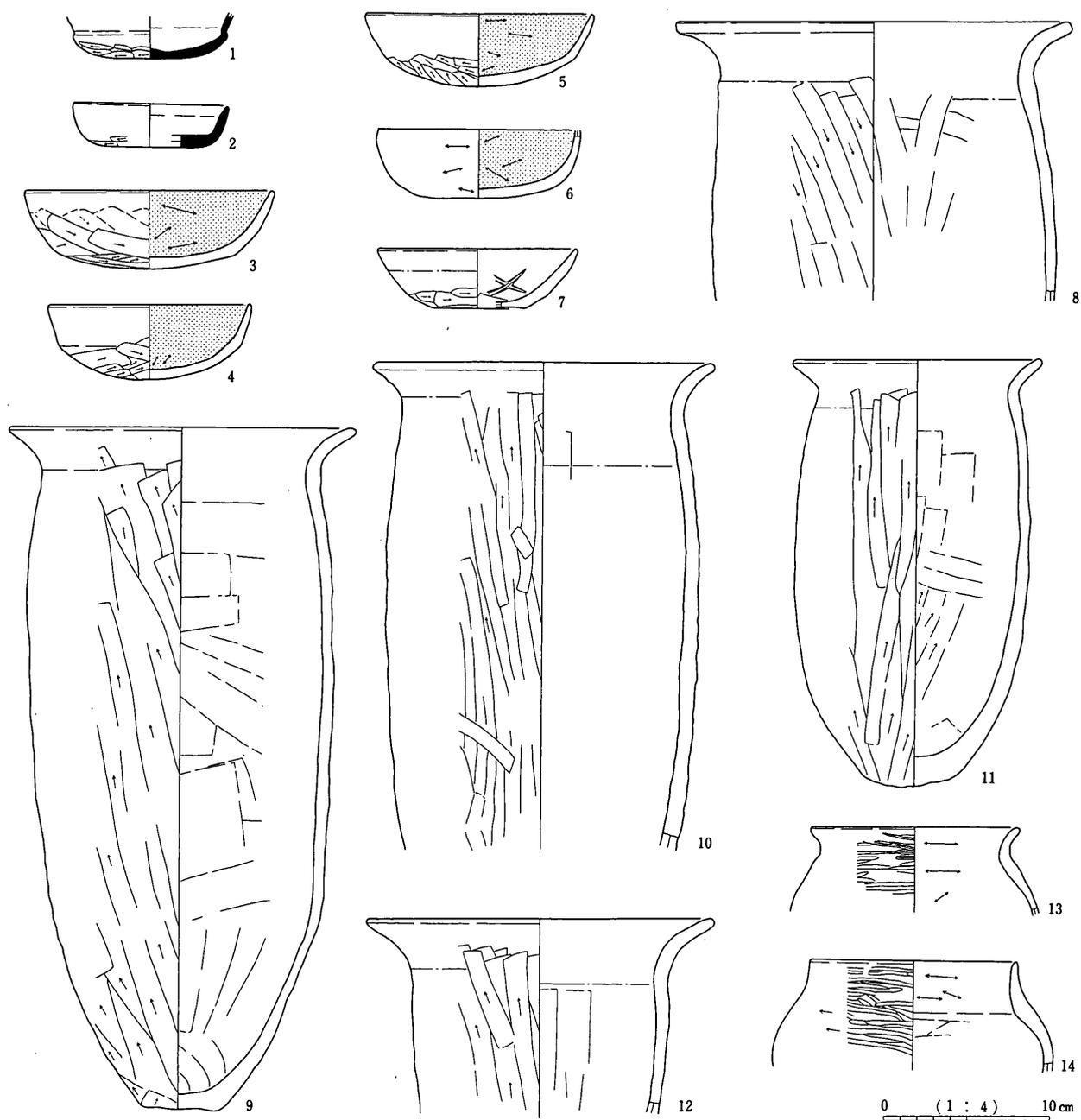
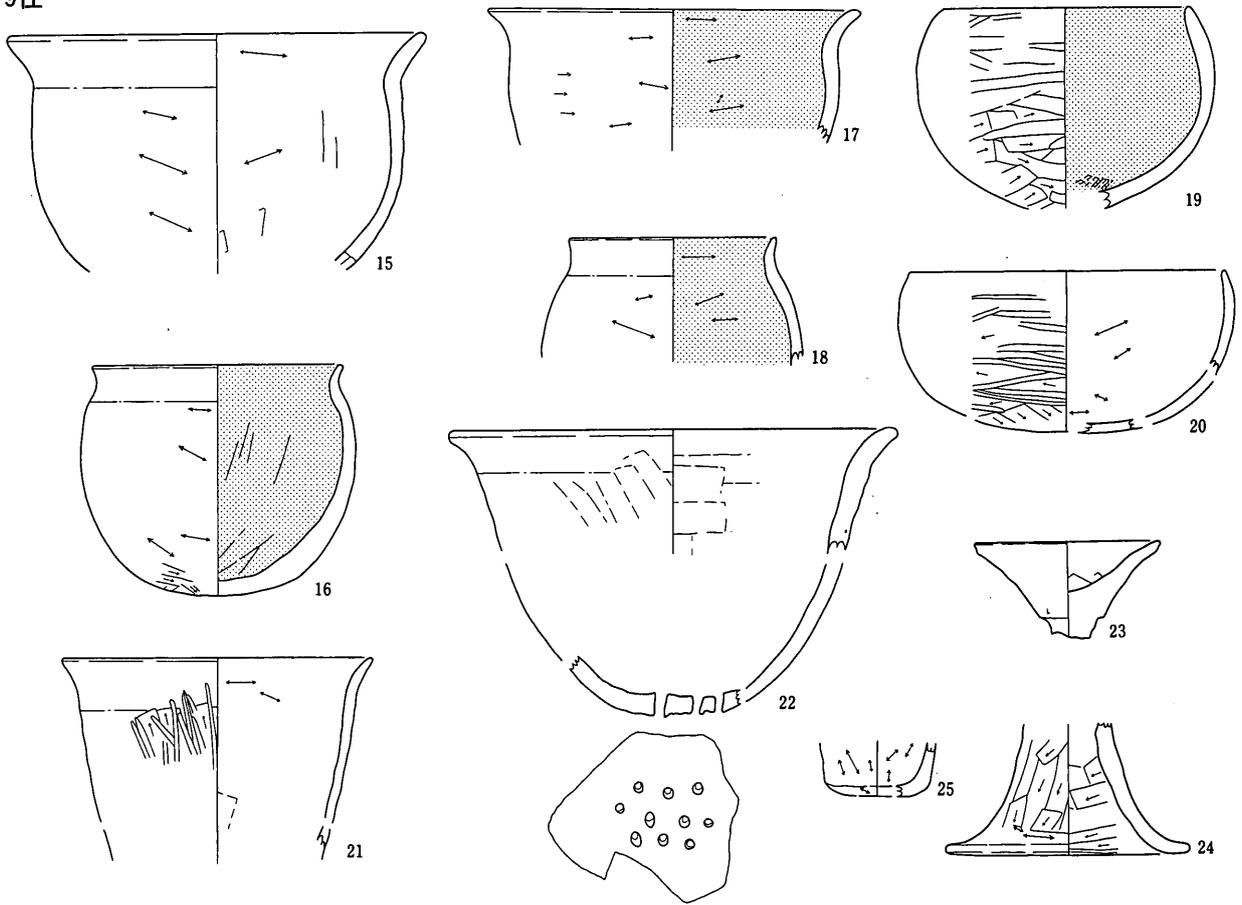


図172 土器 (26) —古墳時代後期～平安時代—

79住



80住

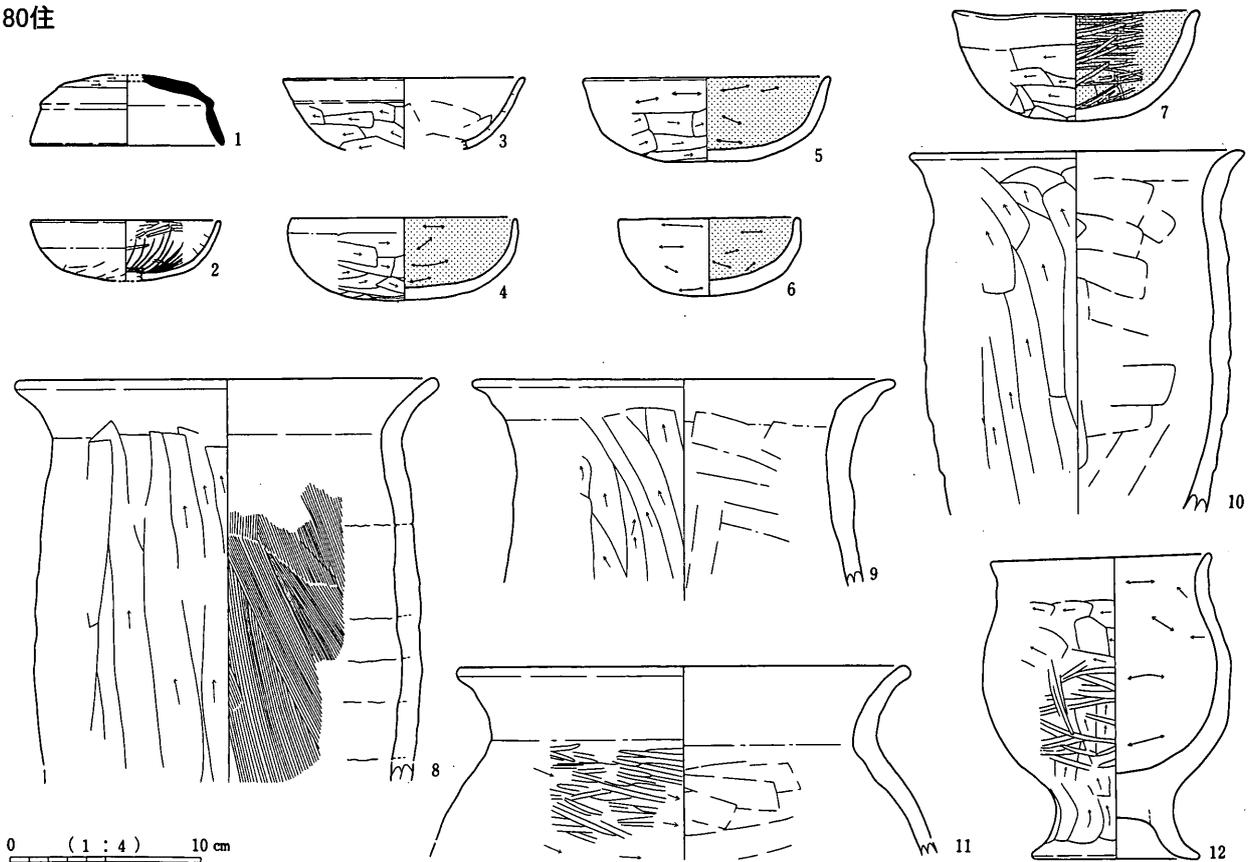
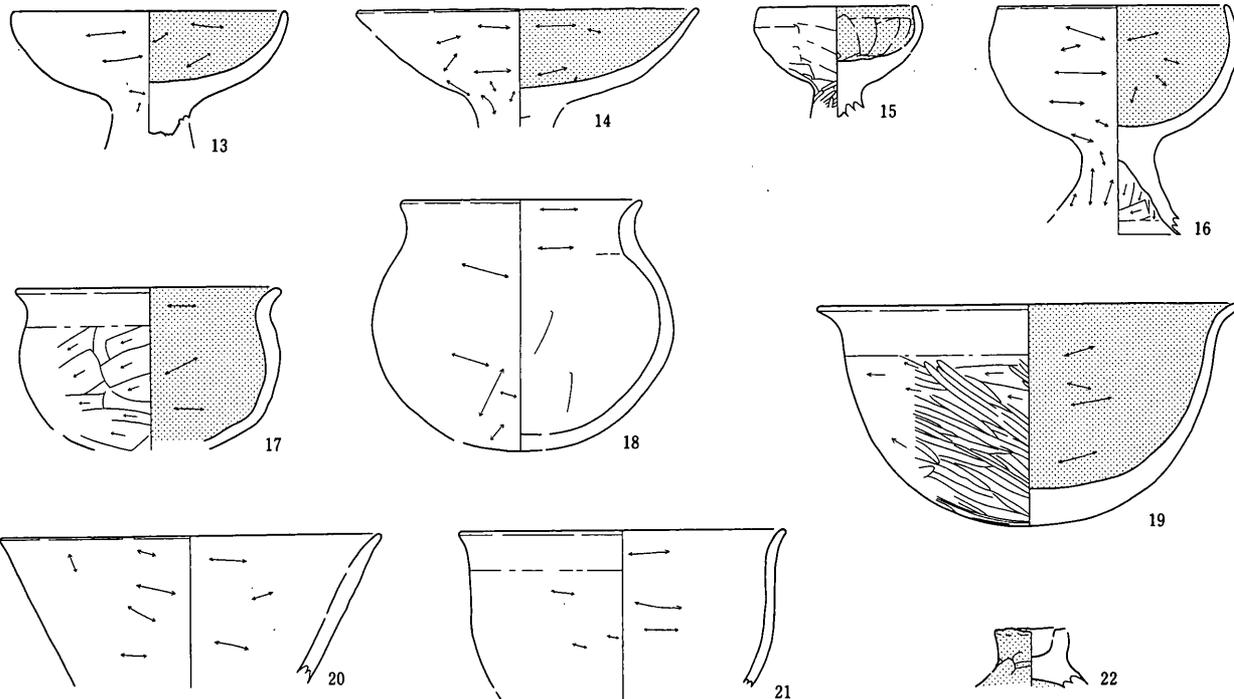


图173 土器 (27) —古墳時代後期~平安時代—

80住



82住



83住

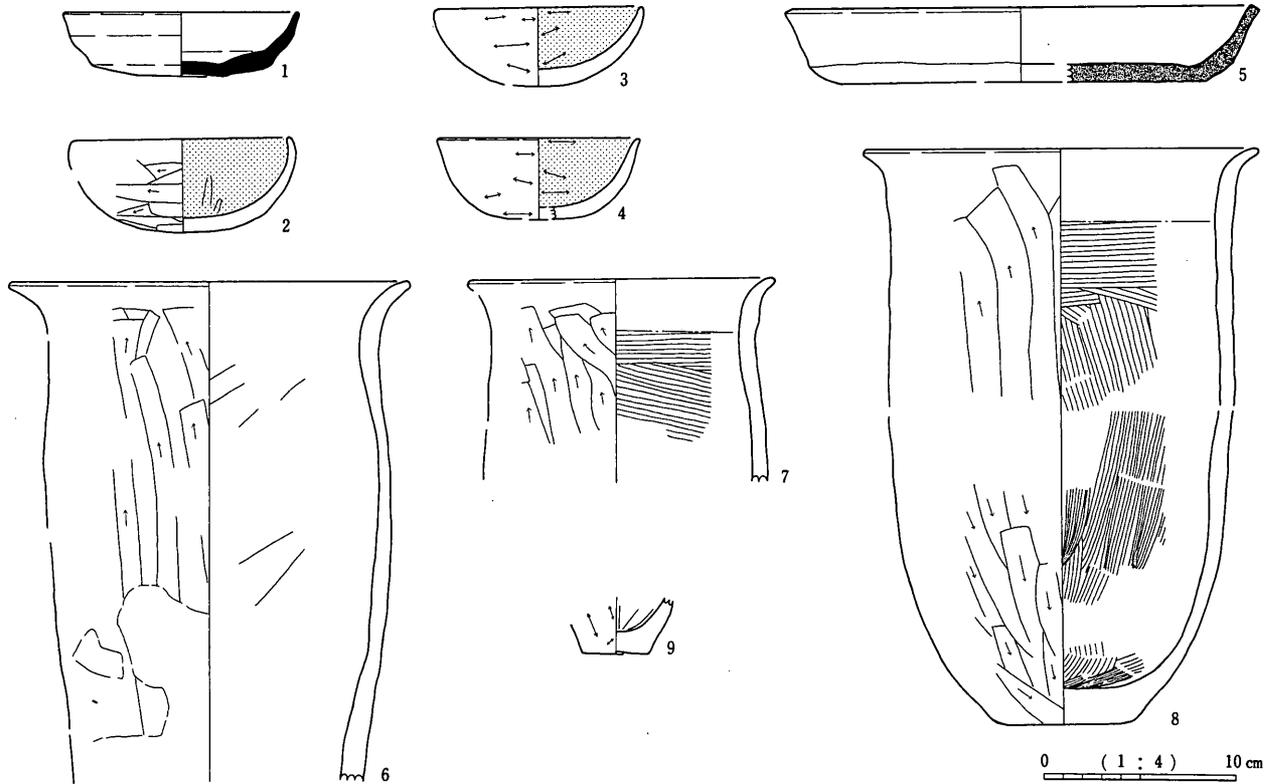
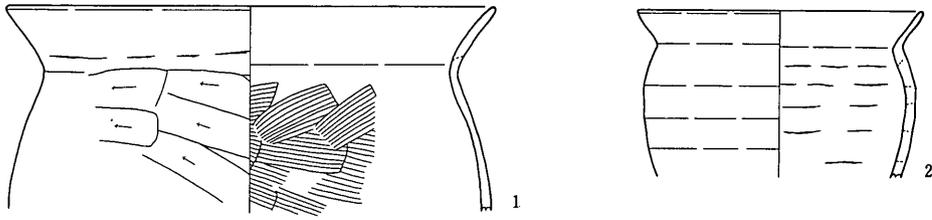
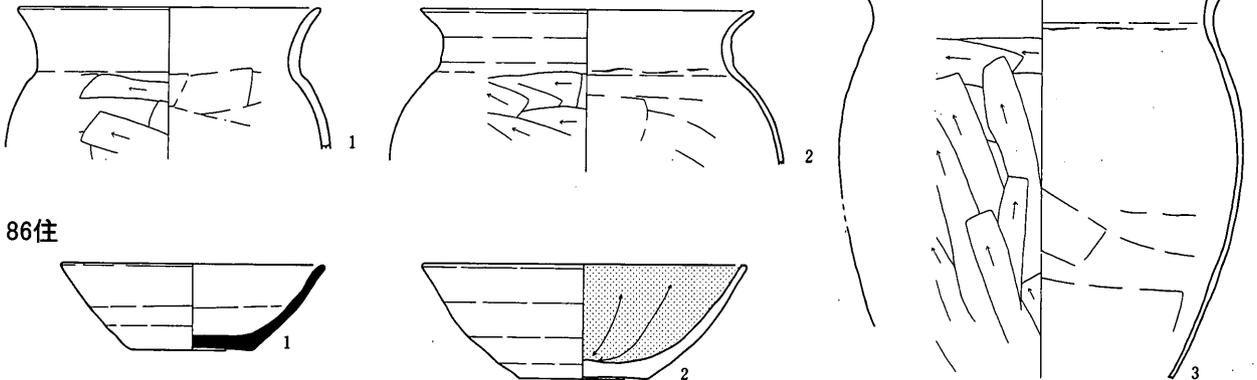


图174 土器 (28) —古墳時代後期~平安時代—

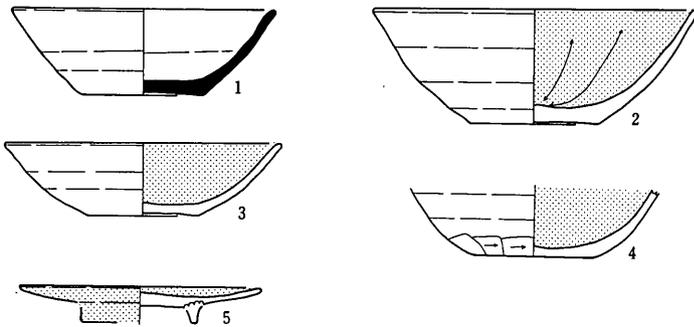
84住



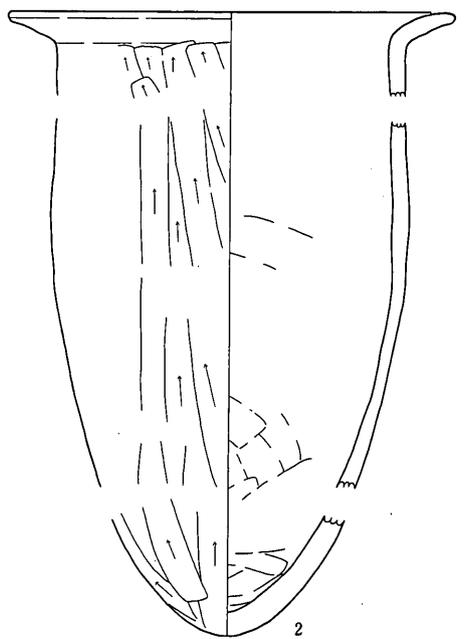
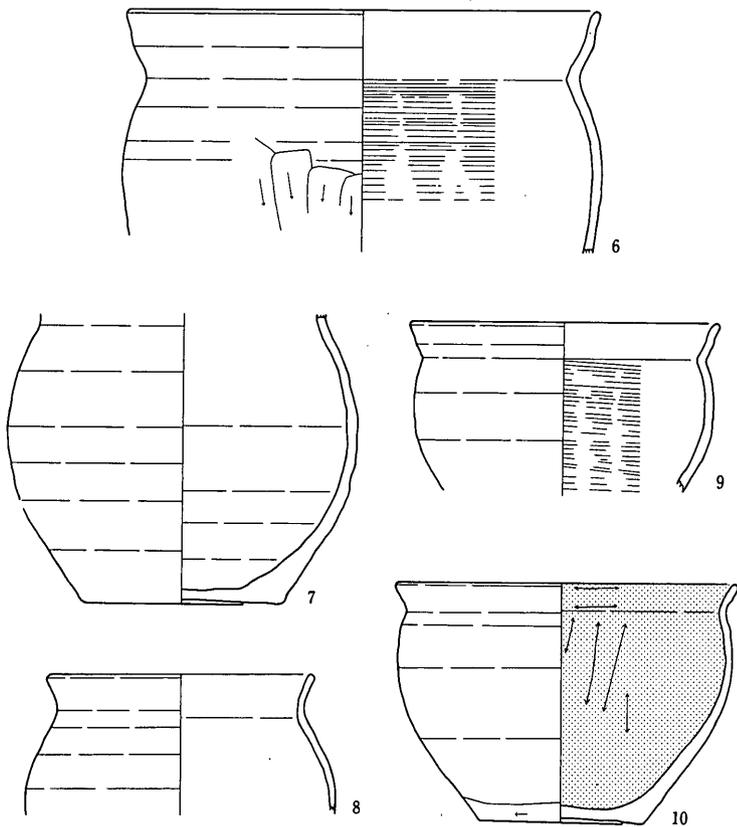
85住



86住



87住



0 (1:4) 10 cm

図175 土器 (29) —古墳時代後期～平安時代—

89住

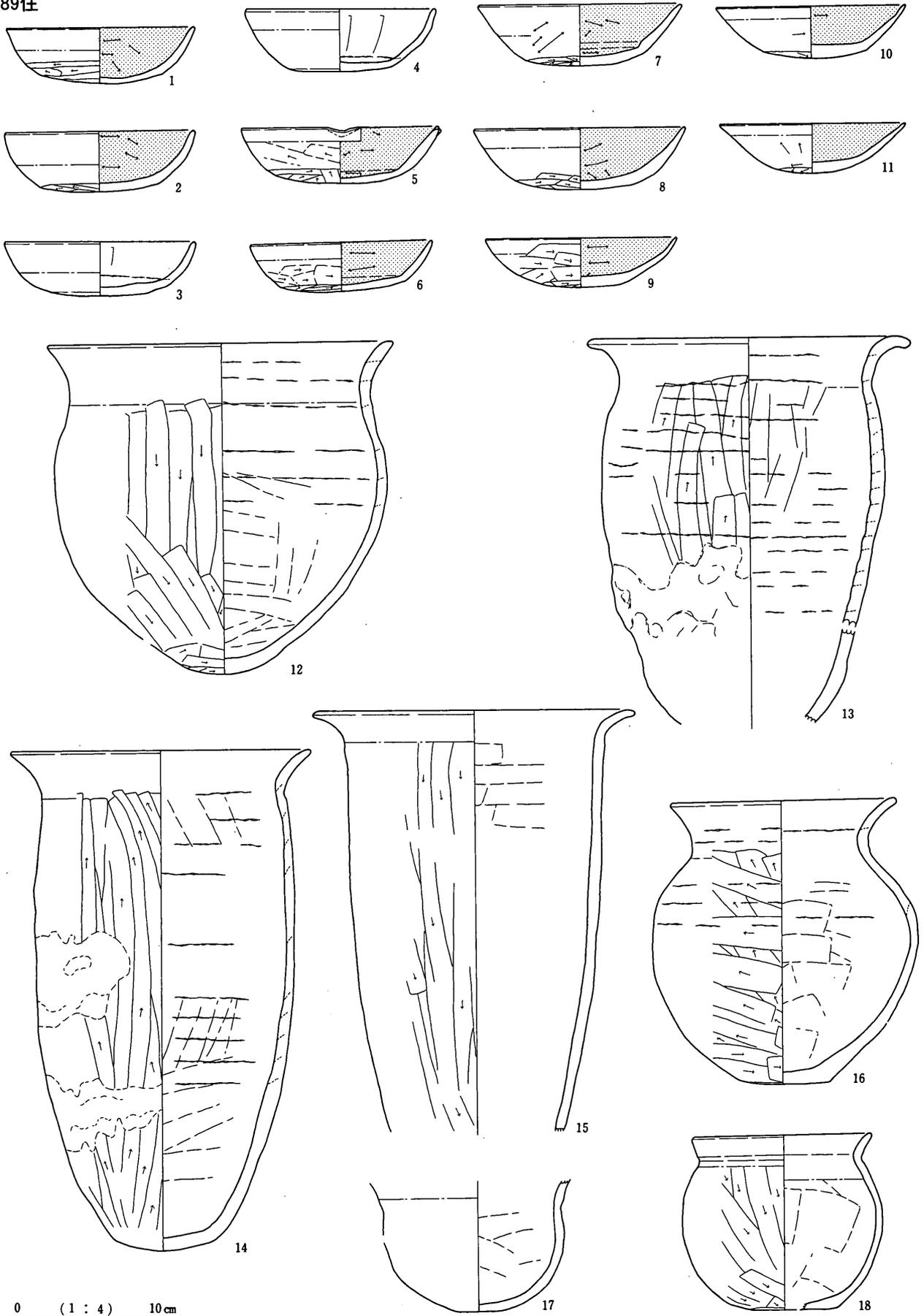
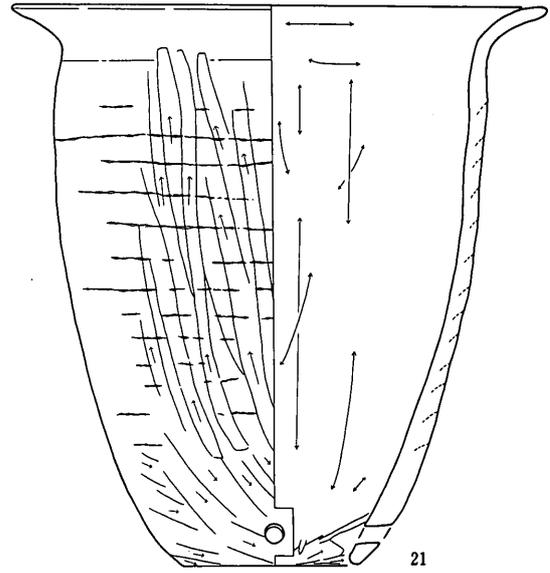
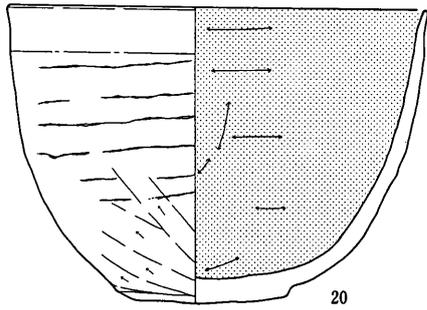
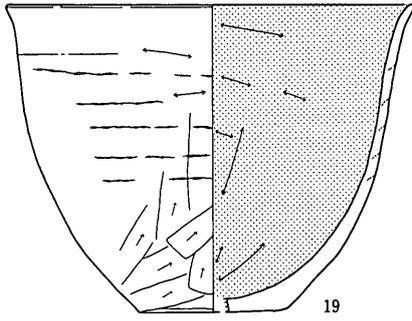
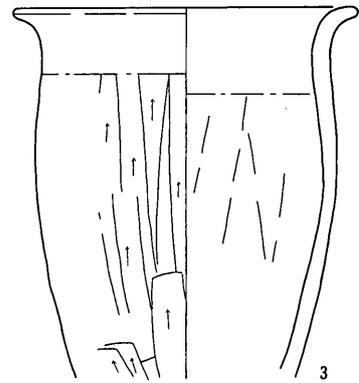
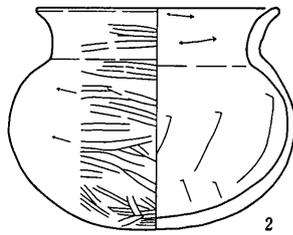
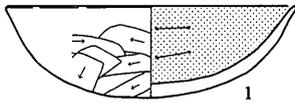


図176 土器 (30) —古墳時代後期～平安時代—

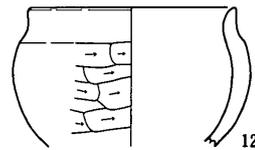
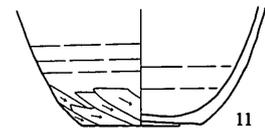
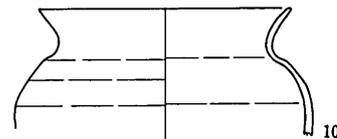
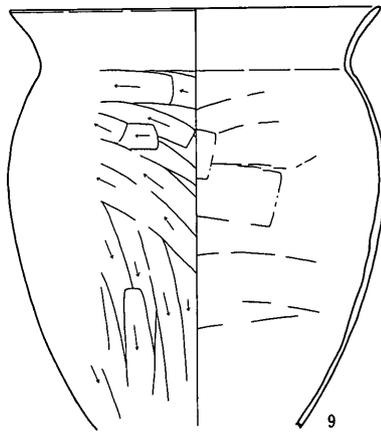
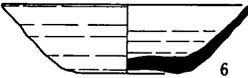
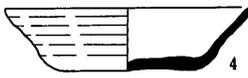
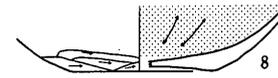
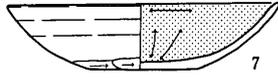
89住



90住



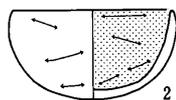
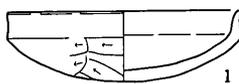
91住



0 (1 : 4) 10 cm

図177 土器 (31) —古墳時代後期～平安時代—

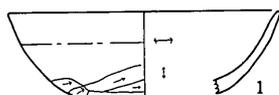
1坑



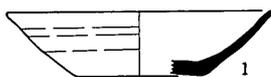
30坑



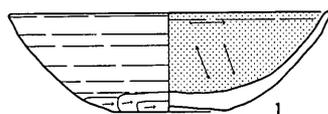
680坑



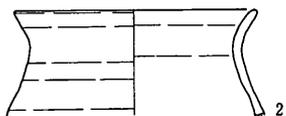
695坑



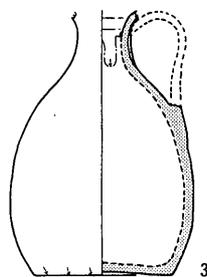
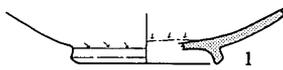
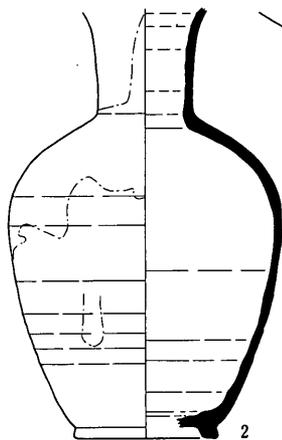
883坑



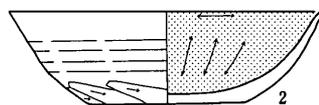
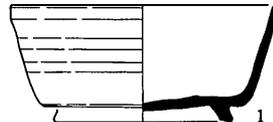
2溝



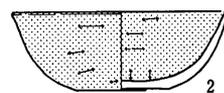
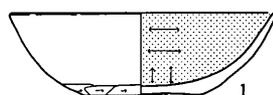
5坑



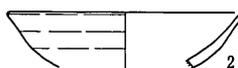
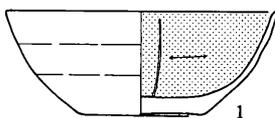
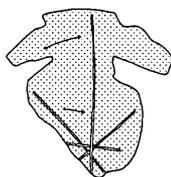
7坑



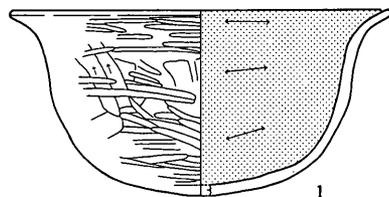
37坑



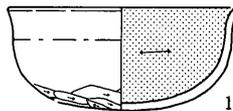
420坑



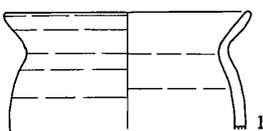
391墓



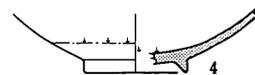
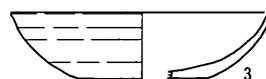
1203坑



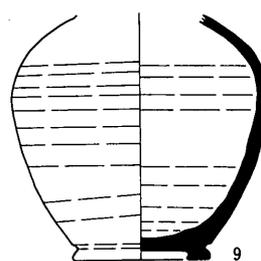
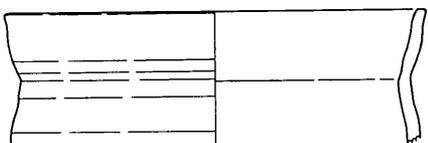
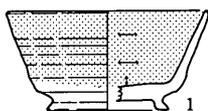
1溝



3溝



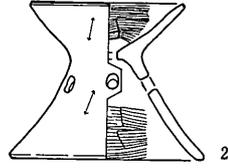
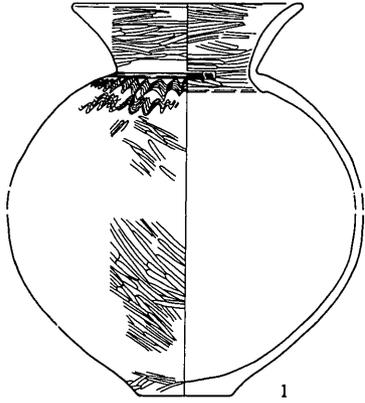
遺構外



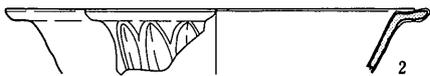
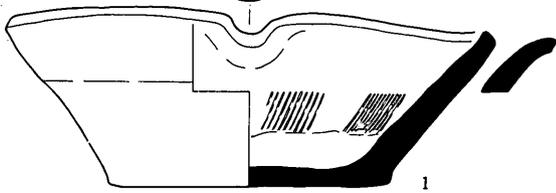
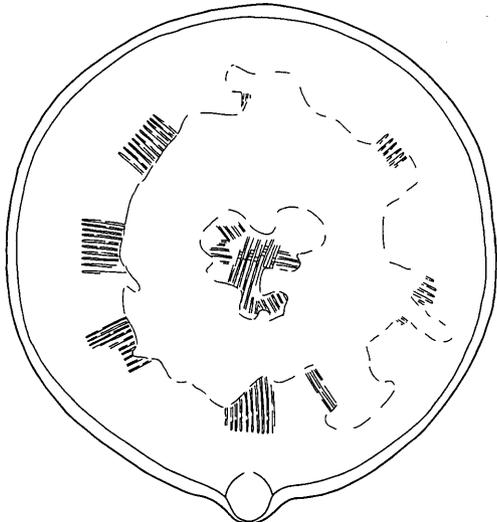
0 (1:4) 10 cm

図178 土器 (32) —古墳時代後期～平安時代—

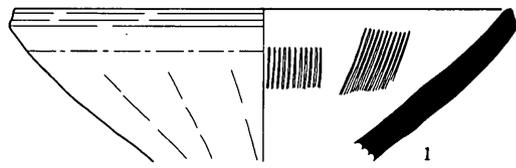
遺構外



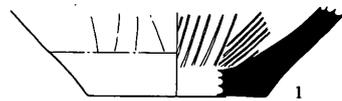
3墓



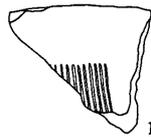
35坑



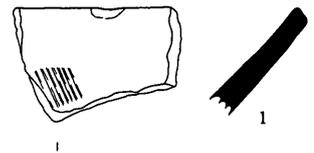
236坑



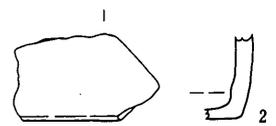
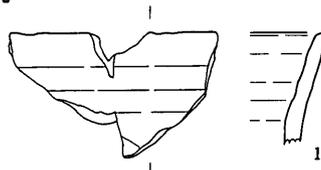
40坑



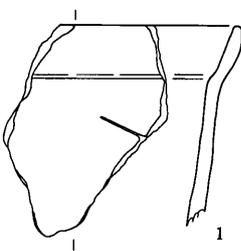
44坑



10坑



48坑



0 (1 : 4) 10 cm

図179 土器 (33) —古墳時代前期・中世—

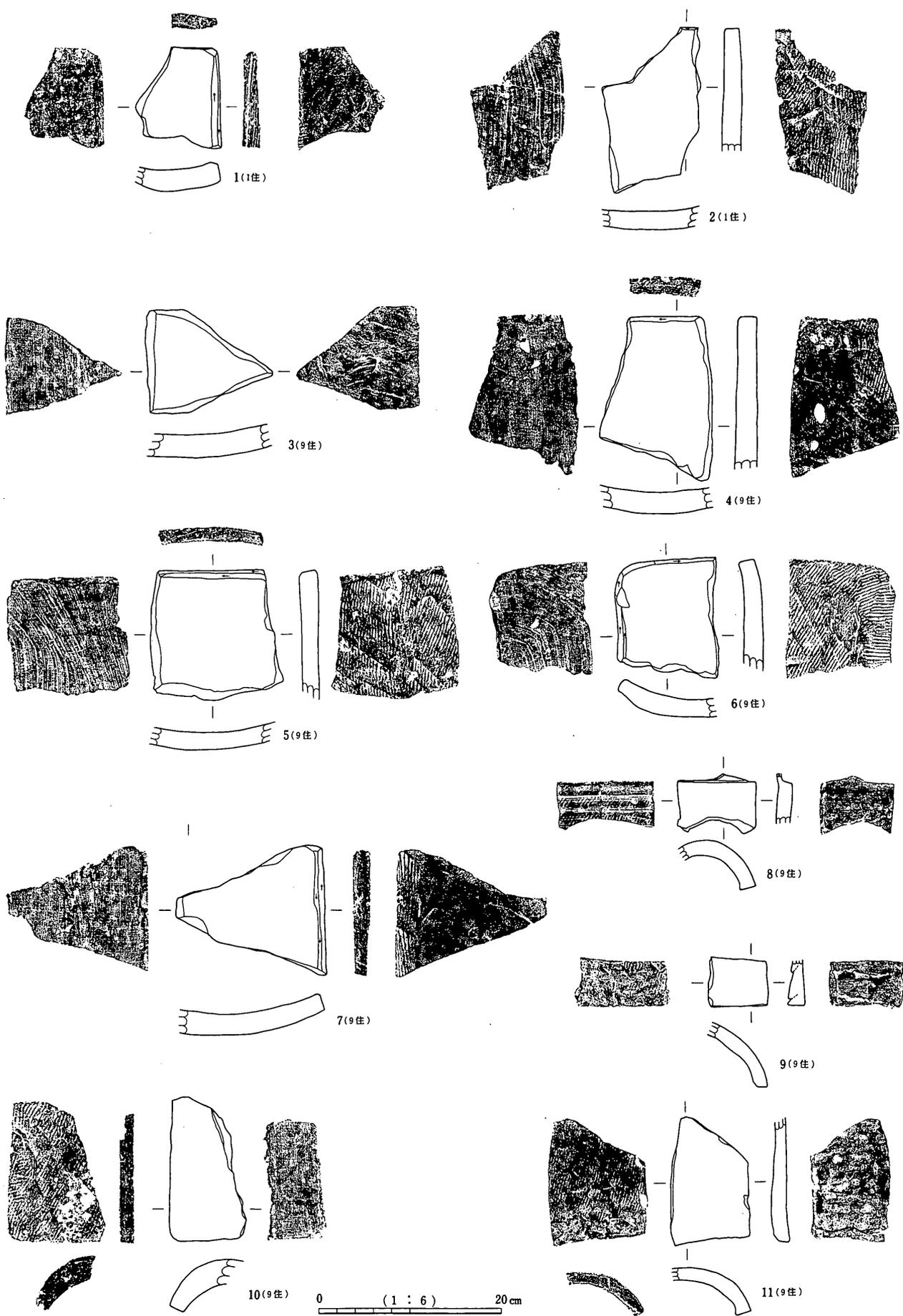


図180 瓦

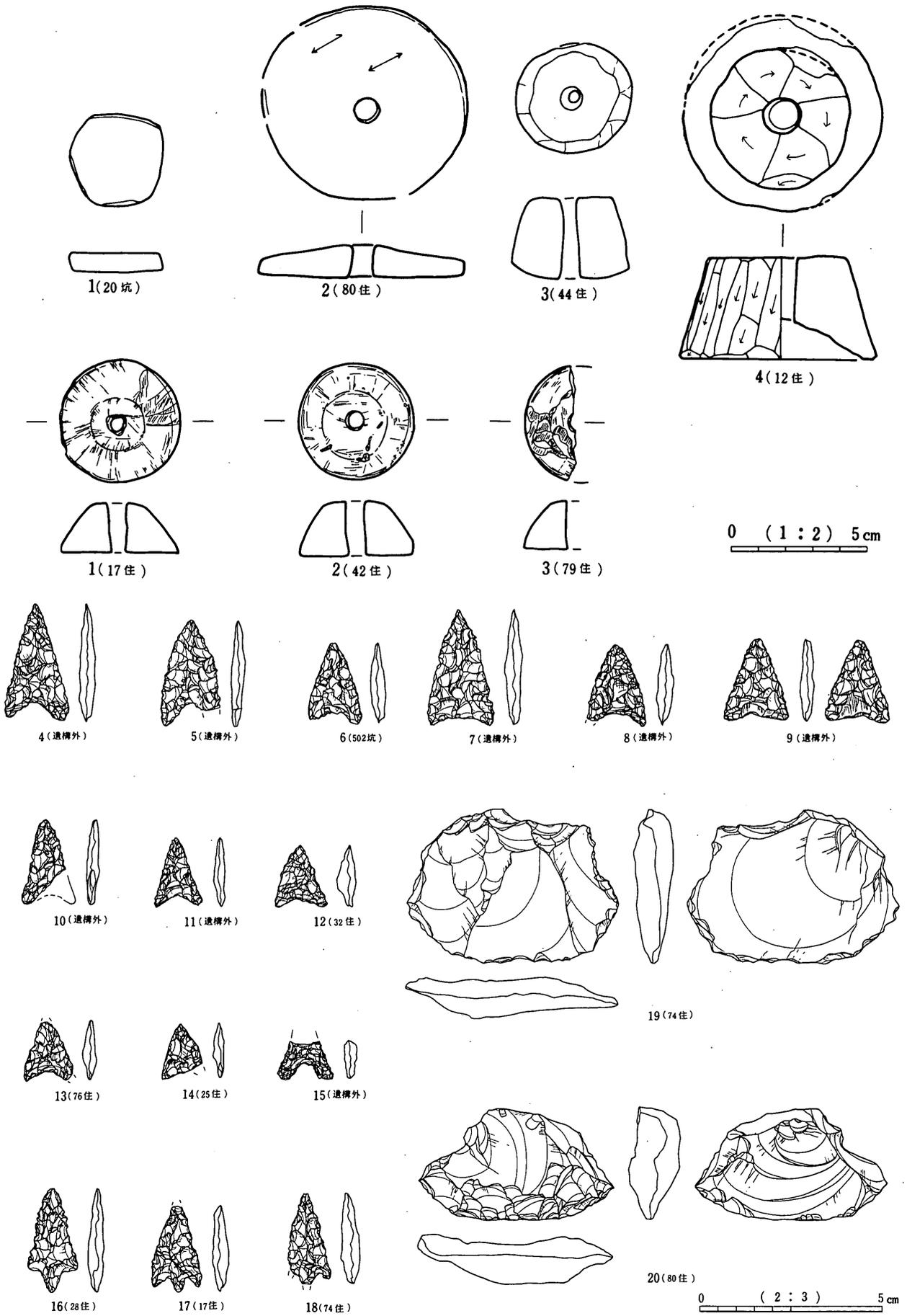


図181 土製品、石器・石製品 (1)

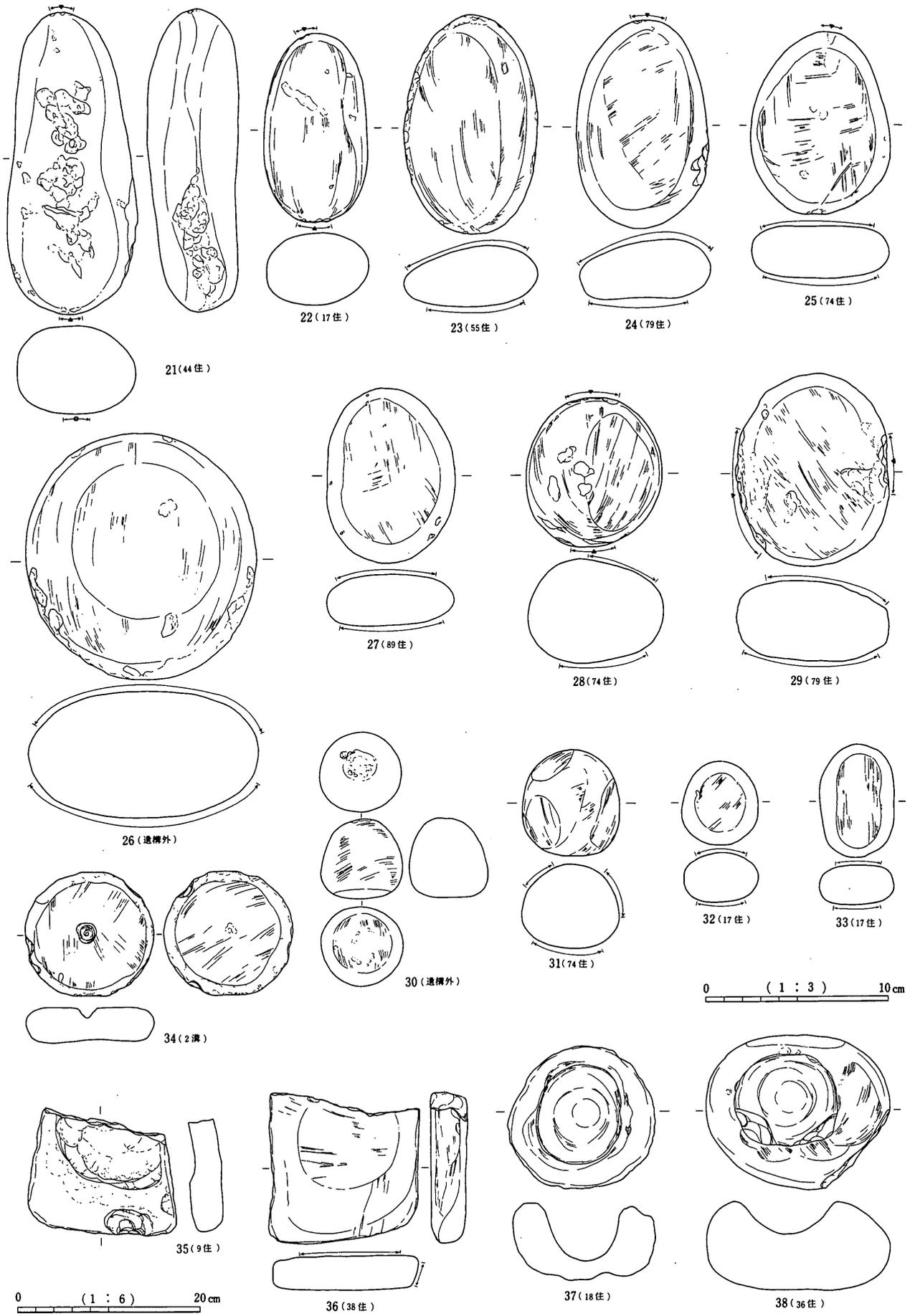


图182 石器·石製品 (2)

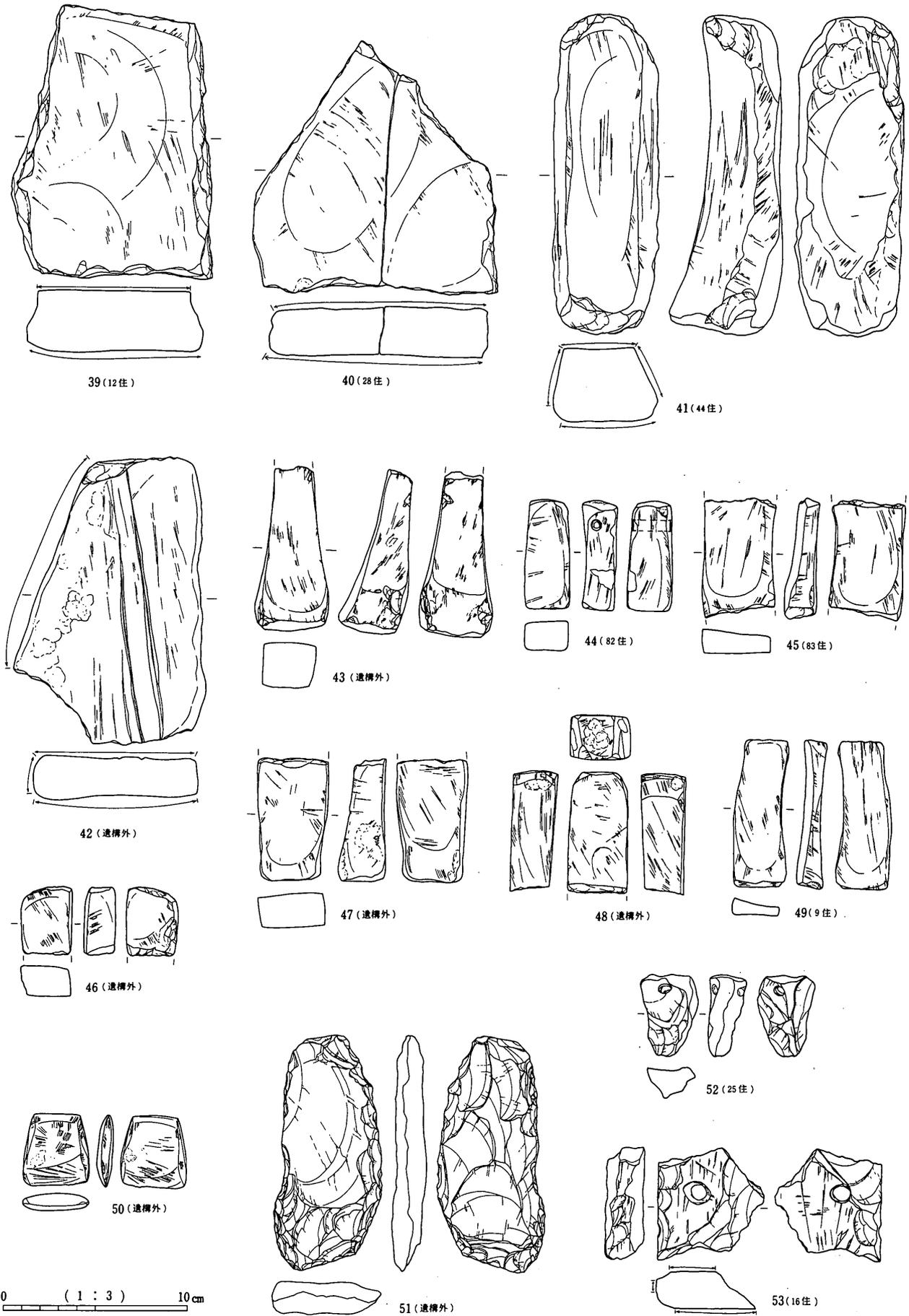


図183 石器・石製品 (3)

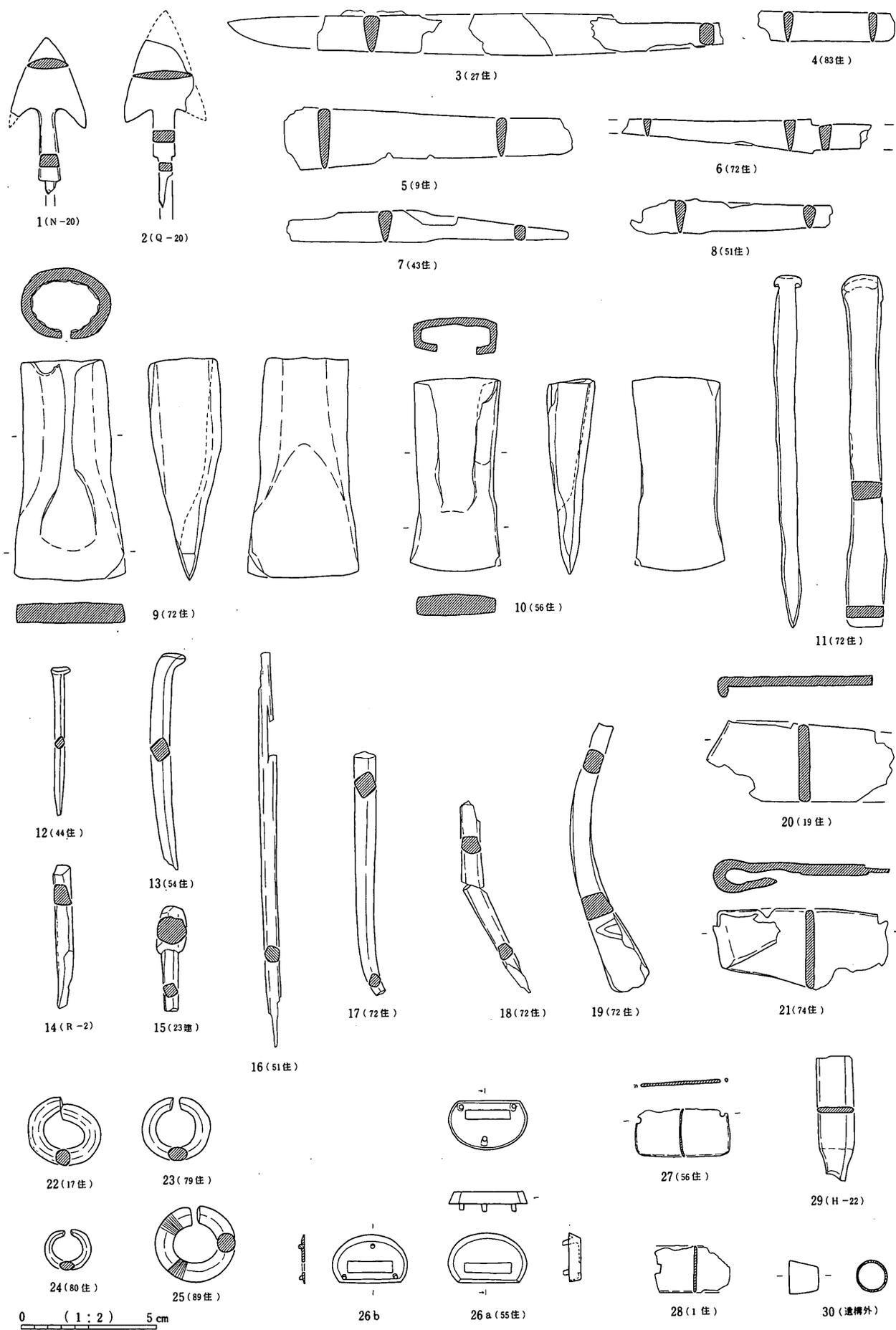


图184 金属器·金属製品

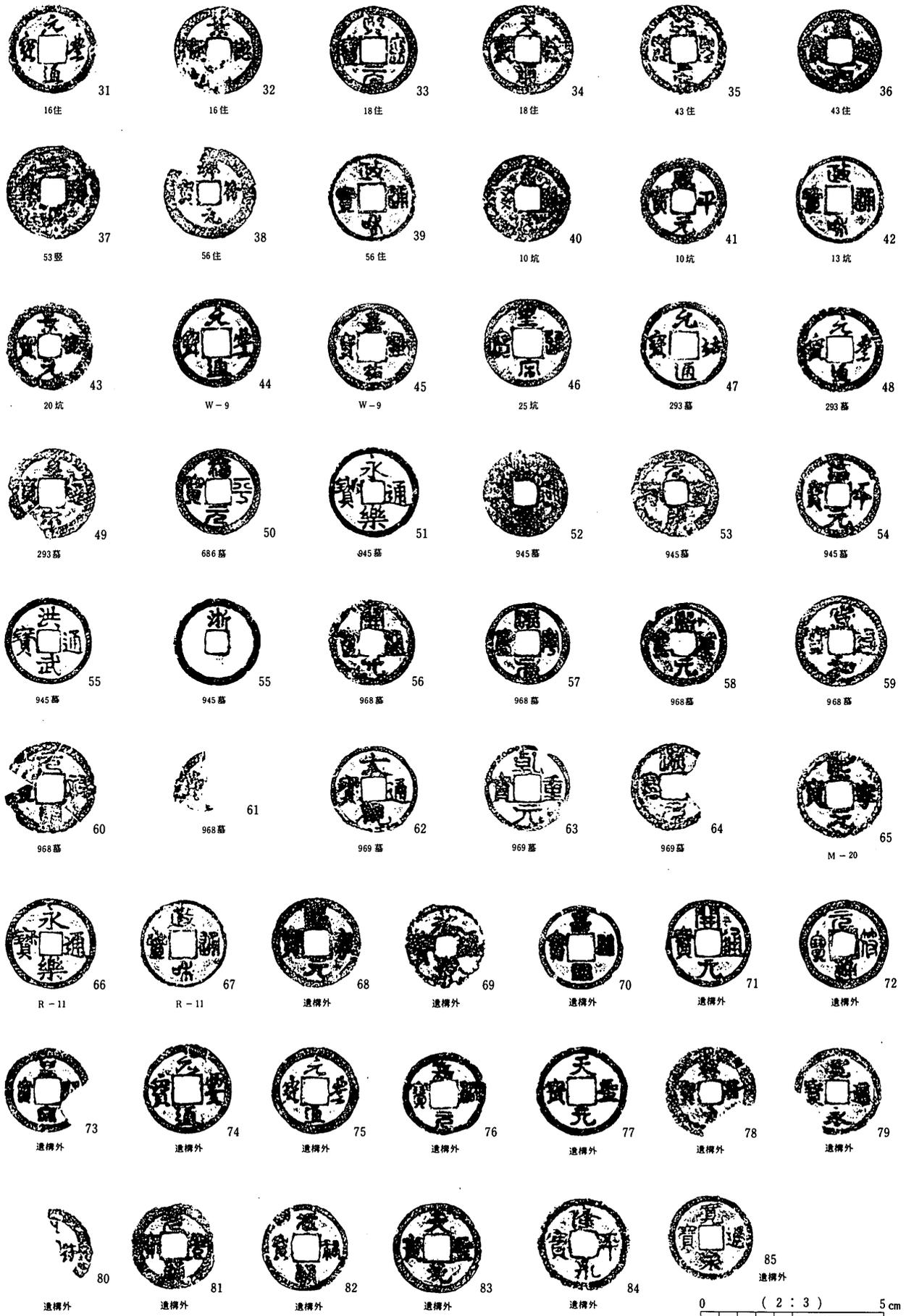


図185 錢貨

## 第3節 小結

### 1 古墳時代後期後半から平安時代の土器

ここでは、須恵器・土師器坏類、土師器甕類の動向を中心に、宮平遺跡における該期の土器群の変遷について簡潔に述べてみたい。時期設定は、上田市国分寺周辺遺跡群における編年（柳澤1998）を基軸に、古墳時代については富沢一明による佐久平の編年（富沢1996）、西山克己による善光寺平・佐久平の編年（花岡・西山1995）、古代については御代田町鋳物師屋遺跡群の編年（堤1989）を規範とし、およその併行関係を示した。

1期：6世紀末から7世紀前葉（西山善光寺後期3～5期・佐久後期4～5期、富沢後期第Ⅲ～Ⅳ期）

この時期に位置付けられる土器群を出土した代表遺構は、17号住居、89号住居である。

土師器坏は内面黒色処理されたものが多い。器形はやや丸みを帯びた底部から体部が外傾して立ち上がるものが主体を占め、内底面周囲に巡る沈線状の段や稜が特徴的である。36号住居では、須恵器坏蓋模倣器形や、6世紀後半に特徴的な体部が底部との境付近から大きく外反する器形のもが少量伴う。

土師器長胴甕は器壁が厚く外面縦方向ヘラケズリ調整が施される。最大径は口縁部にあり、胴部の張りは殆どない。この長胴甕は器形をさほど変化させず、煮炊具の主体として8世紀中葉まで存続する。

その他の器種は、土師器球胴甕・小形甕・鉢・甑がある。甑は大形で底抜けの器形を呈する。36号住居では、長脚一段透しの須恵器無蓋高坏、体部に稜をもつ土師器高坏が出土している。

2期：7世紀中葉から後葉（西山善光寺後期6期・佐久後期6～7期、富沢後期第Ⅳ～Ⅴ期）

代表遺構は、79号・78号・80号・72号・46号・44号・86号住居。次期との差異はやや不透明である。

須恵器坏は外傾度の弱い体部が短く立ち上がる小形のもが主体だが、体部が深いものも少量ある。

須恵器高台付坏は資料数が少ないが、断面三角形の高台が底面最外寄りに付くものがみられる。

須恵器坏蓋は、内面にかえりを有するもので、宝珠形つまみが付く小形品、相対的に大形で扁平な器形のもがみられる。

土師器坏は半球形体部をもつものが主体となる。先期に特徴的な体部が外傾し内底面周囲に段や稜が巡るものは減少する。須恵器坏蓋・坏模倣の器形は若干ある。

土師器高坏は、坏部が半球形を呈するものが主体となっている。

その他の器種は、土師器長胴甕・球胴甕・小形甕・鉢・甑、須恵器甕・鉢・盤が認められる。甑は底部多孔の小形のものである。46号住居ではフラスコ形長頸瓶、土師器甗が出土している。

3期：7世紀後葉から8世紀前葉（富沢後期第Ⅳ～Ⅴ期、鋳物師屋～第Ⅰ期）

代表遺構は、74号・12号・45号・37号・15号・19号住居。まとまった資料が少ないこともあって、先期の様相との差異は明確に捉えられない。

須恵器坏は、先期と同様な形態の他、平底で体部外傾度が弱く、器高が低い盤状のもがみられる。

須恵器坏蓋は、かえりがなく口縁端部を折り曲げた器形で、扁平なつまみを付けたものが現れる。宝珠形つまみが付く小形品は資料が確認されない。

土師器坏は半球形体部をもつもの他、平底ないし平底気味で扁平な器形のもが現れる。

土師器高坏は、先期同様、坏部が半球形を呈するものが主体である。

その他の器種は、土師器長胴甕・球胴甕・小形甕・鉢・須恵器鉢が認められる。19号住居では須恵器坏

蓋模倣の内黒土師器が出土している。内面にかえりを有さない蓋で、つまみ部が扁平なボタン状を呈し、その中央に向かって器高が高まる器形である。

#### 4期：8世紀中葉（鋳物師屋第Ⅱ～Ⅲ期）

代表遺構は、36号・59号・18号・87号住居である。

須恵器坏は、器高が低い盤状のもの他、体部が逆台形状に開き外傾度が強くなった器形が登場し、以後の主流となる。ただし、この時期では底部から体部への変換部は丸みを帯びている。殆どの資料は底部切り離し後に全面ヘラケズリ調整を施しているが、切り離し技法が確認できるものは圧倒的に回転ヘラ切りが多い。とはいえ、回転糸切りによるものも認められ、その技法の存在は明確である。

須恵器高台付坏の資料数は少ないが、高台が底縁やや中寄りに付き、外に開き気味である。36号住居では、大形のものが見られる。

土師器坏は、ロクロ整形の内面黒色処理（内面黒色土器）坏が出現する。この時期では、体部が全体に丸みを帯びて内彎が強く、底部から体部への変換部もシャープではない。底部は切り離し後ヘラケズリが施されるが、回転糸切り不調整のものごく僅かある。半球形体部をもつ非ロクロ整形の坏はこの時期を最後に消滅する。

土師器長胴甕は、伝統的な器壁の厚い長胴甕がこの時期まで存続する。一方、59号住居では、器壁は厚いが、いわゆる東信型甕に類似した器形の甕が出土している。

その他の器種は、土師器球胴甕・小形甕・鉢・高坏・底部多孔小形甕、須恵器甕・鉢・長頸壺が認められる。須恵器甕・土師器小形甕にはロクロ整形によるものがある。土師器球胴甕、高坏、底部多孔小形甕はこの時期を最後に姿を消す。

#### 5期：8世紀後半（鋳物師屋第Ⅲ～Ⅳ期）

代表遺構は、27号・55号・62号・32号・26号住居。

須恵器坏は、体部が逆台形状に開き外傾度が強い器形が殆どで、前時期に比べ内面底径が小さくなっている。底部から体部へシャープに変換するものが見られるが、器高が低い盤状のものはごく少ない。殆どの資料は底部切り離し後に全面ヘラケズリ調整を施す。切り離し技法が確認できるものは依然として回転ヘラ切りが多いが、回転糸切りによるものが一定量認められ、回転糸切り不調整のものも存在する。

須恵器高台付坏は体部が盤状を呈する。断面台形の高台は底縁中寄りに付き、外に開き気味である。

内面黒色土器坏は体部の開きが大きい（外傾度が強い）器形が現れ、以後主体となる。底部切り離し後に全面ヘラケズリ調整を行う例が圧倒的だが、回転ヘラ切り技法が観察されるものがあり、また、回転糸切り不調整のものも存在する。

土師器長胴甕は、伝統的な器壁の厚い長胴甕が姿を消している。これと入れ替わるように、口縁部がく字状に外反する器壁の薄い東信型甕が登場してくると考えられるが、宮平遺跡では、坏類とのセット関係が良好な状態で捉えられなかった。

その他の器種は、土師器小形甕・鉢・甕、須恵器壺・甕・鉢が認められる。土師器甕は単孔のものである。須恵器甕・土師器小形甕にはロクロ整形によるものがある。27号住居では、球形胴を呈する土師器甕が出土しているが、器壁は薄く、外面ヘラケズリ調整されており、伝統的な球胴甕とは異なるものである。

6期：8世紀末から9世紀初頭（鋳物師屋第Ⅳ期）

代表遺構は、54号・66号・30号・77号・48号・58号住居。

須恵器坏は、前時期に比べ内外底径が小さくなり、底部から体部への変換点もシャープとなる。器高が低い盤状のものはごく少ない。基本的に底部回転糸切り不調整のみとなる。

須恵器蓋は、その中央に向かって器高が高まる器形と、器高が高まらない扁平なものがある。つまみは扁平な擬宝珠形と扁平なボタン状を呈するものがみられるが、体部形状との関係は明確ではない。

内面黒色土器坏は、その殆どが体部の開きが大きい（外傾度が強い）器形で、大小2法量に分化する様相が看取される。底部切り離し後に全面ヘラケズリ調整を行う例が少なくなり、確認できる底部切り離し技法はすべて回転糸切りである。また、回転糸切り不調整のものが増加する。

土師器甕は口縁がく字状に外反する器壁の薄い東信型甕が主体をなすが、58号住居・54号住居の北信型甕、66号住居の中・南信系甕といった他地域系の甕が目立つ。

その他の器種は、土師器小形甕、須恵器甕・壺、が認められる。先期まで残っていた非ロクロ整形の土師器鉢類は姿をみせなくなる。

7期：9世紀前半（鋳物師屋第Ⅴ期）

代表遺構は、71号・60号・51号・69号・91号住居。

須恵器坏は、先期に比べさらに内外底径が小さくなり、底部から体部への変換点もシャープである。器高が低い盤状のものは認められない。底部は回転糸切り不調整のみである。

須恵器蓋は、扁平なボタン状つまみを有しその中央に向かって器高が高まる器形がみられる。

内面黒色土器坏は、体部の開きが大きい（外傾度が強い）器形のみとなり、また、底径の縮小傾向が窺える。完全に回転糸切り不調整のみのものから成るセットは存在せず、底部切り離し後のヘラケズリ調整は最終期である10期まで存続する。71号住居からは、底径が広く口縁を短く外反させる大形品が出土している。

土師器高台付皿はこの時期に出現し、以後、継続して存在する。

土師器甕は良好な資料が少ないが、口縁がく字状に外反する東信型甕が主体のようである。

土師器小形甕はすべてロクロ整形である。

その他の器種は、黒色土器鉢、ロクロ整形須恵器鉢、須恵器甕・四耳壺が認められる。60号住居では、口径が広く体部半球形に近い鍋形の煮炊具が出土している。器壁は厚い。

8期：9世紀中葉から後半（鋳物師屋第Ⅵ～Ⅶ期）

代表遺構は76号・67号・85号住居。資料が少なく、当該期の土器組成はあまり明確ではない。

須恵器坏は、底部径の縮小傾向が窺えるが、先期に比べそれほど変化していない。底部は回転糸切り不調整のみである。

内面黒色土器坏は、深い体部の器形が現れ、以後、継続する。76号住居では大小深の三者に加え、極小形のものも相伴している。また、高台の付いた内面黒色土器碗が出現する。

土師器甕は、東信型甕で、口縁がコ字状を呈するものが現れている。

その他の器種は黒色土器鉢が認められる。

## 9期：9世紀後葉から末（鋳物師屋第Ⅶ期）

遺構は、86号住居のみ。資料が少なく、当該期の様相はあまり明確ではない。

須恵器坏は、器形・調整とも先期と変わらない。

内面黒色土器坏・埴・皿類も、先期に比べ特に変化はみられないが、両面黒色処理の高台付皿がある。

土師器甕は、ロクロ整形で外面胴部下半をヘラケズリする北信型の甕が使用される。甕の口縁部はやや受け口状をなし、端部はまるくおさめる。

その他の器種は、ロクロ小形甕・黒色土器鉢が認められる。

## 10期：10世紀前半（鋳物師屋第Ⅷ期～）

遺構は1号・9号住居。資料はさほど多くない。

須恵器坏は殆ど存在せず、9号住居では組成に須恵器坏が含まれていない。

内面黒色土器坏・埴・皿類は、坏は先期と特に変化はみられないが、9号住居では、埴に大深・大浅・小浅の3種の器形がみられ、また、高脚の高台付皿が認められる。大深埴にはやや腰が張り口縁を短く外反させるものがある。

新たに黒色処理を施さないロクロ整形土師器坏が登場し、組成に加わっている。

灰釉陶器は埴・皿がみられる。9号住居出土の皿は光ヶ丘1号窯式後半段階の資料と思われる。

土師器甕は、北信型の甕が9号住居にみられる。口縁部はく字状だが屈曲は弱いものとなっている。

その他の器種は、9号住居で土師器ロクロ小形甕、黒色土器鉢・片口鉢、須恵器甕・高盤が、1号住居でロクロ整形須恵器鉢が認められる。

## 2 集落の変遷

宮平遺跡では、縄文時代の遺物および古墳時代前期の遺物が確認され、断続的にせよ人間活動がこの地に及んでいたことを示している。しかし、定住的な居住の場として利用されるようになったのは、古墳時代後期後半からである。ここでは、時期区分のできる遺構について、竪穴住居を中心に、時期ごとの遺構分布を概観する。

遺跡が展開する段丘面は、南東を矢出沢川の段丘崖に、北西を丘陵に画された、北東から南西に伸びる幅160m前後の細長い平坦地を成している。遺構は地形の走向に沿って帯状の集中域を形成し、大きくは、矢出沢川段丘崖寄りの一群、その北西側の調査区中央に広がる一群、3号溝を挟んでさらに一群、そして丘陵寄りの一群、計4群の帯状遺構集中域が並列する状況を認めることができる。各群間には幅10～10数m程の遺構空白地帯ないし稀薄地帯が存在する。便宜的に、各群を矢出沢川寄りから、南東群、中央群、北西内群、北西外群と呼称しよう。南東群は検出された範囲はさほど広がらないが、遺構集中度は高く、調査区外にも広がる形勢を示す。ただし、現実には削平のため区外の部分は消滅している。中央群は、遺構数・集中度・範囲の広さにおいて、まさに本遺跡の中核を成す。両端部で遺構分布が稀薄となっており、ほぼ全体が捉えられたと考える。北西内群は、調査区南西側（下流側）に偏り、遺構数・集中度とも高くないが、調査区外へ拡大する形勢が窺われる。北西外群は竪穴住居がほぼ一列に連なり、さらに山寄りには掘立柱建物が並ぶ。集落の衰退期である9世紀後半以降を除き、この4群すべてないし3群に、各時期の住居が少なくとも1軒は存在する。集落内における大枠での居住範囲が、集落存続期間を通してほぼ定まっていたことを示唆していよう。

以下、若干の推定部分を含めて、時期ごとの遺構分布をみていきたい。

集落開始期である6世紀末～7世紀前葉では、北西内群、中央群下流側（南西側）、南東群で住居が営

まれる。各群の形成が開始されたわけだが、この時期では、未だ単独的・散在的な景観といえよう。住居の規模は一辺6 m程の大形、5 m程の中形、4 m程の小形が認められる。主軸は北北西ないし東北東を向き、カマドもその方向に付設される。

7世紀中葉～後葉では、北西内群、中央群下流側、南東群で継続して住居が営まれるとともに、新たに中央群上流側に住居群が出現し集落が拡大する。中央群下流側および上流側の住居群は、それぞれ一辺7 m程の際立って大きい住居(44号・79号)を中核として、6 m程の大形、5 m程の中形、4 m程の小形が組み合う数軒のまとまりを構成している。先期と同様、主軸は北北西ないし東北東を向く。カマドは北北西の方向に付設されるが、79号住居の上流側に隣接して並列する中形の2軒のみ東北東にカマドをもち、79号住居を意識した造りを示すといえるだろう。

7世紀後葉～8世紀前葉では、北西内群、中央群上流側および下流側、南東群で継続して住居が営まれるとともに、新たに北西外群の形成が始まる。中央群下流側・上流側には、それぞれ一辺7～6.5 m程の突出する大形の住居(45号・74号)が存在する。住居規模は、5 m程の中形、4 m程の小形の他、3 m程の一段と小形のものがみられるようになる。先期と同様、主軸は北北西ないし東北東を向く。なお、中央群を除く3群は、南東群で例外的にこの時期3軒を数えるが、他の時期では1ないし2軒で、また、住居の存在を認めない時期もある。中央群がやはり宮平集落の中核であり、中央群の動向が集落全体の規模・構造を左右するといえる。

8世紀中葉から後半は、4群でそれぞれ住居が営まれるが、中央群ではそれまで居住の空白地であった中央部に住居が出現する代り、住居総数が減少し、また、集落縁辺部にも住居が構築され、全体として散在的な在り方を示している。住居規模も、8世紀中葉でも古い方に属する36号住居を除き、一辺4.5 m程度以下の小形のみである。8世紀後半段階には、主軸方位にも変化がみられ、西北西ないし北東北を向く例が多くなり、さらに、これまでみられなかった南東方向カマドをもつ住居が現れる。

8世紀末～9世紀初頭には、北西内・外群、中央群下流側に住居が営まれる他、中央群の中央部に、特異な構造をもつ突出した大形住居54号を要として、5 m程の中形、4 m～3 m程の小形が配置される。小形住居には長方形プランのものがある。主軸方位は、西北西ないし北東北を向き、先期に現れた変化が定着したことを示す。なお、54号掘立柱建物は、軸方位・桁行長・位置が54号住居と揃い、同時存在の可能性が考えられる。調査段階で、9世紀前半の68・69号住居を切ると判断されたが、その根拠が明確ではないようであり、判断間違いの可能性を残す。しかし、出土遺物皆無のため、確定することができない。

9世紀前半は、中央群の中央部で住居数が増加し、先期で54号住居が存在した場所を取り巻くような配置をみせる。住居プランは長方形を呈するものが目立つ。規模は5.6×4.6 mを最大として中・小形が主体を占めるが、他と隔絶した規模・構造を有するものはみられない。主軸方位は先期同様、西北西ないし北東北を向く。

9世紀後半は、全体に住居数が減少し、各住居の間隔は広く散漫である。規模は、一辺8 m近い22号住居が南東群に存在する他は、中・小形が占め、また、同規模のものは2軒とない。主軸方位は先期同様、西北西ないし北東北を向く。

10世紀前半には、住居数は激減し、僅かに3軒を数えるのみである。住居は集落縁辺部に散在し、規模は中・小形で、主軸方位は西北ないし東北を向いている。調査範囲内においては、この時期を最後に古代集落はほぼ消滅する。

以上、住居跡の分布を中心に集落の変遷を概観したが、ここで簡潔にまとめてみると、6世紀末から7世紀前葉を集落形成期、7世紀中葉から8世紀前葉を拡大期および第一次隆盛期とみることができよう。

そして、8世紀後半の変質期、8世紀末から9世紀初頭の変革期を経て、9世紀前半に第二次隆盛期を迎える。さらに、9世紀後半に集落は衰退期に入り、10世紀前半を終末期と捉えることができる。

8世紀後半に伝統的な長胴甕が姿を消し、それと入れ替わるように佐久地方を発信源とする東信型甕が波及すること、そして、8世紀末から9世紀初頭に北信型甕および中・南信系甕の存在が認められることを勘案すれば、当該期の集落の変質・変革の背後に、他地域との交流の活発化があり、或いは、もしかするとそれらの地域を故地とする人々の流入を推測することができるかもしれない。

中世には墓域として利用される他、3軒の竪穴住居ないし竪穴建物の存在、検出面から広く中世遺物が出土していることから、一定規模の集落が営まれていたことは明らかであろう。73号・81号掘立柱建物はその形態から中世に属する可能性が考えられ、また、数多く検出された小形のピットが中世の掘立柱建物の柱穴を含んでいることが推測される。しかし、時期を限定できる例が余りにも少なく、中世集落の実態は判然としない。

#### 引用・参考文献

- 青木一男・宇賀神誠司 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70号 長野県考古学会
- 阿部義平 1976 「銚帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
- 市川隆之 1994 「長野県内の古代集落内における手工業生産予察」『信濃』第46巻 第4号  
信濃史学会
- 伊藤友久 1992 「集落遺跡に係わる建築構造—長野県の原始・古代・中世—」『信濃』第44巻 第4号  
信濃史学会
- 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 尾見智志 1998 『上沖(大沢)遺跡 国分産業団地造成工事に伴う発掘調査報告書』上田市教育委員会
- 桐原健 1973 「釜から鍋へ—古代東国における火処と炊具の変貌—」『信濃』第25巻 第11号  
信濃史学会
- 桐原健 1974 「鍋を被せる葬風」『信濃』第26巻第8号 信濃史学会
- 倉沢正幸 1993 「信濃国分寺跡出土土軒瓦の一考察」『千曲』第78号 東信史学会
- 小葉一夫 1990 「土製円板の機能的側面について」『東京の遺跡』No.28 東京考古談話会
- 小平和夫 1990 「第3章 第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4  
—松本市内その1—』総論編 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 小林秀夫 1982 「第V章 第4節 長野県における内耳土器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書—茅野市 その5—』長野県教育委員会
- 小林真寿 1987 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—上小地方における様相—」  
『長野県考古学会誌』55・56号 長野県考古学会
- 酒井清治 1994 「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集  
国立歴史民俗博物館
- 笹沢浩 1988 「Ⅱ 4 古代の土器」『長野県史』考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物  
(財)長野県史刊行会
- 塩入秀敏ほか 1995 『上田小県郡誌』第6巻 歴史篇上 (1)考古
- 鋤柄敏夫 1986 「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』第38巻 第4号 信濃史学会
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』 柏書房

- 田中広明 1990 「律令時代の身分表象（I）—帯金具の生産と変遷—」『土曜考古』第15号  
土曜考古学研究会
- 堤 隆ほか 1987 『前田遺跡』 御代田町教育委員会
- 堤 隆ほか 1988 『十二遺跡』 御代田町教育委員会
- 堤 隆ほか 1989 「付図3、付図3解説 鋳物師屋遺跡群における奈良・平安時代の土器編年」『根岸遺跡』 御代田町教育委員会
- 堤 隆 1991 「住居廃絶時における竈解体をめぐって 竈祭祀の普遍性の一側面」『東海史学』第25号
- 鶴間正昭 1985 「武蔵国における鉄鎌の型式分類とその編年的予察」『法政考古学』第10集  
法政考古学会
- 寺島俊郎 1991 「第3章 第18節 栗毛坂遺跡群 5(1)古墳時代末から平安時代の遺物」  
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 富沢一明 1996 「佐久平における古墳時代の土器編年試案」『長野県考古学会誌』79号  
長野県考古学会
- 直井雅尚 1996 「信濃における奈良・平安時代の土師器甕について」『鍋と甕 そのデザイン』  
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 『中世の出土銭 補遺I』 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男ほか 1996 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会
- 野村一寿 1990 「第3章 第6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—』総論編 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 花岡弘・西山克己 1995 「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略として—」  
『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 原明芳 1989 「長野県における「黒色土器」の出現とその背景—5世紀末の食膳具様式の成立との関連で—」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 原明芳 1989 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 原明芳 1990 「信濃における平安時代の黒色土器—塩尻市吉田川西遺跡の出土資料をもとにして—」  
『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 原明芳 1991 「長野県出土の平安時代の輸入陶磁器—需要とその背景—」『信濃』第43巻 第9号  
信濃史学会
- 原明芳 1996 「甲信地域の8・9世紀の煮炊き具」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4煮炊き具—』第4回シンポジウム 古代の土器研究会
- 町田勝則 1996 「第3章 第3節 2(2)石器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 町田勝則 1996 「石器の研究法」『長野県の考古学』 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤亮ほか 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤亮 1998 「第3章 第1節 国分寺周辺遺跡群 古墳時代中・後期、奈良時代、平安時代の土器」  
『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内・坂城町内—』

(財)長野県埋蔵文化財センター

- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」  
『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 若尾正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』No.1 美濃古窯研究会
- 若尾正成 1988 「5. 白瓷の光ヶ丘1号窯式と大原2号窯式について」『美濃の古陶』No.2  
美濃古窯研究会
- 長野県史刊行会 1982 『長野県誌』考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)
- 長野県史刊行会 1988 『長野県誌』考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物

## 第7章 上原古墳群

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

太郎山北西面に端を発する谷川は、およそ6kmを西流して千曲川右岸に流れ込む。『坂城町誌』によれば、谷川流域に分布する谷川古墳群には四つの支群がある。その一つが上原支群で、谷川中流域の両岸に広がっている。直刀が出土したとの伝承をもつ上原塚や鉄製鉸具が採集された古墳を含んでおり、6～7世紀代の古墳群と考えられている（森嶋ほか1981）が、総じて、内容は明確でない。

今回の調査地は長野県埴科郡坂城町南条3620ほかに所在する。谷川左岸の河岸段丘上のなだらかな傾斜地に位置し、遺構分布範囲の標高は554～563mを測る。

#### 2 調査の経過

調査地を含む段丘面はいったん桑畑として開拓された後放棄され、森林・原野に戻っている。平成3年12月1日から平成4年3月31日にかけて下草刈りを行い、現地踏査を徹底した。その結果、高速道用地内に古墳の可能性をもつ石積み14基の存在を確認した。

発掘調査は、石積みの性格追究を頭初の目的として開始した。石積みの現況を記録した後、石積み内部の調査に着手した。しかし、14基全てが、人頭大の角礫を乱雑に積み上げているだけで、古墳としての構造はなんら存在せず、関連する遺物も検出されなかったため、古墳ではなく、畑開拓時に集められた石積み（通称「やっくら」）と判断した。一方、地表下に埋没した遺跡の状況を明らかにするために、石積みの調査と並行して、重機により、南東急斜面部を除いて表土剥ぎを行い、竪穴・土坑・ピット群を検出した。石積みの調査が一段落した後、本格的な遺構調査に入り、平安時代の小集落の姿が捉えられた。

調査期間は平成4年6月25日～9月17日、調査面積は12000㎡である。

#### 3 基本層序

I層はにぶい黄褐色の砂質土で、最上部は現表土となる（図187）。II層は黒色～暗褐色砂質土で遺物包含層である。調査区の中央部を南北に縦断する緩い谷状地形部を中心に広がっているが、中心から離れるにつれて黒色が薄れ、判然としなくなる。III層は堅固な黄褐色土で、本層中に、II層に近似した黒褐色土が落ち込む状況で遺構が検出された。本来の遺構掘削面すなわち当時の生活面はII層中と思われるが、遺構プランの検出は困難で、明確な遺構調査面はIII層上面に求めざるを得なかった。これより下位は深掘トレンチでの観察となる。III層は特に目立った変化をみせることなく、山裾寄りでは1.5m以上続き、段丘崖寄りでは1.5～2m掘下げたところで、拳大～人頭大の円礫を主体とする礫層に至った。この礫層は谷川が運搬した段丘礫層と思われる。III層および礫層の様相から、これ以上の掘下げ・面剥ぎは不要と判断し、調査面はIII層上面に限定することとした。

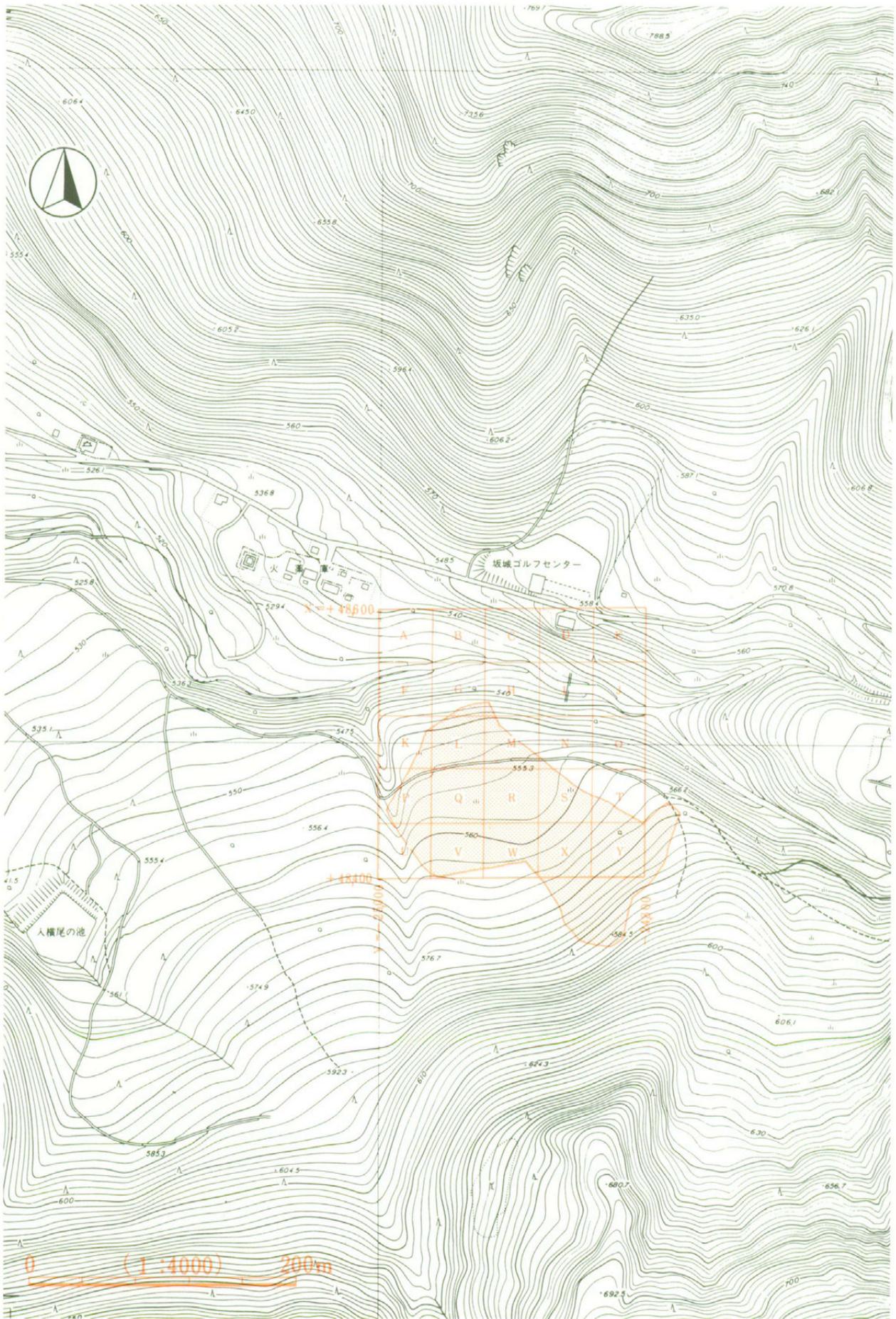


図 186 調査範囲

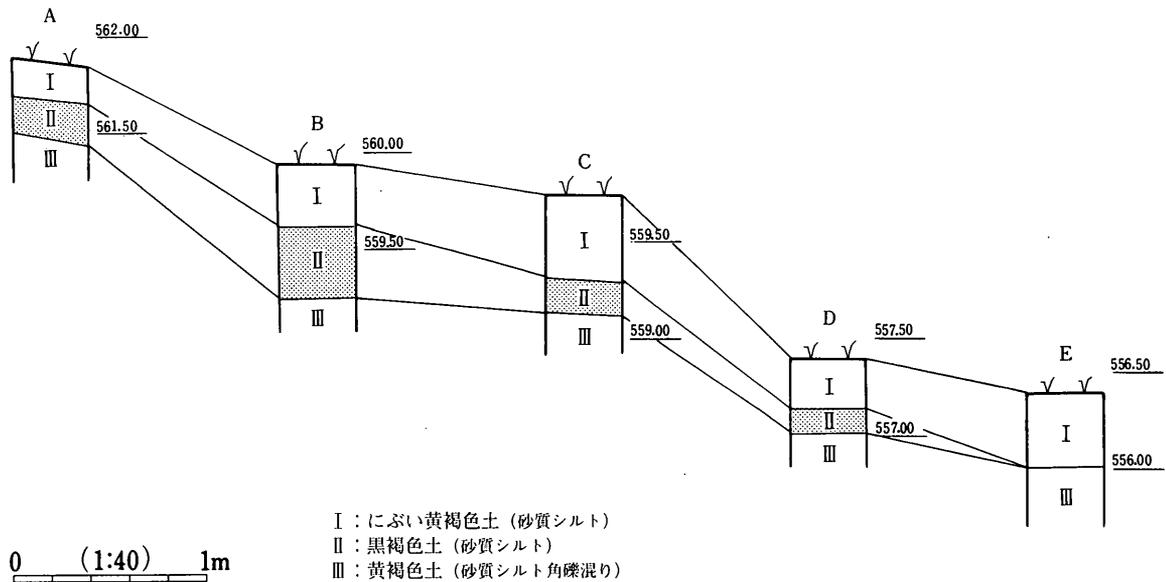


図 187 基本層序

## 第2節 遺構と遺物

### 1 平安時代の遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡および竪穴状遺構3軒、掘立柱建物跡5棟、土坑25基、ピット210基である(図188)。ピットはその殆どが柱穴と考えられるので、掘立柱建物跡の実数はさらに多かったであろう。竪穴と一部の土坑は9～10世紀に位置付けられるが、その他の遺構は帰属時期を絞り込み難い。とはいえ、他時期の遺物を伴う遺構が皆無であること、中世遺物が殆ど出土していないことから、概ね同様な時間幅のうちにおさまると考えておきたい。遺構は調査区中央、標高559m～556mの、RグリッドからSグリッド西部にかけての傾斜が最も緩やかな辺りに集中している。竪穴住居跡・掘立柱建物跡の主軸は等高線に平行ないし直交する。

#### (1) 竪穴住居跡、竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(図189) 位置 R-21、W-01

検出 III層上面で検出した。覆土はII層土と同様な黒褐色土の単層で、自然埋没と思われる。

構造 平面形状はやや丸みを帯びた方形である。床面規模3.4×2.9m。軸方向はN-23°-E。床は竪穴の掘り方底を平坦に削り出して構築している。貼床はない。柱穴も認められなかった。床面中央と北壁の中間あたりに直径25cm、深さ5cmの浅いピットがあり、僅かな炭が溜まっていたものの、被熱した痕跡はなく、炉跡とは認め難い。

遺物 小片のため図示しなかったが、覆土中からロクロ整形内面黒色塊が出土している。

時期 9世紀後半～10世紀と考えられる。

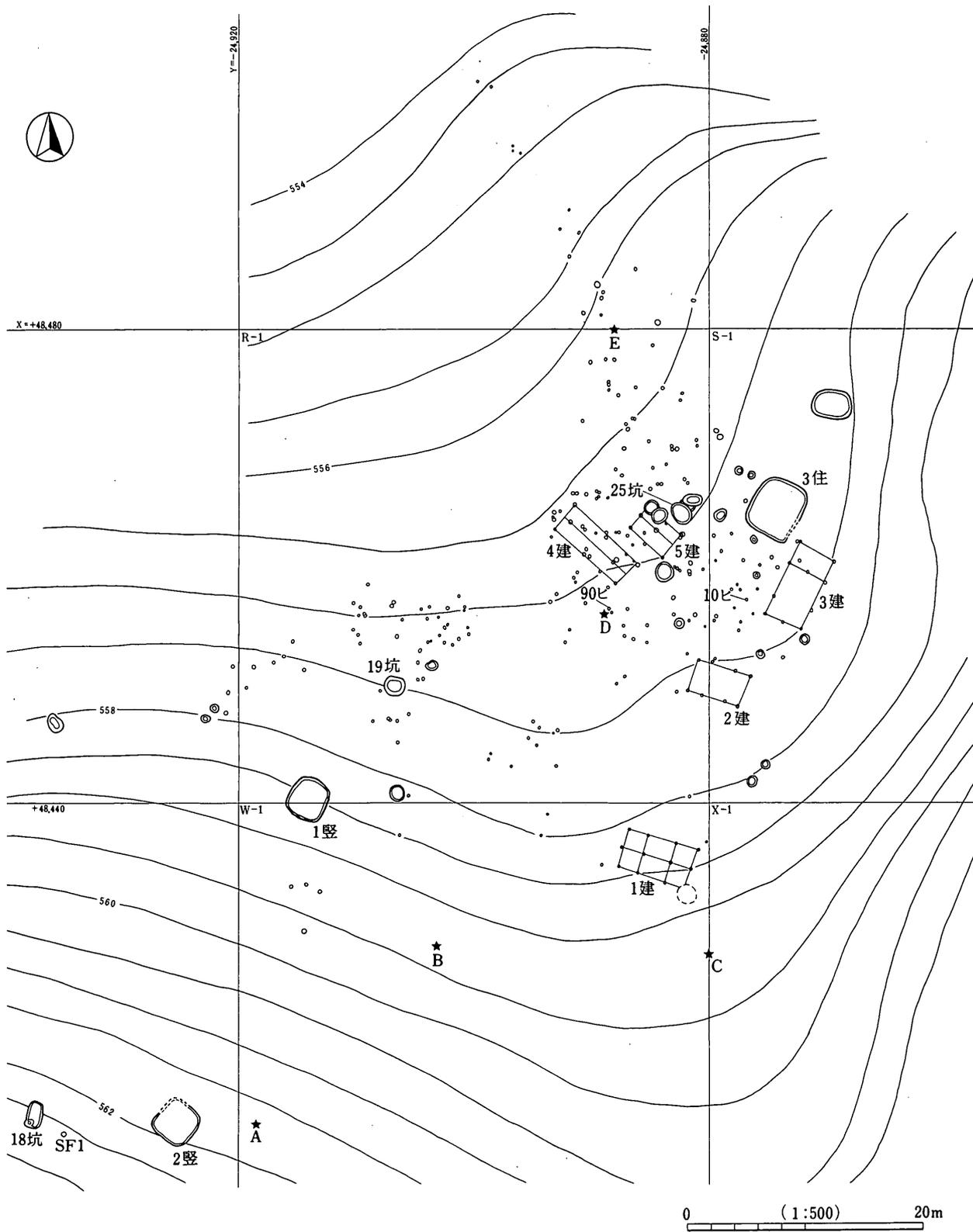


図 188 遺構全体図

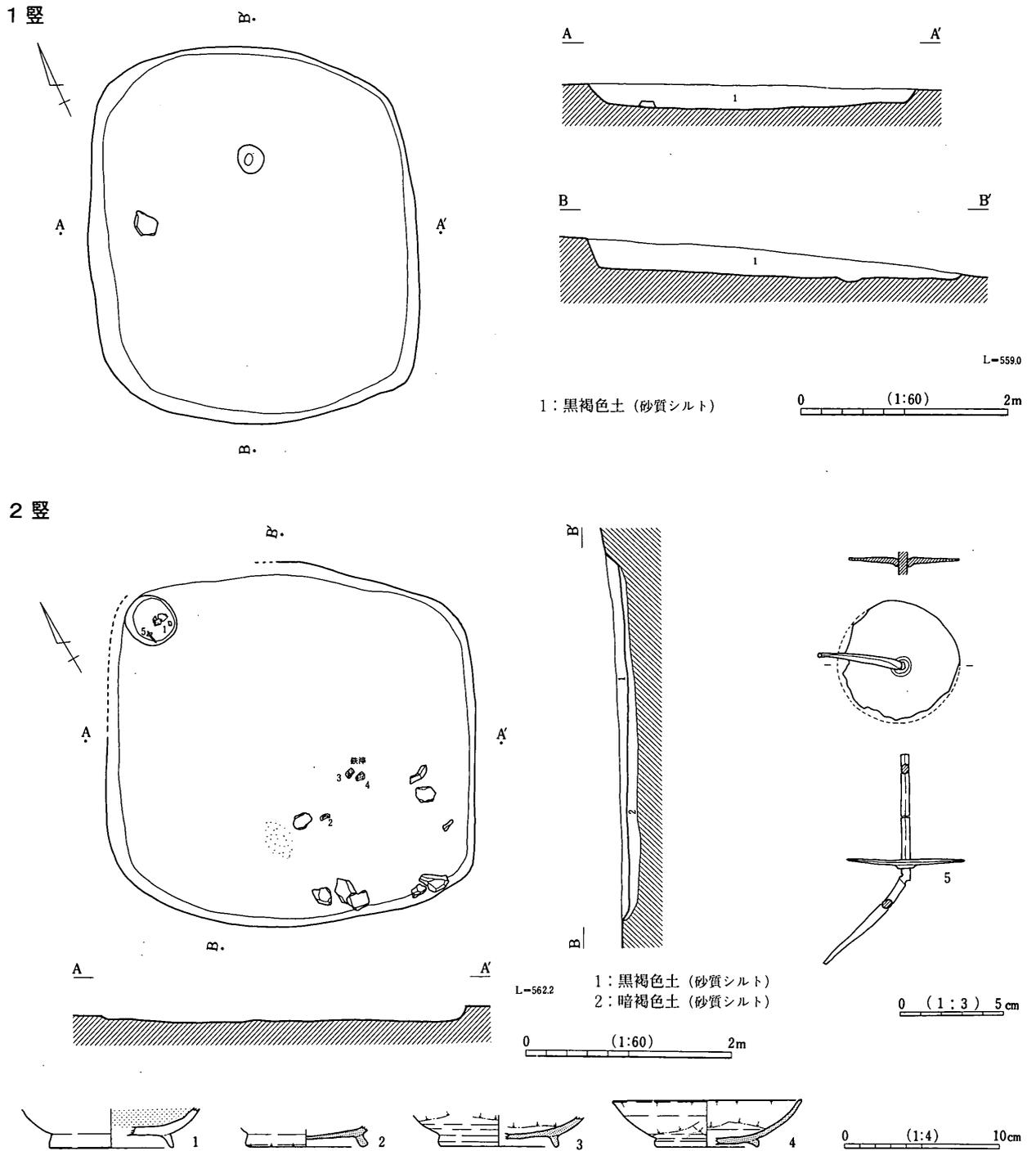
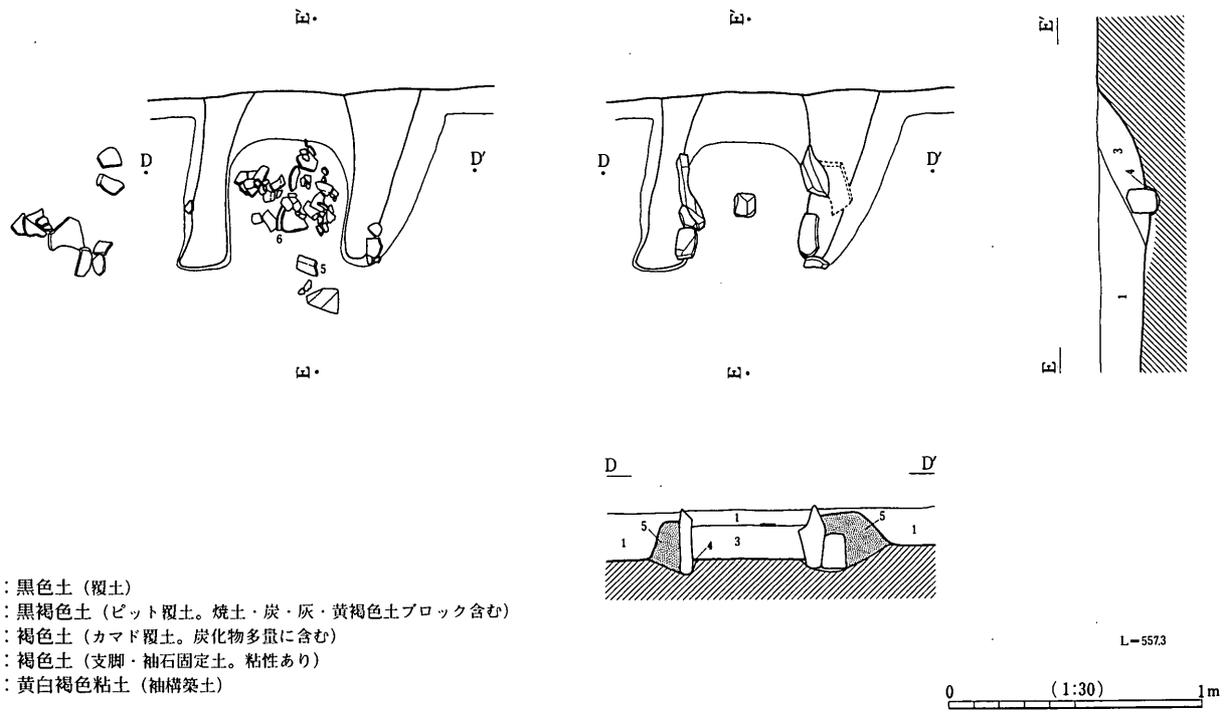
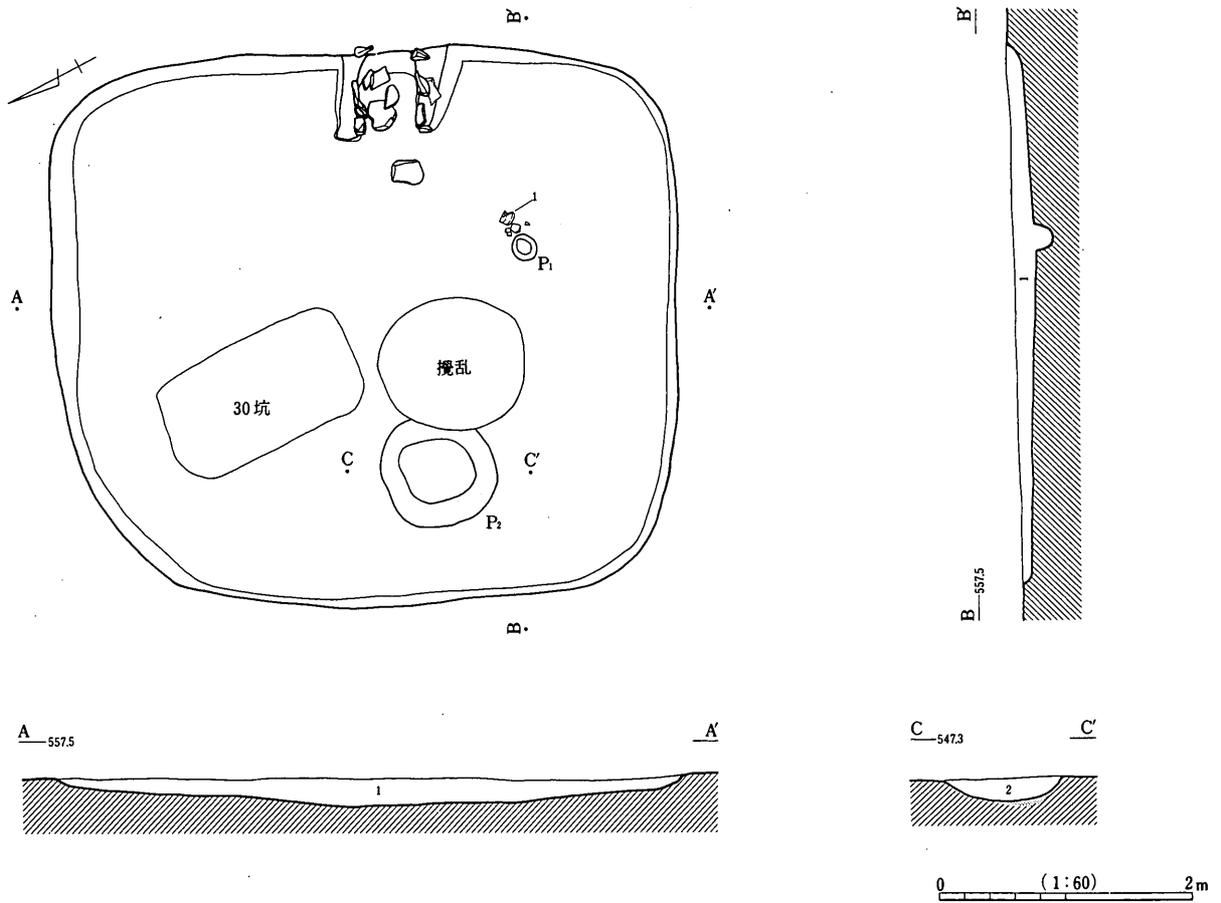


図 189 1号・2号豎穴状遺構

2号豎穴状遺構 (図 189) 位置 V-20

検出 III層上面で検出した。覆土はII層土と同様な黒褐色土の単層で、自然埋没と思われる。

構造 平面形は北・南辺が丸みを帯びた方形である。床面規模 3.4 × 3.4 m。軸方向は N-32°-E。床は豎穴の掘り方底に暗褐色土を数 cm の厚さに敷いて構築している。あまり堅くはない。柱穴は認められなかった。北西コーナーには直径 50cm、深さ 10cm の円形のピットがあり、鉄製紡錘車 (5) を検出した。床面中央と北壁の中間あたりに長径 40cm、短径 30cm の範囲で炭が集中する箇所が認められるが、被熱した痕跡はなく、炉跡とすることはできない。



- 1: 黒色土 (覆土)
- 2: 黒褐色土 (ピット覆土。焼土・炭・灰・黄褐色土ブロック含む)
- 3: 褐色土 (カマド覆土。炭化物多量に含む)
- 4: 褐色土 (支脚・袖石固定土。粘性あり)
- 5: 黄白褐色粘土 (袖構築土)

図190 3号竪穴住居跡

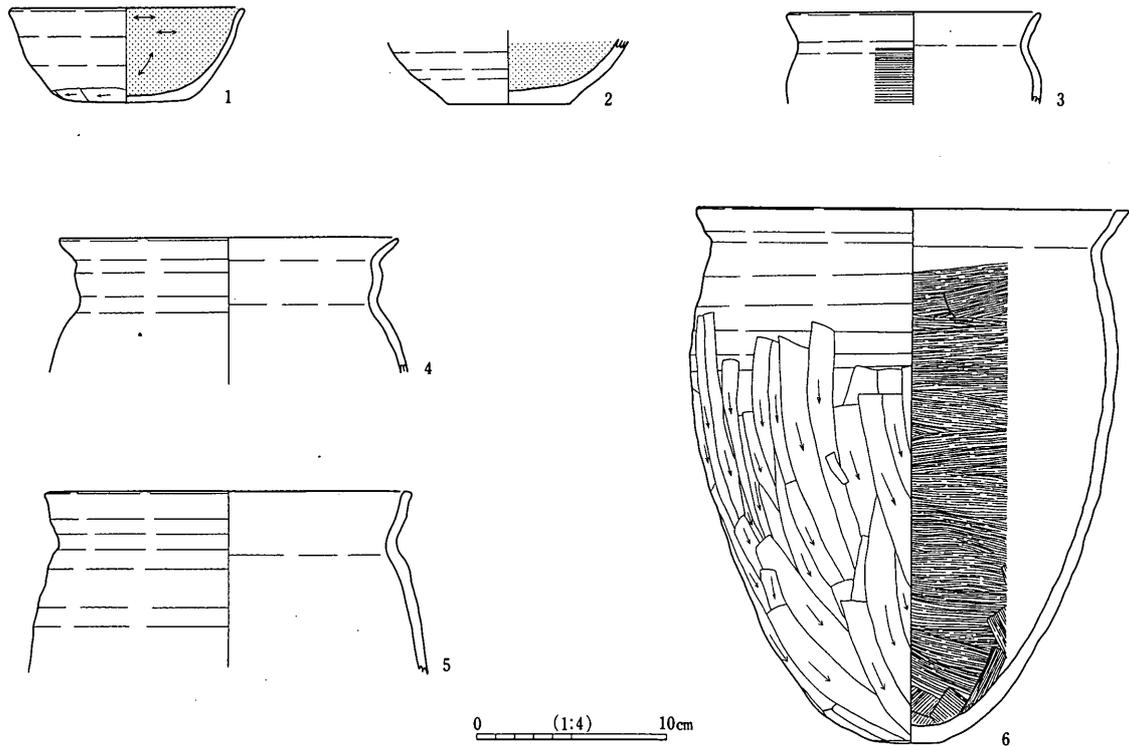


図 191 3号竪穴住居跡出土遺物

覆土を掘り下げる過程で鉄滓（図 197-3・4）が出土したため、鍛冶関連微細遺物の回収を目的として床面土の採取を行った。採取土 24.2kg には、鍛造剥片 0.53 g（894 点）、粒状滓 0.01 g（7 点）、鉄滓 1.83 g、砂鉄 4.9 g が含まれていた。鍛造剥片は 0.5～1mm の極小さなものが総点数の 90%以上を占め、粒状滓はすべて 0.5～1mm である。本竪穴は炉をもたないので、鍛冶工房と見做すには無理がある。これら鍛冶関連遺物は流れ込みと考えるのが妥当であろう。

**遺物** 上記のほか、ロクロ整形内面黒色碗(1)、灰釉陶器碗(2～3)、土師器坏、土師器・須恵器甕の小片が出土している。灰釉陶器は光ヶ丘 1 号窯式～大原 2 号窯式に相当する。

**時期** 9 世紀末～10 世紀前葉と考えられる。

### 3号竪穴住居跡（図 190・191） 位置 S-06・07・11・12

**検出** Ⅲ層上面で検出した。覆土はⅡ層土と同様な黒色土の単層で、自然埋没と思われる。

**構造** 平面形状はやや隅丸の方形である。床面規模 4.3×4.2 m。軸方向は N-117°-E。床は、概ね平坦だが、中央に向かってやや窪んでいる。貼床はない。カマドは、袖部分の床を若干掘り窪め、内側寄りに偏平な角礫を立てて内壁とし、その外側を粘土で固めて構築している。中央に支脚石が据え付けられており、その前面の火床は赤橙色によく焼けていた。西壁近くには直径 90cm、深さ 25cm の播鉢状のピットがあり、底面から西壁にかけての一部に被熱痕跡がみられた。

**遺物** カマド内およびその周辺から、いわゆる北信型の砲弾甕 (6)・カキメ調整の小形甕 (3)、床面からロクロ整形内面黒色坏 (1)、覆土中からロクロ整形内面黒色坏 (2)・内面黒色碗・コ字状口縁のいわゆる東信型甕 (4)・北信型甕 (5)、須恵器甕片、灰釉碗片が出土している。6 の甕は破碎してカマド内に投げ込んだような状況を示していた。

**時期** 土器の様相から 9 世紀後半とする。

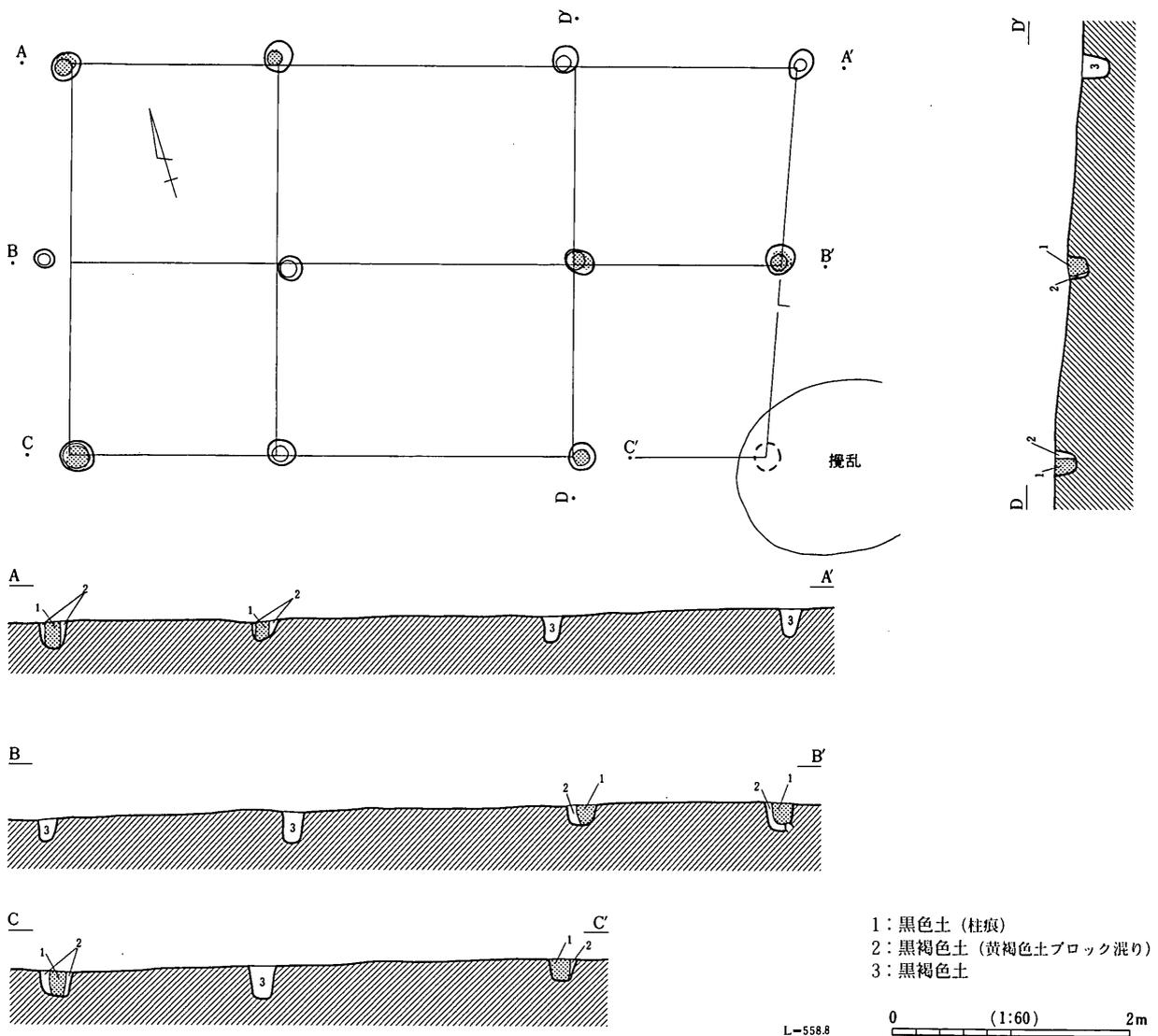


図 192 1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物 (図192) 位置 W-05

検出 Ⅲ層上面で検出した。

構造 3×2間のいわゆる総柱建物跡である。棟軸方向はN-73°-W。桁行6.2m、梁行3.3mを測る。柱間寸法は、梁方向は一定だが、桁方向では中央の柱間が広い。柱穴掘り方は直径20cm強の円形プランを基調とする。半数の柱穴に太さ15cm程の柱痕が認められた。

時期 遺物は皆無であるが、9～10世紀と考えておきたい。

2号掘立柱建物 (図193) 位置 R-20、S-16

検出 Ⅲ層上面で検出した。

構造 3×1間の建物跡である。棟軸方向はN-74°-W。桁行4.5m、梁行2.7mを測る。南側柱列の柱筋は一直線だが、北側柱列では中央2穴が若干外側に位置している。桁方向の中央の柱間が広いことが特徴である。柱穴掘り方は直径20cm強の円形プランを基調とする。

時期 遺物は皆無であるが、9～10世紀と考えておきたい。

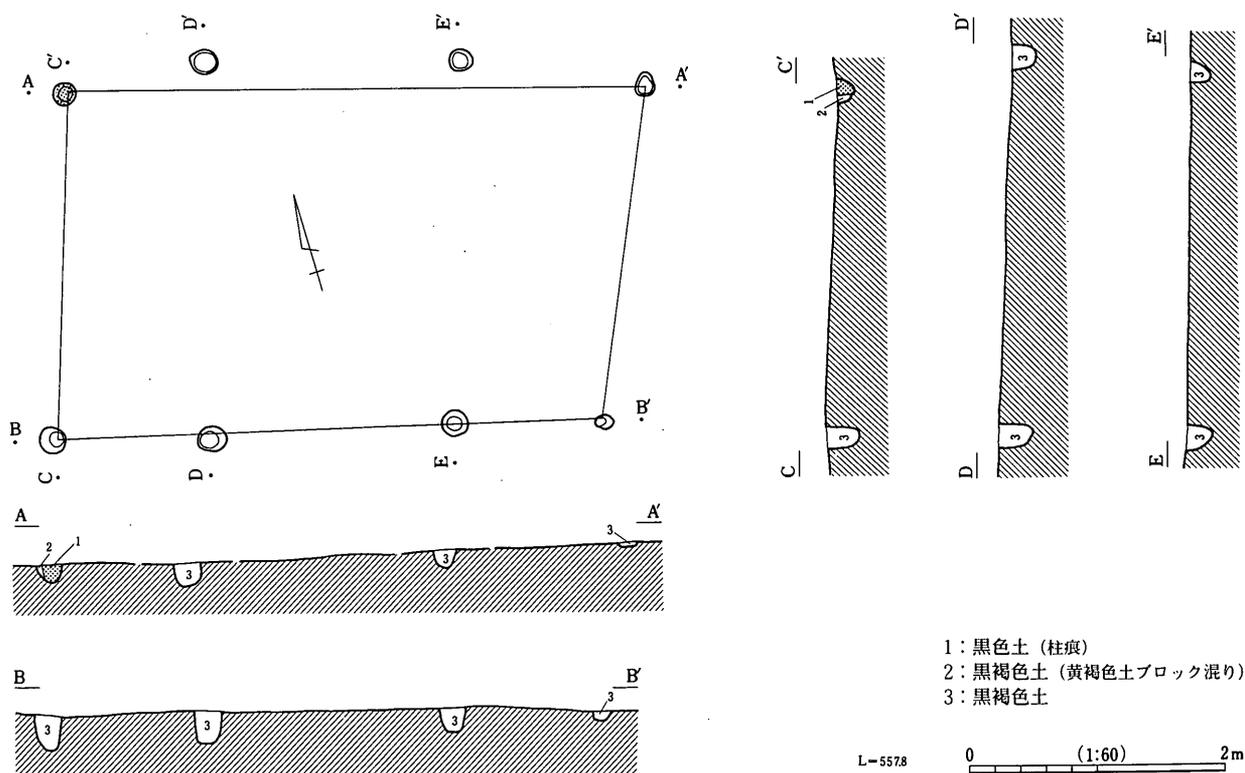


図 193 2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物 (図 194) 位置 S-11・12・16

検出 Ⅲ層上面で検出した。

構造 3×2間の建物跡である。棟軸方向はN-26°-E。規模は桁行6.7m(西辺)・6.3m(東辺)、梁行3.4mを測る。北辺から二列目の中央柱穴は東柱というより、間仕切りに関係した柱穴であろう。柱間寸法は梁方向は一定だが、桁方向は中央の柱間が広い。柱穴掘り方は直径20cm強の円形プランを基調とする。

時期 遺物は皆無であるが、9～10世紀と考えておきたい。

4号掘立柱建物 (図 195) 位置 R-09・10・14・15

検出 Ⅲ層上面の検出である。

構造 棟持柱をもつ2×1間の建物跡である。棟軸方向はN-48°-W。規模は桁行7.4m(北東辺)、梁行2.7mを測る。北東辺に比べ、西南辺の柱間が若干狭い。柱穴の規模はややばらつくが、直径30cmの円形プランを基調とする。

時期 遺物は皆無であるが、9～10世紀と考えておきたい。

5号掘立柱建物 (図 195) 位置 R-10・15

検出 Ⅲ層上面の検出である。

構造 北東辺の北隅から中央にかけて他の土坑と切り合い、その部分の柱穴は検出できなかったものの、2×2間の建物跡と思われる。棟軸方向はN-47°-W。規模は桁行3.6m、梁行2.4mを測る。柱穴規模はややバラツキがみられる。

時期 遺物は皆無であるが、9～10世紀と考えておきたい。

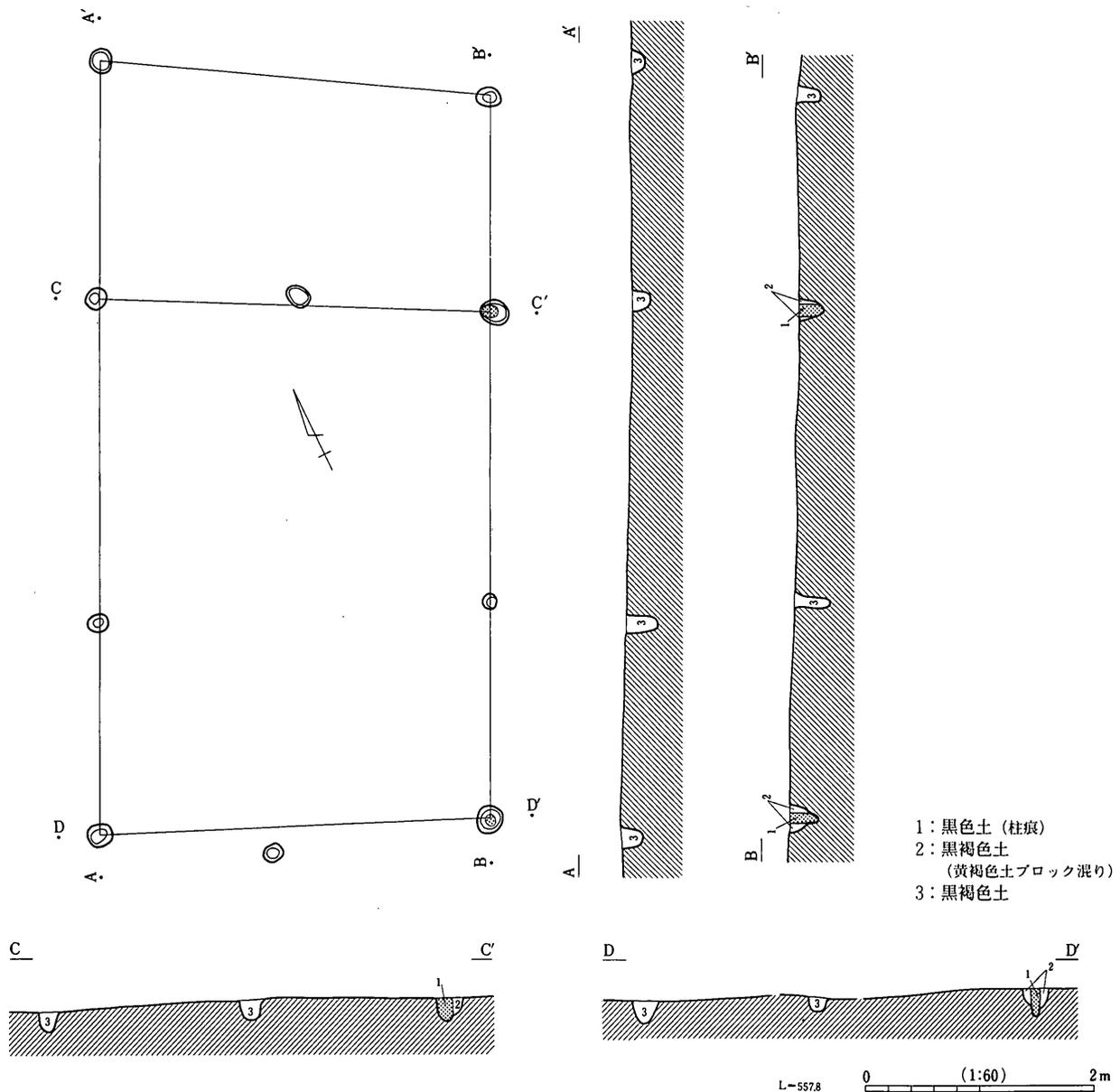


図 194 3号掘立柱建物跡

(3) 土坑・ピット・SF

18号土坑 (図 196)      位置 V-18

Ⅲ層上面の検出である。2.2 × 1.3 mの隅丸方形を呈し、深さは20cm弱。底面は平坦で、南西隅に直径80cmの円形に窪む部分がある。1のロクロ整形内面黒色坯から、時期は9世紀と考える。

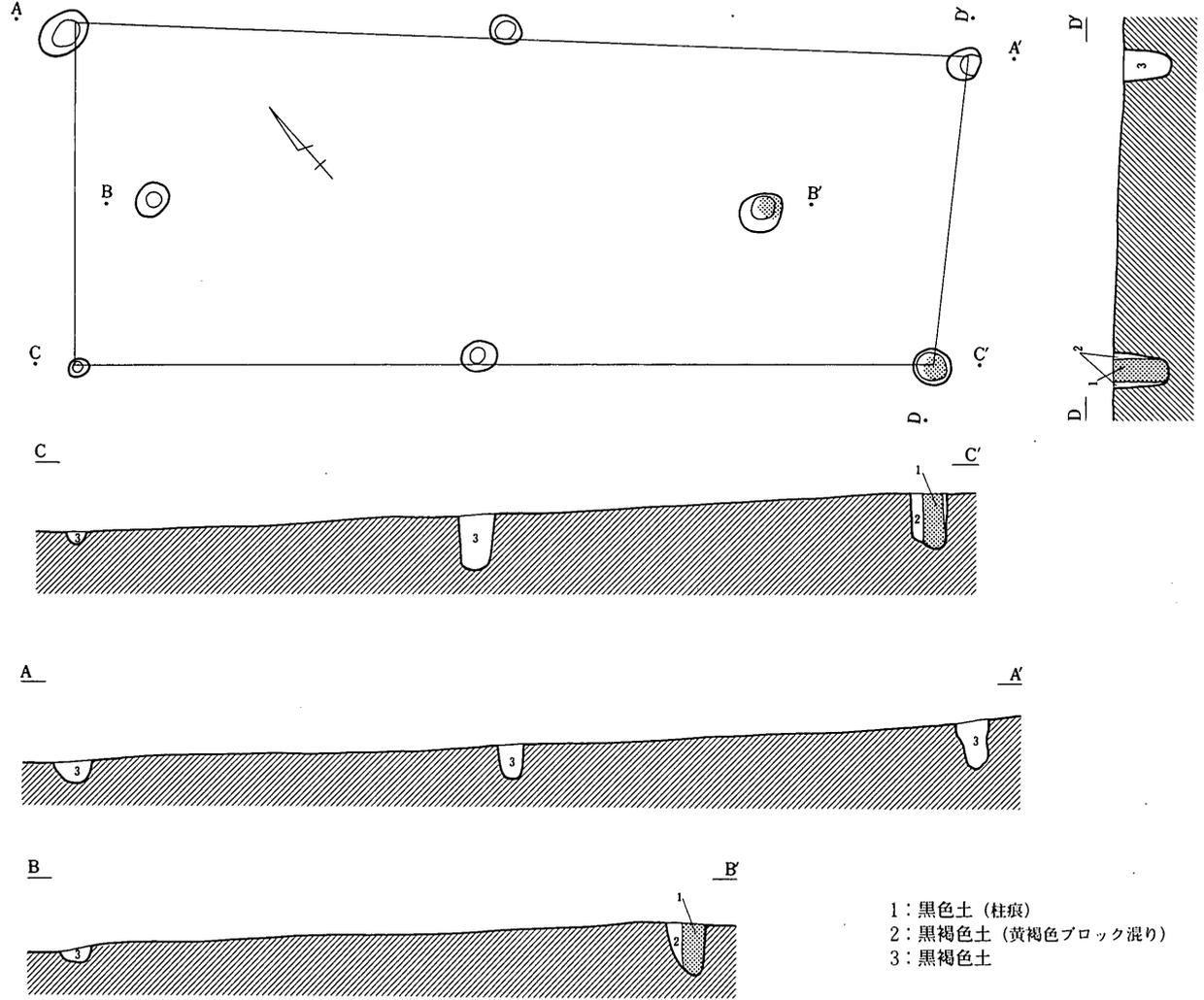
19号土坑 (図 196)      位置 R-17

Ⅲ層上面の検出である。直径1.6 mの円形を呈し、深さは45cmを測る。平坦な底面から約60度の傾斜を成して壁面が立ち上がる。内部には10～50cmの角礫が入っている。

25号土坑 (図 196)      位置 R-10・15

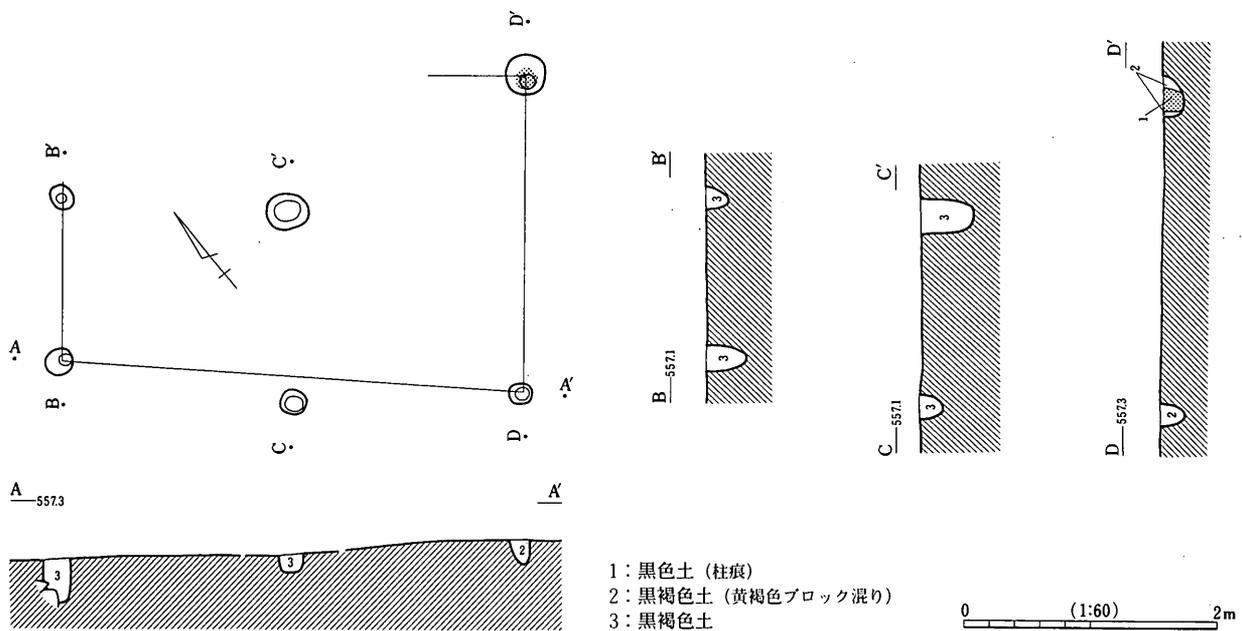
Ⅲ層上面の検出である。1.8 × 1.5 mの楕円形を呈し、深さは20cm弱。底面は平坦である。底面から台石(2)が出土した。板状の安山岩を素材とし、片方の平坦面が磨り面となっている。

4建



L-5573 0 (1:60) 2m

5建



0 (1:60) 2m

図 195 4号・5号掘立柱建物跡

**30号土坑** (図196) 位置 S-06

3号住居の床面で検出した。1.6×0.9mの長方形を呈し、深さは20cm弱。底面は平坦である。

**10号ピット** (図196) 位置 S-11

Ⅲ層上面の検出である。直径30cmの円形で、深さは30cmを測る。形態からみて柱穴と考えられ、太さ15cm程の柱痕がみられる。柱痕部から矛状鉄器(3)が出土した。刃部を上にして直立した状態で、柱穴底面からは10cm程浮いている。刃部は鑿頭状を呈し、断面円形の袋状基部の内面には木質が遺存する。

**90号ピット** (図196) 位置 R-14

Ⅲ層上面の検出である。直径30cmの円形で、深さは30cmを測る。形態からみて柱穴と考えられ、太さ20cm強の柱痕がみられる。

**S F 1** (図188) 位置 V-19

Ⅲ層上面の検出である。50×40cmの楕円形を呈する被熱面である。東北に1m程離れて、図198-3のロクロ整形内面黒色坏を含む土器片数点がまとまって検出されたが、これらが伴うとすれば、本遺構の時期は10世紀前葉あたりの時期が考えられるだろう。

## 2 遺構外出土遺物

## (1) 鍛冶関連遺物 (図197)

今回の調査では、遺構としての鍛冶施設は確認されなかったが、鍛冶工程に必要な羽口と、鍛冶工程で生じる鍛冶滓類・鍛造剥片が出土した。2号住居の床面土から採取された鍛造剥片と粒状滓については同住居の項で記述したので、ここでは、羽口と鍛冶滓について記す。

**羽口** (1・2)

2点出土している。どちらも先端部の破片で、使用による強い二次被熱のため溶解している。口径は3cm未満と推定される。胎土は4～10mmのスサを含む。

**鍛冶滓** (3～8)

9点出土している。いずれも全体形が椀形を呈する椀形鍛冶滓である。メタルチェッカーでH反応以上の高反応を示した5点(3～7)を「含鉄椀形鍛冶滓」とする。4については川鉄テクノリサーチに化学分析を依頼し、「椀形精練鍛冶滓」との結果を得た。鉄源は砂鉄の使用が考えられるとのことである。

## (2) その他の遺物 (図197・198)

**土器類** (1～6)

1・2は櫛描波状文・簾状文を施す弥生時代後期の甕および小形甕である。1号住居の覆土出土だが、明らかに混入品なので、遺構外として扱った。3はロクロ整形内面黒色坏、4は光ヶ丘1号窯式相当の灰釉陶器塊である。5・6は播鉢片。

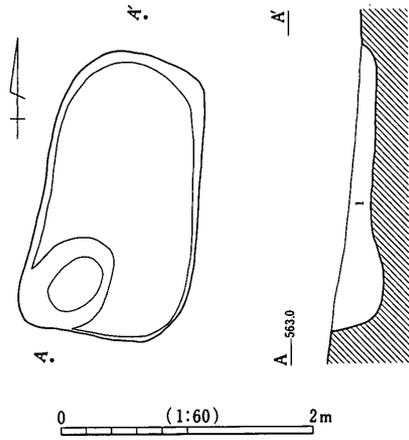
**銭貨** (7)

Ⅱ層中で、元祐通宝1点が出土している。

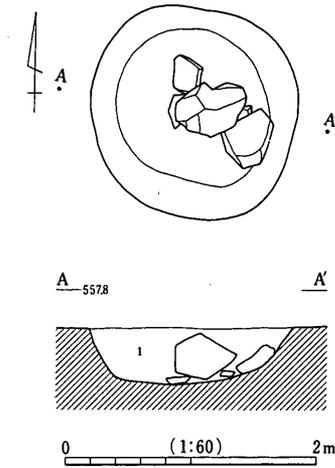
**石器・石製品** (8～13)

8は基部の両側縁に抉りをもつ打製石斧。風化した千枚岩質粘板岩の剥片を素材とし、片面に主要剥離面を大きく残す。9は凹石で、やや扁平な円礫を素材とし、片面に直径4cm深さ7mmの円形の凹みを作り出

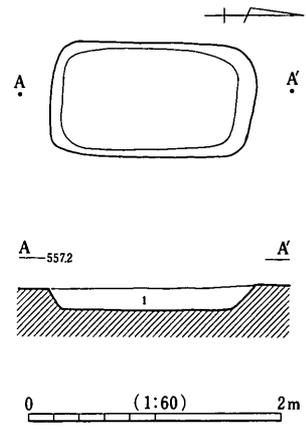
18坑



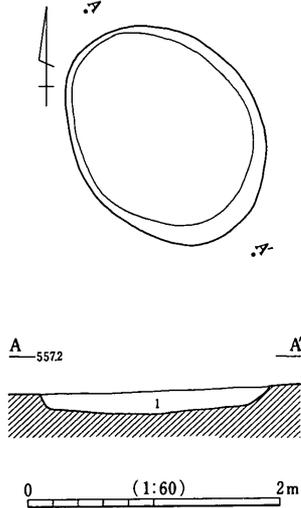
19坑



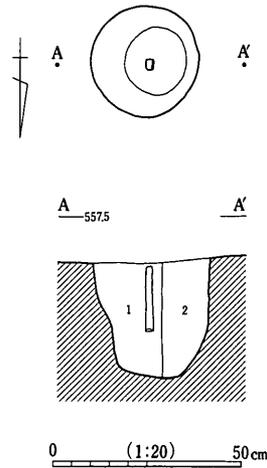
30坑



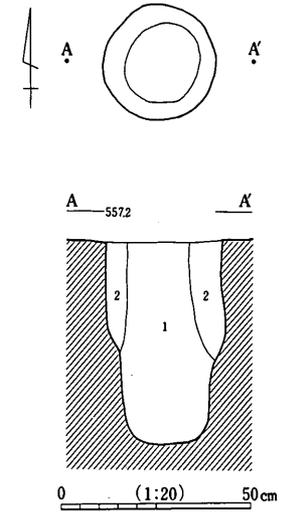
25坑



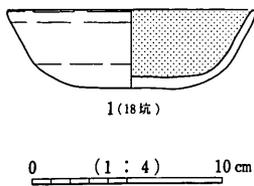
10ピット



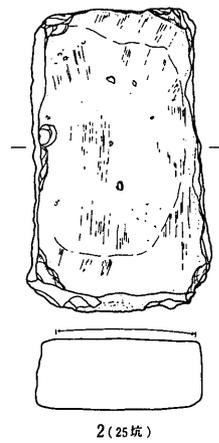
90ピット



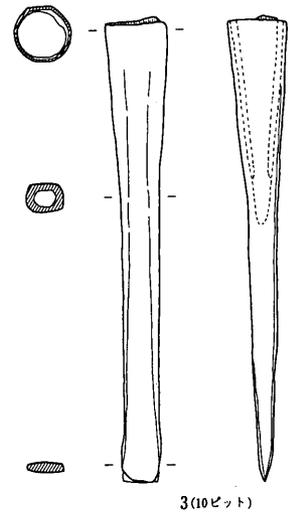
1: 黒色土  
2: 黒褐色土 (黄褐色土ブロック混り)



1 (18坑)



2 (25坑)



3 (10ピット)

図196 土坑・ピット

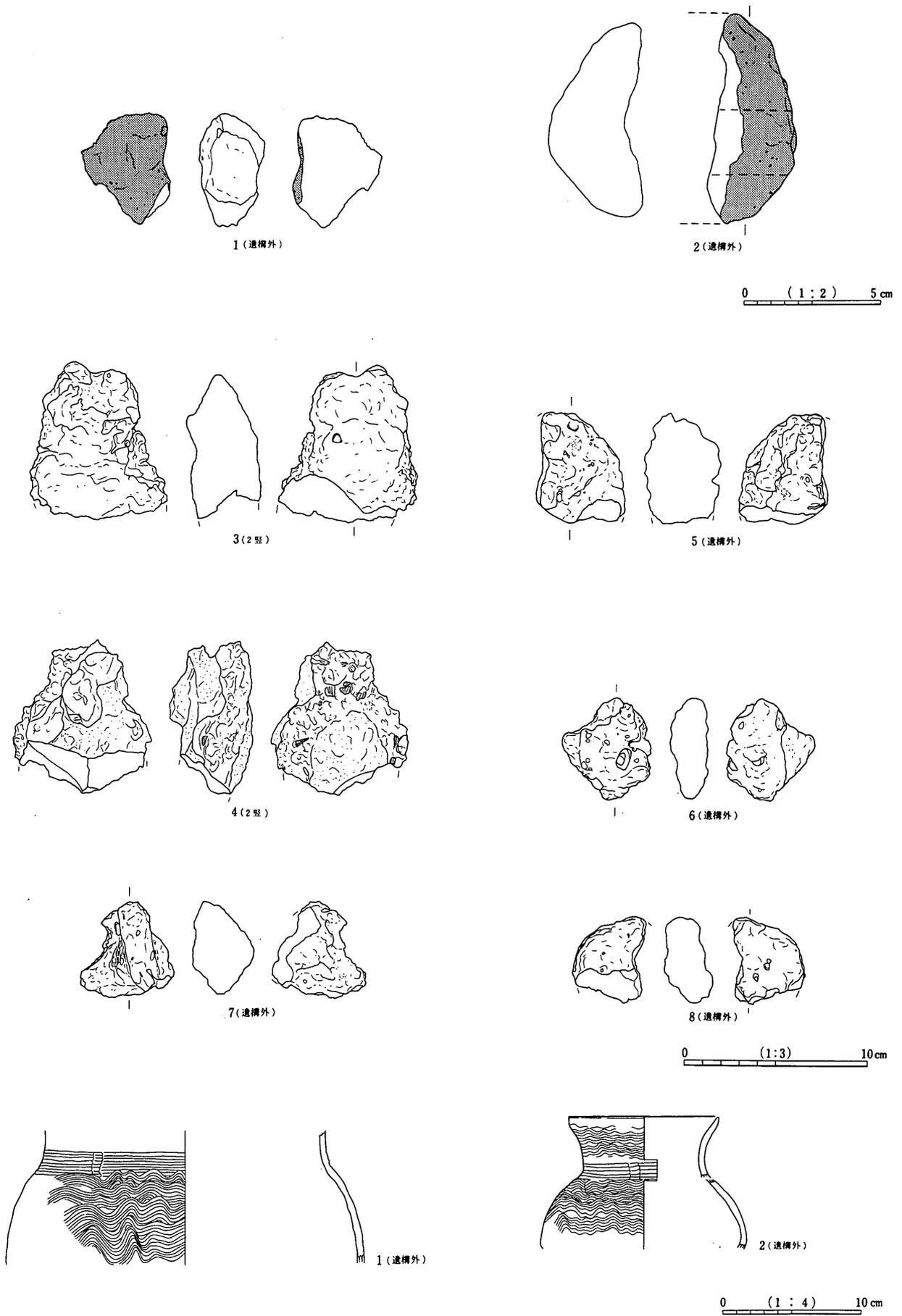


図 197 鍛冶関連遺物・遺構外出土遺物(1)

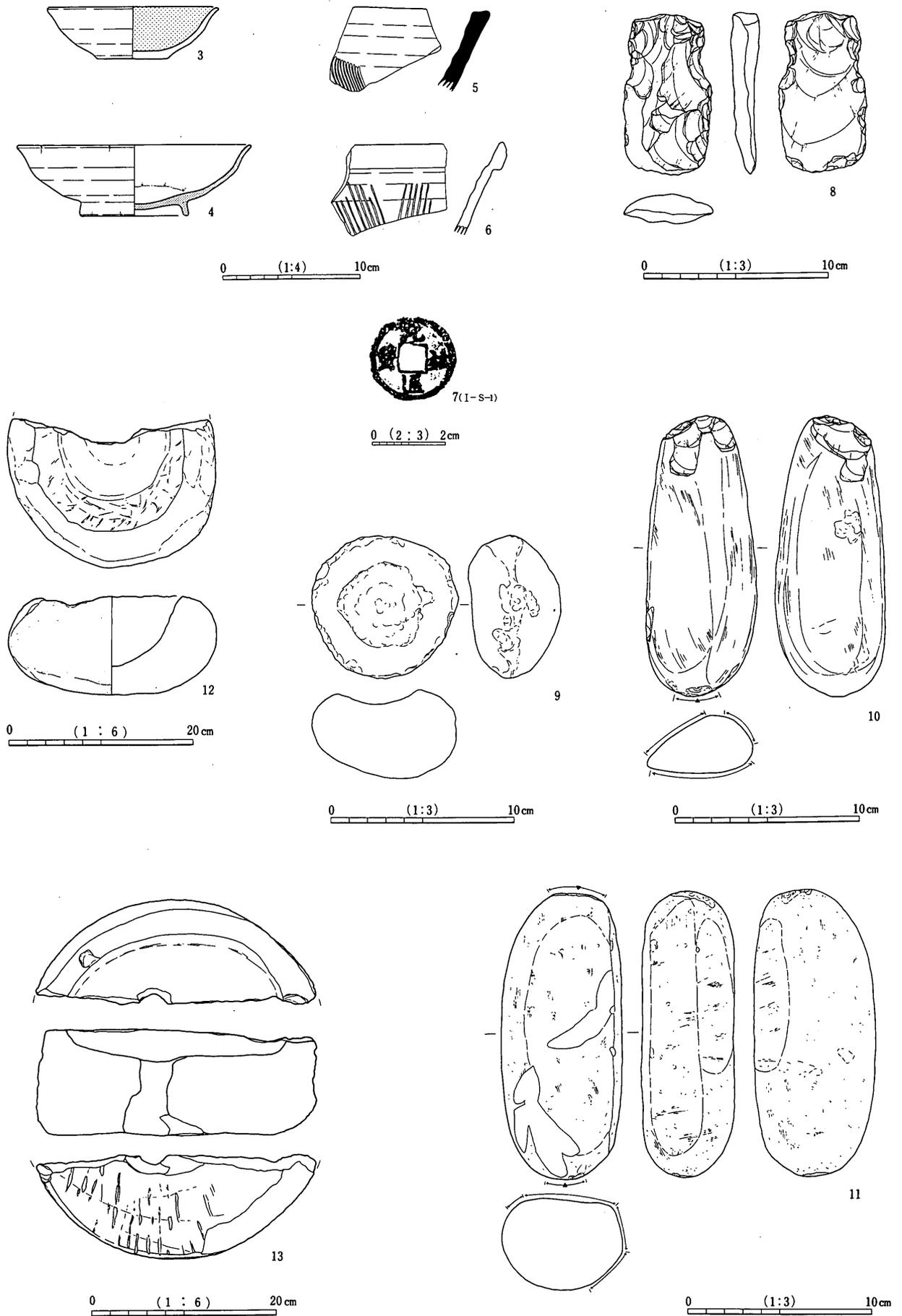


図 198 遺構外出土遺物(2)

している。磨り面は認められない。10・11は細長い柱状の礫を素材とする磨石。平坦面と側面に磨り面が、両端部に敲き痕が形成されている。12は石鉢である。内面は、上半部は成形時のままだが、下半部は使用による摩耗が進行し、そのため二段状の凹部を成している。13は石臼の上臼である。下面（すり合わせ面）に刻まれた放射状の溝が著しく摩滅している。

### 第3節 小結

今回の発掘調査は、現地踏査で確認された石積み群の性格究明を第一の目的としていた。調査の結果、それらは、全て古墳ではないことが明確になり、桑畑開墾に伴って寄せ集められた通称「やっくら」と判断するに至った。直刀出土の伝承をもつ上原塚は本調査地から500m程下った位置にある。谷川左岸における上原支群の分布域は、上原塚を中心としたより限定的なものである可能性が高いのではあるまいか。

こうして、古墳造営地でないことが判明したため、本遺跡の特徴は、平安時代における山間地の小規模集落という点に集約されるだろう。縄文時代・弥生時代・中世の遺物が僅かながら見出されることは、該期の人々の足跡がこの地に及んだことを示すが、居住・生産等の本格的な活動の場として利用されたのはやはり平安時代と考えられる。3号竪穴住居をはじめ、時期が限定できる遺構は9世紀後半から10世紀前葉に属する。この時期に山間部において小規模集落の展開が活発化することは従来から指摘されており、本遺跡の成立もそうした動きのなかで理解できるだろうが、さらに本遺跡の性格を特徴づけるものとして鍛冶関連遺物がある。断片的ながら、精練鍛冶～鍛錬鍛冶工程を示す資料と考えられ、本遺跡における鍛冶業の様相の一端を窺わせている。水田の開墾が実施されたとは考え難い立地条件の中で、鍛冶業の存在を示す資料は注意されてよい。ただし、たとえパートタイム的なものであったとしても、専門的な鍛冶集落として位置付けることもまた難しい。ここでは、山間という条件を生かした生業の一環として鍛冶業を行っていたと理解するにとどめたい。

#### 引用・参考文献

森嶋稔ほか 1981 『坂城町誌』中巻 歴史編（一）

岡村秀雄ほか 1991 「第4節 西祢ぶた遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』（勸長野県埋蔵文化財センター）

百瀬忠幸ほか 1991 「第3節 東祢ぶた遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』（勸長野県埋蔵文化財センター）

桐原健 1968 「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃』20巻4号

能登健・洞口正史・小島敦子 1985 「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37巻4号

橋口定志 1985 「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化』44

## 第8章 山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

山崎古墳群・山崎遺跡・山崎北遺跡は、大峯山山中に発して西流する御堂川左岸の扇状地に立地する。今回の調査地は、埴科郡坂城町中之条字山崎に所在し、標高は483～519 mを測る。

山崎古墳群は、坂城町遺跡分布図では、御堂川古墳群山崎支群と呼称されている。扇状地の扇端から扇中央にかけて、御堂川左岸に沿って長く分布するが、『坂城町誌』記載の「むじな塚古墳」を除いて、内容はよく判っていない。「むじな塚古墳」は、畑地造成により湮滅してしまったが、横穴式石室から武器類・馬具類・玉類・須恵器等の遺物が出土し、6世紀代の造営が推定されている（森嶋ほか1981）。

山崎遺跡は、その下流側に、山崎古墳群と遺跡範囲を一部重複して広がる。少量の縄文時代中期加曾利EⅢ式土器、磨製石斧が採集されている（森嶋ほか1981）。

山崎北遺跡は、坂城町遺跡分布図では豊饒堂遺跡と呼称され、山崎遺跡とは町道を隔てた北側に位置する。平成5年、高速道アクセス道路（通称、坂城インター線）の建設に伴う発掘調査が坂城町教育委員会によって実施され、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡、奈良時代の火葬墓、平安時代の竪穴住居跡・土坑等が調査された（小平1996）。

#### 2 調査の経過

##### (1) 山崎古墳群・山崎遺跡

山崎古墳群と山崎遺跡は、調査対象範囲が重複しており、同一工程の調査を行ったので、一括して記述する。調査は平成4年から7年にかけて、四年度にわたる調査となった。調査面積は延べ7960㎡である。

平成4年度は11月9日～12月8日に試掘調査と合わせてトレンチ調査を実施し、調査対象範囲の北部から中央部および東南部を除く部分が終了した。数点の黒曜石片と土師器・須恵器片を採集したものの、遺構・遺物包含層とも確認されなかったため、面的な調査は行わなかった。範囲内に散見される径2～4 mの石積みは、精査の結果、古墳ではなく、トレンチ調査と聞き取り調査の結果を加味して、開墾・耕作時に出た礫を積み上げたもの（通称「やっくら」）であると判断した。

平成5年度の調査は、10月12日～11月22日に実施し、北部と東南部を調査した。その結果、山寄りの東南部（南地区）で埋没した自然流路を検出した。御堂川沿いの北部（北地区）では、一部で耕作土の下に遺物包含層が堆積し、その下に平安時代の竪穴住居跡と、それを切る長方形土坑が検出された。

平成6年度は、中央部の、宅地となっていた箇所を調査したが、浅い表土層下は砂礫層となり、遺構・遺物は確認されなかった。

平成7年度は、5月19日、9月7・8日、11月7～9日に実施した。前年度調査区の北側に隣接する、最後の残件部分の調査である。坂城町誌記載の「むじな塚古墳」が存在した地点だが、古墳に関係した遺構・遺物は検出されなかった。

##### (2) 山崎北遺跡

平成4年度に、山崎古墳群・山崎遺跡に引き続いて実施した試掘調査では、遺構・遺物とも確認されなかった。しかし、東端部のごく限られた部分の試掘であり、南側に隣接する町教委の調査区において平安

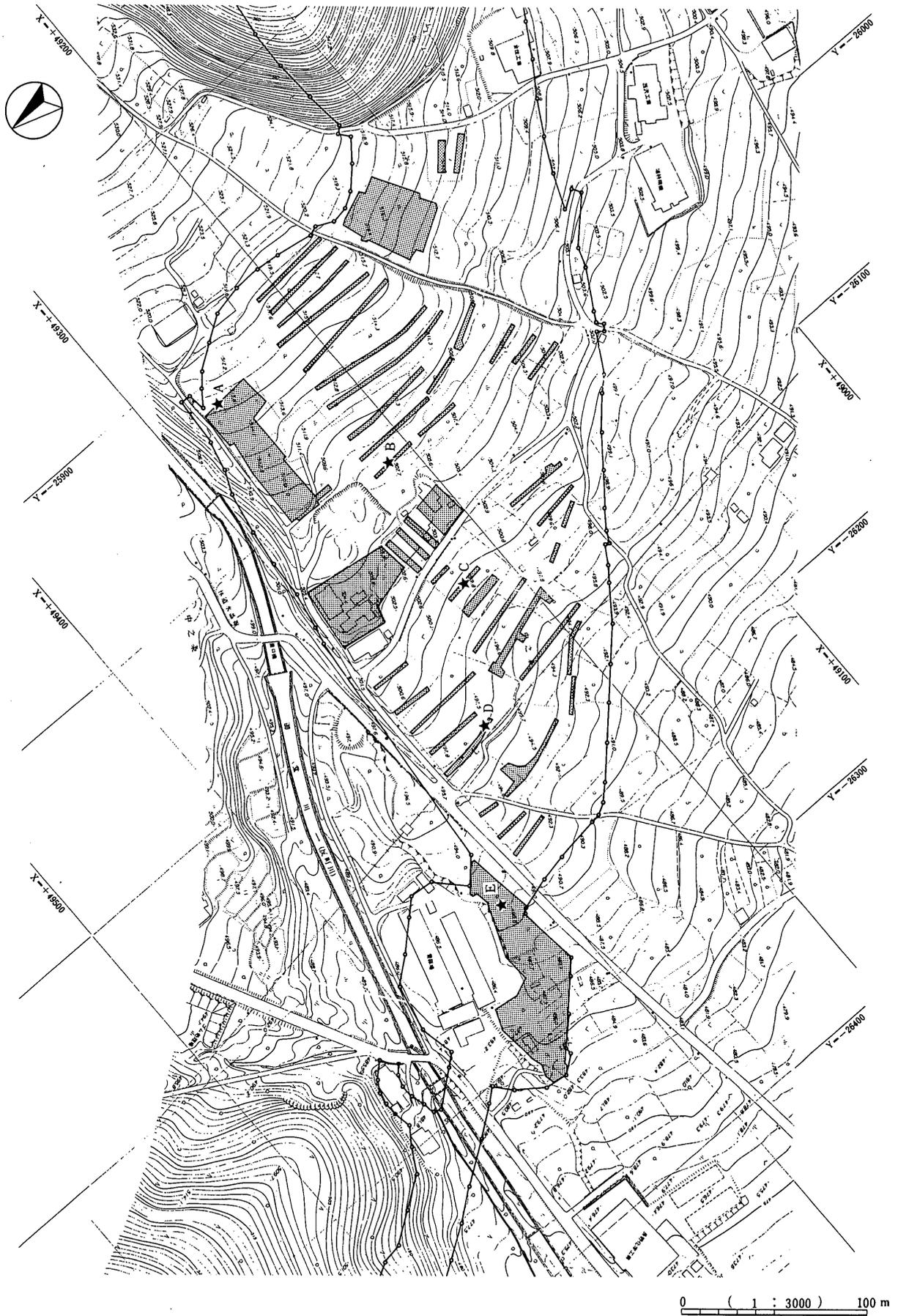


図 199 調査範囲

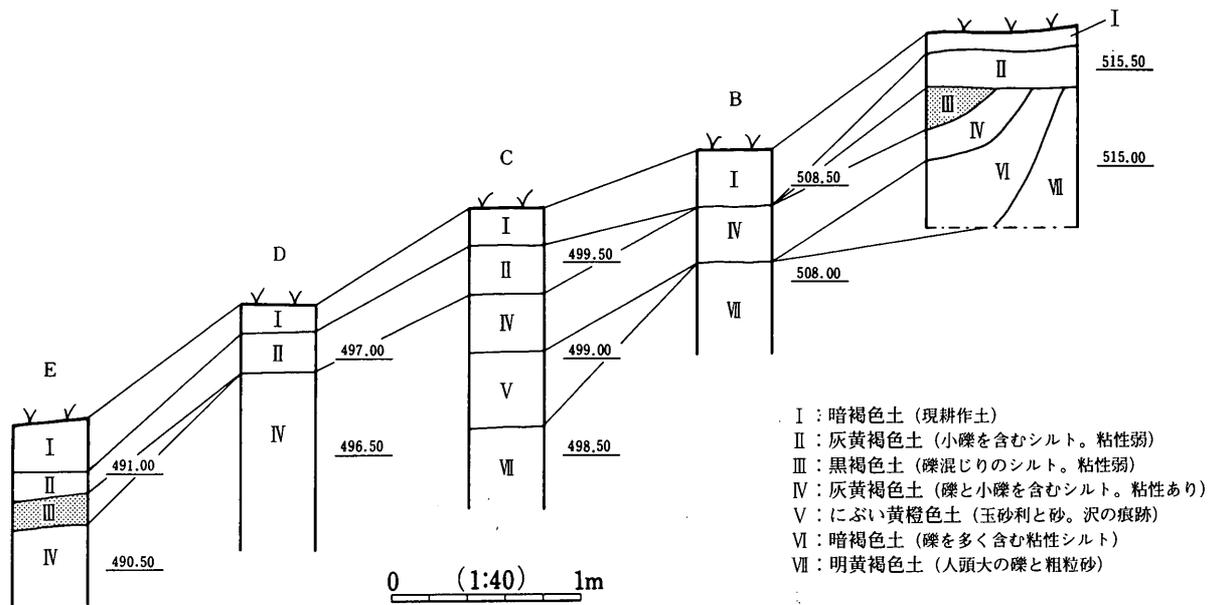


図200 基本層序

時代の竪穴住居跡等が検出された(前述)ため、同時期の遺構が展開することが予想された。

調査対象範囲のうち、御堂川寄りの北半部は、養豚場の建設により地表下数mに及ぶ大規模な削平が成されており、遺跡は消滅していると考えられたため、発掘調査は、町道側の南半部 2800㎡ について実施した。調査期間は平成5年10月12日～11月22日である。

調査の結果、周溝のみ残存する古墳1基、平安時代の竪穴住居跡・土坑群、中世の土壇墓・火葬墓群が検出された。

### 3 基本層序

3遺跡共通の基本層序を設定した(図200)。I層は現耕作土である。II層は灰黄褐色の砂質シルトで、調査範囲のほぼ全域に広がっている。III層は黒褐色の砂質シルトで、遺物包含層であるが、遺構が検出された山崎古墳群・山崎遺跡の北部(北地区)の一角、山崎北遺跡の2地点のみ確認された。IV層は灰黄褐色の砂質シルトで、遺跡全体の基盤を成す層である。遺構は本層中に黒褐色土が落ち込む状況で検出された。V層以下はところにより様相を異にするが、総体として、扇状地堆積物の砂礫層と考えてよいだろう。V層は玉砂利・砂、VI層は粘性ある暗褐色シルトで、ともに、扇状地が形成される際の網状流の流路部分を埋積する層と思われる。VII層は人頭大の礫と粗粒砂で構成される層である。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 山崎古墳群・山崎遺跡

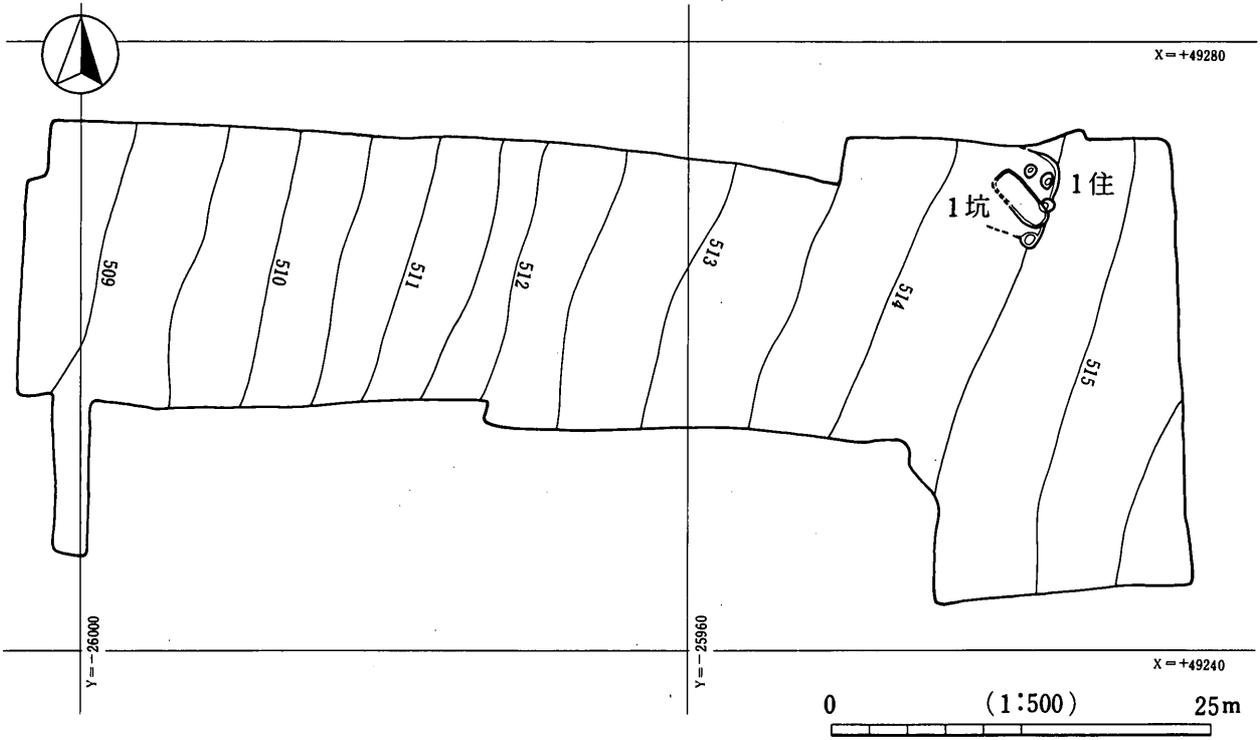
検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、炭焼き施設と考えられる長方形土坑1基であるが、その他に自然流路跡1条を調査した(図201)。

#### (1) 平安時代以降の遺構と遺物

##### 1号竪穴住居跡(図202) 位置: 北地区

検出 IV層上面で検出した。西半部は削平され、消失している。1号土坑に切られる。

北地区



南地区

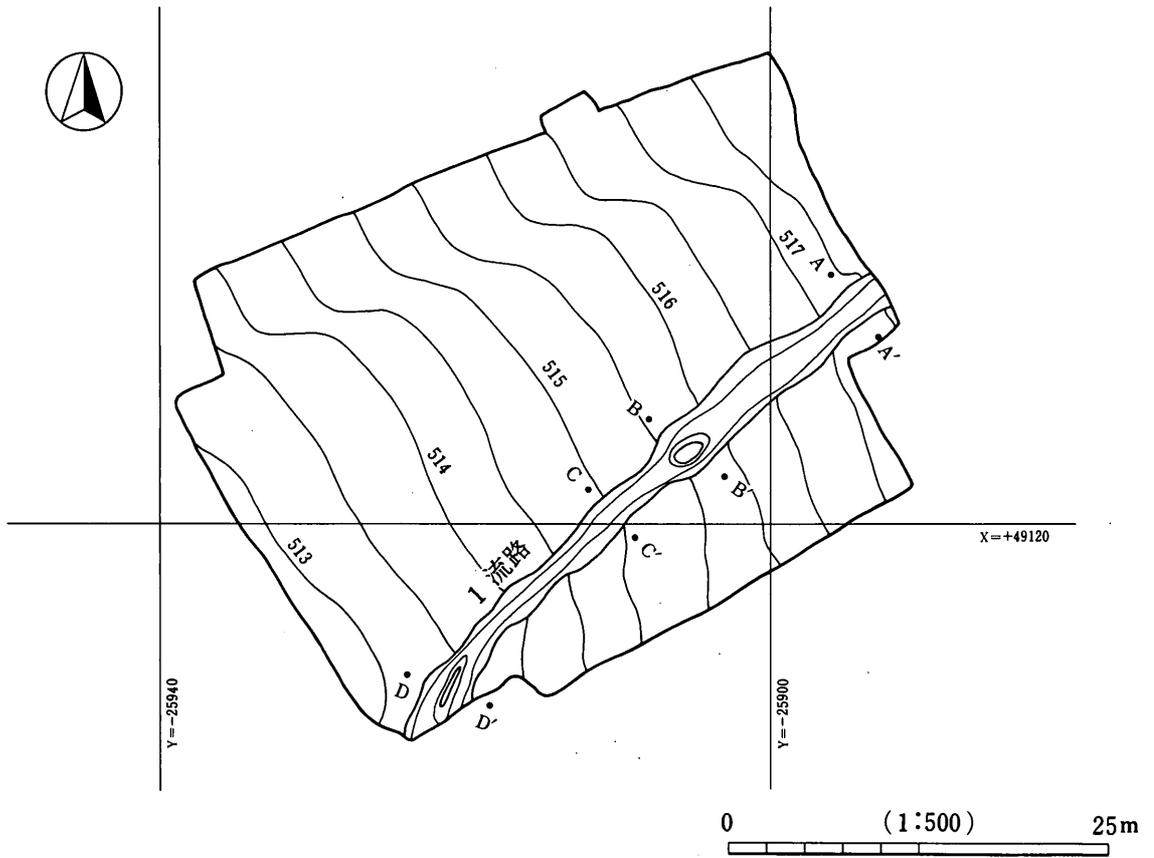


図 201 山崎古墳群・山崎遺跡 遺構全体図



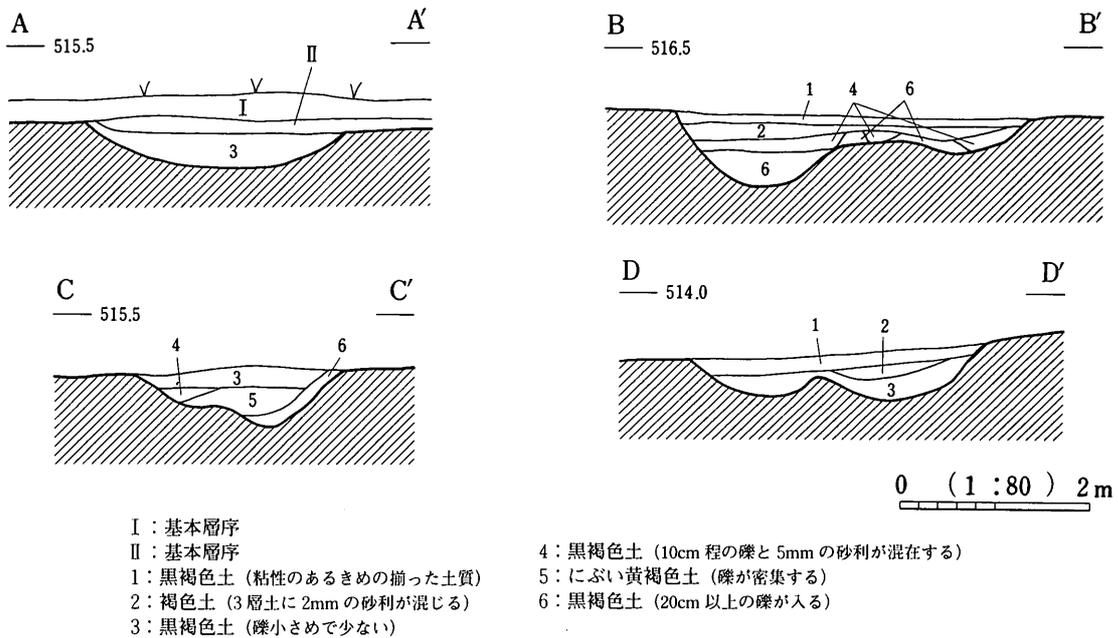


図 203 自然流路

時期 土器の様相から、9世紀後葉と考えられる。

1号土坑 (図 202) 位置 北地区

検出 IV層上面の検出となる。西部は削平されている。1号住居を切る。

構造 平面形状は4.2×1.7mの長方形を呈し、主軸はN-42°-W。底面は平坦で、中央部に直径30cm・深さ10cm程の円形の窪みがあり、その周辺は被熱して赤く酸化している。壁は底面から比較的急角度で立ち上がり、やはり赤く焼けている。覆土には炭・灰・焼土が多量に混じる。

所見 上述した特徴から、炭焼成施設としての性格を推定できよう。ただし、天井部の存在は想定し難い状況である。構築・使用時期は、9世紀後葉以降であることは確かだが、遺物を全く伴わないので、それ以上の限定は難しい。

自然流路跡 (図 203) 位置 南地区

IV層上面の検出となる。検出面での幅4~2m、深さは0.4~0.8mを測る。北東から南西に向かって直線的に流れ、発掘区端付近で南に向きを変える形勢を示している。

遺物は、石鏃および磨石 (図 204-9~11・12・18) の他、須恵器甕片・土師器細片が数点出土しているが、出土状況が明確でないため、形成・埋没時期については、特定を保留しておきたい。

(2) 遺構外出土遺物 (図 204)

土器類 (1~5)

図示した5点は北地区の遺物包含層出土である。1は高く薄い高台を付けた内面黒色堦。2は灰釉陶器堦で、断面三日月形高台・釉ハケ塗り。3は灰釉陶器皿で、にぶい三日月形高台・釉ハケ塗り。4は須恵器盤、5は須恵質播鉢である。

石鏃 (6~11)

8~10は無茎凹基、11は無茎平基だが未製品のようにも見える。6・7は基部を欠く。石材は11がチャー



图 204 · 遺構外出土遺物

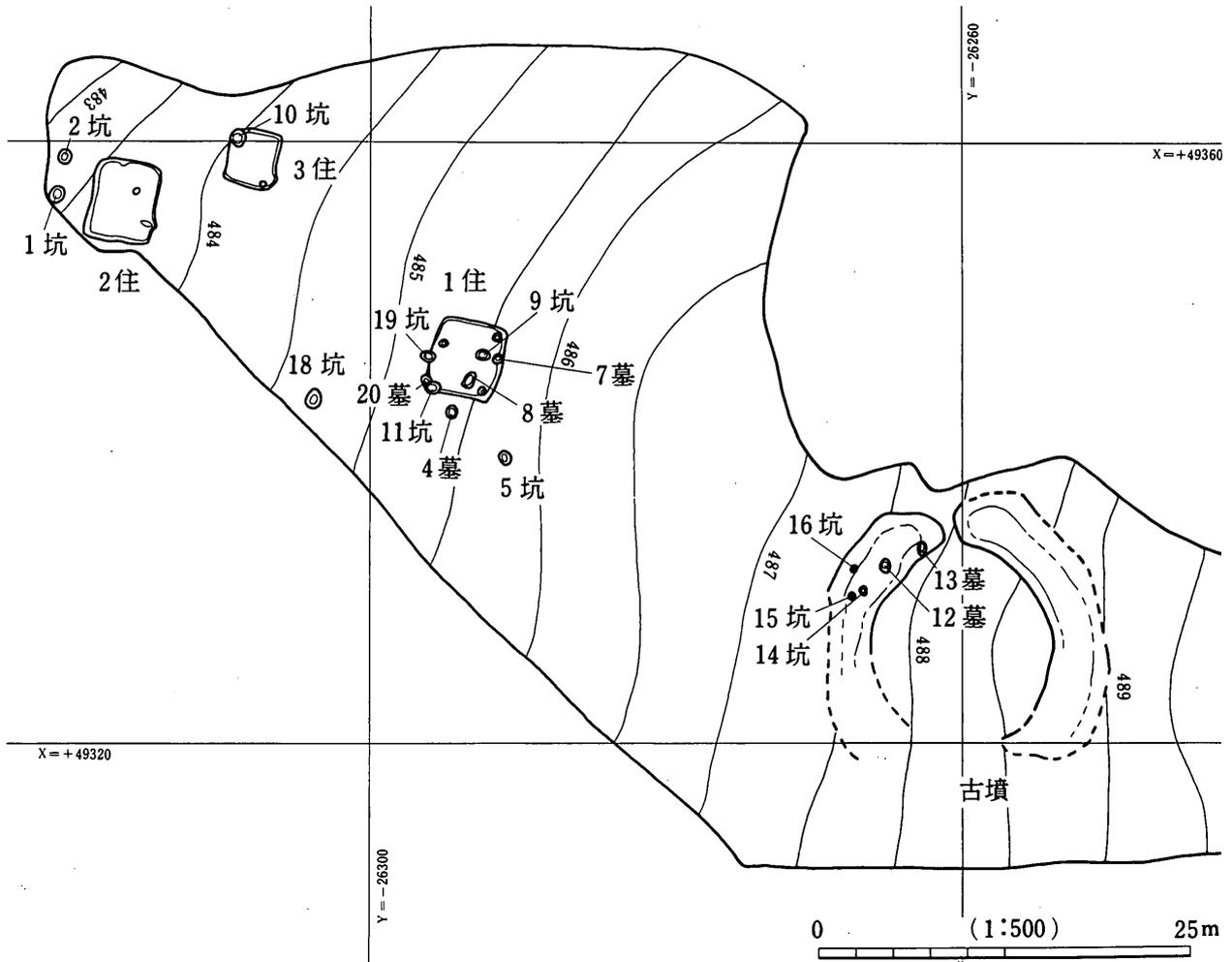


図 205 山崎北遺跡 遺構全体図

ト、他は黒曜石。6～8は北地区遺物包含層、9～11は南地区の自然流路出土である。

**磨石 (12～18)**

扁平で丸い礫を素材とするもの (16～18) と、細長い礫を素材とするもの (12～15) がある。後者は断面三角形状を呈し、欠損率が高い。13～17は北地区遺物包含層、12・18は南地区の自然流路出土である。

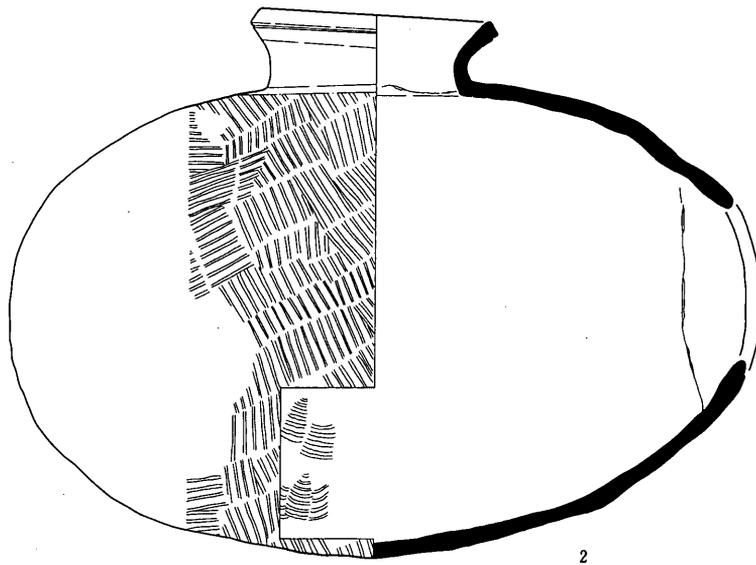
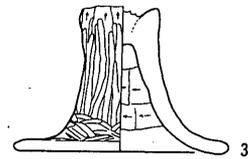
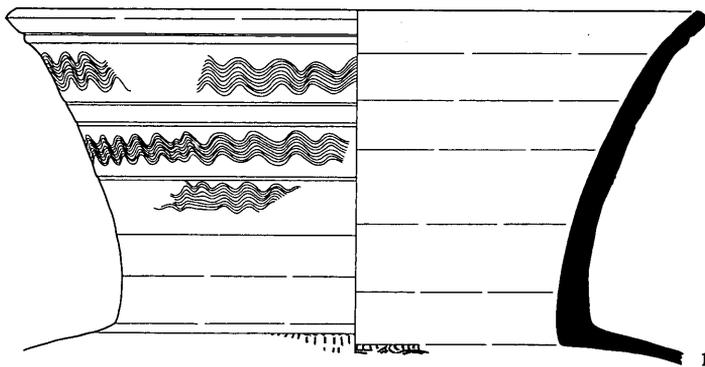
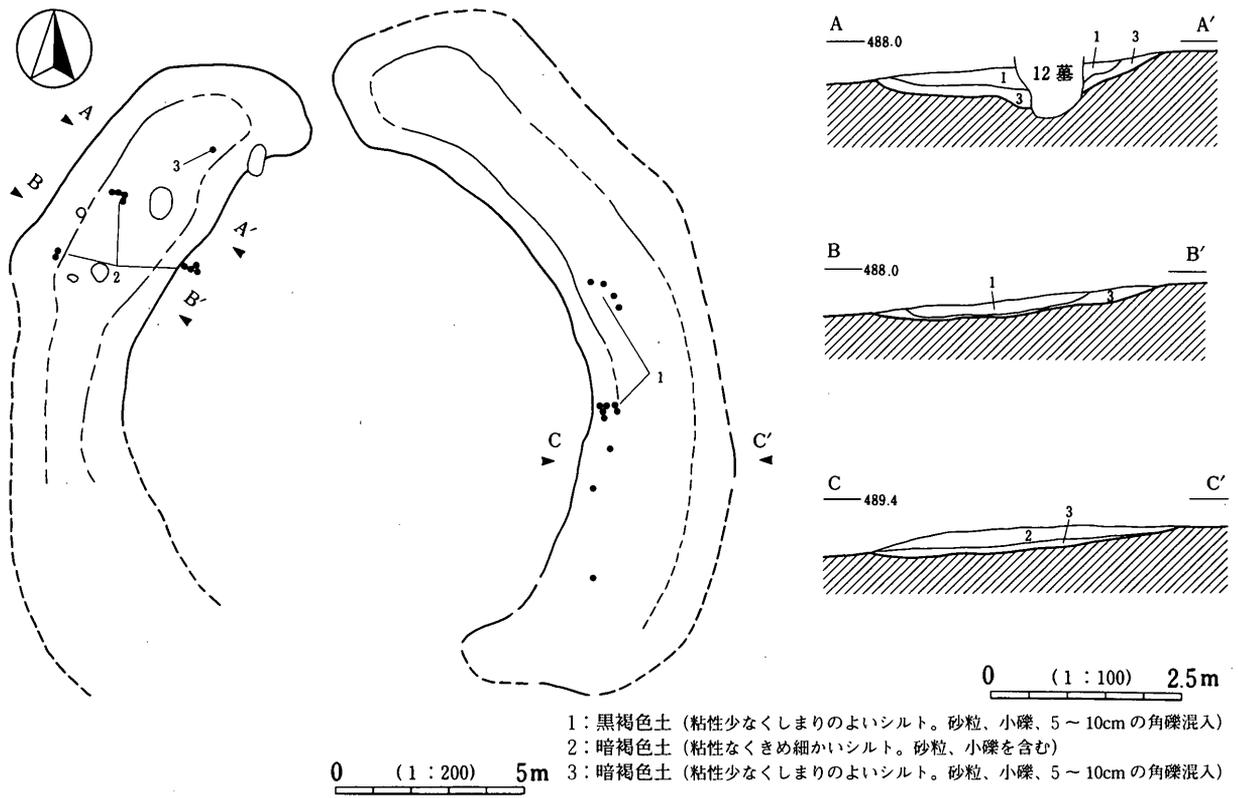
**2 山崎北遺跡**

検出した遺構は、周溝のみ残存する古墳1基、竪穴住居跡3軒、土坑11基、土壙墓および火葬墓6基である (図 205)。古墳周溝は調査区のほぼ中央、竪穴住居跡は調査区の西部に位置する。墓群は、古墳周溝に重複する位置に築かれた一群と、1号住居跡にほぼ重なる一群の、東西二群に分かれる。

**(1) 古墳時代後期の遺構と遺物**

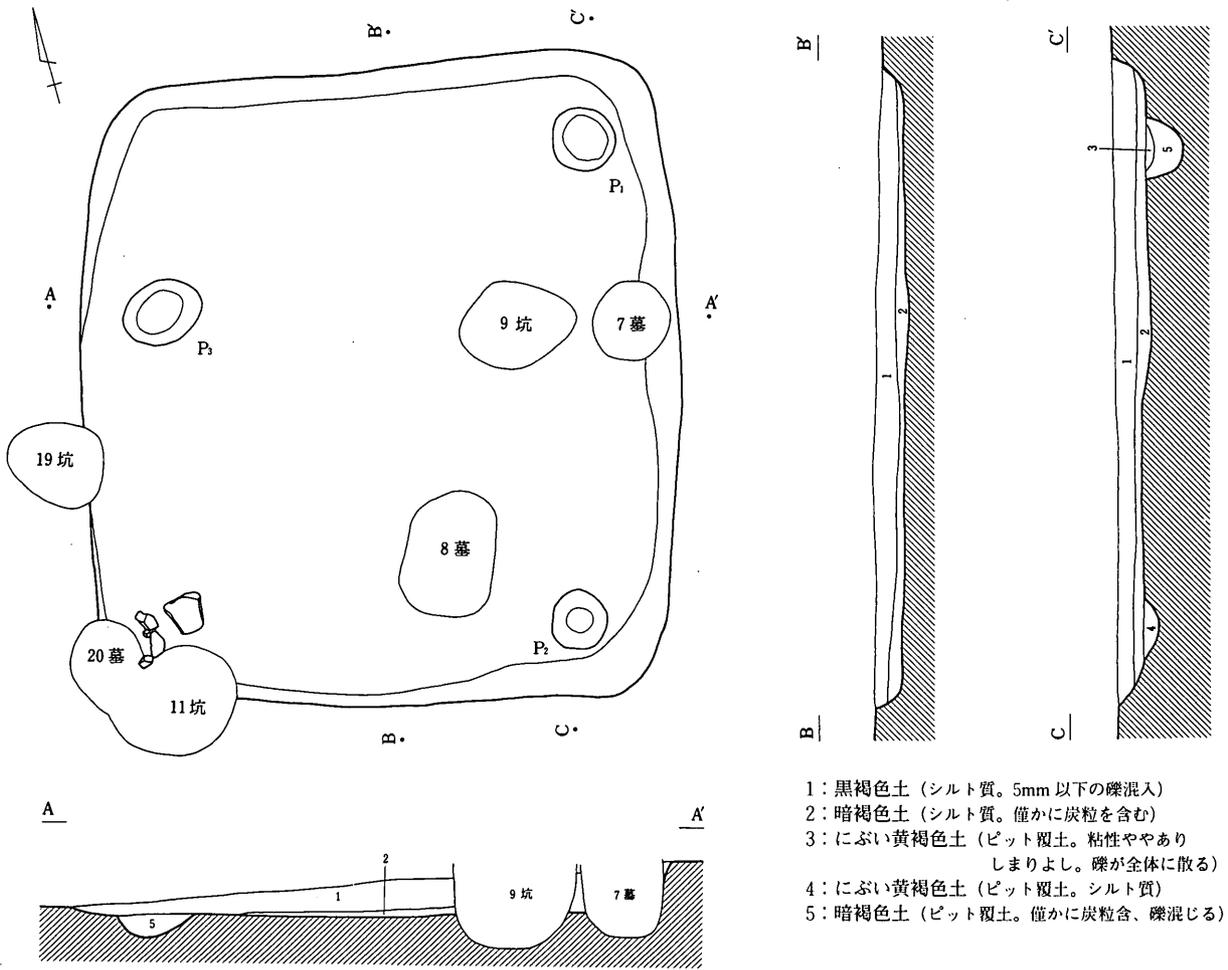
**古墳周溝 (図 206)**

IV層上面で検出した。削平が著しく墳丘は完全に失われている。周溝も総体的に残りは悪いが、幅4m前後で、内径12～13m程の円形に廻る形状が復元できる。深さは最大で0.5mを測る。現状では北端を陸橋状に掘り残しているように見えるが、造営当時、実際に陸橋部を形成していたかどうか判然としない。なお、14・15・16号土坑、12・13号墓は本遺構を切って掘り込まれている。



0 (1:4) 10cm

図206 古墳周溝



L-486.0 0 (1:60) 2m

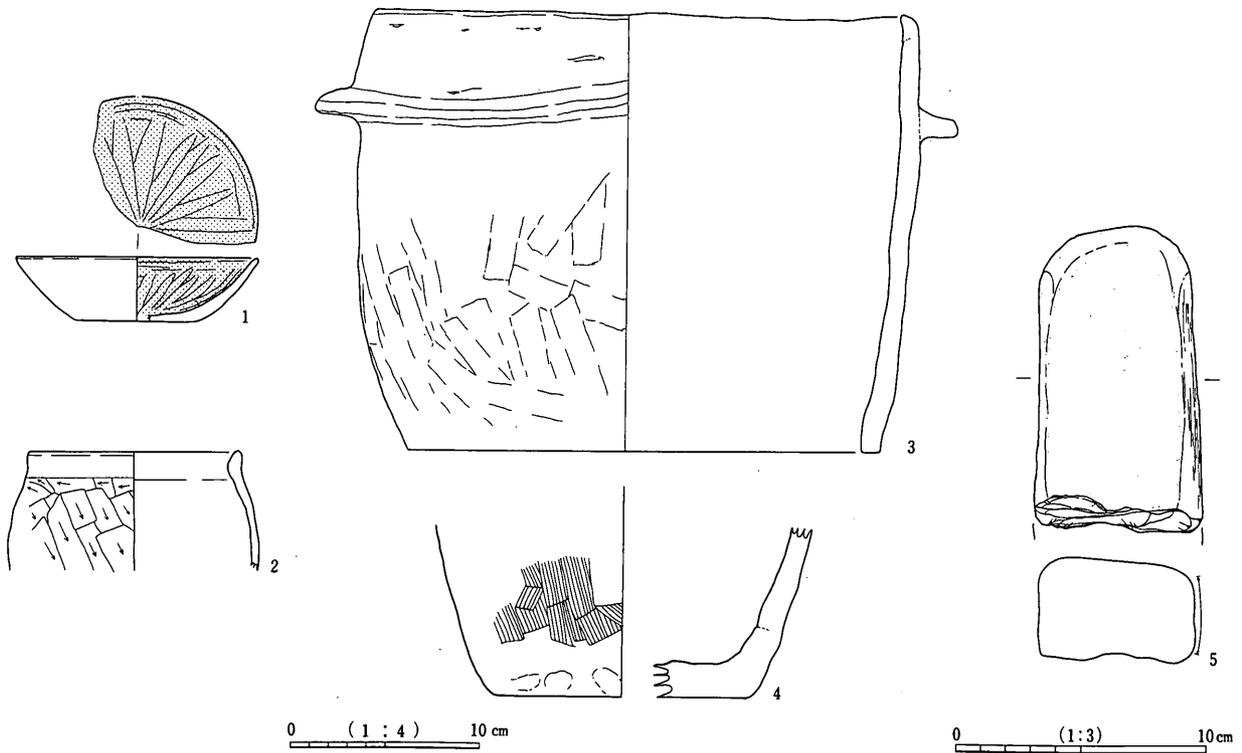


図 207 1号竖穴住居跡

遺物は、東部で須恵器大甕(1)、北西部で須恵器横瓶(2)・土師器高坏(3)が出土している。造営時期は7世紀頃と考えておきたい。

## (2) 平安時代以降の遺構と遺物

### ア 竪穴住居跡

#### 1号竪穴住居跡(図207)

**検出** IV層上面で検出した。西辺は削平を受けて、壁の立ち上がりの一部を失っている。9・11・19号土坑、7・8・20号墓に切られる。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模は4.5×4.6m。軸方向はN-76°-Wである。貼床はなく、掘り方底を整えて平坦にした床面である。ピットは3基検出された。北東隅のP1と南東隅のP2は柱穴としてよいだろう。明確なカマドは確認されなかったが、南西隅に焼礫を含む礫集中があり、その近くに若干の焼土粒が散在していたことから、カマドは南西隅付近に取り付けていたと考えておく。

**遺物** 1はロクロ整形の内面黒色坏である。内面に暗文風の太い放射状ヘラミガキを施す。2は小形甕。3は焼成後の羽釜の底部を切り取った甑、4は羽釜の底部である。5は磨石。3はP1および覆土出土、他は覆土出土である。

**時期** 10世紀代と考えておきたい。

#### 2号竪穴住居跡(図208)

**検出** IV層上面で検出した。

**構造** 平面形状は方形を呈し、床面規模は4.1×5.0m。軸方向はN-100°-Eである。貼床はなく、掘り方底を整えて平坦にした床面である。ピットは中央寄りに1基検出された。形状的には柱穴としてよいだろう。カマドは東壁の南隅寄りに付設される。袖芯材の角礫が一对、左右に立った状態で残り、火床および奥壁下部は被熱して赤く酸化している。火床上および周囲の礫は構築材の廃棄だろう。

**遺物** 1・2はロクロ整形の土師器坏である。2の体部は小形で浅く器壁は厚い。3は灰釉陶器皿で、高台は断面四角形に近く、釉は漬け掛け。4は磨石。全て覆土出土である。

**時期** 10世紀後半～11世紀初め頃と考える。

#### 3号竪穴住居跡(図209)

**検出** IV層上面で検出した。10号土坑に切られる。

**構造** 平面形状は方形を呈するが、南東隅は丸みを帯びている。床面規模3.2×3.6mを測る。軸方向はN-102°-E。貼床はなく、掘り方底を整えて平坦にした床面である。浅いピットが南壁際の南東隅寄りに1基検出された。カマドは東壁の南隅寄りに取り付け、燃烧部が住居壁を三角形に若干掘り込む。火床は僅かに窪み、焼土が溜まっていた。袖部は全く残っていない。

**遺物** 1は小形のロクロ整形内面黒色坏。体部は浅く、口縁は外反する。2は粗雑な作りの土師器甕である。3は扁平な棒状の鉄器。全て覆土出土である。

**時期** 10世紀代と考える。

### イ 土坑

土墳墓を除く土坑は11基を数える。

#### 1号土坑(図210・212)

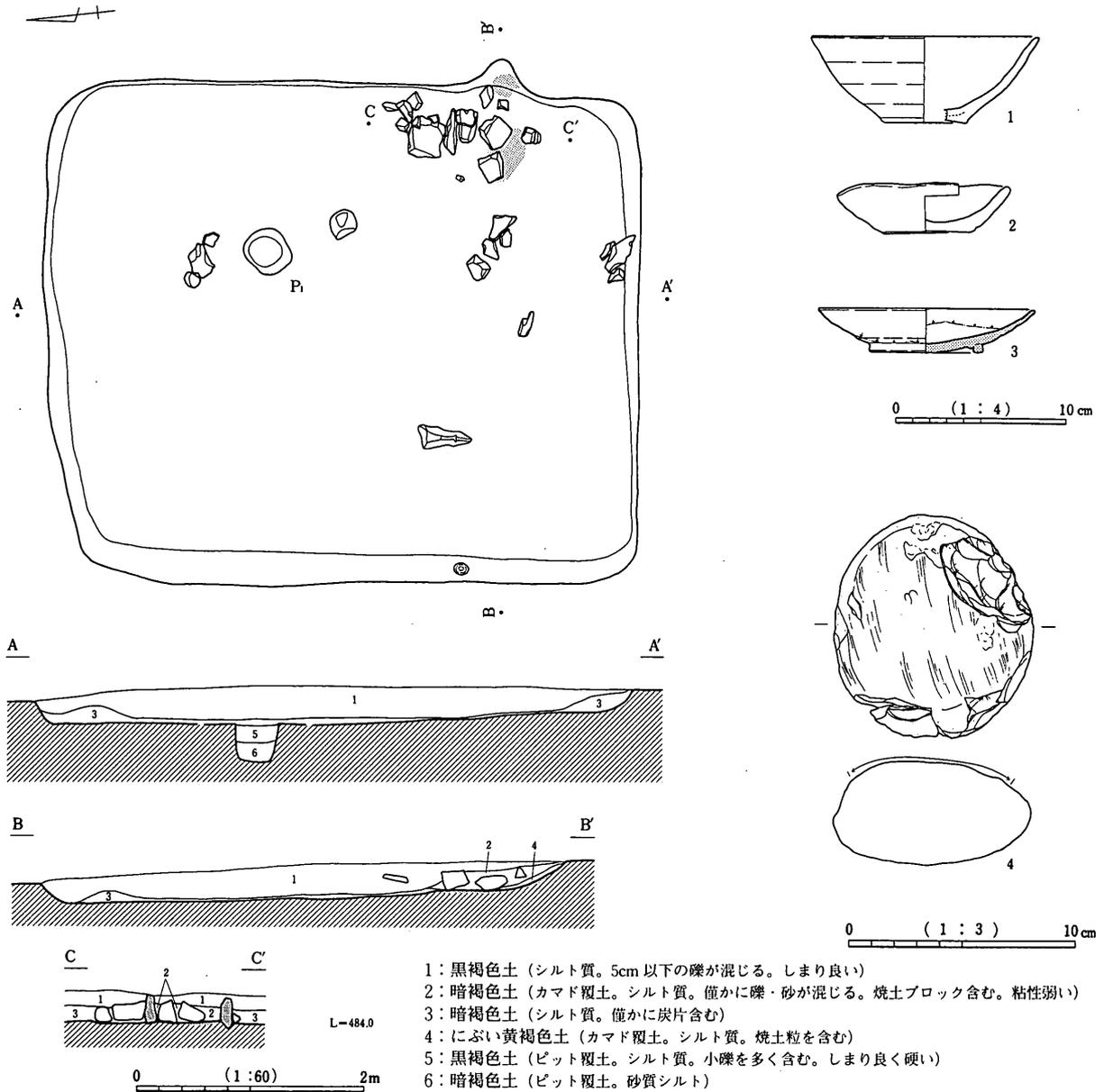


図 208 2号竪穴住居跡

IV層上面の検出。2号住居に近接した位置にある。直径110cmの円形を呈し、深さ30cm強を測る。底面は平坦である。遺物は、土師器(1~3)、鉄塊系遺物(8)、含鉄碗形鍛冶滓(9)が出土している。1は高めの高台を付けた壺、2はロクロ甕、3はロクロ小形甕である。8・9については、川鉄テクノロジーに分析を依頼し、8は精練鉄塊系遺物、9は碗形鍛錬鍛冶滓との結果を得た。土器の様相から、時期は10世紀代と考えておく。

2号土坑 (図210・212)

IV層上面の検出。2号住居および1号土坑に近接した位置にある。平面形状は100×85cmの楕円形で、深さは30cm強を測る。断面形は楕円状を呈する。遺物は少量の須恵器甕片・土師器坏片の他、鉄塊系遺物(10)が出土している。1号土坑に近い時期を考えておきたい。

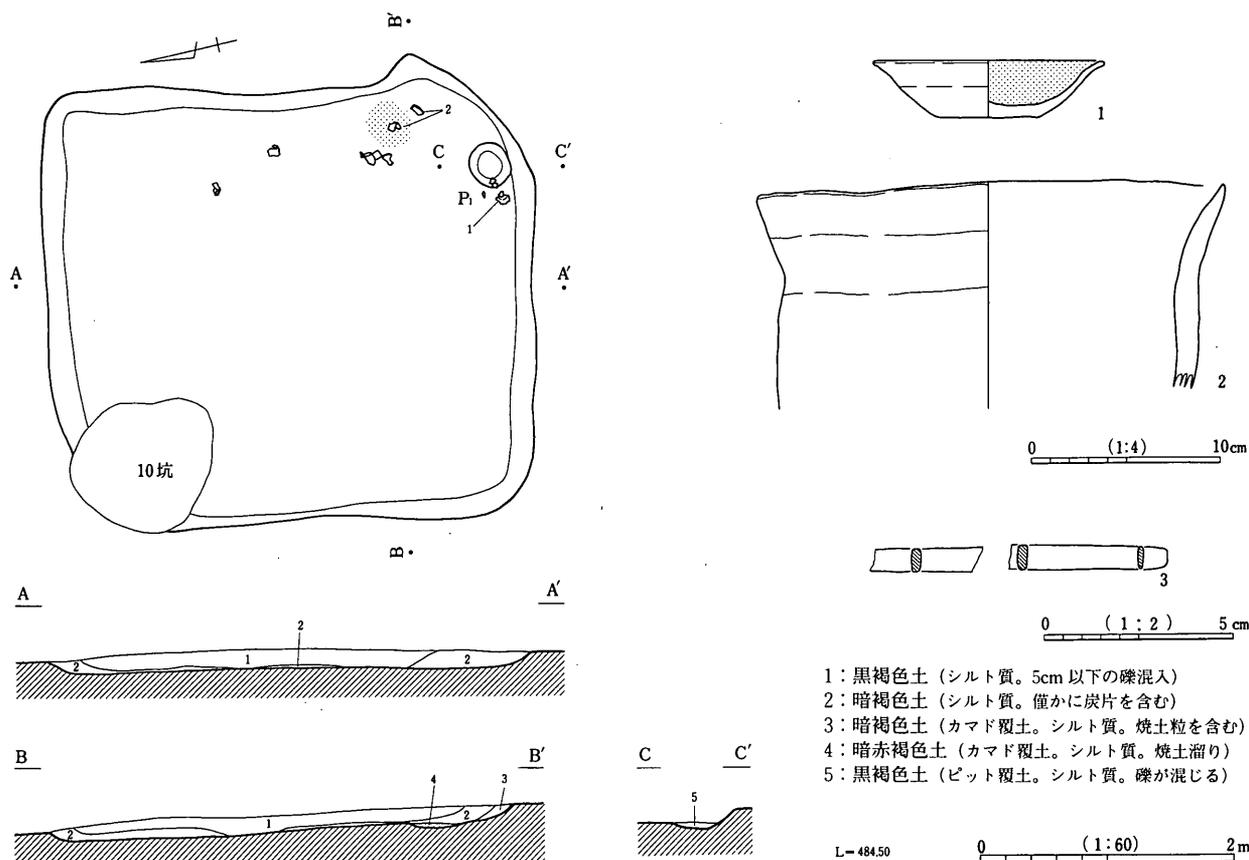


図 209 3号竪穴住居跡

### 10号土坑 (図 210)

Ⅳ層上面の検出。3号住居を切って掘り込まれている。直径120cm程の不整な円形を呈し、深さ80cmを測る。底面はやや平坦である。時期は10世紀以降といえる。

### 18号土坑 (図 210)

Ⅳ層上面の検出。平面形状は135×85cmの南北に長い楕円形を呈する。断面形はU字状を成しており、深さは45cmを測る。西壁の立ち上がりは比較的緩やかだが、東壁は急である。

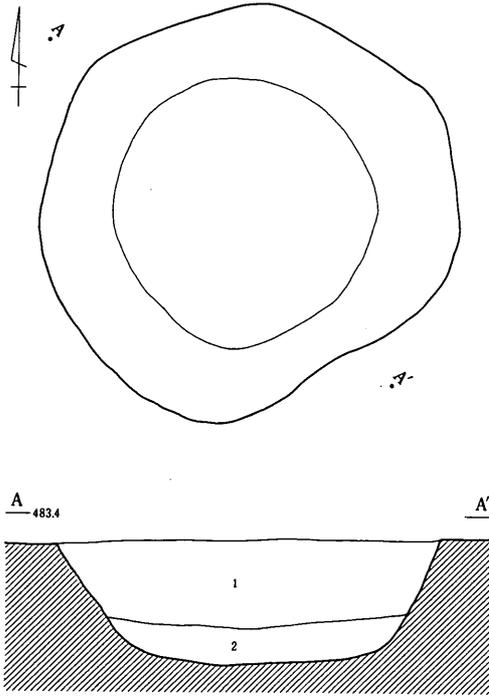
### 19号土坑 (図 211・212)

Ⅳ層上面の検出。1号住居を切って掘り込まれている。平面形状は80×70cm程度の隅丸三角形状を呈する。深さ25cmを測り、底面は平坦である。遺物はロクロ整形の土師器坏(4)が出土している。時期は10世紀以降と考える。

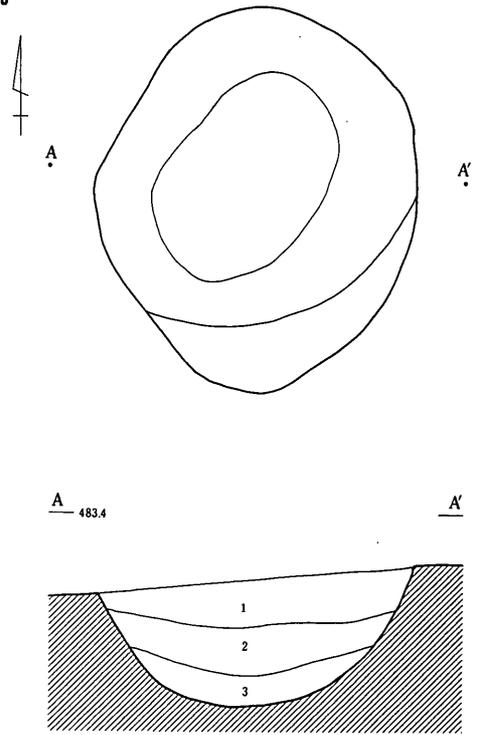
### 11号土坑 (図 211・212)

Ⅳ層上面の検出。1号住居・20号墓を切って掘り込まれている。平面形状は110×90cmの東西にやや長い楕円形を呈する。深さは40cmを測り、底面はやや平坦である。20号墓は中世に属すると理解されるため、本土坑もそれ以降の開掘ということになる。ロクロ整形内面黒色坏ないし埴(6)・坏(7)が出土しているが、1号住居跡に伴う遺物が混入した可能性が高い。

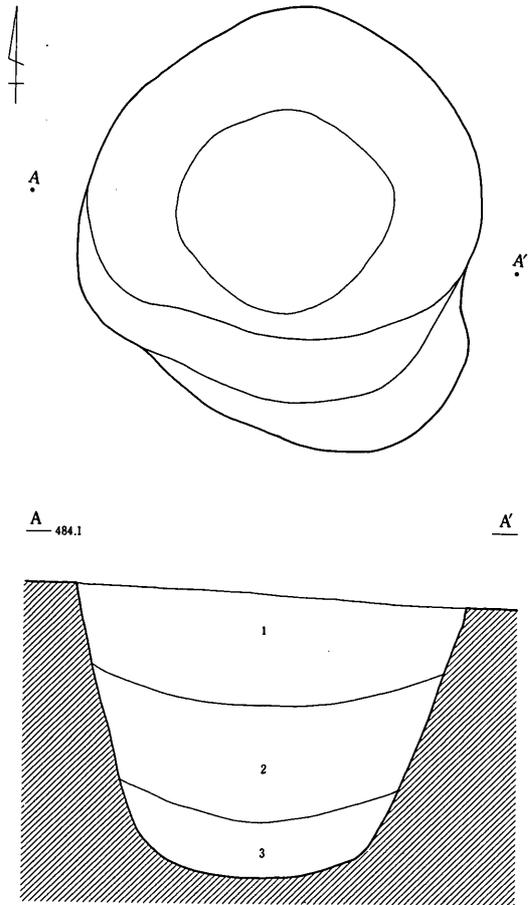
1坑



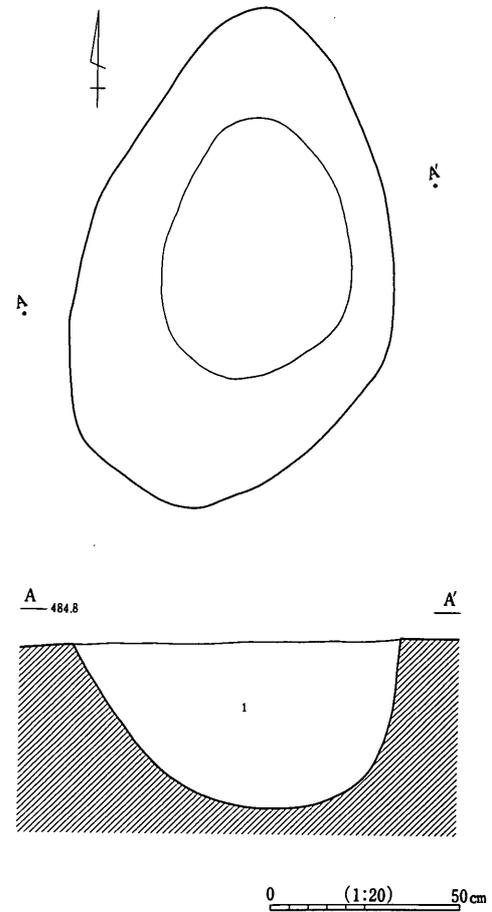
2坑



10坑



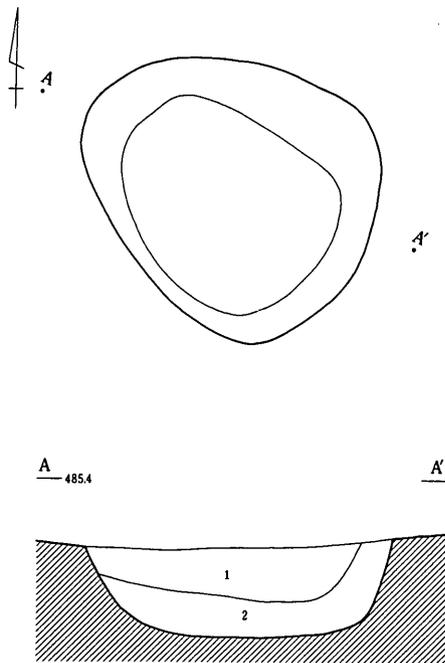
18坑



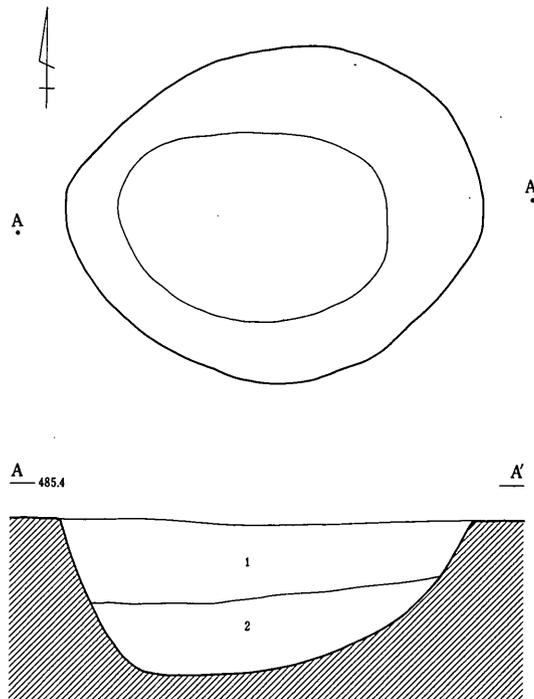
0 (1:20) 50cm

图 210 土坑 (1)

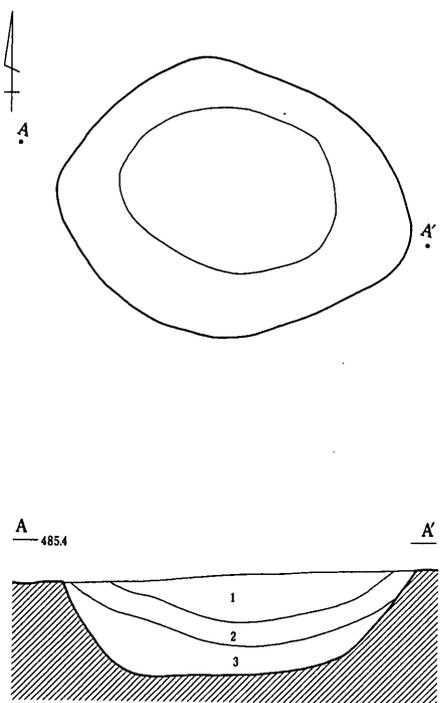
19坑



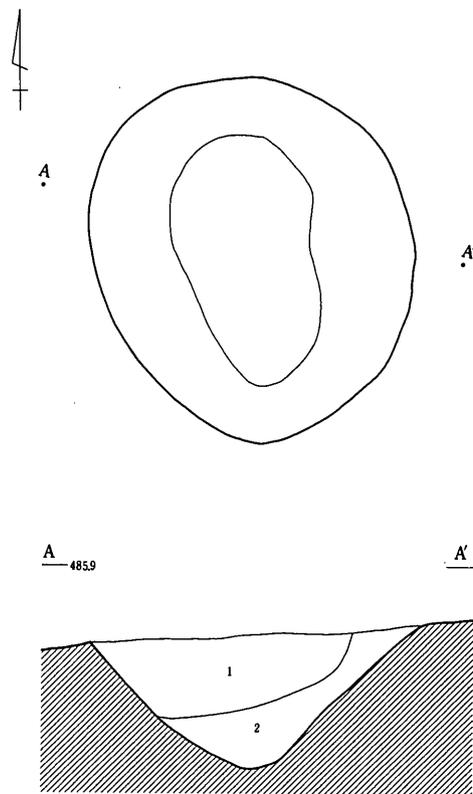
11坑



9坑



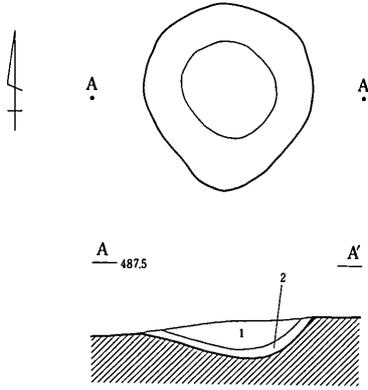
5坑



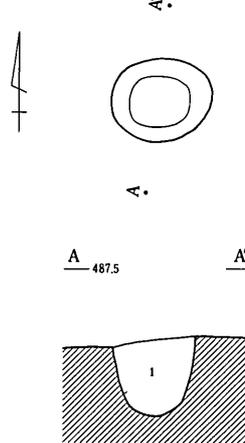
0 (1:20) 50cm

图 211 土坑 (2)

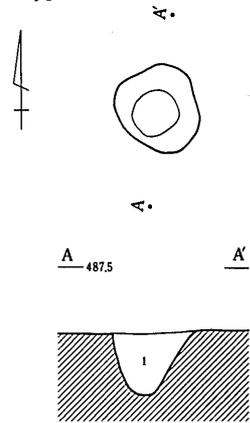
14坑



15坑



16坑



0 (1:20) 50cm

- 1坑 1: 暗褐色土 (粘性弱くしまりやや良い。15cm 程度の礫含む)  
2: にぶい黄褐色土 (1層より粘性のあるきめの揃った土)
- 2坑 1: 黒褐色土 (シルト。砂粒・2cm 程度の礫を含む)  
2: 黒褐色土 (1cm 程度の小礫多く、5cm 程度の礫も含む)
- 10坑 1: 黒褐色土 (シルト。砂・礫を含む。粘性ありしまり良い)  
2: 黒褐色土 (シルト。砂・礫を含む。粘性強。炭片混じる)  
3: 暗褐色土 (シルト。1層2層より砂・礫が多くもろい)
- 18坑 1: 暗褐色土 (シルト。砂・小礫が混じり、しまり良い)
- 19坑 1: 黒褐色土 (シルト。数cm 以下の礫、炭片が僅か混じる)  
2: 褐色土 (5cm 程度の礫が多く混じる)

- 11坑 1: 黒褐色土 (シルト。礫を含む。粘性少ないが硬くしまる)  
2: 黒褐色土 (1層より礫少なく、軟らかくもろい)

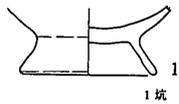
- 9坑 1: 黒褐色土 (粘性弱く、しまり良い。5cm 程度の礫が混じる)  
2: 灰黄褐色土 (やや粘性あり。礫は1層より少ない)  
3: にぶい黄褐色土 (砂質が強く、しまり悪い)

- 5坑 1: 暗褐色土 (粘性少、しまりやや良い。1cm 程の礫が混じる)  
2: 灰黄褐色土 (10cm 以上のやや丸い礫を含む。粘性・しまり強く、きめが揃った土)

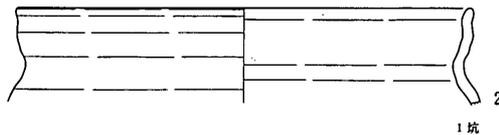
- 14坑 1: 黒褐色土 (粘性少なく、しまり良いシルト。やや黒色が強く地山の褐色土ブロックを僅かに含む)

- 15坑 1: 黒褐色土 (やや粘性あるが、もろいシルト。小礫が混じる)

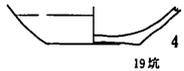
- 16坑 1: 黒褐色土 (やや粘性あるが、もろいシルト。小礫が混じる)



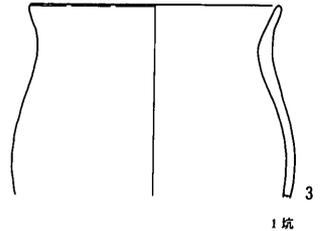
1坑



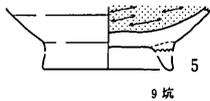
2坑



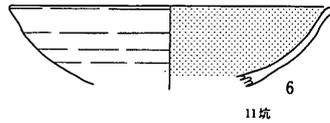
4坑



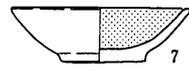
3坑



5坑



6坑

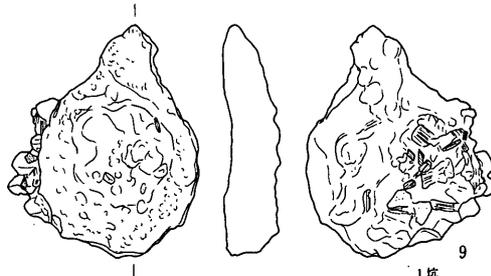


7坑

0 (1:4) 10cm



8坑



1坑



10坑



11坑

0 (1:3) 10cm

図212 土坑(3)

### 9号土坑 (図211・212)

1号住居床面の検出であるが、1号住居を切って掘り込まれたことを確認した。平面形状は95×70cmの東西にやや長い楕円形である。断面形はU字状を呈し、深さは25cmだが、1号住居覆土分を加えると50cmを測る。遺物は内面黒色埴(5)が出土している。時期は10世紀以降と考える。

### 5号土坑 (図211)

Ⅳ層上面の検出。平面形は直径90cm前後の略円形である。断面は楕円形に近く、深さは35cmを測る。

### 14号土坑 (図212)

古墳周溝底面の検出だが、これを切って掘り込まれたことを確認した。平面形状は直径45cm前後の略円形である。断面形はU字状を呈し、深さは10cmを測るが、古墳周溝覆土分を加えると30cmとなる。

### 15号土坑 (図212)

古墳周溝底面で検出した。平面形状は直径25cm前後の略円形である。断面形はU字状を呈し、深さは20cm強を測る。柱穴的な形態といえようか。

### 16号土坑 (図212)

古墳周溝底面で検出した。平面形状は直径25cm弱の略円形で、断面形はU字状を呈し、深さは20cm。柱穴的な形態といえようか。

### ウ 土壙墓・火葬墓

埋葬を伴う土坑6基を土壙墓・火葬墓として分離した。これらは単独で散在するのではなく、古墳周溝跡北西部に築かれた東群2基と、1号竪穴住居跡付近に集中する西群4基の、東西二群の墓群を構成している。埋葬形態や分布状況から考えて、群内における埋葬の時間差は少ないと思われる。宋・明銭を副葬した12号墓の存在から東群は中世後期に位置付けてよいだろう。西群についても、埋葬形態や、10世紀の住居を切ること、東群との位置関係より、中世墓群と推定する。なお、人体遺残や副葬品は認められないが、9・11・19号土坑は位置的にいて、西群に含まれる土壙墓の可能性があろうか。

出土した人骨・歯については茂原信生氏(京都大学霊長類研究所)に鑑定を依頼し、その報告を付章に掲載した。以下の各墓の記述における人骨鑑定結果は、茂原氏の報告から筆者が抜粋した。

### 20号墓 (図213・212)

**検出** Ⅳ層上面の検出。1号住居を切って掘り込まれ、11号土坑に切られる。

**構造** 平面形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は75×60cm、深さ40cmを測り、底面はやや平坦である。底面から20cm浮いた位置に40×30×13cmのやや大振りの石が入っている。埋土に完全に埋もれているので墓標とは考えられない。何らかの呪的・宗教的な意味を込めて埋置したものだろう。

**人骨の状態** 頭位を北に置く、西向きの横臥屈葬。頭蓋骨と寛骨を結ぶ線の中軸にして、椎骨・肋骨がその東側に、下肢骨が西側に位置する状態である。

**人骨鑑定結果** 「生後1年程の乳児である。性別は不明である。」

**遺物** 鉄塊系遺物1点(10)が出土している。混入であろう。

**時期** 中世と考える。

## 4号墓 (図213)

**検出** IV層上面の検出。20号墓の東南2.5mに位置する。切り合いはない。

**構造** 平面形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は90×70cm、深さ25cmを測り、底面はやや平坦である。覆土は二層に分かれ、炭を含む上層から少量の火葬骨が検出された。

**人骨鑑定結果** 「火葬骨らしいが、詳細は不明である。」

**時期** 中世と考える。

## 8号墓 (図213)

**検出** 1号住居を床面まで掘り下げた段階で人骨が露出した。1号住居の床を切って掘り込まれたことは明らかである。

**構造** 平面形状は方形気味の楕円形を呈する。長軸方向は真北からやや東に振り、N-23°-E。規模は100×75cm、深さは13cmであるが、住居覆土分を加えると35cm程になる。底面はやや平坦である。頭蓋骨の側頭部に接して、幅15cm程の三角形の平石が置いてある。枕石であろうか。

**人骨の状態** やや東に傾くが、頭位はほぼ北で、西向きの横臥屈葬と考えてよいだろう。両腕を腹部前で右手上にして交差させ、脚は股と膝を強く折り曲げた姿勢である。体幹骨・手・足骨は残っていない。

**人骨鑑定結果** 「性別は不明であるが、歯の大きさから判断すると女性の可能性が高い。大腿骨の形態から考えると成人には達していたと思われる。」

**時期** 中世と考える。

## 7号墓 (図213)

**検出** 1号住居床面の検出だが、1号住居の床・壁を切って掘り込まれたことは明らかである。

**構造** 平面形状は円形を呈する。規模は直径65cmで、深さは20cmだが、1号住居覆土分を加えると50cm程になる。底面はやや平坦である。

**人骨の状態** 歯だけが残っていた。出土は底面から10cm浮いた位置で、合計19本を数える。

**人骨鑑定結果** 「歯の大きさから考えると男性の可能性が高く、年齢は7～8歳の幼児と推測される。」

**時期** 中世と考える。

## 12号墓 (図213・214)

**検出** 古墳周溝底面の検出だが、周溝断面観察用ベルトに一部が及ぶため、これを切って掘り込まれていることが確認できた。

**構造** 平面形状は長軸方向を南北に取る楕円形を呈する。規模は80×60cm、深さは30cmであるが、周溝覆土分を加えると65cm程になる。底面はやや平坦である。

**人骨の状態** 頭位を北に置くが、体幹骨・四肢骨は殆ど形を留めておらず、埋葬姿勢は判然としない。頭蓋骨は、頭頂部が鉛直方向に上、顎が下になった状態で、顔面は南西を向いている。

**人骨鑑定結果** 「歯が非常に小さいことから女性の可能性が高い。年齢は成人には達しているがさほど高齢ではない。」

**遺物** 銅銭6枚が出土した。1は元祐通宝、2は開元通宝、3は聖宋元宝、4は天聖元宝、5は永樂通宝、6は洪武通宝である。出土状況についての記録はないが、4・5・6は、表面を同じ側に向けて重なり錯着した状態で、取り上げられている。

**時期** 永樂通宝を伴うことにより、本墓の造営時期は西暦1408年以降である。中世後期とする。

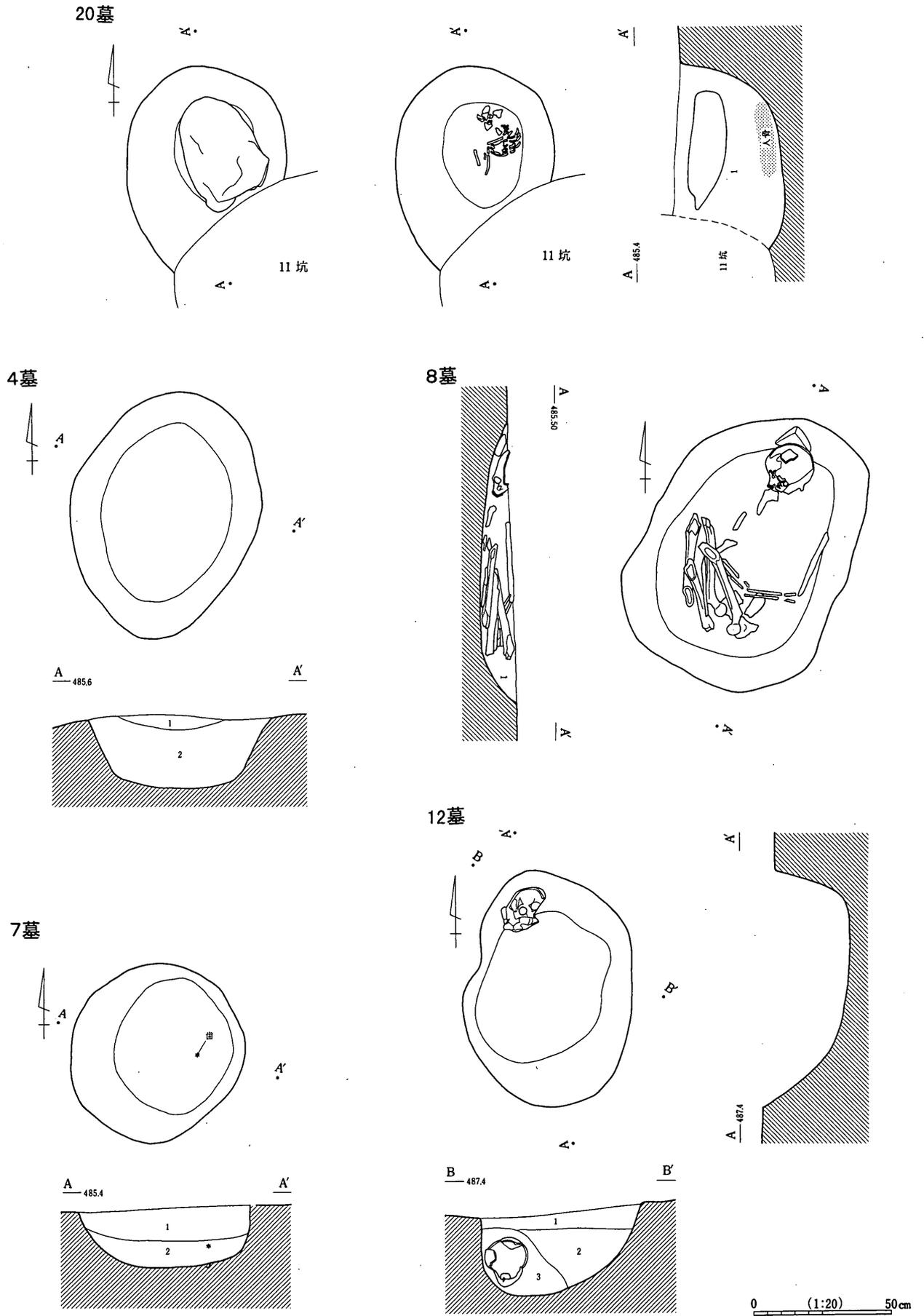
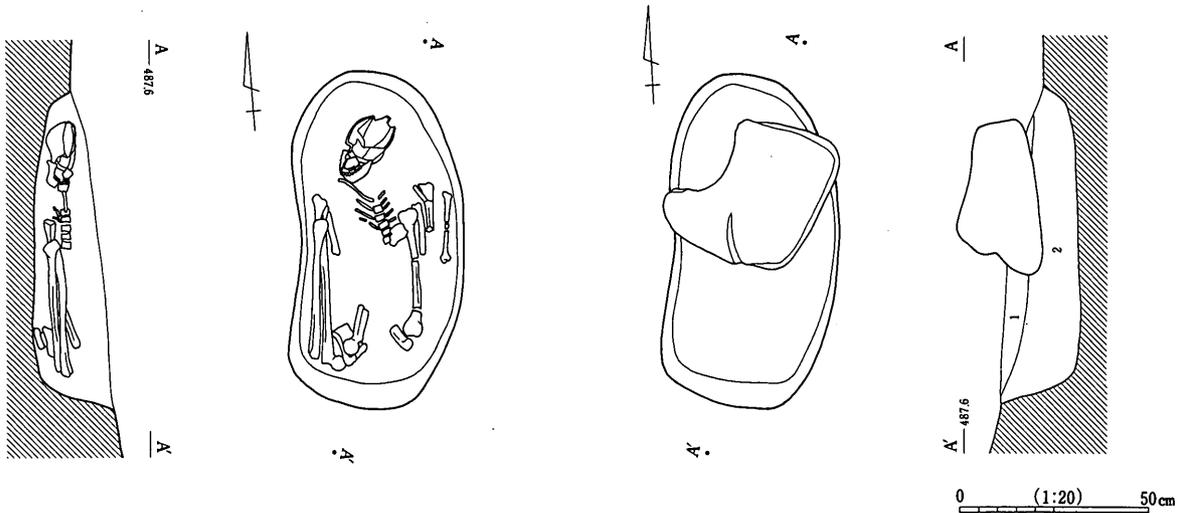


图 213 土墳墓(1)・火葬墓

13墓



20墓 1: 暗褐色土 (やや粘性あるシルト。砂・礫僅かに混じる)

4墓 1: にぶい黄褐色土 (粘性弱くしまりの良いシルト。炭粒を含む。人骨片出土)  
2: 黒褐色土 (粘性弱くしまりの良いシルト。3cm程度の角礫を含む)

8墓 1: 黒褐色土 (粘性弱くしまりの悪いシルト。1cm以下の礫と黄褐色土粒を含む)

7墓 1: 黒褐色土 (粘性弱くしまり良い。小礫が混じる)  
2: にぶい黄褐色土 (1層より砂質が強く、しまりは悪い)

12墓 1: 黒褐色土 (粘性弱くしまり良いシルト。5cm程の礫多い)  
2: 暗褐色土 (黄褐色土粒が多量に混じる)  
3: 黒褐色土 (1層とほぼ同質であるが礫を含まない)

13墓 1: 黒褐色土 (やや粘性あるしまり良いシルト。2層より礫・小礫が少ない)  
2: 黒褐色土 (やや粘性あるしまり良いシルト。礫・小礫混)

12墓



図 214 土墳墓 (2)

13号墓 (図 214)

検出 IV層上面の検出である。古墳周溝を切って掘り込まれている。

構造 平面形状は長軸方向を南北に置く方形気味の楕円形を呈する。規模は90×45cm、深さは40cmを測る。底面は平坦である。底面から20cm浮いた位置に50×50×20cmの大石が置かれている。検出段階で既に露出していたが、20号墓と同様に、呪的・宗教的な意味をもつものと考えたい。

人骨の状態 頭位を北に置く仰臥屈葬。頭蓋骨・椎骨が中軸上に位置し、四肢骨はその両側にそれぞれ左右に分かれた状態である。頭蓋骨は顔面を西に向けている。

人骨鑑定結果 「女性である可能性が高い。年齢は18歳前後であろう。」

時期 中世後期と考える。

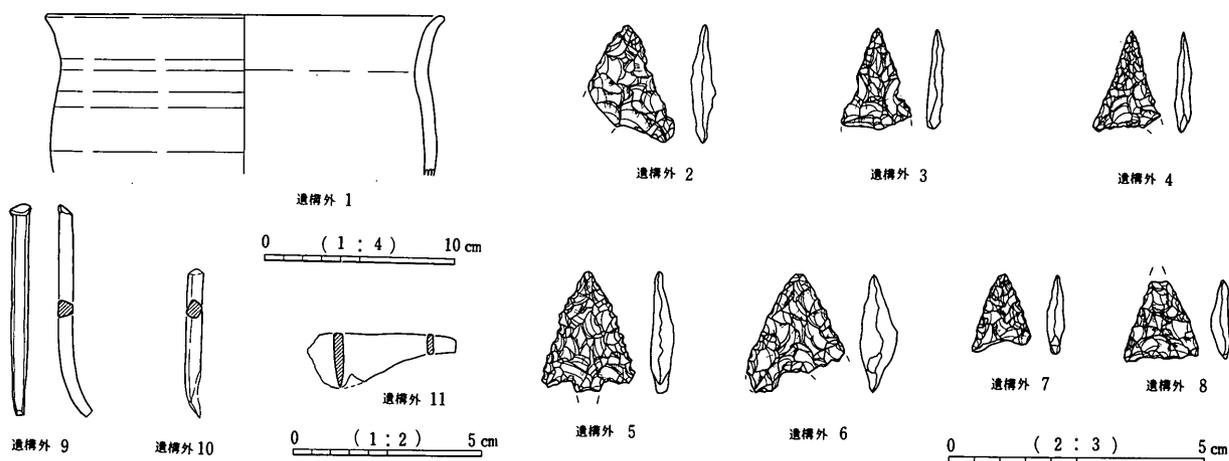


図 215 遺構外出土遺物

(3) 遺構外出土遺物 (図 215)

11点を図示した。1はロクロ調整の甕である。2～8は石鏃で、2・4・6は無茎凹基鏃、8は無茎平基鏃、5は有茎凹基鏃、3・7は基部を欠く。3は両側辺に抉りが入っている。石材は4・8がチャートで、他は黒曜石。9・10は釘、11は刀子の茎である。

### 第3節 小結

今回の調査で把握された主な遺跡内容は、3遺跡を合わせて、古墳時代後期～終末期の古墳1基、10世紀を中心とする平安時代の小集落、中世の土壌墓群である。これらは御堂川沿いの地区に営まれ、扇状地の中央部には及んでいない。

御堂川古墳群山崎支群(山崎古墳群)に属する「むじな塚」は、聞き取り調査により、調査地内(釜口橋の南南西50mの位置)に確かに存在したことを再確認したものの、坂城町誌記載の通り、完全に消滅していた。また、調査地内に散在していた石積みは全て「やっくら」であることが判った。一方、山崎北遺跡調査区で検出した古墳は山崎支群を構成する1基と理解してよいだろう。山崎支群の古墳数・分布状況を詳しく把握することは現状では困難だが、対岸の前山支群に対置するように、御堂川の左岸に連なって分布していたと思われる。

平安時代の遺構は、山崎古墳群・山崎遺跡では9世紀後葉の竪穴住居(以下A地点)、山崎北遺跡では10世紀～11世紀初め頃の竪穴住居・土坑群(以下B地点)が検出された。B地点では、3軒の住居が近接して営まれているものの、大規模な集落とは考え難い状況である。また、A地点とB地点は370m程離れており、その間、該期の遺構の分布はみられない。町教委による坂城インター線の調査では、東から豊饒堂・寺浦・上町・東町の各遺跡が調査され、7世紀後半から9世紀前半までの集落は、寺浦・上町遺跡周辺に展開し、豊饒堂遺跡には及ばないことが明らかになった(小平1996)。9世紀後半以降、A・B両地点を含め、豊饒堂遺跡以東への集落展開が本格化するが、何れも小規模で散在的な在り方を示し、大規模な集落を形成することなく、11世紀には居住活動は終息するようである。

こうした集落の存立基盤ないし生業は如何なるものだったろうか。扇状地の扇中央部は水田耕作に適した環境ではなく、調査地周辺は現在も畑地・果樹園となっている。農業生産としては、やはり畑作が主体で

あったと理解するのが妥当であろう。ところで、鍛冶関連遺物の出土は、集落で行われていた生業の一端を窺わせる。ただし、A・B両地点とも出土量はごく少なく、鍛冶施設も確認されなかったため、恒常的かつ継続的な操業を想定することは難しい。A地点で検出された炭焼成土坑は、年代的に降る可能性を残すが、鍛冶に関連する遺構として注目される。

中世の遺構は、山崎北遺跡において、二群6基から成る土壙墓・火葬墓群が確認された。人骨の遺存状態は良いとはいえないが、土壙墓の埋葬姿勢は、西群には北枕西向き横臥屈葬が、東群には顔面西向きの北枕仰臥屈葬が認められる。また、12号墓には銅銭六枚が副葬されていた。仏教思想に結び付いた埋葬形態といえよう。本墓群の所在地は字横辻であるが、その西隣は字「阿弥陀堂」であって(小平1996)、注意を引く。被葬者の性別・年齢構成は、土壙墓5基のすべてが女性および乳・幼児と考えられ、成人男性を含んでいない。火葬墓については不明である。被葬者そして造墓活動の主体となった人々の居住地ないし集落は今回の調査地には存在しなかった。西方に約1km離れた位置に展開する寺浦遺跡で中世に属する掘立柱建物・竪穴状遺構がみつかり、また、地名の検討からも中世集落の存在した可能性が指摘されているので(小平1996)、現在のところ、その辺りを想定しておきたい。

引用・参考文献 森嶋稔ほか1981『坂城町誌』中巻 歴史編(一)

小平光一1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』坂城町教育委員会

## 第9章 東平古墳群

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の位置

東平古墳群は、坂城町の千曲川右岸地域、大道山西麓末端の山脚部に立地する古墳時代中期の古墳群である。坂城町の千曲川右岸地域では、太郎山～大道山～鏡台山の各山系が南北に連なって坂城川東山脈を形成し、西方の千曲川の氾濫原に向かって幾筋かの支脈を派生させている。支脈の間には谷川・御堂川・名沢川といった河川が流れ、それぞれの谷口を頂点とした山麓扇状地が発達している。東平古墳群は、大道山から西に伸びる支脈末端が名沢川扇状地に没する山脚部に位置し、緩い尾根状地形を成す緩傾斜地点を選地している。ただし、古墳群のすぐ西側には砥沢川が深い谷を刻み、これによって、古墳群の立地する山脚と扇状地面は切り離された形となっている（図216）。

古墳群の構成は、相接して東西に並ぶ2号墳（方墳）と1号墳（円墳）、それから北東に約140 m離れた砥沢古墳（円墳）の3基から成るが、ここで報告する1号・2号墳は仮称であって、周知の御堂川古墳群東平支群1号墳・2号墳とは異なるものである点、注意を要する。1号墳・2号墳は坂城町中之条字開畝2381に所在し、標高480 m前後である。砥沢古墳は同2385に所在し、標高は499 mを測る。

現在のところ、坂城町内においては、上記3古墳を除き、中期以前の古墳は確認されていないが、6世紀後半になると、各地で横穴式石室をもつ円墳の築造が開始される。千曲川右岸地域における古墳分布は、千曲川に流れ込む河川の水系を単位として、南から谷川流域・御堂川流域・入田川流域・日名沢川流域の4地域に分けて捉えることができる。谷川流域には4支群から成る谷川古墳群が形成されている。入田川流域と日名沢川流域では古墳数は少なく散在的な分布を示す。御堂川流域は坂城町内で最も古墳が集中する地域で、山崎・山口・前山・山田・東平の5支群から成る御堂川古墳群が形成されている。このうち、前山1号墳は1973・1974年に発掘調査が行われ、両袖の横穴式石室から馬具の帯金具・飾り金具・鉄鏃・耳環・土師器・須恵器等の副葬品が検出された他、墳丘構造も明らかになっている。また、山崎支群に属するむじな塚古墳は、湮滅してしまったが、横穴式石室から馬具・直刀・耳環・玉類といった遺物が出土した（森嶋ほか1981）。2基とも6世紀末葉頃の築造年代が考えられる古墳である。

これらの古墳・古墳群を築造した集団の居住地は、扇状地の末端付近あるいは千曲川の自然堤防上に展開していたことが推定される。古墳時代の集落遺跡については、最近相次いで実施された発掘調査により、その様相が明らかになりつつある。坂城町南端部の自然堤防上に立地する南条遺跡群の東裏遺跡で中期後葉～後期後半の集落が捉えられ、隣接する青木下遺跡では後期に属する多くの祭祀遺構が検出されている（助川・森嶋1994、助川1997）。御堂川扇状地の扇端付近に広がる中之条遺跡群でも、宮上遺跡・寺浦遺跡等で後期の集落が調査された（助川1993・1996）。ただし、古墳群とその造営主体である集落の関係を具体的に論じ得る状況には未だ至っていない。

#### 2 試掘調査

『坂城町誌』中巻（森嶋穂ほか1981）によると、御堂川古墳群東平支群は現状で4基を数えるという。また、坂城町遺跡分布図には砥沢古墳が記載されている。当初、試掘調査は、東平支群の分布範囲に対して実施する予定であったが、事前の現地踏査で、砥沢古墳が高速道用地内に掛かることを確認した。さらに、砥沢古墳の南西にも新たに2基の古墳状隆起が存在することが分かり、東平支群の範囲とともにこの2基に



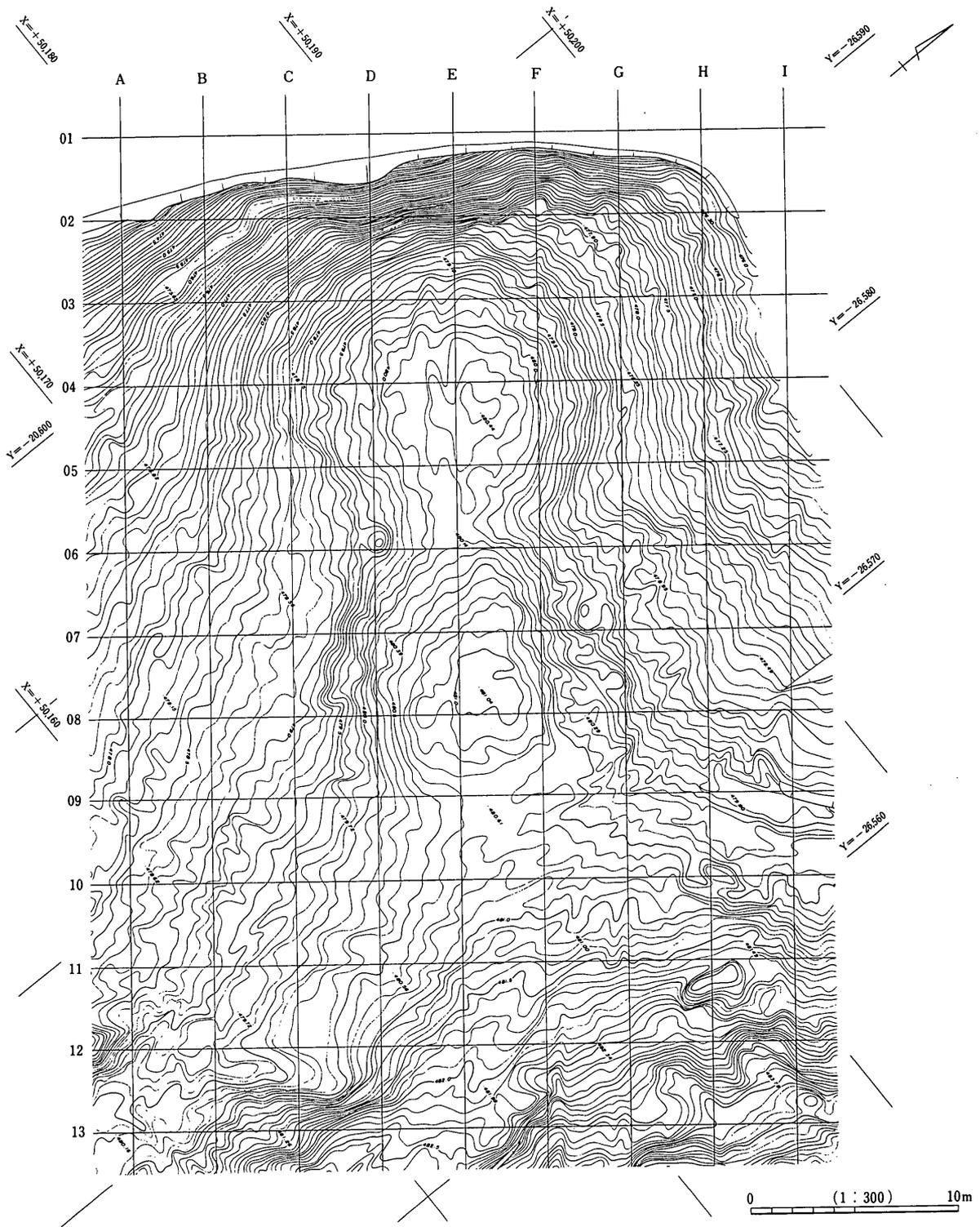


図217 1・2号墳 調査前地形

についても試掘調査が必要になった。

試掘調査は平成4年11月9日～25日に実施した。本来の東平支群の調査範囲では計11本のトレンチ調査を行ったが、遺構や遺物包含層は確認されなかった。2基の古墳状隆起については、下草・小木伐採を行って平面形状を把握した後、トレンチを設定した。2基のマウンドの頂部からそれぞれ土師器片が出土し、また、西側のマウンドは主体部構造の一部を成すと思われる幅1m程の板状石が埋設されていた。土師器は壺と思われる破片であった。これにより、この2基について発掘調査が必要となった。砥沢古墳は

円墳の形状を良好にとどめているので、試掘調査を行わず、詳細は本調査に委ねることとした。

新たに発見された2基は、西側のものを1号墳、東側のものを2号墳と仮称したが、本来の東平支群とは切り離して捉えるべき内容をもっているため、東平古墳群と呼ぶことは適当ではない。しかし、正式な古墳名称の確定は将来に委ね、ここでは発掘調査契約上の名称を用いて、東平1号墳・2号墳として報告する。

### 3 発掘調査の方法と経過

#### (1) 東平1号墳・2号墳

発掘調査は平成4年7月19日～11月19日に実施した。調査面積は1500㎡である。

測量基準杭網の設定は、まず、1号墳および2号墳の墳丘頂部の中心に任意の2杭を打って主軸を設定した。さらに、1号墳頂部の中心杭を原点として主軸に直交および平行する杭列をつくり、全体として4mメッシュの測量基準杭網で2基の古墳をカバーした(図217)。発掘は、測量基準杭に沿って、各古墳にトレンチを設け、墳丘のおよその規模・構造を把握した上で、土層観察用のベルトを残して表土剥ぎを行い、墓壇・墳丘施設の全面検出を行う手順で進めた。

1号墳の墳頂部では表土剥ぎの結果、南北に長い墓壇ラインが検出された。また、墓壇南北両端から1m程内側に、墓壇主軸に直交する状態で板状石が現れた。南側の板状石が試掘調査で確認されたものである。縦断ベルト1本、横断ベルト2本を設定し、墓壇内の掘り下げを開始した。北側の横断ベルトは、墳丘ベルトと連続するように設定した。掘り下げを開始してまもなく、墓壇ラインの内側に、南北の板状石に挟まれた帯状を呈する土質の異なる部分が現れ、その中には土器片が散在していた。この部分が木棺の腐朽に伴って陥ち込んだ土層であり、板状石は木棺の両端を示すことが予想された。そこで、北側のベルトに沿って先行トレンチを設けて、墓壇内の埋積状況および墓壇断面形を把握し、さらに、墓壇底の中央に一段深い棺床部を確認した。この間、礫・粘土等を用いた構造物は検出されず、本古墳の埋葬施設はそうした構造を伴わない木棺直葬であることが判った。以後、陥没土層と墓壇埋戻し土を交互に掘り下げて墓壇底を露呈させ、棺床部の輪郭を捉えた。墓壇底までのベルトを除去した後に、棺内の掘り下げに入った。先行トレンチの調査により、棺床は断面U字形を呈することが明らかになっていたため、その形状を考慮しつつ掘り下げ、副葬品を検出した。副葬品は、棺の北寄りの一群と南寄りの一群の、二つのまとまりを成していた。両群とも鉄剣・鉄刀・竖櫛から構成され、刀剣は棺側壁に沿う状態で副葬されていた。人体遺残は確認されなかった。棺内の調査を終えた後に、棺両端の立石を取り外して墓壇内を完掘した。棺床底から約10cmまでの棺内覆土については篩別・水洗を試みたが、遺物は検出されなかった。

地表観察でも、1号墳が円墳であることは明らかであったので、埋葬施設の調査と併行して、墳丘中心から放射状にトレンチを設定し墳丘施設の確認を行った。その結果、墳丘は葺石を伴わず、地山を削り出して墳裾を造り出していること、墳裾の外側にテラス状の平坦面が巡ることをつきとめた。墳丘斜面下端からテラス上面にかけて、埴輪片が検出されたが、全体に表土および流土を除去した結果、埴輪片の分布は散在的であり、ある程度のまとまりを示すのは北西部と南東部に限られていた。テラスを含めた墳丘表面に埴輪を埋設した痕跡は認められなかった。また、墳丘主軸およびそれに直交する方向で墳丘を断ち割り、盛土の状況を断面観察した。盛土下の旧地表面上には炭化物と焼土の広がりが見られ、最終的に盛土をすべて除去したところ、その広がり盛土下全域に及ぶことが判明した。さらに、墳丘下中央に壁・底面が被熱して酸化した土坑1基が検出された。なお、盛土の除去は人力による。

2号墳の墳頂部で検出した墓壇ラインは、1号墳よりひとまわり小形で東西に長軸をもつものであったが、その東西両端付近にはやはり板状石が存在していた。縦断ベルト1本、横断ベルト3本を設定し、墓壇内

の掘り下げを開始した。まもなく、墓壇ラインの内側に、南北の板状石に挟まれた、木棺の腐朽に伴う陥没部分の平面形状が検出された。以後、1号古墳と同様な手順を踏んで調査を進め、類似した埋葬施設の構造を捉えた。陥没土層内には壺・高坏片が多く包含されていた。棺床部の輪郭を捉えた後に、その覆土を掘り下げ副葬品を検出した。副葬品は、棺東側に玉類の集中、東端部に竖櫛が検出された。人体遺残は確認されなかった。棺内の調査を終えた後、棺両端の立石を取り外して墓壇内を完掘した。石立の下部には小礫が詰められていた。なお、棺床底から約10cmまでの棺内覆土については篩別・水洗を試み、玉類10数点を検出した。

地表観察において、2号墳が方墳であることは予想されていた。埋葬施設の調査と併行して、墳丘斜面から墳丘裾の調査を行い、墳丘東裾および西裾に、直線的に伸びる葺石列を確認するとともに、墳丘切離しの溝が伴うことをつきとめ、2号古墳が方墳であることが明確になった。北裾および南裾では葺石の遺存状況は悪く、一部が残るだけであった。墳丘裾には崩落した葺石に混じって、埴輪片・土師器片が多く出土した。裾部を含めた墳丘表面に埴輪を埋設した痕跡は認められなかった。また、墳丘主軸およびそれに直交する方向で墳丘を断ち割り、盛土の状況を断面観察した。盛土は薄く、墳丘の築成は大部分が地山削り出しによる。1号墳と異なり、旧地表面上には炭化物・焼土は認められなかった。盛土は最終的に人力によりすべて除去した。

東側(山側)の墳丘切離し溝は、溝というより、むしろ幅広い凹部といった形状をもち、その山側の斜面で土師器片が出土したことから、斜面上方に何らかの施設が存在することが推測された。発掘区を拡張したところ、墳丘東裾から12m程離れた地点に、地山斜面を削り出して形成した平坦面がみつき、そこに玉類・土師器の集中が検出された。墓壇を伴わないため、埋葬施設ではなく墓前祭祀に係る遺構と考えられた。

## (2) 砥沢古墳

発掘調査は平成5年4月11日～6月29日に実施した。調査面積は1000㎡である。

測量基準杭網は、墳丘中心を通る任意方向(およそ東西)の主軸を基準とする2mメッシュを設定した(図243)。ただし、現実に杭を打設したのは基本的に4m間隔である。発掘は墳丘中心からの放射状ベルトを残して表土剥ぎを行い、墓壇・墳丘施設を検出した。

墳頂は大規模な攪乱を受け、埋葬施設は殆ど失われていた。攪乱坑の南縁に僅かに切られ残った部分が検出され、南北方向に主軸をもつ長方形の墓壇がかるうじて推定できた。しかし、埋葬施設の中核部分が遺存していないため、その構造や副葬品の内容は明らかにし得なかった。攪乱土層内からみつかった土師器片・鉄鏃片が副葬品および供献品の一端を示すのみである。これらの遺物は、攪乱土の篩別・水洗により検出されたものが大部分を占めている。

地表観察においても、砥沢古墳が円墳であることは明確で、かつ、墳丘山側には円弧状の凹地が巡り、周溝の存在を明示していた。墳頂の調査と併行して、墳丘斜面から裾部・周溝の調査を行い、墳丘斜面に葺石が施されていること、周溝は谷側ではテラス状の平坦面に変わることが判明した。また、墳丘主軸およびそれに直交する方向で墳丘を断ち割り、盛土の状況を断面観察した。盛土中および旧地表面上には、面的な調査を必要とするような様相が認められなかったため、盛土の全面的除去は実施しなかった。

周溝調査の過程で周溝外側の肩を切って構築した炭焼窯がみつき、これについても調査を実施した。なお、炭焼窯はもう1基検出されたが、本体部分が調査区外に存在するため、前庭部ないし末端部を確認したにとどまる。

## 第2節 東平2号墳

### 1 墳丘

#### (1) 築成

2号墳は方墳である。墳丘規模は、葺石列外縁で測って東西12.1m、南北12.8mを測る。高さは西側の墳丘切離し溝底から測ると1.8m、東側溝底からは0.8mである(図219)。

墳丘は上部を盛土、下部は地山を削り出すことによって築成している。盛土は薄く、最大で30cmが残存するに過ぎないが、墳丘の断面形状と旧地表面の関係をみると、多少の流出があったとしても、本来の厚さをさほど減じてはいないと思われる。盛土は、旧表土ブロックを含む硬い橙灰褐色土を用いた下層と、粘性のある明橙褐色土を使用した上層の、2層から構成される(図220)。なお、旧地形は、墳丘中軸の位置に頂部をもつ東西方向の緩やかな尾根状地形を成している。

#### (2) 墳丘施設(図219・221～226)

葺石は、付近の表土および地山中に含まれる緑色凝灰岩の角礫を用いている。西裾では、中央部の遺存状況が比較的良いが、北部・南部では大部分崩落している。最下段に大振りの礫を横置きし、2段目以上は部分的に残存するだけであるが、小振りの礫を横積みしている。礫の形状はやや不揃いだが、最下段石は用材の最も広い面を外側に揃えようとした意識が窺える。東裾では、南半部および北東コーナー付近の遺存状況が比較的良い。最下段石は、北半の一部に大振りの礫を用いている他は、概ね中振りの礫を横置きする。2段目もほぼ同様な大きさ・形状の礫を目地を揃えて積んでいる。南裾は東部の最下段列が遺存する。大振りのやや扁平な礫を裾に貼り付けるように据えた状況が認められる。北裾は北東コーナー付近の最下段列が残存している。大振りの礫をやはり横置きする。

西側切離し溝は、上端幅1.8m、深さ60cmの断面U字形に掘り込まれ、墳丘側斜面に葺石が施される。平面形状は南部が僅かに外彎している。東側の切離し溝は、緩やかで浅い断面L字状を呈する。墳丘側の斜面に葺石が構築されるが、山側の斜面はなだらかで漸移的に自然地形に移行し、肩が明瞭でない。北半部は三角形の凹部を成しており、その北西縁には墳丘北東コーナーに接続する土手状の高まりがみられるが、古墳築造に伴う形状であるかどうか不明確である。

#### (3) 遺物の出土状況(図222～226)

切離し溝中および墳丘裾部から、崩落した葺石に混じって埴輪・土師器片が多量に出土した。溝底面より上位で出土した例や、原位置をとどめる葺石の上面で検出された例も多く、墳頂からの転落ないし崩落と考えられる。墳丘表面には埴輪を埋設した痕跡は認められないので、墳頂部に置き並べてあったものと推測される。

遺物は基本的に1点ごとナンバリングして取り上げたので、その接合関係の把握を試みた。その結果をもとに、出土状況にみられる様相をまとめてみると、以下になるよう。

- ① 埴輪は全体からまんべんなく出土しているのに対して、土師器は東裾に偏った出土を示す。
- ② 極端に離れた位置から出土したものが接合した例はごく稀で、東裾と西裾といったように墳丘を挟んだ反対側出土の接合例はない。
- ③ 遺物は破片となっているが、その出土は個体ごとのまとまりをもった分布を示す。
- ④ 埴輪については、その範囲を一部重複させつつも、円筒埴輪と壺形埴輪の個体ごとのまとまりが交互に位置する。この様相は西裾において顕著である。

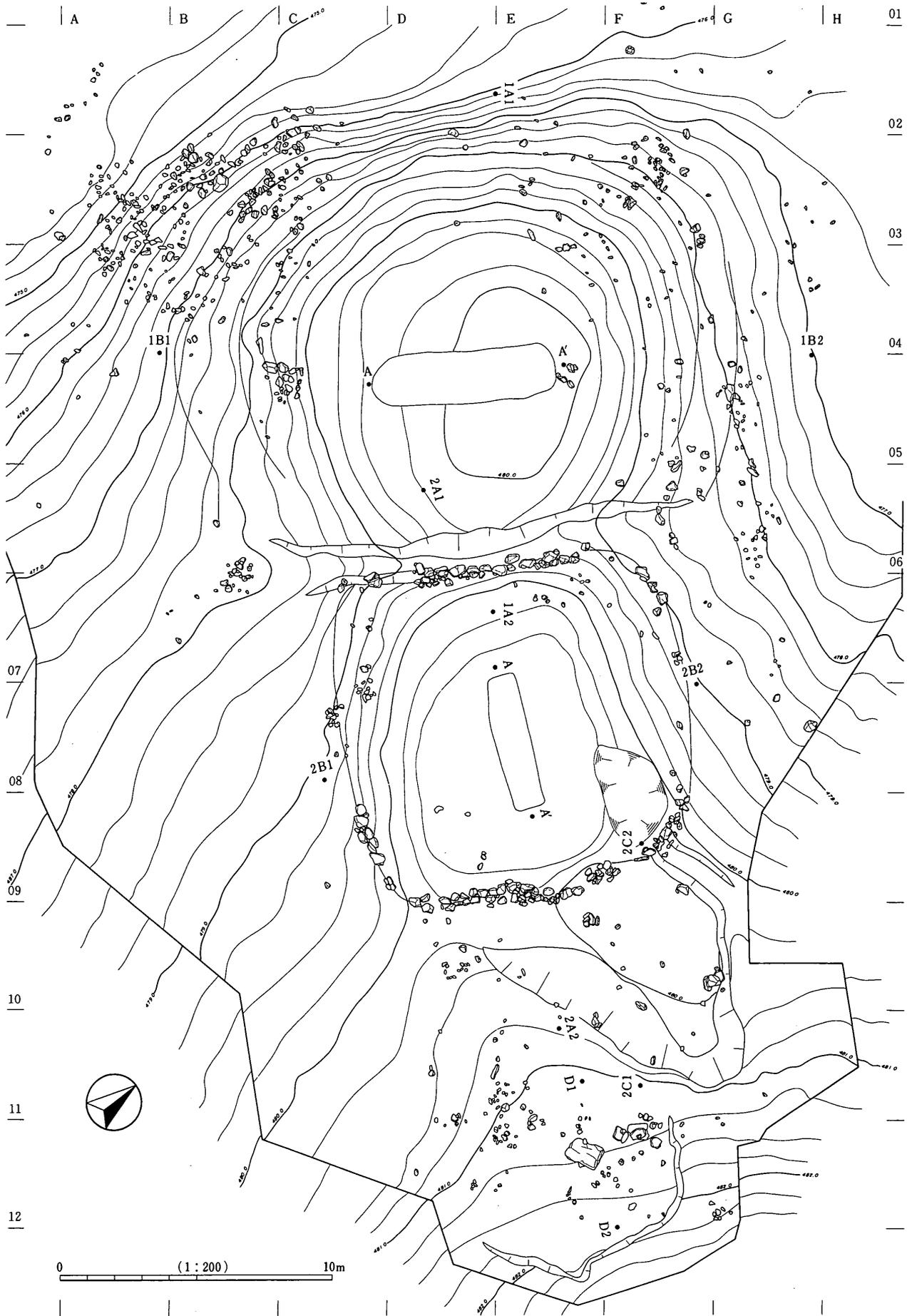


图 218 1·2号墳 墳丘实测图

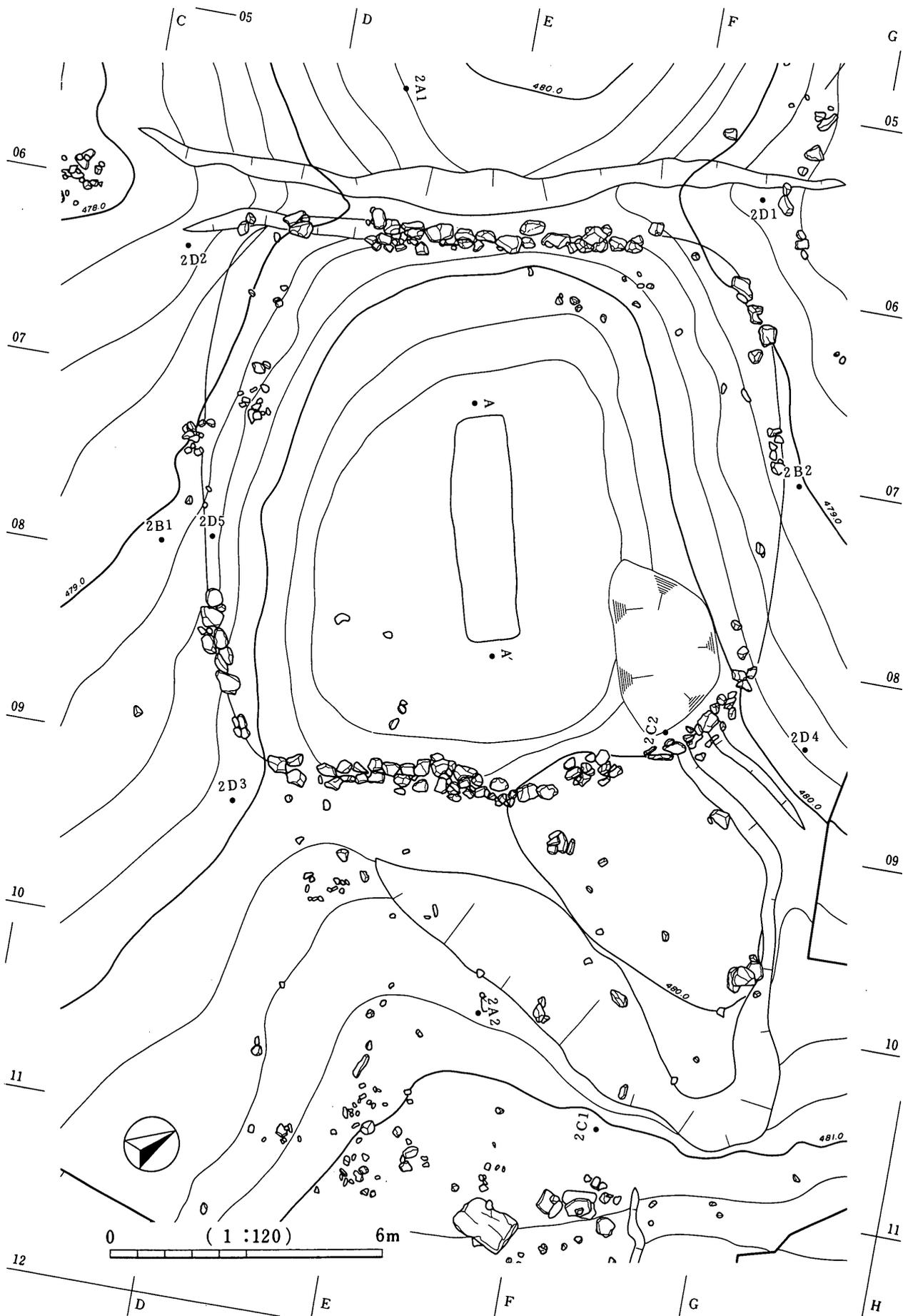
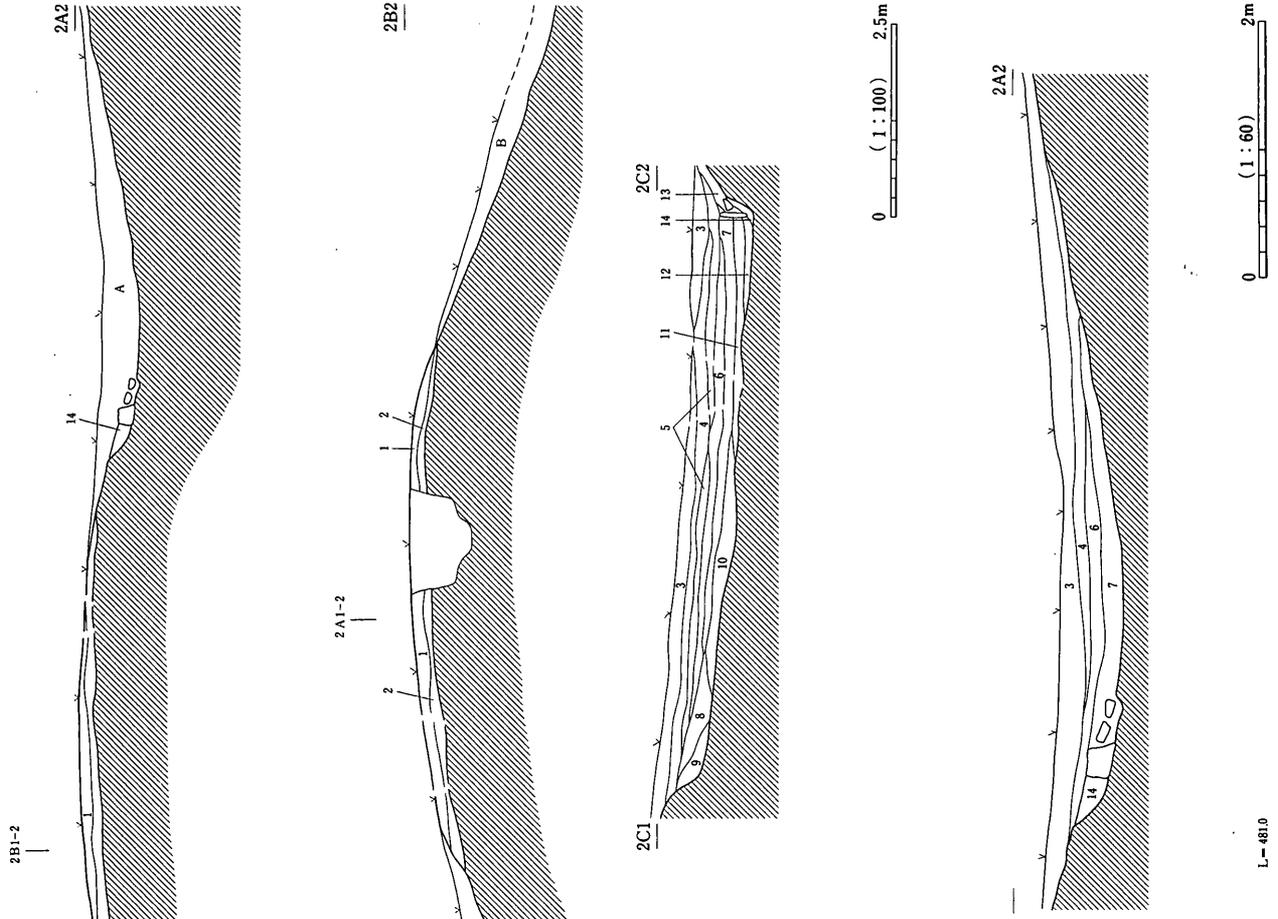


図 219 2号墳 墳丘実測図



- A : 溝覆土
- B : 流土
- 1 : 明橙褐色土 (盛土。極小礫、金雲母片を含む。ややしまりあり)
- 2 : 橙灰褐色土 (盛土。1層土と黄灰褐色土が混じった土。旧表土ブロックを含む)
- 3 : 黄褐色土 (しまりが強く、粘性あり)
- 4 : やや暗い黄褐色土 (ややしまりあり。1cm以下の小礫が多数混じる。粘性あり)
- 5 : 暗黄褐色土 (灰褐色の砂質土と4層土が混じる)
- 6 : 黒褐色土 (しまりのない、ボサボサした土)
- 7 : 黒色土 (しまりのない、砂混じりのボサボサした土)
- 8 : やや明るい黄褐色土 (しまりが強く、2~3cmの白色極小礫を多量に含む)
- 9 : やや明るい黄褐色土 (組成は8層によく似るが、やや黒色を帯びる。しまり強い)
- 10 : ややにぶい黄灰褐色土 (ややしまるがもろい。5cm以上の角礫、1~2cmの小礫を多量に含む。黄灰色の砂粒も多い)
- 11 : 橙灰褐色土 (ややしまり、粘性あり。黄灰色の砂粒多い。組成は10に似るが含有礫が3cm以下で、雲母片を含む橙褐色地山が混じる)
- 12 : 黒橙褐色土 (雲母片を含む橙褐色の地山とよく似ているが、やや黒味を帯び、凝灰岩と思われる3~5mmの黄色粒を含む)
- 13 : にぶい黄褐色土 (礫含む)
- 14 : 暗橙褐色土 (置土。12と酷似するがやや茶色を帯びる)
- 15 : 黄褐色土 (置土。3~5mmの凝灰岩と思われる礫を含む)
- 16 : 暗褐色土 (組成は6層とよく似ているが、やや明るい)
- 17 : 暗黄褐色土 (比較的さらさらしており、5~10mmの凝灰岩と思われる黄色の礫を疎らに含む)
- 18 : 暗褐色土 (3~5mmの黄色い凝灰岩と思われる礫を含む)
- 19 : 暗黄褐色土 (置土。粘性あり。礫・明黄褐色小ブロック含む)

図 220 2号墳 断面図

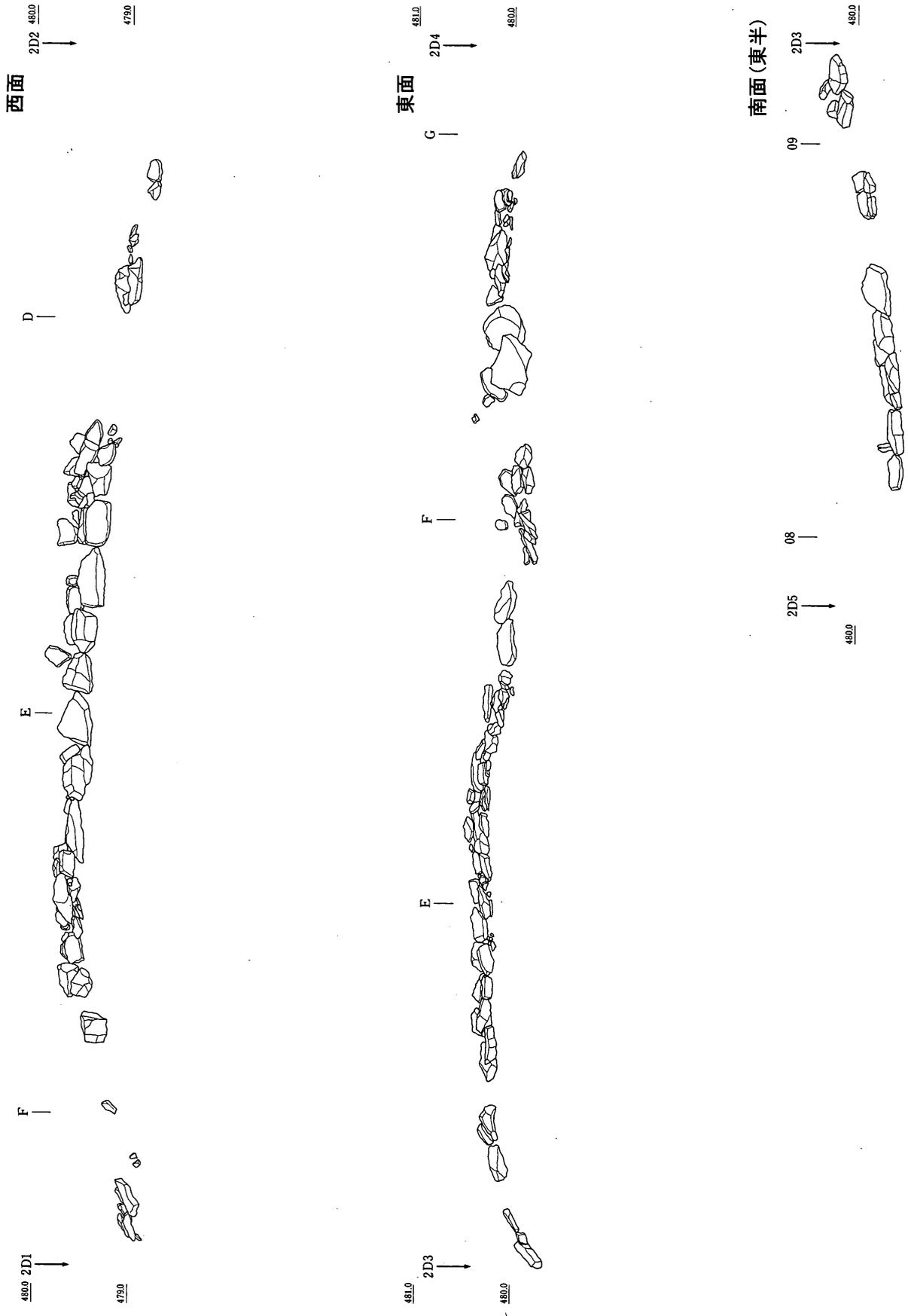


图 221 2号墳 葺石立面图

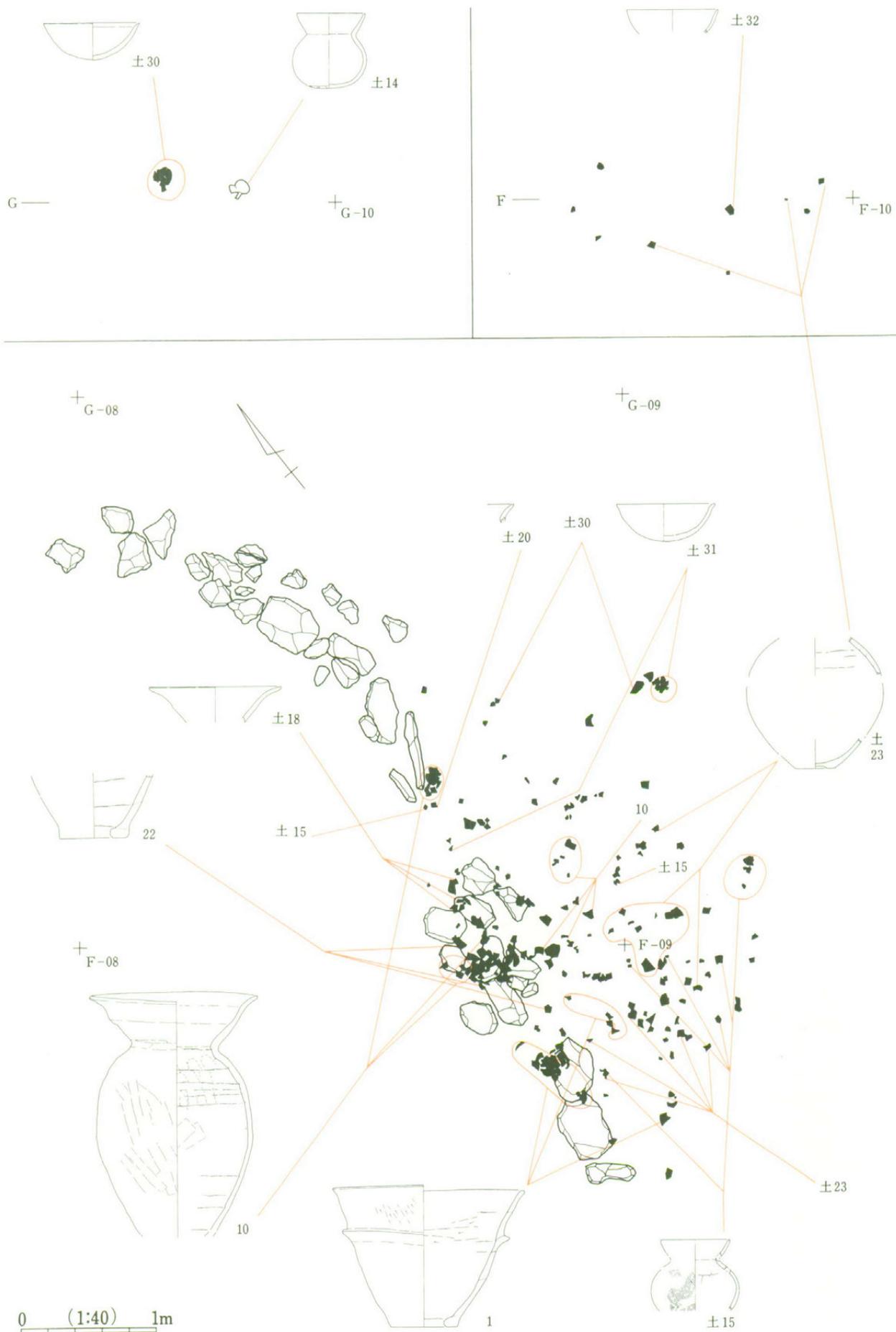


图222 2号墳 東裾遺物出土状況(北半部)



図 223 2号墳 東裾遺物出土状況 (南半部)



图 224 2号墳 西裾遺物出土狀況 (南部)